大正四年五月廿五日印刷
大正四年五月廿八日發行

有朋堂文庫
宇津保物語 上
（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

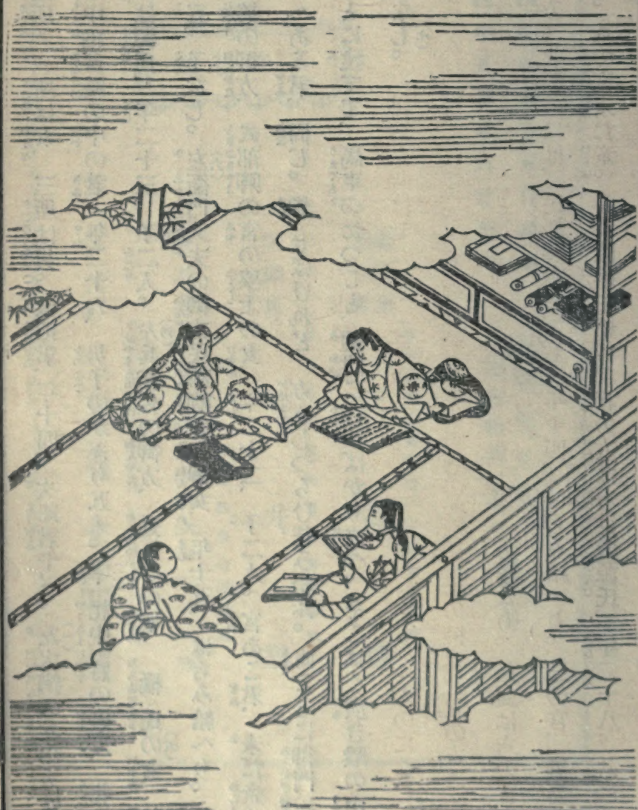
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

（岡山製本）

〔語釋〕
(一)諸澄
(二)祐澄
(四)顧澄
(六)兼澄

〔考異〕
(三)子二人―子あり
(五)の女―の女なり
(七)刊本此つゞきに「藤のかゝれるを云々」の文七枚あり、これは「梅の花笠」の卷末の文の紛れ入りたるなれば今除く

四所。一所は女、三所は男。太郎君、年十四、次郎君十三(一)。左大辨の北の方は、平中納言殿の中の君、年二十六、男子のかぎり五人。宰(二)相中將の御方、北の方は源氏、年二十三、子二人(三)。左(四)兵衛佐の御方、近江守の娘、橘氏(五)の女、年十五、子なし。左(六)衛門大夫の御方民部卿の宮御女、年十五、はらみ給へり。頭中將の御方、式部卿の宮の學士の女、年二十二、子二人。宮あこ君、未だ童。いへあこ君、同じ。皆、せばけれど、方々しつらひ住み給ふ。町ごとに御門表ごとに建てて、馬車のたつこと、御門に百千ばかり立つ。そこばく廣き殿の中、隙なし。(七)

〔語釋〕
(三)誤あるべし
(四)忠雅
(五)實正

〔考異〕
(一)辨の主―ぬしに
(二)丞―衆
(六)はらみ―にんし

色の御衣かけたり。臺一よろひして、辨の主(一)物まゐれり。北の方、こがねの御器にて參りたり。年十五。御たちいと多かり。厨子たてて文讀む。殿ばら、宮ばらの君だち、集ひて讀み給ふ。辨の主、宮よりまかでたり。裝束淸らなり。車淸らなり。男ども四十人ばかり、御供なり。大學丞(二)も、おりて跪き居り。辨の主、人々に、片端より文讀ませ給ふ。割籠、すみもの、いと多かり。秀才ども、多にありて文讀む。秀才菅原の別足、大學に色々(三)の文取らす。此處は辨の主入り給ひて、北の方に物聞え給ふ。藤英「今日、宮に參りたりつれば、兵衞の君して、御消息賜はせたりつる。命有れば、かゝる折にも逢ふものになむ」とて、大學に參り給ふ。これは女御の君の御腹の四の親王の御方。北の方には、左大臣殿の大君、(四)こと腹の御子、年十六。子一人、男子なり。此處は六の宮の御方。北の方には、民部卿殿の大君、(五)年十四、はらみ(六)給へり。三の宮、御妻なし。八の宮未た童。これは權中納言。北の方は一世の源氏、年二十八。君だち

今一所は這ひ給ふ。御年二つ。めのと同じ數なり。大人、童多かり。南のおとゞ、元のごと女御の君の御方なり。北のおとゞ、宮おとゞ住み給ふ。東南の町。東のおとゞ。民部卿の宮の御方なり。西のおとゞ兵部卿の宮の御方。宮二十七、女君十五、物宣へり。御たち二十人、童しもづかへ數多あり。北東のおとゞ、左大臣殿の御方。西南、藤大納言の御方。西北の對は、源中納言殿の御方。いま宮十四、中納言二十四。二所物語し給へり。御たちいと多かり。紀伊守參りて、廊の簀子に居たり。中納言の君あひ給へり。きぬ、綿、辛櫃に積みて奉りたり。あなたの君だち住み給ふは、西南の町。中務の宮の御方。西のすみ、平中納言殿の御方。東の對藤宰相の御方。東のすみ良中將の御方。東の中は君たち住み給はず。御たち二十餘人、童、しもづかへいと多かり。これは左大辨の殿の御方。君だちも此の町に集ひて住み給へり。西北の町、右大辨の殿の御方。御帳立てて、几帳、屛風新らしく、よろづの調度淸らなり。御衣掛に、色

〔語釋〕
（五）正賴の子息たち
（六）藤英

〔考異〕
（一）十五―十六
（二）左大臣殿―おほきおとゞ
（三）二十四―二十六
（四）居たり―居たまへり

正頼「むすぶ人まつ元結は絶えぬれどかみそりをだにあらせざらめや

源少將、涙を流して斯う聞ゆ、

仲頼「元結のくちし涙はかはらねど今日かみそりをうるが嬉しさ(一)

など聞えたり。皆御方々とゝのひて住み給ふ。御わたくしの殿も、廣く面白く、御調度財を、納殿に持ち給へらぬ人なし。一條殿より南、四條より北、壬生(二)二條より東、京極より西は、他人の家なし。殿の御族の殿ばら、まじりも無くあり。藤中納言、(三)右大辨は未だわたくしの家なし。唯大殿に集ひて住み給ふ。

【畫詞】此處は東の町。大宮、三條表、中のおとゞ、一宮の御方。宮御年十七、(四)中納言年二十六。並び給へる男女、玉ひかり輝く樣なり。御臺たてて物まゐる。宮琴彈き給ふ。中納言、打笑ひて、仲忠「つれなくも遊ばすかな」宮、女二「文屋(五)はとりとか言ふなる」と宣へり。(六)はらみ給へり。東のおとゞ、東宮の御方。御子たち二所。男御子一所は、立ちてありき給ふ。(七)御年三つ。乳母三人。

〔語釋〕

(二)「二條」衍歟

(三)季英

(四)仲忠

(五)誤なるべし、勸學院の雀蒙求を囀ると同じ意歟

〔考異〕

(一)嬉しさ—嬉しき

(六)はらみ—にんし

(七)御年三つ—ナシ

あるものなり。身の沈むこと悲しきことは、季英より外に知る人なし。さ殿に(一)たばかり物せん。そも〳〵京に年頃物し給ひて、せいとのかた(二)へは如何せしめ給ふ。今年の位祿近江なむ賜はり侍る。未だ取りに遣はさず。守の許に消息物せむ。取りに遣はしてようせしめ給へ(三)」大學の丞、忠遠「甚だかしこし。殿にもきうよう(四)物せしめ給ふらむ。いかでか」など言ふ。藤英「季英、ことに顧みるべき者給はず。(五)身一つはかくて侍れば、私の要殊になし」とて、文書き添へて、劵つくり、酒飲みなどして、曉に歸るに、綾、かいねりのうちぎ、一襲、あはせの袴添へて、かづ(六)けて還す。かくて大殿に切に申して、藏人になして、悅ぶこと限なし。藏人の裝束一くだり取らせて萬の事いたはる。

かくてあて宮に聞え給ひし人々(七)みな殿にすませ給ひて、參り給ふ、源少將如何に思ふらむ、など思して、法服、綾がさね二つ調じて、宮あこ君に裝束めでたくて、衣の裳に、かく書きて結ひ付く、

〔語釋〕

(二)「生活の手段は」などの意なるべけれど不詳。「かたへは」を「かた人は」ともかけり

(三)用ひられよの意なるべし。「よう」は「用」歟

(四)急用歟

(五)「給はず」は「持給へず」歟

(七)正頼の心

〔考異〕

(一)さ殿に―大殿に

(六)など―ナシ

(八) 正頼、仲頼法師に法服を贈る。

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)正賴に忠遠を藏人に任ぜられむことを願ひしに
(三)不學歟
(五)「かな」は「かは」なるべし
(六)誤あるべし、「そうしくて」を「そう〳〵にしくて」とも「そう〳〵しくて」ともかけり。
〔考異〕
(四)季英―季英が
(七)子妻―さいし
(八)給ふるになむ―給ふるなむ

なむ、三らうの上の事は物すべき」など宣ふ。忠遠、大學の丞にてまうでたり。辨の主、(一)「など久しく見參せしめ給はぬことをなむ、季英歎き侍る」大學の丞忠遠「そがいとくちをしく侍ること。昨日今日の人の、そくばく出で立ちぬるに、忠遠が今まで侍ること」辨「そがいとほしき事をなむ、此の頃は、藏人のあきためるに、夫れにいかでと思ひ給へて、一日大殿にとり申しゝかば(二)、「相勞らむと思ふ心やある」と仰せられしに、ある樣を委しく申しゝかば、「今奏せん」となむ仰せられし。今また〳〵取り申さむ。眞なる事ならば、なりもし給ひなむ」忠遠「其の宮仕も、ふ(三)がうにては難げになむあめる」藤英「それはな思ほしそ。仕うまつらむ。季英、(四)主の御顧みを忘れ奉るべきかな(五)。公事(六)そうしくて、屢とり申さねば、疎なる樣になむ」大學の丞、忠遠「甚だ畏し。いとも嬉しく、斯くまで取り申し給ひけること。忠遠、公に捨てられ奉りたる身一つをばさるものにて、老いたる親、小さき子(七)妻の泣き悲しぶを見(八)給ふるになむ、紅の涙流れて悲しく侍る」辨の主、藤英「然

かくてあなたの(一)十一の君を兵部卿宮に、十二の君をば平中納言殿に、こなたの(二)十三の君をば良中將行政に、十四の君をば右大辨季英と、八月二十八日にあはせつ。三日の夜四所ながら對面し給ひて、御前ごとにかづけもの、例に劣らず、豐にいきほひたり。

(三)藤英は右大辨かけづかさ(四)、右近少將、式部丞、文章博士、東宮の學士、内裏、東宮、院の殿上を聽されたり。親の時より敵ありと申すによりて、少將はかけさせ給へるなり。身の才唯今類なし。宮よりまかで(五)させて、人に文讀ませなどする程に、秀才四人參れり。主、物語などして、藤英「如何に宣旨下りにたりや。いつか、出で立ち給はむとする」秀才、「宣旨は承りにき。此の頃出でてまかりなむと思ひ給(六)ふるに」藤英「げに疾く出で給ひなむこそよからめ」秀才「それな、此の頃暇なむなき。史記のことをもそへ(七)、など仰せらるゝに」藤英「此の史記の(八)かうじよも、今まで仕うまつり侍らず、など仰せらるなりつれば、先づ彼のかうじよのことはてて

㊆ 藤英の榮華。舊恩に酬ゆ

〔語釋〕
(一)大臣上腹の
(二)大宮腹の
(四)兼官
(六)給ふるに「に」衍歟
(七)誤あるべし
(八)講書歟

〔考異〕
(三)藤英は―ナシ
(五)「まかでさせて」の下「人に」の上に「大學の衆三十人ばかりよき人の子どもの學生ども十人ばかり文など誦む。辨の君年四十。いと清げにてめでたし」あり

も、世に經給はむ限り、御志をだに失はであらむ」となむ宣へる」右衛門佐、「源宰相はかく宣へる(一)なん。殿造(二)ありさまを見給へるに、涙惜まずなむ侍りつる、さばかりめでたかりし人の、其の人にもあらで」申し給へる事ども、片端より聞え給ふ。おとゞ、宮よりはじめ奉りて、そこばくの君だち、涙落し給はぬなし。おとゞ、正賴「いとほしき事かな。あたら人を。(三)太政大臣も、さやうにや思すらむ。「實忠顧みよ」としばしば(四)宣へば、かく物するを如何はせむ。此の代には、季英の右大辨を物せむ。彼の人見たる所あれば、納言、宰相にもなりぬべき人なり。右大將の御代には、良中將を物せむ。宰相中將に消息せよや。今少しはなちてむ(五)」など宣ふ。大宮、源宰相の御かへり事きこえ給ふ。

おく露のなかにも色と(六)見えしかばおなじ枝にと思ふばかりぞ

哀れに承りしかば、忘れ聞えさせぬぞや。

など聞え給ふ。(七)

(語釋)
(一)誤あるべし
(三)實忠の父季明
(四)「宣へど」歟
(五)誤あるべし
(六)「色と」は「ふかく」歟

(考異)
(二)殿造―ナシ
(七)聞え給ふ―聞え給ひて

〔語釈〕
(二)「右衛門太夫平中納言の御文奉り給ふ」なるべし
(三)あて宮の……
(四)他の姫君を娶る心ありとあて宮が聞かれたらば

〔考異〕
(一)山林にも住みぬべき—山林をも家と住みぬべき

かくて、御使の君だち、一度に返り給へり。皆女の装束、一くだりづつかづき給へり。御消息、兵部卿の宮よりは、

兵部 年頃、思ひとする事ありて、山林(一)にも住みぬべき心地すれど、かく宣はするかしこさになむ、思ひ給へしづまりて、承りぬる。

と聞え給ふ。左衛門佐(二)源宰相の御文奉り給ふ、

聞えさせしことの効なくなりにしより、魂靜まる時なく思ひ惑ひ歎きて、かゝる心なむ忘れにて侍る。いとも忝く、かくまでも宣はすることなむ、返すぐ〵畏まり聞えさする。

と聞え給へり。右衛門佐、宰相の御文奉り給ふ。宮見給ひて、おとゞに見せ奉り給ふ。正頼「是も否とにこそあなれ。怪しの主たちかな」宰相中將、「右大將の申し給へることは、「未だ(三)彼の小くものし給ひしより、さる志ありて聞えさせしを、参り給ひて程もなく、さる心(四)ありと聞き給はむは、いとほかしかるべき。誰も誰

（考異）
（一）かづけて―かづく
（二）つけ給へり―つけてかづく
（三）男の―小野殿に

消えかへりそめこし物をおなじ野の花におくとも何か見ゆべき

あなかしこ、昔はさる心もや侍りけむ。

となむ。御使には、土器たびく参り、御物語などして、綾、搔練のうちぎ、赤色の唐衣具したる女の裝束一くだりかづけて、（一）

實忠　君ならで誰にか見せむくれなゐに我がそめわたる袖の色をば

と書きつけ給へり。（二）右衛門佐、

連澄　薄く濃く染むべき色をいかでかは人の思ひのしるべともせむ

とて返り給ひぬ。

畫詞　これは源宰相、男のやもめにて、男の（三）童使ひて居給へり。音羽川前より流れて、前廣く、前栽おもしろく、山近く、木の葉時雨に色づきて、草の花盛にて、面白きを、眺めて居給へり。右衛門佐、花の枝に文付けて、宰相に奉り給へり。廣げて見て、思ひ入りて居給へり。物語りして物かづく。

〔語釋〕

(一)あて宮入内せられしかば

(二)御昇進の御祝儀も申上げず

(三)あて宮

(四)此句誤脫あるべし

けむ方も知らず、魂の靜まる時なく、思ひ給へ歎きし程に、參り給ひにしかば、世の中は限りと思ひて、すべき方も覺えざりしかば、かゝる(一)山里にまかり籠りて、年頃親の御顔も見奉ること難く、世の中のこと餘所に承りつゝ、(二)御悅びとかやもえとり申さず。唯今まかり隱れなむことを、今日や今やと思う給ふるに、いともかしこく宣はせたるを、いでや實忠、徒ら人にて侍る、(三)彼の御方、聞召してや侍らむ、哀と宣はせぬこそいみじくつらけれ」とて、伏し轉び泣き惑ひつゝ、宮の御返聞え給ふ。

實忠 げに覺束なき程になり侍りけるを、畏まりて聞えさするに、いとも畏き仰せ言は、畏まりて承りぬるを、年頃如何に侍るにか侍らむ、世の中に侍らむとも思ひ給はぬを、怪しく今までめぐらひ侍れど、え猶侍るまじく思ひ給へらるれば、(四)御かつけらるべき程無かるべきなむ、返すぐ畏まり聞えさする。

いでや、さても、

〔語釋〕
(一)あて宮に懸想の事
(二)あて宮は手許に置きて我が介抱を頼まんと思ひ居る處へ
(七)妻

〔考異〕
(三)如何に—いかゞ
(四)久しく—とかく
(五)かく不用の—かうよその
(六)また悲しと—またなしと

となむ聞え給ふ。源宰相に文書き給ふ、
大宮「覺束なき程になりにければなむ。聞えにくけれど、なほ聞えよとあればなむ。先つ頃、此のわたりに宣ふ事(一)ありけるを、承らざりける中に、此處に物せられし(二)人は、身に添へて後見させむと思ひ給へし程に、宮より宣はせければなむ、參りにけるを、同じ様によろしからぬ人侍るめるを、(三)如何にせむと聞えよとなむ。
とて奉れ給へるを見給ひて、宰相涙をこぼして、とばかり物も宣はず。右衛門佐、ことのある様を委しく聞え給ふ。源宰相(四)久しくためらひて、實忠「今はかく(五)不用の人になりて、宮仕もせずまかりありきもせで、尋ね訪はせ給ふ人もなければ、誰々も對面賜はること難く、世の中を覺束なく思ひ給ふるに、かく對面賜はり、殿の御消息を承るにも、先づ懷しくなむ。昔、何の契かおはしましけむ、宮の御方に聞え初めてしより、老の世に(六)また悲しと思ひし人(七)、哀と思ひし子のなりに

べて、一宮に奉り給へば、宮、女二「箏の琴は忘れにたりや」など宣ふ。御前に(一)御琴どもあり。

かくて今は私の御事どもをし給はむと、方々劣らずしつらはれて、御調度、仕うまつり人、劣らず設けられて、宮、おとゞに申し給ふ、大宮「思ひ志(二)したる人々の、心ゆかず見え給ふを、如何ならむ」正頼「なほ彼の切に物せし(三)人々の「彼處の(四)聞き給はむに、何の良きことと言はじ」とにこそあらめ。此の中納言(五)たちも、聴きげにも思はざりしかど、今は然もあらざめり。消息をせさせむ。さて源宰相(六)をなむ、其の頃忘れまじう聞こゆる。御文にて宣へ」とて兵部卿の宮への御使に兵衛佐の君、右大將殿に宰相中將の君。平中納言殿に左衛門太夫、源宰相殿に右衛門佐を奉り給ふ。御消息、大將殿に、

今宮「聞えさせにくき事なれど、思ふ心侍りて、これかれ(七)おはしまさすることなむ侍るを、かくなむと聞えさするは如何あらむ。

〔語釈〕

(二)娘をやらむと志したる相手の男どもが不滿足げなるを如何にせむ

㊅ 兵部卿宮、正明、行政、藤英四人、正頼の聟になる。實正のみならず

(三)あて宮に懸想せし人人

(四)聟になりたるをあて宮が聞きてよくは言はじ

(五)仲忠、涼

(六)實忠、「源宰相なむ其の頃を忘るまじう」歟

(七)誰彼を聟にとる積なるが

〔考異〕

(一)御前に―ナシ

〔語釋〕
(一)「物は」の「は」衍文なるべし

〔考異〕
(二)おはす—おはします
(三)上達部皆おはします—ナシ

取りたり。大人三十人ばかり、裳、唐衣著て、うなゐ八人、かざみ、うへの袴著たり。御臺四よろひ、かねの御器して物まゐる。御まかなひ宰相の君。是は大饗の所。南の大殿しつらはれて、幄うちわたしたり。是は祐澄の宰相中將、かづけ物は(一)、大いなる箱に入れて持て出で給へり。これは一宮の御方。中納言ものし給へり。言ふばかりなく、誰も〳〵淸らなり。宮の御同胞の御子、四所ながら直衣奉りて、おはしましたり。宰相に、左大辨對面し給へり。右近の君などして御帳に入れ奉る。一宮を女御、大宮などして出だし奉り給へり。中納言悦びておはす(二)。(三)上達部皆おはします。左右のおとゞ、見較べて、御階のぼり給ふ。大納言、中納言、宰相まで參り給ふ。辨、少納言、外記、著き竝みたり。御前ごとに、いかめしう物參りたり。下對の幄の前に、半取に東絹よききぬなど積みて、下につき給へり。此處は三の親王、四五六の親王、若宮に中納言御裝束して對面し給へり。親王と中納言と、碁打ち給へり。四の親王、箏の琴調

く、綾、錦へ(一)いれうきふれうの羅、よき寶ども入れて、御文斯う聞え給へり。

朱雀(三)「此の度の唐物は、ようもあらずなむありける。(四)わざとの朝服にはあへぬべしや、とてなむ。

とあり。宮御使の藏人に、女の裝束一くだりかづけ給ひて、御返し、

女一「かしこまりて承りぬ。かゝる朝服は、賜はるべき人なん侍らざりける(五)。

と聞え給ふ程に、右のおとゞわたり給ひて、(六)中納言に、正頼「如何にぞや。御旅樓は、いかに便なく思さるらむ。居ずまひがらと言ふ樣にや」いらへ、仲忠「斯く宣はするは、いと畏し」など御物語し給ふ。

畫詞　此處は右の大殿の中の大殿。(七)くみ入れて内に帳立てたり。此處は、大臣二所居給へり。中納言三所、宰相、左大辨、七所連ねてわたりて、大宮を拜み奉り給ふ。中納言、白きおほうちぎ一襲、宰相にかいねり一襲、殿上人うちかづきて居給へり。宮あこ君(八)、御文奉り給へり。中納言、手を摺りて請ひ

（語釋）
（一）闕あるべし
（三）今年船來の唐物
（八）闕あるべし

（考異）
（二）うきふ―浮文
（四）わざとの―わがことの―わがさとの
（五）ざりける―ざりけるを
（六）中納言に―中納言を
（七）くみ―くみど

は、斯くてもさふらふべきにこそありけれ」宮、女二「かたしと言ふ樣にもはた」中納言、仲忠「このむねせにといふ心地なむ」(一)とて、仲忠「昔だに人惑はし給ひし御琴、如何になりにたるらむ」(二)宮、女二「手調へぬ琴を、手まさぐりにかき鳴しゝを、人聞きけりとて、それより彼の君も、(三)此處に物せずなりにしかば、それだに忘れなむし(四)にける」と宣へば、中納言打笑ひて、仲忠「仲忠心地惑はすばかりは遊ばすなりしを、誰に恥ぢ給ふにかありけむ。(五)琴の御琴は、嵯峨の院の御子日にだに春日にて遊ばせしよりは、こよなく勝りたりしを、まして今は如何ならむ。いでや、有り難くこそおはすれ。(六)宮もさ思ほし、また人はさふらふとも覺したらず、うちはへまうけ上り給ふを、されば一の宮(七)一條など參り給ふ時は、晝より暮るゝまで、つとめてより晝までおはしませば、唯一所(八)さふらひ給ふやうにこそあめれ。かゝればこそ、萬のよき人徒らになりぬれ」など語り給ふ。かゝる程に、內裏より、一宮(九)の御許に、藏人の式部丞を御使にて、長櫃の辛櫃一よろひに、內藏寮のこふく(一〇)、唐のてうふ(一一)

(語釋)

(一)未詳。「せに」又「けに」

(二)あて宮の琴の伎倆

(六)東宮もあて宮を得難き佳人と思召し

(七)「一の宮」は「四の宮」の誤なるべし、嵯峨院の女四宮也。一條は兼雅の女梨壺

(八)あて宮一人

(九)女一宮、仲忠妻

(一〇)吳服歟

(考異)

(三)此處に物せず—こゝにもせず

(四)なむしにける—なむしける

(五)ありけむ—あらむ

(一一)唐のてうふく—からのてこふく

〔語釋〕
(一)古今集「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし」

〔考異〕
(二)ならむ—なりなむ

や」と聞え給ふ。女二「あらずや」とて見せ給はず。手を摺る〳〵、聞え取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて、物も言はず。宮をかしと思ほして、御返聞え給ふ、

女一日頃はげに覺束なきまでなりにける事をなむ。いでや、筑波根は、「蔭あれ(一)ども」となむ見ゆる。

とて、

女一峯たかみ夢にもかくは白雲を今も谷なるものとこそ見れ

と聞え給ふ。中納言、仲忠「彼の御方に物聞えし限り、魂のしづまる時無かりしうちに、いみじき秋の夕暮こそ有りしか。ほのかに見奉りしかば、靜心なく思えしかば、近くだにとて參り來たりし夕暮に、月見給ふとて、御琴遊ばしゝに、死に入りて、身徒らにならむ(二)こと思ほえず。片時世に經べき心地もせで、せぬわざわざしつべき心地こそせしか。今まで生きてめぐらひ、さる過せずなりにける

めでたく淸らに、誰も〳〵御志深くめでたきものから、なほ彼の中納言たち、いかめしくもてかしづき、帝の居立ちて勞はり、年に二度三度の司召(一)になり上り給へども、宮の君におろかに思されぬること、世に有らむ限は他心なく、志をだに見え奉らむ(二)と思ひつるものを、と思ひ歎くこと限りなし。其が內にも、藤中納言は、參り給はざりし時にも、人よりはいらへ宣ひ、宮にても時々聞えさせなどせしを思ひつゝ、心魂もなく歎くこと限なくて、一の宮とも、時々事のついでに、(三)彼の御事を聞ゆる程に、宮の君の御許より、一の宮にかく聞え給へり、

あて宮　久しくなりにければなむ。(四)日頃の物騷がしく思すらむに、靜にと思ひ給へつる程になむ、今までになりにけり。

筑波根の峯までかゝる白雲を君しも餘所に見るは何なり(五)

彼の物懲せし夕暮こそ思ほゆれ。

など聞え給へり。宮見給ひて、打笑ひ給ふ。中納言、仲忠、何事ならむ。見給へば

（語釋）
（一）凉、仲忠
（二）あて宮に
（三）あて宮の噂をする

（考異）
（四）日頃の—「の」ナシ
（五）何なり—何なる

入り給ひぬ。(一)藤中納言、源中納言、(二)けうのかたにて物參りはじむ。誰も〳〵未だ見え給はず。おもの參りたる儀式、淸らになまめきたり。かくて藤中納言は靱負の君を御使にて、「唯今なむまかでつる。悅びなども聞えてしがな。わたり給ひぬべしや」など(三)聞え給へり。宮、女一「悅びは此處にも嬉しくなむ。唯今、惱ましくて」など聞え給へり。中納言、仲忠「常に斯くのみ宣はせむずらむな」とて太政大臣の御大饗の所に、(四)左右のおとゞよりはじめて參り給ひぬ。翌る日(五)殿にて、左のおとゞ大饗し給ふ。(六)主のおとゞもし給ふ。面白くいかめしきこと言ふばかりなし。かゝる程に、藤中納言は左衞門督、(七)非違の別當かけ、(八)源中納言は左衞門督かけつ。(九)藤中納言は、中のおとゞにすみ給ふ。帝、殿の御いたはり(一〇)にて、豐にて經給ふ。源中納言は、他町おもてに、金銀瑠璃、あや、にしきして造り磨きて、七つの寶を山と積み、(一一)上中下花のごと飾りて、あるが中にいきほひて住み給ふ。かくて一(一二)の宮も今こそ君も、御容貌も、し給ふわざも、あて宮にことに劣り給はず、

〔語釋〕
(一)仲忠、涼
(二)誤あるべし
(三)妻の女一宮に
(四)忠雅、正頼
(五)正頼邸にて
(六)正頼
(七)檢非違使別當
(一〇)朱雀と正頼との合力によりて
(一二)仲忠の妻

〔考異〕
(八)源中納言は―、は―ナシ
(九)かけつ―かけつかくて
(一一)積み―積みあげ

㊄ あて宮より女一宮へ消息。仲忠夫婦あて宮の噂をす

（語釋）
（一）此儘此處に留りたく思へど。
（三）女一宮、正頼妻

（考異）
（二）給ふに—給へり

納言、仲忠「（一）さふらはむとするを、これかれ車止められたればなむ」とて、急ぎて出で給ふに、（二）内侍のかんの君、嬉しきにも先づ悲しく思さるれば、おとゞにかく聞え給ふ、

俊蔭女 身を棄つと思ひしものを岩の上の松の種ともなりにけるかな

おとゞ、

兼雅 思ひ出でて木高き松を見る時は身をすてたるも嬉しかりけり

いみじく思ほえしも、今日なむ慰みぬる」と聞え給ふ。

畫詞 此處は右大將殿。おとゞ、かんの君物語し給ふ。大人三十人ばかりさふらふ。

かくて藤中納言待ちつけて、大殿に、七所ながらつらねて參り給ひぬ。かくて北のおとゞの東表に、（三）宮の御前に並立ちて、拜み奉り給ふ。宮、女二「いと畏し」と聞え給ふ。おとゞたち、「今日の悦びは、此方にのみなむ聞えさすべき」とて皆

民部卿、

もろともに千世をぞあまた數へつる磯なる龜もかたく見るまで

など宣ひて、御遊びし給ふ程に、夜いたう更けぬ。帝、朱雀「斯くこゝに御文ある(一)とも知らで、里より待遠なる心地せらるらむものを、其の罪代には、よろこびをしてよ」と宣ひて、左大臣(二)は太政大臣に、右大臣(三)は左大臣に、右大臣には左大將、大納言には左衞門督、中納言に涼、仲忠、權中納言には忠澄、左大辨に諸澄、宰(四)相に祐澄、宰相中將に行政となされぬ。九人し給へるよろこび、七人はつらねて右大臣殿にまかで給ひぬ。藤中納言(五)(六)、先づ右大將(七)のぬしに悦び申し給ひに、二條の大路より、三條殿にわかれ給ふ。左右の大臣よりはじめて、御車靜かに促しとゞめて待ち給ふ程に、父大殿まかで給ひて、今宵のことなど聞え給ふ程に、中納言拜し奉り給ふ。父おとゞ、兼雅「何か更に」など宣ふ。中納言、仲忠「思はずにかゝる悦びの侍るをなむ」おとゞ、兼雅「其がいと嬉しきこと」など申し給ふ。中

(語釋)
(一)誤あるべし
(二)季明
(三)忠雅
(四)諸正
(五)仲忠
(七)兼雅

(考異)
(六)藤中納言—かくて中納言

宰相、

涼　長き世をゆづる鶴こそ數知らね岸の松をばいかゞ數へぬ

右大將、

兼雅　蘆原の(一)たづの數とも見ぬものを雲居ちかくも聲のするかな

とて、式部卿の宮に參り給ふ。

式部　結びつる岩根の松は年をへて涼しくのみも思ほゆるかな

左大臣、

季明　姫松をねたく見るらむ(二)あしたづの己が齡におひや增すとて

右大臣、

兼雅　いはふめる鶴の卵はこよひよりかへる〱や千世をますらむ

兵部卿親王、

なよ竹の茂れる宿にまとゐしてたゞ世に(三)そへむ數は(四)知りきや

〔語釋〕

(一)己を人數ならずと卑下する也

〔考異〕

(二)あしたづの―あしたづは

(三)そへむ―うつむ

(四)知りきや―知るやは

（語釋）
（一）「涼にや」は傍註の紛れ入りたるなるべし
（二）誤あるべし
（三）誤あるべし「しかの」又「しせの」「しをの」
（四）不詳、「たい〳〵」又「ちくたい」「ちゝ大臣」「ちゝ大將」
（六）「とめんと歟
（七）姫松は今宮

（校異）
（五）人—ナシ

涼にや（一）「かゝる物侍りけることをさへ、忘れ侍りにけるかな」とて賜はる。それよりはじめて、上まで御唱歌して、帝、朱雀「遅しや」と宣ふ。涼、仲忠、久しくありて、（二）かう心止めて仕うまつる。（三）しかのなむ風は、おどろ〳〵しく（四）たい〳〵して、今宵のほそを風は、高くいかめしく、響き靜かにすめる音出で來て哀に聞え、細き聲、清涼殿の清く涼しき十五夜の月限なくあかきに、さ夜更け方に面白く靜に仕うまつる。帝よりはじめ奉りて、涙落さぬ（五）人なし。上、朱雀「今宵は、など言ふ例をも止めじ（六）」と宣ひて、仲忠の宰相に御土器賜はすとて、宣はす、

朱雀　なでおほす松の林にこよひより千世をば見せよ鶴のむら鳥

仲忠、

松蔭に竝み居るたづのむら鳥も世々を經たれと思ふものぞは

左大將、取り給ひて、涼の宰相に參り給ふとて、

正頼　住の江の數にもあらぬ（七）姫松を雲居にあそぶたづ如何に見む

田鶴の村鳥

かたち心ばへ定められて、八月十三日に聟取り給ふ。中將たち、心にもあらで聟取られ給ひぬ。

十五夜の夜、三日に當るに、其の夜、内裏より大將殿に、「其の婿君たち、率て參れ」とあり。驚き給ひて、宰相、中將たち、上達部、御子たちひき率て參り給ふ。御前にある限りさふらひ給ふ。皆御物語して、御遊びなどし給ふ程に、内侍のか(一)んの殿より、宰(二)相中將の小さくより習ひ、内侍のかみに俊蔭も習はしゝほそを風を、「留(三)めさふらはれたる手やある」とて奉(四)れ給へり。右大將殿取り次ぎて、兼雅「里より斯くなむ」とて取らせ給ふ。仲忠、「げに留むべくこそ侍りけれ」とは聞ゆるものから賜はりぬ。かくて涼の宰相の許に、彌行が唐土より持て渡りたるなん風(五)のさまの琴に三千年と言ひて、(六)はし風と等しき琴あり。それを紀伊守の北の方、里より種松を使にて、北方「忘れ給ひにたらめど、今宵は思し出づや」とてな(七)む奉られたる。左衞門督の君とり次ぎて、「里より斯くなむ」とて奉(八)り給ふ。

㊃ 八月十五夜正頼聟君等を率ゐて參内す。仲忠涼御前にて琴を彈く。季明、正頼仲忠、涼、行政等昇進。大臣の大饗。

(語釋)
(一)俊蔭女
(二)仲忠
(四)仲忠に

(考異)
(三)留め—忘れ
(五)のさまの—やうの
(六)はし風と—ナシ
(七)なむ奉られたる—奉れたり
(八)奉り—奉らせ

兵部卿親王に、十二の君は平中納言に、このたの十三の君をば右大將の主、十四の君は源宰相にと思して、御方々よりはじめて、御調度、御裝束、上下仕うまつり人まで、かたち淸げに心ことに調へさせ給ひて、皆御消息聞え給ふ。ある限の人(一)更に聞き入れ給はず。誰もく、あて宮の御方に、深き(二)志ありき、參り給ひて程もなく、他心ありとや思ほされむ、など思す中に、源宰相は、かけても聞き(三)給へば、いと(四)なく悲しと思ほす。おとゞ、宮に、正賴「此の人々皆心ゆかず思しためり。何か然あらむを强ひても申さむ。あてこそに物宣ひし人々は、此處にあらむ(五)と覺すかと思へども、彼處(六)ならぬをば否と思すなるをば、いかでかは、數多の人々に、一人をば奉らむ。さて此の二人(七)の宰相たちをば、天下に宣ふとも强ひ申すべし。内裏より、日を取りて下し賜はせて、責めさせ給ふことをば、はかなき私事にて破るべきにてはあらず」とて、一(八)の宮の住み給ひし中の大殿を造りみがき、御座所(九)をしつらはれたること、綾錦どもして飾り、さぶらふべき人、皆髮長く、

（語釋）
（一）聟に撰ばれたる人々いづれも
（五）我が聟にならむと望まるゝかと思へど
（六）あて宮でなければならぬと思はるゝ人は
（七）仲忠、涼
（八）仲忠の妻になるべき朱雀の女一宮

（考異）
（二）深き―深く
（三）聞き―聞え
（四）いとなく―いはなく
（九）御座所を―御座所に

〔語釋〕
（一）女一腹の娘も大臣上腹の女も、十の君以下をいふ
（二）他の人の聟にせじと
（四）兼雅に
（六）大臣腹の十二の君と十四の君
（八）實忠を我が腹の娘の聟にせんと思ふ
（一〇）朱雀院の女一宮

〔考異〕
（三）思ふそこそこそは—思へるちごこそは
（五）げすこそ—そてこそ
（七）をば—は
（九）おはします—おはさよす

㊂ 仲忠、朱雀院の女一宮を娶る。涼、正賴の第十女今宮を娶る

も同じごと、唯いさほひ異なるのみなむ、思ふにはあらぬ。すべて、女子の多かるは、爲べき事ぞ多かるや。此方（一）のも彼方のも、殊に良き程になりにたるを、例のこれかれに奉りてむ。如何思す」宮、女二「其處にも如何思す、宜しかるべくば早せさせむかし」おとゞ正賴「あてこそに物宣ひける人をば外に（二）棲ませじとなむ思（三）ふ。そこそは（四）右大將のぬしに、げすこそ（五）は兵部卿の宮に、あなた（六）の二人（七）をば姉に當るをば、平中納言、今一人は源中將にとなむ思ふ」女二「源宰（八）相をば此方にとこそ思へ。あてこその、未だ何心もなかりし時より、志ありて言ひありき給ひしものを、如何に思ひ給ふらむ」おとゞ、正賴「然らば兵部卿の宮にもかへむかし」など宣ふ。

かくて、極熱の頃は、誰も〳〵をさ〳〵内裏へも參り給はず、籠りおはしま（九）す。八月になりて、大將殿の御聟取のこと近くなりて、仲忠の宰相の中將に女一宮（一〇）、源氏の中將に今こその君、これは宣旨にて賜ふ。私にあなたの御腹の十一の君をば

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(三)正頼
(四)涼、仲忠
(五)涼
(六)仲忠、「頭」は「藤」の誤
㊂ 正頼夫婦涼選みの相談
(七)誤脱あるべし、「みこの」又「えもこの」に作る
(八)仲忠の
(一一)誤脱あるべし
〔考異〕
(一二)たち八所―たちは八所
(九)うるせき―うるさき
(一〇)思し―おもほし

女御の君に、朱雀「今宵だにまう上り給へ。常に然聞ゆれど、上わたりをこそ物憂がり給へ」(一)などておはしましぬ。女御まう上り給ふ。

畫詞 (二)此處は仁壽殿。女御おはします。御年三十五。御子たち八所(一二)まで生み給へり。御たち多かり。帝おはします。御碁遊ばす。大將さふらひ給ふ。

かくておとゞまかで給ひぬ。宮、女二「など今までまかで給はざりつる」おとゞ、正頼「(三)仁壽殿にまうでたりつれば、おはしまして、物宣はせなどしつれば、彼の中(四)將たちの事をぞ宣はせつる。(五)源中將のこと違へたる樣に宣はせつる、いとほしき事」宮、女二「今こそ、劣らず生ひ出でためれば、それをこそ物すべかめれ。頭中將(六)にこそ、女一人とらせて、子出で來ば、琴習はさせむ、と思ひつれ。あるはみこ(七)の筋は習はすまじきなり」おとゞ、正頼「上も然思ほして、御心留めて物宣ふにこそあめれ。(八)(九)うるせき人の幸なりや。同じき御子たちと聞ゆる中にも、心ことに思(一〇)したりつるを、源氏の中將も、殊に(一一)劣らぬ人にしも、容貌もすも、つかさかうぶり

〔語釋〕
(一)仁壽殿母女一宮
(四)涼にあて宮を與へんと約せし事
(六)涼にやれとの宣旨
(八)東宮へ奉れと
(九)今宮
(一〇)東宮へ奉るも涼へやるも
(一一)涼
(一二)「おしき」は「をかしき」歟、かのあて宮を涼にと約束せしは當夜外に然るべき祿と思付かざりし故の事なりと也
(一三)今宮

〔考異〕
(二)さふらふに—侍るに
(三)など—ナシ
(五)には—ばかりは
(七)宣旨なかりし前より奉れと仰せられしを斯かる—ナシ。又「宣旨なかりし前より」ナシ

罪にこそあれ」大將、正頼「彼處(一)にも「殊なる事なくば、なまかで給ひそ。參りまかでするも煩はし」など宣ふを、如何なれば然侍らん。若しさふらふ(二)に効なき心地やし侍らむ」帝、朱雀「けぶりの譬も有れば、然も知らずかし。なほ涼仲忠等が祿は如何にぞや。(三)など涼が(四)本意の違にたる心地のする」大將、正頼「今此の八月ばかりにとなむ思う給ふる。涼の朝臣には(五)、しか思う給へしを、東宮より宣旨(六)(七)なかりし前より、奉れ(八)と仰せられしを、斯かる宣旨なむあると、聞召して、「猶參らせよ。その由は奏せん」と仰せられしかばなむ、參らせ侍りしを、其の代にと思ひ給ふるものの(九)小さく侍る程に、今まで怠り侍りつる」帝、朱雀「同じこと(一〇)にこそはあなれ。彼の人をこそ、有り難く聞えしか。此處にも彼の源氏(一一)を、さしも思はざりしかど、(一二)おしきもの覺えざりし夜なりしかばなむ。太子の然物せられむには、いかでかは然あらざらむ」大將、正頼「今侍るもの(一三)、彼に劣り侍らず」上、「うるさきことかな。此の度も危しや。「もどきし我ぞ」とか言ふこと」など宣はせて、

(一) 朱雀院、正頼に涼に妻すべき女の事を仰せらる

〔語釋〕

(一)朱雀院
(二)仁壽殿女御
(三)正頼
(五)暇願
(六)仲澄の大病。「侍り所に」は「侍從の」の誤歟
(七)仁壽殿が言ひしを
(八)「身にも」は「とみにも」歟

〔句意〕

(四)宣はせて―宣ふ
(九)さぶれ―あれ

田鶴の村鳥　一名沖つ白浜

梗概

(一) 朱雀院正頼に涼に妻すべき女の事を仰せらる、(二) 正頼夫婦聟擇みの相談。(三) 仲忠朱雀院の女一宮を娶る。涼正頼の第十女今宮を娶る。(四) 八月十五夜正頼聟君たちを率ゐて參内す。仲忠、涼、御前にて琴を彈く。季明、正頼、涼、仲忠、行政等昇進。大臣の大饗。(五) あて宮より女一宮に消息す。仲忠夫婦あて宮の噂をす。(六) 兵部卿宮、正明、行政、藤英四人正頼の聟になる。實忠のみならず。(七) 藤英の榮華。舊恩に酬ゆ。(八) 正頼、仲頼、法師に法服を贈る。

六月ばかりに、内裏の帝(一)、仁壽殿に渡り給ひて、大將の女御の君(二)と御碁遊ばしなどするに、大將(三)のおとゞ參り給へり。上おはします、とて、隱れたる方にさぶらひ給ふ。上、召し出でて、物など宣はせ(四)て、朱雀「暇(五)文出だされて久しくなりぬ、と聞きつるは何事ぞ」大將、「侍り所(六)にほとほとしく侍りつるを、見給へあつかひてなむ」上、朱雀「更に聞かざりけり。先つ頃、『見にまかでむ』とありし(七)を、例の里住せられまほしき時は、里になむ悩み給ふと、此處も彼處も物せらるれば、身(八)にも此の度は許し申さゞりつるは、眞にこそあめれ(九)。すべて、容貌しならはし給へる

〔語釋〕
（一）誤あらんか、「こ」を「子」とかける本もあり

〔考異〕
（二）一つ—二つ

入れて、その敷物、上のおほひ、上のくみこせられける樣、いとらう／＼しく心深し。今一つには、おほん髮の調度、すゑびたひよりはじめ、笄子、元結、おほん櫛どもなど、そのくさとも言はずめでたくて六つ、たかつきなむまうけ給へりける。

〔語釋〕
（二）「所」は「に」の誤歟
（三）銀線なるべし
（四）誤あるべし
（五）「おもてよくかく」は「おもてにも」歟

〔考異〕
（一）物世の—物は世の

ず。今宵の内侍のかみの御贈物（一）、世の中にかしこき人え取う出たまはねど、仁壽殿は、さる大將殿のいつき女といふ所（二）なむ、さいへど取う出給ひける。銀（三）を透箱に組まれたる、組、目いと面白く、一具には秋の山を組みすゑ、野には草花、蝶、鳥、山には木の葉のいろ〳〵、鳥どもすゑなどしたる樣、いと面白し。おなじき山の心ばへ、いと勞ある組みすゑ一よろひには、夏の山を、山には綠の木の葉、鳥ども囀りあそべる山河の心、水鳥の居たるさま、木の枝に虫どもの住みたるなど、いとめでたくなまめき、珍らかに、その山里の人の住みたる心ばへなど組みすゑたる、あらは（四）にめでたし。今一具には、春の櫻など生ひたる島どもなどの心ばへ、舟どもなど、その組いと勞ありて、いと珍らしくをかしき事ども組みすゑたる透箱二よろひ、銀のたかつき、かねの塗物して、そのたかつきの脚にもおも（五）てよくかく勞ある物のかた、をかしき物の樣など畫いつけて、いと世の常ならず、それに、御よそひ、更にも言はず、いといみじくめでたくて、夏冬の裝を透箱に

〔語釋〕
（二）當時名工の名なるべし、一本「しつかはのたかつね」
（四）「うちぎ」歟
（六）下敷きの布
（八）左樣な立派な贈物の中に我々風情の贈物は無用なりとて

〔考異〕
（一）ばかりひろき—ばかりのひろさ
（三）御衣—さも
（五）頓に—ナシ
（七）淸らなり羅を—淸らなるろを

疊綿の、雪の降りかけたる樣なるが五尺ばかりひろき(一)五百枚擇り入れて、かの藏人所の十かけには、綾錦、花紋綾、色々の香は色をつくして、麝香、沈、丁子、香も沈も、唐人の持てわたる度毎に擇りおかせ給へる、くら人所の十かけ、枌、臺覆、更にも言はず、いといみじくめでたくて十かけ調へてさふらひ給ふ。后宮よりの御贈物は、(二)しらかはのなかつねが仕うまつれる蒔繪の御衣箱五具に、御裝束、夏のは夏、秋のは秋、冬のは冬、御よそひ樣々に、いふ限なく淸らなり。(三)御ぞどもは、形木のにもあれ、また染めたる色も限なし。唐の御衣、(四)御うはぎなど、言へば更なり。珍らしき紋に織りてこれも、斯かる用もこそ(五)頓におれとて、萬にめでたくて設け給へるなりけり。これをなむ御箱どもに入れ給ひて、(六)入れかたびら、包などいと淸らなり。(七)羅を入れかたびらにして、綺の縁の色の、海賦の紋を、また包にしたり。みな、唐物どもをしたり。又、女御たち、そこらの御中に、仁壽殿のみなむし給ひける。(八)「さる切なる物の中には」とて、こと君だちは取う出たまは

【語釋】
(一)誤あらむか
(三)「なむ」は「など」歟
(四)以下正頼の心
(七)「ひとりは」歟

【考異】
(二)とゝのへて—「て」ナシ
(五)更に〱せじ—更にせじ
(六)何れか—いつか
(八)それ—その
(九)なきを—「を」ナシ

仕うまつらせ給へりける御辛櫃どもに、萬のらうある物、𦀌の綾つきめでたきは、これがたばかりなむ、錦などの面白きは、これが覆にと、年を經て擇りとゝのへ(二)て調じ給(一)へる物も、たゞこの御料になむ。それに、藏人所にも、すべて唐土の人の來るごとに、唐物の交易し給ひて、のぼり來るごとに、綾錦(三)なむめづらしき物は、この辛櫃に擇り入れ、香も勝れたるは、これに擇り入れつゝ、やんごとなく警策ならむ事の爲にとて、こそ、櫃十かけに包みて、藏人所におかせ給へるを、年頃、にはかに警策ならむ折に、とて調ぜさせ給ひてあるを、天の下、今宵の御(四)贈物より越えて更に(五)〱せじ、これより何れか(六)あらむ、(七)一つは俊蔭が女なり、男は右大將といひて、名だたり、し出だすわざ、俊蔭が世の琴なり、天の下これより越えたる心にくさ、いつかあらむ、これを今宵の贈物にせむ、勘當あらじ、など思して、それ(八)十かけ取り出でられ、今十かけの御衣櫃に、内藏寮の絹の限(九)なきを擇り出だして、五かけの辛櫃のうへに、五百疋いみじき限り、今五かけには、

〔語釋〕
(一)逢坂は木綿付鳥に緣ある處故それによせて君に逢ひたしの意をほのめかしたり
(二)ふたうは「不定」歟
(四)抱への細工人の上手が手を加へたる

〔考異〕
(三)預り—物をつくして
(五)仕うまつりける—仕うまつり添へ給ひける

になむ」たゞ今もおぼえ侍る」とて、

兼雅しのゝめはまだすみのえかおぼつかなさすがに急ぐ鷄の聲かな

これをなむ承り煩ふ」と申し給ふ。上、うち笑ひ給ひて、內侍のかみの御許に、

朱雀「聞き給へ。かく人の申すめる。こゝには聞きなむまさる」とて、

朱雀ほのかにも(一)木綿付鳥と聞ゆればなほ逢坂を近しと思はむ

と宣ふ。かんのおとゞ、

俊蔭女「名をのみは賴まぬものを逢坂の許さぬ關は越えずとか聞く

なほふたう(二)になむ有なる」上、朱雀「なほ、いで効なくも宣ふかな」とて、

朱雀「賴めどもあさかりければ逢坂の淸水もたえて結ばれぬかな

相思されざりけり」と宣ふ。

なほまかで給ふ。左のおとゞ、藏人所より、蒔繪の御衣櫃二十に、臺覆ひ、杦はた更にも言はず。作物所の預り(三)仕うまつりけるを、なほ仕(四)(五)うまつりける上手して

斯くていらへ給ふ、朱雀「年頃の志は、これにこそ見ゆれ。

　しほたれて年も經にける袖のうらはほのかに見るぞかけて嬉しき」

上(一)おはしまして、萬に哀にをかしき御物語をしつゝおはします程(二)に、曉になりゆ(三)く。鷄うち鳴きはじめなどするに、上、朱雀「(四)あれにあふ夜は」といふ事は眞なりけり」など宣ふ。

　朱雀「曉の聲をばきかで雛鳥のおなじとぐらに寐るよしもがな

と宣へば、内侍のかみ、

　俊蔭女「卵のうちをゆめよりかへる雛鳥は高きとぐらを餘所に見るかな

と聞え給ふほどに、夜明けなむとするに、(五)かんのおとど急ぎ給ふに、やう〳〵日など見ゆるほどに、急ぎ給ふ。朱雀「また見ずや。そも〳〵こは曉かは。まだあ(六)けぐれも光見ゆるものを」とて、「右大將さだめて宣へ」と宣ふ。大將、兼雅「なほ定めがたくなむ。なほ木綿付鳥の晝となる(七)聲なむ聞ゆ。いづれにか侍らむ。不定

（語釋）

（一）此一句誤あらむか

（四）古今に「彥星の稀にあふ夜の床夏はうち拂はねど露けかりけり」これ歟

（五）内侍のかみをいふ

（七）「なる」は「なく」歟

（考異）

（二）程に曉—程に夜曉に

（三）ゆく—ゆくに

（六）あけぐれ—あけぐも

になむ、たゞ今もおぼえ侍る」とて、

兼雅しのゝめはまだすみのえかおぼつかなさすがに急ぐ鷄の聲かな

これをなむ承り煩ふ」と申し給ふ。上うち笑ひ給ひて、内侍のかみの御許に、

朱雀「聞き給へ。かく人の申すめる。こゝには聞きなむまさる」とて、

朱雀（一）ほのかにも木綿付鳥と聞ゆればなほ逢坂を近しと思はむ

と宣ふ。かんのおとゞ、

俊蔭女「名をのみは頼まぬものを逢坂の許さぬ關は越えずとか聞く

なほふたう（二）になむ有なる」上、朱雀「なほ、いで効なくも宣ふかな」とて、

朱雀「頼めどもあさかりければ逢坂の清水もたえて結ばれぬかな

相思されざりけり」と宣ふ。

なほまかで給ふ。左のおとゞ、藏人所より、蒔繪の御衣櫃二十に、臺覆ひ、杦は

た更にも言はず。作物所の預り（三）仕うまつりけるを、なほ仕（四）（五）うまつりける上手して

（語釋）

（一）逢坂は木綿付鳥に縁ある處故それに上せて君に逢ひたしの意をほのめかしたり

（二）ふたうは「不定」歟

（四）抱への細工人の上手が手を加へたる

（考異）

（三）預り―物をつくして

（五）仕うまつりける―仕うまつり添へ給ひける

〔語釋〕
（一）此一句誤あらむか
（四）古今に「彦星の稀にあふ夜の床夏はうち掃はねど露けかりけり」これ歟
（五）内侍のかみをいふ
（七）「なる」は「なく」歟

〔考異〕
（二）程に曉―程に夜曉に
（三）ゆく―ゆくに
（六）あけぐれ―あけぐも

斯くていらへ給ふ、朱雀「年頃の志は、これにこそ見ゆれ。
しほたれて年も經にける袖のうらはほのかに見るぞかけて嬉しき」
上おはしまして、（一）「萬に哀にをかしき御物語をしつゝおはします程に、（二）曉になりゆく。（三）鷄うち鳴きはじめなどするに、上、朱雀「（四）まれにあふ夜は」といふ事は眞なりけり」など宣ふ。
朱雀曉の聲をばきかで雛鳥のおなじとぐらに寐るよしもがな
と宣へば、内侍のかみ、
俊陰女卵のうちをゆめよりかへる雛鳥は高きとぐらを餘所に見るかな
と聞え給ふほどに、夜明けなむとするに、（五）かんのおとゞ急ぎ給ふに、やうやう日など見ゆるほどに、急ぎ給ふ。朱雀「また見ずや。そもそもこは曉かは。まだあ（六）けぐれも光見ゆるものを」とて、「右大將さだめて宣へ」と宣ふ。大將、兼雅「なほ定めがたくなむ。なほ木綿付鳥の晝となる（七）聲なむ聞ゆ。いづれにか侍らむ。不定

〔語釈〕
（一）俊蔭女の容

〔考異〕
（一）包みて持て―包みてとく持て

ひ出でむ」と仰せらる。殿上童べ、夜更けぬれば、さふらはぬうちにも、仲忠の朝臣は、承り得る心ありて、水の邊、草のわたりにありきて、多くの螢をとらへて、朝服の袖に包みて持て（一）參りて、くらき所に立ちて、この螢をつゝみながら嘯く時に、上、いととく御覽じつけて、直衣の御袖にうつし取りて、つゝみ隱して持てまゐり給ひて、内侍のかみのさふらひ給ふ几帳のかたびらをうち懸け給うて、物など宣ふに、かの内侍のかみのほど近きに、この螢をさしよせて、包みながら嘯き給へば、さる羅の御直衣にぞたゞ包まれたれば、（一）殘る所なく見ゆる時に、内侍のかみ、俊蔭女「怪しのわざや」とうち笑ひてかく聞ゆ、

　俊蔭女　衣うすみ袖のうちより見ゆる火はみつしほたるゝ蜑やすむらむ

と聞え給ふ様、めでたき人の物など言ひ出だしたる才など、はたいとめでたく、心にくき人の、その容貌はた世に類なくいみじき人の、さるらうあるものの光に、ほのかにたとふべき人なく、めでたく御覽ずること限なし。

怖はすれ。志、むかしより更に譬ふるものなく多かれば、なほさて思ひてあれど、今はたなほ然てのみはえあるまじきを、天下に、かく急ぐ志のかた〳〵(一)ありとも、里にものし給はむに、(二)はたえものせじを、こゝにものし給はゞ(三)なむよかるべき。「(四)やがてもさふらひ給へ」と聞えむとすれど、さま〴〵に過し難きことなむ。この月には十五夜に必ず御迎をせむ。この調を、かゝることの違はぬ程に、必ず十五夜に、と思ほしたれ」内侍のかみ、俊蔭女「それは、(五)赫耶姫こそさふらふべかなれ」上、朱雀「こゝには棚機おくりてさふらはむかし(六)」内侍のかみ、俊蔭女「子安貝は近くさふらはむかし」上、いかでこの内侍のかみ御覽ぜむと思すに、御殿油、(七)ものあらはにともせばものし、如何にせましと思ほしおはしますに、螢、おはします御前わたりに、三つ四つつれて飛びありく。上、これが光に、物は見えぬべかめりと思して、立ち走りて、みな捕へて、御袖に包みて御覽ずるに、(八)おまたあらむはよかりぬべければ、やがて、朱雀「童べやさふらふ。螢少しもとめよや。(九)かの文思

〔語釋〕
(一)誤脫あらんか
(二)自分が尋ねゆく譯にはゆくまじければ
(三)「給はゞ」は「給はん」の誤歟
(四)此儘禁中に留まり給へと
(五)こゝの問答は竹取物語によりていへり
(八)澤山ならば十分燈の代りに出來そう故
(九)車胤の故事
〔考異〕
(六)かし―ナシ
(七)もの―ナシ

〔語釋〕
（一）參內の節の世話も其人にさせられよ
（二）兼雅が如く思ふ事はあるまじ
（三）誤あるべし

のなかに、內侍仕うまつるべき人はありや。この頃、上の內侍仕うまつるべき人、たうばりにの、一人なむなき。すこし物など知りて、さてもありぬべからむ人、なさせ給へ。やがて其處に參りなどし給はむに、後見もせさせ給へ。すべて女官のことは、何事も御心のまゝにを。（一）昔よりかやうならましかば、今は國母と聞えてましかし。別いても、仲忠の朝臣ばかりの親王ながらましかし。よし、ゆく末までも、私の后に思はむかし。時々なほ參り給へ。御休所は、願にしたがひて、清涼殿をもゆづり聞えむ。自らは屋陰に住むとも、御願の所はものせむ。さてさふらはるとも、人惡しとはものせじを。なほ然てものし給へ。右大將の制せむもあぢきなし。今はそれにも、な隨ひ給ひそかし。さても怪しうはあらじ。（二）ねたうと思さむやは。それには、なつゝみ給ひそ。かくて所をばさてのみやあらむ」（三）內侍のかみ、俊蔭女「何かは、さふらはむを、制する人の侍らむ。すゞろに侍らはどこそあらめ」上、朱雀「御許だにものし給はゞ、何か然らむ。かくれたる所こそ、かく物

なるを、女の饗などのこと、いと淸らになむせまほしき。饗のこと、心殊にあるべし。いはんや、只今の女官どもなり。やむことなきすけなど、はたものし給ふを、用意せむ。宰相中將もものせむとすれど、(一)こゝにまかでられむに、無くては惡しかるべければ」(二)などいと委しく宣ひて遣はしつ。

かゝる程に、上はた、いかでこの贈物、いとめでたくしてしがな、と思ほして、左のおとゞに宣ふ。朱雀「この内侍のかみまかでむに、いかで興あらん贈物してしがな、と思ふを、さる心もなく、(四)俄なることなれば、え何でふこと無からむが、いといとほしきこと。藏人所、内藏寮のわたりに、すこし今めき、勞あらむものは取う出られなむや。この事ものせさせ給へ。これ有心の族にてはんべる、うるさき人なり。心してものせさせ給へ」(五)と宣ふ。后宮、仁壽殿なども、いかでか、聊かなりとも物せむ、(六)など思ほす。

かゝるほどに上、内侍のかみに物語し給ふついでに、朱雀「今宵御許にさふらふ人

〔語釋〕
(一)仲忠も用意の爲に先に歸らせたけれど
(二)母の退出に仲忠無くては困るべければ留めおく
(四)朱雀の心
(五)誤脫あらむか
(六)贈物を俊蔭女にやりたしと

〔考異〕
(三)いと—ナシ

〔語釈〕
（一）以下兼雅の心
（三）「ありと」は「あれど」歟
（四）俊陰女をいふ
〔考異〕
（一）持ちたる—持たりたる—持たりたりける

ますますに心憎くなり、「かゝる妻持ちたる（一）人、いかに他人をみむ」と后宮よりはじめ奉り、そこばくの人思ほす。げにはた（二）、みめ容貌よりも、うち出だしたる才、産み出だしたる子などを見るに、いと世の常の人ならず見え給ふ人なれば、かへりて面目あり（三）と、昔より聞召しかけて、つねにとはせ給ひ、今にてもおぼし離れで訪はせ給ふものを、かくてさふらひ給ふに、宣ひかくる事もこそあれ、と心は空におぼえて、この殿の政所の別當左京大夫橘元行の、北の方の御送に參りたるを召して宣ふやう、兼雅「この里の（四）、にはかに女官の饗し給ふべかめるを、かの三條に、たゞ今まうでて、さる心設せられよ。必ず送りに人々ものせられなむ。女官の著くべき方、垣下のをとこの著き給ふ所など、淸らにしつらはせむ」元行、「御在所は、この相撲にこなた勝ち給はゞと、しつらひさふらふ。御饗のことなどは、此度はかねて心して仕うまつりつれば、何でふ煩も侍るまじ」おとゞ、兼雅「されど、相撲に勝たむ設にこそあらめ。これは、斯く俄にらうある宣旨にてあること

〔語釋〕

(七)「源氏の女なり」は傍註の紛れ入りたるなるべし

(八)「まかで」衍文歟

(一〇)兼雅は彌々人に心憎く思はるゝ樣になれりと也

〔考異〕

(一)だちの—天下の

(二)まことの—しんの

(三)斯く—かくて

(四)曉方—「方」ナシ

(五)内侍四十人—内侍うなる四十人

(六)たちの—たちなどの

(九)かく具し給へば—まじらひ給ふ—かくして。又ナシ

と仰せられければ、この君だちの手をつくして、勞ありとある人、殿上人などして、手づから俎にむかひて、(一)まことの(二)有識たち、三四十人して調じ出だしたる、殊にいと淸らなり。斯く(三)めでたくて、御琴仕うまつりはてて、(四)曉方になる程になむ、内侍四十人、(五)みな裝束しつらねて、四十の折敷とりて參りける。かく内侍のかみになり給ひぬるすなはち、女官みな驚きて、俄に内教坊よりも、何處よりも〳〵、髮揚げ裝束して、かたに出で來て、この御折敷とりて參る。内侍のすけ賄し給ふ。そのすけ、いとやんごとなき人なり。上、仕うまつり給ひて、源氏親王(六)たちの御子にておはします。(七)源氏の女なり。かくて、皆この内侍のかみの御許にある大人、童べなどに、いと淸らにて物賜ふ。

かゝる程に右大將のおとゞ、(八)まかで物參りなどする程に、我が妻と知りはて給ひぬ。大將怪しく、漫にて參りけるかなと思せど、その人の御妻子とて、さるおほぞうの中に出で走りてあるに、ことに恥かしからず(九)かく具し給へば、(一〇)おとゞいや

そこに、然思せかし。こゝにはた更なり」内侍のかみ、俊蔭女「ことてしは」といふことのあれば、えなむ」とて、

俊蔭女淵瀬をもわかじと思へど飛鳥川そなたの水や中淀みせむ

とのみなむ。更に身には「深き心を」とのみこそ」上、朱雀「よし、さて試み給へかし」とて、

朱雀もろ共に流れてを見む白川やいづれの水が湧きはまさると

など宣ふ程に、内膳に仰せごとありければ、御前の物(一)、いと淸らにてまゐれり(二)。淺香の折敷四十、それに折敷の臺、敷物、いとになく淸らにて、御器どもなど更にも言はず、同じく盛りたる菓物、乾物、よのつねの食物にはあれど(三)、いとめでたし。上、左近の實頼の中將、兵衛の督などに、朱雀「かくてものし給ふに、今宵この琴仕うまつる人、いとめでたき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物すこし情づいてたゞ今ものせよ。菓物など、いと興ある物をえらびて仕うまつれ」

〔語釈〕

(一)食膳

〔考異〕

(二)まゐれり—まゐる

(三)あれど—あれども

たき事。いかでか其處にも此處にも、萬歳の齢もがな。とこそ思へ。

　千とせふる松よりいづる風の音は誰かときはに聞かむとすらむ」

内侍のかみ、

俊陰女「聲たえずふかむ風には松よりも齢ひさしき君ぞすゞまむ

誰にかあらむ」と申し給ふ。朱雀「それが不定なるにこそ哀なれ。よし、御許にも草木となるとも、この琴の音をそれに隨へて、この遊ばすをば承りてむ。木とならば鳥の聲にても承りてむ。草とならば虫の聲にても聞き、山とならば風の音にても聞き、海川とならば波たかき音にてもなむ聞かむ」と宣ふ。朱雀「楊貴妃が(一)七月七日長生殿にて聞え契りければ、お許には今宵仁壽殿に(二)てな契り聞えむ。さらに長生殿の、ながき人の契に思ほしおとすな」と世中のあはれなる事を宣ひてかくなむ、

朱雀「ひめ松の鶴の千年はかはるともおなじ川べの水と流れむ

〔語釈〕
(一)長恨歌に「七月七日長生殿、夜半無人私語時在天願爲比翼鳥、在地願爲連理枝」

〔考異〕
(二)にてを—「を」ナシ

（考異）
（一）調みな—調どもみな
（二）なむかく—なむかぜ
（三）さかり見所—さかりの見所
（四）別いても千年のうちに—別いてもゝ千年のうちに—まいても千年がうちに
（五）ともの…承り—とものつきんことのかたきこと承り

など心々に御名して下りぬ。

かくて北の方は、こかの手どもの調（一）、みな仕うまつりはて給ひぬ。上、飽かずめでたしと思ほせど、こかに調かへて仕うまつり給ふべきにもあらねば、あかず心もとなしと思しながら、上、朱雀「こかは、かく覺束なく思ほゆれど、かごとばかりは、遊ばしつめり。今はこれよりかへらむ聲に調べて、今一度の節會にあそばさむ聲を調べ、まかで給へかし」と宣へば、なむかく（二）の聲にしらべてさふらひ給ふ。上、朱雀「年頃過しけることは、嘆きても效なし。今よりだに、なほよろしからむ節會ごとに、すべて節會一つに、手一つづつあそばせ。又、節會ならずとも、春秋の草木のさかり（三）、見所あらん夕暮などに、なほ面白からむ手あそばして聞かせ給へ。（四）別いても千年のうちに出で來む節會ごとに遊ばすとも、この御手の盡くべきことの無きなむ哀なりける。人の世は限あるものを、己が限にして（五）ともの千年經るとも盡きざらむことのかたき、承りさして世のかはらむは、あはれうしろめ

〔語釋〕

（一）中宮大夫

と書きて、

兼雅　ふきまさる松より出づる風なれやことなる波の涙おつるは

と書きつけ給ひて、民部卿に奉り給ふ。「從三位權大納言兼民部卿源朝臣實正」

と書きて、

實正　年經れど枝もうつらぬ高砂はとなりの松の風やこえまし

と書きて、左衞門督に奉り給ふ。それ名し給ふ、「中納言從三位兼左衞門督藤原朝臣まさなり」とかきつけ給ふ。

まさなり　いにしへのまつは枯れにし住吉のむかしの風は忘れざりけり

とて、平中納言に奉り給ふ。「中納言從三位平朝臣正明」と書きて、

正明　きく人はあねはの松の風なれや昔のこゑを思ひいづるは

とて、（一）宮のかみに奉り給ふ。「中納言中宮大夫從三位源朝臣文正」と書きつけて、

文正　松風のむかしの聲にきこゆるは八十島よりや吹きつたふらむ

忠雅たけくまのはなわの松は親も子もならべて秋の風は吹かなむ

と書きつけて左大將(一)に奉り給ふ。左大將見給ひて、これかれ參りて、「これは何でふ事ぞ」正賴「さらば」とて聞え(二)給ふ。右のおとゞ、忠雅「いさや(三)。さらばかくなん思ひ給へ寄りたりつる。(四)如何に然は思さずや」正賴「いで、然も知らずかし。さこそ言へ、いたく(五)思し寄りたるかな」とて名し給ふ、「大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使源朝臣正賴」と書きつけて、

正賴はなわより吹きくる風の寒ければうべも小松はすゞしかりけり

と書きつけて右大將に奉り給ふ。見給ひて、兼雅「怪し。こは何でふ事どもぞ。兼雅は心得ずや」と宣ふ。上、朱雀「怪しうこそ(六)は心得給ふべき事にもあらずかし。覺束なながら御名を早」(七)と宣へば、右大將、(八)「かげろうこそ、これには奉るべかめれ。覺束なくては」と宣ふ。上、朱雀「おほめくよりはかなくてやは行りけむ。いで、な知らせそや」(九)など宣ふ。「從三位守大納言兼行左近衞大將東宮大夫藤原朝臣兼雅」

〔語釋〕

(二)忠雅に聞き合せたる也

(三)「されど」歟

(八)未詳。「階膈」と傍書したる本もあり。一本「かいろう」

〔考異〕

(一)はなわの—はねはの

(四)「如何に」—ナシ

(五)思し—おもはし

(六)こそは—こそ

(七)と宣へば—ナシ

(九)など—と

〔語釋〕
(一)「おもほえぬかな」歟
(二)署名して
(三)俊陰女ならんと推したる也

すよし書かせ給ひて、それが上に斯くなむ、

朱雀「目のまへの枝より出づる風の音は枯れにしものと思ほゆる(一)かな

これが哀なればなむ」と書きつけさせ給ひて、上達部たちの御中に、朱雀「人々これに名して(二)下されよ」とて給びつ。左のおとゞ見給ひて、いと覺束なし、誰ならむ、と思せど、御手づからのことなれば、名し給ふ、「左大臣從二位源朝臣季明」と書きつけて、その傍に、

季明 風の音は誰もあはれに聞ゆれどいづれの枝と知らずもあるかな

おぼつかなき宣旨になむ。

と書きつけて右のおとゞに奉り給へり。見給ひて、あやしく、只今こともなき琴の聲いだして、内侍のかみになるべき人絶えてなし、琴引きける人の族にこそはあめれ、(三)と思ほし寄りて名し給ふ、「右大臣從二位藤原朝臣忠雅」と書きつけて、斯くなむ、

に、然る武士の手に入りけむ心地、如何なりけむ、と思ふに、まして遊ばします樣のことなるこそ、いみじく哀なれ。(一)關許されぬ人あるには、(二)このはらおとらぬ聲出だしつべき心地なむする。境越えけむ國母に、(三)(四)關許らぬ國王をこそ思しもおとさゞらめ」北の方、俊蔭女「如何なる關守かは許し聞えさせざらむ」上、朱雀(五)「近きまもりのちこそはたかく居ためれ」など宣ふ。このはらを、一度はほのかに搔き鳴らして、今一度ばかり、心とゞめて搔き立てて仕うまつり給ふに、そこばく聞召す限なむ(六)、男女にけなく、みな涙をながしつゝ聞召し、哀がり給ふこと限りなし。朱雀「いでや、何をかは今宵の御祿にはすべからむ。更にこの遊ばす手どもにあふべき祿こそ思ほえね。涼仲忠が、紀伊國の(七)九日の祿を、まだ行はぬかな。(八)つかさの大將を、八月の頃ほひになりなば、祿遲しと責め申せ。さて今宵の祿をば如何すべき。涼仲忠はきく(九)〳〵あり。御許には、(一〇)自らをやは得給はぬ。中將の朝臣、紀伊國のろくには、女をこそ得たれ(一一)」とて、御前なる日給の簡に、内侍のかみにな

〔語釋〕
(一)俊蔭女には兼雅といふ士のあるをいふ
(三)朱雀自らいふ
(五)誤脱あるべし、「近き衛の陣こそは堅く居ためれ」歟
(七)涼にはあて宮仲忠には女一宮を賜はんとありし事、これは紅葉の賀の時の事なり
(八)正賴
(九)誤あらんか
(一〇)朱雀自身を賞つては如何

〔考異〕
(二)このはら—このはゝ
(四)許らぬ—ゆるしぬる
(六)なむ—衍歟
(一一)得たれ—取られたれ

（語釋）
（五）夫木集の歌下の句は「思ひいづるのなくぞわびしき」
（七）「仲澄」の誤なるべき
事前にいへり
（八）俊蔭女をいふ

（考異）
（一）覺えし―おもほえし
（二）御許に―御許の
（三）遊ばす―ひき給ふ
（四）ふかき―ぬべき
（六）このはら―このはゝ
（九）このはら―このはゝ
（一〇）音―ナシ
（一一）帝―てんわう

ろづの事忘れて思はせて、せめて物の興なむ覺え（一）し。御許に（二）遊ばす（三）は、よろづ物のあはれなむ思ひ出でられ、昔の人の聲など思ほえ、ふかき（四）志のまさりたるなむ思ひ出でられける。心細くあはれなることは、飽くまで御許になむ遊ばしける。「忘れてもあるべきものを葦原に」（五）とこそ聞えつべかりけれ。この昔の思ほゆる手を遊ばせよ」などかきかへし給ふ時、ある手をばそれに勝して彈き、なき手をばこと〴〵につけて、めでたく彈き給ふ。うへ、御心にふかく此の北の方を思し入りおはします。つぎ〳〵遊ばしつゝ、このはら（六）にかきかへり給ふほどに、仲賴（七）、行政、唱歌仕うまつりて、涼、仲忠、詩誦しなどする聲、只今の上手、この道の人四人、昔の逸物の筋一人（八）、あはせて、さる古き新しき、上手たちの御遊なれば、いとしめやかに興あること限なし。上、朱雀「このはら（九）のあはれなるに、心凄き音（一〇）を聞けば、理なり。この手なん、かの胡の國へわたりたる國母、胡の國とわが國と越えける境の程、歎きける手なり。げにさる帝（一一）の正妃として、一の后としてありけむ

すぐれたる容貌(一)ありける。そのうちに、天皇思すこと盛なりければ、その身の愛を憑みて、こくばくの(二)(三)國母、夫人のなかに(四)、我一人こそはすぐれたる德あれ、さりとも、我を武士に賜ばむやはの憑みに、容貌畫きならぶる繪師に、六人の國母は、千兩の黃金を贈る、すぐれたる國母は己が德のあるをたのみて贈らざりければ、劣れる六人は、いとよく畫きおとして、勝れたる一人をば、いよ〳〵畫きまして、かの胡の國の武士に見するに、「この一人の國母を」と申す時に、天子は言かへずといふものなれば、え否びず、この一人の國母を遣(五)はし給ふ時に、國母、胡の國へわたるとて、歎くこと、こ(六)かの音を聞き悲しびて、乘れる馬の歎くなん、このめくたちなりける。それを聞くに、獸の聲にあらじかしとて(八)、それをあそばしつ(七)る、御手二つなく、あらばともおもほえたれ」と宣ふほどに、このはら(九)(一〇)に遊ばしいたる。これ(一一)がのなむやうのいへのぞうなりける。帝聞召して、朱雀「この遊ばす手は、昔の故(一二)朝臣の仕うまつられし手に等しくなむありける。中將の朝臣のは、よ

（語釋）
(一)王昭君
(二)以下王昭君の心
(六)此處解しがたし
(九)此邊解しがたし
(一二)俊蔭。巨勢氏曰、俊蔭の卷には帝俊蔭の琴は聞覺え給はず嵯峨院こそよく知食すべき由ありて爰に帝俊蔭の琴を聞知り給ふ樣にあるは如何

（考異）
(三)こくばく—こゝばく
(四)なかに—なかにも
(五)遣はし—ナシ
(七)めくたち—めいかてたち—めいかくたち
(八)とて—ナシ
(一〇)このはら—このははーいのはく
(一一)これ—それ

〔語釋〕
(二)春海翁曰、これは上の琴ひき給ふとて文を開き見そなはし給ふ也琴の譜をいふ也
(三)仲頼は遁世したれば此處にあるべからず。誤なるべし
(五)手は譜なるべし
(七)此處解しがたし
(一二)洪元帝

〔考異〕
(一)思し—おもほし
(四)遊ばしかゝりて—ひきかゝり給ひて
(六)遊ばす—ひき給ふ
(八)遊ばして—ひき給ひて
(九)遊ばす—ひき給ふ
(一〇)面白きも—面白きこと
(一一)めく—めし—めこ
(一三)時天皇—時に天皇

上せめて御心留まる。昔より聞召しかけたるうちにも増りて、あはれと思し(一)まさること限なし。さて仰せらるゝ、朱雀「文(二)の手どものなかに心あらむ手ども出で來む折には、涼仲忠拍子まうし、仲頼(三)行政はいまめきたらむ唱歌仕れ」など仰せらる。かゝる程に、めでたく遊ばし(四)かゝりて、其の聲いとしめやかに彈き給ふ。上、(五)手どもを取り出でて御覽じつゝ、この手には何といふありけり、又何と彈くべき手なりなど宣ふ。この北の方、ふんのことつくして、珍らしき手をさへ盡して遊ば(六)す。(七)ひとなみは、五箇のうへふのこと遊ばして(八)、しをすさの聲に遊ばす(九)樣、おなじくらゐかへしてかきかへ給ふさまのことの音、面白き(一〇)も理なり。おなじくかい彈き給ふさまの手づかひなむ、かなしくめでたかりける。朱雀「このめく(一一)たちを、昔、唐土の帝(一二)の、軍に負け給ひぬべかりける時、胡の國の人ありて、その軍を鎭めたりける時(一三)、天皇よろこびの極なきによりて、「七の后の中に願ひ申さむを」と仰せられて、七人の后を籤にかゝせ給ひて、胡の國の人にえらばせ給ひける中に、

〔語釋〕
(六)「みな」の上に「と」あるべし

〔考異〕
(一)湧く如に覺えて—湧く如おぼして
(二)遊ばす時に—ひき給ふに
(三)歇みて—やめて
(四)人の思ほえぬ—人のおぼえぬ—人おぼえぬ
(五)いだされけめ—いたさめ
(七)大將殿の—「の」ナシ
(八)遊ばし—彈き

りし故事を、湧く如に覺えて(一)、切に、もののあはれに悲しく覺ゆれは、やう〳〵心ある手ども彈きかゝりて、あはれに覺えて遊ばす時に(二)、みな人上中下樂人ども、樂屋のあそびの人も遊び歇みて(三)、たゞこれを聞召して、「怪し。この參りつる人は誰ならむ。たゞ今の世は盛の世といはるゝ中にも、かくばかりの琴ひくべき人の(四)思ほえぬかな。誰ならむ」とみな人驚きつゝ、「仲忠の中將こそかくばかりの聲はいだされけめ(五)。それはた斯くてあり。怪しくもあるかな。藤壺はたまう上り給はず」(六)みな人怪しがりつゝ、なほこの大將殿の(七)にやあらむ、と人思ほし寄る氣色を見て、中將、せめて知らず顏をつくりて、仲忠「あやしく興ある御琴にもあるかな。誰が遊ばすにかあらむ」といといたう哀がり覺束ながり居給へり。右大將殿の參り給はむを、仲忠知らざらむやは、誰が參りたるならむと、人々おもひ、大將のおとゞも然思ほしてあるに、夜は更けまさり、琴も出で來勝るまゝに、五箇の手どもの興あるを遊ばし(八)出だしつゝ、わざと面白くなりゆく時に、この北の方に、

〔語釋〕
（一）未詳。「てけ」又「てす」
（二）宴の松原は禁中にあり、「宜陽殿の北掃部寮の西近衞の南朱雀東」と拾芥抄に見えたり
（四）兼雅
（六）仲忠

〔考異〕
（三）あそばす—ひき給ふ
（五）大將—中將
（七）仕う—「う」ナシ
（八）仕う—「う」ナシ
（九）ことども—ことと—こととも

んやういしものことなれば、殊に彼らに劣らず、いと切にあはれなること添へる御琴にて、北の方心にも入れずかき鳴らし給へど、さる上手のてけ（一）の手どもを、逸物にしつき給へる人の、さるは殊に秋の夜の更けゆく宴（二）の松原の風に調べあはせて彈かるゝに、あはれに面白きこと物に似ず。北の方琴（三）あそばす事、むかし大將（四）のおとゞに對面し給ひし山に住み給ひし時、彈き給ひけるまゝに、其の後さらに住み給ひける世に手ふれ給はず。この大將（五）のおとゞにも、さらにこの琴彈きてきかせ奉り給はず。宰相中將（六）は、時々紀伊國などにても仕う（七）まつられけれど、この北の方は、さらに、里に出で給ひて後、琴に手ふれ給はずあるに、かくわりなく聞え給へば、仕う（八）まつり給ふ。なほ、年頃騷がしくなどして、稀にこそ思ひ出で給へ、忘れものし給ふを、この琴に手ふれ給ふにつけて、よろづ昔のこと（九）ども思ほえ給ひて、あはれなること限なし。親の御手より彈き取りし手、中將にかの山にて習はせしこと、又この里に出でむとて彈きしなん風の聲など、よろづに哀な

立田姫かと思ひ給へらるゝかな」上、朱雀「いでや手觸れらるゝ人もなければ、みな塵居にたりや。

水を淺みひく人もなき足曳の山の小川は塵ぞしらぶる

さるは宿世もありとか聞く」北の方俊蔭女「目に見ずはいかゞ」とて、

俊蔭女 水をあさみみさご(一)もみゆる山川は秋の調もひかずやあるらむ

上、朱雀「なほ遊ばし見よや。

みもり田(二)にひきはじめてば山川の底より水はたえず出でなむ

志は泉よりまさりなむ。よしよし見給へ。まめやかにかう宣ひてやあらむとする。さてはえまかで給はじ。早うこそ」といと切に宣ふ。北の方、おぼろげなう聞え給へば、辛うじて、いとはかなき手ども(三)、いとほのかに掻き鳴らし給ふ。上、朱雀「なほなほ、かく覺束なく承れば、ましてこそ心憂けれ。すこし聞き所あらむ(四)手を一つ二つあそばせ」など宣ふ。すこし面白き手など遊はす(五)に、この御琴、昔のな(六)

〔語釋〕
（一）「みさご」は「いさご」歟
（二）「みもり田」誤あるべし「みかり田」とかける本もあり
（六）誤脱あるべし

〔考異〕
（三）手ども―てども
（四）聞き所あらむ―心あらむ―よあしからむ
（五）遊ばす―ひき給ふ

〔語釋〕
(一)よく琴の彈き方を知り居る母に代を賴む積なるべし
(三)人に憎まれぬ樣にするがよし
(四)俊蔭
(六)古今集「秋風にかきなす琴の音にさへはかなく人の戀しかるらむ」
(七)此歌誤あるべし

〔考異〕
(二)あたりにと—「と」ナシ
(五)聞え給ふ—聞えつ

の、若くよりつきにたる事、さらに年經れど忘れぬものなり。中將の朝臣は、なほ知ら(一)るゝことのあたりにと(二)申さるゝにこそあめれ。まことに忘れなばいとくちをしき事にこそあべけれ。天下にいふとも、いと氣離れてあるまじきことには、人憎(三)からぬなむよき。昔の朝臣(四)の、さる世の中の一のものに物せられし後、おもとにのみこそ物し給へ。さる有難き手を傳へ取りて、誰も〳〵すこしづつなりとも聞え(五)給ふべかりける。まめやかに斯う宣ふこそ、いとつらけれ」と切に免さず宣ふ。かたみに、上も北の方も、宣ひかはして、上、朱雀「かきなすことの(六)」とこそ言へ。つらしや」と宣ひて、

朱雀「よ(七)そにこそ音をもなくてはさ夜更けて彈かぬもつらき琴にもある哉

「君がつらさに」とは、これらなりけむかし」北の方俊蔭女「秋の調は、ひくものこそあなれ」とて、

俊蔭女「秋風のしらべて出だす松の音は誰をたつたの山と見るらむ

立田姫かと思ひ給へらるゝかな」上、朱雀「いでや手觸れらるゝ人もなければ、みな塵居にたりや。

水を淺みひく人もなき足曳の山の小川は塵ぞしらぶる

さるは宿世もありとか聞く」北の方俊蔭女「目に見ずはいかゞ」とて、

俊蔭女 水をあさみみさご(一)もみゆる山川は秋の調もひかずやあるらむ

上、朱雀「なほ遊ばし見よや。

(二)みもり田にひきはじめてば山川の底より水はたえず出でなむ

志は泉よりまさりなむ。よし〳〵見給へ。まめやかにかう宣ひてやあらむとする。さてはえまかで給はじ。早うこそ」といと切に宣ふ。北の方、おぼろげなう聞え給へば、辛うじて、いとはかなき(三)手ども、いとほのかに掻き鳴らし給ふ。上、朱雀「なほなほ、かく覺束なく承れば、ましてこそ心憂けれ。すこし(四)聞き所あらむ手を一つ二つあそばせ」など宣ふ。すこし面白き手など(五)遊はすに、この御琴、昔のな(六)

〔語釋〕
(一)「みさご」は「いさご」歟
(二)「みもり田」誤あるべし「みかり田」とかける本もあり
(六)誤脱あるべし

〔考異〕
(三)手ども—こてろども
(四)聞き所あらむ—心あらむ—よろしからむ
(五)遊ばす—ひき給ふ

〔語釋〕
(一)よく琴の彈き方を知り居る母に代を賴む積なるべし
(三)人に憎まれぬ樣にするがよし
(四)俊蔭
(六)古今集「秋風にかきなす琴の音にさへはかなく人の戀しかるらむ」
(七)此歌誤あるべし

〔考異〕
(二)あたりにと—「と」ナシ
(五)聞え給ふ—聞えつ

の、若くよりつきにたる事、さらに年經れど忘れぬものなり。中將の朝臣は、なほ知らる(一)ゝことのあたりに(二)と申さるゝにこそあめれ。まことに忘れなばいとくちをしき事にこそあべけれ。天下にいふとも、いと氣離れてあるまじきことには、人憎から(三)ぬなむよき。昔の朝臣(四)の、さる世の中の一のものに物せられし後、おもとにのみこそ物し給へ。さる有難き手を傳へ取りて、誰も〳〵すこしづつなりとも聞え(五)給ふべかりける。まめやかに斯う宣ふこそ、いとつらけれ」と切に免さず宣ふ。かたみに、上も北の方も、宣ひかはして、上、朱雀「かきなす(六)ことの」とこそ言へ。つらしや」と宣ひて、

朱雀「よそ(七)にこそ音をもなくては夜更けて彈かぬもつらき琴にもある哉

「君がつらさに」とは、これらなりけむかし」北の方俊蔭女「秋の調は、ひくものこそあなれ」とて、

俊蔭女「秋風のしらべて出だす松の音は誰をたづたの山と見るらむ

〔語釋〕
(一)誤あるべし
(二)殘す處なく
(五)「な隱し」の「な」は衍文なるべし
(六)「よめ」は「夜目」歟
〔考異〕
(三)上—ナシ
(四)箏の名のたえぬを—御ふけうのたえぬを

えよ」と申されつる。これさらに聲もかへじ、たゞ(一)このみながら、この調の手を(二)とゞめ給ふ手なくあそばせ。琴といふもの、聲あまたなれど、なほ五箇なむ、怪しくあはれに思ほゆる」と宣ふ。北の方、俊蔭女「さらに、人達に聞えさせたるにや侍らむ。琴とは何の名にか侍らむ。それをだに得知り侍らぬに、怪しくも聞えさせけるかな」上、(三)朱雀「この箏の名の絶えぬを、(四)な隱し(五)給ふこそはかなけれ。さても免し聞ゆべきにもあらずや。まさにそれよりは代へてむや。昔より著きよめ(六)をば」北の方、俊蔭女「知り給へらば、いかゞ聞えさせざらむ。さらに琴といふ物、餘所にても見給へずなむ。昔さもやありけむ、年頃さらに目に近く見給へねばにやあらむ、かけてこれとなむ思ひ給へられぬ。そが中にも、五箇なむ更に覺え侍らずなむ。たいぐ〜しう侍れど、仲忠こそすこし昔の人などにも、數多の手彈きまさりて仕うまつるめりしか」とて更に手も觸れず。上、朱雀「これ、つらき御事なり。まさに若き時よりしつき給へらむこと、いと然忘るばかりあらむや。才といふも

へよ」とものし侍りてなむ、斯くさふらはすべかりけるを、氣色にも出ださで侍りつれば、何ともなく、里姿(一)もひきかへず、急ぎまうでつるを、「御垣下に隠れて、物見さふらべき(二)、葎の蔭なむある。なほまかり下りよ」とものし侍りつれば、常も空言(三)し侍らぬを思ひ給へてなむ。玉の臺までさふらひにける」上、うち笑はせ給ひて、朱雀「餘所なれば、こゝも効なしや、御本意ありつらむ葎の下ならねば」北の方、俊蔭女「今はその葎も門さしてなむ」朱雀「うつろひ聞ゆる人もありけり」と宣ひて、朱雀「まことか、中將の朝臣の聞ゆることも無かりつらむは。然らば聞えむかし。古き人の前に物語するやうにやあらむ。今宵、中將の朝臣の切なる言事の數ありつるを、「更に自らは物もおぼえず(四)。物忘せぬ人をものせむ」とありつるは、げに族の内にこそはものせられけれ。さればそれをも聞えむとてなむ」とて、仲忠(五)に賜ひつるせいひんの御琴を、五箇の調ながらとり出で給ひて、朱雀「これをなむ、かの朝臣に、「今宵のいひごとの數に仕うまつれ」とものしつれば、「御許に聞

〔語釋〕
(一)家に居る時のまゝの姿で
(二)「さふらべき」は「さふらふべき」の誤
(三)仲忠が
(五)仲忠が物忘れせぬ人といへるは然らば母なる其方をいへりと見ゆ

〔考異〕
(四)おぼえず―おもほえず

〔語釋〕
（一）かく一旦打絶えて對面する故一入珍重に思ふと也
（二）仲忠の代に來し事故其代の役即ち琴ひく役を早くつとめよ
（五）其方までが其樣な事は言はぬものぢや
〔考異〕
（三）などーと
（四）さがなーさがなや

せ奉らずこそなりにしか。さるは、斯く平かにものし給ひけるものを」北の方、俊蔭女「年頃は、世の中にもすまぬ樣に侍りし。昔と今となむ、この世の中は見給ふる」朱雀「中頃は、何れの世にかものせられけむ。昔ながら對面賜はらましよりも、まして志まさる事こそあれ。しか思ひし時は、目馴れて侮りきこゆる事もありなまし。（一）斯うてあり難き事こそものし給ふめれ」北の方、俊蔭女「何事にか侍らむ。心まさりしぬべきことにも侍るなるかな」上、朱雀「おぼえ給はずやは。自ら、言はねど著く見え給ふらむとなむ思ふ。志聞えはじめては、聞ゆる人もきこえ給ふ人も、暇なくなむ。まづ、今宵の人の代とものし給ひぬるを、かの人のゆづり聞ゆらむ事を早」と宣ふ。（二）俊蔭女「さらに讓るなど（三）ある人も侍らずなむ」上、朱雀「あなさ（四）がな。御許にさへかくこそは宣はざらめ。（五）早う」と宣ふ。御いらへ、俊蔭女「何事にか侍らむ。さらに言ひ知らする人なむ侍らぬ」上、朱雀「仲忠の朝臣は、聞ゆることは無しやは」北の方、俊蔭女「さらに物も申さずなむ。たゞ陣のわたりに物見給

客人(一)に御物語し給ふ。朱雀「こよひ、仲忠の朝臣に言ふことありつれば、「自は得せずなんあるべき。代を」など物しつれは、如何なる代をかは、と思ひつるに、(二)年頃、の志の顯るゝに(三)こそはありけれ」北の方、俊蔭女「いと怪しく、(四)例よりも思う給へられつるを、俄に、さぶらふべき様にもあらず、言ひ急がし侍りつれば、物も思ほえず、まかり出でぬるこそ、いと怪しけれ」上、朱雀「何か怪しからむ。常に斯くこそあらまほしけれ。興ある夕暮にこそ、其處に參り來て、承らまほしきことあれど、ゆえ流石に所せき心地して、心もとなくありつるに」など、年頃むかしの事宜ふ。朱雀「むかし、(五)治部卿の朝臣のありし時より、なほいさゝか物の音をかき鳴らして、聞かせ給はなむ、と思ひて、御迎せむと、常に思ふことありしかど、朝臣の在りし限は、さらに怪しく(六)古めきの族にて、かゝる筋のことも疎ましげにやありけむ、たま〳〵(七)「まゐらせ給へ」とものせしかど、聽き入れられずなりにき。その後は、さらに世の中に聞え給はずなりにしかば、志のみ(八)多くて、少しも知ら

〔語釈〕
(一)俊蔭女
(四)今夜の仲忠の様子がいつもより變なりしを
(五)俊蔭
(六)古風な家で
(七)俊蔭女を入内せしめよと俊蔭に申込みしかど

〔考異〕
(二)思ひつるに—思ひ侍りつるに—思ひつるは
(三)こそは—「は」ナシ
(八)多くて—おぼえて

さてやんごとなく睦ましき人に几帳持たせて、父おとゞの御靴もたせて、仲忠「はや下り給へ」と言ふ。俊蔭女「物思はえずも思ほゆるかな。いづくに下りよとてぞ」中將、仲忠「あなさがな。な知ろし召しそ。さりとも惡き所にはおはしまさせてむや」北の方、俊蔭女「あな苦し。異樣なる參りかな。さる心も思はぬものを。かたはなる目をも(一)見るかな」と宣へど、昔より中將の言にしたがひ給へば下り給ふ。童四人、御几帳前にさしたり。おとな後に立ちて、中將靴はかせ奉り、(二)も取らせて、御髪つくろひ、かしづき立てたる樣、めでたきこと限なし。いと美しげなり。めでたくつくろひて、我もこと君だちも、几帳さゝして參らせ奉る。上、出でおはしまして、みな人出ださせ(三)給ふ。御殿油消させ給ふ。御松明(四)どもも皆消たせ給ひて、まうのぼらせ給ふすなはち、上、朱雀「御路のしるべせむ」とて、朱雀「なほこれより」と宣ひて、御局へ入れ奉り(五)給ひて、中將然りげなくて居たれば、大將(六)さらに夢にも此の北の方ならむとも知らず。上、御几帳のもとに御褥うち敷きて居給ひて、

〔語釈〕
(二)「も取らせ」の上脱字あるべし
(三)仲忠も
(五)「給ひて」は「給ふ」又は「給ふに」なるべし
(六)兼雅

〔考異〕
(一)目をも—「も」ナシ
(四)どもも—ともに

姫君(一)など宮にさふらひ給へば、數ならず思さるとも、世の人の親しくさふらはむよりは、心殊に思さむ(二)なむいと〳〵嬉しく侍るべき」宮、女三「さらにも宣ふかな。(三)このさふらひ給ふ人は、親もおもほし忘れ給ふめれば、世の中にあはれに心細げなる人なめり。同胞も何につけてか思さむ。なほ哀なるものの心苦しきに思は(四)して、とぶらひ給へかし」仲忠、「あなかしこ。更に、仰せごとなくとも、聞えさすまじき程ならばこそあらめ」など聞えて、仲忠「こと〴〵(五)(六)にとり申さむとするを、急ぐこと侍ればなむ」とて急ぎて立つ。

その御局より、花紋綾のかたびらかけたる三尺の几帳一具賜はりて、母北の方の御許へ持て行く。上おはしまして、仁壽殿の南の廂に、よそひつゝ、西の方に御屏風御几帳など立てさせ給ひて、朱雀「上達部しばし彼方に」とて、東の方にわた(七)して、其處におはします。仲忠祐澄の君を、仲忠「いざ給へ。仲忠、切なる人こよひ參らするを、御蔭にかくして率て入り給へ(八)」仲澄、「誰ぞや。いざかし」とて率て

〔語釈〕
(一)梨壺
(二)仲忠を
(三)梨壺は兼雅も構はぬ故
(四)仲忠が
(五)色々の事を一々申上げたけれど
(七)上達部を退けて
(八)「祐澄」の誤

〔考異〕
(六)こと〴〵に―「に」ナシ

仲忠、御答して立ちて、かの妹(一)の君の東宮にさふらひ給へる御局にまうでて見れば、君(二)は上におはすれど、母宮(三)こそおはする。(四)この大將、さばかりいみじき御中におはせしかど、この北の方(五)につき給ひにしより、あたりにも寄り給はず。思し(六)煩らひ給ひて、御女を東宮に奉り給ひて、これをかしづきものにて、内裏にのみなむおはしましける。そこに中將參りて、仲忠「いかで人々にものとり申さむ」と御簾の下にて言ふ。宮、女三「誰ぞや」と御口づから宣ふ。仲忠「仲忠」と聞えて、仲忠「いかで人給(七)ならむ御几帳參らむに、いかに里へ取りに遣はするなむ」宮、女三「いときたなげなりとも、やは(八)」とて、女三「月頃、わかき人(九)のひとりさふらひ給へば、うしろめたさにこゝに侍るを、こと人はさもこそ訪はせ給はざらめ、其處にさへいと疎くこそ思したれ」仲忠「あなかしこ。宮(一〇)にさふらひなどする折侍れど、此處におはしますらむと言ふこと、え承らずなむ侍る。中の大殿にさふらひて聞えさせしかど、院(一一)になど承りしは、此處にこそおはしましけれ。畏けれど、

〔語釋〕
(一)妹といへど年は姉なるべし、梨壺といふ兼雅の前妻、嵯峨院の女三の宮の腹
(二)梨壺
(三)女三宮、「こそ」は「ぞ」なるべし。「こそ」なき本もあり
(四)兼雅從前は此女三宮と非常に睦ましかりしに
(五)俊蔭女
(六)女三が
(七)「ならむ」は「ならぬ」歟、此仲忠の詞誤あらん歟
(八)「御用ひなされぬか」の意
(九)梨壺をいふ
(一〇)東宮に
(一一)嵯峨院に御出ある由など聞きしは

し。顔かたち更にも言はず。仲忠、これを見るまゝに、藤壺を思ひ出でて、この北の方を、さらに親と思ひわすれて、何處なりし天女ぞと思ひ居たり。北の方「然らば車寄せさせ給へ」中將、仲忠「たゞ今、おとゞの見給はぬこそくちをしけれ(一)」とて、仲忠「御車寄せよ」とて手づから御几帳さして、後におとな二人、人給につぎ〳〵人乘りて、出で立ち給ふ。中將移に乘りて、車の轅近う(二)添ひて立つ。この殿の饗の設しに參れる四位、五位、六位など合せて八十人ばかりして參り給ふ。かくて縫殿の陣に車ひき立てて(三)、中將、仲忠「しばし」とて内に(四)參る。仲忠「御前の人々はな參り給ひぞ(五)。御車のもとにさふらひ給へ。仲忠はひとり參りなむ」とて入る。御供人、松明ともして、御前に數しらず多かり。

かくて立てるほどに、中將殿、上に參りて、仁壽殿の御前にさふらひ給ふ。上、御覽じて、朱雀「如何にぞや。かの言ひし事は」と問はせ給ふ。仲忠、「まだ乘物ながらなむ」と奏す。帝うち笑はせ(六)給ひて、朱雀「さらば賭物ゆるす」と仰せらる。

(考異)
(一)こそくちをしー乙そいとくちをし
(二)近うー近く
(三)立てゝー立て
(四)内にー内へ
(五)な參り給ひぞーナシ
(六)笑はせー笑ひ

（語釋）

（二）「たに」は「ふさに」歟

〔考異〕

（一）せでーせず

（三）二尺ー五尺

さて奉らむは俄に男どもわづらひ侍りなむ」中將、仲忠「人はなほ例の御裝奉れ。仲忠、なほ物數ならず、世の心にも叶はねば、なほ畏まりをだにこそあれ。人はなほ例の癖を」と言ふ。國時、御廐に三十餘疋立てる御馬のなかに、吹上の濱にて得給へりし、つるぶちにまさる御馬なし、それに移おきて、中將のために率き出でなどしてあるに、北の方、すましたる御髪の乾たるを、かい梳り、花紋綾の地摺の御裳に、唐裳かさねて、すゞしき程なれば、綾のかいねり一襲、あか色二藍がさねの唐衣、いとめでたき奉り、「何でふ、珍らかなるわざもせで（一）斯くばかりにて」とおとな六人、童四人、下づかへ二人して出で立ちて、御簾もとについ居給へるを、庭に、（二）たにともしてさふらふ松明の光に、中將見るに、まして更なり。御髪のほど長に（三）二尺ばかり餘りて、少しく丸がれたる髪を、かき洗ひたるすなはち、一脊中こぼるゝまであり。更に一筋散りたるもなし。姿のうつくしげなること、更にいとめでたし。長たちよき程に、姿の淸らなること、更にならびな

賜へ」馬の權助國時聞ゆ、國時「いはゆる龍の駒といふとも、奉らむ(一)に、などかや然なる御馬や無からむ」中將、仲忠「自らだに、野飼に放れたる身を、況て乘物は、御廐の雜役(二)をせしとも思はぬ(三)」國時、「駒牽(四)も近うなりぬれば、野飼も數に入り給ふ時やあらむ」中將、仲忠「それに數あまる時こそ」國時、「藤壺の御方をや今はおろし給ひてぬ(五)」仲忠、「あな似げなの方の人々の夜妻や。まめやかには、その御前仕うまつらむ。馬裝束き給へや」國時「例の君のすきわざし給ふめり(六)」とて、國時、

今さへやすきて(七)見ゆらむ夏衣ぬぎもかふべき秋の暮には

風のうち吹く程に、中將立つとて、

仲忠 秋の夜の涼しきほどに立つ時はかふる衣もなほぞすきける

など言ひて國時、「まめやかには御裝(八)(九)は、いづれを奉らむ」中將、仲忠「うつしを(一〇)おきて賜へ。何せむにか。無禮なり」國時、「他男ども、うつし侍らぬものあるを、

〔語釋〕

(二)雜役馬即ち駄馬をも不足とも思はずの意歟

(四)駒迎の節會には國々の牧に放ち飼にしある駒をひきて都に上る也

(七)すきて—好きて、透きて

(八)馬のかざり

(一〇)移し鞍

〔考異〕

(一)らむになどかや—らむにはとかや

(三)思はぬ—思はむ

(五)給ひてぬ—給へぬ—給はぬ

(六)給ふめり—給ふなりけり

(九)御裝は—みすそひ—御おそひは

〔語釋〕
(一)其位の分別は私とても無き筈はなし
(三)「せめて面白きをひとり見給ふればかひなきになむ」歟
(七)移し鞍

〔考異〕
(二)早う—「う」ナシ
(四)よかひ—よろひ
(五)仲忠のともと—仲忠のひともと
(六)御馬に—「に」ナシ

くちをしく、などてか然ばかり(一)のことを見給へ知らざらむ。なほ早う(二)、すこし由あらむ御衣奉り、見所あらむ御容貌見出でて、いざさせ給へ」北の方、「衣は、切に求めば然もやあらむ、容貌はいづくよりかは、取う出べき。納めたる所もおぼえぬは」仲忠「それをこそは、いとよく取う出させ給ふ時あれ。よし見給へかし」など言ひ居たり。北の方、「然ばものせむかし。うしろめたきことを宣はむやは」とて御髪のなま濕りたる、急ぎ乾し給ふ。中將、仲忠「今日の相撲の、いとくちなしく、此方の勝ち給はずなりぬるに、仲忠が身には喜あり、殿の御ためには喜なむ無き。さるはたゞ一番になむ負け給ひぬる。たゞ今こそいと面白や。(三)せめて面白きを見給ふれば、(四)よかひなきになむ、御迎に參り來つる。主の垣下のまうけに參りたる人々、この御許に。仲忠馬にてさふらはむ」とて、たゞかの父大殿の檳榔毛の御車に、人給ひ三つして參り給はむとて、宰相、御廐の別當、右の馬の助に、仲忠「その御廐の御馬の中に、(五)仲忠のともとかなるべき(六)御馬に(七)うつしおかせて

〔語釋〕
（六）内裏の方々の思はくも如何あるべき

〔考異〕
（一）西東にやあらむ―西や東にやあらむ
（二）只今の―「の」ナシ
（三）物には―「は」ナシ
（四）をば―は
（五）はや〳〵―はやく
（七）早う―「う」ナシ

に心設などしたるに、然らねばさう〴〵しくなむ」仲忠、「左近引きて、大將よりはじめて參らむかし。別いても西東（一）にやあらむ。まことに、只今（二）の内裏の面白さこそ物（三）には似ね。此方はた、なほすこし心殊なる御氣色ありつかし。それも彼方は例もし給ふこと、はた筋異なればにやあらむ。左の勝ち給ひて、たゞ今興あることこそ限なけれ。世に名高き舞の師、物の師といふものの限つどひて、萬の遊をし給ひつるを見給へるに、仲忠ひとり見給へつる効なさになむ、御迎に參り來つる」北の方、「いかでか御前の事をば（四）見む」仲忠「それをこそは、仲忠はよく御覽ぜさせ奉らめ。天下に、西方淨土の遊も斯くぞあらむ。御覽ぜむとあらば、御覽ぜさせ奉りてむ。はや〳〵（五）出で給へ」北の方、「漫なりとこそ思へ。又、彼處（六）に思ほさむこと如何あらむ。中將、仲忠「まさに然あらむことを聞えてむや。然るべくもあらず。早う（七）」と聞ゆ。北の方、「すゞろにはと思へど、語り給ふを聞けば見まほし」中將、仲忠「などてか、仲忠は、人のすゞろなりと思はむことは聞ゆべき。

參らせ奉らむかし、と思ひて、物も聞えで立つ。右大將見給ひて、兼雅「朝臣や。など然ばかり仰せらるゝものを、又何方ぞや(一)。あやしく魂しづまらず異樣にもなりゆく人かな。見苦しかめり。しばし侍らへ」と宣ふ、宰相、仲忠「仰せらるゝことに由り(二)てなり」と申す。兼雅「さては何かは」と宣ふ。宰相、近衞の御門に出でて、その日父おとゞの御車のいと淸らにて立てるに、己が車をばうち捨てはひ乘りて、おとゞの御前みな仕うまつる。

かくて宰相(三)の中將、三條殿にまかでて入る。北の方御衣など引き著て、その日御髮すまし干しかねて、干し居給へるに(四)、仲忠、簀子につい居る。北の方俊蔭女「いかゞ、相撲は何方が勝ちぬる」仲忠「左なむ勝ちぬる」北の方、「いとさうぐ〵しきことかな。もし此方や勝ち給ふとて、人々參り集まりてさふらふめるものを、いとくちをしき事かな」仲忠、「いとつらくも宣はするものかな。仲忠侍る方の勝つこそうれしけれ。思ほしことおとしたれ」北の方うち笑ひて、俊蔭女「それはた嬉しくて、こ

〔語釋〕
(一)どこへ行く積りぢや
(三)父の前驅

㊅ 仲忠母を歎きて仁壽殿に伴ひ入る。朱雀院俊蔭女に舊情を訴ふ。俊蔭女琴を彈く。尙侍に任ぜらる。朱雀院螢の光に照して俊蔭女の容姿を見る。賜物。

〔考異〕
(二)ゆく人―ゆくべき人
(四)居給へるに―居給へり

ば煩はしう思ひながら、仲忠「仲忠、内戚にも外戚にも、女といふものなむ乏しく侍る。そが中にも、女方などは、さらに松方をはなちて、心やる方侍らずなむ。琴は、もし母方の外戚こそ、かの俊蔭の朝臣の琴は仕うまつらめ。それも然るべき筋の才(一)に侍らねばにやあらむ」と奏す。朱雀「よし、それは然もあらむ。やんごとなき朝臣として、うつし傳へたる人なしや。(二)絶えてなしと申さじ(三)ばかりにはありもしなむ。それこそは(四)今宵の賭物には出だされめ。それは早く。これをさへ聞かずば心憂からむ」と仰せらる。仲忠「うつし取りて傳へ侍りし仲忠だに、絶えてその筋覺えず侍るを、ましてもとの師(五)は、覺ゆること難くや侍らむ」上、朱雀「それをこそは今しも忘れにたらむとは思はめ。(六)彼處こそは(七)、覺束なく(八)おぼされず參らせよ」と宣ふ。仲忠「げに忘れにて侍らむ、(九)よしばかりをば聞召されてしがなと思ひ給ふるを、いかでかは參らすべく侍らむ」と聞ゆれば、朱雀「早うそれをだに物せられずば、更に背かじ」など許しげなく仰せらる。仲忠、如何はせむ、

〔語釋〕
(二)絶無とは言はれぬといふ位の程度の處ならば其の人あるべし
(五)仲忠の母をいふ
(六)母をばびく／＼せずに參內せしめよ
(九)琴の傳來だけを

〔考異〕
(一)才に—さらに
(三)申さじ—申さし—申し—申さう
(四)こそは—「は」ナシ
(七)こそは—「は」ナシ
(八)なく—なくは

まつるまじき由を奏し、此頃の歌をつくりて御覽ぜさせなどするに、帝わりなく言ふものかな、これに終に負けぬることのねたさ、など思ほして、これならぬ事何事をかは言はむ、と思すに、仲忠の母（一）に年頃いかでかと、御心に思しわたり、昔より聞召しかけて、いかでとのみ思ほしけれど、世にも聞えざりければ（二）、くちをしく思ほしけることの、今世（三）の中にありと聞え、只今のらうさかたち人（四）の二三のものの中に入るを、これが序に宣ひ寄らんと思して、朱雀「さらば朝臣は、絶えて仕うまつらじとや。かく、自らは得ものすまじかなるを、すこし、朝臣の手に思ほえたる、彈く人はありなむや」仲忠、「この族の手は、松方のみなむ仕うまつらむ。この一つ筋になむ侍る」うへ、朱雀「それは時々聞く。いまだ少し珍らしからむをこそ」と仰せらる。仲忠、「一つ族の手は、松方をはなちて仕うまつる人侍らず」上、朱雀「なほ思ひ出でられよや。さて無しや」仲忠、「覺えず」朱雀「女のなかに思ひ出でよや。誰ありなむ」仲忠、「思ほえずなむ侍る」など、宣ふ氣色（五）あれ

〔語釋〕
（一）仲忠の母が行方不明なりしかば
（四）「らうあるかたち人」なるべし。「さ」を「にて」とかける本もあり
（五）帝の仰せが底意ある樣子故

〔考異〕
（一）仲忠の―仲忠が
（三）今世の―今の世の

を手一つかき鳴らし聞かせなむ。かの不死藥、優曇華に劣らざらむ。不死藥は、「食ふ徒萬歲の齡あり」といひて、かの國の帝王さる難き使をたて、求められ、優曇華は、俄にせむる命とゞめむとてなりける。何れも〳〵、命を惜む藥なりけり。それを朝臣、今宵の言事を、さらばとて、あくま國蓬萊の山まで出だし立てなむ、われ(一)すこしはになきまつは、我斯く目に近く見馴らしたるを、さる心すごき使に、はるかなる程を出だし立てて思はむになむ、少しあはれに心細からむ。又(二)いきてみし人も、只今物せらるゝ、それが歎き思はむを見むに、いと効なからむ。かく(三)言ふ程に、不死藥をも蓬萊にもいたらむと思はむ隙(四)にとも(五)かくもあらば、不死の藥も何にかはせむ」と仰せらる。仲忠、「さては向ふこと難き蓬萊には侍らざりけり。たゞ不死藥なむ枯れ侍りにけり」と奏す。うへ、朱雀「されど今宵は王(六)母が家に劣らずなむありける」仲忠、「近き衞に、童男丱女こそさふらへ」と奏す。うへ、朱雀「海ひろく風早きを、いかで求められむとすらむ」仲忠、さらにえ仕う(七)

〔語釋〕
(一)此一句誤脫あるべし
(二)母をいふ歟
(五)仲忠の身に不慮の事もあらば
(六)今夜の歡會を西王母の仙家の樂に劣らずといふ也
(七)琴を引く事叶はざる由を

〔考異〕
(三)かく—かし
(四)程に—よりも

「島浮べども蓬萊を見ず」とこそ歎きためれ。かのこゝろしやうすのさる者だに、(一)終に到らずなりにける蓬萊へ、今朝臣の、(二)日本の國より、行くらむ方も知らず、不死藥の使したらむこと、すこし煩はしからむ。得や求めあはざらむ。(三)童男丱女、え劣るまじかめり。今一つ、(四)けうある丱女出來る煩ひあらむ。これ、(五)になき使好みなり。又あくま國に、優曇華とりに行かむに、すこし身の憂やあらむ。かれも、南天竺より、金剛大師の渡りけることは、睦ましき徒を、となりの國より迎へ取りて、これ相顧みるとて、時の國母のあたをいたしてなむ、さる使には出だしたりける。(六)そも南天竺より渡るに、自然に年經にたれば、「(七)忍辱の輩」のわかれに逢はず」とは歎かずや。それを如何に、朝臣の、國母のあたありともなくて、また、さる藥要ずる后(八)ありともなくて、俄に親をすてて渡らむに、すこし物の煩あり、不孝になりなむ。身の勞ありなむ。斯く、になき事よりは、たゞ此處ながら(九)調べたる一つ彈かむことは、易からむかし。あるまじき使にはすゝまで、たゞ此の琴

〔語釋〕
(二)誤あるべし
(三)徐福の時の童男丱女に其の困難は劣るべからずの意歟
(四)「興ある」歟
(五)似げなきの意歟
(七)父母の死別にあはず
(九)「調べたる琴一つ」なるべし

〔考異〕
(一)島—島の—島に
(六)そも—それ
(八)ありとも—あることも

〔語釋〕
(六)惡魔國歟
(九)ごとを「を」衍歟
(一〇)「童男丱女舟中老」

〔考異〕
(一)仕うまつり―仕うまつらん
(二)せいひ―せいひん
(三)いん―手―ゐん
(四)蓬萊の―蓬萊山の
(五)蓬萊の…こくの―蓬萊のあくまこくに不死藥
(七)取りに―もとめに
(八)更に―ナシ

奉りぬるかな、心づかひして仕うまつらましものを、何事をか仰せられむとすらむ、と思ひて、仲忠「とく承りて、身に堪へぬべき事ならば仕うまつり(一)、堪へぬことならば其の由をこそ奏し侍らめ」上、朱雀「仲忠が堪へぬことは、世にありなむや。さて堪へぬべきことならば、承りなむや」仲忠、「承りてのみなむ」上、涼に賜ひつる琴と等しきせいひ(二)を同じ聲に調べて、朱雀「これなむ、今日のいひことに仕うまつらむによろしきことなる。これ更に調をな變へそ。他聲は聞かじ。これが音の、出で來むかぎり、このいん(三)を、たち返く、度々あそべ」と仰せらる。仲忠奏す、仲忠「他仰せごとは、「身を徒になさむ、蓬萊(四)(五)の不死藥、あくまこ(六)くの優曇華を取り(七)にまかれ」と仰せらるとも、身の堪へむにしたがひて承らむに、更(八)にこの仰せごとを(九)なむ、かゝる所々に遣さむよりも、難き仰せごとなる」と奏す。上、うち笑はせ給ひて、朱雀「似げなき物使かな。さりとも、蓬萊の山へ、不死藥取りに渡らむとは、童男丱女(一〇)だに、その使に立ちて、舟の中にて老い、

つらしとこそ聞えつべけれ」

かゝる程に、上、何事をして、(一)これに物を言はせむ、と思ほす。仲忠は、いとかけ離れてさふらふに、上、碁盤を召して、仲忠と御碁あそばす。朱雀「何を賭物にはせむ。いと切ならむ(二)物も賭けじ。(三)いひごとを賭けむ」と宣はせて、三番にかぎらせ給ひて遊ばす。(四)なべての御才をつくしてし給ふなかに、碁なむ、一にし給ふ才におはしますうへ、これにいかで、と思ほす。仲忠、はた、然思ほすらむとも知らで、たゞ藤壺(五)にて物聞えつるのみ思ほえて、我この御碁に勝たむとも思はず、魂は、たゞ藤壺にて斯うのみある心地して仕うまつりければ、一番に上勝ち給ひぬ。二番に仲忠勝ちて、はての度、手を一つ打ち(七)あやまちて、たゞ目一つを負け奉(六)りぬ。上、興ありと思召(八)して、「早う賭物(九)つぐのへ」と仰せらる。仲忠「何事をか仕うまつるべく侍らん」(一〇)上、朱雀「たゞ言ふことを否ぶまじきばかりなり。労ある秋の夕暮に、言はむことたゞにはあらじかし」と仰せらる。仲忠、ねたう負け

〔語釈〕
(一)仲忠に
(三)「言事」歟
(四)朱雀はすべての藝に巧なる中に

〔考異〕
(二)物も―「も」ナシ
(五)ろへこれに―うちにもこれに
(六)二番に―二番は
(七)あやまちて―あやまりて
(八)思召して―おぼして
(九)つぐのへ―つぐのふ事は
(一〇)上―ナシ

けんに人あらじかし」(一)とて賜へば、仲忠、

もよしきにしる人もなき松蟲は野べの葎ぞ臥しよかりける

(二)と奏し給ひて、東宮にさふらふ。東宮、「いで其の籠られつらん葎も思ほゆるや」(三)

とて、

東宮　松蟲にやどとふ秋のむぐらには(四)宿せる(五)露やものを思はむ

と宣へば仲忠、

同じ野にやどをしかさば松蟲のあきの葎を頼みしもせじ

と聞ゆる(六)。東宮、左大將に、まゐらせ給ふ。大將取り給ひて、

正頼　まつむしに宿をしかさば秋風に匂ことなる花も見えなむ

とて賜はり給ひて、彈正の親王に參り給ふ(七)。取り給ひて、忠康戯にても、忠康

をこそ思しかけけれ(八)。

花みかく野べを見るゝ秋ごとになほまつむしの旅に經るかな

〔語釋〕

(一)誤あるべし

(二)「と奏して賜はりて東宮に奉る」歟

(三)推測し得らるゝ

(四)「松蟲の」歟

(六)「聞ゆる」の「る」衍歟

(七)「參らせ給ふ」歟

〔考異〕

(五)宿せる—宿れる

(八)かけけれ—かけけれな

く容貌の淸らなるよりも、さし歩みたる樣、うち思ひつるけしき(一)、さらに人に似ず、なまめき、らう〳〵し。左右の大將よりはじめて參るを、上御覽じて、いと御氣色よくて、朱雀「いとかしこく求め出でられたるかな」と宣ふ御氣色のいとよければ、御前にさふらひ給ふかぎり、彈正の親王立ちて、御階よりあそび下りて、仲忠の朝臣に遊びあひたまふ。兵部卿親王(二)、若宮よりはじめ奉りて、上達部、親王たち、殿上人つらねて迎へ給ふ。上、朱雀「さふらひけるを、などか召には參らざりつる」と宣へば、左大將(三)、兼雅「左の幄にて大將の土器賜ひてけちす(四)を給ぶことありければ、こよなく給べ醉ひて、ふかき蓬の下になむかくれて侍りける。草の中に笛の音のし侍るを尋ねてなむ」上、朱雀「草笛をこそは吹きけれ」大將、兼雅「かくれ遊びをやし侍らむ」と聞え給へば、上、御土器はじめさせ給ひて、朱雀「醉人(五)とも忘れぬことあり」と仰せられて、仲忠に、

朱雀「もよしきを今は何ともせぬ人のたれと葎の下に臥すらむ

〔語釋〕
(一)「うち思へる氣色」なるべし
(二)朱雀第四の皇子帥宮をいふ歟
(三)「左大將」は「右大將」の誤なるべし
(五)「醉人も」なるべし

〔考異〕
(四)けちすを—けちするを

底なるやみるにかくるゝ海藻をばえこそかづかねめに障りつゝ
人々の御覧ぜむを思ひ給へてなむ。

とて奉れ給へり。東宮、(一)四の宮に、「御覧ぜよや。いと然言ふばかりにはあらぬを」とて御前に出(二)で給ひぬ。

かくて夕暮に仲忠、藤壺より參れり。侍從なりし時よりも、(三)この頃はいとめでたき容貌の盛なり。父おとゞ、さる容貌人にて、つらねて參り給ふに、さらに親子とも見えず、たゞ、一つ二つの弟、兄に見えたり。左大將のおとゞ見給ひて、正頼「こ(四)ともなき隨身かな。中將の朝臣今日の隨身、いと見苦しや」と遊びおはしまさふ。左大將、正頼「右大將、(五)左右のつかさの隨身し給ふなり。いかゞ同じつかさの仕うまつり給はざらむ」と、仲忠を前にたてて、左右大將後に立ちて參り給ふ。(六)仲忠もとめもて歩きつる少將、左右近衞も立ちて、みな歩みて參る。たゞ此の御中に、(七)涼一人なん無かりける。仲忠夕榮してそこらの人にも似ず、(八)勝れてめでた

〔語釋〕
(四)大將を供に連れたるを見て戲れ言ふ也
(五)「左のつかさの」なるべし、仲忠は左中將なれば右大將が仲忠の隨身をせらるゝ上は左大將たる我は勿論隨身をつとめねばならぬの意
(六)仕うまつり給はざらむ「仕うまつらざむ」歟

〔考異〕
(一)四の宮—二の宮—五の宮
(二)出で給ひぬ—出で給ふ
(三)よりも—「も」ナシ
(七)もとめもて歩きつる—もとめにとてありつる
(八)似ず—ナシ

〔語釋〕
(一)東宮の妃妾たち
(三)梨壺
(四)女四宮なるべし、承香殿
(五)簾中に
(七)「蔭に果つ」歟
(九)「そこにや」なるべし

〔考異〕
(二)東宮の君だち—東宮たち
(六)四の宮—二の宮—五の君
(八)をとて—ナシ

中將の君。東宮の君だち、(一)(二)右大將の三の君、(三)嵯峨の院の女五の宮、(四)四の親王、姫宮おはします。女御、まかなひのもたゞのも、多にさふらひ給ふ。左大將殿の大君。すべてこの御族、君だち、女たち、さながら御かたちいと淸らなり。

上、(五)此方に入り給ひて、朱雀「など藤壺はまうのぼり給はぬ」(六)四の宮、承香「そがさうざうしきこと。かの君のまうのぼり給へらむこそ、今日の相撲よりも見所あべけれ」東宮、「かけにはつ(七)ばかりはあらざめるものを」とて、御前に、生海松の、石貝つきながらあるを取り給ひて、藤壺に、

などかまうのぼり給はぬ。此方に、皆ものせらるめるものを。(八)

とて、

東宮 浦なるやみるめはしらですまの蜑はとこにや(九)かづく海の玉藻を

と思ふなむ怪しき。今だにまうのぼり給へ。

とて奉れ給へれば、藤壺、

まかでにけりと人の奏すればこそ、召しに遣はせ、とは仰せらるれ。又只今、隨身も乘物もあり、と奏するなりつるは。然聞召したるには、いかゞ然は奏せむ。兼雅さへ隱すなり、と仰せられじや。たいぐ\しきことなり。朝臣の交らひするに、兼雅苦しき時おほかりや。世の中の人の、否びがたく思ふことは、ほうとく(一)こそはすれ。いかゞ、天の下ならん人は、仰せごとを否び申す人あらむ(二)。切に御口づから召しもとめさせ給ふを、宮の内にさぶらひながら仰にかなはぬ事、例の人にえあらじや。早う參り給へ」と宣ふ。仲忠、「更に、なほ今宵のことは許させ給へ」おとゞ、兼雅「のちに、兼雅、ひとへにいたまれざらむ(三)。何にかせむ。天下に、しだいにかなはむとて、何か惡しからむ(六)。今宵の召に叶はれざらむこそは、いと惡しかるべけれ(四)(五)。御氣色あしうて仰せらるゝぞや」とて、せめて、御前におし立てゝ參り給ふ。涼の君をば、ありとも聞き給はず。

畫詞　こゝは藤壺。仲忠、涼、姫君、御たち數多かり。大將仲忠召す。大將

〔語釋〕

(三)今召に應ぜずして後首尾あしき時に兼雅を恨むなの意歟

(四)誤あらむ歟

〔考異〕

(一)ほうとく―ほうせく

(二)人あらむ―人のあらむ

(五)しだい―じだひ

(六)惡しからむ―あしかりなむ

〈語釈〉
(一)「頭」は「藤」なるべし
(二)兼雅
(五)兼雅をいふ

〈考異〉
(三)近衛…問はせに—ナシ
(四)聞ゆ—聞しめし
(六)斯くては—斯くは
(七)まかで—まかりて

かくて、涼も仲忠も、萬のことを聞ゆる程に、仁壽殿より、頭(一)中將もとむる使に、つかさの人もさながら里には往き、仲頼も少將たちもつらねて、すべて宮の内をもとめ廻り給ふ。(二)大將のおとゞ、たゞ殿上わらはを一人御供にて、まづ陣ごとに、「宰相中將やまかでつる」と問はせ、(三)近衛の御門に車やあると問はせに遣はしたれば、「陣にもまかで給ふとも見えず。車も隨身どももあり」と聞ゆ(四)。后町よりはじめて、君だちの御とのゐ所、御局どもをうかゞひ給ふに、藤壺にたち寄りて聞き給へるに、御前の方に箏の琴ひき、涼琵琶かき合せて、著き人々のことなれば著く聞かせじとて、こと聲をしらべ、例の聲をかへて彈けど、(五)勞ある人の御耳なれば、ふと聞き知りて入り給ふ。仲忠見つけられて、すべなき心地して、強ひて隱るれど、おとゞ見つけ給ひて、兼雅「召せば、など斯く(六)てはものするや、參られよや」と宣ふ。仲忠、「やがてまかで(七)にけりと奏せさせ給へよ。只今、みだり心地、物に似ず、惱ましくて、え御前にさふらふまじ」おとゞ、兼雅「見苦しき人にもあるかな。

求めさせ給ふめるは」仲忠、「さらば、あなかまや」涼、「大將のおとゞ、(一)召す使にさされ給ひつめるは。(二)それをばすまひ給はじかし」仲忠、「今宵は、親も子も知らじ」(三)涼、「御前にて御琴賜はりて責め(四)そせさせ給へるに、困じにたりや。吾が君の御徳にこそまかり出でぬれ」仲忠、「仲忠が徳には、さのみこそは嬉しけれ(五)」など物語しつゝ、内より、浅香の折敷どもに、肴いと警策にし出だされたり。中將、涼、「いとねたき事たゞ一つ、涼が今日あるかな」仲忠、「何事ぞや」(六)いらへ　涼、「今日かならず參り給ひなむと思ひつるに」仲忠、「それや、(七)何かねたき事ありや」(八)涼、(九)「この相撲の左の並則が(一〇)勝ちつるほとのやとたひ仕うまつりつるをなむ(一一)おはしますと(一二)用意しつる所なむあひつるはらへをこそすなれ、ことなるかみとも思はぬものを、涼のねたきことも言ふを聞召し(一三)入れぬは、げにそれだにあらぬ御心なむめりかし」など聞ゆ。仲忠、「仲忠も然ぞありつるや。笙のふえの調のほどよ」など言ふ。藤壺「こゝにてやは、たゞ今聞かせ給はぬ」

〔語釋〕
(一)兼雅
(二)父が呼びに來たら背くわけにはゆくまじ
(七)誤あらん歟
(九)こゝの涼の詞誤脱多しと見えて解し難し

〔考異〕
(三)知らじ—知らず
(四)責めそせさせ—責めにせめさせ
(五)嬉しけれ—嬉しげなけれ
(六)いらへ—いて
(八)涼—ナシ
(一〇)勝ちつるほとのやとたひ—勝ちつるやうのことゝたひ
(一一)おはしますと—仲忠おはしますと
(一二)用意しつる—よういひつる
(一三)はらへ—はうへ

り所(一)は知り給へりや」大將、兼雅「只今までさふらひつるを、まかでやしぬらむ、さふらはずなむ侍る」上、朱雀「さらば召しに遣はせかし」大將、兼雅「まかで侍るとも、さるは見えざりけるを、怪しくなむ聞えさせ(二)侍りぬる。源中將朝臣もさふらはるるを、もし琴仕うまつるべきことや仰せられつらむ。さ承りてか、逃げぬらむ。いと怪しきものなり。琴の事といへば、跡を絶ちて逃げ隱るゝものなればにや。しばし御琴どもをかくされ、(三)涼の朝臣もさふらはず、まかる由、(四)言ひ散らしてかくされよ。(五)あいなうやがて(六)(七)まかでさせらるまじ」など宣ふ。涼立ちて、たゞ氣色ばかり、御前近きわたりにて、賴澄の君にあひ給ひ 涼「涼はまかでぬ。もし召おらば、「御前にて琵琶仕うまつりつるに、俄かにけざう(八)して」と奏し給へ」と言ひつけて、仲忠聞くばかりにも言はで、(九)これも藤壺にまゐりぬ。

仲忠、「彼は誰そ」といふ。涼「涼」といらへて言ふ、涼、仲忠おはせぬ(一〇)といとにくめり。(一一)涼とて、秋風にもなし給ふかな。此處にこそ隱れられたりけれ。只今切に

〔語釋〕

（六）誤あるべし

（八）「けざう」は「氣上」歟

〔考異〕

（一）所は—「は」ナシ

（二）させ侍りぬる—させぬるを

（三）といへば—いへれば—いへば

（四）由言ひ—由を言ひ

（五）かくされよ—かくされば

（七）やがて…涼—はたやがてまかでむ涼などのよきことゝ

（九）言はで—言はせて

（一〇）おはせぬと—おはせねど

（一一）にくめり—よくにくめり—よくふくめり

〔語釋〕(五)仲忠の隨身の舍人はまだ歸らず居る

〔考異〕(一)風と—ものと

(二)音ならむかし—おもとにならむかし—おとにならむかし

(三)荻—萩

(四)思さる—おほせらる

「吹き來れば萩の下葉も色づくをむなしき風(一)といかゞおもはむ

まめやかにも見えずかし」中將、仲忠「それは音ならむかし(二)」とて、

藤壺うち笑ひ給ひて、

仲忠 秋風の荻(三)の下葉を吹くかぜに人まつやどはことさやぐらむ

藤壺 まがきなる荻のあたりを吹く風のいざやそよともいかゞこたへむ

中將、仲忠「いでやもどかしくこそあれ。

吹きわたる下葉おほかる風よりも我をこちてふ人もあらなむ

と聞ゆるほどに、仁壽殿より仲忠をせめて求めさせ給へど、更になし。退出やしぬる、と思さる(四)。陣にもまかづとも見えず、隨身(五)はあり、と聞召して、强ひて求めさせ給ふ。朱雀「たゞ今、左近の幄にて、になき箏の聲々いたすなりつるを、世にもまかでじ。まかでにたらば召しに遣はせ」など仰らるれど更に無し。上、右大將に、朱雀「仲忠の朝臣に、切に逢はまほしき事なむある。更に無しとや。そこにあ

〔語釈〕
(一)空とぼけるなどの意歟
(三)「といて」は「といひて」歟
(五)古今集「思ふとも戀ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆくとくる下紐」
(六)伊勢物語「我ならで下紐とくな朝顔の夕かげまたぬ花にはありとも」の歌によれる歟
(七)役にの意。「やう」一本「えう」

〔考異〕
(二)いなや—いらへ
(四)なかりけり—なかめり
(八)無うは—ながうは

そらめ(一)におはするかな。いなや、(二)君を聞ゆるにはあらず。あいなき垣下かな」と(三)いて、仲忠「世の中に侘しきものは獨ずみするに勝るものなかりけり。吾が君や、思し知らるらむ、と聞ゆるは理なかりけり。(四)今は「結ふ手もたゆく解くる下紐」(五)と聞えさするも、いとなむ効なき」あて宮からうじて言ひ出で給ふ。あて宮「下紐とく(六)るは朝顔にかといふことある」中將、仲忠「同じくふかば、此風も物の(七)やうにあたるばかりになりなむ」とて、

仲忠「旅人のひもゆふぐれの秋風は草のまくらの露もほさなむ

涙のかゝらぬ曉さへなきこそ」藤壺の御いらへ、

あて宮「あだ人のまくらにかゝる白露は秋風にこそ置きまさるらめ

忘れ給ふ人々も無うは(八)あらじかし」中將、仲忠「まだこそ無けれ、

この葉をも宿にふるさぬ秋風のむなしき名をも空に立つかな

著きこともあらじものを、何れかあだ人ならむ」藤壺、

〔考異〕
(一)聞ゆれ—聞ゆなれ
(二)けふは—ふるは—けには
(三)晴れみ晴れずみ—それが晴れずのみ
(四)いと—ナシ
(五)過ぎしは—過ぎしを

そ言ふなれ」中將、仲忠「それは嵐ならむや」兵衛、「されどまかぜとこそ聞ゆれ(一)」中將、仲忠「されど、今はみな、木枯になりにたりや」兵衛、「うべこそは、聲の空に聞えけれ」中將、仲忠「まづさきに立つとてなむ」兵衛、「春頃より聞えざりつる御すきぞかし。いかでならむ」中將、仲忠「秋霧のけふは(二)いかゞ聞えざらむ」兵衛、「晴れみ(三)晴れずみあらむこそ見苦しけれ」中將、仲忠「そよや。盡きせぬこそいと(四)侘しけれ」兵衛、「宿かす人はあらむを、あいなき御事なりや、などなむ」中將、仲忠「されど、東宮よりはかへさるめるを」兵衛、「それは雲の上には御やどりありとてなむ」中將、仲忠「それをまかり過ぎしは(五)、月かげにも御覽じけむ」兵衛、「それこそは白雲なれ」中將、仲忠「いでまことは、まめやかなる事をこそ聞えさせめ。月日などはこえこそ侍れ。え思う給へ定めぬことの、年月に添へてまさるをば、如何せむ。つひに御覽じ知らじとやすらむ」兵衛、「此頃は月に添へては思ほしえずやあらむ、晦になりにけるは」仲忠「いで、偖は有明も著からむかし。怪しく、まめごと聞ゆれば、

ぜずなりぬるかな。さるは、必ずまうのぼり給へらむ、と思ひ給へつるを、同じくいたす相撲といへども、いと労ありてし侍りつるは、さふらひ給ふらむ(一)、と思ひてこそあれ。御覧ぜざりけるこそ、いと夜の錦の心地すれ」兵衛「此處にてやは、仕うまつり給ひて御覧ぜさせ給はぬ」仲忠「いで何かは、あふてにしなし(二)給はば」など言ふ。

かくて物聞え給ひ、萬のことを言ひ居たれば、藤壺(三)、兵衛していらへさせ給ふ。中將、仲忠「高麗人などこそ、御通辭はありといふなれ。まかり渡る(四)とも思はぬに怪しくもあるかな」いらへ、「されどもこはつくり(五)(六)、はたあそばす(七)、上手におはしませばにこそあれ」など言ふをりに、夕暮になりぬ。秋風いと涼しく吹く。中將、

秋風はすゞしく吹くを白たへの

など、お前なる箏の琴(八)かき鳴らしなどす。兵衛、「されば、頼み聞ゆる人もあらむか(九)し」中將、仲忠「此處ならでは、何處をかは知らむ(一〇)」兵衛「されど、「野にも山にも(一一)」とこ

〔語釋〕
(一)あて宮が見て居らるるならんと思へばこそ
(四)自分は高麗へ渡りたる覺もなきに
(五)此處誤脫あるべし
(一一)古今集「いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ」の歌歟

〔考異〕
(二)あふてにしなし―あふくになし―あふてになし
(三)藤壺―上
(六)こはつくり―こよつくり
(七)あそばす―あそびす―あてはす
(八)箏かき―箏をかき
(九)かし―かしな
(一〇)知らむ―しらべむ

〔語釋〕
(一)隱なるべし
(三)誤あらん歟
(五)あて宮
(七)引込み居るを諫めもせで其儘見過し居る仲忠にも罪はあるべし
(八)あて宮にあやかりて自分も其如き罪を犯すなるべし
(九)勝は言ふに及ばず左のものなり
(一〇)仲忠が居る方故負は定めし左なるべしと思ひたりと戲れ言ふ也

〔考異〕
(二)やうなきものは—ようなきもの
(四)聞ゆ—聞えて
(六)如何になど言はせ—如何がなど問はせ
(一一)醜げ—にくげ

此處にこそ、萬のこと過つべけれ」兵衞「益(一)(二)なきものは見えず、とか言ふなれば、何處にてかし給はざらむ」いらへ、仲忠「さりとて、あはせ(三)にあたならぬ人もあめりや」とて、御簾、御几帳の中にかくれて、長押におしかゝりて、たゞあて宮のお前にさふらひて、物など聞ゆ(四)、仲忠「今日上にまうのぼり給はぬ人は、いと罪深き心地こそし給へ。さるめでたき事の有難げなるを、御覽ぜて、なほおぼろけにはあらじかし」上(五)、兵衞の君して、「如何に(六)、など言はせ給ふ。(七)それ見過すも、罪無きにはあらずかし」仲忠、「時々さふらふにあえにたるにやあらむ(八)」とて、仲忠「まめやかには、然ばかり面白かりつるものを、御覽ぜずなりぬる」兵衞、「この頃なやみ給ふ事ありてなむ。何方か勝ち給ひぬらむ」いらへ、仲忠「何せむにか問はせ給ふらむ。左のつかさの中將には、仲忠侍らずや。(九)何方にかはあらむ」兵衞、「さればこそは、此方(一〇)にはあらじと思ほすめれ」いらへ、仲忠「心のうちはよき空言人なりけり」など言ふ。仲忠「いとこそ醜げ(一一)無かりつれ。いで、さもくちをしく御覽

〔語釋〕
(三)「東宮…御局に」は傍註の本文に紛れ入りたるなるべし
(六)我々が罪を負ふ事になるべし

〔考異〕
(一)斯く—ナシ
(二)思へば—思ひ
(四)あて宮の—ナシ
(五)隱るゝ時に—「時」ナシ

聲になして、仲忠とさぶらはゞ、仲忠の朝臣の仕うまつらむをうけたまはらばや、わづかに思ひ出で侍らむ。六十てうばかりこと手どもの多く侍らむ」と聞えてさふらふ。「涼の朝臣仕うまつらばこそは、仲忠の朝臣には「きしろひたる人仕うまつるに、これにかき合せて仕うまつれ」とも言はめ。すまふまじき涼だに斯く(一)いふ。ましてかの生憎者は、まさに聞きてむや。よしおふせ見むかし」と宣ひて、朱雀「仲忠の朝臣」と御口つがら召す。仲忠左近の幄に、笛吹きせめて、勝ちたる遊し居るに、召す聲を聞きて、笛うち捨てて逃げかくれぬ。

隱れ所もおぼえず、いかで人に知られじと思へば、(二)藤壺に、東宮(三)にさぶらひ給ふ大將殿のあて(四)宮の御局に隱るゝ(五)時に、御たち、「こは何ぞの御かくれぞや」など笑ひ言ふ。仲忠、「只今煩らひにて侍り。えまかでで、せめて隱れ所を求むるに、ただ此處にさぶらはむのみなむ心安かるべき」兵衛、「あなむくつけや。過したらむ人をばいかでか隱さむ。(六)言ひかけもこそし給へ」中將、「外にあやまつ事も覺えず。

仕うまつるべきを、更にかけ離れてなむ思ほゆる」と人々にいふを、上(一)、聞召して、朱雀「涼の朝臣がすまひ(二)申すをすまはせてば、仲忠の朝臣のしてむをば責めじ」など度々いと切に責めさせ給ふ。かしこまりて、更に仕うまつらず。上、「手は(三)むけにおぼつかなく覺ゆとも、深きさえは、それに對ひて、手觸れしむれば、自然に思ひ出でらるゝものなり。いと、然言ふばかりにはあるまじかめるを、然りとも(四)かたへばかりは殘りたらむものを(五)とたいぐ\しう申すことなり。上にも常に好みてはせざりけれど、勞ある聲にもあるかな。まして常にたがひて、心に入りなむ時如何ならむ、と思ほゆるなむいと面白き。いと切なる夜に、うしろめたきことは言はじや」とて、お前なる六十てうを五箇にしらべて、朱雀「この聲をもて、をりかへし、たゞ彼の(六)ふき合せむにて、仕うまつられよかし。彌行が族の二(七)のはな、琴の音の出で來むかぎり仕うまつれ」と(八)仰せらる。涼「さらに、他手は思ひ出づることや侍らむ。五箇の手といふもの、かけても思ほえずなむ侍る。この調をかへり

〔語釋〕
(五)ものをと「と」衍歟
(六)ふき合せむにて「吹上にての手」歟
(七)二の—この

〔考異〕
(一)上—ナシ
(二)すまひ—辭し
(三)手は—「は」ナシ
(四)かたへばかりは—かたへはかた手は
(八)仰せらる—仰せられて

〔語釋〕
(一)脚末歟
(四)誤脱あるべし

〔考異〕
(一)ことはまた—ことよまた
(三)今また手と—ひき所ある手と

き人なれ。さりとも試みむかし」とて涼を召す。涼その日いとめでたく裝束きてまゐれるを、御前に召して仰せらるゝ。朱雀「今日なむ、例の節會に似ず、ものの興思ほゆる日になむあるを、今日累代の例になりぬべかめり。おもやう、今すこし珍らしからむ事しつけて、同じくば例にせむ。なほ今日の相撲のこと(一)は、またあるまじく、故事にせむとなむ思ふ。人のすまじき事をこそはせめと思ふに、涼の朝臣と、今一人となむある。朝臣の訪らひにものしたりし九日なむ、唐土にもなく珍らしき例になりにし。今日の相撲もなむ、また然る樣になさまほしき。かの仕うまつりし琴仕うまつれ」涼「年頃仕うまつりし琴、仕うまつらじと思ふ心侍りて、魂をもかへ、仕うまつりし(二)あなするゐをもすてて侍れば、更に(三)今また手といふものなむ覺えず侍る」と奏す。うへ、朱雀「さらに奏すまじきことなり。仲忠の朝臣、たび〳〵否び申すをだに許さで、けに山かつとも聞かじや」と仰せらるゝ。強ひて傍なる人にいふ、涼「いさゝか、(四)善うまれ惡しうまれ、思ひだに出でられば、

と心もとなくてある程に、上、朱雀「いと切に勞あり。左にも右にも、今日勝たむ方は、參れる人わかれて、そのつかさの人、官人の送せよ」と仰せられて、左右と爭ふこと限なし。かゝる程に、なほも左勝ちぬ。左より四十人の舞人、わかれ(一)て、人など數知らず出で來て、あそぶこと限なく、面白くあそびせめて、左大將土器とりて、並則に賜ひて、あこめの御衣ぬぎて賜ふ。限なくあそぶに、上 朱雀「ここらの年頃、嵯峨の院の御時にも、國知りての後も、見所あること無かりつるに、然こそいへ、只今の大將たち(二)の、例の人にたち勝りたる人にて心づかひせられけむ、いと勞あるかな。これに少し珍らかならむ筋(三)にして、かの九日の等しき相撲になしてむ(四)。「仁壽殿の相撲の節吹上の九日」とも言はせてしがな」と宣ふ。東宮、「然りとも、今日これはやと見ゆること、他人はえ仕うまつらじ。こくばくに並なく、天の下にある限のものの、今日につきぬるを、それに少し立ち勝らむことは、涼、仲忠、仲頼(五)なむ仕うまつりいたさむ」上、朱雀「その人々こそ、心こは

〔誤釋〕
(一)「わかれて」の下脱文あるべし
(三)「筋にして」は「筋そへて」歟
(四)「なしてむ」の「む」衍文歟
(五)「仲頼」は「行政」の誤歟、仲頼は去年遁世せり

〔考異〕
(二)たちの例の—たちの少し例の

なは言はれそめ給ひにたるこそあしかめれ(一)」とて取り給ひて、左大將に奉り給ふ。とり給ふとて、

正頼　消えはてど夏をもすぐす霜みればかへりて冬のかずぞ知らるゝ

右大將に奉り給ふ。取り給ふとて、

兼雅　花のうへに秋より霜のふるなれば野べのほとりの草をこそ思へ

かゝる空言恐ろしかりけり」とて兵部卿親王に奉り給ふ。取り給ふとて親王、

兵部　こきまぜて秋の野邊なる花見ればあだ人しもぞ先づ古しける

かゝる程に、こと上達部あまた(二)參り給ひぬ。たび〳〵御土器まゐりて、申の時ばかり(三)、今一手の相撲、こなたかなた更に出で來ず。上よりはじめ奉りて、上達部、親王たち、なほ氣色あるべき(四)と思して、強ひて待ちおはします。辛うじて、まづ左に竝則、右に伊豫の最手行經出で來る時、人々、「此度の相撲の勝負の定まらむこと、いと無期なり。まさに、竝則、行經が(五)遇ひなむ手は、とみに定まりなむや」

〔語釋〕

(一)浮名を立てられたるが恐しと也

(四)「あるべし」歟

〔考異〕

(二)あまた―いとあまた

(三)申の時ばかり―日申の時より

(五)行經が―行經と

あはれ(一)に苦しく思すらむ(二)、然てあらむ(三)に似げなかるまじき中にこそありけれ、など御覧じて、上、朱雀「御土器女御(四)に賜ふべき人無かなるを、げに無しや、そと(五)試みむ」とてまかなひの御息所に賜ふとて、

朱雀「つはものの藏に宿るはつらけれどかたはにみえぬ乙箭(七)なりけり

と見ゆれば(六)なむ咎め聞えぬ」とてまゐり給ふ。御息所賜はり給ふとて、

承香「かたはなる名の乙箭にも聞ゆれば思ひいらるゝ頭にもある哉

とて賜はり給ふ。東宮とりて、兵部卿の宮に奉り給ふとて、

東宮「秋の夜のかずをかゝせむ鴫の羽の今はおとやの片羽にぞせむ

同じくば然てあらむなむよからむ」兵部卿賜はり給ふとて、

兵部「大鳥(八)の羽やかたはになりぬらむいまはおとやに霜の降るらむ

思ほえぬことかな」とて太上(九)の宮に奉り給ふ。とり給ふとて、

忠康「夜をさむみ羽もかくさぬ大鳥の降りにし霜の消えずもあるかな

〔語釈〕
(一)朱雀が兵部卿の心を察する也
(三)此二人を夫婦にしても
(四)「女御より賜はるべき人」歟
(六)兵部卿にやるは惜しきものなれども不似合の中ではなし
(七)和訓栞に「矢にいふ弟矢なるべし鳥にもいふにや」といへり
(八)風俗歌の文句に「大鳥のはねに白き霜降れり」云々」
(九)「太上」は「彈正」の誤なるべし

〔考異〕
(二)思すらむ―おぼゆらむ
(五)無しやそと―なぞう

してあるまじき人の中にこそはありけれ、男も女も、かたみに見交してば、(一)げに
げに身は徒になるとも、我にてもたゞにては得在らじかし、見るに、男も女も、
深き勞ありけりとも、(二)いとゞ覺ゆるかな、かゝる中の、流石に色に出でて(三)はえあ
らず思ひつゝむことありて、その中に何でふ事を言ひつくすらむ、この中には、
世の中にありとある事の、(四)すこし見所聞き所あるは言ひ盡すらんかし、彼を聞き
見るものにもがな、と此彼をくらべつゝおはしまして、いかでこれに、(五)聊かなるこ
と言はせても(六)見せてしがな、と思す。物など聞食して、朱雀「今日のまかなひは、
人々に土器賜ふべき物ぞや。別いても、其處には(七)言ひ給ふ事や(八)あらむとする」御
息所、承香「まかなひの土器賜ふべき人こそさふらはざめれ」と聞え給ふ。兵部卿
親王え聞きすごし給はで、兵部「けふは土器の相撲の節にこそ」と聞え給ふ。帝わら
ひ給ひて、朱雀「されば、やがて倒れ(九)ぬる人もあらむ」兵部卿親王、「倒るゝ方にな
りなば、(一〇)かつなとなりなむかし」と聞え給ふさま、切に(一一)隱しある氣色なれば、

〔語釋〕
(五)承香殿をして兼雅に物をいはせて見たし
(六)「見てしがな」歟
(一〇)「勝つ名と」歟
(一一)承香殿に對する戀を

〔考異〕
(一)てば—「ば」ナシ
(二)けり—ナシ
(三)出でては—「は」ナシ
(四)事の—もの
(七)言ひ給ふ—いみ給ふ
(八)あらむとする—あらむずる
(九)ぬる—する

みかはしておはしまさむ。左は竝則をたのみ、右は行經をたのみて、大願を立てつゝ、勝たむことを念じ、さらに相撲とみに出で來ず。

斯くいふ程にまだ日たかし。その程に、御物の賄かはりて、承香殿仕うまつり給ひける。今は、夜さりの御物になりて、式部卿宮の女御あたり給ふを、この御息所、晝の御まかなひに、式部御息「なほ此度は(一)仕うまつり給ふ(二)。後は御讓りあらむことを仕うまつらん」とて、今日はなほ承香殿仕うまつり給ふ。夕影のほどになり、日のまかなひ仕うまつり給ふ。相撲の盛にきしろひて、勝負して、左右さまぐ\の相撲出だして仕うまつらせ、かぎりなく樂を仕うまつる。かく面白く、御覽ぜし程に、まかなひの御息所のかたち裝束、めでたく淸らなるも、え心とゞめて御覽ぜざりけるを、斯く軋ろひ挑みかはして出で來ぬほどに(三)、この御まかなひを御(四)覽じて、夕影に、あやしく物の淸らまさる程に、例よりも勝りてなむおはしましける。帝、この君(五)の御名立ち給ふ兵部卿の宮に御覽じくらべて、けにはたゞ(六)(七)、え見過

〔語釋〕

(一)式部卿の宮の御息所が晝の御賄に當れる承香殿に對して云々といひて役を讓りたりといふ意なるべし

(二)「給ふ」は「給へ」歟

(四)「御覽ずるに」歟

(五)承香殿に浮名の立てる

(六)以下朱雀の心。「げにはたゞ」は「げにはた」歟

〔考異〕

(三)ほどに—「に」ナシ

(七)げには—けふは

（語釋）
（一）申上げたる事は九て
はづれても居るまじ
（二）「そらおぼれする」歟
（三）此處誤脱あらん歟
（六）勝ち越しの數なし
（七）「たしな」又「たゝな」
いづれにも解しがたし
（八）「さうに」又「さらに」
按「さふらふ」歟
（一〇）相手になるべき者
なくて
（一一）此處誤脱あるべし
（考異）
（四）きわは—きには—き
は
（五）かくし—かへし
（九）こゝばく—こくばく

るかな、とおぼして、仲忠のを御覽じて、帝わらひ給ふこと限なし。朱雀「仲忠の朝臣は、何でふ心得たるかは」と仰せらる。仲忠、「深くは知り給へざりつれども、はた奏（一）したらむ、こよなくあらずや侍らん」「かしこう空（二）おぼえする朝臣なりや」とて笑ひて止み給ひぬ。

今はみな、相撲はじまりて、左右のけしき言ひそして、勝負のかつき（三）（四）わは、四人のすまひ人出だして、かつかた一二のすまひかた一つとられ給へり。親王たち、上達部、大將、中少將、かくし（五）給ふ。十二番まで、こなた、かなた、互に勝ち負けし給ふ。只今は、此方にも彼方にも數（六）なし。今一番いたすべきになむ、勝負定まるべき。左に、たしな（七）下野の竝則、のぼりてさう（八）に。竝則が京にまう上ること三度。こゝばく（九）の年頃のなかに、一度は仕うまつれり。一度は、遇ふ（一〇）手なくてまかり歸りにき。天の下の最手なり。左大將のおとゞ、左の相撲、これに遇ふべきはなし、と思して、此度の相撲にぞ、勝負定まるべければ、（一一）せめて此方彼方に挑

兵部 籬よりなゝむらにほふ女郎花野べはいづれもさもや待つらむ

と書きて、右大將(一)のおとゞに奉り給ふ(二)。されど人知れぬ(三)(四)心一つに思しゝ(五)ことなれば、上に氣色御覽じたらむも知り給はねば、何でふ心ならむ、と思しながら、

兼雅 女郎花いやしき野べにうつるともよもぎはたかき君にこそせめ

とて、左大將のおとゞに奉り給ふ(六)。あやしく、只今の御まかなひには、我が御息所こそさふらひ給へ、その折にしもかく宣ふは、思す所や(七)あらん、とて、

正頼 二葉より野べには植ゑぬ女郎花まがきながらを老のよは經よ(八)

とて、仲忠の宰相中將のかく(九)さふらふに取らす。仲忠、うち見るすなはち、勞の深きあまりに、(一〇)思ひ寄りてかく書きつく、

仲忠 撫子をならべておほす女郎花植ゑてや(一一)花の親とたのまむ

と書きて參る。上御覽じて、いろ／＼に心を御覽じ解きておはしますに(一二)、兵部卿親王、承香殿を思したり。右大將のを御覽じて、怪しく心得たることをも宣ひた

〔語釋〕
（一）七群か
（二）男は誰も仁壽殿に心なきものはあらじの意
（三）仁壽殿に對する戀は
（六）正頼の心
（八）帝に終身仕へよの意
（九）「かく」は「ちかく」の誤歟
（一〇）帝の御歌の意を推量して

〔考異〕
（四）人知れぬ—人知れず—人知らぬ
（五）思しゝ—思す
（七）所や—「や」ナシ
（一一）植ゑてや—植ゑては
（一二）おはしますに—おはしまさす

情あらむ草木、花ざかりにも、紅葉ざかりにもあれ、見所あらむ所の夕暮などありて、行く先を言ひ契り、ふかき心言ひ契らせ、かたみに哀ならむことを心留めてうち言はせ、をかしき事語(一)らはせむに、怪しうはあらじ、なほ聞き見む人、目とゞめ、耳とゞめ見(二)ざらむやはと見えし、さて在らせて聞かばや、など思しつつ、守りおはしますに(三)、賄うちしなどし給ふにも、いと勞々しう、まことに大將(四)の相撲の事などおこなひ給ふにも、いと心深きらうの見ゆれば、(五)あやしく似たる人(六)の心樣にもあるかな、と御覽じて、御前に、いと面白き女郎花の花のあるに付けて、外にさし(七)出だし給ふ。

(八)朱雀 うすくこく色づく野べの女郎花植ゑてや見まし露のこゝろを

と書き給ひて、朱雀「これが心、見解き給ふ人ありや」とてうち出だし給へば、兵(九)部卿親王、とりて御覽じて、心得たまはず。されど御心にも思す(一〇)ことありければ、(一一)知らず聞えに斷くなむ、

〔語釋〕
(二)「見」衍文歟
(四)兼雅が
(五)朱雀の心
(六)兼雅と女御との心
(八)女郎花は女御腹は兼雅を喩へたり
(一〇)承香殿に心ある也

〔考異〕
(一)事語らはせむに—わざをせむに
(三)ますに—「に」ナシ
(七)さし—ナシ
(九)とかき給ひて—ナシ
(一一)知らず聞えにかくなむ—知らず聞えにくゝなむとて

と限なし。皆相撲の裝束し、瓢花插頭(一)など、いと珍らかなる事ども(二)しつゝ、左右近衛の幄打ちつゝさふらふ。限なく淸らなる御かたちども、まして御裝束奉りて、みな其の日、男女、二藍をなむ奉りける。

かくて其の日の御まかなひども、御息所たち、一の女御、大將殿の仁壽殿、式部卿の宮の女御なり。これたゞ今、時の女御なり。仁壽殿の女御、朝の御まかなひに出で給ふ。更に本性の御かたち、此の御息所に似たるなし。花紋綾に唐綾かさねたる摺裳、搔練のうちぎ、あか色に二藍がさねの唐の御衣奉りてさふらひ給ふ。帝(三)そこばく(四)の人に御覽じくらべ給ふに、この御息所にかよひて見え給ふなし(五)。帝、この(六)御息所を、右大將(七)聞え給ふことありき、今も忘れ給ふまじ、と思して、さて(八)は如何あるべきと御覽じくらべて、內外に御目をくばりて御覽じおはしますに、いづれもこともなき男女にてある時に、上おぼす、この(九)女御と大將と、さて(一〇)あらむに、無かるまじき中にこそありけれ、これを同じく(一一)、勞あらん所にすゑて、

〔語釋〕
(一)「瓢花のかざし」なるべし、江次第に見えたり
(二)此邊の文錯誤あるべし
(五)似て見ゆる女なし
(六)以下朱雀の心
(七)兼雅が懸想せし事ありき
(八)此二人を夫婦にしたらば如何ならんと
(九)以下朱雀の心
(一〇)夫婦で居ても似合の中なるべし

〔考異〕
(三)帝―ナシ
(四)そこばく―そくばく
(一一)同じく―おなじ所に

ます。その相撲の日に、仁壽殿にてなむ聞食しける。(一)その日、朝の御まかなひには、仁壽殿の女御、晝の御まかなひには承香殿の女御、夜さりの御まかなひには式部卿の宮の女御、更衣十人、色ゆるされ給へるかぎり、色を盡して奉れり。更衣たち、皆日のよそひし、(二)(三)天の下の珍らしき綾の紋を、奉りつくし、御息所たち、まかなひ仕うまつり給はぬは、うなゐにてなむさふらひ給ひける。藏人もみな、今の帝の盛にものし給へば、この御時の藏人は、やんごとなき人の女ども、(四)あるは五節の藏人、雜役仕うまつる藏人も、さらに劣らぬ容貌(五)劣らぬ品の者どもにて、髮揚げ、裝束したる樣も、いとめでたし。十四人の藏人、七人は(六)五節の召の藏人七人は雜役の藏人なり。あるはかうぶり賜はりて、(七)命婦、色許されたる(八)(九)三人、内侍たち、許されぬもいとめでたくあり。すべて、彼處に仕うまつるべき女、かたちども仁壽殿にさふらふべき用意してあり。左右近衞大將よりはじめて、萬の(一〇)天の下の人、まゐり集り給ふ。左右近衞の樂人、おりとゝのへてさふらふ。面白きこ

〔語釋〕
(二)晝間の服裝
(四)女藏人なるべし
(六)五節の舞姫に上りてやがて見留められて女藏人をつとむる女なるべし
(七)「賜はりたる命婦色」「ゆるされたる上人内侍たち」歟
(八)禁色とて勅許なくては著られぬ色の衣を用ふることを許されたる
(一〇)誤あるべし

〔考異〕
(一)「聞食しける」—下に「内宴思ひたがへたるなるべし」の一句あり
(三)よそひし—よそひして
(五)劣らぬ品—さらに劣らぬ品
(九)色—上

〔語釋〕
(一)「かくて」衍文歟
(二)女一の手にて染めも裁ちもするならんの意歟
(五)脫文あるべし
(六)「大貳のおもと」歟
(七)誤あるべし
(一一)左近少將、正則の家令

〔考異〕
(三)こそ染めたち—ことごとくそめたち
(四)宣ふ—宣はす—宣はせまた—宣はすまた
(八)いと—ナシ
(九)御ほに—御ぞ—御はて
(一〇)は—ナシ
(一二)仰せ遣はせにけむ—仰せにつかはせてけむ—仰せにつかはせうけむ

㊄ 仁壽殿の相撲の節會。仲忠琴彈くべき勅を受けてあて宮の局に遁け入る。搜し出さる。母俊蔭女を迎へ來るべき勅を受く

ふ。こゝは大將殿、宮などおはします。國々より絹いとおほく持て參れり。(一)かくて宮、おとゞ、國々より參れるきぬ御覽じて、女二「相撲の節に仁壽殿、藤壺の御裝束、いかで淸らにして奉らむ」おとゞ、正賴「論なう、御まかなひに(二)こそ染めたち給へ。さるは心して善くせられたらむぞ善からむ」女二「御裳などは(三)摺らせたり。唐の御衣どもぞまだせぬ」など宣ふ(四)。大殿の其の日奉るべき御衣のこと、(五)御たち二十人ばかり、薄色の裳著てあり。うなゐども多なり。唐の御衣など染めさせ給ふ。御紅ぞめは、擣物などせし所の別當、大貳(六)お許、くら人より下仕などあり、いみじく物染めさわぐ。政所に家司たち(八)いと多く著きたり。(七)如何にぞ。(九)御ほにどもは(一〇)、例の數さふらふや」義則(一一)いふ、「御ほには、早稻の米を仰せ遣はせにけむ(一二)。今年は、早稻の米いとおそき年なり」と言ふ。

かくて相撲の節明日になりて、內裏にいとかしこく、賄にあたり給へる御息所、更衣たち、皆まうのぼり給ふべきことを思しつゝ、手つくしたる御化粧をしおはし

〔語釋〕
(一)第十三女、女一腹
(二)第十四女、女一腹
(五)正頼の娘ども
(七)あて宮
(九)げす宮

〔考異〕
(三)こそは—「は」ナシ
(四)見給はむに—見たうばむに
(六)けしうもあらず—人にも似ず
(八)には少し氣劣り—にをかしげ劣り

生したるものを」正頼「さて此のそで(一)こそ、げす(二)こそをば、如何すべき」女二「それを、兵部卿親王、右大將殿にはとこそは(三)思へど、いとゞいみじう思ひ給へる、仲忠の中將の母あるを如何にせむ」おとゞ、正頼「いづれを如何にすべきことぞや」女二「なほ見るに、そでこそは、右大將の(四)見給はむによく、げすこそは兵部卿の見給はむにこそは善からめ」おとゞ、正頼「かしこうも宣ひ合せけるかな。そでこそは、いとよく、容貌も心も右大將にこそ作りあはせたれ。げすこそはいといかめしくて、好たる所こそあめれ」と宣ふ。宮、女二「(五)この人々いづれかはいと見るかひなく物しくはある。そが中に今こそは(六)けしうもあらずこそは生ひ出でたれど、なほ(七)藤壺(八)には少し氣劣りたるをや。あてこそは、怪しく、こゝ彼處ともなく、おしなべて目やすくこそものし給へ」など聞え給ふ。

畫詞 こゝは左大將殿、宮、もの聞食しつゝおはします。君だち皆おはす。仲の大殿には、(九)十四の君よりはじめ、あなたの御腹の若君、みなわたりて涼み給

〔語釋〕
(一)我が一門以外に出づる事はなからんと思へど
(四)誤ならんか
(五)我が聟に相應なりとは思はれずとの意歟
(七)「覺えね」なるべし
(八)妻の里で世話をやきて
(九)世話やく餘地なくして
(一一)涼をほむる也
(一二)仲忠を今宮の夫にと思ひしかど帝の仰ありし故涼にしたりと公表すべし、「頭」は「藤」なるべし
(一三)「らるれば」なるべし
(一四)「頭」は「藤」なるべし

〔考異〕
(二)藤中將—藤の中將
(三)二人子—ひとつ子
(六)ふさひには—ふさいに
(一〇)勞り—勞る

宮、女二「仲忠をば、誰にか上は仰せらるらむ」おとゞ、正頼「いさや。誰にと思すにかあらむ。思すことありと仰せらるれば、それもこの筋は離れじ(一)、とこそ思ゆれど、なほ正頼は、この藤中將(二)こそいとほしけれ。世の常の人にもあらず、めでたき公卿の一人子(三)にて、萬のこと心もとなからぬ、此世の人の限なくあらまほしきになむ。源中將は、いと目もあやに、ひとつ(四)ものなりと見ればこそ、ふさひには(五)(六)覺え(七)ぬ、必ず人々思ふ所あらむと思へば。人の聟といふものは、若き人などをば、本(八)家の勞はりなどして立つるをこそは、面白き事にはすれ。勞り所(九)(一〇)もなくて、本家の恥かしく物せらるゝなむものしき。さるは、(一一)いと見所ある人にこそあれ。この二人の人見る時にこそ、眼五つ六つはほしけれ」と宣ふ。宮、女二「それは、頭中將を(一二)と思ひしかど、然ればなりと人には知らせむかし」おとゞ、正頼「人のことには、然仰せられば(一三)なむとは如何語らむ」女二「いざや、如何せまし。この今こそを、あて宮の御代にと、人々宣ふこそ苦しけれ。ちひさくより、頭中將(一四)の爲にと、勞はり

るこそは、この中將はいとかしこけれ」など宣ふ。宮、女二「いで、この中將、(一)この中に入れてしがな」正頼「今こそをこそは、(二)然思ひ侍れど、上、仰せらるゝこととある(三)なり。「なほ今こそは、涼の朝臣にものせられよ。仲忠は(四)我思ふことなむある。涼(五)にと思へど、そうの(六)源氏なり。同くば仲忠をとなむ思ふ」と、たび〳〵かの吹上の九日にも、仰せられありき」女二「さば源中將も、(七)仲忠の朝臣にいづこかは劣れる。更に劣りまさりたる事なき人にこそあなれ」おとゞ、正頼「源中將は、勢こよなく勝りたなり。さりともけをとるは、(八)人柄はいと等しきを、心恥かしげさと才とは、藤の中將はなほ勝りたらむ。正頼が思ふは、あてこそに心ありし人々、これ(九)をだにと、兵部卿親王、右大將宣ふを、源中將にものしたらば、(一〇)勢によりものしたるにや、と思はれむなむいとほしき。正頼は、更に勢もとめ侍るにあらず。たゞ此の世に幾多、容面、勢(一一)ある人のなかにも、勝れたる人、(一二)この二人(一三)こそはあれ、これ(一四)一人は、と思ふ本意なむある、仲忠の中將をば、斯く仰せらるめれば」

〔語釋〕
(一)聟にしたし
(二)第十女今宮を仲忠にやりたしと思へど
(四)我が聟にせんと思ふと也
(五)我娘を涼にやらんと思へど
(六)「そう」一本「ろう」いづれにても解しがたし
(七)涼
(九)今宮をでも貰ひたしと
(一〇)今宮をやりたらば
(一三)涼仲忠の二人
(一四)二人の中一人は我が聟にせんと

〔考異〕
(三)あるなり―ありや
(八)けをとるは―けふおとるは―けふはをとるは
(一一)勢―ナシ
(一二)人この―人のこの

勝りにけり。さる逸物(一)の中將に劣らぬ聲にかき合せなどするに、更にもどかしからずや」宮、女ニ「如何に、かの中將の思ふらむ(二)氣色は、如何ある」おとゞ、正頼「それをなむ見給へつる。少ししづ心なき氣色なむ見えつる(三)。見なしにやあらむ」宮、女ニ「あはれと聞く人の心にこそありしか。いと切に思ひたるものから、更にあはれなる氣色は見えず、さりともはた、然思(四)ふらむとは見えつゝ(五)、同じう走りかきたる文の、おいらかに人見るともかたはにもあらず、流石にいと哀に見えしなり。いと戀しき(六)宰相の中將の文、いと久しく見えねば、思ひ出でられていと戀しくなむ」おとゞ、正頼「今も(七)かしこには絶ゆまじかめり。今日も見給へつれば、御前にきやう(八)仕うまつるとてさふらはれつるに、こともなく走り書いたる手の(九)、薄葉に書きたる、懐よりすでに見えつるを(一〇)、見せよやと戯れ心に乞ひつれど、笑ひて出ださずなりぬ。なほ氣色ある文にやあらむ。東宮はた、仲忠今も昔もさる心あなりと聞召したれば、返事(一一)せられなどするをば、切に宣ふまじかめり。理と許された

〔語釋〕
(一)仲忠をいふ
(二)あて宮に對して
(四)以下仲忠のあて宮に對する態度
(七)仲忠があて宮に文を通はす事は今もあるべし
(八)饗歟
(一一)あて宮が返事するをやかましくは言はれぬ樣なり

〔考異〕
(三)見えつる見なしにやあらむ—見なしにやあらむ見えつる
(五)見えつゝ—見えつる
(六)戀しき—「き」ナシ
(九)手の—ナシ
(一〇)見えつるを—「を」ナシ

㊃ 正頼夫婦聟擇みの相談

〔語釋〕
（二）兼雅
（三）仲忠
（四）正頼
（五）此上脫文あるべし
（六）「垣下仕れ」歟。「しか」を「しる」とかける本もあり
（七）仲忠

〔考異〕
（一）三條殿—三條院

參り給ふ。上より藏人御ともに奉れ給へり。女御まうのぼり給ひぬ。

畫詞 こゝは御息所、上などおはします。大將の君、御子ひき連れて三條殿（一）へかへり給ふ。

右大將（二）は、宰相の中將（三）もろともに、殿へ歸り給ひぬ。こと人は、あるは宿直にさふらひ給ふもあり、里にまかで給ふもあり、左大將（四）の君もまかで給ふ。御孫も御子どもも北の大殿におくり奉り給ひてなむ、彼方此方へおはしましける。

正頼「物語（五）し給へりける程に、上、仁壽殿にわたり給ひて、「此處になむものする。しか仕うまつれ（六）」とおほせ有りつれば、又そこに參りて、御物語など聞えさせつるほどに、夜更くるも知らずなりにけりや」宮、女一「いかに藤壺には何事かものし給ふ」おとゞ、正頼「上、局に物せられける。殊なる事もものせられざめり。例の遊をなむせられつる。つかさの宰相の中將（七）、御簾のもとにて箏の琴仕うまつりつ。あてこそは、琵琶をなむ少し掻き合せらるゝなりつる。こゝに物せられしよりも、少し

〔語釋〕
（六）迎への使を

〔考異〕
（一）うち―ナシ
（二）そよと―そこに
（三）所に―所を
（四）御むかへ―御むかへに
（六）をや言ふ―をやはいふ

仁壽いつとても秋のけしきは見すれども風こそけふは深く知らすれ
と聞え給へば、上うち（一）笑ひ給ひて、朱雀「されどまだ外にぞ侍る。
立ちながら内にも入らぬ初秋をふかく知らする風ぞあやしき
（二）そよと聞ゆる風なかりや」と宣ふ。左大將、正頼「それも如何」とて、
正頼外にたつと頼みしもせじあだ人の秋はいでても過ぐといふなり
と聞え給ふ。かくて其處にて日暮れぬ。上、帝わたり給ふとて、御息所に、（三）朱雀「今宵だにまうのぼり給へ。例の御むかへ（四）奉らば、還し給はむものをや。いざ諸共に」とて立ち給へり。御息所、仁壽「これも還しやすき御使になむ」と聞え給ひて、
仁壽「まことは何かは」とて、
仁壽「夏だにも衣へだてて過ぎにしを何しもあきの風をいとはむ
「おのれつらくて」とはこれを（五）や言ふ。あなかま」と聞え給ふ。朱雀「例のかへし給ふ（六）なよ。よし、さらば自らもよ」とてわたり給ひぬ。かくて上達部、みな御ともに

なむ。九日も、吹上を思う給ふれば、いとこそ勞あれ。それより後は、五日に(一)は劣るとなむ思う給へらるゝ」上、朱雀「いとよう定め給ふなり。思ひし如なり。さらに年の内の節會ども(二)見るに、五月五日にます(三)節會なしとなむ思ふ。花橘、柑子などいふものは、時過ぎて古りにたるも珍らしきもの、ひとつに(四)交るなむいとをかしき。そこに勝すもの無くなむ。節する時の馬弓、競馬も、さらに見所なしかし」など笑ひ給ふ。

かく御物語し給ふほどに、七月十日ばかりのほどの夕日影なほいと(五)暑さ盛なり。風なども吹かずあるに、人々、「すこし涼しう、風も吹き出でなむ。さるは、けふ秋立つ日にこそあれ。著く見ゆる風吹けや」など上達部宣ふほどに、夕影になりゆくまゝに(六)、めづらしき風吹き出づる時に、上(七)斯くぞ出だし給ふ、

朱雀 珍しく吹きいづる風の涼しきはけふ初秋と告ぐるなるべし

と宣ふ。御息所、御簾の内ながら、仁壽「げに例よりも今日は」とて、

(考異)
(一)五日には—五月に
(二)節會ども—節會—節供ども
(三)ます—まさる
(四)ひとつに—ひとへに。按、珍らしきもひとつに歟
(五)いと—ナシ
(六)まゝに—ナシ
(七)上—ナシ

らめ」と宣ふ。東宮、「げに、おなじくば出で來ん節會どもを、なほ御時の珍らしき、累代(一)にもしてしがな。かの吹上の九日(二)、すこしよしある九日にはなりけむ。又さやうならむこと侍らば、よからむかし。年の內、出で來る節會の中に、いづれいと切に勞ある、定め申されよや」大將、「正月年の內の節會どもはいづれも勞あ(三)り。朝拜などきこしめす時は、いと面白く、內宴をきこしめすもいと勞ありて(四)面白し。三月の節會は、花とく咲く時はいと勞あるほどなり。(五)さて、なほことなる花などは咲かぬ程なれども、怪しくなまめきて哀に思ほゆるは、五月五日なむある。短き夜の程なく明くる曉に、(六)時鳥のほのかに聲うちし、(七)さみだれたる頃ほひのつとめて、菖蒲所々にうち靡き(八)たる、香のほのかにしたるなむ、怪しく興まさりて思ほゆる。菓物などの盛にはあらぬ程なれど、(九)はつかに時過ぎ(一〇)たる物など(一一)のあるなむ、いと勞ある。節供などきこしめす時はた、更にも增すものなし。七月七日、をかしうはあれど、殊なる面白きことは無くなむある。彼もありさまに(一二)

〔語釋〕

(一)累代の例にもしたし
(二)吹上下卷にあり菊の
(一〇)盛を過ぎたる菓物
(一二)次第によりて面白くもありの意歟

〔考異〕

(三)勞あり―勞ありて―勞あれど
(四)ありて―「て」ナシ
(五)さて―ナシ
(六)時鳥の―「の」ナシ
(七)さみだれたる頃ほひのつとめて―さみだれたるつとめて―さみだれたる頃ほひの同じ日のつとめて―さみだれたる頃同じ日のつとめて
(八)靡き―ふき
(九)はつか―わつか
(一一)などの―「の」ナシ

りなむ」御息所、仁壽「今よく思ひ給へ定めてを、里に(一)などゆるし申されば」上、朱雀「その御里こそ、世に(二)そしり給はざらめ。さては頼もしかなり」など聞え給ふ。御臺四つたてて、晝の御物きこしめす。

「(三)まかなひにもわたらせ給へりき。からうじてこの頃なむすこし怠りて侍る」うへ、「いとおしきこと。更になむ知らざりける。如何にあやしき心と人々思ひけむ。空言なむいとあしき事なる、いかゞ人のたゆまさるらめ」など宣ふ。

かゝる程に上達部親王たちなど仁壽殿に參り給ふ。殿上人さふらふ限まゐれり。左大將三條院より御菓物御酒などとり寄せて、その御局に(四)多くの上達部親王たちなどおはしまして、御酒まゐりなどして、(五)御物語、上も東宮も、朱雀「久しくよしあるわざせず。やう〳〵風涼しく、時もはたをかしき程になりゆくを、世間のことも忘れ、心の中ゆくばかりの事も、この秋(六)してしが。あそむさだめ給へ。人の歡といふ物(七)ははかなきものになむ。命あらむ限こそ、あらむことを見つゝもあ

〔語釋〕

(一)退出を御許しあらば里にて熟考の上申上ぐべし

(二)正頼邸では仲忠を謗るものはあるまじ

(三)線の中は他の所の文の攙入せるなるべし

(四)仁壽殿の御局

(五)「御物語などし給ふ上東宮に久しく歟」こゝに東宮突然出てたり、上に脫文ありと見ゆ

〔考異〕

(六)してしがあそむ―してしが〳〵なむ―してしかなむ〳〵

(七)物は―「は」ナシ

な思しそ。然らばえもどき宣ふことあらじな」御息所、仁壽「如何に(一)此處には、ともかくも思ひ給へむ。萬のこと、宣はせむにこそは」御いらへ、朱雀「されど、其處に許し給はゞとこそ」いらへ、仁壽「(二)こゝには聞えさせむ。何かは、然てあらむに、人などは、似げなくなど言ふことは無くやあらむ、など思ひ給ふれど、位などまだ高き人にもあらねば、なほ暫しはかくてものし給へ、となむ思ひ給ふる」帝、朱雀「などてか、女のたゞにて盛過すことのあらむ。然るべき人なくてある時にだにあぢきなきもの、(三)かくよき人を見ては、さて過すことのあらむ。(四)位は、な思ほしそ。まだ年わかき人なり。罪はまぬがれなむ。その程はた、(五)(六)世の人には劣らじ。なほ、(七)然思ほしたれ。世に謗られはあらじ」いらへ、仁壽「いでや。え思ひ給へさだめぬや」朱雀「(八)空洞をおぼし出づるにやありけむ。あなさがな。世にもどきあらむことは聞えじ。なほ然思したれ。(九)こよなき位にしなしてむ。たゞ今のみめよりも、斯く具したる才に、かたち心などもすぐれば、(一〇)たゞ今より覺えまさ

〔語釋〕
(一)「如何に」は「いかゞ」なるべし
(二)迫りて問はるゝ故意見を述ぶる也。今宮を仲忠に妻せたりとも不似合なりとの謗はあるまじけれど仲忠未位卑しければ彼が昇進を待ちたしと也「こゝには」は「さらば」の誤なるべし
(三)「ものをかくよき」歟、「ものからかくよき」とかける本もあり
(四)「あらむやは」歟
(五)仲忠の地位をいふ
(七)今宮を仲忠にやる事に極めよ
(八)俊蔭の卷にある仲忠の空洞の生活
(九)仲忠を
(一〇)「すぐれたれば」歟

〔考異〕
(六)世の人には劣らじ—世に人にはおとさじ

〔語釋〕
(二)吹上の下卷には「涼にはあてこそ、仲忠にはそこ一の内親王物せらるるを、それを賜ふと仰せらる」とあり
(三)正賴に
(四)仲忠が
(五)正賴が心を變へてあて宮を東宮へ奉りたれば仲忠が如何に思ふならむ
(六)あて宮の妹、あて宮に次ぎての佳人
(七)仲忠に勝る人はあらじ
(八)仲忠をほめていふ也
(九)仲忠は

〔考異〕
(一)いと—ナシ

いらへ、仁壽「さるは彼のあてこそも、見る所やありけむ、他人よりは、返事いと(一)せま憂くは思ひたらざりしを、かの仲忠も、然もや見けむ、いとあはれと思ひぬべきこと多くすめりしかど、まめやかには思はで止みぬめりき」上、朱雀「哀なることかな。かの中に通はされけむ文、いかに興ありけむ。かれを見ばや。涼の朝臣の吹上の濱にものしたりし時に、仲忠いと切に勞ありしかば、「なほあて(二)こそは仲忠に取らせ給へ」と、(三)大將にものする事ありしを、いと切に喜び(四)いふことありしかば、必ずとらせ給はむやと思ひしを、(五)志異なりければ、かく異なるを、如何に思ふらむ。天子空言せず、といふことは、無き世なりけり、とこそは思ふらめ。あやしく、心憎き所ありて、恥かしと思ふ人に、空言すと思ほゆるなむいとほしき。その(六)今宮をやは取らせ給はぬ。天下にいふとも、(七)え勝ることあらじ。(八)あやしく、見るに心ゆく心地して、世間の事忘るゝ人になむある。涼の朝臣、えこそ等しからね。なほ彼は彼として、(九)これは心殊になむある。まだ位なむ心もとなき。それは、

こそ物せらるめりしか。斯う宣ふからに、いとあしからむ。たゞ、言ひしが見所ありしかば、たゞ文走り書きたるが、心ある樣なりしかば、あはれなど思ひし(一)」なと聞え給ふ。朱雀「空言を宣ふにこそ。さらば疑ひ聞えん。なでふ空言にかあらむ、時々もの聞え、(二)今も有めるは」と宣ふ。御息所「いざや。さ思はるゝ心やありけむなど、著く見ゆることも無かりし。この東宮にさふらふが、(三)まだ里に侍りし時こそ、然思ふこともやあらむ、と見給へしか」と聞え給ふ。「それはた、然かし。いづれの世界にか、男とあるが、(四)彼處には言はぬが無かりし。(五)まつはりなき致仕の大臣、高基の朝臣さへ、言ふことありけむかし。これになむ驚きにし、(六)怪しくものせらるゝ人なりけりとは。そが中になむ、いと切にいふ人々ありと聞きかし。仲忠は、天下にめづらしき心あらむ女も、(七)彼だにすこし氣色あらば、忍ぶまじき人ぞかし。(八)それを如何に餘所に見ては、如何にあらむ、と思ふなむ、いと心憎くありがたき御心と、いよ〳〵思ほゆる。今もなほ(九)その心失すまじかし」

〔語釋〕
(一)此處誤脱あらんか
(二)兵部卿が仁壽殿に
(三)あて宮が
(四)あて宮に懸想せぬ者はなかりき
(五)正頼に負緣なきの意歟
(六)あて宮を不思議の人なりと思ひし也
(七)仲忠さへ其の氣ならば
(八)あて宮が仲忠の戀に應ぜずに居る所が感心なりと也、「如何に」重復せり一つは衍文なるべし
(九)仲忠の懸想は

こそ、人の上にても空言と思ほえぬ(一)」上、赤雀「あやしう、心惛くらうある人(二)なればこそ、さ見つゝある。他人は難からむかし。知りて惑はむ(三)ことは、其が中にもまた許す所なむある。かの兵部卿親王(四)は、同胞ともいはじ、すこし見所ある人なり。まづ打見るにも、かの君を女になして持たらまほしく、然ならずばわれ女にて向はまほしくなむ見ゆる。まして、少し情あらむ女の、心とゞめて、かの親王の言ひ戲れむには、如何はいとまめにしもあらむ、と見れば、理(五)(六)やとて、切にも咎めず、時々の氣色をば、ものとも思はれずかし。されど、罪まぬかるゝ事どもなむある。そが中に、御許の(七)、大將の朝臣(八)馴らし給はむ、切にも咎めざらまし。理なりと見る所ぞ、少しあらまし。さらに兵部卿親王、かへりて苦しき人なり。見む人に心とめられぬべき心ありて、吉祥天女にも、如何せましと思はせつべき人なり。それを、(九)すこし人に勝り給ふ所は、いとふかくなむ知り給はずなりにける、後は覺束なけれど」御いらへ、仁壽「あなうたて。(一〇)さる心やは見えし。(一一)他人を

〔語釋〕
(一)「思ほえね」なるべし、「おぼえぬ」とかける本もあり
(二)兼雅をいふ
(三)古今集「何かその名の立つ事の惜しからん知りて惑ふは我一人かは」
(五)仁壽殿の此人に心を惹かるゝは道理也と思ひて
(八)兼雅
(九)仁壽殿の他の女に勝れる點はあまり此親王に接近せざる所にあり
(一〇)兵部卿が我に懸想する樣子は見えざりき
(一一)他人を戀し居られし樣なり

〔考異〕
(四)親王は―「は」ナシ
(六)理や―理なり
(七)御許の―御許に

㊂ 朱雀院仁壽殿の局にて女御正賴等と物語。相撲の御會の評判

〔語釋〕
(一)懷胎
(三)古今「夏蟲のみをいたづらになす事も一つ思ひによりてなりけり」
(四)仁壽殿を挑む人多き樣なり

〔考異〕
(一)かくて―ナシ
(五)人あまたものすなり―さる人あまたものせすなりにし―さる人あまたものせすなりにしものし給らん。按「ものし給らん」は「ものから」歟
(六)御心地も―「も」ナシ
(七)いらへ―ナシ

(一)かくて七月朔日、内裏の帝、仁壽殿の大將の御息所の御局にわたり給ひて、朱雀「などか、昨夜藏人奉りたりしかど、まうのぼり給はずなりにし。あやにく、日頃たび／＼むかへ人をかへし給ふかな。もし思し怨ずることやある。あないとほし」御息所、「怨じ聞えさすべきことや侍らむ。まめやかには、日頃、暑氣にや侍らむ、あやしく惱ましく思ひ給へられてなむ、まうのぼり侍らぬ」朱雀「それこそは、まう上り給はゞ、さも思されざらめ。まこと、何でふ惱ましきぞ。もし例の(二)ことか」「あな見苦し。今は夜離をもよしとこそ思ほすらめと思へど「夏蟲の」(三)といふこともありや」朱雀「まことに此頃は人(四)(五)あまたものすなり。あはれ、習はぬ(六)御心地も思ほさるらむ。それをなむたゞ今聞きわづらふ。(七)いらへ、仁壽「誰にか負せられんとすらむ。怪しや。いまだ負せむやはある」上、朱雀「あじきなの相盗人や」いらへ、仁壽「更にこそ知り給へね。げに何事ならむ」朱雀「げに知り給はずや。つれなくなものせられそ。斯く宣はんからに、右大將疑はむ」御息所、「ましてこれ

〔語釋〕

(二)此處誤脱あるべし、「たゞこのごろ相撲の事をのみたの御心なく」と書ける本もあり

(三)前には連澄右近中將たる事見えず、祐澄のあやまりなるべし

〔考異〕

(一)竝則―竝則も

(四)かたち人ら―人々ら

經まうで來ざらましかば、左の竝則(一)まうで來たるに、はじめ、行經、竝則こそは定まりにしか。それらまうで來ぬかとて、いとくちをしかりつるに、嬉しくまう上りたり」など仰せらる。

畫詞　伊豫の最手、贄奉り蘇枋、沈など奉れり。相撲どもなどにも持たす。左大將殿には、仁壽殿、藤壺の御裝束のことし給ふ。これは、右大將殿に馬奉り給ふ。こゝは相撲人らあり。

その日頃は、左右の近衛の大將中將、たゞ(二)このごろ相撲のことをのみにてたの御心なく、日の近くなるまゝに、いそぎて日々に參り給ひ、そのこと定められなどす。(三)右近中將連澄、頭かけたり。平の維蔭、平中納言殿の太郎、元輔の君、權少將に藤原仲政。名高きかたち(四)人ら多なり。左近には、仲忠、涼、二人ながら宰相にて中將なり。少將に行政、左大臣殿の三郎、成濟、村方など、名高き人々なむ、その頃の左近中將にはものし給ひける。

〔語釋〕
（二）仲忠
（四）「左大將」は「右大將」の誤なるべし

〔考異〕
（一）何事をも―「を」ナシ
（三）用意して―かしこきは

相撲人どもは擇び定めてむ」と宣ひて、兼雅「いかで、饗を淸らにせむ。何事（一）をも珍らかにせむ」とて、大將たちは、我も〳〵劣らじとなむ思しける。その相撲の節の日、奉りて參り給ふべき御裝束ども、大將のおとゞのも、仲忠の中將の爲にも、限なく淸らにせさせ給ふ。北の方、きぬ、綾、多に取う出てせさせ奉り給ふ。
かくて中將（二）お前に參り給ひて、仲忠「仲忠宮に參らむと思ふを、え參らぬかな」大將のおとゞ、兼雅「なほ參りて、藤壺にもの申さば、惱ましさは止みなむ」仲忠「かの局には、すこし心してこそ、物は聞えめ。みだり心地のなやましく覺えむまゝに、ひがごと聞えては恥かしからむ」大將、兼雅「中將の用意して（三）、かの君に聞ゆる事のいらへなどせさせ奉るこそうるさけれ」仲忠「それも更に馴れ聞ゆることどもあらじはや」とて參り給ひぬ。
かくて左大將（四）殿も同じごと、この相撲のことを定めらるゝに、右の伊豫の最手まうのぼりたるに、おとゞいとかしこく喜び給ふこと限なし。兼雅「今年の相撲に、行

たれば、例よりまさると覺ゆる年なり。右大將殿も、「竝則まうで來たるを」となむ宣ふことのありし。彼方の下野(一)の最手、さきに竝則に遇ひたりし行經、まうで來ず。「さりとも、必ずまうで來らむ」となむ宣ひし。さらでも、左(二)には、いとこともなき相撲ども數多あめり。あやしく、例の左右(三)のとあるに軋ろひて、事々しきことあるを、一(四)のにはかうて果の場に出で來なむよからむ」など宣ひて、物いといかめしう、政所より調じて賜ふ。

かくて左大將殿(五)も、兼雅「論なう、今年の相撲は勝む方に、やがて佐(六)たちなどいまする事ありなむを、然る心まうけせむ。來ぬまでも、(七)然思ひたらむに負くるにても、何でふ事かあらむとする。俄にて惡かりなむ。心とゞめてし給へや。かづけ物など、多くまうけ給へ」と北の方に聞え給ふ。政所などに、かくの如くつゝくと(八)も限なく、清げなる打敷などの事ども、まうけさせ給へり。兼雅「左近(九)の中將たち、はた、勝負せむ程の樂仕うまつらせむこと。勝つ(一〇)ものならば、その遊び人ども、

〔語釋〕
(一)行經は伊豫の最手の由前に見えたり。いづれか誤なるべし
(二)「左」は「右」の誤なるべし
(四)「一のには勝たで」にてはじめには勝たずしての意歟。「かうて」を又「うかて」「うちて」など書けり
(五)右大將殿の誤なり、兼雅なり
(六)相撲の還饗に呼ばれて來る也
(七)來る積りで居れば
(八)「つゝくとも」は「いくつとも」歟
(九)「左近」は「右近」歟

〔考異〕
(三)左右のとあるに—左右のとりあるに。按「左右とある殿あるに」歟
(一〇)勝つものならば—かづけものなどは

二つ、殿の鷹飼にするゑさせて、かへる御廐の人に添へて奉れ給ふ。左大將殿、正頼「此の御鷹は、今一度わたり給ひて、今一つの鶚落してなむ賜はるべき」とてかへし給ふ。右大將、兼雅「兼雅は、岬(一)のほどより仕うまつり、そなたには、中島のほどより遊ばしゝに、この御鷹は」とてなむ奉れ給ふ。大將殿、正頼「情なき(二)やうなり、強ひて奉れば」とて、殿の鷹飼、高麗の樂して、鷹ども遊び取りてかへる鷹飼に、中將君(三)土器とりて、かぎりなく饗し給ひて、ほそなが添へたる女の裝束一よそひ賜ひて、かへし給ひつ。右大將、兼雅(四)「情は飽くまでおはすかし」など宣ひて、北(五)の方に、左大將殿に參りてありつる樣など、いと委しく語り聞え給ふ。

かゝる程に、左(六)大將殿に左の相撲いと多く參れり。おとゞ椅子立てて、簀子におはしまして宣ふ、正頼「ことし、右大將殿も、例よりは心ことに、今年の相撲仕うまつらすべき事なり」など(七)宣ふと、常よりも勞りてさふらへ。並則斯くまうのぼり

（語釋）
（一）鶚を射し時の事をいふ
（二）強ひてかへしては却て情なき樣なり
（三）祐澄
（四）正頼を褒むる也
（五）俊蔭女
（六）正頼邸
（七）「宣へば歟」

㊀　相撲の節會の準備

〔語釋〕
(二)丸ではづれたり
(三)竿にてさして取るが如くに
(四)正賴の廐の
(五)兼雅の
(六)「ぞ」衍文なるべし
(七)正賴の
(八)仲忠
(一〇)催馬樂の曲名

〔考異〕
(一)中てむの御心—あてむ心
(九)になく—になう

賭け給ひつ。右大將殿は、鷹屋にすゑていと名高き御鷹二つ、賭け給ひつ。まづ主のおとゞ遊ばす。これ御本意有りて、この馬奉らんの御心にての事なれば、ことに遊ばし中て(一)むの御心もなくて、たゞ鳥立つまじとばかりの程に心してあそばす。(二)更にもて離れたり。右大將のおとゞ、おいらかに立ち走り、遊ばすに、さ(三)すが如くに、食ひたる魚ごめに射落して池に入りぬ。興ずること限なし。この馬迎へして、御馬賜はり給ふ。(四)その御厩の別當、預り、二人あそびて、牽かせて參る。夜更けて右大將のおとゞ、この賭物の九寸の黑を引きかさねて、遊びてまかで給ひで、入り給ふ時に、仲忠、(五)殿の御厩の別當あづかり、寄人この馬を舞ひあそびて、かの大將殿の御厩人の手より、遊び取る。さてこの御馬を牽かせてぞ(六)參れる別當、(七)あづかりに、になく饗し給ひて宰相(八)中將土器とりて、(九)になく強ひ給ふ。夜一夜「その駒」(一〇)を遊びあかして、曉がたに、女の裝束一くだり、白張一襲、あはせの袴一くだりづつ賜ふ。かづきてかへり參るに、この殿の御鷹

〔語釋〕
(一)正頼の怪しむは紙の色合などよりいふなれば紙は有合せを用ひしならんと辯ずる也
(二)わざと老人めかして戯れ言ふ也
(五)弓の的なるべし
(七)鳥が射らるゝと悟らばの意歟
(八)正頼自らを戯れていふ也

〔考異〕
(三)給ふに—給ふべく
(四)馬の—馬を
(六)仕うまつらんや—「ヤ」ナシ

なせられそ。なでふ、里よりは、さる樣の御文は奉れ給はむ。心ばへあるべくこそ見えしか。いと著かりきや」仲忠うち笑ひて、仲忠「紙(一)をこそは、取り敢へず侍りけめ。仲忠はさらに、老(二)の世に、空言をなむしらず侍る」おとゞ、正頼「これを初にて、ならひ給ふに(三)こそはあめれ」など宣へど、言はず。かく遊びくらして、お前に馬槽立てて、御馬どもに秣飼はれなどするに、主のおとゞ、右大將の君に、馬(四)の奉らまほしく思さるれば、張(五)革たてさせ給ひて、みな君だち、御弓あそばす程に、中島なる五葉に、鶚池より立ちて、三寸ばかりの鮒をくひて降りけるを、主のおとゞ、正頼「かれ射給へらん人には、この西の馬槽の馬十疋ながら賭けんや」と宣ふ。右大將、兼雅「みな遊ばせ。兼雅も仕(六)うまつらんや」と宣ふ。主のおとゞ、正頼「待てしばし。(七)見知らば中らぬもの故、鳥立ちなば興醒めなむ。(八)勞ある兵衞尉まづ試みてむや」とて主のおとゞ、右大將とまづ遊ばす。主のおとゞは、西の御厩に、かしこく勞り飼はせ給ふ五尺の鹿毛、九寸の黑といひて、名高き御馬二つ、

〔語釋〕
(一)行政
(二)こゝの仲忠の詞誤あるべし
(四)仲忠の箏に於ける如くあて宮は琵琶を決して彈かずと聞けり
(五)琵琶は
(六)あて宮が琵琶を
(七)仲忠の
(八)誤あるべし

〔考異〕
(三)仲忠が―仲忠上手
(九)いで―いでや

に、世間の事こそ思ほえざりしか。只今の琵琶の一は、良少將(一)こそ侍るめれ。それにも合せて、度々仕うまつる時侍れど、えかの手にもいださぬ手をなん、いと珍かに遊ばしゝ。怪しがり(二)しかは、をさ〳〵物の音に合せ難くせらるゝなむ、世になく仕うまつりしをかくして、(三)仲忠がくるしき手をこそ、になく彈き合せ給ひしか。それを、遊ばす琵琶のあかず覺え侍りしまゝに、やんごとなき節會の爲に殘して侍りし手どもを、殘さずなむ仕りし」あるじのおとゞ、正賴「まことに戯にても、其處(四)にあそばす箏の琴、怪しく、いさゝかにても掻き合せ給ひなどもせず、と聞き給へし琵琶なり。(五)さるは女のせんに、うたて憎げなる姿したる物なり。ことに習(六)ふなども見えざりきや。いかでするならん。まことや、その日、ことに薄葉にかきたる文の(七)、御懐より見えしを、切に惜まれしは、誰がぞ。正賴、そればかり見給へまほしき物こそなかりしか。誰がぞ」と宣へは仲忠がいらへ、仲忠「あらず。里より(八)、らうしのものし給ひしなり」主のおとゞ、正賴「(九)いで、この空言

〔語釋〕
(二)「をは」の「を」衍文なるべし
(三)正賴のは
(四)誤あるべし
(六)此文に似よりて優れたる處がなぜなきならん
(七)仁壽殿の文

〔考異〕
(一)擇り出でて―擇り出だし
(五)けつり―けへり
(八)など―などの
(九)こくばく―こゝばく

たきを擇り出でて持ち給へりけるを、右大將殿のを(二)は、銀の透箱のいと淸らなるに、(一)敷物などいとめでたし、それに入れて、(三)この殿のは淺香の蠹みなどしたるに(四)あや(五)けつり出しなどしたるに、唐草鳥など彫り透かしてあるに入れて、御覽じくらぶるに、さらに劣り優らず。いと等しく、手、詞、劣り優らず等き時に、主のおとゞ、正頼「仁壽殿は、うるせき人にこそ有りけれ。昔より後の世までも所謂嵯峨の御時の女御ぞかし。それに、ことに劣らぬ手など走り書きけり。など、正頼が許におこする文、(六)これに覺えたる筋の思ほえぬ」と宣ふ。右大將、「かへりて此の(七)御文は、今めきたる筋など(八)優りたりけり。持なり」と定められて、仲忠をこなたの御賭物に、この殿の持給へる女を彼方にとりて、互に御子どもを取り給ふ。かくて御遊、よろづの物の聲かき合せて遊ぶ時に、仲忠きこゆる、仲忠「仲忠、こく(九)ばくの箏の御琴など、物にかき合せて仕うまつるなかに、一日、藤壺にて、仕うまつりしばかり、面白きなむ侍らぬ。かの姫君、琵琶合せて遊ばしよ、承りし

〔語釈〕
(一)隔てざる心は
(三)承香殿の文
(七)仲忠
(八)速澄
〔考異〕
(二)いづら—いづく
(五)と思ふ—「と」衍歟
(四)主の—ナシ
(六)時に—「に」ナシ
(九)この御許—この御文
御許

する時など、おなじ様なるものから、(一)とほき御心は、なほ同じやうなれど、多くのすきごとをなむ御覽ぜられぬる」など申し給ふ。主のおとゞ、正頼「いで、いづ(二)らなりしをか。正頼が童べの中よりは、さる心ある人はあらむ。その承香殿は、いと筋殊なりし人の御心をや」右大將、兼雅「よし。然ば、(三)かの御文はありや。兼雅かもとに、かの女御の君の御文ありしが」と申し給へば、(四)主のおとゞ、正頼「正頼が許に無からんやは。よろづの事むづかしう、(五)と思ふ(六)時に見給へつゝ、世間のこと忘るゝ文ありかし」右大將、三條殿に、(七)中將して、仁壽殿の女御の御文とりにやり給ふ。主のおとゞは、(八)左衞門佐の君して、昔の承香殿の御息所の御文とりにやり給ふ。兼雅「(九)この御許なると、兼雅が許なると較べむに、まづ物賭け給へ」と聞え給へば、おとゞ、正頼「何を賭くべからむ。正頼、女一人賭けむ。御許には何をか賭け給はむずる」兼雅「兼雅は、侍るにしたがひて、仲忠を賭け侍らむ」などこれかれ子どもを賭物にて、この御文ども、通はし給ひけり、なかに、勝れてめで

内宴のまかなひにあたり給ひて、仁壽殿にさふらひ給ふかたに、透きたる御簾の内におはしますに、打見るほどに、更に魂なくなりて、いかで、些ならんことも聞えてしがなと、思ひわたりしに、如何なる折にかありけむ聞えはじめて(一)、後後はせめて聞え煩はす程に、思し煩らふにやあらむ、と見えし程の御文見給へしこそ、よにあはれに勞ありしか。正頼が老の世に、その御文賜へりしばかり、似るものの(二)あはれなむ思ほえぬ。終に疎くて止み給ひにしものから、宣ひ放たぬことなどのあれば、頼みまさりて、いとゞしく魂のゆくらむ方も知らずこそありしか。然る女の、今の世にあらじはや」右大將、兼雅「今の世の女の、深くありがたき御心は、(三)仁壽殿の女御こそおはしますらめ。この承香殿に、更におとらぬ御心なり。兼雅、現(四)にある事ならばこそ、取り申さゞらめ、たい〳〵しき事なれど、むかし聞(五)ゆることありしを、更に宣ひ放たで、頼めとのみあらせつゝ、多くのすきごとを御覽じたるなむ、いと有り難き。今に、いとたまさかに聞えさ

〈語釋〉
(三)正頼の長女
(四)現在やつて居る事なら言ふ譯にはゆかぬが過去の事故話すと也
(五)仁壽殿に懸想せしに

〈考異〉
(一)はじめて—そめて
(二)もののあはれなむ思ほえぬ—ものなくあはれになむ思はえぬる

になりて、右大將、兼雅「こゝに參りてしは(一)、昔こそは(二)恥かしう思う給へしか(三)。今は心安かりけり」主のおとゞ、正頼「今は御後見すべき人やは侍らぬ(四)、然おぼすは」と聞え給ふ。右大將、兼雅「怪しくはた、此處にまうで來るは(五)、さふらひつきたる心地こそすれ」とて、

兼雅たち馴れてやみにし宿を今日見れば古きこゝろ(六)の思ほゆるかな

と宣ふ。主のおとゞ、

正頼やみぬとも思ほえぬかなわが宿は今こそ人のたちも馴らさめ

と宣ひて、御物語むかしの事など聞え給ふ。正頼「世の中の心ゆき、なほをかしきものは、勞ある女の情あるが(七)、物いひ語りなどするが、かの女の如何にせましと思ひ煩へるが、心とゞめて書きたる文見るばかり、勞あるものこそなけれ。むかし、嵯峨の帝の御時、承香(八)殿の御息所ばかりの女を見給へぬかな。怪しくめでたかりし人の御心にこそありしか。正頼いまだ中將に侍りし時、かの御息所、

〔語釋〕
(二)あて宮の居りしかば
(五)居心地よき也
(七)我と情交ある女て
(八)嵯峨院の女御、齋宮の御母、素性知れず

〔考異〕
(一)參りてしは—參りにしは。按「參りては」なるべし
(三)給へしか—給へしかど
(四)侍らぬ—侍らむ
(六)こゝろの—こゝちを

るついでのものども奉りあげていとよき」左大將、正頼「左のも、由あるものどもあめり。力つき、容面なども、ことなき中にも、今年思ふ所や侍らむ、こともなく心づかひしてなむ、まうで來ためる。この名高き下野の竝則まうで來たり。まづ珍らしきものは、彼の竝則がまうで來たることのみなむある」客人のおとゞ、兼雅「こなたの伊豫の最手行經がまうで來ぬに、兼雅は思ひ盡きにて侍り」あるじのおとゞ、正頼「一日も、仁壽殿にて仰せられしは、(一)「すこし由あるわざもしてしがな。同じくば出でたゝん節會の、見所ありてもしなしてしがな」と仰せられしを、今年の相撲、かく男どもなど(二)多からねど、然て(三)もありぬべき限あるを、同じくば、御心とゞめて御覽ぜさせてしがなと思ひ給ふる」客人の大將のおとゞ、兼雅「兼雅も、然なむ思う給ふる事(四)なるを、心に然るべき様なる事をなむ、え思う給へ出でぬ」主のおとゞ、正頼「言はで思さむに、怪しうはあらじ」右大將、兼雅「されど、言はではえあらぬものになむ」など宣ひて、我もく劣らじとおぼす(五)。御土器度々

（考異）
（一）朱雀の仰せられし也
（二）など―ひと
（三）然るべき相撲は皆上京してある故
（四）事なるを心に―ことなうもなき心に
（五）おぼす―おもほす―おもほすに

「こゝに、今日暇にて籠り(一)侍るがむづかしさになむさふらふ」と聞え給へり。左大將、正頼「正頼も、さなむ思ひ給へむづかりて、其方にも參り來(二)むと思ひ給へつるに、いと畏し」と宣ひて、親王たち、上達部、ひき出で給へり。右大將おりて入り給ふ。みな御座に奉りぬ。かくておほん折敷、更にもいはず、ちどに、銀の土器、くだもの、乾物(三)、いと淸らにしてまゐらせ給ふ。北のおとゞより客人の御肴、御酒まゐらせ給ふ。それにうちつぎて、(四)ふずくまゐり、御物などまゐらせ給ふ。かくて御物語のついでに、主のおとゞ、正頼「右(五)の相撲どもはまうで來にたりや。此方のはまうで來ぬかな」兼雅「少しはまうで來にためり。例の年頃まうで上り來る男ども、數おほかるを、今年は數の如くなむまうで來まじき年なめり。まう上りたる限は、(六)こともなき者(七)どもなむある。かたちもいと淸げにて、只今の力の盛なる男どもにて、いとよし。なほ仕うまつらむに、少し見所ある年の相撲どもになむある。例のまうで來る男ども、あるは死に、あるは身の病など侍りて、さ(八)

〔語釋〕

（四）「ふずく」は粉熟と書く、米の粉などを蜜にて練りて竹の筒に入れて押出したる物なりとぞ

（五）此頃は八月内裏にて相撲の節會あり左右近衞府之を司り豫め使を諸國にやりて相撲を募る

〔考異〕

（一）侍るがむづかしさに—侍るむづかしさに—侍るがむづかしきに

（二）來むと—なむと

（三）乾物—ナシ

（六）ことも—「も」ナシ

（七）者ども—「ども」ナシ

（八）さる…上き—さりつゐてのものども奉りあけかくいとよき

初秋

一名とばかりの名月
又相撲の節會
又內侍のかみ

梗概

㊀ 兼雅、正賴を訪ふ。力士の噂。女の文の優劣を論ず。二人鶚を射る。㊁ 相撲の節會の準備。㊂ 朱雀院仁壽殿の局にて女御正賴等と物語。相撲の節會の評判。㊃ 正賴夫婦聟探みの相談。㊄ 仁壽殿の相撲の節會。仲忠琴彈くべき勅を受けてあて宮の局に遁げ入る、捜し出さる。母俊蔭女を迎へ來るべき勅を受く。㊅ 仲忠母を歎きて仁壽殿に伴ひ入る。朱雀院俊蔭女に舊情を訴ふ。俊蔭女琴を彈く。尙侍に任ぜらる。朱雀院螢の光に照して俊蔭女の容姿を見る。賜物。

㊀ 兼雅正賴を訪ふ。力士の噂。女の文の優劣を論ず。二人鶚を射る。

〔語釋〕
(一)正賴邸
(二)兼雅
(五)仲忠

〔考異〕
(三)右大將殿—「殿」ナシ
(四)此處にはーう には
(六)ことにーことなる

かゝる程に、左大將殿(一)の中のおとゞに、君だち、上達部、親王たち、數多おはしまして、物聞食しなどして、御物語し給ふほどに、右大將殿(二)(三)、その日御暇にて籠りおはしければ、兼雅「今日內裏へまゐらで籠りものすれば、むづかしう思ほゆるかな。左大將殿へやまうでまし。それは此處には(四)まさりて、興は思ほえむ。いざ中將三條殿へ」と宣ひて、われも中將(五)も、きよげなる御直衣奉りて、一つ御車に奉る。近き程なればことに(六)所せき御前もなくて、まうで給へり。先づ中將おろして、

〔語釈〕
(一)赤兒に湯をつかはす
(五)東宮より

〔考異〕
(一)まゐり—まゐる
(三)御むかへ湯は—「は」ナシ
(四)かづき—かづけ
(六)宮に—東宮に

(画) あて宮二の宮を産む

たちよし。こゝは、人々の奉れ給へる物ども、いと多かり。人々物食ふ。大宮、女御の君おはす。物まゐり(一)、散米したり。式部大輔文よめり。辨殿の北の方、御乳付にまゐる給へり。左衛門尉弓ひき給へり。こゝは湯殿の所。すけのお許、生絹のうちぎ、湯巻して、湯殿に參る。銀のほとぎすゑて、(二)御湯殿まゐる。(三)御むかへ湯は内侍のすけのおとゞ參り給ふ。これかれ、上達部、親王たち、殿上人こなたにおはす。銀の笥に、碁代の錢入れて積む。上達部のお前には五笥、參議、殿上人、五位には三笥、六位などには一笥づつ。これは宮の御使に物かづけたり。人々立ち給へり。しなぐ〜物(四)かづき給へり。

かくて月日經て、(五)宮より切に召しければ、十二月ばかりに參り給ひぬ。あくる年の二三月より、又孕み給ひて、男御子うまれ給ひぬ。御産養、さきの同じごとなり。しばしありて、(六)宮に參り給ひぬ。かくて時めき給ふこと限なし。

〔語釋〕
(一)正頼、「大將殿」又「大いとの」ともあり
(二)仲忠
(三)涼、「源中將」又「源氏中將」
(五)忠澄
(六)王家統
〔考異〕
(四)まうけ—參らせ
(七)二十ばかり—「ばかり」ナシ

のごと、大將殿(一)劣らずし給へり。頭中將(二)、銀のいかめしき缶に、七種の御粥入れて、蘇枋の長櫃にするゑて奉れ給へり。源中將(三)又樣かへてまうけ(四)給へり。內裏東宮の殿上人、殘るものなく集ひたり。上達部、親王たち、さながら劣らず。御前のもの、いふばかりなし。碁代二百五十貫おきて、大きなる櫃に入れて出だされたり。上下あはせて二百餘人ばかりあり。上臈は五貫、中臈は三貫、下臈は一貫づつ賜ふ。夜一夜歌ひのゝしりて、みな上達部、親王たちよりはじめ奉りて、淸らなる物に御衣御むつき添へてかづけ給ふ。かくて大宮、御臍の緒切り給ふ。左(五)大辨殿の北の方、御乳付、內藏助の御許御湯殿、御文式部大輔。御乳母、三人一人はわかむどほり(六)、二人は大貳のむすめ。御乳付に贈り物、夏冬の御裝束よき衣箱にたゝみ入れて、式部大輔に女のよそひ一くだり、よき馬二つ、牛二つ。

畫詞　こゝは中の大殿。帳立て、あて宮、白き御衾著て臥し給へり。乳母も、白き綾のうちぎ一かさね、白きあやの裳、唐衣著たり。(七)年二十ばかりの人、か

〔語釋〕
（三）照陽殿
（四）あて宮は照陽殿にはは従姉妹也姪にはあらず
（五）多くの人の胤を宿して子を産みて
〔考異〕
（一）奉れ—奉り
（二）四の—五の—二の
（六）給へるかな—給ひつるかな
（七）「いと淸らに」以下巻末まで刊本「梅の花笠」の巻の末に入りたり今古寫本及諸家の校合本に從ひてこゝに入る
（八）にて—「て」ナシ
（九）又—ナシ

給へ」とて（一）奉れ給へり。（二）四の宮よりはじめて、みな食き給ひつ。御使に、物かづけ、御消息をかしき様に聞え給ふ中に、（三）大殿の君は、投げ散らして宣ふ、照陽殿「誰か、その（四）姪の食み残しはほしき。萬の（五）集め子を產みて、宮の御子といへば、まことかとてもてあがめ給ふ」など局の毀れぬばかり口舌ちのゝしりて、かく聞えてかへし奉れ給ふ。「斯うせずとも、頭大なる子は、おほく產み侍りぬべくなむ」とてかへし奉る。后の宮聞召して、うち笑ひ給ひて、后宮「あはれの人や。心憂くものし（六）給へるかな」と宣ふ。

かくて五日の夜、院の后の宮より、同じごといかめしうし給へり。所々よりも、（七）いと淸らに（八）てあまた、碁代などいと多くて、上達部、親王たちいと多くものし給へり。御衣御むつきなど、皆かづけ給ふ。七日の夜、東宮よりいと淸らにいかめしくて、權亮を御使にて、御文あり。大宮、御返きこえ給ふ。（九）又右大將殿より、御前に紫檀の衝重二十、沈の飯笥、御坏ども轆轤に挽きて、御衣御むつきなど、例

る心地して嬉しくおもひ給へる。いと羨ましげなる人々に、あえものにせさせん。(一)すき米のおろしすこし賜はせよ。まこと、これは、夜居の人々の目ざましに賜へとてなむ。

と聞え給へり。御使の大進に、女のよそひ、持てまゐれる男どもに、きぬ、布などしな〴〵に賜ひて、黄金の壺の大きなるに、かの御食の米一壺入れて奉れ給ふ。御返り、

女一宮かしこまりて承りぬ。(二)珍らしき(三)人は、まづ此處にしものし給ふを、いともかしこく(四)思ひ給ふるに、思すやうにと宣はせたるをなむ、いとも〳〵嬉しく思ひ給ふる。(五)(六)夏ごろもはほどおほくすきて、殘り少うなり侍りにける(七)頃にもなむ。

と聞え給ふ。

后の宮、瑠璃の壺の小さき(八)四つに入れて、東宮の御局どもに、(九)「これ、あえものにし

〔語釋〕
(一)あて宮の食料の米
(三)皇子はあて宮がまづ生みたるを
(五)「夏ごろも」は「すき米」の誤なるべし
(八)かの貰ひし米を

〔考異〕
(二)珍らし…ものし給ふを―ナシ
(四)思ひ―思う
(六)夏ごろもは―夏よりは
(七)頃にも―よに
(九)これ―ナシ

㊂ あて宮若宮を産む、産養ひ。飯米を所々に頒つ。昭陽殿女御の嫉妬

〔語釈〕
（一）歌此誤あるべし
（四）「きさいの宮におはす」なるべし
（五）大殿は忠正、右大將は兼雅
（六）朱雀院后宮の心、みこの宮は東宮
（八）皇子誕生なかりしを
（一〇）多くの妃妾たちの中にてあて宮が第一に皇子を生み奉りしことを

〔考異〕
（二）し給ふ―ナシ
（三）装束をし―装束をして
（七）御子の宮―御子の君
（九）すみもの―ナシ

あて宮、
　（一）まつたきといかゞ頼まんよしをだにねをとゞめてしわかるとおもへば

かくて、あて宮の御産屋のまうけし給ふ。（二）おとな、童、みな白き装束をし、（三）大宮なども此方におはして待ち給ふに、十月朔日に男宮生れ給ひぬ。宮より御使たちかへり参る。東宮の御母、きさい宮おはす。（四）大殿右大將などの御妹におはします。（五）その后の宮、内裏の帝よろこび給ふ。御子の宮、（六）（七）御年二十になり給ふこと、人々参り給ひて久しうなりぬるに、まだ斯かること無かりつるを思しつるに、（八）中らひよき所にしも生れ給へることかな、とおぼして、三日の夜、内裏の后の宮より、御産養、銀のすきばこ十二、御衣十かさね、御襁褓十かさね、沈の衝重二十、銀の箸かひ、坏どもみな同じもの。（九）すみもの、いといかめし。碁代の錢百貫、大なる紫檀の櫃に碁代入れて、宮の大進を御使にて、后の宮の御消息、大宮の御許に、后宮いと珍らしきことを、（一〇）まづそれよりしもはじめ給へるをなむ、思ふやうな

㊸ あて宮東宮と歌を贈答す

〔語釈〕
(一)自身を露にたとへたり
(二)衣ばかりの隔てを

かくてあて宮出でさせ給へるつとめて、宮のすけを御使にて、

東宮 夜の間も如何にとおぼつかなく、急ぎまかで給ひしかな。

とて、

東宮 夕されば宿りし花もうつろひておもひ消ぬべき秋の夜の露(一)

とあり。あて宮、

色々の花のなかなる白露は萩の下葉をおもひしもせじ

とて、御使に紫苑色の綾のほそなが、袴一具かづけ給ふ。月たちて又宮より、

東宮 あひも見で月日へだつる我が中にころもばかりをなに恨みけん(二)

あて宮、

年月も衣もなかには多くともこゝろばかりは隔てざらなむ

又宮より、

餘所にのみかくながらふる袖よりも人まつ瀧の落ちぬ日ぞなき

そこばくの子ども、放ち遣され、懲じ給ひて逐ひつかはす。少將泣き歎くこと限なし。

畫詞　こゝは、治部卿腹立ちて、太刀をぬきて、子ども逐ひすてたる所。女ども、太刀をとりて、額を土につけて歎く。男六人、女四人、手をすりて主に物いふ。これは流されたり。馬、車にのりて行く。子どもゆひくらに乘りて行く。(一)非違の尉、佐などして逐ひやれり。

かくて致仕の大臣、斯かることを聞きて、水もすゝらで泣く〳〵いふ樣、高基「われ、昔より、(二)食ふべきものをも食はず、著るへぎものをも著ずして、天の下に謗られを取り、世界に名をほどこして、(三)財を蓄へしことは、死ぬべき命なれど、難きことも、財持たる人は心に叶ふものなり。今は大臣の位を絶ちて、たゞ思ふこと(四)此の事一つなり。それ叶はずば、今は我が財あるに効なし」とて、七條の家、四條(五)の家をはじめて、(六)かたはらより火をつけて、片時に燒き亡ぼして、山に籠りぬ。(七)

〔語釋〕
(一)結ひ鞍歟
(二)三春高基
(五)あて宮の事
(七)「かたはしより」歟

〔考異〕
(三)三春高基遁世
(三)ものをも—「を」ナシ
(四)ものをも—「を」ナシ
(六)家を—家より

〔語釋〕
（一）訴狀
（二）眞菅一人の爲なり
（四）肩を持ちて
（五）あべこべに
（六）踵の方を足の先の方にして

〔考異〕
（三）汝等―「等」ナシ
（七）徒より―徒から
（八）作れり―つゞれり

ありなむや。政事かしこき世に、うれへ（一）奉らむ」とてうれへ文をつくりて、文插にはさみて出立ち給ふ。そこばくの子ども、少將よりはじめて、「宮仕を仕うまつりつゝ、つかさかうぶりのほしき事は、一所の御爲なり（二）。斯くあるまじき事を申されば、人の國さかひまでも逐ひ遣され、流罪の罪ともならば、如何せん」とて恐る〳〵申す。治部卿のぬし、太刀を拔きかけて、眞菅「汝等（三）が首を、たゞ今取りてむ。汝等は、我が敵とする大臣の方（四）によりて、はからしむる奴なり」と言ひて、太刀を拔ききらめかして、片端より追ひはらひて、冠を後ざまにし、上のはかまをかへざま（五）に著、片脚に脚二つをさし入れて、夏のうへのきぬに冬の下襲を著、靫負ひて、飯匙を笏に取り、靴片足、草鞋片足、踵（六）をばはなにはきて、徒（七）より參りて、帝の南殿に出で給へるに、立ちて、白き髪、鬚の中より、紅の涙をながしてうれへ申す。文を見給ふに、いふ限なくさがなき事を作れり（八）。おどろき給ひて、治部卿のぬしを、伊豆の權守、和政の少將を、長門の權介に、藏人の民部丞など、

〔語釋〕
(一)以下あて宮の心
(二)喪服
(三)仲澄の言ひし事
(四)滋野眞菅
(七)妻とすべき女
(八)取らせて
㊉滋野眞菅あて宮を獲んとす。告訴。眞菅父子流罪
〔考異〕
(五)擇りて—とりて
(六)おほん爲に—をとこ方に

し。あて宮聞召して、いみじく悲しとおぼす。(一)斯かりけるものを、年頃心ぐるしくのみ宣ふ時、などいらへざりけむ。はかなかりける世の中に、つらしと思ひ給ひけむこと、など思ひて、いみじく泣き給ひて、「まかでなむ」と聞え給ふ。宮、東宮「怪しく、など斯くしもおもほす。數多ものせらるゝ御子にこそあめれ。いたくな歎き給ひそ。服(二)などは、あからさまにいでて著給へかし」など聞え給へど、なほ常に聞え給ひしこと(三)のみ思ほえて、いといとほしく思すこと限なし。

かくて(四)治部卿の主、あて宮の御爲にとて家を造りて、調度をまうけて、心一つによき日を擇りて(五)、御むかへにとて、子ども、家の人ひき率て出立ち給ふ。ある人、「あて宮は、東宮に參り給ひにけり」といふに、治部卿の主、家の中ゆすり滿ちて、怒り腹立ちていふやう、眞菅「いかでか、天下に國王大臣にもいますがるとも、諸人の聞えおきて、(六)おほん爲に家を造り、閨を建てて日を待つほど、斯くはせさせ給ふべき。眞菅つたなき身にはありとも、己が妻がね(七)を、人に(八)ほらせしめては

仲澄　いひ(一)でてもつひにとまらぬ水のあわを水籠りてこそあるべかりけれ

かくまで聞えて、あるまじく覺え(二)しかば、聞えそめて、侍らざらむ世にも思し出でむこそ、いとも〳〵(三)いみじう猒はしければ、いでや、吾が君の御爲には、身のいたづらになりぬるも思ひ給へず。今一度の對面賜はらずなりぬるを思ひ給へるなむ。

と聞えたり。あて宮見給ひて、ある(四)が中に、いかでと思ひきこえし人の、怪しき心の見えしかば、つらしとおぼえ給へ(五)しかど、かう心細く宣へること、心憂く、など此の君にしもかく思されけん、など思して、かく聞え給ふ。

あて宮　おなじ野の露はいづれもとまらねどまづ消ゆとのみ聞くが苦しさ(六)

かく承るもいとほしうなむ。

と聞え給ふ。侍從見給ひて、文をちひさく押しわぐみて、湯してすき入れ(七)て、紅の涙をながして絶え入り給ひぬ。殿の中ゆすり滿ちる、まどひ焦れ給ふこと限な

〔語釋〕
(一)いひ—楲、言
(四)多くの同胞の中にて殊に力にせんと思ひし仲澄が、以下あて宮の心
(七)飲み込みて

〔考異〕
(二)あわを—あわの
(三)いとも〳〵—いとも
(五)給へしかど—給へしかど、按「給ひしかど」歟
(六)苦しさ—苦しき

〔語釋〕
(三)實賴
(四)仲澄
(五)あて宮の手紙によりて又生きかへりての意なるべけれど詞足らず

〔考異〕
(一)なく―なし
(二)ければ―けれど歟

㊈仲澄歌をあて宮に贈る。悶絶。あて宮の悲嘆

浮寐して　今やいまやと　たのみこし　君がこゝろを
かぎりぞと　思ひし日より　山ざとに　ひとりながめて
もえわたる　ふかき海べと　みつしほは　袖のもるまで
たゝへても　みるめ求めん　かたもなく(一)　今はかひなき
こゝちして　なごりぞ物は　悲しかりける

など聞えけれど御返なし。かく覺束なければ、更にわすれ聞えず、折々につけて、なほ聞えけり。交らひもせず、宮の御許(二)へも參らず、ながめ給へり。

畫詞　こゝは源宰相小野におはす。はらからの中將(三)いましたり。おとど御文あり。

かくて侍從(四)の君も、參り給へる日はかなくなり給ひにしかど、御消息にかゝりて(五)、ありつる御思ひは月日に添へてまさり、身は弱くなりつゝ、え堪ふまじく覺ゆれば、あて宮にかく聞え給ふ、

〔語釋〕
(一)比叡山の東麓

〔考異〕
(二)あり經なほ—あり經れど

(三)ふる江—大江

(四)おもほえず—おもはえて

おどろき給ひ、東坂本(一)に小野といふ家におきて、大願たて、よろづの神佛に祈りて、泣きこがれつゝ惑ひ給ひければ、辛うじて生きたれど、ありし様にもあらず、宮仕もせで、たゞつれ〴〵とあり經。(二)なほ悲しく覺ゆれば、小野より、兵衛の君の許にかく聞えたり、

實忠 かくばかり消ゆる我身に年をへてもゆる思のたえずもあるかな

いづれの世にか思ふ給へ慰めむ。あないみじや。

と聞えたり。あて宮見給ひて、あはれと思せど、ものも宣はず。源宰相悲しくおほゆれば、三月晦がたに、斯う聞ゆ、

實忠 かけていへば　塵とくだくる　たましひに　ふかき思の
つきしより　(三)ふる江のとこに　としをへて　列をならべて
すむ鳥の　ゆくへもしらず　鴛鴦の子の　立ちけん方も
(四)おもほえず　黄なる泉に　消えかへり　なみだの川に

今はとてふかき山べにすみぞめの袂はぬれぬものとこそ聞け

と宣へり。少將見て、涙をながして、此の御文をふし拜みて、思へば、(一)わがこゝらの年頃、日にしたがひて聞えしかど、一文字の御文書き給はず、御顏をだに見(二)ざりしかど、我が佛の道の尊ければ、參り給ひて後一くだりにても見るなり、と思ひて、かしこき寶にすべし。

畫詞 こゝは水尾。高き山の頂に、樋かけ、庵などある中にをかしげなる路あり。こゝに殿上人いましたり。(三)少將麻のよそひあざやかにて對面し給へり。山の上より大なる瀧、まへに落ちたり。弟子一人は若うより上につかひつけ給へる童、一人は、これも舍人につかひ給へる。色々の花の木しげく生ひたり。小鳥、(四)目に近く、巢立てり。少將、堂をかざりて念誦したり。櫟、橡、鉢に入れて、齋せさせたり。

(五)かくて宰相(六)は參り給ひにし(七)由聞き果てて、(八)不益になり(九)給ひにければ、(一〇)おとゞうち

〔語釋〕
(一)以下仲賴の心
(六)源實忠
(七)あて宮の東宮へ
(八)埒あかぬ病人になりしかば
(一〇)父季明

〔考異〕
(二)見ざりしかど—見ざりしかども
(三)少將麻の—少將のあざり
(四)童—どうじ
(五)かくて宰相は—宰相も
(九)なり給ひ—「給ひ」ナシ

(八) 實忠、小野より長歌をあて宮に賜る

〔語釋〕
(二)正賴の子どもの尋ねたるにも仲賴が逢ひて
(三)今は僧になりたれば衣は黑染の外はなしと也

〔考異〕
(一)ながれつる—ながれつゝ

仲忠 うちみれば涙の川とながれつる(一)われも淵瀨を知らぬ身なれば

少將、

仲賴 世の中を思ひ入りにし心こそ深き山べのしるべなりけれ

源中將、

涼 蝶鳥のあそびし花のたもとにはみやまの苔の生ひんとや見し

と泣く〳〵物語してかへりぬ。

(二)大將殿の君だちものし給へるにも對面し給ひて、物語などして、かへり給ふにつけて、あて宮の御許にかく聞え給へり。

仲賴 紅の袖ぞかたみとおもほえしいまは黑くも染むるなみだか

(三)これならぬは無きこそいみじき。

など聞えたり。あて宮、怪しくもなりにけるかな。もの言ひし時いらへもせずなりにしを、かく哀になりにたる事、今は何かはと思して、

式部丞居給へり。「めでたくも大将の君(一)おほする(二)かな。式部、「かれは心ことなる人ぞや。誰もえ並び給はじ」といふ。

(三)かくて源少将(四)は、山に籠りし日より、穀を絶ち、鹽を絶ちて、木實松の葉を食きて、六時間なく行ひて、涙を海とたゝへ、なげきを山とおほして、歎きわたるを、帝よりはじめ奉りて、惜みかなしまぬ人なし。中に大将殿(五)、「思ふ心(六)やありけん。あはれ」など宣ふ。高き山をたづねつゝ、殿上人、君だち、自ら(七)もおはしつゝ訪ひ給ふを、頭中將(八)、源中將(九)、兵衛佐(一〇)などは、うるはしき(一一)御遊びがたきなりしものを、と惜みて、少将を戀ひて、花摘みがてら、水尾(一二)におはしたり。少将よろこびて對面して、物など言ふ。人々涙をおとさぬはなし。頭中將、仲忠「吾が佛。など斯くおもはぬ樣にてはものし給ふ。仲忠ら、片時世に經べき心地もせねども、親に仕うまつらんと思ふ心深ければ、しばし交らひ侍れど、かくておはするを見奉り侍れば、まづ悲しくなむ」とて、

〔語釈〕
(一)あて宮をいふ

㊆仲忠、行政、仲頼法師を訪ふ。仲頼あて宮に歌を贈る

(四)仲頼
(五)正頼
(八)仲忠をいふ、「頭」は「藤」のあやまりなるべし。以下一々に註せず
(九)涼
(一〇)行政
(一二)仲頼の籠れる山

〔考異〕
(二)おはするかな—おもはするかな—おほかなるぞや—をはりするかな—おほかするぞや。按「おはするかな」なるべし
(三)かくて—ナシ
(六)思ふ心—思ふ御心
(七)自らも—自らに
(一一)うるはしき—をかしき

〔語釋〕
(一)昭陽殿
(三)「かまう」は嚙むの意なるべし
(五)以下「太り給へり」まで昭陽殿方の様
(六)梨壺
(七)檀紙
(八)承香殿
(九)宣耀殿

〔考異〕
(二)の君の―ナシ
(四)狸の…とめるかな―狸のおぼ〳〵しくとあるかな―たのきぬをおほくしてとめるかな
(一〇)平中納言―「平」ナシ

【畫詞】こゝはあて宮。御たちいと多かり。檜割籠、すみもの、透箱いと多かり。(一)左大臣殿の(二)君の御局いと近し。殿上人ののゝしるを聞きて、昭陽殿「例の夏犬なれば、あつまりて(三)かまう夜にはあらずや」物かづきしたるを見て、昭陽「(四)狸の多くしてとめるかな」など言ひてゐ給へり。(五)庚申し給はず。御たち白き衣のすすけたる、うす色の裳など著て、四五人ばかり居たり。君年三十ばかり、かたち醜し。いかめしく太り給へり。こゝは大殿。殿上人三十人ばかり。ものかづけ給へり。これは右大將どのの御局、(六)大君の御かた、年十八。かたち淸らなり。御たち二十人ばかり、裳、唐衣著てさふらふ。庚申し給へり。殿上に割籠二十荷。碁代に、錢二十貫出だし給へり。なまめきてし給へり。あをき透箱に、(七)みちのくに紙、あを紙など積みて出だし給へり。これは(八)四の宮の御局。宮おはします。御年二十。御たちいと多かり。おとな十五人、わらは四人。庚申し給へり。これは(九)(一〇)平中納言殿の御局。君年十六。容貌いとをかし。御はらからの藏人、

中將實賴、

故郷へ翼やすめずとぶ雁もこよひはこゝを過ぎず鳴くなり

左兵衞佐、(一)

しら雲の雁のたむけの錦とや山のはかぜに織り亂るらむ

左近中將、(二)

實賴ほころびてわかるゝ雁のふるさと(三)は今やとふらんあまの羽衣

中將祐澄、

花をれる春は經ぬれどなく雁のかへれる數を知る人のなき

左衞門佐、(四)

なく雁に浮べる雲のゆきかひていづくにまつと契りおきけむ

などこれかれ宣ひて、女のよそひかづく。あくるつとめて、御臺ども御方々に參らせ給ふ。源中將の沈の割籠、(五)かたつらは仁壽殿の女御の御許へ奉り給ふ。

〔語釋〕

(一)「右兵衞佐」か、正頼の二男諸澄右兵衞佐なり

(二)實頼

(四)「右衞門佐」か、正頼の四男連澄右衞門佐なり

〔考異〕

(三)ふるさとは—ふるさとを

(五)半分は

〔語釋〕
(一)後世の穴一といふ遊の類なりといふ

〔考異〕
(二)攤―碁
(三)御歌―「歌」ナシ

なむ、この時過ぎざりせばと見給ふる」ときこえ給ふ。中將たちの使にも、白張褌かづけて、御消息言ひにつかはす。

内にも、宮、殿上人あつまりて、攤(一)(二)打ち遊するに、上いと近き御局なれば、宮わたり給へるに、あて宮おき居給へり。東宮「あないざとや」など宣ふほどに、雁多く連れてわたる。宮、東宮「このかりはいづちぞや」と宣ふ。中將仲忠、

つれて行く雁がね聞けばあかでのみ春の宮よりかへるとぞ聞く

宮の御歌(三)、

東宮 あかでのみ別るゝ雁のたむけには花の錦もとぢられぬかな

左大將、

正頼 青柳のいとまをしとて鶯の雁のたむけもとぢずやあるらむ

源中將、

涼 かへり行く雁のはかぜにちる花をおのがたむけの錦とや見む

り。藤中將、銀の透箱十。あはせ薫物、沈の鶴したる硯箱、しろかねの筆、こがねの(一)硯、龜などする、唐の錦のいと淸らなる、ぢん(二)の盤(三)に、しろがね、こがねの筋やりて、しろかねの碁石笥に、しろき玉、紺瑠璃の石つくりて、雙六の盤、て(四)うとかくの如くにて、樣かへて、碁代の錢、銀にて、おなじ箱にて奉れたり。おとゞ見給ひて、正頼「あやしく煩らはしきわざせらるゝ中將たちかな」と宣ふ。かくて、內にまうけられたる御調度などは、あるべきまゝに奉らせ給ふ。(五)宮には割籠三十荷ばかり、(六)頭中將の奉れたる透箱、一くだりながら奉れり。(七)臺盤所割籠、碁代など添へたり。四の宮の御かたに、(八)殿にまうけられたりし箱、檜割籠添へて奉れたまふ。殿上よりはじめて、宮のうち所々の帶刀の陣まで、割籠碁代など、淸らにして賜ふ。內裏の殿上、藏人所、侍從所、衞府の陣まで、半取、(九)職の尉に碁代の錢紙賜ひわたしつ。かくて、上の御使の藏人に、しらはり、褌かづけ、御返には(一〇)、「畏まりて承りぬ。この(一一)そまうのおろしの多くさふらひけるを

〔語釋〕
(一)仲忠
(二)碁盤
(四)不詳
(五)東宮
(六)頭は藤のあやまりなるべし
(八)正頼邸にて
(九)東宮職

〔考異〕
(三)盤ーはこ
(七)臺盤所ー臺盤の所
(一〇)には…承りぬーナシ
(一一)そまうーそめう

かさねたり。檜割籠五十荷、たゞのわりご五十荷。檜割籠は御かたぐ〳〵にし給ひ、たゞのは、殿に仕うまつる受領どもにおほせ給へれば、仕うまつれり。すゑ物は、政所より、飯四石ばかり入れる檜の木の櫃十、厚朴の木に黒柿の脚つけたる中取十にすゑ、一尺三寸ばかりの、圓木の盌に、生物、乾物、鮨物、貝つ物、たけ高くうるはしく盛りて、厚朴の木に柊の脚つけたりしきさらどもにすゑて、一石入る樽十に、酒入れ、碁代(二)(三)の錢三十貫、紙、筆、卓(一)に積みて、色々の色紙積みて十。高坏、蘇枋の卓に、檀の紙、あをがみ(四)、まつがみ、筆など積みて碁代にしたり。かづけもの、女の裝束、しらはり褌など設けられたり。おとゞ、君だち參り給へり。物ども、一度に持てつらねて參る。見物なり。内裏より、白き透箱に入れて、よき菓物、酒殿の大御酒など召して、藏人木工亮を御使にて、「(五)これは忠こそのそ命なり。あへものにとて」など宣はせたり。(六)源中將の許より、沈の割籠十荷。入れたるもの、飯には、白粉ふるひて入れ、しきもの、袋などめでたうして奉れ給へ

〔語釋〕

(一)誤あらんか「さ」を「よ」に作れる本もあり

(二)碁の賭物

(四)松葉色に染めたる紙也といふ

(五)未詳。別本には「これはたゞこそのそめうなり」「これはたゞこそのけふなり」「これはたゞのそ命なり」

(六)涼

〔考異〕

(三)碁代の—碁代に

將の御、辨(一)、大輔の御、木工の君、少將の御、左近、右近、衛門などいふ人いとおほかり。うなゐなど御前にさふらふ。(二)左大辨の君參り給へり。そこに宮おはしまして、箏の御琴あそばす。あて宮と御碁あそばす。大將(三)のおとゞ御局に參り給へり。宮、「なほこゝに」など宣はすれば、御前にさふらひ給ふものなど聞え給うて、東宮「仲澄は、などか久く參らぬ」大將、正頼「日頃あさましく病にしづみ侍りて、交ら(四)はずてなむ侍る。よろづの神佛に願を立て侍れど、今はたのむべくも侍らず」宮、「らうたきことかな。公にも仕うまつりぬべく見えつるものを。實忠の朝臣も然ぞいふなる。あやしう人の愛子ども、など斯からむ」と宣ふ。

かくて年かはりて(五)、二月中の十日、年のはじめの庚申出來たるに、東宮の君だち(六)、御局ごとにまかなひし給ふ。あて宮、さらぬ前より、殿上帶刀の陣に菓物出ださむとおほすに、よき折なり、とて殿(七)に聞え奉れ給ふ。宮の御臺には、かねの御器に、黄金の毛(八)うち、銀の折敷三十、こがねの御器。御臺の打敷は、花紋綾に、羅

〔語釋〕
(一)「辯の御」なるべし
(二)正頼の長子忠澄
(三)正頼
(六)妃妾たち
(七)正頼邸に
(八)毛彫し

㊅ 庚申、あて宮人々を饗す

〔考異〕
(四)交らはずて―まじはらで―まじはらずて
(五)年かはりて―ナシ

宮にさふらひ給ふ人々（一）、大將殿（二）、大宮の御はらから、同じ后ばらの四の宮と聞ゆる、左大臣殿の大君（三）、右大將殿の大君（四）、平中納言殿の君（五）。かくさふらひ給ふ中に、四の宮、右大將殿なむ時におはしましける（六）。こと人は、よろしくおはしませど、左大臣殿の、あるが中に、年老い、かたち醜くあへなし。心のさがなきこと二つなし。君だちまだうまれ給はず。かくて、あて宮參り給ひて、また人あるものとも知り給はず、うちはへまうのぼり給ふ。稀に人の宿直の夜は、夜ふくるまでこの御局（七）にのみおはしまして、御遊などし給ふ。かくて二日ばかり有りて、まうのぼり給へるつとめて、東宮、

　珍らしき君にあふ夜は春がすみあまの岩戸を立ちも籠めなむ

と宣ふ。あて宮、寢給へるやうにて、ものも聞え給はず。かゝる程に姙み（八）給ひぬ。

畫詞 こゝは東宮、大將殿の御局に參り給ふ。あて宮御年十五、中納言の君年十九、孫王の君二十一、帥のきみ十七、宰相のおもと（九）十八、兵衛の君廿、中

〔語釋〕
（一）妃妾たち
（二）承香殿、「大將殿の大宮の御はらから」とあるべし。正賴の妻たる女一宮の同胞の意なり
（三）源季明の長女、昭陽殿
（四）兼雅の長女、梨壺
（五）正明の三女、宣耀殿
（六）時めきたりの意
（七）あて宮の局にのみ東宮が御座ありて

〔考異〕
（八）姙み—にんじ
（九）宰相のおもと—宰相の君

〔語釋〕
(一)あて宮を失ひて悲しむ者は仲頼一人のみにあらず
(五)あて宮
(六)東宮

〔考異〕
(二)と聞えて―とて
(三)御車ども―「ども」ナシ
(四)し給ふ―したり

㊄　あて宮の榮華。東宮の妃たち。あて宮懐胎

仲頼　今はとてふりづる時はくれなゐの涙とまらぬものにぞありける

とだにさかしうも言はで、泣き惑ふこと限なし。木工の君、「心ぼそくも宣ふかな。年頃はげに志ありてきこえ給ふと見奉りつれど、かく參り給ひぬるが効なきこと。いでや、(一)一所にもあらず、いとほしくぞ承はるや」(二)と聞えて、

木工　ふかき色に君しもなどかふりつべき誰もとまらむ涙ならぬを

世の常に思しなせかし」少將、いふばかりなく泣き惑ひて、歸りてすなはち法師になりにけり。

【畫詞】これはあて宮の内裏に參り給へるところ。(三)御車ども引き立てたり。下り給へり。おとな、童、群れて歩めり。これは御局。上にまうのぼり給へり。靫負のめのと、御使に來たり。源少將、木工の君と物語し給ふ。(四)

かくて(五)宮參り給ひにしより、まうのぼり給はぬ夜なく、御局に(六)宮わたり給はぬ日なし。萬のこと、せぬわざなく上手にものし給へれば、御遊びがたきにし給ふ。

は御方の御文なり」侍従、死にはつるに、御湯つゆばかり落しいる。おとゞ、正頼「忠こその御験あり」とよろこび給ふこと限なし。かくまだたく(一)を見給ひて、(二)明日はまかづとも、今宵参らせむ、と思して、おとゞ、(三)君だちの立ち給ひぬる程に、この(四)御文見て、物はつかに言(五)ふ。よろこび給ふこと限なし。

かくて御車二十、絲毛(六)六つ、黄金づくり十一、うなゐ車一つ、下づかへ車二つ。御前、四位卅人、五位三十人、六位數知らず。皆よき人なり。かくて參るすなはち、まうのぼり給ひぬ。御ともの人まかで給ふ。

源少將、木工の君に逢ひて、とみに物もいはで、涙を流すこと限なし。仲頼「年比いともかしこくて、物馴れたるやうに御覽ぜられつるを、何の報にかありけん、拙き身に、(七)おふけなき心つきて、今まで侍るべくも覺えざりつれど、御送をだに仕うまつりてこそ、とて。いでや、君に對面することさへ、限に覺ゆるこそ、いみじう悲しけれ」とて、

〔語釋〕
(一)「まだたく」とは命の危き樣を形容して言へるなるべし
(二)よし仲澄が明日死して早速あて宮が退出せねばならぬにもせよ
(四)仲澄があて宮の文を見て
(七)あて宮に懸想したるをいふ

㊃ 仲頼出家

〔考異〕
(三)君だちの—「の」ナシ
(五)言ふ—いひ
(六)絲毛…うなゐ車一つ—絲毛十、こがねづくり十なりうなゐ車二つ

〔語釋〕
（一）誤あるべし
（三）脱文あるべし
（四）占はせたれば
〔考異〕
（一）などーと

萬の人の參らせじとのみ思ふが、聞かむ事、など思して、いみじく悲しきことをのみ聞き見つれど、耳にも聞き入れ給はぬ御心ながら、かく聞え給ふ。

あて宮　別るとも絶ゆべきものか涙川ゆく末もあるものと知らなむ

など思し入るぞや。いといみじく見給へつゝ、心憂しとは思ふものから、いとほしや。

（一）など書きて、あて宮「これ、かの君に奉れ」と宣ふ。兵衛の君、「おとゞ、君だち隙なくおはしまし、かの君はいふかひなくなり給ひぬるものを」と聞ゆ。あて宮、（二）「なほとて奉れ」と宣ふ。兵衛、よき折もて參りてお前に。（三）宮おとゞに聞え給ふ、女一「この頃かく煩らふを、もの問はせつれば、女の靈となむ言ひつる。たゞ今何わざをかはせむ」忠こそ（四）阿闍梨の御許に御文遣はす。おどろきて參り給へり。内に召し入ると、宮女君たち退き給へる折なれば、兵衛ちかく參り寄りて、物おぼえぬ君の御手に、この御文を押し入れて、指のさきして、腕に書きつく、「これ

をも知らず、外には御車どもを装束き設けたり。みな人物も覺えず、さかしき人もなし。

源宰相も、まゐり給ひぬと聞きて、絶え入り給ひぬれば、大殿には騷ぎ滿ちてのゝしる。上達部、親王たち、もの思ほし歎く中に、たゞ源氏の中將(一)、とうの中將(二)、いみじうかなしと思ひながら、世中ははかなきものなり、かく參り給ひぬとも、限と思はじ、と心づよう思ひて、御送もせむ、と思ひていましたり。源少將(三)も、臥し沈みて久しくなりぬるを、かねてより思ふ樣、いかでこの參り給はむ御送をも仕うまつらむ、いさゝかなることも、殿のし給ふ度ごとに參らぬは無きを、やんごとなき事にしもまうでざらむ、數ならぬ身に、思ふまじきこと思ひそめたるが過にこそあれ(四)、など思ひて參りたり。

かく皆集ひて、御車よせて、時なりぬ、と聞召すまゝに、侍從(五)、百濟藍(六)の色してう(七)つぶし臥して、願を立て給へどかひなし。(八)あて宮も、おとゞの斯く思しさわぎ、

〔語釋〕
(一)涼
(二)「とう中將」なるべし 仲忠也
(三)仲賴
(五)仲澄
(六)百濟になりたる形容なるべし

〔考異〕
(四)あれ―あなれ
(七)うつぶし―ナシ
(八)あて宮も―「も」ナシ

〔語釋〕
(一)生きがたきなるべし
(二)以下正頼夫妻の心
(三)仲澄をいふ
(四)仲澄死すれば死の穢によりてあて宮の入内は無論延引すべき也
〔考異〕
(五)延びなむ―のびん

とみに物も聞え給はず、辛うじて、仲澄「今日や參り給ふ。御送をだにえ仕うまつらずなりぬること。生きてまた御對面賜はらんこと、難くもあるかな」と涙をながして聞ゆ。あて宮、「心にもあらずのみなむ。いでや、などか斯くのみは物し給ふらむ」侍從、仲澄「なほえ(一)侍るまじきにこそ侍るめれ。萬のこと、心ぼそく悲しきこと」と聞ゆ。あて宮、「然な思し入れそ」とて立ち給へるを引きとゞめて侍從、

仲澄臥しまろび唐紅に泣きながすなみだの川にたぎる胸の火

と書きて小く押しもみて、御懷に投げ入る。あて宮散らさじとおぼして取りて立ち給ひぬるを見るまゝに、絶え入りて息もせず。宮おとゞ、(二)あるが中にもかなし(三)き子の、かゝるよりも、萬の故障をしのぎて思立ち給へる御參、(四)(五)延びなむこと、この度せずなりなば、終にせずなりなむ事と、思すに、たゞ惑ひにまどひ給ふ。「あなかま。暫し物な言ひそ」とて、君だち、男女つどひ給ひて、まどひ騷ぎ給ふ

〔語釋〕
(一)仲澄の部屋を
(二)あて宮
(五)今直に來よとあて宮へ言ひやらん
(六)仲澄が
(七)みがきをかけたる如く

〔考異〕
(三)ゆゝしや—いみじや
(四)さばれ—さまれ

とゞ、かつは思し騷ぎ、かつは御參のこと思し急ぐ。大宮、局にさしのぞき給ひて、「只今は如何にぞや。この御參のことどものすとて、え見(一)奉らずや」侍從、仲澄「限にこそあめれ。今一度、(二)かの御方に對面賜はらずなりぬること」と聞ゆ。宮、女二「あな(三)ゆゝしや、などか然あらむ。(四)さばれ、(五)「今ものし給へ」と、然ものせんかし。今日はと思へど、あないみじや」とて涙を流し給ひてあて宮に、女二「侍從のいと心ぼそく物しつるを、わたりて見給へ。物のはじめに、いとうたてと思へど、對面せんとものしつれば」など宣ふ。あて宮、心憂しとはおぼせど、宮聞え給へば、わたり給ふ。宮、おとゞのすみ給ふ、北のおとゞに、(六)臥し給へり。あて宮、その頃御かたちの盛なり。長五尺に今すこし足らぬ程、いみじく姿をかしげに御髮のうるはしくをかしげに淸らなる、黑紫のきぬを(七)瑩せるごと、生ひたる限すゑまで至らぬ筋なし。めでたきこと限なし。今日はまして心殊に見え給ふ。兵衞の君、孫王の君ばかり御供にておはしたり。侍從の君、見奉り給ひて、

たゝみ入れて、包など淸らにて、かく聞え給へり、

涼 人知れずそめわたりつる袖の色も今日(一)幾入と見るぞかなしき

とて奉り給へり。宮おとゞ見給ひて、「言ひ知らず麗しきものどもかな」とて、「留むれば(二)事あり顔なり、還せば情なし。物は警策なるえう(三)のものなり。なほ留めつるなり」とて笑ひ給ふ。

源宰相、さるいみじき心地に、聞えすぐし給はで、兵衛の君に、裝束して志し給ふとて、

實忠 もゆる火も泣く音にのみぞぬるみにし涙盡きぬるけふの悲しさ

(四)聞え給ふべき隙あらば、かく聞え給へ。萬のこと、忘れきこえねど、物もおぼえず。

となむ宣へりける。

かゝる程に、「侍從の君、人面も知らず、くちをしうなりぬ」とのゝしる。宮、お

〔語釋〕
(三)要の物、要用の物の義歟、「こうの物」とかける本もあり

〔考異〕
(一)今日—げに
(二)事あり顔なり—はゞかりあり

(四)聞え—など聞え

㊂ あて宮仲澄の病を訪ふ。仲澄悶絕す。あて宮東宮に參る。

きぬ、綾のうへの袴、あはせの袴、綾のあこめ著たり。下づかへ八人、手織のきぬ、袴せず、檜皮色に紅葉がさね、侍の女、ひすまし二人、皆かくの如し。

かくて其の時になりて、御車數の如く、御供の人しなぐ〵装束きて、日のくるゝを待ち給ふ程に、仲忠の中將の御許より、蒔繪の置口の箱四つに、沈の插櫛よりはじめて、萬(一)の御けづりぐしの具、御櫛匣の御調度、よき御すゑ額、笄子、元結、えりくしよりはじめて、あり難くて、御鏡、疊紙、齒黒めよりはじめて(二)、一具、薫物のはこ、銀の御箱に、かうのあはせ薫物入れて、(三)沈のおものに、銀の箸、火取に沈の灰入れて、黒方を薫物の炭のやうにして、銀の炭取のちひさきに入れなどして、こまやかに美しげに入れて奉るとて、御髪の箱にかく書きて奉(四)れたり、

仲忠からくしげ明けくれ物を思ひつゝみな空しくもなりにけるかな

とて孫王の君に、夏冬の装束して志す。御使、さし置きてかへりぬ。

かくて源(五)中將、夏冬の御装束ども、よそひなど麗しうして、沈の置口の箱四つに

〔語釋〕
(三)沈香を食物の樣にこしらへたるなるべし
(五)涼

〔考異〕
(一)萬の—「の」ナシ
(二)はじめて—「て」ナシ
(四)奉れ—奉り

思ひこそ煩ひぬれ。如何ならむとすらむ」おとゞ、正頼「そがいとほしき事。などこれしも斯くあらむ。わが子といふもの、いと面伏せ、人笑へなるは無きがうちに、これはなり出でぬべく、門をも廣げ、氏をも繼ぐべきしも斯くあれば、いみじくなむ。すべて、世の中いと騷がしかなり(一)。これが煩らふ樣(二)に、みな人あなり(三)。源宰相も死ぬべしとなん言ふなる。今年のこととして、斯くなむある。怪しく騷がしかりぬべき年とて、春のはじめより、いとつゝしみ給ひて、御嶽(四)、熊野詣、やんごとなき上達部、おりたちて山踏し給へる年にこそあれ」と宣ふ。

かくて御まゐり(五)近くなりぬ。御調度、御裝(六)を、うるはしく淸らに調ぜられ、御供人、おとな四十人、みな四位あるは宰相の娘、髮長にあまり、長よき程にて、手かき、歌よみ、琴琴弾き、人のいらへすること、みな上手、年二十餘のうち、裝束、唐綾、たゞの絹、一つまぜず、皆あか色。わらは六人、五位の女、十五歳のうち、容貌、するわざ、おとなの如し。裝束、からあやの赤色の五重襲のうへの

〔語釋〕
(三)あて宮に懸想せる人人
(五)あて宮の東宮入内

〔考異〕
(一)騷がしかなり—「な」ナシ
(二)樣…あなり—樣になんみな人あなる

㊂ 御參りの準備。仲忠、涼、實忠等の贈物

(四)ある—あなる
(六)御裝—御ようい

〔語釋〕
(一)東宮
(二)東宮にあげて仕舞はんと
(三)正頼の子どもは多けれども
(四)祐澄
(五)あて宮入内の時にも
(七)あて宮の一身を
(八)仲澄の樣子
(一一)所詮生きられぬ事なるべし
(一二)母上御存生中は
(一三)同胞多けれども

〔考異〕
(六)たゞ―ナシ
(九)覺えず―おもほえ給はず
(一〇)聞え給ふ―聞ゆる
(一四)いかで―ナシ
(一五)思ひ給へつる―思う給へる

くはなりまさり給ふぞ。あてこそを、宮(一)のいと切に召せば、何かは(二)と思ふを、あ(三)またものし給へど、中將(四)と其處とをこそは、宮にも上ゆるされなどし給へれば、然らむ折にも(五)、宮のうちの事をも後見すべし。たゞ(六)この御上(七)をば、其處にあづけ奉らむ、となむ思ふを、斯くいたづら人にていますかるが、いみじく悲しきこと」と泣きまどひ給ふ。(八)いとゞしきにつけて、物宣ひつゞくることも覺えず(九)、あるかなきかにてぞ聞え給ふ(一〇)。仲澄「月日の經るまゝに、斯くのみなり勝り侍らば、なほえ(一一)侍るまじきにこそ侍るめれ。つかさ、かうぶりをも、人と等しく賜はり御覽ぜられむと思う給へる本意に叶ひて、御世(一二)のかぎりは仕うまつらむ、とこそ思ひ侍りつれ。斯くながら歇み侍りぬべきが、いみじう悲しきこと。數多(一三)おはしませども、中のおとゞの姫君になむいかで(一四)仕うまつらむと、思ひ給へつる(一五)。御宮仕の程などには、雜役をだに、とこそ思ひ給ふる時しまれ、いたづら人になりぬること」と泣く〳〵聞ゆ。宮、おとゞに、女二「侍從の、いと頼もしげなう見ゆるに、

あて宮

梗概

㊀あて宮東宮に參る事定まる。懸想人等の失望。仲澄の苦惱。㊁御參りの準備。仲忠、涼、實忠等の贈物。㊂あて宮仲澄の病を訪ふ。仲澄悶絶す。あて宮東宮に參る。㊃仲賴出家。㊄あて宮の榮華。東宮の妃たち。あて宮懷胎。㊅庚申。あて宮人々を饗す。㊆仲忠、行政、仲賴法師を訪ふ。仲賴、あて宮に歌を贈る。㊇實忠、小野より長歌をあて宮に贈る。㊈仲澄歌をあて宮に贈る。悶絶。あて宮の悲嘆。㊉滋野眞菅あて宮を獲んとす。告訴。眞菅父子流罪。⑪三春高基遁世。⑫あて宮東宮と歌を贈答す。⑬あて宮、若宮を産む。産養ひ。飯米を所々に頒つ。照陽殿女御の嫉妬。⑭あて宮、二の宮を產む。

かくて、あて宮東宮に參り給ふこと十月五日と定りぬ。聞え給ふ人々、まどひ給ふこと限なし。その中にも、源宰相(一)、御兄の侍從(二)は、ふし沈みて、たゞ死ぬべしと惑ひ入られ給ひて、いみじう(三)悲しきことども書きつらねて、日每にかきつくし聞え給へど(四)、御返なし。惑ひ入らるゝ中にも、源侍從、心一つに思ひて、ふし沈みて湯も水もたえて、死ぬべきに、大宮(五)、いと悲しと思して、「女二」などいふ效な(六)

㊀あて宮東宮に參る事定まる。懸想人等の失望。仲澄の苦惱。

〔語釋〕
(一)實忠
(二)仲澄
(五)正賴の妻、女一宮

〔考異〕
(三)いみじう—ナシ
(四)給へど—給へれど
(六)なくは—「は」ナシ

〈語釋〉
(一)實忠が焦れ死にしたりといふ噂を聞きて
(三)人に噂を立てられてはならぬと
〈考異〉
(二)なくなりぬとのよしりしを―なくならばやと宣ひしちせしを

とて兵衞の君に、いみじく悲しきことを言ひて、取らす。兵衞、あて宮の湯殿に出で給へるに、委しく聞えて奉れば、あて宮、(一)亡くなりぬとのよしりしを(二)哀と聞召して、返事や一行せましと思せど、聞えこそあれとて、(三)物も宣はず。

實忠 鹿の音に戀ひまさりつゝ惑ひにし妻さへそひて思ほゆるかな

頭中將うち笑ひて、(一) 仲忠「珍らしくも、故里を思し出づるかな。(二)うるせき風なりや」とて、

仲忠 色ふかき木々のひま〳〵鳴く鹿は君まつ人(三)に劣らざるらむ

など夜一夜言ひて、曉に歸るとて、物など宣へども、人もいらへず。源宰相、實忠「など我等(四)(五)が思ふ心いみじかりけりと思へば、此處を見棄てて歸ることそ、如何(六)ならましな」中將、仲忠「仲忠は思ふ心もなけれど、(七)物の心もなど言ふ樣にあるにや」とて歸りぬ。

かくて源宰相、彼の四十九壇の修法に加持したる香水を硯の水にて、あて宮に、

實忠 言の葉も身も限にはなりぬれど涙はつきぬものにぞありける

いでや、今まで斯う聞えさすべうもあらざりしを、今一度御返りをだに見給へて、黃なる泉の道にも、と思ひ給へてなむ。

〔語釋〕
(二)鹿の音を齎らして君に元の妻を思出さするはしほらしき風よと也
(三)實忠の妻をいふ
(四)此詞誤脱あるべし
(七)不詳

〔考異〕
(一)笑ひて—「て」ナシ
(五)我等が—わが

⊕ 實忠文をあて宮に贈る

(六)如何ならましな—はかなからましな

强飯などまゐる程に、雁鳴きて渡る。北の方、土器にかく書きて出し給ふ、

實忠妻 秋山に紅葉と散れるたび人を更にもかり(一)と告げて行くかな

源宰相、

實忠 たびといへば(二)雁も紅葉も秋山を忘れてすぐる(三)時はなきかな

北の方、

實忠妻 秋はてておつる紅葉と大空に雁てふ音をば聞くもかひなし

など言へど(四)氣色も見せず、怪しく(五)をかしき所かな(六)とは見給へど、思ふ(七)心のいみじければ、それを思ふにやあらむ、え思ひ遣り給はず。源宰相、實忠「如何見給ふ。心もなくは見えずなむ」中將、仲忠「更にも宣ふかな。うしむじやなり(八)。語らひ置きて、時々は紅葉見る所にし給へ」宰相、實忠「いでや、見る人に心移りては、身も徒らに、年頃哀と思ひし人の(九)なりけむ方も知らず、らうたしと思ひし子をも失ひてしかば、今は然る心をぞ思はぬ」かく言ふ程に、鹿はるかに鳴く(一〇)。宰相、

〔語釋〕
(一)かり＝假、雁
(四)女の方にて素性を知らせず
(五)實忠の心
(七)實忠はあて宮の事のみ思ひ居る故氣がつかぬと見ゆ
(八)「有心者なり」歟、「うちむにやなる」「こしむしやなり」などかける本もあり
(九)妻をいふ

〔考異〕
(二)いへば—いへど
(三)すぐる—すくず
(六)かな—ナシ
(一〇)鳴く—鳴くを

簾取り下して入り給ひぬ。人々ちかく立寄り給へば、流石(二)に人は住むものから咎めず。簀子ちかく寄りて宰相(一)、

實忠 夕暮のたそがれ時はなかりけりかく立寄れどとふ人もなし

とてのぼりて居給ひぬ。皆聲聞き知り給へる人のみあれば、物(三)も言はせず。宰相、

實忠「などか物宣ふ人も無き。若しかたは人の住み給ふ所か」とて、

實忠「山びこもこたふるものを夕暮にたびの空なる人の聲には

怪しく、などか世離れたる住居はし給ふ。思ふ心無き人々すかすや(四)」など宣ふ。そで君、「夜晝戀ひ泣き給ふ父君の、稀に見え給ふを、如何いらへ聞えざらむ」とて御座などいだす(五)とて、圓座に書きつく、

そで君 旅とい(六)へば我も悲しな世をうしと知らぬ山路に入りぬと思へば

(七)「同じ山路に、とか言ふなる」など言ひ出して(八)暫(九)しありて、透箱四つに、よしづき(一〇)たる様に、紅葉折り敷きて、松の實くだ物盛りて、くさびらなどして、尾花色の(一一)

〔語釋〕
(一)實忠等
(二)此句實忠等の眼中より寫す
(三)實忠妻が
(四)「すかすや」は「おはすや」の誤歟。「すみ所や」とかける本もあり
(七)「捨ててこそ同じ山路に入りにけれ心々のうき世なりしを」
(一一)薄を黒燒にして入るゝなりとぞ

〔考異〕
(五)い すーはらはす
(六)といへばーてへば
(八)出しーナシ
(九)暫しありてー暫しばかりありて
(一〇)よしづきたる樣にーはしつきすゑて

〔語釋〕
(二)催馬樂の「妹が門」の節にて此の歌を謠ひしなるべし。「聲ぶりに」の下「口すさび給ふを」などあるべし　又「北の方」は「そで君」の誤なるべし
(三)「にも」衍文歟
(四)實忠をいふ
(五)實忠の聲ならば鬼の如くなる筈
(六)仲忠實忠
(七)どうして此邊に實忠が來て居るならんきびが惡い
(八)口をきくな
〔考異〕
(一)入り給ひて―入り居給ひて

とて此の家に入り(一)給ひて見入るれば、籬の尾花、色ふかき袂にて、をれかへり招く。源宰相、思すことは成らず、年頃の妻子は、如何にしけむ方も知らで、萬に哀に思ほゆれば、

實忠　夕暮の籬にまねく袖みればきぬ縫ひ著せし妹かとぞ思ふ

妹が門(二)の聲ぶりに北の方聞き給ひて、「哀にも(三)失ひたる人(四)こそあなれ」北の方、「あなむくつけや。それは鬼(五)の聲ぞせむ。これは人の聲にこそあなれ」とは宣へど、そて「それなりけり。げに似たる聲かな」と宣ふに、猶かく哀に覺ゆれば北の方、

實忠妻　ふる里のつらき昔を忘るとてかへたる宿も袖はぬれけり

そで君、

立寄りしまがきを見つゝ慰めし宿をかへてぞいとゞ悲しき

とてこれかれ打泣きつゝ居給へるに、中門おし開けて二所(六)並び立ち給へるを見給ひて、實忠妻「むくつけく此(七)のわたりに有りつらむ。おなかま人々な(八)言ひそ」とて御

〔語釋〕
(一)實忠の妻の隱家

〔考異〕
(二)見れど飽かず—見も
あかず—見あかず

實忠 露霜のおきそふ枝をなげけどもかひある山はわれもまだ見ず
をかしからむ紅葉折りて山づとにせむとて見給ふに、此の家の垣根の紅葉、唐紅
を染めかへしたる錦を懸けて渡したると見ゆ。源宰相、「情有る枝は彼處にぞあ
らむ」とて、まづ押し折るとて、
實忠 濃き枝は家づとにせむつれなくてやみにし人や色に見ゆると
中將、
仲忠 山づとも見すべき人はなけれどもわが折る枝に風もよぎなむ
とて折りて立ち給へるに、なほ此の家見れど飽かず(二)面白し。人々え過ぎ給はで、
源宰相、
實忠 里とほみ、急ぎてかへる秋山にしひて心のとゞまるや何ぞ
中將、
仲忠 ひとりのみ蓬の宿に臥すよりは錦織りしく山べにを寢む

北の方、そで君、御簾をあげて、出居の簀子に御たち竝み居て、北の方琴、そで君琴、めのと(一)など掻き合せて、北の方、

實忠妻　秋風の身に寒ければつれもなき男鹿の聲の遠ざかりゆく

そで君、

見る人もなくて散りぬる(二)山里の千草の花は世をば恨みじ

乳母、

ひぐらしの鳴く山里の夕暮はもの思ふ袖に露ぞ置きそふ

と言ひつゝうち泣きて居給へるに、源宰相、(三)(四)彼のこと果てて歸り給ふに、(五)頭中將も、志賀に籠りて、同じ樣なることとして歸り出づるに、比叡の辻にて源宰相見つけ(六)て、實忠「何處よりぞや」と宣へば、頭中將、

仲忠　入りぬべき路や〳〵と足曳(七)(八)のりうげの山を立ちならしつる

源宰相うち笑ひて、(九)

〔語釋〕
(一)「めのと」の下に脱字あるべし
(三)祈禱の事
(五)頭中將なるべし、仲忠
(七)龍華歟

〔考異〕
(二)山里の…恨みじ—山里は梢さびしくみるもみぢかな
(四)彼の—は
(六)見つけて—見つけ給ひて
(八)りうげ—うりふ
(九)うち笑ひて—ナシ

す。その志、只此の事なり。天地佛神、與力し給はゞ、と思ふ。源宰相、猶すべき方覺えねば、比叡に上りて、あるが中に、驗かしこき四十九所に、(一)よき阿闍梨四十九人を選りて、阿闍梨一人に伴僧六人具して、四十九壇に聖天供を、布施供養ゆたかに、うるはしき衣を袈裟に著せつゝ行はせ、自らは中堂に七日七夜、(二)かせの忌をして、五體を投げて、此の事成し給へと行ひ給ふ。(三)(四)かゝるに彼の眞砂君の母君に聞え給ふ人々、あるはたゞ(五)入りに入らむ、あるは盜まん、などし給ひければ、(六)いかで人も寄らざらむ所にあらむ、とて志賀の山本にぞありける。人の心に入れて造りたりける所の、山近く水近く、花紅葉どもの色色の草木植ゑ渡したる所に、住み給ひし殿を(七)かへて、忍びて渡りて住み給ふ。女どち、大人一人、童一人、下づかへ一人して行をして、或る時には、琴箏搔き鳴らして經給ふに、秋深くなり行く頃の夕暮に、秋風肌寒く、山の瀧心凄く、鹿の音はるかに聞え、お前の木草(八)、或は色の盛、或は花の散り(九)などして哀なるに、母

〔語釋〕
(一)「四十九所に」衍文歟。一本には「驗かしこき所に四十九所に」とあり
(二)未詳
(五)當人の諾否にかまはず押入りて本意を遂げん
(六)母君の心
(七)「かへて」は「かひて」又は「えて」の誤なるべし

㊂ 實忠の妻子志賀の山本に隱る。實忠、仲忠と偶然その隱家を訪ふ。識れる妻と知らざる夫。

〔考異〕
(三)給ふ—給ひける
(四)かゝるに—ナシ
(八)木草—草木
(九)散り—さき

くなむ。中々に、かゝる事を何に承り始めけむ」宰相死に入りて息もせず、頂より黒き煙たちて、蒼くなり紅くなりて、たゞ息のみ通ふ。兵衛涙を流してのぼりぬ。

かゝることを源中将(一)民部卿(二)等聞き給ひて、大願を立て給へど、何とも知らせ給はず。かくて辛うじて息出でて、息の下に物言ひなどす。(三)おとゞも皆歸りなどし給ひぬる隙に、銀の箱に黄金千兩を入れて、兵衛の君にかく言ひて遣り給ふ、

實忠　死ぬる身をしみかねてぞ君にやる千々の黄金は命延ぶとか

兵衛、いみじかりし事を見て、哀に悲しく思ひて、かく言ひて返す、

實忠　雲(四)の上に星の位はのぼれども呼びかへすには延びずとか聞く

とてなむ。まめやかには、此處にもいといみじくなむ」とて返しつ。源宰相、時のかはるまで思ひ入りて、あかく黒き涙を瀧の如く落して、千兩の黄金を、三十兩宛、銀のつるの壺に入れて、七大寺より始めて、(五)らうけ所、比叡、高雄に修經

〔語釋〕

(一)こゝの源中將は實忠の兄實頼をいふなるべし

(二)實忠の兄實正

(三)實忠等の父季明

(四)魂よばひの故事を思ひてよめる歟

(五)誤あるべし

見給ふれば、いといみじくなん」あて宮、久しく思しわづらひて、彼の文の端に只かく書き給へり、

あて宮　涙をばいかゞ頼まむまた人の(一)目にさへ浮きて見ゆとこそ聞け

と書きつけ給へり。宰相喜び給ふこと限なし。立ちかへりて(二)聞え給へり、

實忠　年をへて歎かぬ人は浮ばぬをまたかゝる目は誰か見るらむ

あらじとなん覺ゆる。

とて奉れ給ふ。兵衛「此度ばかりと宣はすれば、隙を伺ひて、おぼろげならず聞えて御覽ぜさせつ。今はすべき方もなし。かけてもな頼まれ(三)そよ。思し定めぬ(四)時だにあるものを、今は、世は倒になるとも思ほしかへすべきにもあらず。身を捨ててと思ほすとも、(五)簀子のめぐりには君だち、御帳のめぐりには宮、おとゞよりはじめ奉りて、御方々隙なくおはしますには、飛ぶ鳥といふとも翔り給ふべくもあらず。見奉れば、いみじくいとほしと思う給ふれど、たばかり聞ゆべき方(六)もな

〔語釋〕
(一)「あだ人の」なるべし
(二)おひかけて
(四)東宮入内を決定せぬ時さへむづかしかりしに

〔考異〕
(三)頼まれ—頼ませ
(五)簀子のめぐりには—簀子にはめぐりて
(六)方も—かひも

〈語釋〉
(二)「かけつれば千々の黄金も數しりぬなどわが戀の逢ふばかりなき」此歌によりてよめり

〈考異〉
(一)二よろひ―一よろひ
(三)やがて―ナシ

はず。
源宰相心魂を砕きて、思ひ歎くこと限なくて、兵衛の君を呼びて斯く聞え給ふ。

實忠 湧くがごと物おもふ人の胸の火に落つる涙の瀧をますかな

今は聞えさすべき方こそなけれ。

とて、兵衛の君に、をかしげなる沈の箱(一)二よろひに、黄金一箱づつ入れて取らせ給ふとて、

實忠 年を經て頼む人だにつれなきに箱のこがねも何にかはせん

兵衛、

(二)數しれる黄金はわれも何せんにはかりなしてふ戀をこそ思へ

とて、賜はらでまう上りて、あて宮に此の御文奉るとて、兵衛「なほ此の度ばかり、一行聞えさせ給へ。「此度さへ宣はずば、(三)やがて死ぬべし」と惑ひ焦れ給ふを

〔語釋〕
（一）死んで行くに途なき
（二）錫などにて縁をつけたる

ぬるものにもがなと思ひ給ふれど、それも斯くながらは途なき（一）心地なんする。

とて、

實忠　思ふことかたくてしなば死出の山關とやならむ塞がれる胸
いかで夢の中にも斯くなむと、聞えさせて止みぬるものにもがな。吾が君や。如何にせむ。

とて、兵衞の君に、蒔繪の置口（二）の箱一具に、綾絹たゝみ入れ、夏の裝束、綾がさねにて入れて、かく言ひて取らせ給ふ、

實忠　燃えさらぬ思ひこめたるみを熱みぬげる衣をあつしとな見そ

とて取らせ給ふ。兵衞、とかく聞えてまう上りて、あて宮に此の御文を奉る。見給ひて物も宣はず。兵衞、「いみじく惑ひ入られ給ふめるを、此度ばかり、たゞ一行聞え給へ。思ひ死に死に給ひなば、恐ろしくもこそ」と聞ゆれど、聞き入れ給

〔語釋〕
（一）我をあて宮に取持ちたる事發覺して正頼に憎まれたりとも君が命を失ふ程の事はあるまじ
（五）通じがたし
（七）出來さうな樣子ならば自分の身にかへても御取持中すべしと思ひしかど

〔考異〕
（二）ならめ―あらめ
（三）殿にものしき―たのもしき
（四）あらじ―ならじ
（六）思ほしそ―おぼしそ
（八）なむ侍る―侍り
（九）若しも―「も」ナシ
（一〇）程も―ふとも

忘れ聞ゆべき。今は何心もなし。只こゝらの年頃思う給へ焦るゝことを、斯くなむと餘所ながら聞えてしがな、とのみなむ思ふ。まろを斯くながら殺し給ひても、君の御敵とこそならめ。（一）同じくば、殺し給はで。（二）（三）殿にものしき人に思ほされ給はむには、命までにはあらじ。（四）（五）官爵賜はり給はゞこそあらめ、殿にこ候は得候はざらめ、それはな思ほしそ。（六）なほ〳〵物聞えむ。たばかり給へ。おほろげにてはかく聞えじ。身のうちに火の燃ゆる心地すればぞや。助け給へ」と血の涙を流して宣へば、兵衞、「わりなき事になむ侍る。年頃かくのみ聞え給ふを、（七）さもありぬべき御氣色見えば、必らず身は徒になるともと思う給へしかど、思ひかくべくもあらず、いと恐ろしければ、すべき方なくなむ侍る。（八）（九）若しも隙侍らば、今斯くなむと聞えさせむ」宰相喜びて御文書き給ふ。

實忠　今は聞えさせじと思ひ給ふれど、（一〇）程もなしとかいふなる身より思う給へ餘りぬるを、遣る方なければなむ。斯ういみじき目を見給へ餘りぬるよりは、死

御返りなし。又宰相、

　實忠あふことの難くてやまば吾はなほ人を恨みて石となりなむ

御返事なし。思ひ惑ひて兵衞の君を局に呼びて宣ふ、實忠「などか今は夢ばかりの御返もなき。御參り(一)は何時ばかりぞ」兵衞、「委しくはえ承らず。今は誰にも、時時の御返も聞え給はねば、さやうに(二)思ほしたる事ぞや。日を定められぬことばかりにこそあなれ」實忠「いでや、如何樣になすべき。吾が佛、助け(三)給へ。斯くておはします時だに死ぬる心地するものを、まして參り給ひなば、やがて死に果てぬべし。いかで、さらぬ前に、餘所ながらも一言(四)聞えさせむ。とかく年頃になりぬれば、思ほし疎むべくもあらぬを、よきに聞え給へ」兵衞、「あな恐ろし。何時とても、さるべき折はなけれど、此の頃は、宮、おとど、御方々おはしまし、夜はやがて此方に大殿籠れば、兵衞なども(五)、近くは得さふらはずや(六)。すべて今は効なし。早や思し忘れね」源宰相、「吾が佛。など斯くいみじき事は宣ふ。いづれの世にか

〔語釋〕
(一)あて宮の東宮へ參らるゝは
(二)東宮へ上らるゝに決著せられたりと見ゆ

〔考異〕
(三)助け—さづけ
(四)一言—一聲
(五)なども—などは
(六)や—ナシ

〔語釋〕
(一)風雲歟
(二)徐福が仙薬を求めに東海に行きし故事を用ひ「童男丱女舟中老」の句によりてよめり
(五)賓忠
〔考異〕
(三)憂き…給はじや—ナシ
(四)風たかみ—岩たかみ—岩たゝみ
㊄賓忠の執心。兵衛の君を責めて文をあて宮に贈る。戀病。七大寺比叡山等に祈る

とて奉れ給ふ。あて宮、
(一)かせ雲のおとろくかめの甲の上にいかなる塵か山と積りし
宮より、
東宮 龜の尾の山には誰も到りなむ君をまつにぞ老いもしぬべき(二)
船の中ならぬ人さへ(三)憂き瀬は多かるを、思ひ知らせ給はじや。
など書きて奉れ給ふ。あて宮、
山よりも到りがたきは風(四)たかみ危き海のあればなりけり
など聞え給ふ。
(五)源宰相、思ほしわづらひて、山林に交りて、山々寺々に、不斷の修法おこなはせつゝ聞え給へど、御返りなしと、歎くこと限なくて、然言ひてあらむやはとて、
かく聞え給ふ、
賓忠 帆をあげて岩より舟はかよふともわが水莖は路もなきかな

又藤英の大内記、

　夏草におく露よりもはかなきは君にかゝれる命なりけり

忠こその阿闍梨、

　世の中を行きめぐりにし身なれども戀てふ山をまだぞふみ見ぬ

誰々も御返りなし。

かくて東宮より、

　恨みつゝ空しくならば我さへやには去らず鳴く蟬となるべき

あて宮、

　松になく蟬としならば雲の上のしりへの位(一)何にかはせむ

又宮より、

　春宮わが(二)くだく心の塵は山と(三)なりおつる涙は海と(四)なるかな

有り難くも思はせ給ふものかな。世のためしにもなりぬべしや。

〔語釈〕

(一)後宮の位、即皇后の位

〔考異〕

(二)わが―わり

(三)山と―雲と

(四)海と―雨と

仲忠 なぐさむる神もやあると越路なるまたは知らねばまどふ(一)頃かな

と聞え給へり。御返りなし。源中將より、

涼 聞えさせで久しうなりぬれば、覺束なうのみ(二)なり勝るこそいみじう侘しけれ。

いでや行末覺えぬ人にもこそな(三)。いみじく惑はし給ふかな。

とて、

涼 我をかくなど徒になしつらむ後をたのまむものと知るく

御返りなし。藏人の(四)少將、(五)宇佐の使にさゝれて下るに、それより、

仲頼 いはし水宇佐までゆるす逢ふことをなほいらへずば(六)神を恨みむ

御返りなし。侍從の君、

仲澄 戀をのみたぎりておつる涙川身を浮舟のこがれ増すかな

兵衞佐に、

行政 山も野もなほ憂しといへばしらま弓(七)いるべき方の思ほえぬ哉

〔語釋〕
(三)「こそなれ」なるべし
(五)宇佐神宮の奉幣使
(七)いる―入る、射る

〔考異〕
(一)まどふ―まよふ
(二)のみ―ナシ
(四)の少將―の源少將
(六)神を―神も

え給はずとて、いみじく恨み聞え給ふなり。などかは心やりばかりに聞え給はぬ。人には深くつらきものにしも(一)思はれぬものぞや」など聞え給へど御返りも聞え給はず。

兵部卿の宮より、

兵部　君(二)がため塵とてたつる(三)たましひや積れば戀の山となるらん

御返りなし。平中納言殿より、

正明　うちはへておつる涙や袖のうへに潮のみちくる海となるらん

御返りなし。三の親王、四月ばかりにかく聞え給へり、

忠康　烟たつがしらの雪は夏わかみ(四)いかで降れると知る人のなき

これをだに御覧じ答めぬ(五)こそはいみじうつらけれ。

など聞え給ふ。頭中將(六)の君は、近き社には詣うでぬ所なく、越の白山まで參るに、路も知らぬ山に惑ひければ、路よりかく聞ゆ、

〔語釈〕
(三)「すつる」歟
(四)「わかず」なるべし
㊅ 懸想人等歌をあて宮に贈る
(六)頭中將歟、仲忠

〔考異〕
(一)にしも—としも
(二)君がため—君により
(五)答めぬ—とめぬ

るに、思すことに叶ふとて、此處に歎かれんことなむ心苦しかるべき」大將のぬし、兼雅「春宮にと思したるを(一)此處にと聞ゆるは、空に遊ぶ雲のたかく(二)宿るばかりにはあれど、宮仕し給ふ人、必らず彼の位(三)にしもなり給はず。此處におはして、兼雅(四)よりはじめて私の君にて物し給はむには、徒らになるばかりにしも殿(五)は思さじ。御心より起りて、(六)をのこばかりの人は物し給はずやは。此處(七)には、此の事かかやうの事知らぬ人の樣にな宣ひそや」など(八)てかはらけ度々になりぬ。明くるまで物語などして、あて宮にかく聞え給ふ、

兼雅「覺束なかりつる御返さへ、今は宣はせぬこそいみじうつらけれ。

とて、

兼雅「いにしへ(九)のあとを見つゝも惑ひしを今行く末を如何にせよとぞ

とて女のよそひ一具かづけ奉り給ふ。中將歸り給ひてあて宮に、祐澄「御返事聞

（語釋）

（一）兼雅の望を叶へんとて父母に歎きをかくるは忍び難し

（二）「たかく」は「谷に」の誤なるべし

（三）皇后の位

（四）兼雅以下の人々すべてあて宮を主君の如くに大事にせば

（五）正賴

（六）誤あるべし

（七）我は

（八）「などとて」なるべし

（九）「いにしへは」なるべし。以前は御返事を得てさへなほ途方にくれたりしを御返事さへ得がたくなりし今後を如何にせよとせらるゝぞ

如何あらんとすらん。いでや、かやうの事は、心に任せて、人々のみ恨みらるゝものとこそ思ひしか、此の御爲(一)にこそ、身さへ徒らになりぬべきものと思ひぬれ」中將、祐澄「如何なればか然侍らん。かやうの心もまだなき人(二)にて、聞えにくゝ侍りしを、とにかくに(三)宣ひて、時々聞えさすめりしを、日頃は親たちなど同じ所にて、祐澄等もえ物も宣はねばにや侍らん」右大將殿、兼雅「事の近くなりにたればにこそあなれ。時々ほのめきし御返も見えずなりぬるは、人笑へ(四)になし給ふかな。兼雅、子もあまた無し。仲忠は自から出で立ち(五)侍りなん。忝く(六)とも、己が一つ子(七)にて物し給ふとも御身は沈み給はじ。人の命を助くと思ほして此のこと成したばかり給へ。聞えありて御罪になるとも、それをな思しそ。吾が佛。いとこそ佗しけれ」祐澄「祐澄も、いかでと思ひ給ふ事なり。然れど、數多侍る中に、らうたき物(八)にして、暫しも離ちてはえあるまじとて、宮(九)よりも切に宣はするを、且は畏まり聞えさするものから、え出し立てられぬを見給ふればなむ。とかくしなさむは難く侍

〔語釋〕
（一）あて宮の爲に
（二）あて宮はまだ情を解せぬ子どもにて
（三）色々とすゝめて返事をさせしに
（四）東宮へ入内の事近づきし故なるべし
（五）出世もすべし
（六）祐澄をわが子同樣に保護して出世せしめんといふ事歟
（八）父母があて宮を特に寵愛して
（九）東宮

〔考異〕
（七）一つ子―ひとり子

〔語釋〕
(一)以下兼雅の心
(二)「頭中將」衍文なるべし。俊蔭女に一旦中絶えしよりもあて宮を得ずして止まんことを一層悲しく思ふなり
(四)返事も貰ひ得ずして悍りゆくも氣の毒なり
(五)從來返事する時もありしに
(七)「思し」は衍文なるべし
(八)長谷の觀音に祈るなるべし
(一〇)不詳、「いさゝことら」を又「いさゝことし」「いさゝかことう」などと書けり
(一一)祐澄
(一二)あて宮が

〔考異〕
(三)成す—なる
(六)ばかり は—「は」ナシ。又ばかりと
(九)祈り給ひて—祈りをさへして

に、右大將のぬし、(一)三條の北の方、(二)頭中將よりもあて宮に聞えさして止みなむずる事、と思すに、涙止まらず思ほさる。それよりもかく聞え給へり、

兼正 思ふこと(三)成すてふ神も色ふかき涙ながせばわたりとぞなる

と聞え給へり。あて宮見給ひて物も宣はず。中將の君、祐澄「ふりはへ斯く宣へるを、御使の(四)たゞに參らむこそいとほしけれ。何時(五)も聞え給はぬものにもあらぬを、此度(六)ばかりは祐澄に許し給へ。此の御返事は聞え給へ」あて宮「さ思ひてこそ度々聞えしか。常には如何は」と(七)思して聞え給はず。

右大將のぬし、畏く(八)(九)祈り給ひて餘所ながら願し申し給ふ。兼雅「祈り成し給へらば、(一〇)いさゝことら月に從ひて奉らん」など願し申し給ひて、神といふ神、佛といふ佛に大願を立て盡して、思ほしわづらひて、(一一)中將の君を三條殿へ迎へ奉り給ひて、物語などし給ふ序に兼雅「怪しく年月經るまゝに、(一二)つれなさのみまさり給へば、思ひわづらひて、神佛に、若し聞き入れ給ふやとて、遠き所に詣で給へてしかど、

⑰ 兼雅戀を長谷に祈る。祐澄を語らふ

〔語釋〕
(一)兼雅
(三)佛像をつくり奉らん
(四)龍門寺
(六)比曾寺
(七)高間寺

〔考異〕
(二)七夜ーばかり
(五)比曾…坂ー上りとまづものぼさる
(八)給ふにー給ふを

御返りなし。

右大將のぬし(一)、長谷より御嶽詣と思ほし立ちて出で給ふに、井手のわたりにありける山吹の面白きを折りて、かく聞え給ふ、

兼雅　思ふこと祈りつゝ行けばもろ共にゐでとぞつぐる山吹の花

唐土もとかいふなれば賴しくなむ。

と聞え給へり。されど御返りなし。大將の主いたく難きて、長谷に詣で給ひて、思す事を、かたう大いなる願を立て給ひて、七日七夜(二)籠り給ひて、日毎に誦經しつゝ、「思ふこと成し給へらば、黄金の堂たてむ、金色の御かた(三)現はし奉らむ。月に一度、左右の御燈、命のあらんかぎり奉らむ」など申し給ひて出で給ひて、龍門(四)、比曾(五)(六)、高間(七)、壺坂、御嶽にしのびて詣で給ふ。然るまゝに、さかしき道を歩みも知り給はず歩み給へば、御足腫れぬ。かくても思す事の難かるべきを心細う思しつゝ詣で給ふ(八)に、ひぢがさ雨降り、雷閃めきて、落ちかゝりなむとする時

〔語釋〕
(二)不相變あて宮の入内せずして待たしむるを云ふ

㊅ 東宮實忠歌をあて宮に贈る。

〔考異〕
(一)一具—きては
(三)かげ—かぜ
(四)妹をおきて—いもをきて

涼　歸るともまだしら雲にとぶかりを今朝こそ潮の滿ちかたに見れ

など言ひて御設したる國々の司どもに、女のよそひ一具、(一)櫻色のほそなが、袴など賜はせて、面白き所々見ぬ所なく見て歸り給ひぬ。

かくて又東宮より、

何時となけれど、日頃はいとゞ覺束なくなむ思ほゆるかなとてなむ。

(二)まつならで生ひずもあるかな住吉のきしかげ(三)ごとに思ふものから

と聞え給へり。あて宮、

浪こゆるまつは枯れつゝ住吉のわすれ草のみ生ふとこそ聞け

と聞え給ふ。

源宰相、賀茂に詣で給ひて、いみじき大願を申し給ふにも、なほ悲しう覺え給ひければ、御社より、

實忠　(四)妹をおきて賀茂の社にまづ來ても血なる涙をえこそ止めね

〔語釋〕
(一)兼雅なるべし
(三)「のみこ」は衍文なるべし

〔考異〕
(二)ちれと―ちると
(四)群千鳥―「千」ナシ
(五)立つを―立つに
(六)うてば―うけば―うくば

春ふかみ花の色々散りぬれどなごりある空と見るぞ怪しき

右のおとゞ(一)、

立ちよるも嬉しとも見ず花ちれ(二)と吹きにし風のなごりと思へば

民部卿のみこ(三)、

實正　都いでてやなぎも花もみがけるを錦とやなほ人の見るらむ

左衛門督、

清正　群れて訪ふ今日をまたぬは櫻花うらさへ浪のをればなりけり

藤宰相、松原に潮の滿つを、

忠俊　ふか綠滿ちひてそむる浦の松いづれのしほに色まさるらむ

源宰相、波にきほひて群千鳥(四)の立つを(五)、

實忠　濱千鳥友をつらねて立ちぬるはよる〳〵浪のうてば(六)なりけり

源中將、歸る雁の飛ぶ影を滿つ潮に見給ひて、

あて宮、

かみをかの禊なるらん岩の上にこもれる松のおふるきしかは(二)

源宰相、「木工の君に」(一)とて、かく言はせたり、

實忠住の江(三)の松のゆかりとたのむかな難波のみそぎ神や享くらむ

木工の君、

難波女をはなざかりなる禊にはあだなることの如何離れむ

など言ふ程に、(四)夜に入りて月面白う、濱靜かなるに、おほん遊び盛に、いろ〳〵の花散り敷きたる浦に潮の滿つを見給ひて、あるじの大殿、

正賴色々の花こきまぜにちり敷ける浦は幾入うちて染めしぞ

式部卿(五)の親王、

ちる花を留めわびつゝ濱に出でてをしむ春さへ程やなからん

中務の親王、

（語釋）
（一）神岡歟
（二）岸かは歟
（四）誤あらん歟

（考異）
（三）住の江—すみよし
（五）式部卿—民部卿

けたる人、みな金銀に調じて、かく聞え奉る。

仲忠　月の輪のかけてや世々を盡してむ心をやらむ雲がかりかな

と聞えたり。あて宮、

雲にだに心をやらば大空にとぶ車(一)をば餘所ながら見む

とて返し給ひけり。源中將、同じ樣に調じて、かく聞えたり。

宮　戀せじのみそぎの船も漕ぎよらば大海の原(二)(三)に解きや放たむ

と聞えたり。あて宮「物も言はで返す(四)もあはれ」とて、中納言の君してかく言はせ給ふ、

あて宮　禊してみぬより人を忘るてふ船を放たぬ風やなからむ

とて皆返し遣はしつ。又御方々の、椎に居て、方々に物聞えなどし給ふを、源宰相羨(五)みて、

實忠　並み立てる松のねたさを難波女にかへすぐもみそぎするかな

〔語釋〕

(一)和名抄に「兼名苑注云奇肱國人能作飛車從風飛行故曰飛車」竹取物語に「とぶ車一つ具したり」

(二)大祓の祝詞の調を用ひたり

〔考異〕

(三)大海の原に―大うなばらに

(四)返すも―返すを

(五)羨みて―ナシ

など(一)て港に御祓し給ふ程に、東宮よりかく聞え給へり、

　東宮　はる〴〵と行く川ごとに祓ふとも我が歎には(二)離れしもせじ

あて宮打笑ひ給ひて、「腹ぎたなくも(三)」などて(四)、

　あて宮　禊にはなげきの花も散りぬらむ八重雲(五)はらふかぜのさむさに

とて女の裝束(六)かづけ給ふ。御使急ぎのぼりて參りぬ。

かくて、難波に出で給ふ程に、畿内、山陽道、南海道の受領ども集ひて、おはしますべき所を、有り難く面白うしなし、花の林、浦のまゝに植ゑ並べ、同じき砂子、同じき岩、有りがたくをかしき姿に調じて、萬の御まうけ(七)をして待ち(八)候ふに、御船ども漕ぎつらねて、萬の上手、船歌に物の音ども吹き合せて、船ごとに遊びかはしておはします。萬歳樂所々に御唱歌して待ちたてまつる。かくて御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御はらへする程に、頭(九)中將の御祓のもの、取り具して奉る。黄金の車に、黄金の黄牛かけて、乘せたる人、つ

〔語釋〕

(一)などては「などとて」なるべし

(四)なとては「などとて」なるべし

(五)大祓の祝詞の詞を用ひたり

(九)頭は藤なるべし、仲忠、「の」は衍文なるべし

〔考異〕

(二)にはーをば

(三)なくもーなくもはた

(六)かづけ…のぼりてーよき馬鞍御使にたまふはやくのぼりて

(七)御まうけをー「を」ナシ

(八)待ちーナシ

中務の宮の御方、鶯の鳴くを聞きて、

中務 をしむなる春の長洲の濱邊にはなにを歎くぞうぐひすの聲

左近中將殿の御方、

四君 春ををしむうぐひすの音もきてなかす野はまだ(一)花ざかりなるらし

民部卿殿の御方、

三君 うち群れて長洲の濱にやどりして春の名殘や久しきと見む

御津にて、左衞門督の殿の御方、

七君 おぼつかなまだ白雲の餘所ながらみつと賴まむことのはかなさ

藤宰相殿の御方、

八君 音にのみ聞きつるものをみつの濱見なれてのみも思ほゆるかな

右のおとゞの御方、(二)

大君 きゝ渡りはつかに今日ぞみつのはま見つゝは過ぎじ船宿りせむ

〔考異〕
(一)まだ＝又
(二)右のおとゞの御方＝大將殿

〔語釋〕

(二)膳中將なるべし、仲忠

(三)涼

(四)淀川の岸にあり

(五)かうぶりとは叙爵即ち五位に叙せらるゝをば五位の袍の色の紅なるを思ひてよめる也

(八)淀川尻にあり

〔考異〕

(一)男ども…一つには—男御舟には

(六)縫はで—ぬがで

(七)川べなる—川づなる

(九)おりゐる—立ちゐる—おりぬる

ち、三には御方々七所ながら奉り給ふ。御船一つに大人十二人、童四人、下づかへ四人、やんごとなきを擇ばれ、さうぞく御船毎にかざり男ども(一)も心殊に整へたり。又の御船に、左大將殿、頭中將(二)、源中將(三)、源宰相など、一つには御聟七所奉る。そこばくの宮殿の人、あるは御船にさふらひ、或は小船どもに乘りてわたり給ふに、かうぶり(四)柳に到り給ひて、大宮、

女一名(五)にしおはゞあけの衣はとき縫(六)はで綠のいとをよれる青柳

女御の君、

仁壽殿川(七)べなる柳が枝にゐる鷺をしろくさくともまづ見つるかな

あて宮、

色かへてひさしくなれど青柳のいとゞふかくも見ゆる綠か

など言ひて長洲(八)に至り給ひて、鶴の立てるを民部卿の宮の御方、

五君千歳ふるたづのおりゐる(九)今日よりや長洲てふ名を人の知るらむ

峰の霞と　ならましや　猶たらちめを
思ふや(二)と　ながめてくらす　春(一)の日の
日暮しまでに　立つ雁の　かずもかずには
有りも有るかな

とて歎き渡り給ふ。

かくて彌生の十日の日ばかりに、初の巳の日出で來たれば、左大將殿(三)には、上巳の祓しに、難波へ、方々、男君だちも、殘り少なくおはします。百五十石ばかりの船六つ、檜皮ぶきの船具して、金銀瑠璃に裝束かれ、大きなる勾欄をうちつけ、(四)ほてにあげて、白き絲を太き繩になひ、大いなるはくゐ(五)にて、船の調度につかひするゐて、御簾どもなどもぬるもの(六)なくして、船六つに船子二十人ばかり、舵取四人、さうぞく選び、かたちを整へ、國々の受領ども、一つづつ御船のさうぞくどもして奉りたるに、一の御船(七)に大宮、女御、あて宮(八)、二に彼方(九)の北の方の御男君だ

〔語釋〕
(二)眞砂君が死後なほ父母を慕ふかと思ひて
(三)正頼卿
(九)大臣上

〔考異〕
注　三月上巳の祓に正頼一家を擧げて難波に遊ぶ
(二)やと—には
(四)ほてにあげて—ほにあげて—ほとにあげて
(五)はくゐ—はくゑ
(六)なく—など
(七)御船に—御船は
(八)あて宮…三には—あて宮に奉り給ふ二には大い殿の君男君たちに奉る三に

〔語釋〕
（一）誤あらんか
（二）木下歟
（五）餘所ながらも實忠が音信さへせば眞砂君が死する事はあるまじ

〔考異〕
（三）えだ―した
（四）だにも―だにぞ

親を戀ひつゝ　泣きためし　から紅の
海を出でて　黄なる泉に　おり立ちて
いさごの波（一）を　うちそむき　悲しきまでに
つきにけり　夜々ごとに　ぬばたまの
衣の下に　臥し渡り　しのゝめ毎に
起き居つゝ　花のこ（二）もとに　遊び來し
我が身の一人　行く道に　枝なる雪の
消ゆる間も　遅れんとやは　思ほえし
宿の板間は　荒れまさり　木のもとはかく
漏りぬれど　玉のえ（三）だにも　ありしかば
蝶鳥（四）だにも　通ひこし　空行く雲の
（五）よそにても　有りやと問はど　深草の

〈語釈〉
（一）齊忠が花麗なる正頼の邸にのみゆき居るをいふ

淵にも瀬にも　おくれじと　契りしものを
いつの間に　（二）花の色々　咲きまがふ
春の林に　うつり居て　あとだに見えず
なりゆけば　明くる朝を　眺めつゝ
あらしの風の　音にだに　聞えやすると
待ちくらし　暮れ行くときは　飛ぶ鳥の
影や見ゆると　頼みつゝ　松の葉しげき
奥山の　深く悲しと　思ひつゝ
月日の行くも　知らぬ間は　二葉に生ひし
撫子を　来る朝ごとに　かき撫でて
何時しかいろの　薄き濃き　盛をだにも
見むとのみ　思ひし程に　うちはへて

給ひける。

かくて男もなき所に、つれ〴〵と眺めわたり給ふ。此の北の方、昔よりかたち淸らに心ある名取り給へり。女の君もよき程にて物したまへば、萬の人聞え給ふ中に、左大將殿の中將(一)の君、兵衛督(二)の君、兵部卿、馬の頭の君など、此の北の方を切に聞え給ふを、(三)ちかくて見給ふ事限りなし。眞砂君の戀しくおほえ給ふ折々なむ、

實忠妻　聞くだにもゆゝしき道と思ひしを君もゆきぬと見るが悲しさ(四)

そで君、

竝びゐてあそびしものを鳰鳥の涙の池にひとりゆくかな

とてあかず覺ゆれば、母君、

思へども　悲しき物は　池水の

長閑けき事を　むすびつゝ　鴛鴦の子どもも

ならび居て　憂きもつらきも　もろ共に

〔語釋〕

(一)正頼の三男祐澄

(二)「兵衛佐の君」歟、正頼の四男顯澄なるべし

(三)誤脱あるべし。「ちかくて」を「ちかくかく」とも「ちかくてかく」とも「ちかく」ともかけり

〔考異〕

(四)悲しさ—かなしき

〔語釋〕
（一）「まゝ」は乳母の自稱
（二）生きる譯にゆくまじ
（三）妻をいふ
（七）わが願を成就せしめ給へと思ひて
（八）眞砂君の法事の願文
（九）實忠が法會の僧に多くの布施を與へたる也
〔考異〕
（四）この上の戀ひ―この上をもしらで戀ひ
（五）佛經書き―佛かき經かき
（六）調じて―「調」ナシ

ずば、まゝ（一）よりはじめて、何を頼みて仕うまつらむ、とこそ思さめ。つらく、あるまじき父君により奉りて、身をも徒らになさんとは思すな」と泣く〳〵言ふ。眞砂君、「さは思へど、えぞ（二）有るまじきや。我が亡からむ代に、上に良く仕うまつり給へよ」など言ひわたるに、遂に父君を戀ひつゝ亡くなり給ひぬ。母君惑ひこがれ給ふに効なし。

源宰相は、かゝる事をも知り給はで、思ほす事のならぬをのみ思ひ入られ、臥し沈み病になり、或る時は遊びありきつゝ、旅住みをし、思ひしめ、此の上（三）（四）の戀ひ悲しみ給ふをも知らぬほどに、眞砂君の七日のわざを、母君佛（五）經書き、法服調（六）じて、比叡にてし給ふほどに、宰相、思ひ成し給へ（七）と、御社に詣うであひ給へるに、此（八）の君のわざをする願書に、親の心變りたるにより、一人ある男子を徒らになしたることを、面白う作れり。一山の人悲しみのゝしる。源宰相驚きて、泣き惑ひ臥し轉びたまへど、効なし。多（九）くの誦經し給ふ。さてなむ眞砂君の亡きをば知り

など長閑に思したれ。げに如何にと思ふものからなむ。眞砂は數知らむ時に

……やと宣へ。

とあり。北の方見給ひて、涙を流して經給ふほどに、眞砂君十三歳そで君十四歳(一)なり、父君撫で養ひ給ひしのみ戀しくて、遊びもせず、物も食はで思ふ程に、(二)父君の我を思ほしゝ時には、遊びしに片時立ち退きしをだに、苦しき物にこそし給ひしか、今は前を渡りありき給へどとぶらひ給はぬは、御子とも覺さぬなめり。親無き人は、心もはかなく、才も習はで、官爵も得ること難くこそあなれ、我こそ然るべき人なゝれ、など思ほしく屈して、病つきて、只よわりに弱りぬ。眞砂君めのとに言ふ樣、(三)眞砂「われこそ、父君の戀しく覺え給ふに、えあるまじく覺ゆれ。(四)上に仕うまつらんと思ひつるものを」と泣く〳〵言ふ。めのと、「おな忌々しや。吾が君は、などか宣ふ。上も今はかくおほん德もなくなり給ひつれど、君だちのおはしませばこそ、行く先を賴み聞えて、許多の人さふらへ。おはしまさ

〔語釋〕
(一)「十三歳そで君十四歳なり」此十一字傍注の攙入歟
(二)以下眞砂君の心
(四)母に

〔考異〕
(三)言ふ樣—いふげに—いふはに

かなしき妻子の上をも知らで、彼の殿に籠り居て、吹く風鳥につけても訪らひ給はで、年月になりぬ。北の方思ひ歎(一)き給ふこと限なし。二月ばかりになりぬ。殿の内漸(二)う毀れ、人少になり、池に水草生え(三)わたり、庭に草しげり行く。木の芽花の色も、昔におぼえず、朝には、若し人(四)や訪れ給ふと待ち暮らし、夜うさりは、影にや見ゆると頼みわたり、涙を流して眺め渡り給ふに、春の雨つれ〴〵と降る日、雨籠りて、若君たち、父君を戀ひつゝうち泣きて居給へるを、母君あたらしくかなしと思ほして、鶯の巣に子を生み置きて雨に濡れたるを取らせて、かく書きて源宰相に奉らせ給ふ。

實忠妻　春雨とともにふる(五)巣のもり憂きは濡るゝ子どもを見るにぞありける

これに劣らぬ宿は見苦しうなん。さても眞砂は數知らずとか聞ゆめる。

とて奉らせ給へり。宰相げに如何に思ふらむと思ほえて、

實忠　棲みなれし宿をぞおもふ鶯はなにに心もうつるものから

〔語釋〕

(一)正頼邸

(四)實忠をいふ

(五)ふる＝古、降。もり＝漏り、守り

〔考異〕

(二)漸う—やうやくに

(三)生え—はへ

へど、怪しがりて棄て給ひつ。

忠こその阿闍梨も、大願を立てて聖天の法を不斷に行ひ、加持したる水を硯の水(一)にして奉り給ふ。

盡きにきと思ふわがみの悲しさを君はいかでかこよらとめけむ

と聞え給へり。なほ佛の御德なし。

かくて源宰相(二)は、三條堀河の程に、廣く面白き家に住み給ふ。うへに、(三)時の上達部のかしづき給ふ一人女、(四)十四歳にて聟取られて、また思ふ人も無く、(五)いみじき中にて、「此の世には更にも言はず、行末にも、草木、鳥獸となるとも、友だちとこそならめ」と言ひ契りて棲みわたり給ふに、男子一人、女子二人。女子はそで君、男子をば眞砂君といふ。(六)眞砂君をば、父君片時え見給はではあらず、撫で養ひ給ふほどに、殿の內豐かに、家を造れること、金銀瑠璃の大殿に、上下の人こゑたる(七)如して經給ふに、此のあて宮に思ほしつきてより、年頃の契をも忘れ、

⑬ 忠こそ法師歌をあて宮に贈る

〔語釋〕
(二)實忠
(三)誤あるべし
(五)他に寵愛の女なく

⑭ 實忠正賴の邸に留まりて妻子を顧みず。妻子の悲嘆。長子眞砂君の病死

(七)「うゑたる」歟

〔考異〕
(一)硯の…奉り—硯水にて奉れ
(四)給ふ一人女—給うけるひとつ女
(六)いふ—なむいへり

土器取り給ひ、まうち君たえず流しなどす。御表つくり果てて暫し候ふに、魂消え惑ひ炎燃ゆる心地す。大内記思ふ樣、昔の試策の歩みにかく覺えしかば、出で立ちてこそ、今はこの御あたりにも候ふなれ、なほ此のこと致してむ、と思ひて、宮あこ君にかく書きて奉る。

藤英 物おもふに胸だにもえぬものならば身より炎は出さゞらまし

隱れ所のなければにや。

など書きて藤英「これ世の常に聞ゆるなり。御覽ぜさせ給ひて御返り聞え給へ」といふ。宮あこ君、「更に斯樣の物見給はずなむある。今さりとも、斯うなむ聞えむ」とて、宮あこ「久しう文を承らぬかな。他人にはな讀みそと宣へば、いと怪し」内記、藤英「暇の更に侍らねばなむ。然はありとも、聞ゆる事だに顧み給はゞ、學士をば、仕うまつり、文もいとよく習はし奉りてむ」宮あこ君、「物の師ごとにかく宣へばこそ、いと無才になりぬべけれ」など宣ひて、宮あこ君、あて宮に奉り給

〔語釋〕
（一）盃をめぐらす也
（二）あて宮を思ひて也
（七）普通の手紙なり
（八）「斯うなむと」なるべし。斯く〳〵とあて宮に取次ぐべしと也
（九）讀書を藤英に習はぬ哉
（一二）あて宮への文の取次をよくして下さらば

〔考異〕
（三）炎燃ゆる—炎も見ゆる
（四）思ふ樣—思ふに—思ふほに
（五）歩み—試み・
（六）こそ今はこの御あたり—こそは今はこのみたち
（一〇）な讀みそ—な見せそ
（一一）怪し—ふ〳〵や
（一三）仕うまつり—仕うまつらず
（一四）いと—ナシ

藤英の大内記、時なること二つなし。東宮には學士、内裏の殿上ゆるされ、文つくり日記書きなどして、難き文、面白き文をも片時に作れば、(一)公には(二)いみじうかしこきものにし給ふ。よき人々、聟に取り(三)給はんと宣ふを、耳にも聞き入れず。藤英「衰へ迫れる時には、這ふ蟲、蟻とも、木傳ふ鳥とも貶し言ふぞかし。頭の髪に火焔のつき、大海に流るゝを助くることもなし。恥を棄て、身を顧みず出で立ちて、時の上達部に見え知られしかばこそ、いさゝか人々しくもなれ。唯そは一つは天道、一は學生の力なり。昔、天降れるかと見えし人に肩を並べ、上に見し人を下に見て、もとよりも及び難かりし百敷を見馴すこと、佛の御徳なり。我を言ひまさぐる公卿たち、(四)あけの衣主らに御女あはせよかし。我を(五)取りせば、昔の御心に違ふべし」など言ふ程に、(六)左大將のおとゞ、東宮の大夫に物し給ふを辭し給ふ表つくらせ給ふとて、(七)召して、南のおとゞしつらはせて候はせ給ふ。おとゞ御裝束して逢ひ給へり。(八)ものいと淸らにて賜ひなどして、御土器賜ふ。君だち皆

藤英の榮華。宮あこ君を介して文をあて宮に贈る

【語釋】

(四)紅衣を著る身分の人即ち五位の人

(五)聟に取らばの意なるべし

(六)正賴

(七)藤英を正賴がよびて

(八)饗應したる也

【考異】

(一)作れば―作り

(二)いみじう―ナシ

(三)給はんと宣ふを―給ふを

涼　ありそ海のまさごの數は知りぬれど通ふばかりのあとをこそ見ね
　　譬ふべき方こそ覺えね。
御返りなし。侍從、御前のこのめのうちけぶりたるを見給ひて、かく聞え給ふ。
仲澄　わが如や春の山邊も焦るらむなげきのこのめ萠えぬ日もなし
　　(一)山にもみちぬる心地こそすれ。
など聞え給へど、いらへ聞え給はず。源宰相、
實忠　萠えいづる若楓ともなりぬらむさてもや人に及ばぬと見む
兵衛の良佐、(三)
行政　魂を人にかよはく(四)なりぬればわがあつさをも知らでやあるらむ
　　と思ひ給ふるこそ、いみじうつらけれ。
などあり。

〔語釋〕
(一)仲澄
(二)古今「わが戀は野にも山にもみちぬらん思ひやれどもゆく方もなし」
(三)良峯氏なる故良佐といふ也
〔考異〕
(四)かよはく—かよはて

とて、(一)

正明身をなげん方さへぞなき人を思ふ心にまさる谷しなければ(二)

如何にせん〳〵。

と聞え給へり。御返りなし。

三の親王、雨の降りたる頃、御前の紅梅の匂ふ盛に、

忠康くれなゐの涙の流れたまりつゝ花の袂の深くもあるかな

大空さへこそ。

など聞え給ふ。頭中將、(三)

仲忠涙川うきてながるゝ今さへや我をば人の頼まざるらむ

袖の濡るゝは人のとがめらるはや。(四)

など聞え給へり。源中將、(五)(六)

〔語釋〕

(二)古今「世の中の憂きふし毎に身をなげば深き谷こそ淺くなりなめ」

(三)「頭」は「藤」か

(六)涼

〔考異〕

(一)とて―とてなむ

(四)はや―にや

(五)など―と

〔語釋〕
(二)上の古今の歌によりていへり
(三)古今「行く水に數かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」
(五)「給ふよりも」とかける本もあり。「給へんよりも」なるべし

〔考異〕
(一)とーなど
(四)ころかなー心か

　多くの年月をえこそこしらへずなりぬれ。
(一)と聞え給へり。あて宮見給ひて、「(二)春の殘はまだ多かめるものを」など言ひて、
これかれ笑ひて御返なし。
兵部卿宮より、
　(三)數かくとか言ふ様なれど、思う給へやる方なければ、いかでか思ひ給へ
忘れんとて、
　　二つともふみゆく方はなきものを跡につきつゝまどふころかな(四)
あないみじや。如何様にせむ。
と聞え給へり。平中納言、
正明 斯くのみ思ひ給はんよりも、世に住まずもがなと思ひ給ふれ(五)ども、それ
さへ心にもかなはぬものにこそ。

〔語釋〕
（一）正賴の邸内
（二）「ななし果て」なるべし
（三）古今「今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは」
〔考異〕
（四）あらぶる―あれたる

らず惑ひこがれつゝ、殿（一）のうち片時離れず、御前の簀子を離れで、草木につけつゝ、涙を流して、斯くぞ聞え給ふ。

實忠 言の葉も涙も今は盡きはててたゞつれ〴〵とながめをぞする

いでや、聞えさすべき方ぞ覺えぬ。こゝらの年頃、思う給へ惑ひつることの甲斐なく、人傳ならで、夢ばかりも聞えさせで止みぬること。吾が君や、雲居の餘所にても、聞えさせてしがな。今暫しだに徒らになし果（二）て給ひそ。

と聞え給へれど、御返りもなし。右大將、

兼雅 今は聞えさせむもいと畏けれども、（三）立つこと憂き蔭の心地してなむ。

いでや、

八百萬（四）荒ぶる神は祈ぎつれど君は物きく時のなきかな

など聞え給ふ。又東宮より、

いづこにか包(一)まざるべき嬉しさは身よりもことに餘りしもせじ

(二)袂にしもあらじや。

と宣はせたり。あて宮、

雲にまだおよばぬ身より餘らぬは永き心のなきにやあるらむ

と思ひ給へるなむ。

など聞え給へり。

かくて東宮に、宮(三)もおとどもたのめ聞え給へりとて、聞え給ふ人々、精進忌をしつゝ、山々寺々に、不斷の修法(四)を七度、春のはじめ參(五)り給はむ日まで行はせ、いみじき大願を立て、或は山林に交りて、(六)金の御嶽、越の白山、宇佐の宮まで參り給ひつゝ願し申し給はぬ人なきなかにも、(七)源宰相は淵瀨(八)をも知

〔語釋〕
(二)古今「嬉しさを何につゝまん唐衣袂ゆたかにたてと言はましを」
(三)あて宮の父母
(四)「七度…日まで」衍文歟
(五)あて宮が東宮へ上る日まで
(六)大和の金峯山
(七)實忠
㊀ 懸想人等、あて宮入内の事定まれりと聞きて憂悶す
〔考異〕
(一)東宮―「東」ナシ
(八)をも―「を」ナシ

(一)源氏の中將、仲忠等が耳は、身にも添はで、彼の御琴のあたりに」侍從、仲忠「如何にぞ。覺束無かりつる心地せられつらむ」中將、仲忠「彼の御爲には、(二)さはさもひが物とぞ思ふや」いらへ、仲澄「(三)雁すむ里てふよりや」中將、仲忠「いざや。戀てふ山までも」など怪しからぬ戯しつゝ、殿まで歸り給ひぬ。

かくて殿に歸り給へるに、東宮より、

一日いと嬉しかりし喜びは、まづと思う給へしに、(四)今はのよなる心地してなむ。いでや、

君によりたゆげに(五)袖のひぢぬれば嬉しかりしもえこそつゝまね

(六)今だに早くを。つねにかはしまのまつにな思ひ給ひそよ。

など聞え給へり。(七)大宮かく聞え給ふ。

宮　包むべき袖のくちなば嬉しさも終になき身となりもこそすれ

〔語釋〕

(一)「源氏の中將」衍文歟、涼

(二)「さはさも」を「さはそらみ」とかける本もあり、いづれにしても詳からず

(十) 東宮よりあて宮に歌を贈る

(三)「雁すむ里」を「よりこしき」とかける本もあり、いづれにしても通じがたし

(四)通じがたし一本には「いまはやよしなる心地」

(七)女一宮

〔考異〕

(五)袖の—袖も

(六)今だに—今は

朱雀　若菜つむ野べをば知らで君にとは龜のを山の小松をぞひく

など聞え給ふ。

かくて東宮歸り給ふ。上達部、親王たちには女のよそひ、それより下(一)には程につけつゝ賜ふ。宮人、男には白きうちぎ、袴、女には裝束一くだりづつ東宮の御とも、殿上人、宮づかさまで賜はりぬ。

かくてこと果てて、大將殿にかへり給ふ。御車ども、霞のごとくに引き續けて、君だち、侍從の君より始めて、上達部ならぬ人は御馬にて仕うまつり給ふ。頭中將(二)、侍從(三)の君は、馬を竝べ手綱をかはして、物語をする序に、頭中將、

仲忠「世の中のかく(四)遊びなどは、吹上の濱にて盡きにきと思ふを、殿にこそと(五)りおかされずなりにけれな。宮あこ君の御舞、君の御箏は、三千大千世界に敵はあらじかし。其が中にも今日の箏の琴(六)の聲は、いみじかりつるものかな。

〔語釋〕

(二)「藤侍從」歟、仲忠なるべし

(三)仲澄

(四)樂歟

(五)「罷り置かれにけり」なるべし

〔考異〕

(一)下には—下は

(六)琴の聲—御聲

奉れよ」と度々宣へども、斯からむ序にとてなむ」宮、「あさましう果敢な(一)きうちにも、萬の事かたはなるをなむ」后宮、「いでや、ことに恥かしげなる人もなし。(二)右大將殿のばかりぞ、容貌心目やすく、まうのぼりなども屢せらるめる。さては殊(三)なるもなかめり。(四)大殿のは、方々にもまうのぼり給ふこともなくて、さがなさをのみぞ、事にはせらるめる。猶早う參(五)り給へ。あぢきなう責(六)めらるゝや」など聞え給ふ。

后宮、内裏に、今日さゝげ物ながら、藏人の少將を御使にて、かく聞え奉り給ふ。

大后今日よりは君にを見せむちくま野に萬代つめる今日の若菜は

(七)など奉り給ふ。内裏にも、かねてより然る御心ありて、黄金の山(八)いき物などありて、かく聞え給ふ、

〔語釋〕
(一)あてこその幼稚なる由をいふ也
(二)兼雅の女、梨壺
(四)源季明の女、昭陽殿
(五)「參らせ給へ」となるべし
(六)東宮に
(七)「などとて」なるべし
(八)不詳

〔考異〕
(三)殊なるも一ことなる事あるも

〔語釋〕
(二)「戀ひしなん後は何にせん生ける身の爲こそ君を見まくほりすれ」
(三)上の句は多くの女を寵し給ふ由評判ある故の意
(四)「后宮など聞え給ふ」とある本もあり。「后宮に聞え給ふ」なるべし
(五)東宮が懇望せらるれども
(六)承香殿、嵯峨院第四の皇女
(七)東宮へあて宮を差上げず
(九)あて宮東宮に上らば寵甚しくて滅多に里に下る事は出來まじ
(一〇)我に對して
(一一)東宮の詞
〔考異〕
(一)こそ—そ—こと
(八)などそは—などかうは。「などかそは」なるべし

す」大宮、「今つれなき人賴まるなる。今暮方になむ」東宮、「おなじくば心長閑からぬこそ(一)。(二)後は何せむなどこそ言ふなれ」とて、

東宮　年ふれどわが身かはらぬ子日にはまつもかひなく思ほゆるかな

と聞え給ふ。大宮、

(三)時わかず子の日のあまた聞ゆればかはらぬ松とえこそ賴まね

など聞え給ふ。東宮「今かしこまりも」などとて立ち給ひぬ。

かくて(四)后宮聞え給ふ、女二「此のあてこそと云ふものをなむ、(五)かく宣はすれども、(六)四の宮などもかくて候ひ給へばなむ、(七)彼處にもえさふらはせぬ」后宮、「(八)など、そは參り給はざらん。殊更心ざしてもこそは參らすれ。(九)さて里住はえものすまじうこそ物すめれ。さて物し給はゞ、御後見ばかりはいとよう物してむ。(一〇)此處に、思ほし勝るにやあらん、(一一)「聞えて久しくなりぬるかしと、聞え

〔語釋〕
（一）常に手紙にて申上げ居るあて宮の事も
（二）差上ぐる樣なる子どもなければ
（四）末々の御宮仕をさすべき娘でもあらば差上げたしとは思ひ居れども
（五）不詳。「いたち」を「ゐたち」とも書けり
（六）誤なるべし
（七）泥中の蓮といふ事もあれば多くの女の中に拔群なるべきあて宮の運命を危ぶむ事勿れといふ事なるべし
〔考異〕
（三）恥棄てて―はなちすててし

しや。御消息などは常に聞ゆれど、それはた聞えぬよりも覺束なくなん」東宮「いかでそれらも、かゝる序にこそ承りぬべかなれ」大宮、「幾度にかは聞き定め（一）給へらん」東宮、「對面する人には、常に物するは、斯うなども聞え給はずや」大宮、「承る時もあれど、さるべき子ども侍らざめれば、心ときめきに思ひ侍りつるに」東宮、「思ほし棄つる（二）にこそはおなれ。聞えずとも思ほし出でやすると思へど、然もあらねば、恥棄てて（三）と云ふばかりになむ聞ゆる」大宮、「言ひ知らぬが中にも、（四）雜役の藏人などにも仕う奉りぬべきもの侍らば參らせむ、と思ひ給ふるを、やむごとなき人數多さふらひ給ふと承れば、（五）いたちのまなき心地してなむ」東宮 打笑ひ給ひて、東宮「參り給はん程こそ、倉の鼠の心地（六）もすべかなれ。いと然な思しそや。何のなかの蓮（七）とかや言ふこともあるを。餘所にては常に覺束なきを、かゝる序に承り定めてむ。僞とや思

など聞え給ふ。后宮、銀の櫛のはこ六よろひ、黄金のはこ、壺ども(一)の中に萬のあり難き物ども入れて、世の中にあり難き御すゑびたひ、つらぐし、(二)(三)笄子、元結、大宮仕のはじめの御調度奉り給ふ。

かくて東宮、后宮に參り給ひて、御物語など聞え給ふ。大后「かく時も知らぬ住居せし程に、年月過ぎけるも知られざりつるに、(四)今日此の君の知らせ給(五)ふに、殘り少なくなりにける行く先も哀れに思ほゆるを、かく渡りおほしたれば、末の世つぎ給ふ心地になむ」東宮、「年のはじめにも參りなむとせしを、今日かく參り給ふと承りて、おなじくばとてなむ。(六)仲賴らまうけてさふらふ心地なむする」と聞え給ふ。

かくて大將殿の大宮(七)に對面し給ひて、東宮「久しくもなりにけるかな。后宮に參りて侍りし時の儘にや侍らむ。(八)三の宮のさとのまゝにや」大宮、「あな久(九)

(二)頰櫛の義なるべし
(五)女一宮をいふ
(六)誤脫あらん歟、「仲賴は」とある本もあり
(七)女一宮

〔考異〕
(一)どもの中に—どもなどに
(三)つらぐし—へらくし—ゑりくし
(四)つるに—つる程に
(八)三の宮の—「の」ナシ、此處いづれにしても聞えず
(九)久しや—久しやとて

〔語釋〕
(一)少しひき給へ
(三)「藤侍從」歟
(四)當今の名手

〔考異〕
(二)給へば―給へれば
(五)松の―松が

箏の琴二つ調べて、大后「此の上には多くもあらず」とて奉り給ふ。あて宮、「更に」など聞え給ふ。上、大后「さ言ふばかりには聞えずや。猶少や(一)」と聞え給へばなむ、ひゞき高く面白く仕うまつり給ひける。「只今誰ぞや、斯ばかり(二)の琴思ほえぬ」など驚きて、帝 東宮聞し召す。頭中將(三)、「誰ならむ、我が手に覺えたるかな、あらじと思ふものを」などあるかぎりの人驚くこと限なし。東宮、「仲忠の朝臣聞くに恥かしからぬ手かな」と宣ふ。左大將のおとゞ涙を落して聞き給ふに、皆人、あて宮なるべしと思ひぬ。后の宮、「いと有り難し。(四)只今の御手なめりかし」とて、

大后つねよりもけふの子日の嬉しきはひく四つの緒を聞くにぞありける

あて宮、

木隱れて風のしらぶる松(五)のねは今日もひかれぬものにぞありける

〔語釋〕
（一）「のぼる」は「のぶる」歟
（三）外から見ゆる方を几帳にて掩ひ
（五）「ちゝなどの」又「ちちなくの」「ちゝなくの」等に作る。いづれにても通じがたし
（六）「あはれや」歟
〔考異〕
（二）て—ナシ
（四）給ふ—給ひて
（七）裝束かれたる—ナシ

ど涙落さぬなし。次ぎて家あこ君、陵王舞ひ給ふ。只生ける陵王に舞ひ給ふ。驚き怪しがり給ひて、帝、舞ひはつるすなはち、二所ながら召しあげて土器取らせて、斯う宣ふ。

嵯峨過ぎにける齡ぞのぼる（一）雲ちかく遊びはじむるたづの雛鳥

宮あこ君、

君にとて世々をば思ひしら雲につらねて遊ぶたづの雛鳥

とて土器取り給ふ。后宮、女一宮よりはじめ奉りて（二）、大將殿の君たちに御琴彈かせ奉り給ふ。きさいの宮、「あてこそは、など見え給はぬぞ」とて、あらはなる方に、御几帳さし出でさせ（三）、大后「猶此處に。あらはにもあらず」とて姉君たちかしづきて、參らせ奉らせ給ふ（四）。きさいの宮、「理こそはありけれ、ちゝなどの（五）口開けさせなどしけるは。いであなれや（六）」とて裝束かれたる（七）

(一)「内侍のかんの殿」は大宮の誤なるべし
(二)「御かへし」なるべし
(三)どちらか一つは
(四)嵯峨院
(五)正賴
(八)仲賴
〔考異〕
(六)帝より—帝を
(七)世の…の—様々の御才の盛にて

し、(一)内侍のかんの殿、松の下に鶴するゐて、
おのれだに齢久しきあしたづの子の日の松の蔭にかくるゝ

御、(二)
われひとり鶴と松とを見るよりも(三)ひとつ〳〵は君にとぞおもふ

など宣ふ折に、東宮、年のはじめに未だ參り給はぬを同じうは、とて、今日まゐり給へり。(四)院の帝驚きて對面し給へり。かくて樂始まりて、君たち舞仕うまつりなどす。(五)大將殿の宮あこ、落蹲舞ひ給ふ。上達部かしづきて出だし給ふ。舞臺に立ち給ふに、(六)帝よりはじめ奉りて、そこらの人驚く。「只今の世こそは(七)世の盛にて、樣々の才人のかたちさへ勝れてあれ。其が中にも選びとゝのへて、この世に見えぬ業をせむとせし、吹上、神泉の御幸なんどにも見えざりし舞の手かな」など騒ぎ滿ち、上達部、親王たち習はせる少將な(八)

ね、繚のうへの袴樂所の君たち、闕腋、柳がさねなど著つゝ參る。かくて暫しあれば、御火桶(一)まゐる。沈の火桶、銀のほとぎ、沈を火箸にして、黑方(二)を鶴のかたにして、銀のはしなどして、帝后の御前に參る。御臺參る。暫しあれば、左大將、折敷九十、おなじ(三)黃金の華足(四)、萬のもの數を盡して參る。上達部、殿上人、とり次ぎて參る。女御の君のまかなひ民部卿(五)、御前に、沈の折敷同じごとして、打敷、參る物おなじごと。左衞門督(六)の殿より、大宮より始め奉りて、姫君たちの御前、蘇枋の折敷二十づつ、彼方のおほん腹の君たち、御方々よりも大宮(八)の宣旨、お許人、內侍、命婦、藏人の前(七)に、衝重して賜ふ。それよりもまで(九)給へる上達部、親王たちの御前、遊び人、舞人の前まで參りはてぬ。又銀、黃金の若菜の籠、おなじ壺ども、色々のつくり枝どもに、よろづの寶物ども淸らにし入れて、持てつらねて參り給ふ。御かざ

〔語釋〕
(二)合せ香の名
(五)五の君の夫
(六)七の君の夫
(七)大臣上臈の子ども、五男顯澄、六男兼澄。六の君等
(八)「后の宮」なるべし、宣旨は侍女
(九)參列せる

〔考異〕
(一)御火桶まゐる—御火桶火桶四つまゐる
(三)おなじ—おなじく
(四)華足—けうそく

〔語釋〕
（一）「人の」の「の」衍文なるべし
（二）忠澄
（三）「兵衞佐諸澄」なるべし
（四）淸正
〔考異〕
（五）ばかりに—「に」ナシ

秋ごとに今宵の月を惜しむとて初雁の音を聞きならしつる

九月。紅葉見る人の山邊にあり。田刈積めり。中將實賴、

織り敷ける秋の錦にまとゐして刈りつむ稻を餘所にこそ見れ

十月。網代ある河原に、船どもこぎ浮けたり。左大辨、

漕ぎつらね氷魚はこぶとて網代にはおほくの冬を見なれぬるかな

十一月。雪降れるに、人濡れたり。兵衞督の君、

降りにけるよはひもいさや白雪のかしらに積る時にこそ知れ

十二月。佛名したる所。左衞門の督の君、

かけて祈る佛の數し多ければ年に光や千代もさすらむ

など詠みて、少將仲賴書けり。辰の刻ばかりに事はじまりて幄うち、舞臺裝ふ。笛、箏、鼓、響きつ。樂所、舞人も參る。舞の君たち、靑色に蘇枋がさ

〔語釋〕
（一）不審、源宰相歟然らば實忠なり
（三）「頭中將」は「藤侍從」とあるべき也
（六）雁行字を成すの意
〔考異〕
（二）誰に―君に
（四）居り―あり
（五）池水の―池水も

三月。はらへしたる所に松原あり。源中將、
禊する春の山邊に並みたてる松の世々（一）をば誰（二）に寄すらむ
四月。神祭る所に山人歸れり。（三）頭中將仲忠、
神祭るさか木折りつゝ夏山に往き返りぬる數も知られず
五月。人の家に、橘に時鳥（四）居り。中將祐澄、
我が宿の花たちばなの時鳥千代ふる里と思ふべきかな
六月。人の家に池あり。蓮おひたり。少將仲賴、
（五）池水のみどりも深き蓮葉にのどかに物の思ほゆるかな
七月。七夕祭りたる所に、少將行政、
彦星のかへるに幾夜逢ひぬれば今朝來る（六）雁の文になるらむ
八月。十五夜したる所あり。雁飛べり。侍從仲澄、

かくて參り給ひて、宮(一)、后(二)の宮に聞え給ふ、女二「怪しく其の事となきものから、騷がしくのみ侍るを、見給へむづかりて、久しくえ參らざりつる事。先つ頃も御藥のことおはしますと承りて、驚きながら參り來し(三)を、此の內裏に候ふ(四)がほと〳〵しく侍りしを見給へあわててなむ」后の宮、「此處には、事にもあらざりけり。例の熱などなむ有りけり(五)。などか物し給ひけむ」など宣ふ。かくて彼の御座所しつらひ、御調度ども、有るべき樣にまかなはれたる、玉光り輝く。御屛風の歌、

正月。子の日したる所に、岩に松生ひたり。上に(六)鶴遊べり。右大將(七)(八)、

岩の上にたづのおとせる松の實は生ひ(九)にけらしな今日に逢ふとて

二月。人の家に花園有り、今植木す(一〇)。民部卿(一一)、

植ゑそむる(一二)人ぞ知るべき花の色は幾代見るにか匂ひおくとは

九 嵯峨院の大后の六十の賀。あて宮琴を彈く。東宮あて宮の入内を大宮に迫る。大后、大宮にあて宮を東宮に奉らんことを勸む。

〔語釋〕
(一)正頼の妻女一宮
(二)嵯峨院の大后
(三)「來しを」は「來んとせしを」なるべし
(四)仁壽殿女御をいふ
(五)「けり」は「ける」なるべし
(七)兼雅
(一一)實正

〔考異〕
(六)上に—ほとりに
(八)右大將—左大將
(九)生ひ—老い
(一〇)今植木す—ナシ
(一二)をむる—なむる

たく淸らにならべするゑたり。御手水の調度、銀の坏一つ、御盥、沈を圓にけづりたる貫簀、銀の匜沈の脇息、銀の透箱、唐綾の御屏風、御几帳の骨、蘇枋紫檀なり。御几帳のかたびら、夏冬春秋、御裀御座など、いふばかりなし。御臺六よろひ、かねの御器に黃金の毛うてり。これらよりはじめてせぬ事なし。かくて廿六日參り給ふ。車二十、絲毛十二、かねづくりの檳榔毛十、うなゐ車二つ、しもつかへの車二つ。御前天の下の人のこらず四位五位百人、六位數知らず。御よそひ、大宮女一宮今宮までは、あか色に葡萄染のかさねの織物、唐の御衣、綾の裳、あて宮は十五同じあか色の織物五重がさね、上の御衣しろき織のうへのはかま。御供の人、靑丹に柳がさねのからきぬおをみずりの裳上下わかず著たり。わらは、同じごと。ともづかへ平絹の三重がさね著たり。

㊇大宮、六十の賀の爲に嵯峨院に參る

〔語釋〕

（一）誤脫あるべし

藤英　ころもでの色は二度かはれども心にしめることはかはらず

など思へども、斯くなむとも聞えず。忠こその阿闍梨、宮あこ君を呼びとりて、かく聞こえたてまつる。

うぐひすの谷よりいづる初聲も世にうき物と思ひぬるかな

かくは思ほえぬものにこそあなれ。

と聞えたれば、恐ろしとのみ思す、

かくて后の宮の御賀正月廿七日に出で來る乙子になむ、つかうまつり給ひける。まうけられたるもの、御厨子六よろひ、沈、紫檀、白檀、蘇枋なり。（一）こうの辛櫃などおほい織物にしきなどすはこ薫物藥の壺、硯の具よりはじめて、御衣六具、御衾御よそひ、夏冬春秋、夜の御衣からの御衣、御裳、御はしのおりたてちょしろかねをきてちことの蒔繪してうちの物色に隨がひて、ありが

〔語釋〕
(一)「などとて」歟
(二)誤あるべし
(三)こゝに歌あるべし
(四)六位の服を五位の服にぬぎ代ふる也

ときこえ給へり。御かへりなし。侍従の君、極月の朔日に、梅のしらけはてぬるを折りて、

仲澄　年のうちに下紐とくる花みれば思ほゆるかなわが戀ふる人

先こそ思ほゆれ。

なとて(一)見せ奉り給へど、見ぬやうにて物も宣はず。藏人の源少將、晦の夜、院の後うちよりまかでて、(二)斯く聞えたり。(三)年かへりて、朔日の日良佐、

政行　たちかへり年とともにやつらかりし君が心も越えたりと見む

藤英は宣旨賜はりて、六十が試賜はりて、年の内に、春かへりてうちかうぶりにあたりたれば、大將殿の御勞にて七日の日うちかうぶり賜はり、十一日に大内記になされ、東宮の學士になされなどして、時めく事二つなし。内宴に召されて、(四)あを色の衣に朱の衣換ふとて思ふ、

〔語釋〕
(一)「頭」は「藤」の誤
(二)「見たまへに」なるべし

など、きこえ給ふ。頭(一)中將仲忠、臨時の祭の使に出で立つとて、

仲忠　夕暮のたのまるゝかな逢ふ事を賀茂の社もゆるさゞらめや

神の御徳も見(二)たまふに今參りこむ。

ときこえ給へり。あて宮、「めざましや」など宣ひて、

あて宮　榊葉の色かはるまであふ事は賀茂の社もえこそ許さじ

神もおなじ心にや。

と宣ふ。三の親王、

忠康　ひとりぬる年は經れども冬山にまだひとはだの見えずもある哉

涼の中將露の置けるつとめて、

涼　いふことにこたへぬや何ぞ冬の夜は言の葉にさへ霜や置くらむ

とさへなむ覺ゆる。

兼雅　もゝしきにさふるをとめの袖の色も君しそめねば如何とぞ見る

かひなきものになむ。

ときこえ給えり。あて宮、

ひとしほも染むべき物か紫の雲より降れるをとめなりとも

思しかくるこそなめげなれ。

など宣ふ。兵部卿の親王小忌に當り給ひて、内裏より、

兵部　色ふかくすれる衣をきる時は見ぬ人さへも思ほゆるかな

いづれのおりにか忘れ聞えむ、あないみじや。

などきこえ給へり。あてみや、

あだ人のさはにつみつゝ摺れる色に何にあやなく思ひ出づらむ

なれならではえ宣はじかし。

㊆ 東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る

かゝる程に霜月の晦ばかりになりぬ。新嘗會のころ東宮よりかく宣へり、

東宮 ねぎごとを神もおどろく頃しもや君が心はしづけかるらむ

あて宮、

ちはやぶる神の前にはあだ人も思はぬことを祈るものかは

ふる雪をみて聞え給へり、

東宮 數ならぬ身は水のうへの雪なれや涙のうへにふれどかひなき

御覽じこそおとさらめ。

と、きこえ給へり。あて宮、

水のうへに雪は山ともつもりなむうきてのみふる人のかひなさ

あな見苦しや。

ときこえ給へり。右大將ぬし五節出し給ひて、内裏參りの夜、

〔語釋〕
（一）以下二人の心

良佐、この事をすと、いかで聞召しけむ、かゝる事すと人にも聞かれじとせしかど、（一）如何に思さむと思ひ煩らひて、なほ大殿の思さむ事、苦しう思ゆれば、少將良佐殿の君たち十所を、五所づつこまどりに取りて、少將は粟田といふ所の奥に、鳥もかよはぬ山の中に籠り、良佐は水の尾といふ所の奥に、同じやうなる所に、人にも知らせで籠りて習はすに、手どもの限同じうはと思ひてならはす。みこたち男君たちは、今のにて舞の師してうす。民部卿宮の御方の太郎君太平樂、次郎君皇麞など舞ひ給ふ。

畫詞 こゝは民部卿の宮の御方。舞師二人、樂人十人ばかり、殿上人などおほかり。物食ひ酒飲み舞の師立ちて舞ふ。君たち習ひ給へり。中務の宮の御子太郎君萬歳五常樂まひ給ふ。舞の師がくのゐかおほかり。左大辨殿の御方の太郎君すらうちうしやう殿の太郎君鳥の舞ならひ給ふ。

〔語釈〕
(一)大宮をいふ
(二)「せよとなむ」なるべし、一本には「生したてられよこれを聞えんとてなむ」
(三)「去年」又「しせむ」に作る、さらば「神泉」歟
(四)仲頼は何事をもつとめざりきと也
(五)行政をいふ
(六)仲頼
(七)「ことも」は「とこそ」なるべし

今この事しつべし、たゞこれになむ」とて、正頼「まめやかに、こゝにものし給(一)ふなむ、「院の后の宮、來年御年足り給ふ年なるを、え承り過すまじうなむ。家あこ宮あこらに舞仕うまつらせむと思ひ給ふるを、人の古せる手は傳へじとなむ思ふ、御弟子にて生し立てられよ」と物せよなむ(二)」少將久しく思ひそひて、仲頼「更に仕うまつらぬ事なり。自ら御覽ずらむ(三)、去年吹上の濱などにてこそは、人仕うまつらぬなどなく仕うまつるめりしか。その折なども、仕うまつらずなりにしことなり(四)」行政も同じごと申す。おとゞ、正頼「朝臣さへ(五)斯うものせらるゝめればこそ、かの少將(六)の宣ふことも(七)おぼゆれ。宮あこをば少將落蹲、兵衛佐は家あこ陵王はゞかることなく習はし、男どもに、樣々の物の音どもなどに合せて出だし立てらずば、生々世々の互の仇とならむとす。習はし給ふべくば、連理の契をなさむ」など、言ひかけて入り給ひぬ。少將

〔語釋〕
（一）忠澄、諸澄、祐澄
（二）「からまひおや」一本「かれまひをや」ともあれどいづれも解しがたし
（三）「ならはさむ」なるべし

〔考異〕
（四）今日は聞えん—今日はじめんと

だならむやは」とおとゞ、正頼「男子はあそびし女子は物の音かきならして聞召させ給へかし。舞には親王たちの御子をも、(一)左大辨兵衛督中將などの御子ども出ださるなりや」大宮「宮あこ家あこなどをば、例の人にはあらで、仲賴行政らして、いかで習はせむとなむ思ふ」とおとゞ、正頼「中將どの院などは、うしろめたうはあらじ、また女たちも恥かしげにはよもあらじ、からまひおやこ(二)の人々ならば、さざらむ(三)、またせぬとなめれば、さはありとも宣ひなむかし」とて、召しに遣はして、人もなき御簾の内に召し入れて、正頼「年頃大事と思ふ事を、主たちのおなじ心にし給はぬに、忍びて物することとなむあるを、然言ひてあらむやは、今日(四)は聞えんとてなむ、消息ものしづる」少將仲賴「甚畏し。何事にか侍らむ。御大事を宣ひ聞ゆべく參るべきと宣へるになむ、承たまはりおどろきぬる」とおとゞ、正頼「ふし柴を山と積み、林としても、たゞ

(六) 大宮母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備

(語釋)
(二)此處誤あるべし
(三)嵯峨の大后をいふなるべし
(四)「いぶかしげに」なるべし

(考異)
(一)みのなのもえ―みのなるもゝ

とはえ思ひ給へよらぬは、いと畏きぞや」侍從、仲澄「藥の杵はいかにぞ」中將、仲忠「(一)みのなのもえくはぬ心地ぞするや」などいひて。

かくて大將殿の宮年頃、御母后の宮の六十の賀つかうまつりたまはむ、御厨子御屏風よりはじめて、うるはしき御調度どもを、綾錦にしかへして、おとゞにきこえ給ふ、大宮「いせの君、そのかみ(二)こに對面したりしに、宮の(三)上の、參らぬことを(四)ゆふかしげに宣ひけるを、いかで、思ふ事して參りにしがな」おとど、正頼「いと易き事にこそあれ。來年こそは足り給ふ年におはしますらめ。御子の日がてらまゐり給へかし。早あるべからむ事をせさせ給へ」宮、大宮「皆したるを、かづけ物なむまだしきこそ、人々は朝服のことをなむ、黄金の藥師佛五尺にて、陀羅尼經などせらるなり。二の宮は法服をなむし給ふなる」正頼「それは今年となむ聞く。身には御としみのことなども御覽ぜさせよ。た

〔語釋〕
(一)涼
(二)「侍從の」の「の」衍歟
(三)「みゝの」は「みの」歟

の宮にあさましく強ひられ奉りて、ものも覺えず給べ醉ひにけり。この序に聞えむ事は、罪もあらじな。神もゆるしとかいふ」とて、物語の序に、仲忠「一日東宮にて悲しき心地もせしかな。やがて御前にて死ぬと覺えし。いかで今日まで侍るならむ」侍從、仲澄「怪しのつらへむしや」中將、仲忠「されどふしぬる牛の心地ぞするや」仲澄「ぬしはこと筋になり給へる、ひとはあらずや。何をかおぼす」中將、仲忠「玉のうてなもといふ。(一)源中將の君こそ羨ましけれ」(二)侍從の「角折れたる牛の譬なりや」中將うち笑ひて、仲忠「むく犬のあいなだのみ(三)みのやうにてぬしおふけなう、おはせそ」仲澄「かの人はたゞ今の世の一にて、內裏にもこゝにも、雲井より降りたるよりも殊に思ひ聞え給ふ人を、さる序にしかおほせられぬ。かゝる身をもちて、なぞこのはかなごとは」中將、仲忠「畏けれど心魂をつくして聞えそめたるを、こゝには身をかへてもいかで

何の才か侍る」仲忠「和歌の才なむ侍る」あるじのおとゞ、正頼「難波津にやある。冬ごもりの頃ぞや」とてかづきわたして奥へ入りぬ。「祐澄の朝臣、何の才か侍る」祐澄「渡守の才なむ侍る。あな風早の夜や」「仲頼の朝臣何の才か侍る」仲頼「木樵の才なむ侍る、人にあらすのみや」「仲澄の朝臣何の才か侍る」仲澄「山伏の才なむある、あなまつくさのかや」「行政の朝臣何の才か侍る」行政「筆ゆひの才なむ侍る、わたりがたき物は、冬毛なりや」などいひたてたるに、源中將垣下の所より入りいまするを、右のおとゞ、「かの君は何の才かおはするや」「藁盗人の才なむ侍る」兵部卿親王、「こてうふくかぜはあな入りがたの宿や」とてつい立ち給へり。かくて上達部親王たちは、供人まで物かづきもののふしまで祿賜はりぬ。かくて皆まかでぬ。

藤中將侍從の君の御方に、仲忠「仲忠まかでつべき方なし」とて、仲忠「あなに三(一)

〔語釋〕

(一)三字衍文歟

㊄ 仲忠情を仲澄に訴ふ

〔語釋〕
（一）御氣に入りさうもなき娘のみなる故
（二）あて宮入内の噂を
（三）不詳
（四）仲忠涼、頭は「藤の誤」
（五）此處誤脱多しと見えて解しがたし
（六）「頭」は「藤」の誤

給へたる事あるが、又えさもあるまじければ、一所をなむ聞えさするも、よくもあらぬ中にも、いかでと思ひ給ふれど、（一）え見給ふまじくのみあれば、少しよろしきや出で來るとてなむ」宮、兵部「一日東宮にて（二）承りしかば、片時世に經べき心地せねば、徒らにならぬ程に、斯くなむとだに聞えさせむとてなむ、心魂をくだきて聞えそめたる身のみこそ、いとからく悲しくは覺え給へ」など、泣く／＼きこえ給ふ。大宮、とかく聞えこしらへて入り給ひぬ。かくて（三）さうはちのもののしらべ、物の音どもおなじ聲にとゝのへて遊す。歌仕うまつりなどするほどに、（四）頭中將源中將など、（五）こゐたぐひならものたてまつる人を、かたさりたてまつれ、そのなにがしおもてをといふ。式部卿親王、「源中將の朝臣何の才か侍る」涼「うち仕うまつる才なむ」式部「いで仕うまつれ」涼「うちよけの君だちや」古屛風のあるを押倒して入りぬ。（六）「頭中將の朝臣

らばやとせしを、怪しき人に見給へ惑ひてなむ」親王、兵部「一日参りて侍りき。異なる御事もおはしまさゞりき。さて御上どもをなむ宣はせし。(一)誰々に對面する事の難き、御世も行くさき短き心地するを、覺束なからぬ程にてあらむとおもほすを、えさらぬ事。(二)内裏にこそ行幸も難からめ、然らぬ人々さへ覺束なきを」大宮「わか君たち殿の君たちなどもいかで見え奉らむ、また(三)けしからぬ者どものいま出で來たるも御覽ぜさせむと思ひ給ふれど、見苦しき様なれば」など聞え給ふ。兵部卿親王、「いでや今は聞えさせて効なけれど、いみじく忍びがたき事は、先聞えさせむとこそ思ひ給ふれ。(四)月頃思ひたまふ事の、終にはかなくなりぬること。數ならぬ者に思されざらましかば、斯くもあらざらまし。おなじ御中らひにも、頼み聞えさせしかば、かやうの折にも人よりはとなむ思う給へし」宮、大宮「などかかひなく思さるべき。(五)さ思ひ

〔語釋〕

(一)「誰にも〳〵」

(二)朱雀こそ天子の事故嵯峨院を尋ね奉ることも手重からんが

(三)大宮の子ども

(四)あて宮の事

(五)差上げんとせし娘も差上ぐる事出來ぬ様になりたれば

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)祐澄
(三)「などとて」なるべし

の逸物どもなり。上達部御子たち殿のうちより、世にある限つどひ給へり。客人にて、兵部卿の親王涼の中將なむものし給ふ。神樂よりかへり給ふ。御巫子おりて舞ひ入る。召人ら物の音いたし神歌つかまつる。

やひらでを手にとりもちて山ふかくわがをりて來る榊葉の枝

山ふかくわがをりて來る榊葉はかみの御前にかれせざらなむ

さかきばの香をかうばしみとめ來れば八十氏人ぞまとゐしにける

優婆塞がおこなふ山の椎がもとあなそば〳〵しとこにしあらねば

など(一)遊びつるほどに、兵部卿親王中將(二)君して大宮の御許に、御消息聞ゆれば、中の大殿にお座よそひて對面し給へり。兵部卿親王、「夏頃河原にて、嬉しう聞え承りしを、今夜もおなじ神の御德ならではとはせ給ひてこそは」なとて(三)、大宮「院には參り給ふらむや。宮のうへのみおはしますと承りて參

（語釋）

（一）「と給ひて」は「ゐ給ひて」

㊁ 正頼邸の神樂の準備

（二）「伊勢の君」は「辨の君」なるべし、正頼の長子左大辨忠澄

（三）誤あるべし

畫詞 こゝは中の大殿にて宮、女御の君御物語し給へり。あて宮御子たち、五所御方々おはします。みな物參れり。男君たち七所ばかりと給ひて、（一）物まゐる。御たち多かり、右大將殿より、御菓物割籠など奉り給へり。

かくて霜月の神樂し給ふべき事、伊勢の君（二）にきこえ給ふ、正頼「府の源中將ものし給ふこととする、この度の神樂すこしよろしうせばや。召人など擇びて、その行事心留めて（三）物せられよ」辨の君、忠澄「例の者どもは參りなむ。この族の外に、雅樂頭などらは、内裏の召にもかならずなむ侍る」正頼「なほ廻らし文して奥に草假名かきつけて遣はさばすまはじ」辨の君、忠澄「遊の者どもはえやみ給はざらむ。末に和歌を詠まむやは」など宣ふ。

かくて其の夜になりぬ。おとゞ、正頼「さればこそ、然はあらじと思ひつかし」とて、幄打ちて、催馬樂笛ふき、歌うたひ、著き竝みぬ。これさふらふ唯今

〔語釋〕
(一)朱雀の妃妾たちも多けれど其中に時めくは二の宮と左大將殿のと二人のみの意歟。「二の宮」は「四の宮」「左大將」は「右大將」の誤なるべし、すべて此處の女御の詞解しがたき處多し
(三)誤脫あるべし

〔考異〕
(一)ものを—「もの」ナシ
(四)宮なれ—宮なされど
(五)には—「に」ナシ
(六)君だち—みこたち
(七)參り—いでき

れ」女御の君、仁壽「人は多かれどその儘にしもなきものを(一)。内裏にも二宮(二)左大將ばかりこそ。さては(三)なときこえぬ。左大殿はおほせかし。おなじ君達(二)と聞ゆれど、あらまほしく、めでたくおはします宮なれ(四)。この君たちのさむらひ給はむこそは似つかはしからめ。御里ずみし給はむには(五)、便なうこそあらめ。内裏にはたゞ二人あるやうにてあらせむ。まゐらせ奉れば、さやうの事し給ふまじき人なればなむ、彼處には、えものせぬなど、度々宣へど、さいたちて候はどこそあらめ、宮には君だち(六)なども、まだ參り(七)給はねば、賴もしかし」宮、大宮「うしろめたくぞあるや、御方をこそは肴物に」女御の君、仁壽「あなゆゆし」など笑ひ給うて、日一日御物語し、御琴あそばし、かた〴〵男君たち、おとども皆おはしまして御遊ありて、方々より興ある物ども淸らに調じて參り給ふ。斯くて皆夜更けて御方々に歸り給ひぬ。

〔語釋〕
(一)懷胎
(三)打棄ててのみ置くべきにあらずと思ふ
(六)「かたはにこそあめれ」なるべし

〔考異〕
(二)し給へる—し給へり
(四)こそは物たばかりは—こそさやうの事は
(五)たち—ナシ

し給ひつる度にてそあれ。そが覺束なさになむ」仁壽「この度も暇たまはせざりつれど、怪しく惱ましくのみ侍れば、ことつけてまかでつるぞや」大宮「などか然は仰せらるゝ。もし例のことか(一)」仁壽「いさや、そが見苦しき事」宮、大宮「何かは、さう／＼しかりつるに。何時よりぞは」女御の君、仁壽「いさや。棚機の心地せし頃よりなむ」宮打笑ひ給ひて、大宮「紅葉の橋はいかにぞ」とて、物語(二)し給へる序に、大宮「あて宮は、などてか斯く(三)てのみとぞ思ふや。如何すべき、宣へかし」女御の君、仁壽「生女(四)こそば、物たばかりはすなれ。たばかり聞えむかし。大殿は如何聞え給ふらむ」宮、大宮「そもまだ思ひ定められざめり。東宮なむ御氣色ありて宣はすなる。内々にも、仰せらるゝ事ありけりとなむ」女御の君、仁壽「東宮よりは倘聞え給ふや」大宮「然かし。されど、やんごとなき人多く候ひ給ふとて、此人(五)たちのはかなくて交らひ給はむ、(六)かたはにはこそある

〔語釋〕

(二)其方を我が戀しはじめし時分は

(三)誤脫あるべし

(四)仁壽殿女御

(六)「などとて」なるべし

〔考異〕

(一)氣色見ゆる—氣色を見ゆる

(五)給へり—給へば—給へれば

あらぬを、氣色(一)見ゆるぞ惡きかし」おとゞ、正賴「かしこく思ひ鎭むれど、それしもぞ著きかし。男は、然こそはあれば、かくてもさふらふべけれど、昔おほむことを思ひそめ參らせし程は、何心地かせし。かの主有識なれど、(二)この道になれば、かくこそはあれ。その道人目つゝまるゝものかは。これを思へばこそ、この如くも□(三)宣ふ人々には、え惜み申したれ」など、宣ふほどに、女御(四)の君まかで給はむと聞え給へれば、御迎の車廿ばかり、四位、五位、六位數多く、同胞の君だちさながら參り給へり。御輦の宣旨遲く下りて、夜ふけてまかで給へり。大宮あくるつとめて、中の大殿にわたり、君だち御裳引きかけつゝおはします。宮、兵衛の君して西の大殿に、大宮「其方にや參り候ふべき、こなたにや侍る」と聞え給へり(五)。女御、仁壽「其方にたゞ今參りて」とて渡り給へり。宮、大宮「其處にまうでむとこそしつれ」(六)などて、大宮「久しう長居

㊁ あて宮の處置につきての正賴夫婦の相談。仁壽殿の女御東宮に奉らんことを勸む

〔語釋〕
（三）話あるべし
（四）さほどの身柄の人でもなきに

〔考異〕
（一）怪しき—怪し
（二）東宮—宮

り。作りて文奉る。樂所あそびす。文臺立てたり。みな物書きたる上達部御子たち博士たちまで、白きうちきはかまかづく。ひともこふく賜はる。
斯くて大將のおとゞまかで給ひて宮に聞え給ふ、正賴「東宮よりあてこそに今も宣ふ事やある」宮、大宮「然あめり」正賴「その事をぞ宣ひつるや。しばしはとかく聞えつれど、いと切に宣ひつれば、え否び侍らざりつるを、兵部卿親王、平中納言いと物しと思ひたりつる中に、源宰相の、ある中に思ひ入りて居給ひたりつる。左の大臣是彼に見合せてぞ、涙ぐみてものし給へる、いとほしかりつれ」宮もいとほしと思い給ひつゝ、大宮「怪しき（一）この子によりてこそ、興ある折もいとほしき折も多かれ。（二）東宮などかは、人々あまたある折しも、然は宣ひ出だしつらむ」おとゞ、正賴「なほ人々かく物すと聞召して、（三）なりけそと思しめいて宣はするにこそはあめれ」宮、「源宰相（四）然いふばかりの人には

（語釈）
（一）涼への約束は昨今の事
（二）當人のあて宮に文をやることは已に久しき前よりの事
（四）源宰相實忠の父季明
（六）「左のおとゞ」なるべし
（七）「大將殿の君たち」なるべし
（八）誤脱あるべし、「てもし」を「もし」とかける本もあり

（考異）
（三）東宮―ナシ
（五）いとほしと見やり給へり―見やり給ひていとかなしと見やり給へり

べきよし、宣旨くだりにしことなむ侍る」と申し給ふ。東宮、「それは今の事にこそあなれ。こゝには其處にこそ唯今聞ゆれ、（一）（二）彼所に聞えて久しき心地なむする」大將、正頼「宣旨を背かぬものに侍ればなむ、思う給へ、煩ひ侍る」（三）東宮、東宮「何かそは。罪あらば奏せさすばかりにこそはあなれ。な思し煩らひそ」大將、正頼「然らば仰せごとに隨はむ」など奏したまふを、そこばくの人、肝心もくだけておもほす中に、源宰相、青くなり赤くなり、魂もなき氣色にてさふらふを、（四）左のおとゞ（五）いとほしと見やり給へり。

畫詞 こゝは東宮おはします。お前に、上達部御子たち、兵部卿の宮、左おとゞ、右大將、中納言二所、源宰相、大床子たてて涼、仲忠、仲頼、行（六）政、（七）大將殿君たちを首にて、四位、五位、古き進士、只今の秀才藤英など、召したるは引出物賜へり。こゝは殿上人等博士ひとむらにててもし給へ（八）

〔語釋〕
(一)「などとて」なるべし
(二)上野の宮が贋あて宮を奪ひし如き詭計
(三)父あの様に却つて正頼に欺かるゝかと思ひて
(四)「みこた」は「みかた」なるべし
〔考異〕
(五)悲しと見やり給へり—ナシ

を、しめやかなる折なければ、「え聞えぬかな」大將、正頼「今日より濕やかなる折侍らじを、いかで承りてしがな」宮、東宮「流石に聞え惡しや」など(一)て、東宮「なほ上野の親王などに、思ひおとし給へるをなむ、妬く思ほゆる、(二)さやうなる計をやせまし、など思へど、そが様にもやせらるゝとてなむ」大將、正頼「あなかしこ。然ある仰せ(三)ごとなきうちにも、然さふらふべきも侍らず。くちをしう拙きのみ侍れど、然言ひて侍らむやはとてなむ、これかれにくばり侍ること侍りしに、かのみこた(四)に見給ふべきが侍らざりしかばなむ、辛く求めてものせし」東宮(五)悲しとみやり給へり。東宮「さても殘あるやうに聞ゆ。それをさへ忘れ給ふな」大將のおとゞ、正頼「拙きが中にも擇屑なるが侍るを、この神泉の御幸につかさのおほいすけ涼、同じすけ仲忠心とゞめて琴つかうまつりしに、仲忠の朝臣に、一の內親王、涼の朝臣に、正頼が九にあたる女賜ふ

〔語釋〕
（一）「東宮」衍文なるべし
（二）實忠
（三）正頼が我をも聟に入れてくれぬは如何
（四）當人のあて宮には
（五）正頼
（八）其方が不參なりし故

〔考異〕
（六）宮―東宮
（七）思ほえ―おぼえ

兵部卿親王、「さがなの物言ひや」とて、東宮源宰相を見やり給へば、苦しと思ひて物も宣はず。東宮、「彼の集へらるなる中に、など入らざらむ」左の大臣、季明「仰せごとさふらはゞ奉り侍りなむを、畏まりてこそさふらひ給ぶらめ」東宮、「事の序あらばと思へど、すゞろに覺えつゝ、まだ大將にも物せず。彼の人には時々消息などものすれど、をさ〳〵いらへも物せられずや」など宣ふ程に、左大將のおとゞなど物し給へり。宮、東宮「今日ぞ怪しく時過ぎたる菊をもえ見ず、つゝましう思ほえつれば、此彼召して見せなどしつるに、見え給はずありつれば、さう〲しかりつるに」など宣ふ。大將の君、正頼「はなはだ畏し。例もわづらひ侍る脚病の、おこり困うじ侍りて、久しう内裏にもまゐらず侍りつるを、唯今ある人の告げ申しつればなむ、驚きながら、さぶらひ侍りつる」とて、御物語し給ふ序に、宮、東宮「年頃聞えむと思ふ事の有る

㊀ 東宮の殘菊の宴。東宮あて宮を正頼に求む。

〔語釋〕（一）正頼

〔考異〕（二）誰多く―誰が多く
（三）奏し給ふ―ナシ

概

法師歌をあて宮に贈る。⑭ 實忠、正頼の邸に留まりて妻子を顧みず。妻子の悲嘆。長子眞砂君の病死。⑮ 三月上巳の祓に正頼一家を擧げて　に遊ぶ。⑯ 東宮、實忠歌をあて宮に贈る。⑰ 兼雅戀を長谷に祈る　祐澄を語らふ。⑱ 懸想人等歌をあて宮に贈る。の熱心。兵衛の君を責めて文をあて宮に取次がしむ。戀病。七大寺比叡山等に祈る。⑲ 實忠の妻子、志賀の山本に隱る。實忠、仲忠と偶然その隱家を訪ふ。識れる妻と知らざる夫。⑳ 實忠歌をあて宮に贈る。

斯くて東宮、霜月の朔日ごろ、殘れる菊の宴聞召しけるに、御子たち上達部參り給ふ。博士文人等召して文作らせ御遊びなどし給ふ。大將（一）のおとゞのみ參り給はず。斯くて夜深くなりて、東宮御遊などし給ふついでに、東宮「此處に物せらるゝなかに事もなき女、誰多く（二）ものせらるらむ。賭物にして、女くらべなどせられよや」左の大臣、季明「此の中には聞えずなむ。平中納言ばかりや。それもちひさくなむ、聞え侍る」源中納言奏し給ふ（三）、「左大將の朝臣にこそ一人二人は侍らむ」平中納言、正明「然のみはあらじ。又も聞ゆる樣あり」

菊の宴

此の巻の初以下十一段は「嵯峨院」の巻の第九段以下と事實も文章も大概相似たり。蓋し同文の兩巻に入りて相重複せるものなるべく、兩者其の一を削るべきなり。巻の名よりすれば此の巻の文を存して「嵯峨院」の巻のを削ること至當なるべしと雖も、事實の聯絡及び文章より見る時は「嵯峨院」の方を存するを勝れりとす。故に彼の巻の分を正文に立て、此の巻の分は假に圍みをかけて之を存せり。

但第九段以下第十一段の終までは「嵯峨院」の巻になき所にして且必ず無かるべからざる記事なれば、之を彼の巻の末より續けて讀まざるべからず。

梗

㊀東宮の殘菊の宴。東宮、あて宮を正頼に求む。㊁あて宮の處置につきての正頼夫婦の相談。仁壽殿の女御、東宮に奉らんことを勸む。㊂正頼邸の神樂の準備。㊃神樂の當日。兵部卿親王大宮にあて宮を求む。宴會。㊄仲忠情を仲澄に訴ふ。㊅大宮、母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備。㊆東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る。㊇大宮、六十の賀の爲に嵯峨院に参る。㊈嵯峨院の大后の六十の賀。あて宮琴を彈く。東宮あて宮の入内を大宮に迫る。大后大宮にあて宮を東宮に奉らんことを勸む。㊉東宮よりあて宮に歌を贈る。⑪懸想人等、あて宮入内の事定まれりと聞きて各憂悶す。

⑫藤英の榮華。宮あこ君を介してあて宮に文を贈る。⑬忠こそ

おとゞ見給ひて、正頼「九月に仰せられしを思ひたるなめりかし。警策なる人にあれば、かしこをば人にこそ頼み聞えたれ」(一)など宣ふ。侍從の君、時雨いたく降る日、

仲澄 神無月雲がくれつゝしぐるればまづわが身のみ思ほゆるかな

源少將、祭(二)に使に立つとて、

仲頼 袖ひぢて久しくなれば冬中にふりいでてぞゆくとふが逢ふやと

兵衛佐、物にまゐるとて、物語などす。かへる曉に、御前の池より水鳥の立つを見て、

行政 我ひとりかへれる池にをし鳥の汝もつれなく鳴きて立つかな

藤英、六十餘日がうちに對策せんと、夜晝いそぐ。年頃雪を夜の光にて勤めつれど、今はこの大將殿の御かへりみに、食物は山の如し、油は海のごと湛へて(三)あり經るにも、なほ(四)この事を歎く。雪の降る(五)日、

藤英 心こそあかくなりしか雪降れば戀には惑ふものにぞありける

〔語釋〕

(一)涼にあて宮を賜はるべき由の神泉苑にての勅諚

(二)十一月下の酉日賀茂の臨時祭の使なるべし

(四)あて宮に對する戀

〔考異〕

(三)湛へて―湛へ などして

(五)雪の降る―「の」ナシ

兵部卿の宮、菊のさかりに、

兵部　頼もしく思ほゆるかないふことをきくてふ花のにほふ長月

右大將殿、晦の日、

兼雅　長月は忌む（一）につけても慰めつ秋はつるにぞ悲しかりける

平中納言、十月朔の日、

正明　薄かりしなつの衣や濡れしとてかへつる袖もかはらざりけり

三の親王、御前の紅葉の色濃きにつけて、

忠康　色ふかく染むるまに〳〵神無月袖やもみぢの錦なるらむ

中將仲忠、宇治の網代より、

仲忠　流れ來るひを（二）かぞふれば網代木によるさへ數も知られざりけり

初雪の降る日、涼の中將、

雲居よりたもとに降れる初雪のうちとけゆかむ待つが久しさ（三）

〔語釋〕
（一）五月と九月と嫁娶を忌むは此頃の風習也
（二）ひをー日を、氷魚。よるー寄る、夜

〔考異〕
（三）久しさー久しき

㊅ 懸想人等歌をあて宮に贈る

かくてしも思ひ離れぬものになむ。

とて、忠こそ「これたてまつり給ひて、御返かならず賜はりて賜へ」と言ふ。宮あこ君、「更にかゝる事見給へぬ人なり。如何あらむ」阿闍梨、忠こそ「など斯く、いたはり止め奉る志をも思はで。相思せとこそ思へ」あこ君、難きことと思へど参りぬ。あて宮に奉り給へば、あて宮「あなむくつけ。何でふ、さる物をか持ておはする」とて引き破りて捨て給ひつ。

かくて、九月晦に、東宮よりあて宮にかく聞え給ふ、

東宮 秋ごとにつれなき人をまつ蟲のときはの陰になりぬべきかな

あて宮、

色かへぬ秋よりほかに聞えぬは頼まれぬかなまつ蟲の音も

源宰相、鈴蟲を奉りて、

實忠 鈴蟲の思ふごとなるものならば秋の夜すがらふりたてて鳴け

〔語釋〕
(二)君の餘命
(四)あて宮

〔考異〕
(一)し果てし―してし
(三)家―こや

底に沈みて、浮む瀬あらじ」といふに、乞食涙を流していふ樣、乞食「この事を悔いおもふも、焔に燃ゆるが如し。されども、し果てし(一)事なれば、かへすべき方なし。思ひ出づるなむ、あたらしく悲しく侍る」といふ。阿闍梨、忠こそ「今幾許(二)もあらじと見給へば、世に經給はむ限、勞り奉らむ。後の屍をも收め、地獄の苦をも救ひ申さむ」と宣ひて、小き家(三)つくりて籠めすゑて、物食はせ、衣著せなどして養ふ。

かゝる程に、左大將殿の宮あこ君、物怪つきて、いたく煩らふ。とかくすれども怠らず。この阿闍梨に告げ奉れば、かしこくしていたはり止めつ。阿闍梨、宮あこ君に、心うつくしく語らひ宣ふ。殿の事など問ひ聞きて、忠こそ「この春、春日におはしましゝ(四)御方に、いさゝかなる事聞えむ。奉り給へよ」とて、斯く書きて奉る、

忠こそとぢ籠り巖の中に入りしかど君がにほひは空に見えにき

るを持ちて、限なくかなしくし給ひ、君もになく顧み給ふがありしを、(一)己には纔にて侍りしけにや、心にたがふことの侍りしかば、いかでこの人を亡ぼさむと思ふ心ふかくて、親の家のたからの帯を取り隠して、それが盗みたると(二)人にいはせ、親の爲に咎あるべきことを作り出でて、(三)その人に負せて、つひになむ(四)その人を失ひてし報にや侍らむ、(五)身をかへても、斯かる様にはかけてもなり侍らじ、と思う給へし多くの財ども皆失せて、生きながら斯かる身をなむ受けて侍る」といふ。阿闍梨むかしの一條の方に聞き(六)なし給へば、時のかはるまで思ひ入りて思ふ程に、(七)大殿の大願をたててもとめ給ふ帯も、我にこそ負せけれ、また大殿の御氣色も、さば大なる禍を聞かせ奉れるにこそありけれ、年頃、胸の焔さめず、歎きわたりつることを、佛世におはしましければ聞きあきらめつること、と思ひて、久しくありて言ふ、忠こそ「さやうに、如何にしてか、さる罪なき人の(八)爲に、あやしき心をつかひ給ひし。然ありける報に、かゝる身となりぬ。來む世には、地獄の

〔語釋〕
(七)以下忠こその心、大殿は父千蔭

〔考異〕
(一)己には纔にて侍りしけにや—ナシ
(二)人に—ナシ
(三)その人に負せて—この人に言ひ負せて
(四)その人を—ナシ
(五)身を…皆うせて—ナシ
(六)なし給へば—なし給ひつ
(八)爲に—爲には

時めくこと、頭中將(一)と等し。

かの行人(二)を、院の帝限なく勞はらせ給ひて、院の内に檀所賜ひなどしてさふらはせ給ふ。むかし師に就きてかしこく受けられ、さとりいと深く驗ありしかば、院の帝奏せさせ給ひて、眞言院(三)の阿闍梨になされぬ。弟子同行など多く、身のいきほひ時(四)めくこと昔に劣らず。召ありて嵯峨の院に參る。車淸らに裝束きて、人いと(五)多くて參る。御祈のこと承りてまかづる、御門のほとりにて、老いかゞまりたる嫗の乞食、笠(六)のいたく損はれたるを持ちて、頭は雪をいたゞき、顏は墨よりも黒く、足手は針よりも細くて、つき(七)の布のわゝけたる、鶴脛に著て、阿闍梨のまかづるを見て手をさゝげて、乞食「今日のたすけ賜へ」と後にたちて這ひゆく。阿闍梨あはれがり物など取らせて(八)、忠こそ「昔はいかでありし人の、何時より斯くはなりしぞ」と問へば、乞食「乞食は、限なき財の王にて、世の一(九)の人の妻にて、ま(一〇)た世に思ふことなくなむ侍りし。その人の子に、母(一一)なき男子の、かたち心勝れた

㊄ 忠こそ法師眞言院の阿闍梨に任ぜらる。落魄せる繼母を扶養す。宮あこ君を介して歌をあて宮に贈る

〔語釋〕

(一)「頭中將」なるべし、仲忠なり

(二)忠こそ

(三)內裏の內にあり

(七)諸國よりみつぎ物として官に納むる布

(九)是千蔭也

(一一)是忠こそ也

〔考異〕

(四)時ゆく—時なる

(五)いと—ナシ

(六)笠の…持ちて—市女笠のいたくそこなはれしを戴きて

(八)取らせて—くはせて

(一〇)また世に思ふことなく—ナシ

四 涼三位に敍せらる。その榮華

〔語釋〕

(二)「小家」の「小」衍文歟

(三)「たてまつる」は「たねまつ」の誤なるべし

(四)種松

(五)涼

〔考異〕

(一)の東—ナシ

りおはします」

畫詞 こゝは神泉。上達部、親王たち著き竝みたまへり。探韻賜はる。藤英舟に乘りて放たれたり。仲忠琴賜はりて彈く。雪ふれり。天人おり來て舞ふ。

かくて源氏三條の(一)東に(二)小家つくりて、磨きとゝのへて、淸らなり。寶を貯へ收めて、萬の調度を金銀、瑠璃にみがき立てたる所に、(三)たてまつる、女ぎみひき率て上りたり。種松、赤の衣に白き笏もちて、妻君をがむ。妻君、「おぼえぬよろこびかな」と言ひて、

種松妻 おく露も時雨もよぐと見しものをかはれる色を見るが怪しさ

種松、

雲におよぶ松の末だにあるときけば籠れる根こそ色かはりけれ

(四)紀伊守國へ下りて、面白くらうある所に、たのしび遊ぶ。中將(五)は、世間の人、卿に取らむと爭ひ聞ゆれど、聞き入れず、宮仕心に入れて、交らひ人にゆるさる。

まうのぼりぬ。院の帝、(一)おどろき怪しがらせ給ふ。嵯峨「仲忠の朝臣がことは、俊蔭の朝臣が手にまさること限なし。涼、變化のものなり。五箇の調は、俊蔭彌行と等かりし、(二)たひのいやゆきが手なり。彌行かくれて三十餘年、その筋絶えて繼ぐ人なし。涼二十餘、琴の曲の手彌行に等し。如何なることぞ」と問はせ給ふ。中將涼奏す、涼「彌行まかり隱れて今年六年になむなりぬる。(三)「仕うまつれる公に數まへられず。(四)才の宮仕かひなし。菩提のつとめを致さむ」とて、深き山に入りてつとめ侍りけるを、涼五歳にて熊野にまうで逢ひて、(五)山伏の申し侍りし、「世に琴仕うまつる名を施してき。この手とゞまらざらむ悲しさに(六)よりてなむ、今まで娑婆にめぐらひつる。(七)きんち、此の手を傳へ施すものならば、この世に亡からむ世なりとも、とぶらひ守らむ。速かに、今は、いさめる獸に身を施し深き谷に尸をさらしてむ」と申して、もとの山にまかり籠りにし。然ある遺言を、え施さず侍る事」と奏す。院の帝、おどろき哀がらせ給ふ。かくて、まづ内裏の帝かへ

〔語釋〕
(一)仲忠涼の琴のあまりに上手なりを怪しむ也
(二)「たひの」は「たゞこの」の誤歟
(四)技藝を以ての仕官
(五)山伏即ち彌行也

〔考異〕
(三)仕うまつれる―仕うまつれば
(六)よりて―「て」ナシ
(七)きんち―きんだち

朱雀　松風のとくふきほさば紫のふかき色をばまたも染めてむ

仲忠、(一)

紫にそむる衣の色ふかみ乾すべき風のぬるきをぞ思ふ

(二)涼の位記に院の帝書かせ給ふ、

嵯峨　秋ふかみ野べの草葉(三)はおいぬればわかむらさきを今は頼まむ

涼、

盛だに花の朽葉(四)のつゆをこそけふ紫のいろは染めけれ

種松が位記に左大臣、

忠雅　立田姫(五)もみぢの笠を縫ふことは一木ある松を露におへとぞ

種松、

佐保山のみどりの峰に隠れたる松の陰にも今は入りぬる

など聞えて、涼、仲忠、下りて舞踏す。種松、すなはち上ゆるさる(六)。宣旨下りて

〔語釈〕

(一)又琴をひかば三位に上せてやらん

(三)草葉は嵯峨院自ら比していふ歟

(五)五位の袍の赤きを紅葉に比したる也

(六)昇殿を許さる、「ゆるさるゝ宣旨」なるべし

〔考異〕

(二)涼の—涼が

(四)朽葉の—草葉の

(六)朱雀に皇長女がある故、仁 殿の女一宮を

(異考)
(一)帝—帝は
(二)中に—中には
(三)御氣色—御時
(四)なむに別いても—なむにいひても—なむまいても
(五)女子やあり難く—女子やたれもあり難く
(七)崩れ下りて—くづれ立ちて

帝(一)御覽ずるに、量なく、すべき方思されず。すなはち、仲忠に正四位の位たまひて左近中將になされぬ。涼に同じ位、同じ中將になされぬ。涼 源氏なり、琴仕うまつらずともこの官位賜はるべし。その代に、祖父種松に五位の位 賜はりて、紀伊守になされぬ。帝、左大將に宣はす、朱雀「今宵、涼、仲忠に賜ふべきもの國の中に(二)思えぬを、朝臣のみなむ賜ふべき」と仰せらる。大將、正頼「あなかしこ。公にだに候はざらむものを、正頼はいかでか賜ふべからむ」帝(三)御けしきよく打笑はせ給ひて、朱雀「そこには女子あまた持給へる。ことに有難くものせらるゝを、今宵の祿に、涼、仲忠に賜はむなむ、勝すもの無かるべき」大將、正頼「賜ひ侍りなむに(四)、別いても涼、仲忠がこよひの祿にあたるべき女子(五)やあり難く侍らむ」上、朱雀「いはゆるあてこそ。それこそは良き今宵の祿なれ。涼にはあてこそ、仲忠には、そ(六)こに一の内親王ものせらるゝを、それを賜ふ」と仰せらる。涼、仲忠崩れ下りて(七)舞踏す。又涼、仲忠、位記御前にて賜ふ。帝、仲忠が位記の上に書かせ給ふ、

に、兼雅「これなむ、仲忠が見給へぬ琴に侍るなり。仕うまつらせむ」と奏し給ふ。賜はりて何心なくかき鳴らすに、天地ゆすりて響く。帝よりはじめ奉(一)りて大におどろき給ふ。仲忠いまは限(二)、この琴まさに仕(三)うまつり靜まりなむや。ねたく口惜しきに、同じくば天地驚くばかり仕うまつらむ、と思ひぬ。涼、彌行(四)が琴、なむ風に劣らぬあり、この琴を院の帝に參らせしを、帝同じこゝろに調べて賜ふ。仲忠、かの七人の人のつたへし手、涼は彌行が手を少しねたう仕うまつるに、雲の上よりひゞき、地の下よりとよみ、風雲うごきて、月星さわぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴りひらめく。雪衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人のしらべたる大曲、殘さず彈く。涼、彌行が大曲の音の出づる限仕うまつる。天(五)人くだりて舞ふ。仲忠、琴にあはせて彈く。

仲忠　朝朗ほのかに見れば飽かぬかな中なるをとめしばし留めなむ

かへりて今一返舞ひて上りぬ。

〔語釋〕

(二)以下仲忠の心

(三)今更やめる譯にはゆかぬ

(四)涼が琴の師の名

(五)天人―仙人

〔考異〕

(一)奉りて―「て」ナシ

仲頼賜はりて、

仲頼 松ちかみ吹きくる風も荒れまさるおきの蔭には誰かすゞまむ

三の親王取り給ひて、箏の琴仕うまつる行政に賜ふ。

忠康 木がらしの風も吹きつと松蟲やしげき木蔭と人に見ゆらむ

行政賜はりて、

行政 年經れど色もかはらぬ松よりはいかで吹くらん木がらしの風

四の親王、（一）倭琴仕うまつる仲澄に賜ふ。

師宮 おしなべて松風にしも知られねどわが身すゞしき蔭にもある哉

仲澄賜はりて、

仲澄 かくれ沼の草葉もさやぐ風をさへ松の響にいかゞたとへむ

とて賜はりぬ。連ねて下りて、舞踏す。

かゝる程に、涼、仲忠の（二）琴の音ひとし。右大將の主、もたせ給へるなむ風を、帝

（釋）

（一）嵯峨院第四の皇子

（考異）

（二）の琴―絹琴

りもてゆくまゝに、琴のひゞき高く出づ。人々ことに心とまりて、五箇の手どもを仕うまつりつくす。帝よりはじめ奉りて、そこらの人、涙おとし給ふ。帝御土器賜ふ。

朱雀　秋を經てこよひのことは松が枝にすごもる蟬も調べてぞなく

仲忠、

秋ふかみ山べにかゝる松風をめづらしげなく蟬や聞くらむ

院の帝、

嵯峨　ながき夜の更くるもうれし朝露をおとす小松の蔭にすゞめば

涼賜はりて、

涼　風をいたみ露だにおかぬ小松には宮人すゞむ蔭やなからむ

二の御子(一)取り給ひて、琵琶仕うまつる仲頼に賜ふ。

二御子　蔭ごとに人のみすゞむ松よりは風も常磐に吹きわたらなむ

〔語釋〕

（一）不詳

なむ仰せらるゝ。これに手一つ仕うまつれ」と仰せられて、(一)ほそを風を五箇に調べて、仲忠に賜ふ。(二)花園風を同じころに調べて、(三)源氏の侍従に給ふ。かしこまりて奏す、仲忠「他男どもは、今日の爲にさふらふに侍るを、仲忠は、たま〳〵仕うまつる手は、前々に仕うまつりつくして、今日の爲にはさふらはずなむ(四)ありつる」と奏す。帝、朱雀「殘したる手なくば、さき〴〵仕うまつりし手を仕うまつれ。身の才は、人聞く所にて、上手とさだめらるゝなむよき。今宵仕うまつらざらむは何かせむ。早う仕うまつれ」と宣はす。なほ仕うまつらず。帝、朱雀「仲忠がためには、天子の位かひなしや。(五)蓬萊の不老不死の藥の使としてだに、宣旨免れがたさによりて渡れり。ともかくもあれ仕うまつれ」と仰せらる。仲忠かしこまりて、仰を承りて、涼と競ろひて、なほ聲立てず。帝、朱雀「如何はせむ。涼おそし」と仰せらる。涼、苦しと思ひつゝ、さきの調にて一の琴をほのかにかき鳴らす。仲忠、辛うじて同じことを僅にかき合せて、五箇の(六)手を仕うまつりぬ。夜深くな

(語釋)

(一)巨勢利和曰、此はそを風の琴は俊蔭が家に納めしを今日なん風の琴と共に兼雅の持ちて來りし也

(二)巨勢氏曰、此琴は朱雀院の東宮にておはしましゝ頃俊蔭の奉りし也

(三)涼

(考異)

(四)ありつる—ありける

(五)蓬萊の不老不死の—とこよの國の不死の

(六)手を仕うまつりぬ—手つかまつりぬ

ありと、これかれ申しゝかば、見給へむとてものせしを、この涼が侍る所になむ侍りける。げに、見給へしに、世に似ずなむ侍りける。さる所に、さてのみ侍るまじく見えしかば、率てまうで來しを、殿上などゆるさせ給ひてさふらはせ(一)給へかし」帝、朱雀「承(二)るものなり」とて宣旨くだりて召上げられぬ(三)。かくて事はじまりて、文人ども題賜はりて、上達部、殿上人、文人ども文臺に文奉る。季英、試みの題たまはりて、一人舟に乗せられて出でたり。すなはち面白き文つくれり。進士になされて方略(四)の宣旨くだりぬ。かくて御遊はじまりて、上達部、惜む手なく仕うまつる。院の帝きこえさせ給ふ、嵯峨「上達部惜む手なく仕うまつるに、涼、仲忠、徒にさふらふまじき者なり」と宣はせて、嵯峨「琴仕うまつらすべし」ときこえ給ふ。帝、朱雀「おほせ給はむかし。別いても(五)仲忠、琴賜ひて効なきことなむあまた度侍り」とて、仲忠を召して、朱雀「こゝに(六)かうなとにも仕うまつらず、「仲頼、行政ら、手をしまぬ夜なるを、仲忠しも徒にさふらふまじきものなり」と院

〔語釋〕

（二）涼の事は兼て聞及べり

（三）涼を殿上に

（四）令義解に「凡秀才 試」方略策二條」。文理俱高者爲上々」注に「方大也、略要也、大事之要略也」

（六）處誤脱あるべし

〔考異〕

（一）さふらはせ—とぶらはせ

（五）別いても—まいても

船など、さまぐ\奉り(一)調じたる樣、言はむかたなし。かくて歸らせ給ふ路すがらも、興をつくして御遊どもありけり。

かくて院の帝紀伊國より歸らせ給ひて、(二)內裏の帝(三)神泉に紅葉の賀きこし召すべき御消息きこえ給ふ。(四)右大將、三條の北方にきこえ給ふ、兼雅「紀伊國の源氏、御ともに率てのぼり給へりしに、神泉の行幸、院の帝もおはしまして、御遊あるべかなるに、侍從も琴つかうまつるべきに、同じくば人に勝らむこそよからめ。かの「しばし」と宣ひし琴は出だされじや(五)」北の方、俊蔭女「昔の人の、世の中に出だし給はずなりにし物を、己が世にしも取り出でむなむ苦しき」兼雅「世に有難き物の音、一度この侍從の仕うまつりたらむに、來し方行く先あるまじき事をせさせむ」とて乞ひ出給ひて、行幸のともに仕うまつり給ふ。

院の帝もおはしましぬ。世の中のものの上手ども、みな參り集りて、文人も撰ばれたるかぎり參る。院の帝、御物語の序に、仲頼「怪しく、この世にめづらしき所

〔語釋〕

(二)朱雀院

㊂ 神泉苑の紅葉の賀。藤英進士になさる。涼、仲忠琴を彈く。奇特。涼、仲忠、中將に任ぜらる。仲忠に朱雀院の女一宮。涼にあて宮を賜ふべき勅。涼其の師彌行の事を奏す。

(三)神泉苑

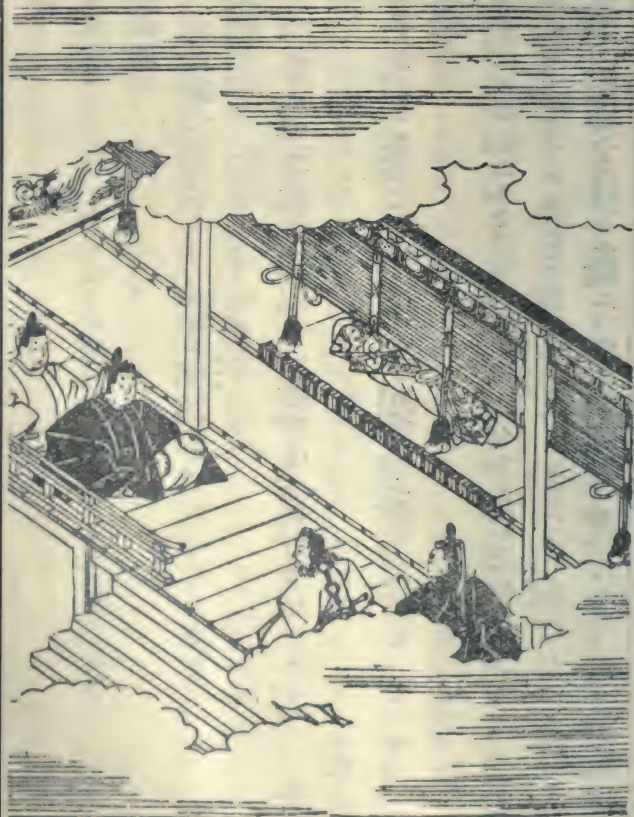
(四)兼雅

〔考異〕

(一)奉り—奉る

(五)出だされじや—出だされなむや

山伏、
　忠こそ　空なるを見つゝ入りにし山邊には雲のおりゐる谷もなかりき
式部卿親王、
　空に滿つ雲のかゝりし秋霧を山の底よりいでむとや見し
中務親王
　空よりも尋ねて雲のかゝるてふ暗部の山を賴むなりけり
右大臣、
　忠雅　入る人を墨染になす山よりや暗部てふ名を人の知るらむ
左大將、
　正賴　風ふけば空にあそびし白雲を谷におりゐむとやは思ひし
夜あけぬ。斯くておはしますに、よろづの事をつくし給ふ。かくて歸りおはしますに、源氏率てのぼらせ給ふ。種松、上達部、御子たちに、御衣櫃、馬、廚屋

〔語釋〕
（一）「山の」は「谷の」の誤なるべし

あはれと思召して、御階に召し寄せて、嵯峨「年ごろ今に至るまで、隱れにし(一)を思はぬ時なし。怪しくはかなくて失せにしは、如何なる事にてぞ」など問はせ給ふ。山伏くれなゐの涙を流して奏す。忠こそ「山にまかり籠りしは、父「劍をもちて殺害すとも、汝が罪をば咎めじ」とまで申し侍りしを、かの朝臣勞はる所ありて參らず侍りし頃、許されぬ暇を奏してまかり出でて侍りしに、俄に許さぬ氣色見えて侍りしかば、親を害する罪よりまさる罪や侍らむ、と魂しづまらずして、速かにまかり籠りて、山林を棲處とし、熊狼を友とし、木の實、松の葉を供養(二)とし、木の皮、苔を衣として、年頃になり侍りぬ」と奏す。帝かぎりなく悲しと思して、嵯峨「過ぎぬること歎くにかひなし。今よりだに、近くさふらひて、御禱も仕まつれ」と仰せらる。嵯峨「かくて世にありけるものを、え求め出(三)でずもありけるかな」(四)とて院の帝、

嵯峨　谷深くおりゐる雲のたちいでずなど山のはを求めざるらむ

（語釋）
（一）汝が隱れし事を

（考異）
（二）とし木の皮—とし木の葉木の皮
（三）出で—ナシ
（四）とて院の帝—ナシ

に、琴をしらべさせ給ひて、行人に孔雀經理趣經よませ給ひて、あはせて聞召すに、あはれにかなしく、涙落さぬ人なし。帝、この行人を、ほの〲御覽ぜしやうに思さる。左大將、仲忠などは、春日にて見給ひしかば、それと思へど、恥ぢ畏まりしを思して、たゞ今もいみじう思へるを見れば、知らぬ樣にてさふらひ給ふ。帝、むかしより御覽じたる人を思し出づるに、忠こそを思し出でて、それなりけりと思し定めて、左大將に宣はす、（嵯峨）「この人、見し樣なれば哀なるを、一人なむ思ひ出でたる。昔契られたる中なれば（一）、見知られたらむとなむ思ふ」大將悲しと思して、え奏し給はず。帝、（二）右の大臣して、「昔の御時に、上にさふらひしと見るは、あらずや」と問はせ給ふ。忠こそ、氣色御覽ぜられぬと思ふに、涙雨のあしの如くこぼる。帝よりはじめ奉りて、聲も惜まずなむ。大將、（正頼）「この法師見給へつけしはじめより、奏せむと思う給へしかど「世に侍りけると聞召されじ」と、限なく恥ぢかしこまり侍りしかば、今に奏せず侍りつる」帝限なく

〔語釋〕

（一）正頼と忠こそとは殊によかりし中なれば

（二）忠雅

盡したり。撰びすぐりたる上手を整へたり。亂聲、鼓、物の音、一度に打吹き、彈きあはせたり。夥しくいかめしく(一)めでたし。明くるまで遊ぶ。

其の夜、物の音しづまりたる明け方に、はるかに、行人の聲きこゆ。帝聞しめして、嵯峨「怪しくたふとく讀經するものこそあれ。尋ねて召せ」と宣ふ。藏人、殿上人、馬に乘りて、ほのかに聞ゆる方をさして行くに、神の宮にいたりぬ。そこにかの行人は讀經してあり。(二)これは忠こそなりけり。あて宮の御上をはるかに思ふまじき心つきて、「そのあたりをだに、今一度見せ給へ」と六十餘國を行ひありけるを、召すに參らぬを強ひて率て參りて、「さふらふ」と奏す。帝御階のもとに召して御覽ずるに、木の皮、苔の衣を著て、いふばかりなきものから、ただの人に見えず。帝、なほこれはある樣ある者なりと思召して、嵯峨「何事により何れの山につとめ行ふ人ぞ」と委しく問はせ給ふ。忠こそ、(三)斯くなりにたれば見知る人もなけれど、思召しもこそ出づれ、と悲しくいみじく思ふ。(四)帝、仲頼、行政

〔語釋〕
(三)以下忠こその心

〔考異〕
(一)いかめしく—ナシ
(二)あり—あなり
(四)おもふ—思へり

（語釋）
（一）春海翁曰、屯はむらとよむべし
（二）高麗錦歟
（三）誤脫あるべし
（考異）
（四）めづらかなる聲―めづらしう聲―めづらしかなる聲

きては女に傳ふ。女仲忠に傳ふ。それだに有難し。文の道さへやは俊蔭女子に教へけむ。すべて仲忠、仲頼はいとあやし。變化の者どもなめり」と宣はするほどに、その日の祿、源氏の君、帝の御前に、銀のすきばこ、おなじ臺にすゑて、九つの包のなかに、綾錦よりはじめて、ありがたき藥、世に出で來がたき香、帝いまだ御覽ぜぬ物ども、銀黃金にて細かにし入れて參らす。上達部、御子たちまでつらねて持て參りて、立ち竝べり。左右の大臣、御子たちよりはじめて、白絹、たみ綿百屯（一）、殿上人諸大夫どもよりはじめておほくの百官、しな〴〵にいかめしき事どもなり。上﨟の御供の人々まで、程につけて賜はす。

かくて夜に入りぬ。御前に、黃金の燈籠、燈盞、沈の御松明、前ごとにともしたり。高麗の（二）幄十一間を鱗の如くうちたり。沈の舞臺、かねの綵して結ひわたし、よろづの樂器ども、金、銀、瑠璃をみがき調へて、簫四十人笛四十人、彈き物、舞人數を盡して參る。穴ある物を（三）、めづらかなる聲せし御時なり（四）。その道の上手、數を

御子たち、上達部に、紫檀の衝重、おなじ轆轤挽の御器、ほど〳〵に隨ひてとゝのへて參る。殿上人よりはじめて、所々の上下の人々におの〳〵馬添、ゐかはおさへをかへ(一)まで賜ひ、おなじくくだし給ふ物も、いかめしくうるはしく盛りてくみとゝのへて、飽き滿ちたり。

かくて御土器はじまる。文人に難き題出されたり。賜はりて、文つくりはてて御前に奉る。文章博士講師讀みまうす。諸聲に誦せさせ給ふなかに、季英が聲をきこしめして、帝驚きめでさせ給ひて、たちかへり(二)誦せさせ給ふ。うち次ぎて四人の殿上人の文講ず。帝驚きめでさせ給ふ。嵯峨「たび〳〵唐土にわたれる累代の博士の文に劣らず、この男どもの作り勝れるかな。たいさく(三)(四)とて學問せさせたる道の人にもあらず。年若くして遊にすゝめる者どもなり。行政幼くて唐土に渡れりといへども、まだ年若くて歸りまうで來たり。仲忠俊蔭が後といへども、俊蔭かくれて二十(五)餘年、仲忠世間に智ありといへども、彼が時にあはず(六)。琴にお

〔語釋〕
(一)未詳。「ゐかいおまへをかへてたまひ」と書ける本もあり
(二)くりかへし
(三)「たいさく」は對策なるべし、されど詞のつゞき穩かならず。
(六)祖父俊蔭と時を同じうせず

〔考異〕
(四)たいさくとて―かたき題いたさむとて
(五)二十―三十

（釋語）
（一）正賴
（三）正席
（五）盛り物
（六）巨勢利和曰、十六の大國の生物歟

（考異）
（二）皆ーナシ
（四）よろひにー「に」ナシ
（七）沈ーナシ

中務親王、
　菊園にいくらの齢こもれゝば露のそこより千代を延ぶらむ
兵部卿親王、
　白菊のおなじ園なる枝なればわかれず匂ふ花にもあるかな
左大將、（一）
　白菊の千歳をこめて待つ園にのこれる露を玉と見るかな
かくて帝出でおはしまして、上達部、親王たち皆（二）著き竝みたまへり。御前には、錦の幄うちて、陣の座に文人學生など著き竝みぬ。暫しあれば、宣旨くだりて、殿上人仲頼、行政、涼、仲忠四人召されて、横座（三）につきぬ。かゝる程に、御前に、沈の棚厨子九よろひに（四）、棚一つに、おなじ轆轤挽の御器十五、こがねの御器十五づつ、よそひは十六（六）の生物、干物よりはじめて貝甲をつくして、御菓物、數を調へかざり盛り（五）たり。御物の臺九よろひ、沈（七）、黄金の御器、まるり物おなじ數なり。

兵部卿親王、

　昨日けふ岸より生ふる松なれどすぐれてさせる枝にもあるかな

かくて九日こゝにて(一)聞食す。御前をみがき飾れること限なし。(二)笆の縦木には、紫檀、横木には沈、結緒には緂の組して結ひて、黄金のいさご敷きて、黒方を土にしたり。銀して菊をかざり、(三)うつろへる花など調へたる(四)なかに、紺青、緑青の玉を、花の露におかせたり。その日のつとめては(五)かすそうせさせて、源氏参らせ給ふ。この源氏の名は涼となむありける。菊につけたりける歌、

　涼　朝露にさかりの菊を折りて見るかざしよりこそ御世も(六)まさらめ

帝御覽じて、いと切なりと思したり。

　嵯峨(七)　餘所ながら玉なすものは(八)菊園の露のひかりを見るが(九)うれしさ

式部卿親王、

　秋來れば園の菊にもおくものをわがみの露をなど嘆き(一〇)けむ

〔語釋〕
（一）九月九日の宴
（二）菊のめぐりにたつるませがき
（五）巨勢利和日、土佐家本に葉數と字注せり
（七）我子ながら今まで餘所にして經來りし涼の立派に生ひ立ちたるを見る嬉しさの意
（八）ものは—ものと歟

〔考異〕
（三）かざり—かざれり
（四）花など調へたるなかに—花などの上下中に—花などの上下などに
（六）御世も—みにも
（九）見るがうれしさ—見るぞ嬉しき
（一〇）嘆きけむ—嘆くらむ

き所なりけり。いかで斯くて住むらむ、と御覧ず。威儀のおものは、更にも言はず、上達部、御子たち、沈、紫檀の衝重して海山のもの(一)を盡してまゐり、六位の衞府、諸大夫、しな〴〵にいかめしくて(二)、饗したり。上よりはじめて、御箸くだり、御土器まゐる。源氏殿上ゆるされて、御前に召して御覧ぜらる(三)。そこばく擇ばれたる人々に劣らず御覧ぜらる。御遊はじまりて、上琵琶の御琴、仲忠に和琴、仲頼箏の琴、源氏に琴の御琴賜ひてあそばす(四)。つゝむ事なくおほめく事なし。嵯峨「いかで斯くはし習ひけむ」と仰せたまひて、又箏の御琴たまひて彈かせ給ふ。何れもいと(五)めでたし。(六)こくばくの上手どもに勝れり。御琴を取りてさふらふを御覧じて、

嵯峨きのふまで二葉の松と聞えしを陰さすまでもなりにけるかな

式部卿親王、

根をひろみ陰もおよばぬ庭の松(七)に枝のならぶぞ嬉しかりける

〔語釋〕
(四)源氏涼の態度の遠慮なきをいふ
(七)涼を兄弟にもてる嬉しさをいふ

〔考異〕
(一)ものを—「を」ナシ
(二)いかめしくて—「て」ナシ
(三)御覧ぜらる—御覧ず
(五)いとめでたし—いといとめでたし
(六)こくばく—そくばく

は、十日二十日こそはありかせ給へる。まして四五日の程は、いとよくおはしましなむ」と奏し給へば、御氣色よくて、嵯峨「さらば」など宣はす。これかれ、「この頃こそ草木のさかりに侍れ。衰へざらむ前に御覽ぜさせばや」と聞ゆれば、嵯峨「よろしく定めてものせむかし」とて、才ある人、ある限(一)かたちを擇び給へり。(二)九日の宴は彼處にてきこしめさむ、とて文章生などさふらはせ給ふ。(三)季英かしこきものと聞召して、さふらふべき由仰せ給ふ。(四)大將殿、裝束、馬、鞍よりはじめて出だしたて給ふ。(五)かくて、院の御子たち、殿上人も、才あり、容貌あるは、みな出で立つ。紀伊國の源氏かゝる事をきゝて、御設し給ふ事いといみじ。

九月一日に出でおはします。道のほどの事ども言ひ盡すべくもあらず。紀伊國に入り立ち給ふさかひよりはじめて道のほどの事ども、種松、金銀、瑠璃してつくれり。吹上の宮に著き給へれば西の陣をひらきて入らせ給ふ。五日の申の時ばかりに(六)おはしまして、めでたく磨きしつらへる所に、皆著き竝み給ひぬ。いとにな

〔語釋〕
(二)九月九日菊の宴
(三)季英
(四)正賴が季英の支度の世話をする也

㊀嵯峨院吹上御幸。涼院の殿上を聽さる。九日の宴。忠こそ法師吹上に參會す。涼を伴ひて還御

〔考異〕
(一)かたちを—かたちなど
(五)かくて院の—かくて嵯峨の院の
(六)おはしまして—おはしましぬ

花紅葉などは然侍らぬ物なり」と奏す。嵯峨「今年は、あやしく木の葉の色ふかく、花の姿をかしかるべき年になむある。興あるをかしからむ野邊に、小鷹(一)入れて見ばや」と宣はす。仲賴、「しか侍る年になむ。木の葉も(二)またきに色づきて、おなじ露時雨もげに心ばへ殊なり(三)。つかさの大將(四)、尉ひき連れて大原野にまかりて侍りしに、その野いといみじき程になりにて侍りぬ」上、嵯峨「いとをかしき事かな。いかめしき逍遙などする、故(五)あるわざなりかし。さて何事かありし」仲賴、「異なる事侍らざりき。あまたが中に、こともなき、小鷹一つなむ侍りし」上、嵯峨「かの鷹を試みばや。入り所のをかしからむ、思ひ出でよや」仲賴「仲賴が見給ふるは、さきに奏し侍りし紀伊國になむ侍る。十六の大國にも、さばかりの所やは侍らむ」上、嵯峨「そよや、さる事ぞや。いとゆかしけれ(六)。誰彼も然奏せしかど、いかでかは彼處まではものせむ。いと所狹きうちに、例なき事にもこそ」と宣はすれば右のおとゞ、忠雅「などかは(七)おはしまさゞらむ。唐の國の帝は、遠狩し給ふとて

〔語釋〕
(一)小鷹狩をして
(四)正賴
(五)趣ある
(六)「いとこそゆかしけれ」なるべし。「いとゆかしけれあるかし誰かれも」とかきたる本もあり

〔考異〕
(二)木の葉も—「も」ナシ
(三)殊なり—殊なるに
(七)などかは—などかそは

吹上（下）

梗概

㊀仲頼嵯峨院に吹上の勝景を奏す。御幸の準備。㊁嵯峨院吹上御幸。涼、院の殿上を聽さる。九日の宴。忠こそ法師吹上に參會す。涼を伴ひて還御。㊂神泉苑の紅葉の賀。藤英進士になさる。涼、仲忠琴を彈く。奇特。涼、仲忠中將に任ぜらる。仲忠に朱雀院の女一宮、涼にあて宮を賜ふべき勅。涼其の師彌行の事を奏す。㊃涼、三條に住す。その榮華。㊄忠こそ法師、眞言院の何闍梨に任ぜらる。落魄せる繼母を扶養す。宮あこ君を介して歌をあて宮に贈る。㊅懸想人等歌をあて宮に贈る

㊀仲頼、嵯峨院に吹上の勝景を奏す。御幸の準備

〔語釋〕
（一）嵯峨院

〔考異〕
（二）年の內の―年の內―年の內に
（三）程はいつか―程にいつかはと
（四）近き…春日野―近きほとりは嵯峨春日野

かくて八月中の十日の程に、院（一）の帝花の宴し給ふ。上達部、親王たち、殘りなく參り給ひて、御遊し給ふ。帝、嵯峨「年（二）の內の草木のさかり、秋の程（三）はいつか」と問はせ給ふ。藏人少將仲頼奏す、「野のさかりは八月中の十日、山のさかりは九月上の十日の程になむ」嵯峨「野山の中にはいづれか面白き」仲頼奏す、「近き（四）ほど、野は嵯峨野、春日野、山は小倉山、嵐山なむ侍る。草木などは、心生ひに生ひたるは拙きものなり。人近にて、朝夕撫でつくろひたるなむ、姿ありさま情侍る。

〔語釈〕
(一)實忠危篤なりとて
(三)「宣へば」は「聞ゆれば」の誤なるべし

〔考異〕
(二)などしも—なども
(四)たゞ—ナシ

へども、物も宣はず。兵衛の君、「なほ此の度ばかりは宣はせよ。(一)いみじくなりにたりとて、いとほしがり給ふを、人を助くると思せかし」あて宮、「我に負すこそ怪しけれ。さてもかゝる人には、またなむ言はぬぞよき」兵衛「(二)などしも人に情なく思しなりしぞ。然あらでも見えぬるぞよき」など(三)宣へば、あて宮「さば聞えつべき人にこそは、時々ものすれ」とて物も宣はず。

兵衛良佐、思ひまどひて(四)たゞ斯くなむ、

行政　数ならぬ身を初秋のわびしきは時雨もいろに出でぬなりけり

など聞えたり。御返なし。

（考異）
（一）なりぬばかり―なりぬるばかり
（二）身の―身に

硯に、手まさぐりして、

仲忠　寐る間なくなげく心も夢にだにそふやと思へばまどろまれけり

と書くまゝに消えぬ。あて宮、見ぬやうにて物も宣はず。

源宰相、伏し沈みて、死ぬ〳〵と、天の下に惜まれつゝこもり臥して、思ひなげきて、かく聞えたり、

實正　數ならぬ身を思ひ給へ知らぬやうなるが畏きに、聞えさせじと返す〴〵思う給へれど、徒（一）になりぬばかりも、覺束なくて歎みぬるがいみじければ。

いでや、

涙だに川となる身（二）の年を經てかく水莖やいづち行くらむ

たゞ今も死ぬる身なれど、もしやと頼み聞えさせてなむ、今の程めぐらひ侍る。吾が君〳〵、たすけ給へ。

と聞え給へり。あて宮、「かくも言はぬものを、いとほしくも言ひたるかな」とは宣

あて宮 川の瀬にうかべる男かゞりびのかげをや己がこひと見つらむ

など宣ふ。

近き程にだに、斯く思ほし入らるめれば、まして紀伊國の源氏、限なく思ひ歎くまゝに、かたち淸らに心ある童べ、人の子どもに裝束を淸らにせさせて、時々にめづらしき花紅葉、おもしろき枝に、ありがたき紙に書きて、日にしたがひて(一)奉らるゝに斯くなむ、

涼 數知らぬ身よりあまれる思にはなぐさの濱(二)のかひもなきかな(三)

とのみなむ。いでや、塵もこそ積るところあなれ。とまるかげも覺えぬこそ、おほつかなけれ。

など聞えたり。おとゞ見給ひて、正頼「上手(四)の所にうち出でたるに、かたはらいたからぬ文かな」など宣へど、御返りなし。

中のおとゞに庚申(五)し給ひて、男女、方わきて、石はじきし給ふ。侍從、御前なる

(五) 涼仲澄等歌をあて宮に贈る

〔語釋〕
(二)なぐさ—名草、慰
(四)貴人の前へ出しても
(五)庚申待

〔考異〕
(一)奉らるゝに—奉らるる

(三)かな—かも

に」あて宮「然ば琴ひきつるは聞きつらむな。あな恥かしや。みな上手ぞや。われは聞えじ」とて入り給ひぬ。侍従聞きて、仲忠「あな心憂のことや。なほ吾が佛、今宵ならずともたばかり給へ。人よりも親に仕うまつらむと思ふ心ふかきを、かゝる思つきにしより、片時世に經べくは思ほえねば、今さらに不孝の人になりぬべきがいみじければ、いさゝか思ひ鎭まるやとてなむ」と泣く〳〵夜一夜物語しあかして、つとめて、黒方を銀の鯉にくはせて、その鯉に、斯く書きつけて奉れたり、

仲忠夜もすがら我がうかみつる涙川つきせずこひのあるぞ侘しき

とて奉れたり。あて宮ものも宣はず。孫王の君、「この度はなほ宣はせよ。殊にものも宣はせず靜なる人の、心たましひもなく、泣きまどひ給へば、いとほしくなむ」と聞ゆれば、あて宮「聞きにくきこと出で來ば、君の御罪になさむ」とて、銀の川に、沈の松ともして、沈の男に持たせて、かく書きつけて遣はす、

（考異）
（一）返事せじ
（四）せめて詞をなりともかはしたらば心の鎭まる事もあらんかと思ひて賴むぞと也
（六）松明

（語釋）
（二）聞えじ—きかじ
（三）吾が佛—あがみ佛—あがきみ佛
（五）つきせず—つきせぬ
（七）てかく—ナシ

入れば 仲忠「見給へ(一)。然聞ゆとも、世に惡しきわざせじや」(二)などて引き留めて、仲忠「まめやかには、いかで、餘所ながら物一言聞えさせてしがな。然はありぬべ(三)しや」孫王「いで、あなむくつけ。ときぐ〳〵宣ふ返事も、いと聞え難うし給ふを、とかくしてこそあれ。(四)思ほしだにかくるこそ、いとめざましけれ」(五)仲忠「怪しや。内裏にては、仁壽殿などにても、時々召して、もの宣ひなどはせずや。(六)など人はえ宣ひ觸(七)れぬにこそあめれ」いらへ、孫王「それも、人してこそは聞え給はめ。此處にも己らは聞えずやは」など言ふ。侍從、龍膽の花押し折りて、しろき蓮の花に、笄のさきして、斯く書きつけて奉る、

仲忠 淺き瀬にながれて(八)くだる筏士はいくらのくれ(九)かなかれ(一〇)來ぬらむ

かく思う給へては久しくなりぬるを、いかで今宵だに、一言だに聞えさせてしがな。いらへこそ宣はざらめ、聞召すばかりには、何の罪もあらじ。とてなむ奉る。宮見給ひて、あて宮「何處にあるぞ」と宣ふ。孫王の君、「東の簀子

〔語釋〕
(二)「などとて」なるべし
(四)逢ひて詞をかはしたしなどと
(六)誤あるべし
(九)くれ—榑、暮
(一〇)なかれ—流れ。泣かれ

〔考異〕
(一)見給へ—まち給へ
(三)ありぬべしや—あるべしや
(五)めざましけれ—あさましけれ
(七)觸れぬに—「に」ナシ
(八)ながれてくだる—なげきにわたる

しろき手をあそばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、調よりはじめ、違ふところなく、我が弾く(一)手とひとしきを聞くにしづ心なし。身はいたづらになるとも、取り(二)や隠してまし、など思ふにも、母北の方の御事を思ふに、なほいとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて、孫王の君に、仲忠「などか一日の御かへりは宣はずなりにし」いらへ、孫王「侍従の君と御碁あそばす折なりしかばなむ」侍従、仲忠「承(三)はりからにやありけむ、あはれ手つき思ひやられても遊ばすなるかな。箏の御琴は然な(四)り。琵琶は誰が遊ばすぞ」いらへ、孫王「今宮にやおはしますらむ」侍従、仲忠「今だに斯る御琴ども、如何(五)にあらむとすらむ。いでや、かく物の覚(六)ゆればや、人の過をもすらむ。限なく思ひ忍べど、え堪ふまじくもあるかな」いらへ、孫王「よくもあらぬものこそ、さる心もあれ。うたても宣ふかな」侍従、仲忠「いくそ度か思ひかへしぬ。されど、然てのみは得こそあるまじけれ。如何せむ」孫王の君「ものな宣ひそ」とて立ちて

〔語釈〕
(二)あて宮を奪ひて立退かんかなどと
(三)聞く者の心持故かあて宮の琴の音が身にしみて聞ゆると也
(四)あて宮がひくならん
(五)將來は
(六)人の過失をし出すは此樣に思の堪へ難き時の事なるべし

〔考異〕
(一)彈く—ナシ

〔語釋〕
(一)一夜の中に幾度かかへすらんの意、裏返して衣を着て寐れば思ふ人を夢に見るといふ俗傳ありし也
(三)「聞え」の上に「と」あるべし

〔考異〕
(二)あやなく—あやし

㊟ あて宮月夜に琴を彈く。仲忠孫王の君を介して歌をあて宮に贈る

如何せむ。斯くてのみはえあるまじきを、つれなき御氣色に見給ふるこそいと侘しけれ。

と聞え給へり。御返なし。右大將、

兼雅 いくたびか夜にかへすらむ唐衣かへすがへすも恨みらるゝは(一)かつはあやなく。(二)

など聞え給へど御返なし。平中納言殿より、

正明 浦風はあるゝ海にも吹くものをなどあらししも早き川瀬ぞ

有りがたき御心となむ。

(三)聞え給へり。三の親王、

忠康 おほつかなまだふみも見ぬもの故に君はあたごと思ほゆるかな

と聞え給へり。

月のおもしろき夜、今宮、あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵琶、箏の琴、おも

など宣へり。あて宮、

棚機の逢ひ見ぬ秋をまつものを逢ふ夜をのみもあまた聞くかな(一)

ゆゝしき物羨をのみも、となむ。まことやまきの板戸はさゝでのみなむ。(二)

と聞え給ふ。

源宰相、中のおとゞの簀子にて、(三)おとゞ君だち、(四)御琴あそばしなどする夕暮に、御簾のもとにて兵衛の君に、實忠「(五)などか、一夜は下り給はずなりにし。今は君さへつれなくなりまさり給ふこそ侘しけれ」兵衛、「變らぬものは然ぞ見ゆるや。一夜は、(六)まかなひにさふらひしかばなむ」など言ふほどに、(七)蜩たちかへり鳴く。宰相の君、

實忠　夕されば まろねする身の侘しきになく(八)蜩の聲やなになり

と宣へど聞き入れ給はず。兵部卿宮より、

おく露に萩の下葉は色づけどころも擣つべき人のなきかな

〔語釋〕

(一)棚機とは東宮をいへり

(二)古今集「君や來む我や行かむのいざよひに眞木の板戸もさゝず寢にけり」

(三)「をとこ君たち」の誤歟

(五)實忠が兵衛の局を訪ひし時兵衛があて宮の御前に出で居て下らざりし事ありしなり

(六)あて宮の御食事の御給仕

(七)蜩

〔考異〕

(四)御琴―御事

(八)なになり―なになる

〔語釋〕
(一)あて宮に懸想する心の歇み難さに出立ちし也

〔考異〕
(二)思ほゆ―おぼゆ
(三)院にまかでてもなほ―院のうち曹司にて
(四)かくて―ナシ

㊟ 懸想人等歌をあて宮に贈る

ひつる學生らにこよなく勝りたり。つくり出だせる文そこばくの中に勝れたり。衆の中たゞ今一なり。

かくて、垣下の所の物の音出だして遊びあかして、曉方にみな、博士、四位には女のよそひ、五位には白張一かさねづつ、あはせの袴一かさねづつ給ふ。藤英も賜はれり。藤英、かしこき心に思ひ狂ひて(一)出で立ちしを、かひなくて殿をまかづることの、劍にあたるごと思ほゆ(二)。然ありとて、すべき事も思ほえねば、中の大殿の東面なる竹の葉に、かく書きつく、

藤英　ひこ星のあひ見てかへる曉もおもふ心のゆかずもあるかな

と書きてまかづ。(三)院にまかでてもなほ思ふこと限なし。

(四)かくて東宮より、

東宮　つれもなき人をまつ間に棚機の逢ふ夜もあまた過ぎにけるかな

常にもうらやませ給ふかな。なほ斯うのみあめる。其處にや參り來べき。

に誦ぜさせて、御琴にあはせて(一)さす。他事なく面白し。おとゞ、季英に御土器賜ふ。

正頼 色かへぬ松をばおきて藤が枝を秋の山にもうつしてしがな

季英、賜はるとて、

藤英 あらかねの土のうへより藤かつら這ふ(二)てふ今日ぞ嬉しかりける

と聞ゆ。おとゞ、藤英が姿を思ほすほどに、民部丞藤原元則、あざやかに麗はしき裝し、すぐれたる帶さして出で來たるを御覽じて宣ふ、正頼「この學生、ぴさう(三)(四)なり。元則、しばし布衣になりて、その裝束、この學生に取らせよ」元則かしこまりて、藤英を呼びかくして、鬢(五)搔きつくろひ裝束せさせつゝ言ふ、元則「主は言(六)語絶え給ふなめり。元則らも、道のことのいみじう悲しきことは知り給へたり。細かなるこしかうたい(七)も侍らず。主もはた然もし給はざなり。一向におひ仕うまつらむ。(八)元則らが許に越し給へ」など言ひて、つくろひ立てたり。裝束かたち、笑

〔語釋〕
(一)「あはせて」の「て」衍文なるべし
(三)「ぴさう」は貧相歟
(七)朱評

〔考異〕
(二)這ふてふ—這ひてし
(四)ぴさう—心みさう
(五)鬢搔きつくろひ—鬢かきよそひ—鬢かきひげそりよそひ
(六)言語—よく
(八)元則らが許に越し給へ—元則らも御許にぐしたまへ

たりとして、學生(一)院内すけなくして、わたくし豐にさとりなき學生どもには、ゆたかに賜へれども、季英がたよりを失ひて、學問につかるゝをば、一度のしきおこ(二)なふおそれに勞れ(三)臥すことなし(四)、跡を絶ちて籠り侍る學生なり」と申す。おとゞ、正頼「大學勸學院といふものは、大臣公卿よりはじめ奉りて、封を分け、さうを入(五)れ、俸祿をおきたる所は、大學のみちにかくそくら(七)といふことあらむ。豪家としてある正頼だに(六)、ことにせぬ事なり。御子たちの御俸祿、かず數多あり。自らも(八)一わう賜はる。かゝれども、家に功(九)あるものに賜ひて、餘るをこそ料物奉るには給ぶ。季英が申すごとくには、公に仕うまつりぬべき者にこそあなれ。堪へたる事なき人だに、身の沈むをば愁とする事を、理なり(一〇)(一一)。貧しきをおこたりにせば、正頼こそは交らはざらましか。魂におきては、身の憂ある時は、公私にうれへをなし、よき人も鎭まらず、事叶ふときには、ふあく(一二)の者もをさまりぬる(一三)ものなり」など宣ふ。博士たち畏まりてさふらふ。おとゞ、作れりける文(一四)を一人

〔語釋〕
(二)「おこなはずそれに」歟
(四)「なし」は「なく」歟
(五)「さう」は「莊」歟
(六)此處誤脱あるべし
(八)誤あるべし「一にう」とかける本もあり
(一〇)有智の季英が嘆くは道理也
(一二)武勇の者の意歟
(一三)魂をさまりぬるものなりの意
(一四)藤英の作れる詩を

〔考異〕
(一)學生―かうたゞ
(三)臥すことと―やすること
(七)かくそくら―かくそくう
(九)功ある―らうある
(一一)なり―なりや

〔語釋〕
(一)學問科
(二)未詳
(三)武藝を業として
(四)料足即金錢をいふなるべし
(六)博士等に
(七)歎し居る
(八)咎にして
〔考異〕
(五)給はぬなし―給はぬはなし

つめ、冬は雪を集へて、部屋に集へたること、年重なりぬ。然あれど、當時の博士、あはれみ淺く、貪欲ふかくして、料賜(一)はらで、今年廿餘年になりぬるに、一つのしき(二)あてず。兵(三)を業として、惡を旨として、博打、狩、漁に、すゝめる者の、昨日今日入學して、黒しあかしのさとり無きが、足(四)を奉るを、序を越して、季英多くのついでを過しつ」許多の博士の前にて紅の涙を流して申す。聞召す人、涙を流し給(五)はぬなし。あるじの大殿、正頼「この學生がかく申すは、如何なる事ぞ」と問(六)はせ給へば、博士ども聞ゆ、「季英、まことにさとり侍る者なり。されど彼が魂定まらずして、公に仕うまつるべくもあらず。これまかり出でたらば、公私、妨となるべきによりて、えせず侍るなり」と申す。季英、爪を彈き、天を仰ぎてさふらふ。大將のおとゞ、正頼「然侍るものか」とあまねく問はせ給ふ。心を合せて鎭(七)むる中に、さうとうしき忠遠、「今氏の院に、魂定まり、身の才すぐれたる者、これのみなむ侍る。人の爲に犯、過一期一生なし。身の便なきをおこ(八)

じらす。いみじきものかな」とて、鳴を鎭めて、おほん口づから問はせ給ふ。正頼「學生らの末に、異句を誦する人、何まろといふ學生ぞ」と高く宣ふ。藤英おどろき申す、藤英「勸學院西の曹司の學生、藤原季英」と申す。正頼「興ある學生かな。此方にまうで來(一)」と宣ふ。そこばくの中を分けて、晝よりも明く、照り滿ちたる火影に見えたる姿、限なくめづらし。え念ぜず一度にさと笑ふ聲のす。荒くけうさう(二)して、鳴靜まりぬ。あるじの大殿、藤英に問はせ給ふ、正頼「誰が後として、誰が弟子(三)に侍る學生ぞ」と問はせ給ふ。季英、「けたう(四)の大辨成蔭のおとどの一男として、料(五)賜はれる文屋童に侍り。成蔭の左大辨、參議に侍りし程に、つはものの爲に命終り、兄弟おほく、殘るかばねなく滅びはてて、季英一人なむ、彼が後とて侍る。三月(六)(七)のあいれしゑひはするともがら、一生一人なし。七歳にて入學して今年は二十一年(八)、それよりいく(九)、眼のぬけ、臓の盡きむを期に定めて、大學の窓に光朗らかなる朝は、眼もかはさずまもる。光を閉ぢつる夕は、草叢の螢をあ

〔語釋〕
(二)「けうさう」は「警策」の字音なるべし、警策しては注意を與へての意
(四)「けたう」は遣唐歟
(五)學問料
(六)誤脱あるべし
(九)誤脱あるべし

〔考異〕
(一)まうで來—まうでこ—まうでよ
(三)弟子—しき
(七)三月…ともがら—三年のあいやしえいわするともがら—三年のあはれしゑひするともがら
(八)二十一年—三十五年—三十一年—二十八歳

かくの所より、お前ごとに卓まゐり、土器はじまり、箸下りて、あるじのおとゞ、題出だし給ふ。探韻賜はり(一)て八韻の文つくる。上達部、御子たち、宮、家の子つくり給へり。作りはてて、お前に出でて、文奉る。式部丞講師して讀みあぐ。(二)もろすゝ。夜に入りて、燈籠間ごとに掛け、燈臺隙なく立て、松明ともしわたし(三)て、藤英は、文人どもかくたより文(四)奉るにも、お前にて作り出だしたる文は、(五)上達部見給はむに、名高くなりぬべければ、講師取り隱して、讀まずなりぬ。上達部、御子たち、ある者とも知り給はず。あるじの大殿よりはじめ奉りて、琴あそばす限、その聲に調べて、今日の文の興ある句をあはせて(六)遊ばすに、夜も更けゆくに、琴の音、人の聲、ゆたかに高し。藤英おのれが作れる文を、聲の限ふりたてて誦する聲、高麗鈴を振り立つるに劣らず。あるじの大殿きこしめして、正賴「今日の文に聞えざりつる句を、一人誦する人あなり。誰ぞ」と宣ふ。博士文人ら(七)聞え紛らはす。正賴「こゝら興ある句をおもしろき聲に、多くの人の誦する聲にま

（語釋）
（二）誤脫あるべし。「人々もろ聲に誦す」などありし歟
（三）「わたして」の下に脫文あるべし
（四）「たより文」は「作文」を「便文」と書き誤りたるを假名がきにしたるならん歟
（五）藤英の文は

（考異）
（一）賜はりて—たうびて
（六）あはせて—ゐあはせて
（七）文人ら—文に

どか、御歩のまだしかりける。忠遠が參り來るを待たれつるか」衆のいらへ、「然もあり。又この藤英出立ち給ふに、(一)こと亂れて、試策のこさめらにのおもくいたらで歩みぬるは」さうとうしき、忠遠「などか藤英の別當殿に(二)參り給ふらむからに、歩の止まむ。藤英は氏の院の學生には非ずや。えさう(三)古くてあることは、いはゆる大學の衆(四)なり。冠たゝなはり。つるばみの衣破れくづれ、襪破れて、憔悴したる人の、身の才あるをなむ學生といふ。これ、さこそ出で立ちもすれ。親ある人の、身の才もなくて、豪家をたのみ、財をつくして、したにくゝりをしつゝ華やぐ人は、學生にはあらず。さても、何ぞのかうじや(六)童か、(五)物笑はする。はや出で立ち給はむ(七)」などて(八)、忠遠「藤英立ち給へ。これなむ眞の大學の生(九)」とて。おとゞ、正頼「例より興ある試策なるを、え見過すまじく思はえつるを、いと切なる歩なり」と宣ひて、中島の釣殿に家司ども渡りて整へ、上達部、御子たち、衞府、院司まで著き竝み、博士文人、列引きて著き竝みぬ。(一〇)さうとうしき、(一一)りんし

（語釋）
（一）さうとうしきの名
（二）誤なるべし。一本には「試策のこさめうにのおもくいたらで」又一本には「試策のみさみちにのおもいたして」
（三）「えさう」は衣裳なるべし
（五）誤あらんか
（六）「かうじや」は冠者なるべし
（七）「給はん」は「給はなむ」なるべし
（八）「などとて」なるべし
（九）「とて」の下脱文あるべし
（一〇）誤脫あるべし

（考異）
（四）衆—生
（一一）さうとうしきりんし—さうとうしきにりんし—さうとうしきにけんし

例よりも興あるべき試策なるべきを、たゞに過さじ。別當殿に(一)この由を(二)申させて。大學より(三)三條の院ちかし。徒より歩まむ」とて列ひきて立てるに、西の曹司の藤英、常は、のよしりて出で立つを見れど、思ひもかけぬを、今日はえ留まるまじく思ほゆ。(四)上の衣の(五)わよけたるに、下襲の半臂も(六)なく、太かたびらの下の衣著て、上のはかま、下のはかまも無し。冠の破れひしげて、(七)巾子の限ある、尻切の尻の破れたるを穿きて、色もなく青み痩せて、ゆるぎ出で來て、藤英「季英、(八)今日の御歩の(九)をちに入らむ」とて交りたり。博士友だちより末まで、笑ふこと限なし。「かの別當殿の殿、上の御殿に劣らず、宿徳、かどある限集ひたちて、(一〇)例の人をだにゆるし給はぬ世の中に、いはむや、學生の男の御裝束にて參り給はゞ、氏の院の永き名になりなむ。速にまかり留まり給へ。いと(一一)不便なり。院をも追ひ捨てむ」など言ひて、取り寄りて打ち引かぬばかり、引き退け、おし倒しなどすれど、留まるべくもあらず。騷ぎ滿ちて、歩み歇みなむとす。さうとうし(一二)き參りて、さう「な

〔語釋〕
(一)「申させてむ」歟
(三)正頼邸
(五)破れたる
(七)巾子ばかり殘りたる
(八)草履の一種
(九)「れちに」歟「おちに」とかきたる本もあり
(一〇)あたり前の人をすら
(一一)不都合なり

〔考異〕
(一)この由を―「を」ナシ
(四)上の衣―こめのきぬ
(六)なく―なき
(一二)しき―しろ

〔語釋〕
(一)正賴
(三)誤あ　べし
(四)「おほやけごとによりて俄に」歟

〔異考〕
(一)處なし―ところはなし

㊂ 試策。大學の學生等正賴の邸に參る。藤英はじめて正賴に賞らる。藤英あて宮に懸想す。

同じき八人、北の大殿より、うすものに綾、縑かさねたる、女郎花色のかざみ、あこめ、はかま、同じやうにて八人、かたぐ\より歩み出でて、お前の前栽の松の下に、反橋、浮橋をわたしつゝ、色々の絲どもを一つづつ、機棚に奉る。つぎて、簀子に、蒔繪の棚、廚子七ッたてて、庇に御簾かけならべ立てて、よきけづり竿わたして、色々の御衣ども色をつくし、解きほどき、おほ衣架をならべ、御調度色をつくし、品をとゝのへ、御かづらども長をとゝのへ、數をつくして、方方に飾られたり。風にきほひて、物の香どもふき加へぬ處(一)なし。節供例のごと、あづかりごとに折敷、まゐり物おなじ數にまゐる。預りどもに、女のよそひ一くだり、本家の御方より、召しならべて賜ふ。並み立ちて舞踏したり。

かくておとゞ(一)、源氏におはしませども、外戚藤氏におはします、うけ申しける(三)によりて、大學勸學院の別當し給ふ。公の試策きこしめさすとて、博士、文人八十餘人、仁壽殿に參るべきを、おほやけごと(四)俄にとまりぬ。「さうぐ\しきわざかな。

〔語釋〕
(一)今のもやし、黃菜
(六)「紙ども配る」の意歟
(七)誤脫あるべし
(八)此一節畫詞の亂れたるかとも思はる
(九)正賴邸

〔考異〕
(一)藤英が—ナシ
(三)これは—こゝは
(四)のゝしる—のゝしり
(五)にはのみたさう—にのみにさら—にはのみたさら

㊉ 正賴の家の七夕

(一〇)うへの…花薄—あはせのあこめみへん

画詞 こゝは勸學院の西、藤英(一)が曹司。藤英文机にむかひて、文どもめぐりに山のごとく積みて、蟲袋に入れて、書の上におきて、太き布のかたびら一つを著て居たり。厨女、黑き飯飯笥に入れて、(二)さはやけの汁して、持て來たり。(三)これは東の曹司。大學の學衆ども著き竝みて、酒、肴、飯、院司さうとうしき、集ひて(四)のゝしる。政所の別當ども著き竝みたり。米、數知らず積みおきたり。大炊殿。男おものす。專女、厨女あり。「藤英がかしはで(五)にはのみたさう」と言ひて奪ひかへる。これは座につきたる進士、秀才。この人あはせて八十人ばかり、臺盤にむかひて物食ふ。丹後の守饗したり。(六)かみともくばる。厨女し(七)はりかけてうつ。

(八)かゝる程に、七月七日に、(九)大將殿に、あくる日つとめて、西の大殿より、あを色に蘇枋がさね、綟の(一〇)うへのはかま、海松色に花薄がさねの綾、搔練のあこめ著たる童、髮丈にひとしき八人、中の大殿よりあか色に二藍がさねのあこめ、ばかま、

力に、恥すくひ、願滿て給へ」と心のうちに祈り申しつゝ、身の沈むことを歎きつゝあるに、院より(一)出でたる人の丹後守になれるが、出で立たむとて、旅籠ぶるひの(二)饗する日、さうとうしき(三)(四)を使にて、「今日座に奉れ。たうとさに(五)(六)まかりつきたる日なり」と言はす。藤英、「甚だ畏くかしこし。召し數まふること(七)、入學してことし二十餘年、いまださう(八)のねんにあづからず。たまくまかり著きし昔、身の恥あつかりしに因りてなり」と言はす。さうとうしき(九)、夏の衣の破れたる朽葉色の下襲のこうしたる(一〇)(一一)をとりに遣りて、かく言ひやる、

さう　夏衣わがぬぎ著する今日よりはみるなる恥も薄くなりなむ

藤英くれなゐの涙を流して、

藤英　恥をのみ八重著るきぬに脱ぎかへてうすき衣にすゞみぬるかな

とて還す。(一二)さうとうしきたひは一つが盛物、藤英が曹司にやる。みなこれに文ども作れり。

〔語釋〕
(一)勸學院出身
(二)出發前の饗應
(三)下に「さうとうし」とあると同じ人なるべし役名なるべけれど未詳
(五)誤脫あるべし
(八)誤脫あるべし、饗宴に列席したる事なしと意なるべし
(一〇)誤脫あるべし

〔考異〕
(四)さうとうしきを―さうしきを―さうしにきうしきを―さうしとさうしきを
(六)たうとさに―たうとをさに―たうをさに
(七)まかり―ナレ
(九)さうとうしき―さうとうし―さうとうしゝ―さうしとうしゝ
(一一)こうし―うらし―こちし―かうし―こえし
(一二)さうとうしきたひは―さうとうしとたへは―そうとうしたひは―さうとうしきたへは―さうとうしこへは。「さうとうしだいばん」歟

つゝ、量なく迫りて、(一)院の内にすげなくせらるゝから、雜色、廚女いふことも聽かず、座に著けば、院のうち笑ひ騷ぎて、「はや出で去れ〳〵」といふ。日に一度短籍(二)を出だして、一笥の飯を食ふ。院司かいとり、(三)「藤英(四)が糧、一つのひねりぶみ」と笑はれ、博士たちにいさゝか數まへられず、父、母、從者、やから、一度に滅びて、はかなく便なき(五)學生、數多に序を越えらるれども、藤英對策なすべき便な(六)くかくてあり經る、年二十五(七)、容貌こともなく、才かしこき學生なり。かゝる心にも思ふ心ありて、いかでと思ふに、ある衆(八)、藤英かく量なく迫るを見て、「こともなき男なりや。左の大將殿も、斯ばかりの聟はえ取り給はじかし。容面、才はあり難しや」などこれかれ打笑ふを、藤英くれなゐの涙を流して、恥かしく悲しと思ひて、夏は螢を生絹の袋(九)に多く入れて、書の上に置きて、まどろまず。まいて日など白くなれば、窻にむかひて、光の見ゆるかぎり讀み、冬は雪をまろかして、其が光にあてて、眼のうつるまで學問をし、藤英「こゝばく(一〇)齋はれ給ふ師(一一)(一二)。學問の

〔語釋〕
(一)非常に困窮して
(二)札
(三)院司は勸學院の役人かいとりは「匙取」の意歟
(四)此學生の名
(六)試驗を受くべき方便なく
(八)大學の衆卽ち學生
(一一)先聖先師、孔子子思など

〔考異〕
(五)便なき—便なし—ともなき
(七)二十五—三十五
(九)袋—きぬ
(一〇)こゝばく—こくばく
(一二)給ふ師—給ふ聖の

帶刀（一）などなむ、人の驚くばかりは仕る」ぬし、眞菅「その帶刀が和歌にめでざりきや（二）。少將に言はむ」とて少將に宣ふ。和政「いと易き事なり」とてよみて奉り給ふ。よき色紙にかき給ふ。

日頃、仲媒になむおこたらず聞えしむるを、この頃はみさい（三）賜はるべききたなき所（四）は、搔き拂ひかき拭はすとてなむ、御消息聞えしめざりつる。はや渡りますべき心づかひせしめ給へ。何時しか、まのあたりにて、具なる御物語も申し賜はらむ、となむなげき申す。さて（五）、かゝる事は、若々しければ、わかき男どものにぎはしむるを音に聞くに（六）。

とて、

直菅　君戀ふとみなかみ（七）しろくなるたきは老の涙のつもるなるべし（八）

絹綾祿にとらせて還しつ。

かくて、勸學院の西の曹司に、身の才もとよりあるうちに、身をすてて學問をし

（評釋）
（一）これは眞菅の子、東宮の帶刀
（二）以前あて宮が感心せざりき
（三）御出を仰ぐべき
（四）「所は」の「は」衍文なるべし
（五）歌よむ事は若々しき所業なれば自分は詠まねど若き男どもによませて贈るとの意なるべし
（六）誤あらんか
（七）みなかみ—白髮、水上
（考異）
（八）なるべし—なるらし

⊕ 祐英の苦學

九 滋野眞菅、宮内の君を招きてあて宮を獲んことを謀る

〔語釋〕
(一)滋野眞菅
(二)あて宮
(三)あて宮の忌む日は何日ぞといふ意歟
(六)誤あるべし
(七)二人共に眞菅の子
(九)汝等
(一一)多く歌はつくれども
(一二)和政、眞菅の子

〔考異〕
(四)御忌—みいへ—みいゑ
(五)いつの—いづれの
(八)いふ様—いふげに
(一〇)珍らしめ言ふべからむ—めでしめつべからむ

宮内に錢取らせてかへし給ふ。

かくて又帥(一)のぬし、殿守の御を家にむかへて、眞菅「かの若君(二)の御迎すべき日、二十日あまり一日の日となむ定めたる(三)。かの御忌(四)はいづれぞ」殿守「え委しくは知り給はず。いつの(五)日にかおはしますらむ。さても、ふと御迎はし給はで、先づよく聞え趣けてこそ、定めさせ給はめ」帥、眞菅「何かは、疑ある身ならばこそ。せう(六)もちせむとて侍る。やもめにも侍る。つかさ、かうぶりはた持てり。何事をかは女人の嫌はしむべきにあらしめずや」殿守、「げにさなむ物し給ふ。何かはゆるし聞え給はざらむ。そが中にも、殿守ら侍れば、おほん願も必ずかなへ奉り侍らむ。さはありとも、又々おほん消息聞え給へ」と言ふ。帥のぬし、藏人(七)、木工の亮にいふ様(八)、眞菅「まうとたち(九)の後見せしめむ女人珍らしめ(一〇)言ふべからむ歌一つつくらしめむ」と言ふ。藏人の主打笑ひて、藏人「みづからの爲に、多くし(一一)侍れども、ことに人なむめで侍らず」眞菅「さらば誰か女人らはめでさしむる」藏人「少將(一二)ぬし、

〔語釋〕
(一)仲忠の仕込みし也
(二)仲忠を謗りていふ、「はかなもの」は「さかなもの」の誤歟
(四)腋くら
(六)中紙
(七)「よばひ文を」なるべし、あて宮の文を貰はぬを歎くと也
(九)さぶらひ給ふ人即ち宮内
(一〇)他に妻妾のなきをいふ
(一一)あて宮一人を

〔考異〕
(三)にを—「を」ナシ
(五)あらく強きぢうしに—あつごわきかみに
(八)給はぬ—給はらぬ
(一二)聞えて—ナシ

容貌をつくろひて、遊びわざうちして、行末はかなくてあるばかりぞかし。あな心苦しや。この坊の君も、かくは聞え給はざりき。多くは、(一)この侍從のしなしつるをや。(二)まだ知らぬはかなものにこそあれ。裝束をし、從者をつかふことのいみじう、かたち、身の才の勝れたるぞ用なきや。内は空しとて、その容面をやは倉には積まむとすや。御心をしもなやまし給ふとも、宿世なり。天下に、國王、儲の君に奉り給ふとも、かの君幸おはせば、此處にもおはしましなむを、なほよろしきにを(三)聞え給へ」とて、しこぶち(四)に古めきたる箱一つに、東絹一はこ、遠江綾、一箱入れて、肌あらく(五)強きぢうし(六)に斯く書きて奉れ給ふ、

人知れぬ宮仕は年經ぬれど、御方のよばひ(七)を見給はぬをなむ(八)、思ひ給へなげく。おのづからこのさぶらひ給ふ(九)聞え給ひてむ。此處には、うしろめたき人(一〇)も侍らず。たゞ(一一)高き山とのみたのみ聞えて(一二)なむ。必ず御顧みかうぶらむ。さて、これはいとなめげなれど、御方の下仕らにも賜はせよとてなむ。

ひ心ある人につきて家刀自つきて、家の内に無き物なくしてある人なむ、ゆくさき頼もしき。末の世衰へては、家貧しき人の多きぞかし。心浮きたるにつきては宮仕などする人は、世處(一)も知らで、おやの後の世うしろめたく、末の世わろきものなり。(二)かの君は、なほ此處におはせさせ給へ。(三)殿のおほむいたつき入れず、子の代孫の世うしろやすくておはしさませむ、となむ聞ゆる」と聞え給へ」宮内「前にも斯くなむ聞え給へど、げにたゞ今、(四)殿に北の方もおはしまさず、一ところ、など聞えさせしかば、「げに似つかはしき事にはあんなれど、たゞ今然あるべきもなし。あて宮は、たゞ今東宮に切に聞え給ふを、いかゞはせましとなむ思ほし煩らふ」とぞ宣はせし」おとゞ爪彈をして、高基「幸なき君にもいますがる(五)かな。(六)その坊の君は、如何にいますなる君ぞ。たゞ今は、この右大將のぬしの子に、仲忠とかいふすきものを、心に入れて、夜晝あそび召しすゑて、すきもの(七)のいますかめる宮に參り給ひては、何わざし給はんと。(八)親の綾錦にまとはれて、清らをこのみ

(語釋)
(一)時勢場合をも辨へず
(二)あて宮は我に妻せ給へ
(三)正頼に世話をかけず
(四)高基には妻もなし獨身故あて宮を遣はされてば如何と申上げしに正頼が下の如く返事せしと也すべて宮内のつくりごと也
(六)東宮
(七)「すきものにいますめる」歟

(考異)
(五)いますがる—いますなる
(八)「と」は「ぞ」の誤歟

れば、口をあきて居る人をば、聟には（一）取り給ぶべきものか。女に夫あはする心は、やもめなる人の、貧しく便なくて、親の煩とあるにより、するには非ずや。殿のせさせ給ふごとくにては、聟取の本意なし」宮内うち笑ひて、宮内「見る目や然あらむ。御方々は、豊にいきほひて、七つの寶を、（三）やらむ方なくおはしますめれ（三）」おとゞ、高基「物は、やぐらに積み見て、動かさであるこそ頼もしけれ。もしは望ある者の、せいとく（四）を崇ぶらんとて、庄物、贄ばし奉（五）らせんにこそあらめ。すなはち家人隨身童、みな失ひつらむものを。なほ今だに斯かるはかなき（六）わざし給はで、たしかなる事し給はなむ。たゞ今、よき人の聟は、滋野の宰相（七）こそあらめ。御年やすこし老い給ひつらむ。さりとも、七十にはまだや餘り給はざらむ。よき人なり。御心全くたしかに、物盡さず貯へ、わたらひ心よくして、こともなき人なり。（八）さてはこよらにこそ、その九の君は得め。あたらよく聞え給ふ君に、例の（九）わざし給ふらんよ、なほ北の方、あるじの君に聞え給へ。「わかき時に、貯へわたら

〔語釋〕
（一）遣ひ樣なく
（四）春海本に「勢德」と傍書せり
（五）此處いさゝか心得がたし
（七）眞菅
（八）眞菅を除きては我こそあて宮の聟として適當なるなるべし
（九）又いつもの如くつまらぬ聟を取らるゝ事か

〔考異〕
（一）聟には—「は」ナシ
（三）めれ—らめ
（六）はかなき—「き」ナシ

宮内、「たゞ今はことなる事も侍らず。一日なむ、御祓、やがて夏の御神樂せさせ給ふめりし」おとゞ、高基「何處にてかせられし。公卿たちは、誰々か物せられし」宮内、「西河原右大將殿にてなむ。人は、殿におはします限、さては兵部卿の宮、右大將のおとゞ、源宰相、殿上人は例の如なむ」おとゞ、高基「大なる御經營にこそはありけれ。然知らましかば、いさゝか酒肴構へてまうで來ましものを。すべて殿は、斯かるすき者ども語らひつどへ給ひて物盡し給ふこそ、謗も取り、物のつひえもあらめ。賜はり給ふつかさは、盜人のみつどひて、人の衣を剝ぎとり、飯、酒を、さがし食む衞府づかさ。取り給ふ、御聟は、皆すき者、あるはしれ者、あるは衞府かけてきしろふ(一)大臣公卿と、これは皆あて人、すき者ども。(二)いさゝかに構(三)へ渡らふ心もなし。たゞ物の音を上手にひき、和歌もいさゝかに人の謗は取らじ。假名がき、和歌よみ、餘所目よき女をば、雲の上、地の下をもとめても懸想しわらふ(四)人をば、耳にも聞入れず人の田畠つくり、商し、らうし(五)て畜へ渡らひ(六)事す

〔語釋〕

(二)以下正頼の聟どもの人となりを謗る也

(三)世帶を經營する了簡なし

(五)勞して歟

(六)世渡りの仕事をすれば之を嘲る如き不屆者を聟に取るといふ害はなし

〔考異〕

(一)きしろふ—きそふ

(四)わらふ—嫌らふ

（語釋）
（四）三春高基

（考異）
（一）忘らるやとて―忘るるやとて
（二）衣手も―衣手を
（三）時だに―ことだに

㊇　三春高基、宮内の君を招きてあて宮を獲んことを謀る。

（五）來まほしけれど―行かまほしけれど
（六）まゐでたり―參りてけり―まかりでたり

と聞え給へるを君たち見給ふを侍從の君とりて見て、端にかく書きつけてあて宮に奉り給ふ、

仲澄　人はいさなごしの月ぞ頼まれし瀬々の禊に忘らるやとて（一）

たてまつり給へど、誰にも〳〵聞え給はず。少將、六月晦に、

仲頼　衣手も（二）ほさで過ぎぬる夏の日をしむにさへも濡れまさるかな

兵衞良佐、七月一日、

行政　繁かりし時だに（三）あるにことのはの秋たつ今日の色はいかにぞ

致仕（四）の大臣の御許より、宮内の君の許に、

日頃え申し給へでなむ。其方にもまうで來まほしけれど（五）、公どころの人目騷がしきによりてなむ。人知れず謀らひ申すべき事なむある。あからさまに渡り給へ。車奉る。

と宣へり。宮内まゐでたり（六）。おとゞ逢ひて、高基「いかに、殿は何とかせしめ給ふ」

平中納言殿より、

正明　見る人はをじかの角にあらねども歎くほどのなきぞ侘しき

あて宮、

思ふらむことは知られで夏の野に角落ちかはる鹿とこそ聞け

藤侍從、祓しに難波の浦までくだりて、それより、

仲忠　まどひつゝ摘みに來しかど住吉の(一)生ひずもあるか戀忘れ草

あて宮、

あだ人のこゝろをかくる岸なれや人わすれ草摘みに行くらむ

三の親王、

忠康　なく蟬ももゆる螢も身にしあれば夜晝ものぞ悲しかりける

紀伊國より、

涼　常よりも夏越の月のわびしきは忌む(二)てふことの無きにぞありける

〔語釋〕

(一)「住吉の」は「住吉に」なるべし。

(二)五月は嫁娶を忌む

〔語釋〕
(一)書きて—「て」ナシ
(二)書きて—「て」ナシ

例の宰相久しく照りたる日ざかりに、

實忠　大そらも我がごと物や思ふらむ草木こがれて照れる夏の日

あて宮、

　時のまに入らぬ宿なくてる日には君さへなどか劣らざるらむ

兵部卿の宮より、夕立のいたうする折に、

兵部　年經れどいとゞつれなくなる神のひゞきにさへや驚かぬ君

あて宮、

　ひゞけどもつれなき人は驚かであま雲のみも騷ぐべきかな

右大將殿より海にのぞきたる蜑立てる洲濱に、かく書きて(一)付く、

兼雅　わたつのみ底にみるめの生ふればぞ我さへ頼むふかき心を

あて宮あさりしたる洲濱にかく書きて(二)、

あて宮　あさりする蜑は何ぞも海といへどいかなる底に生ふるみるめぞ

〈語釋〉
(一)差上ぐる様な娘があらば差上げたしと思ふにの意なるべし。さらば「見給へ」は「見給ひ」の誤也
(二)當方より申上ぐる折もあるべし
(四)誤あらんか。「みかきにたてる」を「みきにたてり」と書ける本もあり
㊆ 懸想人等歌をあて宮に贈る
(五)東宮に雛姫の數多あるをいふ
〈考異〉
(三)連れて舞ひ入る—いもやまひて入る

ひ忍ぶまじけれ」大宮、「まめやかには、見給へ(一)つべき人あらば、と思ふを、然りぬべきが無ければなむ。いま暫しありてば、(二)然きこゆる折もありなむ」親王、兵部「命あらずば然てや歇みなむ」とて立ち給ひぬ。曉に上達部、親王たちには女のよそひ、召人らには白張はかま、右大將ぬしによき馬、鷹など奉り給ふ。かくて皆かへり給ひぬ。

【畫詞】こゝは御神樂。御巫子ども(三)連れて舞ひ入る。才の男ども、御神樂仕うまつれり。(四)みかきに立てるとりものども奉る。うかれ女ども多なり。

かくて殿にかへり給ひて東宮より、常夏の花ををりて、かく聞え給へり、

東宮　ひとりのみ我が臥すやどの床夏は常にをり憂きものにぞありける

今は住にくゝさへなむ。

あて宮、

しら露の(五)おきかはるなるとこなつをいづれの折に獨り見るらむ

ち笑ひつゝ物も宣はぬを聞きて、又かく聞えたり、

實忠 我がふみは八百萬代のかみ毎によむとも數は盡きずやあるらむ

など聞えたれど、物も宣はず。

夜に入りて御神樂はじまりて、夜一夜あそぶ。御神樂はてて、才の男名のりなどするに(一)兵部卿の親王、「すきものの才侍るや」など宣ひて、御前なる岩の上に居給ひて、大宮に物聞え給ふついでに、兵部「月ごろ聞えさせまほしき事のあるを、序なくてのみなむ。今宵は神だに物聞き入れ給はなむ。年頃御中らひ(二)に聞ゆることあるを、あさましくなむ、(三)人よりも思ほし(四)捨てたる。「さは(五)有るまじき人ぞ」とやは聞え知らせ給はぬ」大宮うち笑ひて、大宮「いでや。かやうの折には神も外にのみぞ思ほゆるや。煩はしきことかな。とく宣ひ聞え給ひなば、さ物思はせ給はむやは。とく(六)宣ひ知らせてまし」親王、兵部「あるが中に思ほし捨てたれば、いづれの度かねたく思ほえぬ時なければ、此の度こそ、身はいたづらになるとも、え思

（語釋）
（二）誤あらんか
（三）あて宮が我を
（五）兵部卿宮は左樣に疎末にすべき人にあらずと

（考異）
（一）するに—するを
（四）思ほし—おぼし
（六）とく—きも

けふの禊は、神も耳とゞめ給ひなむ。

と聞えて、御使に女のよそひ一くだり賜ふ。

かくて夕暮に君だち御簾あけて、(一)絲結の御几帳どもたてわたして、御棧敷の前になだらかなる石、かどある巖など(二)ひろひ立てたる中より、川の湧きたる、瀧の落ちたるなど見給ふとて、孫王、中納言、兵衞、帥の君など、よき童べなど、岩の上ごとに出だしすゑ、御琴かきならし、人々に歌よませなどして出で居給へるを、(三)ことかたの御前、めでたう興ありと思す。藤侍從御前のわたりに立寄りて、孫王の君に物いひなどするに、わき出でたる水を見て、

仲忠 かはべなる石の思ひの消えねばや岩の中より水の湧くらむ

孫王「(四)「たびしかはらも」と言ふ」とて、孫王の君のいらへ、

孫王 底をあさみ石間を分て行く(五)水はわくと見れどもぬるまざりけり

などいふ程に例の宰相、兵衞の君の許にある(六)文を君だちこれかれと見給ひて、う

〔語釋〕
(一)さま／＼の絲の結び合せたるを飾として附けたる几帳
(二)誤あらんか
(三)他の人々見ての意歟
(四)元輔集「みがくらん玉の光をたのむかな數にはあらぬたびしかはらも」
(六)實忠の文

〔考異〕
(五)水は—水の

器とりて、侍從に狛の樂せさせてわたり給ふ。左大將のおとゞ限なく喜び給ひて、川つらに左のつかさの遊人、殿上人、君だちなど率て遊びて待ち給ふとて、「おほきみ來まさば」(一)といふ聲ぶりに、斯ううたひ給ふ、

正頼　底ふかき淵をわたるは水馴棹ながき心も人やつくらむ

右大將のぬし、「伊勢海」(二)の聲ぶりに、

兼雅　人はいさわがさす棹の及ばねば深き心をひとりとぞ思ふ

とてわたりて、左右あそびて著き竝み給ひぬ。又兵部卿親王も、おほん祓しに、同じき河原に出で給へるを、喜びておほん迎して、おなじ御前に著きたまひぬ。

かゝる程に東宮より、藏人を御使(三)にてかく聞え給へり、

東宮　うちはへて我につれなき君なれば今日の禊もかひなかるらむ

あて宮、

あふ事のなごしの祓しつる哉(四)おほぬさならむ(五)人を見じとて

〔語釋〕

(一)催馬樂の「我家」の中に「大君きませ聟にせん」といふ文句あり

(二)催馬樂の曲名

(三)正頼が

(四)古今集に「大ぬさのひくてあまたになりぬれば思へばえこそ頼まざりけれ」

〔考異〕

(五)ならむ―ならぬ

㊅ 桂の家の夏神樂。

〔語釋〕
(二)大臣上
(三)年下なる女は
(五)車の窓の簾を下して

〔考異〕
(一)やは―「は」ナシ
(四)若苗色―あか色
(六)皆物見おろして―みかうのこおろして
(七)べき―つぎに
(八)べき―つぎに
(九)べき―つぎに
(一〇)べき―つぎに
(一一)殘る―殘り
(一二)つくり―めぐり
(一三)物―物を
(一四)器して―壁いだして―胡粉いだして

が心に入れて造らせたる所。思はしやれ。またはありなむやは(一)」など宣ふ。かくて御神樂に出で立ち給ふ。大宮、女御の君、あなた(二)の北の方よりはじめ奉りて、二十の人は青朽葉、それよりこなた(三)は二藍おほむ小袿ども、おほん供の人は、大人、わらは、若苗色(四)に二藍がさね、御巫子、あをいろに二藍、下仕檜皮色著たり。御車二十ばかり、四位、五位かず知らずして、桂川に出で給ふ。榊左右にさして、一の車より皆物見(五)(六)おろしてまゐる。御車ども、つゞきて促し入る。御棧敷におり給ひて、おほん祓仕うまつりぬ。御神樂の召人、催馬樂仕うまつるべき(七)右近尉松方、笛仕うまつるべき(八)右近尉近正、篳篥仕うまつるべき(九)右兵衞尉時蔭、おほ御歌仕うまつるべき(一〇)殿上人のたゞ今の上手ども、みな召しつけつ。上達部、親王たち、むつまじきは出で給ふ。殿上人(一一)殘るなし。おほん前よりはじめ、召人らまで物まゐり、御土器はじまり、御箸下りぬるほどに右大將のぬし、河のあなたより、をかしき小舟、興ある樣に調じてつくり(一二)、をかしき物(一三)、興ある器(一四)して、土器

（語釋）
（一）式歟
（三）車に乘りて
（五）仲忠をわが聟にしたく思ふ也
（七）「などとて」なるべし

（考異）
（二）上のしきに―人のしなに
（四）よき―よきを
（六）給へれば―給ひつれば
（八）給ひたる―給うたる

あれ。上（一）のしきにつきて見給へしに、御子たち上達部、あるかぎり參り給ふなかに、右大將（二）、侍從、ひとつに奉（三）りて、下り給ひしこそ、有りがたく見えしか。そが中にも、侍從を見給へしこそ、常は厭はしき女子の（四）よき（五）、ほしかりしかな」と宣ふ。

かくて君だち、方々にかへり給ふ。おとゞ内に入り給ひて、正賴「などか涼みには出で給はざりつる。釣殿御覽ぜさせむとしつるを。闇の夜の錦とかいふ樣になむ」宮、大宮「人々すゞみ給へれ（六）ば此處になむ」とて、

大宮 枝ごとにわかずや風の吹きつらむ籠れる根さへすゞしかりつる

おとゞ、

正賴 おく山に松のふるねを殘しては岸に靡くぞかひなかりつる

などて、正賴「神樂十七日になむすべき。その設せさせ給へ」宮、大宮「面白からむ（七）所こそよからめ」おとゞ、正賴「右大將のぬしの、仲忠が母すゑ給ひたる（八）所は、仲忠

〔語釋〕
（二）忠澄、正頼の長子
（三）加茂川
（四）兼雅
（六）それ〳〵專門の男どもにまかせてさする事すら
（九）桂殿は
（一一）兼雅をほむる也

〔考異〕
（一）かき—ナシ
（五）し出されて—いだされて
（七）事だに—をだに
（八）かしこう—ナシ
（一〇）かの殿は心ことに—かの殿の心と

と有るか無きかにかきならす。あて宮琴の御琴に、

あて宮にほ鳥のつねに（一）浮べる心には音をだに高く鳴かずもあらなむ

など宣ふほどに、内裏より、「藤侍従たゞ今參り給へ。宣旨なり」といふ。仲忠、「あなわりなや。折しもこそあれ。わりなき召かな」と言ひて、仲忠「たゞ今參りてなむ」とて參り給ひぬ。

かくてあるじのおとゞ、辨の君に聞え給ふ。正頼「神樂すべきをり近うなりぬるを、水深く蔭すゞしからむ所（二）もとめられよ」辨の君、忠澄「東（三）河には見えずなむ侍る。（四）右大將殿のすみ給ふ桂のわたりなむ、めづらかなる心ばへし出だされ（五）て、面白く侍る」正頼「然あらむかし。かの殿の心とゞめてつくらせ給ふと聞く所なり。家々（六）の男どもにつけられたる事だに（七）、殿の例として、心ことにかしこう（八）し出でらるゝを、かの殿は心ことに（九）（一〇）つくらせ給ふめれば、見所あらむ。人のし出だす事は、心にしたがふものなり。（一一）興ある道にもすぐれ、公の器物にもとよのひ給へる殿にこそ

しき胡桃(一)ども、水に拾ひたてなどして、すゞみ遊び給ひてあるじの大殿、正頼「今(二)日こゝにこのすき(三)者ども一人なき、さう〴〵しや。仲澄は、藤侍從呼びにやれかし。深き契ある人は、由あるをりを過さぬぞよき」など宣へば、驚きて宣ひつかはしたれば、三所(四)ながら遊びつゝ出で來て、舟に乘りて、釣殿へまうづ。あるじの大殿、白きあやのおほん衣ぬぎて、侍從に賜ふとて、

正頼　深き池のそこに生ひつる菱(五)つむとけふくる人の衣にぞする

侍從、

仲忠　底深く生ひけるものをあやしくもうへなる水の綾と見るかな

などて(六)同じやうなる御衣ぬぎて賜ふ。君だち(七)の御前なれば、人々心づかひして物の音などかきならしつゝ、明くる程に、鳰鳥のほのかに鳴くを藤侍從聞きて、箏の琴にかくかき鳴らす、

仲忠　われのみと思ひし物を鳰鳥のひとり浮びて音をもなくかな

〔語釋〕

(三)仲忠仲頼等をいふ

(四)仲忠、仲頼、行政

(五)菱をあて宮に譬へたり

(六)「などとて」なるべし

(七)殿君たちの

〔考異〕

(一)胡桃—胡椒

(二)今日—今日は

忠俊　我がたのむちとせの蔭はもらずして松風のみぞ涼しからなむ

藤宰相殿、

實正　まとゐする千歳の蔭のうれしきはもろともなげの松の風かは

中將、

人ごとにちとせの蔭をそふる松いくよ限れる齢なるらむ

など(一)て奉れ給ひて、七所(二)ながら釣殿にまうで給ひぬ。正頼「女君たちも出でたち給へ」と聞え給へば、御車どもして、舟竝(三)べすゑてわたり給ひぬ。うなゐ、下仕らは、さしつど(四)き浮橋よりわたる。母屋に御簾かけ、御几帳立てわたして、君だちおはします。簀子に上達部、御子たちおはしまして、女君たち、おほん琴どもかきあはせ、男君たち、笛どもふき合せ、琵琶、御琴、磬うたせ、樂の聲にあはせて遊ばし、御前の池に網おろし、鵜おろして、鯉、鮒など(五)とらせ、よき菱、大きなる水蕗とり出でさせ、いかめしき楊桃、獼桃など中島よりとり出でて、をか

（語釋）
（一）「などとて」なるべし
（二）七人共正頼の聟也

（考異）
（三）舟竝べすゑて—舟あみてすべて—なみすゑて
（四）さしつどき—さしつぎ
（五）など—ナシ

（語釈）
（一）仲澄
（二）忠雅
（三）「うちなる」は「つちなる」の誤なるべし

（考異）
（四）木がれて—木がくれは
（五）もえ松は—もえ松の

正頼 枝しげみ露だにもらぬ木がくれに人まつ風のはやく吹くかな

とて侍従の君して（一）奉れ給ふ。親王見給ひて、かく書きつけて右のおとゞに（二）奉れ給ふ。

式部 こがくれに寒く吹くらむ風よりもうちなる（三）枝の風ぞすゞしき

釣殿よりかくなむ。

とて奉れ給へり。右のおとゞ見給ひて、中務の宮に奉れ給ふ。

忠雅 風わたる枝にぞたれも涼みぬるもとの蔭をも頼むものから

親王見給ひてかく書きつけて民部卿殿に奉れ給ふ、

中務 木がくれて（四）蔭にまとゐる（五）もえ松は根よりおひたる末にあらずや

民部卿殿、

賢正 大力の蔭とは見つゝこち風のふく木がくれと知らすぞありける

左衛門督殿、

〔語釋〕
(一)正頼の邸
(七)女一宮に
(八)「民部卿」なるべし

㊄ 正頼の家の納涼會。正頼兼雅の桂の家にて神樂を行はんとす

〔考異〕
(一)(二)大殿—大將
(三)生ひたり—おひたる
(四)給ふ—給ふに
(五)十二日は—「は」ナシ
(六)賜へよ—「よ」ナシ

仲澄 うらやましやがて入りぬる夏蟲やたへぬ思ひぞ侘しかりける

少將、

仲頼 ながめつゝつひに朽にし橘はつねに空なるみとやなりなむ

良佐、

行政 山も野もしげくなれども我が宿にまだことのはの見えずもあるかな

かゝる程に六月の頃ほひにもなりぬ。大殿(一)(二)は、池ひろく深く、色々の植木岸に生(三)ひたり。水の上に枝さし入りなどしたる中島に、かたはしは水にのぞき、かたはしは島にかけて、いかめしき釣殿つくられて、をかしき舟どもおろし、浮橋わたし、あつき日盛には、人々すゞみなどし給ふ(四)、正頼「(五)十二日は暇の日にて、參りたまはぬを、釣殿にて今日すゞませ奉らむ。興あらむ果物など賜へよ(六)」など聞え(七)おき給ひて、釣殿に出で給ひぬ。君たち、さながらさふらひ給ふに、おとゞ御扇にかく書きつけて、(八)式部卿の宮の御方に、奉れ給ふ。

〈考異〉
（一）思ひ―思う

正明 わびぬれば五月ぞをしきあふちてふ花の名をだにきくと思へば
源宰相、
實忠 沈みぬる身にこそありけれ涙川うきても物を思ひけるかな
身の徒になることも思ひ給へず、志の空しうなりぬるこそいみじけれ。
など聞え給へり。あはれと見給へど御返しなし。三の親王、
忠康 君がためかろき心もなきものを涙にうかぶ頃にもあるかな
紀伊國より、
涼 何處ともまだ白雲のわびしきはいひやる空のなきにぞありける
藤侍從、五月の晦の日、朽ちたる橘の實にかく書きつけて、
仲忠 橘のまちし五月にくちぬれば我も夏越を如何とぞおもふ
侍從の君、
五月雨のすぐるも恐ろしくなむ。

㊃ 懸想人等歌をあて宮に贈る

〔語釈〕
（一）「下部の人ども馬づかさ」歟。一本「しりへのひともし馬づかさ」

〔考異〕
（二）菖蒲草—時鳥
（三）うき身—うきに
（四）夜の—夜は

はりぬ。下部(一)の人もし馬づかさの男ども、物のふしらに腰插ぬのなど賜ふ。遊びあかしてつとめてかへり給ふ。

かゝる程に、東宮よりかく聞え給へり、

東宮　ためしにも人のひくべき菖蒲草(二)このさみだれを今もあえなむ

ねたくも思ほされずや。なほ早くを。

と聞え給へり。あて宮、

言はざらんことぞ苦しきうき身(三)こそ世の例にもなるといふなれ

兵部卿の親王、

餘所にのみ思ひけるかな夏山の繁きなげきは身にこそありけれ

右大將殿より、

兼雅　わびはてて何の心もなけれどもなほ夏の夜(四)の長くもあるかな

中納言殿より、

思ふこと、今宵醉のついでに聞えん。下﨟なる(一)(二)實賴をだにさふらはせ給ふめるを、などか實忠をしも召し入れぬ。(三)あまた侍る中に、らうたしと思ふものなり。(四)侍從の朝臣におぼしなずらへて、彼をもかへりみ給へ」と聞え給ふ。あるじのおとゞ、打笑ひて、正頼「仲澄になづらへ聞えむには、萬のことも思ひ(五)給へ知るまでこそあ(六)なれ。まめやかにさ思ひ給ふることぞや。(七)かの人の見給ふべき人ぞ侍らぬ。さばれ、如何すべき。五月(八)にもなりにけるを」左のおとゞ土器とり給ひて、季明「いでや、さ承(九)りても久しくなりぬ」とて、

季明 時鳥なく音久しくなりぬるを(一〇)さみだれながら幾夜ふればぞ

主のおとゞ、

正頼 ほとゝぎす花橘に宿ればぞなほさみだれも常磐なるべき

「(一一)思ひ給へつゝぞや」(一二)などて夜一夜遊びあかして、上達部、御子たちには女のよそひ一くだり、馬の頭左右の中將まで(一三)、それより下は白張はかま、しなに添へて賜

（語釋）
(一)身分卑き件實賴さへ四の君の聟にして下されしに。實忠は中將、實忠は參議也
(三)實忠は私の多くの子どもの中にての愛子也
(四)仲澄、正賴の愛子
(七)實忠に與ふべき娘なし
(八)五月嫁娶を忌むは此頃の習なり
(一〇)「なりぬるは」歟
(一二)「などとて」なるべし
(一三)「まで」の下脱文あるべし

（考異）
(二)下﨟なる—下﨟なれど
(五)思ひ—思う
(六)あなれ—あれ
(九)承りても—「も」ナシ
(一一)思ひ—思う

ざり馬に乗りて。埒に向きて馬の毛申し給へり。二番はなかつきて、右勝つ。亂聲して舞す。三つにいづる御馬、(一)左勝つ。四つに右勝つ。(二)五つ(三)左勝つ。六つ、右勝つ。七つ左勝つ。八、右勝つ。九、左勝つ。勝負して數(四)さし、しり(五)のことわりに、左にはまつりごと人近正、右には同じき松方。さる逸物の御馬どもに、たゞ今の上手乗りて、出でき(六)、黨よりはじめて大願を立て給ふ。御前まではひとしく見えしを、右のとうにうち籠められて、左負け給ひぬ。

かくて土器度々になりぬ。御あそび盛なり。うちに君だち、母屋の御簾に壁代かけ、御簾のうちに四尺の御屏風ども立てわたしたる内に、ある限(七)たて竝めて見給ふ。左のおとゞ、季明「こゝには、(八)え思し捨つまじき人々ものし給ふらむかし。かゝる序に、土器なども賜へや」(九)などて、季明「實忠も殿にさふらふなるを、などかまかで來ぬ」主のおとゞ正頼「勞はる所ものし給ふとなむ承る」左のおとゞ、季明「怪しく、さもあらざりし者の、病だたしくなりにたるかな。年頃吾が君に聞えむと

（語釋）

（一）競馬に出づる馬の毛色を左は何右は何と宣言する也

（二）「二まては」歟

（三）誤あらんか

（四）數をかぞへ

（五）最後の判定

（六）「出でゝ」歟

（七）「立ち竝みて」歟

（八）女君たちより相當に接待ありて然るべき客人たちもあるべし

（九）「などとて」なるべし

〔語釋〕
（二）相伴役
（三）甲乙と分れ居る也
（五）馬の出發點
（六）これは正頼の六男兼澄なるべければ兵部少輔なるべし

〔考異〕
（一）夜も—「も」ナシ
（四）竝みたり—竝み居たり

おとゞ、正頼「いとも畏く、夜も（一）ふかくなりぬるに、渡りおはしましたるをなむ」左のおとゞ、季明「けさ、内裏に參りて、今までさぶらひつるを、ある人の、「かく近衞の馬づさかの諸卿集はれたり」と奏しつれば、上おどろかせ給ひて、藏人奉り給ふべきに垣下（二）にまゐれ、と仰せられつれば」など宣ふ。あるじのおとゞ、悅びかしこまり給ふ。かくて、左右の馬づかさ、御馬、左右大將黨（三）にておはします。上達部御子たち、方別きてくらべ給ふ。左の乘尻は、右近尉よりはじめてもののふしまで、逸物をえらび、右の乘尻は左近尉までえらび、西東爭ひて、馬づかさ著き竝み（四）ゐたり。おほん松明ともしたること、廊より南に、御前にむきて、馬出（五）より馬留まで隙なく、褐の衣著たる男どもともしたり。皆これは兵部卿の男どもなり。廊より北の御まへにあたりては、兵衞尉よりはじめて、宮の帶刀まで、長とゝのひたるを選びて、上より下までともしたり。皆乘りつらねて、埓よりのぼる。札結ひて、皆ひき立てて、左右亂聲して、勝負に樂の舞す。兵部丞（六）か

（語釈）
（二）正賴を訪問せよと季明正明二人仰せある也
（三）春海翁曰、競馬の左右に人を分ち賞を組み方分くれば其の賞検する人を眞使といふ
（四）勅使の來れるをあへしらふにまぎれて季明正明の來るを知らざる也

（考異）
（一）内裏に—ナシ

とて、土器にかく書きつけ給ふ、

朱雀 所せき身は餘所なれど遊ぶなる宿に心をわれもやるかな

とて遣はすに、左のおとゞ、平中納言、夜に入るまで内裏（一）にさふらひ給ふを、朱雀「大（二）將の朝臣とぶらはるべきものなり」と仰せらる。諸聲におほん答してまかで給ふ。御使の藏人、奉れ給ふものを持て連ねて、大將殿に參る。おとゞ御土器見給ひて、驚きかしこまり給ふ。（三）とうじの藏人を階にすゑて、下りて舞踏して、大袿かづけ給ひて、かしこまり申し給ふ。

正賴 雲井よりふる白玉を袖にいれてみる人さへぞ心ゆきぬる

など奏せさせ給ふ。

藏人（四）參りて左のおとゞ、平中納言つらねて入り給ふを、え知り給はず。御前の御松明ともしたる兵衛尉ども、にはかに入るに、おどろき見給ふ。右のおとゞ、式部卿の御子と、くづれ下り給ふ。左のおとゞ、季明「更に何か」とて上りて着き給ひぬ。

かゝる事内裏に聞しめして、朱雀「俄にいかにすらむ」（一）などて右近の藏人をして、后宮に、朱雀「左大將の、俄なる（二）客人得たなるを、とぶらひになむ遣はす。設の物さふらはゞ、すこし賜はりて物せむ」と聞え給へれば長もちの御辛櫃一よろひに、女のよそひ百くだり、白張はかま添へて、大袿とかさね入れて、后「斯くよもあらぬなむ殘りたりける」とて奉れ給へり。帝内藏寮のきぬ三百匹、御辛櫃に入れさせ、（三）つかさの御みぞ櫃十に入れ、藏人所の御くだ物、櫃十に積みて大將に賜はり給はむとするに、殿上、藏人一人もなし。朱雀「たゞ今までありつる男どもの、かしこへ去にけるかな。すけは名高き人にてある」（五）など宣ひて、藏人の兵衛佐行政を召して、（六）大將殿に斯く（四）いひ遣はす、

朱雀俄なる客人（七）ものせられたなるを、饗のことなどを如何にとなむ。引出物なども、乏しくば、（八）ないしれうなども數多ものせらるらむを、御心にまかせて物せられよ。

（語釋）

（一）「などとて」なるべし

（三）誤あらんか

（四）行政をいふ歟

（八）内侍料歟

（考異）

（二）客人―かく

（五）など―と

（六）大將殿―「殿」ナシ

（七）客人―かく

〔語釋〕

（一）駒の形したる物を持ちて舞ふこと

（二）「おとゞ」は衍文なるべし

たちよりはじめて、馬にのりて、大將のぬしの御車の前に、こまがた舞はせつゝ、あそびて物し給ふを、大將のおとゞ聞召して、「雅樂寮の（一）樂の近く聞ゆるかな。祐澄が笙にこそあなれ。然や、右のつかさの幾多の者ども、引き連れて來るならむかし。見よや」と宣ふ。牛飼のあづかり、「大將殿、おとゞの右近の馬づかさ、引き連れておはしますなりけり」と申す。おとゞ、（二）「切に興あることかな」とて御佩刀の緒したゝかに結び垂れ、御衣のしり、走り引きて、笙の御笛とりて、左の馬づかさひきて、限なくあそびて出で給ふ。右を左の馬づかさ見つけて、くづれ下りぬ。あそびて、左右見合せて、廣くよき大路に、若くさかりなる大將たち、左右の近衞づかさ、馬づかさを率きて、あそびて、大殿へ入り給ふ。夕影、切なること限なし。東の御階より左のつかさ、西の階より右のつかさ、ひとしく見合せてのぼり給ひて、右南向に著き給ひぬ。御前ごとに御卓參りぬ。御土器はじまり、おほむ箸下りぬ。

從。侍從かち給ふ。十番に大夫の君、右衞門尉。君勝つ。

かゝる程におとゞに左の馬寮の檢校申し給ふ。「明日、御つかさの手番なり。くらべの宮人ごとに賜ふべき御馬の脚、今日御覽ぜさせむ」とて御馬どもを牽かせて、馬の頭、亮、下部ら、左近の中將、少將もののふしら、引きて參りたり。おとゞ、正賴「興あるわざかな。内裏に聞召さましかば、など思ひつるに」などて(一)幄ども打ちて、頭よりはじめて、つぎ、中少將(二)、馬の頭、亮、著き竝み、馬寮の御馬に、左近尉よりはじめて、はひ乘りつゝ、馬弓(三)仕うまつる。馬弓はてて、舍人ども、駒方わきて(四)舞ひあそぶ。あるじのおとゞ、大なる毬を舍人どもの中に投げ出だし給ふ。舍人ども毬杖をもちて遊びて打ち、勝ちては舞ひあそぶ。御馬ども、池に牽きたてて冷し、秣かひなどするに右大將の主(五)、手番宣はむとて(六)馬場に著い給へりけるを、(七)この殿に左近の馬づかさ參りぬ、ときこしめして、兼雅「興あることかな」とて馬場より、亮たちよりはじめて、もののふしまで、右の馬つかさ引き率て、亮

〔語釋〕
(一)「などて」は「などとて」なるべし
(三)騎射
(四)右方左方と別れて
(五)兼雅
(七)正賴邸

〔考異〕
(二)中少將―中將少將
(六)宣はむとて―給はむとて

を出して、興ある藥玉を賜ふ。二十人のまうち君だち、御階のもとに立ちて舞踏したり。かくて方々男君だちのお前ごとに參りたり。

かくて御前近く、四町とほりて、馬場池のほとりにあり。御厩、西東として、別當預り、寄人どもおほくて、(一)おほん馬ども、十づゝ、立てて、飼はせたまふ。今日、(二)脚御覽ぞんとて、職事よりはじめて、乘尻裝束して、御馬左右とひかせて參りたり。おとゞ、正頼「(三)男どもはひ乘りて試みよ」と宣ふ。御聟ども、數のごとおはします。君だち聞え給ふ。「この御馬ども、おなじくは(四)手番して較べばや」と宣ひて、一番に式部卿の宮、右のおとゞ、くらべ給ふ。おとゞ勝ち給ふ。二番に、中務の親王、あるじのおとゞ。おとゞ勝ち給ふ。三番に、三の御子、民部卿。御子勝ち給ふ。四番に、四のみこ、左衞門督。督かち給ふ。五番に、五の御子、藤宰相。御子勝ち給ふ。六番に六の御子、(五)左大辨。御子かち給ふ。七番に兵衞督、右衞門佐のきみ。督の君かち給ふ。八番に兵衞佐、兵部少輔。佐勝。九番に式部丞、侍

（語釋）
（二）馬は脚を主とするものなれば馬を檢するを脚を見るといふ也
（三）主任の男どもをいふなるべし
（四）左右に分けて競爭させて
（五）左大辨は正頼の長子忠澄

（考異）
（一）おほん馬—おほみ馬

る御心とうしろやすければ返すぐ〱おもひ忍ぶれど、えあるまじければこそ、死ぬる身と思う給へて聞ゆれ。(一)こゝに聞えたらむことは人の知るべくもあらぬを、(二)いみじうこそおはすれ」と泣く〱聞え給へば、あて宮うち笑ひ給ひて、あて宮「など斯くのみは宣ふぞ。(三)誰と思したるぞ」など宣ふ。

かくてその日の御節供、よき御庄ある國々の受領に宛てられたり。女君、御子たちまでは近江守、中のおとゞには伊勢守、北の大殿は紀伊守、御聟七所の御前には大和山城の守、あなたの北の方の御前には播磨介、男君たちの御前には備前介、臨時の客人には(四)丹波守と宛てられたり。その日になりて、まづ西のおとゞに近江守、淺香の打敷二十づつ、例のごとして、二十人のまうち君たち、取りて參る。髮長にあまり、裝束あざやかなる下づかへ、(五)釵子、元結して、二十人出で來て、お前に參る。あか色の上のきぬ、綾のはかま著たるうなる子に、綾がさねの裝したる大人參りすう。親王たちのお前ごとに參りすうる臺二十づつ、又二十人の童

(語釋)
(三)我は君の同胞なるものを
(四)大臣上
(一)五月の節。正頼邸の騎射。打毬、競馬。季明來會して實忠の爲に婚を求む。
(五)髮のとめに用ふるかんざし

(考異)
(一)ければ—けれど
(二)いみじう—いみじく

〔語釋〕

(六)あて宮の誰にも隨はぬをいふなるべし

〔考異〕

(一)ふるに…けり—ふるぞ袖はぬれける

(二)御返し—御返ごと

(三)慰む—わするゝ

(四)給へれど御返しなし—給へり

(五)添へて—見て

上達部になりぬべき君なめれば、つれなく言ひくたしたるなめりかし」など宣ひて御返しなし。

三の御子、

忠康ながめする五月雨よりも嘆きつゝ月日の(一)ふるに袖はぬれけり

と聞え給へり。(二)御返しなし。仲頼、

思ふことなすこそ神もかたからめしばしな(三)ぐさむ心つけなむ

行政、

いふごとにいらへぬ人はつらからで思ひそめたる身をぞ恨むる

と聞え給(四)へれど御返しなし。

五月五日つとめて、菖蒲の長く白き根を(五)添へて、侍従の君きこえ給ふ。

仲澄 涙川汀のあやめ引くときは人知れぬねのあらはるゝかな

ときこえ給へれど聞入れたまはず。侍従の君、仲澄「かく(六)思したるを、思ふやうな

〔語釋〕
（一）古今集「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君が御蔭にます蔭はなし」

〔考異〕
（二）心もなく―「も」ナシ
（三）こそあんめれ―こそはあんめれ

仲忠、空蟬の身にかく書きつけて奉る、

仲忠ことのはの露をのみまつ空蟬も空しきものと見るが侘しさ

まして如何ならん。

と聞えたり。あて宮、

ことのはのはかなき露と思へどもわがたまづさと人もこそ見れ

と思ふになむ聞えにくき。

と聞え給へり。紀伊國の吹上の君の御許より、

涼いかでと思ひけるを、人さへ語り聞かせ給へれば、しづ心もなく（二）覺えければ、あるが中に才ある童して、かく聞え奉る。

おぼつかないかで心をつくばねの（一）ます蔭なしと歎くなるらむ

かつはあさましくなむ。

と聞えたまへり。大將のおとゞ見給ひて、正頼「たゞ今のよしる人にこそあんめれ。（三）

實忠おく山のふるすを出でて時鳥旅寐に年ぞあまた經にける

吾が君や、斯うてだに今は聞えさすまじきこそいみじけれ。

など聞えたり。あて宮、

夏ばかりうひだちすなる時鳥巣にはかへらぬ年にもあるかな

兵部卿の宮より、

ぬるみゆく板井の清水手にくみてなほこそたのめ底は知らねど

あて宮、

あだ人のいふにつけてぞ夏ごろもうすき心もおもひ知らるゝ

平中納言、

正明いつとても侘しきものを時鳥身をうの花のいとゞ咲くかな

あて宮、

かひもなき巣をたのめばや時鳥身をうの花の咲くも見ゆらな

〔語釋〕
(一)春海翁曰、供人陪従を手振といふ事あり
(三)あて宮を葵にたとへたり
(四)實忠
(五)あて宮の近處
㊂懸想人等歌をあて宮に附る。
〔校異〕
(二)給へるに―給ひつるに

ひぬ

【畫詞】大將殿の南のおとゞに、使三所著き給へり。垣下に御子四所、上達部五所、四位、五位あはせて六十人ばかりあり。おほん馬ども引き立て、手振(一)ども立ち竝みたり。一條の大路に、物見車ども數知らず。殿のおほん車ども、ものしたり。榻ども立てつゝ、四位五位まき散らしたる如立てり。

かくて、物御覽じてかへり給へる(二)に、東宮よりきこえ給へり、

東宮　今年より摘むべきものかちはやぶる賀茂の祭にかざす葵(三)は。

と聞え給ふ。

例の宰相(四)、三月ばかりに、「まろにこそ宣はざらめ、君だちと物宣ふをだに聞かせ給へ」など切に宣ひければ、近き所(五)にすゑて、御琴彈かせたてまつり、物言はせたてまつりなどしけるを聞きてより、思ひ入りて臥しにしまゝに、物おぼえねど斯く聞えたり。

祭の使

（語釈）
（一）「まつら」を「まつの」と書ける本もあり。巨勢氏曰くかつらを祭かつらと書きたりしを又まつらかつらと誤りしなるべし
（二）兼雅
（三）飾り馬
（四）祐澄の乗料
（五）手にもつ捧物
（六）あて宮の事をきかせたる也
（八）正頼の妻祐澄等の母
（考異）
（七）「折れば」歟

正頼 二葉なるまつら（一）かづらと見しものをかざし折るまでなりにける哉

使の中將、

祐澄 もと見れば高きかづらも今日よりや枝劣りすと人のいふらむ

とて出で給ふに、桂より（二）右大將のぬし、よき御馬二つ、一つはかざり（三）、一つは設（四）の御馬にて、舍人卅人、えも言はず裝束かせて、取物（五）せさせて、かねの枝に小さき壺を付けて、それに、桂川の水を入れて、仲忠して、

仲忠 かざしとる袖（六）のぬるゝは白波の桂がはより折（七）れるなりけり

これにさへ怪しう。

と宣へり。使の君、かく聞え給ふ。

祐澄 みなかみにかざしつるかな桂川今日ひとなみの心地のみして

けふは暮にのみなむ。

と聞えて、出立ち給ひぬ。大宮（八）、使の君見給はむとて、車十ばかりして出立ち給

㊀ 祐澄行政・賀茂祭の勅使に立つ。大宮見物

【語釋】

(一)正頼邸

(二)四月の賀茂祭の使

(四)兵衞は近衞の誤にて中將は正頼の三男祐澄なるべし

【考異】

(三)出だし立て―出で立ち

(五)宮の右馬―宮の御子右馬の

祭の使

梗概

㊀ 祐澄、行政賀茂祭の勅使に立つ。大宮見物。㊁ 懸想人等歌をあて宮に贈る。㊂ 五月の節。正頼邸の騎射、打毬、競馬。季明來會して賀忠の爲に婚を求む。㊃ 懸想人等歌をあて宮に贈る。㊄ 正頼の家の納涼會。正頼、兼雅の桂の家にて神樂を行はんとす。㊅ 桂の家の夏神樂。㊆ 懸想人等歌をあて宮に贈る。㊇ 三春高基、宮内の君を招きてあて宮を獲んことを謀る。㊈ 滋野眞菅、殿守を招きてあて宮を獲んことを謀る。㊉ 藤英の苦學。⑪ 正頼の家の七夕。⑫ 試策。大學の學生等正頼の邸に參る。藤英はじめて正頼に譏らる。藤英あて宮に懸想す。⑬ 懸想人等歌をあて宮に贈る。⑭ あて宮月夜に琴を彈く。仲忠、孫王の君を介して歌をあて宮に贈る。⑮ 涼、仲澄等歌をあて宮に贈る。

斯くて、殿(一)より祭の使(二)出だし立て(三)給ふ。兵衞府の使には中將君(四)、内藏寮の使には内藏頭兼けたる行政、馬寮の使には式部卿の宮(五)の右馬の君ぞ出立ち給ふ。あるじの大殿この三所の使をいたはり出だし給ふ。みな出立ち給ふに、父大殿、使の中將にかざし奉り給ふとて、

〔語釋〕
(一)正賴
(二)實忠
(六)「などとて」なるべし

〔考異〕
(三)內裏—殿
(四)一所—侍る所
(五)侍る—侍ると聞えつれ

(一)大將のおとゞは、此の人々の奉りたる物どもを、聟の君だちに、馬、鷹一つづつ奉り給ふ。かゝる序におとゞ、宮に、正賴「源宰相(二)に久しう對面せぬかな」宮、大宮「此の三月一日ごろに、御前の花見給へむとてまかり出でて、夜更けてまかり歸り給へりしより、惱み給ふことありて、まかり歩きもせず、(三)內裏より召あれどえまゐらで(四)一所になむ籠り(五)侍る」おとゞ、正賴「いとほしき事かな。え承らざりけり。此の頃見え給はねば、故鄕にや物し給ふらむ、となむ思ひ侍りし」(六)などて、仲賴に女のよそひ一くだり、馬引き、鷹すゑたる人に、白張はかま賜ひ、仲忠、行政等がつかひにも、祿賜ふ。北のおとゞに透箱持て參れる行政がつかひに、摺裳一かさね賜ひなどす。仲賴は內裏に急ぎ參りぬ。

仲忠「あるゝ海のとまりも知らぬ浮舟に浪のしづけき浦もあらなむ

とて(一)奉り給へり(二)。あて宮、君だちなど、「あり難く興ある物かな」とてのゝしりて見給ふ。かくて集りて見のゝしりて、あて宮「持たらばやと思へど、わざとある寶しき物なり」とて使に、(三)白張一かさね、はかま一具賜ひて、かく宣ひて遣はす、

あて宮 浪たてばよらぬ泊もなき舟に風のしづまる浦やなからむ

とてかへし遣はしたれば、仲忠いと心憂しと思ひて、仲忠「かう聞えて御返事も賜はらで來ね」とて(四)奉る。

仲忠 さもこそは嵐の風は吹きたゝめつらき名殘にかへる(五)舟かな

とて奉(六)れり、使歸りぬれば、(七)情なき様にもあり、とて返し給はず。君だち集まりて騒ぎ給ふこと限なし。女御の君よりはじめ奉りて、小君だちまで、壺、折櫃、袋、一つづつ奉り給ふ。

（語釋）
（一）舟を自身にたとへて懸想の意をはのめかしたる也
（四）使に言ひ付くる也
（七）仲忠より再應よこしたるものを返すは情なき様なりとて

（考異）
（二）海の—海に
（三）使に—使には
（五）かへる—かゝる
（六）奉れり—奉りて

はれる物の、千分が一つなり。かやうの船、割籠、透箱などして、此の三人の人になむ賜へりし。これ等をばさる物にて、まめやかなる物など侍りき。何心もなくまかり出で立ち侍りて、思ほえぬ長者になり侍りてなむまう上り來たる」と申(一)す。おとゞ打笑ひ給ひて、正頼「衞(二)府づかさにてまうでて見ばや」など宣ふ程に、侍從、良佐などは、內裏、東宮、嵯峨の院などに是等御覽ぜさせに參るとて、使してなむ。行政、右大辨の君よりはじめ奉りて、馬、牛二つ、鷹一つづつ奉りた(三)り。透箱、大宮の御方に、かづきたりし女の裝どもは、あて宮の御方の人々に、箱にたゝみ入れ、(四)文書い付けてぞおこせたる。下仕ばらには、縫はぬ衣など、人ごとに取らせたり。仲忠は大殿(五)に車牛二つ、馬二つ、侍從(六)の君につるぶち(七)なる馬の長八寸ばかりなる一つ、置口の衣箱二つ(八)に、あるが中に淸らなる女のよそひ一くだり疊み入れ、一つには、うるはしき絹、あやなど入れて、孫王の君に志し、黃金のふねに物入れながら、かく聞えてあて宮に奉る、

（語釋）
（二）武官になりて君等の御供をして行きて見たし
（三）「たり」は「たる」なるべし
（五）正頼
（六）仲澄
（七）鶴斑

（考異）
（一）と申す―ナシ
（四）入れ文―入れつゝ文
（八）二つ―一つ

右の府の官人、ものゝふどもの中にも、選びてなむまかり下りて侍りし」おとゞ、正頼「有る限にこそはあなれ。なほかしこき(一)志ありて物せられたるにこそありけ(二)れな。然る所に、斯かるどち集はれて、如何なることありけむ。國の中には、國王こそ思しき(三)(四)住居はし給ふらめ。其れだに斯くてはえおはしまさじを、有難き人(五)にも物し給ふべきかな」仲頼「種松は、十六の大國よりはじめて、粟散國(六)に至るまで、貨を貯へて侍るものなり。それが申しょことは、「種松が貨を、此の君につくし奉りてむとするに、一つの木(七)の枝を造りては、一二三千の枝出で來。山の末、岩の上にも、此の君の御爲に落せる種は、一つに一二斗づつなむ取り侍る」となむ申し侍る。彼の君の、京の土産にとて賜へるもの御覽ぜさせむ」とて(八)、具したる御馬二つ、鷹二つ、銀の馬、旅籠負せながら、中に人入れて歩ませて御覽ぜさす。おとゞ、旅籠馬をいと興ありと御覽じて、方々御聟の君だち請じ出でたてまつりて、御子どもの君だち竝めすゑ奉り見せ給ふ。少將、仲頼「それは、彼より賜

〔語釋〕
(一)一旗の思立ちて
(三)思ふまゝの生活
(六)世界に十六の大國五百の小國無數の粟散國ありとは佛敎の說なり。粟散國はこぼれたる粟粒の如き小さき國

〔考異〕
(二)ありけれなー「な」ナシ
(四)思しきーをゝしき
(五)人にもー「も」ナシ
(七)木の枝を造りてはー物をつくしては
(八)とて具したる御馬ーとて具したるとて御馬ーとて人して御馬

侍りしに、かの君、「一日二日ばかり、馬牛も飼ひやすめてまう上れ」など留め給ひしかば、とまりて見給へしに、(一)いはゆる西方淨土に生れたる樣になむ。四面八町の所を、金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙して造り磨き、めぐりには仙洞の桃咲かず、孔雀鸚鵡鳴かぬばかりにてなむ住み侍り給ぶ。取り申さむ方も思ほえずなむ侍りしかば、たゞ彼處の樣いさゝか御覽ぜさせむとて、彼處の使にて侍り」とて御覽ぜ(二)さす。おとゞ、正頼「いと興あることかな。然聞きゝ。神南備の藏人の腹に生れ給ふ君ありとは。彼の藏人はこよなく(三)勞ありし人なり。父こそ下臈なれ、子は有識にて、最と心憎かりし(四)ものを、此の頃ぞ聞かざりつる。如何樣にか生ひ出で給ひたる」仲頼、「いと不便(五)なる人柄なり。仲忠の朝臣と等しくなむ、かたち、心、身の才侍る」おとゞ、正頼「琴ばかりはこよ(六)なから(七)む」仲頼、「それも感じたる手侍るなり。侍從朝臣とい(八)と較べしてそれをなむ彈き侍らずなりにし」おとゞ、正頼「誰々か物せられたりし」仲頼、「仲忠、行政、近正、時蔭、村蔭、康頼、貞松、貞成、左

（語釋）
（一）吹上の贈物を見する也
（五）「すぐれたる」の意なるべし
（六）非常の相違あるべし即ち此點だけは仲忠に劣れるならん
（八）絲較べ歟

（考異）
（二）一日二日—一二日
（三）こよなく—いとけだかく—いともけだかく
（四）ものを—ものぞ
（七）なからむ—なからむに—なからむぞ

かくて左大將殿には、(一)大殿中のおとゞにわたり給ひて、あて宮に、琴の御琴彈かせ奉り給ひて、聞召し、御方々の君だちわたり給ひなどしたる折に、「左兵衛佐行政、侍從仲忠、少將仲賴さふらふ」と(二)聞ゆ。おとゞ、正賴「久しう音せざりつる遊び(三)くたしつべかめり。(四)此のすき者ども、何方ものしたりつらむ、此の一月ばかり見えざりつるは」など宣ひて、正賴「此處にて逢はむかし」とて簀子に御座しかせて、正賴「なほ此處に」と召し入れて逢ひ給へり。正賴「日頃内裏にも參り給はず、此のわたりにも(五)また物し給はざりつれば、いぶかり申しつるになむ」少將、仲賴「甚だかしこし。粉河に願はたさむと思う給へて、紀伊國の方にまかりたりしを、怪しき人に見給へつきて、えまう上り來ざりつるを、辛うじてなむ、昨夜まう上り來し」おとゞ、正賴「や、誰ぞや。など覺えぬ」仲賴、「彼の國のまつりごと人に侍りつる神南備の種松といふ男の孫に物し給ふ源氏、たゞ粉河の道のほとりになむ住み給へる。其處に府のまつりごと人松方が侍りしを見つけ侍りて、まかり寄りて

(十四) 仲忠等正賴に吹上の有樣を語る。贈物を所々に頒つ。正賴夫婦實忠を憐む

〔語釋〕
(一)正賴
(三)令朽の意

〔考異〕
(二)聞ゆ—聞え給ふ
(四)此のすき者—此の三人のすき者
(五)また—まゐり

山里にこのめをおきて別れては濱のほとりにかひぞなかりし

宮内卿の主、(一)

忠保木を暗みふたつときらぬ枝なればあかずあはれと思ふこのめぞ

など聞ゆ。少將、宮内卿の主に、(二)沈の割籠、牛など奉り給ふ。侍従、良佐など、志(三)皆して、侍従は桂殿へ、良佐など別れぬ。

かくて此の人々、紀伊國より持ていましたる物、興あるは人々に奉り給ふ。少將、黄金の船は内裏に、銀の旅籠馬は左大將(四)殿に、割籠は宮内卿に、北の方には、透箱よりはじめて若干のこまけ(五)の物、皆取らせ給ふ。侍従、銀の馬は父大殿に、割籠は嵯峨の院に、透箱よりはじめてこまけの物は北の方に、(六)船とかづけ物の中に清らなる物は、思ふ心ありてまだ持たり。良佐は、妻も子も親もなければ、船は東宮に、旅籠馬は嵯峨の院に、割籠は后宮に、透箱よりはじめこまけの物、まだ持たり。

〔語釈〕

（一）このめ―木の芽、此の妻。かひ―貝、効

（二）吹上より貰ひ来し品を分けて贈る也

（三）各贈物して

（四）正頼

（五）細かなる物

（六）「母北方に」なるべし

良佐、こなたを惜みて、

行政　夕暮にたなはなれたる駒よりもなみだの川ぞ早くゆきける（一）（二）

あるじの君、

涼　行く人の駒もとゞめぬ棚橋は惜み留めたるかひもなきかな（三）

守のぬし、

紀伊守　泣きたむる涙の川の瀧つ瀬も急ぐ駒にはおくれぬるかな

など互に惜みかはして、關より別れて、京の人は上り、田舍の人は歸り給ふ。

かくて四月四日ばかり、夜更けてなむ宮内卿殿におはし著きたりける。宮内卿の主、御饗よろしうし給へり。君だちには黒柹の卓二つ、うすものの表、尉どもには厚朴の木の卓すゑわたして、あるじの主土器取りて、忠保「如何に濱のほとりの貝、甲らに、山里の草木を聞食し比ぶらむ」（四）少將、仲賴「されどこれをのみなむ」とて、

〔語釋〕

（一）「たなはなれたる」は「棚橋わたる」なるべし、棚橋は小く短きものなれば駒が渡るに時を費さぬ也

（三）「駒の足折れ前の棚橋」など古歌によめる意也

（四）山里は忠保自身の家をいふ

● 仲賴の男忠保歸京の人々を饗す

〔考異〕

（一二）たなはなれたる―たなはしりたる

〔語釋〕
（一）旅籠を負はする馬の形を造りて銀箔を押したるものなるべし

〔考異〕
（二）蘇枋の籠—海がたの洲濱—すはうの洲濱
（三）あり—取出でたり
（四）入れて—入れつゝ

畫詞 此處は吹上の宮。衣更して並み居給へり。馬ども引き出で、こま遊びして出で來たり。鷹どもすゑて、鳥の舞して出で來たり。銀の旅籠（一）馬のなかに人入れて、歩ませて引き出でたり。遣水に黄金の船ども漕ぎつらねて、船遊して、御衣櫃、蘇枋の籠（二）など御前に取り出でたり。透箱どもあり（三）。これは君だち直衣姿にて、乘りつらねて出で立ち給へり。此處は關のもと。國の守のぬし、設し給へり。君だちに沈の打敷二十、御供の人に蘇枋の卓ども立て並べて、物まゐりたり。かづけ物、女のよそひ一くだりづつかづけ奉り、淸らなる衣櫃一つに、衣入れて（四）奉り給ふ。

其處より守のぬし歸り給ひなむとする折に、都鳥遠き聲に聞ゆ。少將、

仲賴 名にしおはゞ關をもこえじ都鳥聲するかたを百敷にして

侍從、

仲忠 いとゞしく越えうきものを都鳥關のこなたに聞くが嬉しさ

黒方のすみ一透箱、かねのいさごに銀、黄金を幣にしたる、一透箱。箱のうへに
（一）歌一つ、やがて結び目に結ひ付けさせたり。
（二）少將には、
種松妻　今はとてたつとし見れば唐衣袖のうらまで汐の滿つかな
侍從には、幣入りたる箱に、
種松妻　古郷にかへる幣だにとり憂きを宿にまつらむ人をこそ思へ
良佐には、黄金の砂子入りたる（三）に、
種松妻　君がため思ふ心はありそ海の濱のまさごに劣らざりけり
などとて奉る。かづけ物は、赤色に、二藍がさねの唐衣にほそなが（四）、おはせの袴添へて奉り給ふ。尉どもに白張はかま。かくて、辛うじて出で立ち給ひぬ。あるじの君、宮の人を引き率、守のぬし國の中をこぞりて（五）、關のもとまで見送り給へり。

（語釋）
（一）合せ薫物の黒方を瓮の形にかためたるものか
（二）「少將には」の下に「黒方の入りたる箱に」とあるべし
（考異）
（三）入りたるに―につけたり
（四）ほそなが―ナシ
（五）國の中をこぞりて―國中こぞりて

松方この度は惑ひぬべくぞ思ほゆる涙はこゝにさきに立てども

近正、

かくばかりあかず侘しき別路は二つなきにも惑ふべきかな

時蔭、

空蟬(一)の羽におく露の消えぬまにあふべき君を別てふかな

種松、

初聲にわかれをゝしむ時鳥身をう月とや今日を知るらむ

とて、土器たびぐ\になりぬ。かゝる程に、贈物、引出物、設けたる數のごと奉り給ふ。御馬ども飾り裝束きて、腋のきぬ著たる御厩の人ども、馬一つに二人つけつゝ、こま方先に立てて(二)、こま遊び(三)しつゝ出でて、次々にみな引き竝べたり。かくて、物負せたる馬どもは、後れて出でて、かゝる引出物の折ごとに亂聲(四)し、舞す。種松が北の方、君だち三所に、幣調じて奉れり。銀の透箱四つづつ、

〔語釈〕
(三)春海翁云、春駒の野に出でてつゝ遊ぶが如く戯るゝをいふ
(四)鐘太鼓などうちてはやすをいふ

〔考異〕
(一)空蟬—夏蟬
(二)立てて—立ちて

臺結ひ、おけばり打ちたり。かゝる程に、國の守のぬし、今日出で立ち給ふなりとて、行く先にとまり給ふべき御事設し(一)につかはして、自らは吹上の宮に、國の司引き率てまうで給へり。かくて物の音など、惜む手なくかき合せて遊ばしつつ、日高くなりければ、急ぎ給ふ折に、あるじの君土器取りてかく宣ふ、

涼　語らはぬ(二)夏だにもある今日しもや契りし人の別れゆくらむ

少將、

仲頼　歸れ(三)ども君を戀ふべきころもをや(四)著れども夏は薄きたもとを

侍從

仲忠　立ちかへり逢はむとぞ思ふ夏衣濡るなる袖も乾きあへぬに

良佐

行政　夏衣今日たつ旅のわびしきはをしむ涙ももるゝなりけり

松方、「さき〴〵も侍りしかば」(五)などとて、

(語釋)
(一)宿の用意をしに人をやりおきて
(二)約束せぬ夏さへ來るの意

(考異)
(三)歸れども—かふるとも—かふれども
(四)著れども—きれども
(五)自分は前にも來し事ある故

〔語釋〕
(一)旅が友に別れて後のさびしさをいふなるべし
(二)黄色の歟

十 送別の宴歸京

〔考異〕
(三)賜はす…明かす—賜ひ夜一夜遊びあかす—賜ふ夜一夜遊びあかす

近正、
　春ながら年は暮れつゝよろづ代を君とまとゐばものも思はじ

時蔭、
　いづかたにゆくとも見えぬ春故に惜むこゝろの空にも有かな

種松、
　まとゐして惜む春だにあるものをひとり歎かむ君はいかにぞ

などとて、今日のかづけ物は、きいろ(二)の小袿(一)かさねたる女の裝一くだり、御供の人人に、同じ色の綾の小袿、はかま一くだり、賜はす(三)。かくて遊び明かす。

かくて四月一日に、君だち歸り給ふ。吹上の宮より出で立ち給ふ。其の日の饗、常よりも心ことなり。君だち、唐の花紋綾のあやの直衣、あやの織の下襲、うすものの青色の指貫、白襲のあやのほそなが、一襲づつ奉れり。かくて御折敷前ごとにまゐり、卓十、前ごとに立て竝べて、土器はじまり、御箸くだりぬ。お前に餌

がさねなど著給へり。其の日の御饗、例のごとしたり。折敷など前々のにあらず。土器はじまりて遊び暮らす。水の上に花散りて浮きたる洲濱に、「春を惜む」といふ題を書きて奉り給ふ。少將、

仲頼　水のうへ(一)の花の錦のこぼるゝは春のかたみに人むすべとか

侍從、

仲忠　色々の花のかげのみやどりくる水底よりぞ春はわかるゝ

あるじの君、

涼　いつかまた逢ふべき君にたぐへてぞ春の別れも惜まるゝかな

良佐、

行政　時の間に千度あふべき人よりは春のわかれをまづは惜まむ

松方、

ゆく春を留むべき方もなかりけり今宵ながらに千代は過ぎなむ

〔註釋〕
(一)「うへの」は「うへに」の誤なるべし

（語釋）
（一）玉津島は玉の出る島の意にてもとは玉出島とかきし也

（考異）
（二）立ちよる—うち上る

吹上の宮に春を惜む

とておほん割籠まゐり、鳥すこし取らせて、玉津島に物し給ふほど、所々御設したる人多かり。玉津島に參り給ひて、其處に遊び逍遙し給ひて、かへり給ふとて、少將、

仲賴　あかず見てかくのみ歸る今日のみや玉津島てふ名をば知らまし

あるじの君、

涼　年を經て波のよるてふ玉の緒にぬきとゞめなむ（一）玉いづる島

侍從、

仲忠　覺束な立ち（二）よる浪のなかりせば玉いづる島といかで知らまし

良佐、

行政　玉いづる島にしあらば海神の浪たちよせよ見る人ある時

などとて皆歸り給ひぬ。

三月晦の日になりて、君だち吹上の宮にて春惜み給ふ。櫻色の直衣、躑躅色の下

（語釋）

（一）四尺四寸

（二）鶴、はしたか

（考異）

（三）風に亂れ―こきまぜにさふの

（四）心あらば…風も―花ちらす風も心あり

うちき、あはせの袴、豹の皮の尻鞘ある御佩刀たてまつりて、長四寸（一）ばかりなる赤き馬に、赤きしりがいかけて乘り給ふ。（二）はいたかするゑて、御供の人は、青きしらつるばみ、蘆毛馬に乘りて、御鷹するゑたり。御設はあるじの君、檜割籠ども淸げにて持たせ給へり。かくて、御前の野に鶴あはせなどする程に、園の花の木ども風に亂れ（三）、鳥ども立ち騷ぐを見て、君たちえ打過ぎ給はで、あるじの君、

涼　散りぬればかりの心もわすられて花のみをしく見ゆる春かな

少將、

仲賴　春の野の花に心はうつりつゝ駒のあゆみに身をぞまかする

侍從、

仲忠　今日は猶野邊にくらさむ花を見て心をやるもゆくにはあらずや

良佐、

行政　心あらば（四）花ちらす風も駒なめてわが見る野べにしばしよぎなむ

（語釋）
（五）未詳
（七）「まかり」は「みかり」の誤歟

（考異）
（一）朱の―獸枋の
（二）四つ―四つして
（三）別當ども立ち―別當の御たち
（四）主の種松います―主の種松のぬしいまそがり
（六）ちむずりくさの―ちむずりのくさの―ちむすりのすりくさの

㊇ 鷹狩

物まきたり。いかめしき碓に、男女立ちて踏めり。これは張物の所。めぐり無き大なる檜皮屋。あこめ、はかま著たる女ども二十人ばかりありて、色々のもの張りたり。これは縫物の所。若き御たち三十人ばかり居て、色々の物縫へり。これは絲の所。御たち廿人ばかり居て、絲繰り合せなど、手ごとにす。織物の絲、組の絲など、竿ごとに練り掛けたり。唐組、新羅組、たゞの組など、色々にしたり。これは寢殿。北の方居給へり。（一）朱の臺四つ、（二）かねの坏どもして物まゐる。御たち十人、童四人下仕四人あり。こゝは、所々の別當ども立ち竝み居（三）て、預りの事ども申したり。こゝは（四）主の種松います。御前に、男ども二百人ばかり居て、物言ひなどす。

かくて吹上の宮には、おほん鷹ども試みたまひて人々に奉り給はむ、と思して、忍びて野に出で給ふ。君だち四所は、あかしらつるばみの（五）（六）ちむずり、くさの色に絲を染めて、形木の紋を織りつけたる（七）まかりの御衣、折鶴の紋の指貫、綾、搔練の

（語釈）
（四）まきは布を擣つ具

（考異）
（一）紫檀ども—紫檀ら
（二）など—つき
（三）をりびつ—をしき

十ばかりすゑて酒造りたり。酢、醢、漬物、皆同じごとしたり。贄どもなどもあり。是は作物所。細工人三十人ばかり居て、沈、蘇枋、紫檀(一)どもして、割籠、折敷、卓どもなど色々につくる。轆轤師ども居て、御器ども、おなじ物して挽く。卓たてて物食ふ。盤すゑて酒呑みなどす。これは鑄物師の所。男子ども集り、踏鞴踏み、物の御形、鑄などす。銀、黄金、白鑞などをわかして、旅籠、透箱、割籠、餌袋、海、山、龜など(二)、色をつくしてし出だす。こゝにも皆物食へり。此處は鍛冶屋。銀、黄金の鍛冶廿人ばかり居て、よろづの物、馬、人をり(三)びつなど造る。此處は織物の所。機物ども多く立てて、織手廿人ばかり居たり。色々の織物ども織る。これは染殿、御たち十人ばかり、女子ども廿人ばかり、大なる鼎たてて、染草色々に煮る。盥ども人ごとにすゑて、手ごとに物とも染めたり。槽どもに女の子ども下り立ちて、染草洗へり。これは擣物の所。御たち五十人ばかり、女の子ども卅人ばかりあり。(四)まきまへ毎におきて、手毎に

（語釋）
（一）不詳
（二）「たてま所」一本ころはりや。按ずるに「ころはくりや」なるべし
（三）樗の木歟又象の牙歟
（五）積松をいふ
（七）上は涼をいふなるべし
（八）此邊誤脫あるべし
（九）「たい」は「對」にて積松の妻をいふ歟
（考異）
（四）量り―ナシ
（六）みな―ナシ

男ども五十人ばかり並み居て、臺盤立てて物食ふ。たてま所。（一）（二）鵜飼鷹飼、網すきなど、日次の贄奉れり。男ども集まりて、俎たてて、魚、鳥つくる。かねの皿に、北の方の御料とて盛る。御厩によき馬二十づつ、西、東に立てたり。預りども居て、秣飼はす。側に鷹十ばかりすゑたり。牛屋によき牛ども十五ばかり、衣著せつゝ並べて飼ふ。これは大炊殿。廿石入る鼎どもたてて、それが程の甑どもたてて、飯炊ぐ。きさのき（三）に、鐵の脚つきたる槽四つ立て並めて、皆品品なる飯炊き入れたり。所々の曹司どもの使人、男に櫃もたせて、飯量り（四）受けたり。間一つに臼四つたてたり。臼一つに女ども八人立ちて、米精げたり。これは御炊屋。銀の脚鼎、おなじ甑して、北の方、（五）主のおもの炊ぐ。御厨子所の雜仕女（六）みな擣ち綾著てあり。きぬ著たる男に、油單おほひたる臺すゑたる行器もたせて、おもの受く。（七）上の御料のに、（八）ますかへしのおもの三斗、主の御料八合、（九）たいのおもの一斗五升とて受く。これは酒殿。十石入るばかりの瓶、二

（語釈）

（二）誤あらんか

（三）二十町—八町

（四）誤りあるべし

（五）庄司歟「てうじ」とも「をうし」とも「あうじ」とも書けり

（考異）

（一）にも同じ—にもまた同じ

めしき黄牛四つ、鷹、鵜、同じ数なり。良佐（一）にも同じ。これはあるじの君の御志。種松が奉る物は、一所に籠二かけ、いかめしき馬に負せたり。白絹入れたり。旅籠二かけに、路のほどの物入れて、よき馬に負せたり。御精米、一所に二百石の船二船づつ、三所に奉る。

畫詞　これは種松が牟婁の家。四面めぐりて町どの一町（二）、田二十町（三）ばかり、作りめぐりてあり。牛どもに犁かけつゝ、男ども持ちて鋤く。笥に飯盛りつつ食へり。離れて、いかめしき河、海のごとして流れたり。家の内四面八町、築土築き入れたり。垣に沿ひて、一面に大なる檜皮ぶきの藏、四十づつ建て、廻り百六十の藏なり。これは北の方の御私物。綾錦、きぬ、綿、絲、かとりなど、棟とひとしう積みて、とり納めぬる倉なり。これは政所。家司ども三十ばかり有り。（四）家ども、預り百人ばかり集まりて、今年のなりはひ、養蠶すべきこと定む。炭燒、木樵、などいふ者ども、集まりて奉れり。（五）せうじ量り收む。

沈の枝に造花をつけて、島に植ゑあつめて、さやうの物を鹿、鳥につくりすゑ、いとをかしげに、大やかなる黄金の船すゑ、それに色々の絲をむすび、袋におもしろき(一)物結びすゑて、薬香をつゝみて、組して上をつゝみて、船に乗せたり。沈の折櫃に、しろかねの鯉、鮒をつくり入れ、銀、黄金、瑠璃などの壺どもに、さやうの物を入れて、(二)あさゆひなどして、(三)にゑ持たるにて、舟子楫取たてて、三所に同じごとしたり。御衣櫃一かけ、清らなる旅のおほん装束ども、「三日に上り給ふべし。一日に一よそひ著給へ」とて三よそひ、色々にしたり。かづけ物ども、女のよそひ一襲づつ設けたり。引出物は、侍従に様々の斑馬のたけ(四)八寸ばかり、年六つばかりなる走り馬四つ、蒔絵の鞍橋、豹の皮の(五)下鞍、銀の鐙かけ(六)たる鞍置き、黒斑の牛四つ、すゞしの絹を白ながら繋ぎつけたり。鷹四つすゑたり。白き組の大緒、青きしらつるばみの結びたての總、鈴つけなどあり。鵜四つ、籠、杁、いと珍らかなり。少將に、黒鹿毛の馬、たけ(七)七寸(八)ばかりなる四つ。鞍鐙同じ。いか

〔語釈〕
(二)「麻結ひ」歟
(三)贄歟「にゑ」の二字なき本もあり
(四)四尺八寸
(五)鞍おほひ
(七)四尺七寸

〔校異〕
(一)物結び—物を結び
(六)たる鞍置き—ナシ
(八)ばかりなる…四—ばかりなりあかき四つ

㊆ 仲頼等　歸らんとす。
贈物

〔語釋〕
(一)種松自らをいふ
(四)御指圖あらば
(五)未詳
(六)旅行用の竹籠
(八)網目の意歟

〔考異〕
(二)土産にも—「も」ナシ
(三)等は—「等」ナシ
(七)唐—から
(九)白う—しろう

三月晦日になりぬれば、客人たち歸り給ひなんとす。あるじの君、種松に宣ふ、涼「人々の歸り給ふべきほどの近うなりぬるを、其のことは物せらるや。弄び物などの京の土産(二)にもしつべからむなむ奉らむ、となん思ふを、御心留めてせられよ」種松、「思ほゆる限は仕うまつらせ侍り。つたなき百姓(三)等(三)は、興ある筋をなむ思ひよらず侍らむ。然ありとも、わか君のおほん會釋のすぢ侍らば、易くし思ひ至ることも侍らむ」など申す。かくて種松調ぜ(四)さするやう、贈物に、一所に銀の旅籠一掛、山の心ばへ組みすゑて、それに唐綾うす物など入れて、銀の馬に沈のゆひ鞍(五)置きて、銀の男に引かせたり。沈の檜割籠一かけ、あはせ薫物、沈をおなじ樣に挽かせ、丁子、薫衣香、麝香などを、割籠の子ごとに入れ、薬香などを、飯などのさまにて入れて、沈の男に擔はせたり。蘇枋の籠(六)一かけ、色々の唐(七)の組をこめにしたり(八)。よき絹どもを三十疋づつ入れて、蘇枋の馬に負せて、同じ男に引かせたり。海のかたを白う(九)、銀散らしたる洲濱に、あはせ薫物を島の形にし、

（語釋）
（一）細き組紐
（三）「砂」と「を」との間脫文あるべし

（考異）
（二）なしたる—ながくしたるを
（四）麗しく—麗しう
（五）松の枝—松の林—松の森

る。居丈三尺ばかりの銀の狛犬口あふけて立てる八つすゑて、沈を、唐の細組（一）して、續松になしたるを、（二）夜一夜ともしたり。

畫詞　此處は藤井の宮、大なる巖のほとりに、五葉百木ばかり、あるは川にのぞき立てるに、面白き藤木毎にかゝりて、唯今盛なり。木の下の砂を（三）敷きたる如麗はし。木の根品なく見えず、池の廣きこと海に劣らず、水の清きこと鏡の面に劣らず。巖の立てる姿、植ゑたるものの如くして、苔置いたるごと繁くあをし。其の池の上に、麗（四）しく高き檜皮の大殿三つたてり。めぐりに藤かかれる五葉廻りて立てり。其のおとゞに藤の花の繪畫きたる御屛風ども立てわたし、言ひ知らず清らなる、面白き褥、上席敷き竝べて、君だち著き竝み給へり。おとゞの柱のすみ、藤の花かざし渡したり。御前ごとに、折敷どもまゐり渡したり。藤の花、松の枝、（五）沈の枝に咲かせて、金銀瑠璃の鶯にくはせて、歌の題書きて、種松參らす。君だち御覽じて、土器とりて、和歌詠み給へり。

左近尉近正、

　藤の花うつれる水のあはなれば世の間に浪の織りもこそすれ

左近尉時蔭、(一)

　藤の花色のかぎりに匂ふには春さへをしく思ほゆるかな

國のすけ、

紀伊介匂ひ來る年は經ぬれど藤の花今日こそ春をきゝはじめけれ

まつりごと人種松、

　春のいろの汀ににほふ花よりも(二)底の藤こそ花と見えけれ

などとて遊び暮らす。其の日のかづけ物、やがて設けたり。君だち四所、國の守、權の守まで、青きしらつるばみの唐衣襲ねたる、女の裝ひ一具づつ、衞府の尉どもよりはじめて、國の介には、濃き紫のあはせのほそなが一襲、あはせの袴一具、それより下は、ひとへなる物など、賜はらぬ人なし。夜に入りて、(三)續松まる

〔語釋〕

(一)菊峯には左兵衞尉とり

(三)松明をともす也

〔考異〕

(二)花よりも―花よりは

〔考異〕
(一)松と見えける—松にぞ見えける—松にぞありける
(二)うつれる—やどれる

あるじの君
涼　春雨のにほへる藤にかゝれるを齢ある松のたまかとぞ見る
侍從、
仲忠　藤の花そめ來る雨もふりぬれば玉の緒むすぶ(一)松と見えける
少將、
仲頼　汀なる松にかゝれる藤の花かげさへ深く思ほゆるかな
良佐、
行政　まとゐしていづれ久しと藤の花懸れる松の末の世を見む
國の權守、
藤の花かゝれる松のふかみどりひとつ色にぞそむる春雨
右近尉松方、
紫のいとゞみだるゝ藤の花(二)うつれる水を人しむすべば

〔語釋〕
(一)自身君の御許に參上せんと思ひ居しうちに延引したり
(二)宮家「おほやけ」歟
(四)正賴
(六)前任中の事につきて訴ふるなるべし

〔考異〕
(三)ども―どもの
(五)只今―只今は
(七)答へて―いひて
(八)よはひは―よはひも

紀伊守「下り給へりけるを、え承らざりけるかな」少將、仲頼「願侍るを果さむと思ふ給へしかども、思ひ立たず侍りしに、此の吹上の宮を承りてなむ、神の御許にだにものうく侍りしを、俄に出で立ちて侍りし。(一)自らをと思う給へし程になむ、怠りにける」守のぬし、紀伊守「此の宮に參り來ざりせば、得對面賜はるまじくこそありけれ。如何に京には何事か有らむ。あさましう前の守の爲亂りける國にまうで來て、(二)宮家のつかひ(三)ども入りみだれてのゝしり、公事は慰む方もなきに、見給へわづらひて、いはゆる田舍人になむなりにて侍る。(四)大將殿も平らかにおはしますらむ」少將、仲頼「(五)只今、大將殿には平らかにおはしましき。京には異なることなし。此の國のさきの守、(六)うれへをなむ言ひのゝしる」など答へて、(七)例の物の音ども掻き合せて、土器度々になりて、君だち和歌遊ばす。「藤の花を折りて松の千歳を知る」と言ふ題を國の守のぬし、

紀伊守　藤の花かざせる春をかぞへてぞ松の(八)よはひは知るべかりける

㊅ 藤井の宮の藤の宴

〔考異〕
(一)まつばの―まつはしの
(二)下りたるを―ものしたるを
(三)敷物―ナシ
(四)ども―ナシ

三月中の十日ばかりに、藤井の宮に藤の花の宴し給ふ。君だち出で給ふ。御裝束は闕腋の青きしらつるばみ、綾の上のきぬ、蘇枋の下襲、綾の上のはかま、螺鈿の太刀、唐組の緒つけて奉り、おほん馬添廿人、紫のきぬ、白絹のうちばかま著つゝ、四所に廿人づつ仕うまつる。客人の御前には、衞府の尉どもまで、あを色に柳がさね著、あるじの君の御供には、宮の侍の人十人、青色のまつば(一)の上のきぬ、柳襲著たり。其の頃の紀伊守は、藏人より出でたる人なれば、此の少將などの下りたるを(二)聞きつけて、吹上の宮に、國の司どもひき率てまうで給ひて、藤井の宮にわたり給ふ。

かくて皆著きわたり給ふ。其の日のおほん設、種松仕うまつれり。君だち四所國の守までに、紫檀の折敷二十、紫檀の轆轤挽の坏どもして、敷物(三)、打敷、心ことなる錦あやなり。蘇枋の折敷、蘇枋の轆轤挽の坏ども(四)すゑて二つ、おほん供の人の前毎に立てわたし、御土器はじまり、おほん箸下りて、守の主少將に宣ふ

〔語釋〕
(一)豈捨てて行かんやの意
(二)「などとて」なるべし

涼　みやこ鳥友をつらねて歸りなば千鳥は濱になくなくや經む

侍從、仲忠「我が君をばまさに(一)」など(二)て、

仲忠　雲路をばつらねて行かむ樣々にあそぶ千鳥の友にあらずや

少將、

仲頼　都鳥千鳥をはねにすゑてこそ濱のつととて君にとらせめ

行政、

君問はゞいかにこたへむ濱にすむ千鳥さそひに來し都鳥

などとて夜一夜遊び明かす。

〔畫詞〕此處は渚の院。大きに高き大殿、汐の干滿つかたに立てり。めぐりはをかしき島ども數多あり。頭つゝみたる女ども、かきあつめて潮酌みかけたり。鹽釜に潮酌みいれ、はつかなる蜑の庵どももあまた。かけて乾す手つきつきしく藻干したり。

〔語釋〕
(一)志は
(三)此度がはじめてなれば

〔考異〕
(一)來るも—來るに

て、夕暮に、大きなる釣船に、蜑の栲繩を一船繰りおきて漕きわたるを、少將見て、仲頼「これ斯く見ゆとも、仲頼が志より は短からむかし」など言ふを、あるじの君打笑ひて、

涼　くる人の心のうちは知らねどもたのまるゝかな蜑の栲繩

侍從、仲忠「此處まで參り來る(一)も劣らじかし(二)」とて、

仲忠　道とほき都よりくる心にはまさりしもせじあまの栲繩

少將、

仲頼　こゝにくる長き心にくらぶれば名にや立つらむ沖つ栲繩

と言ふ程に日かたぶぎぬ。あるじの君、かく面白き所に、勢あるすまひはし給へど、よき友だちに逢ひ給ふこと此の度なれば(三)、斯くてのみおはしまさなむ、と思ほせど、さて物し給ふべき人々にもあらぬを思ほす程に、渚より都鳥つらねて立つ折に、濱千鳥の聲々鳴くを聞きて、あるじの君、

り。なべて物の色も珍らかに、淸らなり。

【畫詞】此處は林の院。廣くおもしろき濱に、花の色をつくして竝み立てる中に、高く淸らなる大殿立てり。其處に君だち竝み居給へり。上のきぬ裝束の人八十人ばかり(一)立ち續きつゝ、(二)一御前に二人づつ參る。君だち御文つくり給へり。(三)あるじの君、御博士の大學の助、講師して讀みあぐ。君だち、琴にあはせて誦んじ給へり。侍從更にも言はぬ樣(四)なり。かづけ物三筥持て出でたり。あるじの君、取り給ひて、侍從よりはじめてかづけ給へり。

渚の院の上巳の祓

かくて三月十二日に、はじめの巳の日出で來たり。君だち御祓しに、渚の院にいで給ひて、蜑、潛女、召し集へて、よき物かづかせ、(五)むらきみ召して大網引かせなどし給ふ。其の日の折敷、銀の折敷二十、打敷、唐の(六)うすもの、綾、かとりのかさねしたり。かねの御坏どもして、御前ごとに參りたり。(七)尉どもに、蘇枋の卓ども二つづつ賜へり。かくて例の君だちは、琴彈きしもへ(八)童笛吹きかはし遊び暮し

（語釋）
(三)「あるじの君の御博士の」なるべし
(五)漁者の長
(七)松方時蔭等
(八)「しらべ」歟、「もへ」の二字なき本もあり

（考異）
(一)ばかり―ナシ
(二)一御前に…參る―ひとだまへにふたりづゝまゐる
(四)樣―才
(六)唐の―からの

〔語釋〕

（二）「をる」は「ある」又は「さく」の誤か

（四）「垣間」の意歟、「かざま」とかける本もあり

〔考異〕

（一）色も—枝も

（三）薄さに—薄きに

（五）よそひ…なべて—よそひ一くだりづつあやも

涼　さくら花雲におよばぬ枝なれば沈めるかげを浪のみぞ見る

良佐

行政　櫻花そめ出だす露のわかねばや底までにほふ色（一）も見ゆらむ

松方、

さくら狩濡れてぞ來にしうぐひすの都にをる（二）は色の薄さに（三）

近正、

人傳に聞きこしよりも櫻花あやしかりけり春のかきま（四）は

時蔭、

白雲と見ゆる櫻もあるものをおよばぬ枝と思はざらなむ

種松、

撫で生ほすかひもなきかな櫻花にほふ春にもあはずと思へば

など言ひて、夜一夜遊びあかす。其の日のかづけ物、種松が妻君、（五）よそひ出でた

〔語釋〕
(一)涼の世に埋れたるを嘆くなり

〔考異〕
(二)見るぞ―なるぞ
(三)こずゑを―こずゑも

仲忠 ゆく舟に　花の残らずふり敷けば我も手ごとにつまむとぞ思ふ

良佐、

行政 風吹けば　とまらぬ舟を見しほどに花も残らずなりにけるかな

など宣ふ程に、宮より種松が妻君、合せ薫物を山の形に造りて、黄金の枝に銀の櫻咲かせて立て竝べ、花に蝶ども數多するゑて、其の一つに斯く書きつく、

種松妻 櫻花(一)　春は來れども雨露に知られぬ枝と見る(二)ぞかなしき

とて、よき童して、林の院に奉れり。君だち見給ひて、蝶ごとに書きつけ給ふ。

侍從、

仲忠 雨露の　こずゑ(三)をわかずかゝればや花の枝とは人の知るらむ

少將、

仲頼 春風の　吹上ににほふ櫻花雲のうへにも咲かせてしがな

あるじの君、

〔語釋〕
(三)仲賴
(四)あて宮の事
(六)「かへる」は「ちる」の誤か

〔考異〕
(一)詩—歌
(二)かゝる程に—かゝるに
(五)なる—なり

折敷一つにするゑて、遠くより參るに、聊かなる過せず。男君たちの御前に立ち居仕うまつるに、めやすく勞ある童べなり。かくて物の音など搔き立て、例の遊びなど振舞ひて、(一)詩つくりなどしつゝ讀み上げて、琴に合せて諸聲に誦んじ給ふ。(二)かゝる程に(三)少將、かく面白き所に、あるかぎりの上手集ひて、世の一の琴笛吹き立てかき鳴らしつゝ、淸らをつくして遊び渡れど、病に就き伏し沈みて(四)思ひしことは慰むべくもあらず、歎きわたるに、花誘ふ風も心すごく吹くに、濱邊を見わたし給ひつゝ、花は色を盡し、たゞ今盛なる(五)、風にきほひて散りかひ、漕ぎ渡る小舟近く、(六)かへる花と一つにつゞきて見ゆれば少將、

仲賴 行く舟の花にまがふは春風の吹上の濱を漕げばなりけり

あるじの君、

涼 春風の漕ぎいづる舟に散りつめばまがきの花を餘所に見るかな

侍從、

君舞踏して賜はり給ふ。少將、箏のこと、良佐琵琶奉り給ふ。

かゝる程に、濱のほとりの花盛になりぬ。君だち、花御覽じに、林の院に出で給ふ。其の日の御まうけ、種松が妻仕うまつり給ふ。今日の御裝はみな直衣の御衣ども、御供の人、例の上のきぬ、櫻の下襲など著たり。(一)皆徒歩より出で給ひぬ。御前の物、皆女の仕うまつり給ふなれば、賄より始めて、女の仕うまつる。沈の折敷二十、沈の轆轤挽のおほん坏ども、敷物、打敷、心ばへ珍らかなり。あを色、(二)しらつるばみの唐衣、綾の摺裳、あやの搔練の袿、あはせの袴著たり。大人髮長にあまり、いろ白くて、年廿歲よりうちの人十人。同じ青色に、蘇枋、綾のはかま、あやの搔練のあこめ一襲、あはせのはかま著たる童、髮長とひとしくて、年十五歲より內、(三)長ひとしく、姿同じき十人。(四)男どもは、御階の下まで(五)十の御折敷を取りつゞきて立ち竝み、下仕は、御簾の下まで取り次ぎ、童は御前に參り、大人四人は、御前のこと賄をす。童の手より次ぎて參るに、長高く(六)うるはしき盛物を四盛、

㊃林の院の花見

〔語釋〕(二)濃き鼠のやゝ白みたる色

〔考異〕(一)著たり—したり
(三)內—うちなり
(四)男どもは—「は」ナシ
(五)十の—八十の
(六)高く—高う

〔語釋〕

(一)木の根に至るまで上品に見ゆ

(二)内の造作の意歟。「おとゞの」の「の」なき本もあり

東おもて、濱のほとり、花の林二十町ばかりなり。花は御垣の下まで竝み立ち、滿つ潮は、御垣の下まで滿ち、干る潮は花の林の外をかぎれり。潮滿ちては、花の木は海に立てるごと見ゆ。砂子うるはし。(一)木の根品なく見えず。いろ〳〵の小貝ども敷けるごとあり。宮より西、大なる川のほとり、二十町ばかり、紅葉の林の長ひとしう數おなじ。宮より北おもて、大なる山のほとり、山より下まで、常磐の木色をつくしたり。町のほど、木の數、南とひとし。宮の内、四面めぐりて、三重の垣、三つの陣の面ごとに、檜皮葺の御門三つ建てたり。馬場殿、大なる池、大なる山の中に、いかめしき反橋あり。池のめぐりに、花の木廻りて立てり。埒結ひたり。側に西東の御厩、別當あづかり事々しう、御馬十づつ。鷹屋に、鷹十づつすゑたり。大殿町、檜皮葺の、金銀、瑠璃して造り磨きたる大殿、渡殿、更にも言はず、照り輝けり。住み給ふおとゞのうち(二)つくり、御座所心ことなり。客人三所、あるじの君に琴奉り給へり。あるじの

(語釋)
(二)目的は到底達し得ぬと知りながらも
(五)不動の御倉にて、開かぬ事にきめたる倉の義か
(六)實忠
(七)自分がよい年をしながら實忠に比べては物の哀を知らぬよと思ひ知られたり

(考異)
(一)あめれば—あなれば
(三)先づ—ナシ
(四)怪しかなるは—怪しう思へるは
(八)世に—身に
(九)餘所にて—「て」ナシ

ふめれど、思ほしたることあめれば(一)、えあるまじと知りながら(二)、猶人々聞え給ふめる。げにいと怪しうおはしますなり。御容貌よりはじめて、御心なむ又斯かるこそいと怪しけれ」仲忠、「先づ(三)いと怪しかなるは(四)、父のおとどの、ふどうの御倉(五)ひらきて、多くの財失ひ給ふなるこそはいと珍らかなれ。其が中にも、此の春春日にて遊ばしゝ五箇の聲にこそ、仲忠多く涙は落してしか。鶯のはるかなる聲、松風のとほき響に、のどかなる聲を調べ合せ給ふには、鳥、獸、山伏、山人、耳ふり立てぬはなかりき」少將仲頼「其の中にも、源宰相(六)の御氣色の、吾にもあらで聞き居給へりしを見給へしにこそ、老(七)の世(八)に物の哀知られず侍るを、多く思う給へ知られにしか」あるじの君涼「げに如何なる心地しけむ。餘所にて(九)承るだにあるものを」と宣ふ。

畫詞 此處は吹上の宮。南おもて、大きなる野邊のほとり、松の林、二十町ばかり、長ひとしく姿おなじ様なり。野邊清くひろし。鹿、雉子数知らず有り。

くゝ思ほゆれど、かく深き蓬のすみかを、見すべき人もなければなむ、心にもあらぬ住居にて久しうなりぬるを、世中に不益なる人もなかりければ、此のわたりまでは思ほえずなむ(一)。少將、仲賴「京に見給ふるに、人の御覽ぜむに殊なるかたはなき女などは、多かるものにこそあめれ。しな卑しからず、(二)心ある人の御女どもなどはいと多くて、男少き所なれば、仲賴等が怪しからぬものに、よき女いと多くつきてなむ時めかすめる。よき女といへど、一人あるは、惡しき二人に劣りたるものなれば、我も〳〵と、男一人に女二人三人つきてなむある」と言へばあるじの君、「いと多かなる中にも、(三)御つかさの大將、さては(四)宮内卿殿の御女どもなむ、有り難きかたち心になむ物し給ふと承る」仲賴「宮内卿の女は知らず、(五)大將殿の君たちは然物し給ふなり。(六)男も女子も、人にこよなく勝り給へり。其の中にも、男は七郞にあたり給ふ侍從、(七)女の中には九にあたり給ふ(八)なむ、いとこよなく物し給ふ。彼の女君をば、只今の天の下の人、え聞過し給はず、これかれ聞え給

(語釋)
(一)此片田舍までよき女の來んことは思ひもよらずといふ事歟
(三)正賴
(四)忠保、仲賴の妻の父
(七)仲澄
(八)あて宮

(考異)
(二)御覽ぜむに―御覽ぜむも
(五)知らず―いざ知らず
(六)男も女子も―男女など

あめれ」などかしこく驚く。あるじの君、涼「此の御琴は、先づ試みさせ給ひてこそ良からめ」仲忠、「(一)然ること仕うまつらで久しうなりぬれば、掻き鳴らさむことなむ思ほえず侍る」などつれなく言ふ。かくて、物の聲かき合せ、あるかぎり、聲合せ、調子合せつゝ遊び暮らす。少將、仲頼「御前にて、節會ごとに、惜む手なく仕うまつる折々も、(二)殊にかゝる物の音などは聞えぬを、いと珍らかにもあるかな。一所に(三)遊ばす御琴の音に、多くの人の手なむ勝りぬる」行政、「左大將殿の、春日にてし給ひし遊びをなむ、珍らしき心地せし。それにも、今日はこよなく勝りてなむ思ほゆる」など言ふ。少將、かく面白き所に、ある限の上手つどひて、明け暮れ遊びわたれど、(四)心に思ふことは猶忘れぬまゝに、あるじの君にも聞ゆ、仲頼「かく面白き所に、(五)などか(六)心すごき住居はし給ふらん。天下の物の興も、一人見るには効なき事なり。見る人ある時になむ、今少し勝るものになむ。此處を一所御覽ずるは、秋の池に月の浮ばぬに思ほされずやは」あるじの君、涼「げにいと(七)住みに

〔語釋〕
(一)琴をひかずして
(三)涼の上手にひく琴の音に
(四)あて宮の事
(六)無妻の生活

〔考異〕
(二)殊にーいと
(五)などかーなどかはーなど
(七)住みにくゝー住みうく

從、花園の胡蝶に書き付く、

仲忠　花園に朝夕わかず居るてふを松のはやしはねたく見るらむ

少將、林の鶯に書き付く、

仲賴　常盤なるはやしにうつる鶯をとくらの花はつらく聞くらむ

あるじの君、水の下の魚に、

涼　底(一)きよくながるゝ水にすむ魚のたまれる沼をいかゞ見るらむ

良佐、山の鳥どもに、

行政　葦(二)しげる島よりすだつ鳥どもの花の林にあそぶ春かな

かくて仲忠の侍從、あるじの君にやどもり風を奉り給ふとて、仲忠「これ、昔所(三)所に分れけるを、御料にとてなむ、一つ殘して侍りつる(四)」あるじの君舞踏してとり給ひて、曲一つ彈き給ふを聞きて、仲忠大に喜び(五)、仲忠「世の中に有り難きおほん手なり。これは、昔仲忠が親とひとしき人ものし給ひける、其の御傳にこそ

〔語釋〕

(一)魚を客人にたとへ沼を己の住所にたとへたり

(二)鳥を己等に花の林を涼の家にたとへたり

(三)俊蔭の携へ歸りし琴の方々へやられしをいふ

〔考異〕

(四)つる—ける

(五)喜び—喜ぶ

參れり。(一)干菓物(二)の花いと殊なり。梅、紅梅、柳、櫻、一をしき、藤、躑躅、山吹、
一をしき、さては綠の松、五葉すみひろ(三)、一をしき、その花の色、春の枝に咲き
たるに劣らず。干物、菓物餠など調じたる樣珍らかなり。山、海、河、天の下に
ある物の無きなし。沈の臺盤二よろひ、おもてに(四)羅重ねて(五)覆ひて、沈を一尺二寸
ばかりのからわ(六)に、轆轤に挽きて、樣々に色どりて、威儀のおもの(七)參る。(八)なさに紫
檀のおほん折敷四つづつして參る。御酒參る。つかふこついしき(九)盃など、いと
珍らしく殊なり。客人たちのおほん供の人は、少將の供の人に、まつりごと人松
方、目　春日村蔭、府生狛(一〇)康頼、番長大倭貞松、府生山部員業、舍人
八人、武士舍人ども同じ數なり。これ等は、物のし樣心ばへ有り、容貌あるもの
撰びたり。御馬添、小舍人、さぶらひの人、かたちを撰み(一一)、裝束を整へて多かり。
それ等が前ごとに、卓ども立てて、いかめしき饗應をし給ふ。
かくて御土器はじまり御箸下りぬ。人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍

（語釋）
(二)乾菓子
(六)未詳
(七)儀式の膳部
(八)誤りあるべし
(九)誤りあるべし、「こついしき」を「二つ いしき」「よつ いき」などとも書けり

（考異）
(一)參れり—參る
(三)すみひろ—すゑひろ
(四)おもてに—おきて
(五)重ねて—「て」ナシ
(一〇)狛の—しまの
(一一)撰み—撰び

やうの御宮仕などをもせさせ給へかし」あるじの君、涼「甚だかしこし。けに斯くむつかしき所にのみ籠り侍れば、いとゞ拙き心地するを、京に上りて宮仕をも仕うまつらまほしう侍れど、かくて籠り侍りたる人の、俄に交らひなどせば、見苦しきこと多く、累代の譽にもやならむ、とて年頃を斯くて過し侍りつるを、(一)便に此(二)のわたりに、など承りて畏まり申しつるを、まして殊更にと承はれば、とり申す限(三)にあらず、かしこまり申し侍る」少將、仲頼「甚だかしこし。怪(四)しうも宜ふものかな。京に侍る人は何か(五)侍る。田舍におはしませども、我が君をこそ世の例に(六)は聞えめ。東宮、かくて(七)おはしますと聞召して、「いかで對面賜はらむ。忌(八)なき身なりせば、そのわたりにこそは物せめ。然得あるまじきを、上(九)りやはし給はぬ」など聞え給ひき」など言ふ。種松、三月三日の節供なむどかは(一〇)かり仕うまつれり。あるじの君、客人三所の御前に、銀の折敷、かねの臺にすゑて、花文線に羅重ねて、おもて、織物、綾、かとりに羅重ねて打敷にし、數の銀の臺盤(一一)にたにすゑて

(語釋)
(二)粉河寺參詣の序に御立寄ありしことと聞きて其をさへ恐縮に思ひ居しに
(三)言語に述べがたく
(六)立派な人の例には
(七)涼が
(八)憚る所なき身ならば
(九)涼の方から來てくれぬか
(一〇)誤あるべし

(考異)
(一)便りに…殊更にと—便りに此のわたりに侍るなど奏せし人の侍るを承はりてかしこまり申しつるを殊更にと
(四)怪しうも—「も」ナシ
(五)何か—などか
(一一)臺盤にたにすゑて—臺盤にたいすゑて—臺盤上たにすゑて—臺盤にたにすゑて

〔語釋〕
(四)「けるよと」歟

〔考異〕
(一)思う…める—思ひて參り給へる
(二)畏まり—畏まりてと
(三)はいり—はひ入り
(五)仲忠の—仲忠に
(六)急ぎ—急ぎ〳〵

まさせ給へ。おほん馬など休めさせ奉らむ」松方、「さやうになむ思う給へて參り(一)給ふめる。あるじの君、涼「畏(二)まり申し給へ」など宣ふ。あるじの君、内にはいり(三)給ひて、良き裝束などし給ひて、南の端より降りて客人たち迎へて、寢殿の南の庇に、四所著きつらね給ひぬ。

かくて種松、御饗應仕うまつる。土器など度々になりて、思ひしごと、物の音など搔き合せつゝ遊び給ふに、少將、良佐など、いと哀にめでたき人の、斯く籠りものし給ひけるよ、げに仲忠(五)の等しき容貌なるを見るまゝに、めでたしと見ること限なし。少將(四)、あるじの君に聞ゆ、仲賴「仲賴多くは此處にえまゐり來じなり。松方、ことの序に語り申しゝを承りしに、他心なくて、夜を晝になしてなむ急ぎ(六)まうで來し。げに効ありて、思う給へしごと、對面賜はりたるが嬉しき事。吾が君や、などか、斯くては籠りおはしますらむ。東宮の、「只今、物の音珍らかにいたさむ人いかで得む」と宣ふを、如何に悅び聞え給はむ。京に御座しまして、さ

㊂　仲賴等吹上に到る。三月三日の節供。仲忠やどもり風の琴を涼に贈る

〔語釋〕
（二）仲忠の心
（四）騎射の番組
（五）紀州粉河寺
（六）仲賴を御迎れ申して來て下され

〔考異〕
（一）良佐—良佐と
（三）はひりて—はひいり

かくて皆出で立ちて、狩衣裝束をして、直衣裝束は持たせて、少將、良佐（一）、藤侍從の住み給ふ桂にまうづ。それより、侍從やがて出で立ち給ふ。いとになく、都の土産に何をせむと思ふに、彼處に無きもの無かるべし。昔所々に分たれし琴（二）の殘、やどもりかぜと言ひしを、彼の京極と言ひし所に埋みたりしを、母に問ひ聞きて、夜窃かに、取りに、童一人を率ていまして、取り出でさせて、それをなむ持て下り給はむとする。大將殿、出で立つ人に饗し給ふ。三所の君だちに蘇枋の卓四つづつ立てて、隨身などにも、樣々につけて賜ふ。かくて皆出で立ち給ふ。

紀伊國に到り給ひて、松方、先づ吹上の宮にはひりて（三）、君の御前につい居る。君涼「あな珍らし。いと心もとなくて歸りものせられにしを、嬉しうも對面するかな」松方、「甚だかしこし。候はむと思う給へしを、手番（四）の事など侍りしかば、それに障りてなむ、急ぎまう上りにし。今日は、府の源少將（五）、粉河にまうで給へる御供になむ候ひつる」あるじの君、涼「いと嬉しき事かな。このわたりに使あらば、おはし（六）

〔語釋〕
(二)留守の氣がかりさをいふ也
(五)仲頼が
(六)俄には請け出す事も出來ぬ
(九)「も」は「母」を草書にかきしを誤り寫したるものなるべし　此字なき本もあり
(一〇)食物
(一一)貧乏なりとて

〔考異〕
(一)物へ―物に
(三)物へ―物に
(四)物へも―物にも
(七)稻―祿―位祿
(八)見むやは―「は」ナシ
(一二)御物―くひもの―まうけの物

かくて、仲頼、宮内卿殿にかへりて、仲頼「明後日ばかり、物へ(一)あからさまに物せむと思ふを、如何に覺束(二)なからむ」仲頼妻「何處へか物し給ふらむ」少將、仲頼「近き所ぞ。藤侍從、良佐などして物すべき所ぞ」など言ふ。女、父母に、仲頼妻「明後日物へ(三)物し給ふなるに、彼の御隨身などを如何にせむ」など言ふに父母、「あぢきなし。何せむにか、思ひ物し給ふ。物へも(四)物し給ひなむ程、(五)此の節會に佩き給ふ御帶刀を質に置かむ」女、仲頼妻「さて正月の節會などには如何せむ。疾にえ取り出で(六)ずもこそあれ」父母「あぢきなし。稻(七)多く出で來なば、いと疾く出だしてむぞ。世に恥を見むやは(八)」御帶刀とり出でて、大藏史生の家に、錢十五貫が質に置きにやりて、御供の人、道のほどの割籠などせさす。も(九)、「御物(一〇)(一一)など淸げにせさせよ。便(一二)なきなべに惡くしたらば、やさしからむ」あるじの主、忠保「世間は同じごと。わが聟の君だに心留め給はゞ。財を盡して勞はる所には居給はで、我がかく貧しき所におはすれば、恥は隱れぬ」など言ふ。

だ申さず。それをぞ思ひ侍る、御暇の無かめれば」佐(一)、行政「御暇なくとも、彼の主は出で立ち給ひなむ。いざたまへ、桂へ」とて桂殿(二)へ行く。

かくて桂殿にまうでて、藤侍従を呼び出でて此の事を言ふ。仲忠、「いと嬉しきこ(三)となり。例の殿(四)や勘當せむ。(五)申しやはし給はぬ」と言ふ。仲頼左大將のおとゞに聞ゆ、仲頼「明後日ばかり、いと興ある所の侍るなる、見給へにまかり出で立つを、侍従の君おはしまさせむとなむ思ひ給へ立つを、如何ならむ」左大將、兼雅「何處へぞ」仲頼「紀伊國吹上の濱のわたりへなり」あるじの主、兼雅「若し源氏の御許へか」仲頼「然なり。今朝、府のまつりごと人、松方が語り申しつるに驚きてなむ、俄に出で立ち侍る」あるじ、兼雅「仲忠も常に物せむとて出で立つ所なり。然れど、許し宣ばねば(六)、得なむ(七)まからざめるを、何かは、率て下り給へかし。一人はえものせじ。人々ものし給ふなれば、いと後やすかなり」仲頼、「いと嬉しき事なり、斯くとり申さむに、いと畏しと(八)思う給へるを」などとて歸りぬ。

〔語釈〕
(二)仲忠の父兼雅の別莊
(四)父が叱るならん
(八)「思う給へつるを」なるべし

〔考異〕
(一)佐―ちうすけ
(三)ことなり―ことななり
(五)申しやはし給はぬ―やは申し給はぬ
(六)宣ばねば―宣はねば
(七)得なむ―「なむ」ナシ

（語釋）
（一）仲頼があて宮に懸想せるをいふ歟
（四）行く氣にはなつて居るものの

（考異）
（二）醉ひにける—醉ひける
（三）彼の—この

れも苦し氣に物し給ふ時もあめりき」など言ふ。

かくて仲頼、（一）まかづるまゝに、兵衛の府に立寄りて、仲頼「良佐ぬしは此處にか、上に候はぬは」と言ふ。行政出で來たり。仲頼、「久しう對面賜はらずなりにければ、その畏まりも聞えむとてなむ」行政、「甚だかしこし。などか久しう參り給はざりつる」仲頼、「一日春日にて、こよなく給べ（二）醉ひにける名殘に、なほ苦しう侍ればなむ。まことや、仲頼いと興あることを承りて、主に聞えむとてなり」行政、「何事ぞや。君の御耳に入り給ふは、こともなき事ならむ」少將、仲頼「（三）彼の紀伊國の源氏の御上を、松方が語り申しつるに、仲頼しづ心なし。あからさまにまかり下らむとするを、いざ給へ」行政、「神南備の藏人の腹なり。いと有り難き君と聞き奉るぞ。行政も早くより承りて、（四）出で立ち侍るを、暇の侍らねばなり。必ず仕うまつらむ。何時かは物し給ふ」仲頼、「廿九日ばかりにとなむ」行政、「如何に藤侍從は物せむと宣ふや。必ず彼の主をこそ率て下り給はめ」少將、仲頼「未

や。藤侍従は御暇ぞ無かめる。良佐(一)ぬしなどして物せむ」松方、「いと面白きことかな。御前(二)賜はらむ。然つかさの佐の君(三)、藤侍従の君、良佐ぬしのおほん遊びなどのかしこきこと語り申しゝかば、「如何ならむ世に對面賜はりて、御遊ども承らむ」など申されたりき。まいて人々下り給ひなば、疾にやえ歸り給はざらむ。彼處見給ふるには、つたなき松方らだに、京のこと思ひ出でられずなむ侍る。まして君たちの、物の音搔き合せつゝおはしまさむは、故郷は思ほしかけてむや。怪しく見給ふるにかひある君になむ物し給ふ」仲頼、「忍びて必ず物せむ。侍従、如何にたばかりて具して下らむ」松方、「忍びて誘ひ聞え給へかし。彼の君ばかりぞ、源氏(四)の君のおほん琴には對ひものし給ふらむ。聞召し較べばや」仲頼、「(五)(六)まさに爲むやは、仰せごとをだに承り(七)給はねば。さても離がれ(八)なむ。今東宮には琴の御琴、若宮(九)には琵琶仕うまつり給ふめれば、御暇ぞ無かめる。われこそ安けれ。唐土に渡るとも、制し給ふ親もなく許し給はぬ君もおはせねば」松方、「そ

〔語釋〕
(一)左兵衛佐良岑行政
(二)御供申すべし。
(三)仲頼
(四)涼をいふ
(五)仲忠が琴をひくものか
(八)仲忠が紀伊へ行きたらばその後で
(九)東宮の弟宮なるべし

〔考異〕
(六)まさに—さらに
(七)承り給はねば—承らぬ心は

に何かは、とてまかり下らざりしを、種松まう上り來て、切に恨み申しゝかば、あからさまにとてまかり下りしかば、いとこそめでたく侍りしか。彼の君の住み給ふ所は、吹上の濱のほとりなり。宮より東は海なり。その海面に、岸に沿ひて、大なる松に藤かゝりて(一)二十町ばかり竝み立ちたり。それに次ぎて、樺櫻一列、竝み立ちたり。それに沿ひて、紅梅竝み立ちたり。それに沿ひて躑躅の木ども北に竝み立ちて、春の色を盡して(二)竝み立ちたり。秋の紅葉西おもて、大いなる河面に韓紅のごと波を染め、色を盡し、町を定めて植ゑ渡し、北南時をわけつゝ、同じ樣にしたり。宮の内をば更にも言はず。あさましく見る効ある所になむ侍る。(三)彼の御容貌、身の才など(四)藤侍従の君と等しき人になむ物し給ひし」仲頼、「いと興あることかな。彼の侍従と等しき人の又あるよ。神南備織人の腹に生まれ給ふと聞きし君ぞかし。「只今の世に(五)、珍らしき人生ひ出で給ふ」(六)となむ、紀伊守の院に奏せし君にこそあれ。いかで然は生ひ出で給ふらむ。忍びてこれかれ行かば

(語釋)
(三)涼の
(四)仲忠

(考異)
(一)二十町—二十丈
(二)竝み立ち—立ち竝み
(五)世に—世の中に
(六)となむ—なんど

〔考異〕
（一）仕うまつり―つかまつり
（二）おはします様また―おはしますやうは

㊀仲頼、行政、仲忠等相誘ひて涼を訪はんとす

ても、我が君の願ひ給はむものを仕うまつらむ、と急ぐ。

かく仕うまつりありく（一）源氏の君のおはします様、（二）また此の世にうまれ生ひ立つ人にもあらず。顔容貌よりはじめ奉りて、様心ばへに至るまで、敵なし。文を讀み、遊をし給へど、習はす師に多くし勝し給ふ。京の物の師といふ限は、迎へ取りつゝ、彼が才をば習ひ取り、我が才をば彼に教へつゝ、かしこき琴の上手公を恨みて山籠れるを迎へ取りて、さながら習ひ取りなどして經給ふ程に、廿一になり給ふまで御妻なし。よき人の女ども奉れども、思ふ心ありて、え給はず。

かゝる程に、右近尉清原松方、近衛府の少將仲頼に、陣にていふ様、「松方は、いと興ある人に見給へつきて、内裏にも參り侍らざりつる」少將、「仲頼何處なる人ぞ」松方、「紀のまつりごと人、神南備種松と申す、言ひ知らぬ寶の王侍り。それが孫にものし給ふ君なり。それ、彼よりしば〳〵召しゝかども、宮仕いそがしき内

だに、われ一人して、國王の位に劣らぬ住居せさせ奉らむ」とて仕うまつること(一)限なくめでたし。春は一二萬町の田に、苗代を蒔き苗を植ゑても、「これ我が君の御年の料に乏しかるべし」と歎き、二三十萬疋の綾、緋金錦(二)を數へ納めても、「御飾りに乏しかるべし」と急ぎ、上下に(三)仕うまつる人、女三十人ばかり、男上下あはせて百餘人ばかり、女は髮揚げて唐衣着では御前に出でず、男は冠し上の衣著では御前に出でず。鮮かに淸らなる裝束を換へて著せむ、ゆたかに飽き滿てむとて(四)すること、同じく作る田と雖も、車の輪の大さなる日七つ出でて(五)年の內照すとも、一筋燒くべからず、天とひとしく(六)水湛へて浸すとも、一筋流るべからず、山のすゑ、巖の上にも、種松が落せる種は、一粒に一二石(七)取らぬはなし、養蠶をすれども、種松が蠶ひとつに、絲の十廿兩取らぬは(八)なし。かくて名ある限(九)の綾、練を作物所(一〇)(一一)の人、金銀の鍛冶どもを選び、所々に多く据ゑて、世にありとある物の色を、あり難く淸らかに調じ設くること限なし。山を崩し海を埋め

(語釋)
(二)金を織りつけたる布なりといふ
(一〇)宮内省に屬して宮中にて使用せらるゝ器物を作る役所

(考異)
(一)まつることと―まつれること
(三)上下に―「に」ナシ
(四)とて―「て」ナシ
(五)出でて―「て」ナシ
(六)ひとしく―ひとしき
(七)一粒に一二石―一穗に一二斗
(八)取らぬは―「は」ナシ
(九)限りの…つくし―限りは物の師をゐてくだし諸所
(一一)作物所…すゑて―つくも所の人々京の內なるを擧び多くすゑて―つくも所の人々京の內なるを所々に多くすゑて

（考異）
（一）わたり―ほど
（二）なるけしき―るりを敷き
（三）中に―香に

吹上の濱の（一）わたりに、廣く面白きところをえらび求めて、金銀、瑠璃の大殿を造りみがき、四面八町の内に、三重の垣をし、三つの陣を据ゑたり。宮の内なるけしき、大殿十、廊なんどして、紫檀、黒枋、黒柹、杏など（二）云ふ木どもを材木として、金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙の大殿を造り重ねて、四面めぐりて、東の陣の外には春の山、南の陣の外には夏のかげ、西の陣の外には秋の林、北には松の林。表を廻りて植ゑたる草木、たゞの姿せず、咲き出づる花の色、木の葉、此の世の（三）中に似ず、栴檀、優曇華まじらぬばかりなり、孔雀鸚鵡の鳥遊ばぬばかりなり。

種松、寶は天の下の國になき所なし。新羅、高麗、常世の國まで積み藏むる寶の王なり。其の種松思ふ樣、わか君は、我が女の腹に生れ給はざりせば、親王にもなり、帝にも知られ奉りて、都にてぞ生ひ出で給はまし、我がつたなき女の腹に生れ給へれば、かく知られぬ君にてあるなり、其のかはりには、我が國の内に

吹上（上）

梗概

㊀ 涼の素性。紀伊國牟婁の長者神南備種松の奉養。㊁ 仲頼、行政、仲忠等相誘ひて涼を訪はんとす。㊂ 仲頼等吹上に到る。三月三日の節供。仲忠やどもり風の箏を涼に贈る。㊃ 林の院の花見。㊄ 諸の院の上巳の祓。㊅ 藤井の宮の藤の宴。㊆ 仲頼等歸らんとす。贈物。㊇ 鷹狩。㊈ 吹上の宮に春を惜む。㊉ 送別の宴。⑪ 仲頼の舅忠保歸京の人々を饗す。⑫ 仲忠等正頼に吹上の有様を語る。贈物を所々に頒つ。正頼夫婦實忠を憐む。

㊀ 涼の素性。紀伊國牟婁の長者神南備種松の奉養

かくて紀伊國牟婁郡に、神南備の種松といふ長者、限なき寶の王にて、たゞ今國のまつりごと人にて、容貌淸げに(一)心つきてあり。それが妻、元は源恒有と申しける大納言の娘、良き聟取りなどしたりけるを、程もなく、親も夫も失ひて、世の中に住みわづらひたるを、種松たばかり(二)取りて、その腹に、よき女一人有りければ、(三)內の藏人仕うまつりけるが腹に、源氏一所生れ給ひけり。(四)母生み置きて隱れぬ。帝知ろしめさず、母奏せずなりにけり。斯かれど祖父、(五)祖母さふらひけり。(六)

〔語釋〕
(三)女藏人をつとめしが其を帝ひそかに寵幸ありて皇子が生れし也
(四)名は涼
(五)種松夫婦をいふ

〔考異〕
(一)淸げに—淸げにて
(二)たばかり取りて—たばかりて取り
(六)けり—をり

【語釋】(一)帝の消息あるを月影の見ゆるといへり
(二)刊本此のつゞきに「いと清らに云々」とかき起せる二枚ばかりの文あり。これは「あて宮」の卷の卷末の文の攙入せるものなり。故に今こゝには除きて「あて宮」の卷に出せり

とて急げば、北の方、内裏の御返し、

俊蔭女　白雲のやどるも嬉し谷といへど(一)そらにし月のかげも見ゆれば

と聞え給ひて、綾、掻練のうちぎ一かさね、はかま具したる女の裝束一くだりかづけ給ふ。急ぎまゐりぬ。他人々とゞめ給ひて、遊びあかして、つとめて歸り給ふに、おなじやうなる女の裝束かづけ給ふ(二)。

（語釋）
（二）斯程に美しき色を見ながらそれを見棄てて君が歸るかと見て居らん
（三）簾内に居たりし故歌の席に連らざりし也

（考異）
（一）とて―ナシ

らす。御土器たび〳〵になりて、御使の少將いそぎ給ふに、兼雅「など斯くはいそぎ給ふ。花を見てこそ歸り給はめ」とて土器賜ふとて（一）、

兼雅　急ぐとも花にまかせむにほふ色見つゝや人の歸るとも見む（二）

仲頼、「さるは」など言ひて、

仲頼　花の香を尋ねて來つるかひもなくにほひにあかで我や歸らむ

祐澄、

斯くながら散らずと思はゞ櫻花陰にて千代をめぐらさゞらめや

仲澄、

この宿ににほへる花のいかなればおつる雫も玉と見ゆらむ

行政、

松風のひゞき殘れる宿にしものどかに咲ける花の色かな

仲忠、内にて讀まずなりぬ（三）。斯かるほどに、少將、仲頼「久しくなりぬ。いと畏し」

朱雀「月にだによらずなりにし白雲の谷に年經と聞くはまことか(一)

いとこゝろ强げなりしを、いかで斯くは。

など書き給ひて、左近少將仲頼に、朱雀「これ彼の桂の家に物して、内の方にとらせよ」とおほせ給ふ。仲頼いそぎて出づる一つ(二)車にて、行政、祐澄の中將、仲澄の侍從など乘りて、桂へまうでたまふ。路のほど遊びて來る(三)音聞召して、兼雅「侍從(四)のまかつるにぞあなる。湯漬の設せさせよ」と宣ふほどに、おもしろき花の枝に御文つけて、使の少將まゐり給へば、あげたる御簾(五)おろして、外(六)に出で給ふ。御たち皆内に入りぬ。

斯くて(七)簀子に居ぬ。御ともの人は花の陰にすゑたり。仲頼御文を内に入るれば、おとゞいと見まほしく思さるれど、え入り給はず。北の方御文を見給ひて笑ひ給ふ。さて、内より、いと疾く物(八)まゐる。紫檀の折敷、沈の臺にすゑて八つ、卓いと(九)いかめしうはあらで、干物、生物などして、よさうなるども限なく装束かせてまゐる

（語釋）
（一）月は朱雀、雲は伎蔭女、谷は兼雅を譬へたり
（三）音絶しつゝ來る
（四）仲忠
（六）兼雅が
（七）御使が
（八）北方より仲頼に饗應あり

（考異）
（二）一つ—ナシ
（五）おろして—うちおろして
（九）いかめしうはあらで—いかめしくはあらぬ

あはせのはかま、こき袙など著て出で入り、花のかげに遊びて、いみじき昔語をし、あはれなる行末を契りて居給へり。

かくて夕暮の程に、内裏に(二)おとゞ久しくまゐり給はぬことを、帝右のおとゞに宣(一)ふ、朱雀「右大將ひさしく參らぬかな」と宣へばおとゞ、忠雅「桂河わたりに、(三)興ある所を持て侍りたまふを、(四)其處になむ、花見給へむとて、日頃侍りたまふなる」(五)帝、朱雀「妻などは、いづれをか率てものすらむ」おとゞ、忠雅「仲忠が母をなむ率てまかりける」(六)上、朱雀「それを思ふなよりな」おとゞ、忠雅「唯今かれ一人をなむ持て侍るなる。本妻ども皆わすれ侍りて」(七)と奏し給へば、朱雀「いと興あることかな。まだかの大將の妻一人持たることと聞えず。(八)三の宮を思ひし時も十七八人ばかり持てありしを、如何なれば、たゞ一人にはなりたらむ。その御子を忘るゝばかりの心にこそは。仲忠が母には、(九)昔よりあかぬ事なく聞えし人ぞかし。いかで見む(一〇)と思ひしを、參らずなりにし人を」とて上、朱雀「なほこの人惱ましにやらむ」とて書かせ給ふ、

（語釋）
（二）兼雅
（七）此處頗る錯簡あり、幸にこの處の文の「田鶴村島」の卷にまぎれ入り居て、それは順序正しき故、それによりて改む。
（八）嵯峨院第三の皇女、梨壺女御の母
（九）「母には」の「に」衍文なるべし。

（考異）
（一）かくて—ナシ
（三）河わたり—河のわたり
（四）たまふ—たうぶ
（五）たまふ—たうぶ
（六）上—ナシ
（一〇）見む—えむ

さる志の年月に添へてまさりしかばこそ、この一條に(一)あまた物し(二)給ふ人々も、いづれ志深く思ひ聞えしかど、あまたに配りし心を、(三)たゞ一所に(四)なりたりかし。女ひとり見る時はなけれど、御世にこそ斯くてあれ。これぞ昔よりいみじかりし(五)志は見給へ」など聞え給ふ。北の方、俊蔭女「いでや、それも効無かりきや」とて、

俊蔭女 ながめつゝ船浮くばかりありしかど盡せずおちしわが涙かな

と宣ふ。おとゞ、兼雅「理や。吾が佛。されど思ひ怠らざりしをのみ頼みし」とて、

兼雅 年を經てたえずながれし涙にも舟のうかばぬ時はなかりき

と宣ひて、むかし覺束なかりし世に、これもかれも、物のをりふし毎に思ひ集めたりしことどもを、互に言ひつゝ、御簾のもとに出で居給ひて、琵琶、箏の琴、倭琴どもを一つに調べあはせて、面白き手を彈く。よき臺どもあまた立て(六)、あり(七)難き物どもをあまた盛りすゑ、(八)きよく清らなる御衣どもを掛わたして、出居の簀子には、おとな廿人ばかり、濃き袿一かさね、摺裳著たり。よき童四人、あを(九)い、

〔語釋〕
(二)兼雅の妾等
(四)俊蔭女一人に
(五)男が女一人を守り居るといふ事はなき事なれども
(八)「きよく」衍文なるべし
(九)襖子

〔考異〕
(一)あまた—ナシ
(三)たゞ—ナシ
(六)立て—しし
(七)あり難き—めでたき

容貌よりはじめ、し出で給ふことも、あらまほしくものし給ふかな。いかで此の君もがな。（一）わが君と等しくてあらば、如何に人驚かむ。「いはゆるあて宮を率ても、なほ絶えぬは、（二）この侍從の母こそ勝るべけれ。等しきは珍らしきをこそ思ひまさめ。心憎しや」などこそのゝしらめ。如何にぞあらむ。（三）妬うし給へかし」（四）北の方、「げにあらば如何によからむ。まめやかに聞え給へかし。（五）こゝに、（六）いかで然ものし給はなむ、とこそ思へ」とおとゞ、兼雅「一人にならひて、（七）それも思ふ事あらじや。然もな宣ひそ」北の方「あやし。などてか然はあらむ。數多ありとも有りからにこそあらめ。然あらでもこそありしか。忘れ給はずは何をか思はむ」おとゞ、兼雅「それは更なりや。（八）思ひ出づればいと〱いみじや」（九）とて涙をおとして（一〇）斯く宣ふ、

兼雅 消えかへりかくのみありし古をかけて聞くにもまして亂るゝ

とて、兼雅「世の中は心にもあらぬ物なり。さばかりいみじく思ひながら、（一一）など然はありけむ。いでや、（一二）これを思へばこそ、天下のあて宮にも思ひ聞え憂けれ。昔、

（語釋）
（一）其方に二人竝べて我が妻とせば
（二）兼雅が棄てぬは
（三）人に心憎く思はるゝ樣にし給へといふ事歟
（五）あて宮に
（六）我は
（七）其方は今迄只一人の妻にてあり習ひたればあて宮と二人竝ぶ事になりては心配の種なるべし
（八）全く兼雅に棄てられてさへ過し來れりといふ事歟
（一一）なぜあの樣に打絶えたりしならん

（考異）
（四）し給へかし—思ひ給ふべき
（九）いと〱いみじ—いとつらしや
（一〇）涙を—「を」ナシ
（一二）これを—「を」ナシ

〔語釋〕
(八)ふみ─文、踏み
(九)誤あるべし。「なにかきちなん」とある本もあり

〔考異〕
(一)此の頃─「頃」ナシ
(二)忘られて─「て」ナシ
(三)流れ─ナシ
(四)いと─ナシ
(五)花の─「の」ナシ
(六)御かへりも─「も」ナシ
(七)なほ─ナシ

などにものし給ひて、心やり給ふ所あり。花のさかりなれば、此の頃(一)仲忠の母北の方を率ておはして、心やり遊び給ふ。兼正「怪しく、世の中忘られて(二)心ゆく所にこそありけれ。この春夏こゝにて過さむ」とて物し給ふに、花の色をつくして咲きまじり、水は絲の亂れたるやうに流れ(三)入りていと(四)面白し。あるじのおとゞ、兼雅「あやしく見所ある所かな。こゝにてをかしき業をして、上手どもの物の音をきかせ奉らばや」と宣ふに北の方、俊蔭女「げに花の(五)散らぬ前に、人々などして見せ給へ」と聞え給ふ。この大將もあて宮に文奉り給へど、御かへりも(六)無きを、な(七)ほこの桂よりも聞え給ふ。

兼雅　鶯のふみも(八)通はで年ふるは花なき里とおもふなるべし

あて宮、

かつらとてなつかさしなむ鶯は月のうちこそ聲はきこえめ

ときこえ給ふ。大將(九)のおとゞ見給ひて、兼雅「あやしく、まだ若くおはするを、御

み病になりてありしを、殿の春日詣に、辛うじて起きあがりたりしに慰さみてあれど、猶えあるまじかりければ、をかしき柳の萌え出でたりけるに、斯く書きてつけたり、

仲頼 物思ひの枝に籠れるものならばもえ渡るとも見せずぞあらまし

とて家あこ君に、(一) 仲頼「これ中のおとゞに持てまゐり給へ」とて奉る。あて宮見給ひて、あて宮「あなむくつけ。見るまじきものかな」とて引き結びて棄て給ひつ。侍従の君、

仲澄 人しれぬ涙の川と流るゝをいかでたまれる水とこたへむ

例のこたへ給はず。行政斯くきこえたり。

行政 玉づさのつひに留(二)らぬものならば空しき身ともなりぬべきかな

御返りなし。

(三)(四)(五)かくて右大將殿、桂に、おもしろき所に、大なる殿造りて、花ざかり紅葉ざかり

〔語釋〕

(一)正頼の十三男、一本には單に「あこ君」

(三)かくて以下卷末までを別に一卷とし、「かつら」と名づけたる本もあり

(五)兼雅、「右」一本に「左」

〔考異〕

(二)留らぬ—とゞかぬ

(四)かくて—ナシ

㊀ 兼雅、俊蔭女を携へて桂の別邸に籠居す。仲頼物書を奉じて行政祐澄仲澄を伴ひて桂に赴く

と聞え給へれど例のいらへ給はず。

かの仲忠の侍從、内裏の御使に、水尾といふ所にまうでて歸りに、をかしき松におもしろき藤のかゝれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらにかく書きつく、

仲忠 奧山に幾世へぬらむ藤の花かくれて深き色をだに見で

仲忠「斯くなむとだに」とて(一)孫王の君に、「これ御覽ぜさせ給ひて、この花賜はりておき給へ今たゞいま」とて内裏にまゐりぬ。あて宮御覽じて、(二)人々の中にこともなしと思す人なれば、斯く書きつけ給ふ。

あて宮 深しともいかゞ(三)頼まむ藤の花かゝらぬ(四)山はなしとこそ聞け

孫王の君、仲忠に見せ給ひけり。

右近少將仲頼(五)も、年頃いかで(六)きこえむと思ひしかど、ついでなく思されむものか(七)ら、かしこさ(八)に思ひ忍びてありし(九)を、この賭弓の御饗にかいま見て後は、ふし沈

（語釋）
（一）あて宮の侍女
（二）仲忠は
（四）君は方々の女に手を出す由なれば
（五）右大臣源祐仲の長子
（六）あて宮に戀を告げんと
（七）「ものから」は「ことの」の誤歟

（考異）
（三）いかゞ—いかで
（八）かしこさ—かしこき
（九）ありし…見て—ありしがこの賭のりゆみのあるときにかいば見て

實忠　涙さへなき世なりせばわがこひ(一)の身より出づるをいづち遣らまし

と聞え給へれど御かへりなし。

兵部卿の宮より、

兵部　山彦もこたへぬ空になくたづは天の川原にひとり臥すかな

此日頃、里ずみのかひなさに、内裏にのみなむ。

ときこえ給へり。あて宮、

答へ憂く思ほゆる哉あしたづのつる(二)(三)てふ名をもひとりなかねば

(四)平中納言殿より、

正明　水まさる淀の眞孤のおひのせにふかく物思ふ春にもあるかな

此度は御返り(五)なし。

(六)三の御子、かく人に聞え給ふを見給ひて、

忠康　巣立つとも見えぬものから鶯の山のいろ〱(七)ふみも見るかな

〔語釋〕

(一)こひ―戀、火

(二)兵部卿宮の獨身ならぬ由をいへるなるべし

(四)正明

(六)彈正宮

(七)ふみ―踏み、文

〔考異〕

(三)つる―たづ

(五)御返り―御返し

(語釋)
(三)未詳
(四)入内する樣な噂もありし故いよ／＼無沙汰に打過ぎたり
㊂ 東宮以下の懸想人たち歌をあて宮に贈る
(五)いと—絲、甚。くる—來る、繰る
(八)「少將」の下に「に」あるべし
(一〇)實忠

(考異)
(一)綾の—「の」ナシ
(二)ひとへ袴一くだり—「一くだり」ナシ—「ひとへ袴」ナシ
(六)かしこく—かしこし
(七)奉れ給ふ—奉れり
(九)かづけ—ナシ

る。その日、還饗いかめしく、舞人にかづけ物、しろき綾の(一)あはせの袙、(二)ひとへ袴一くだり、陪從にたゞの細長、はかま、童陪從などにも賜ふ。

かくて三月のほどに、東宮より、柳に御文つけて、右近少將を御使にて、

しば／＼も聞えまほしけれど、(三)馴るゝはとかいふなる中にも、この頃まゐり(四)給ふべき樣にありしかばなむ。いでや、

たのめこし春立ちしより青柳のいとやくるとも思ひけるかな

とて奉れ給へり。おとゞ見給ひて、(五)正頼「(六)かしこく斯く宣はするを、いかゞ御かへり聞えざらむ。かくも聞えさせ給へ」とて書きつけ給ふ、

正頼 春たてど身のかずならぬ青柳は花にまじらむことぞ苦しき

とて、中の御殿にたてまつれ給へれば、あて宮書きて(七)奉れ給ふ。御使の(八)少將あやがさねの女の裝束一くだり、(九)かづけ給ふ。

(一〇)源宰相かく聞え給ふ、

〔語釋〕
(一)思こその心
(二)「たゞ君かく有り難き」歟、一本「かく」なし
(六)垣間見たるあて宮を得んと
(七)正頼

〔考異〕
(三)思ふされど—思ひたれど
(四)供養—肴
(五)御—ナシ
(八)かへり—まかで

(一)(二)たゞかく有難き御容貌どもの中に、こよなくまさり給へる人なり、など思ふに、年頃かけて思はざりつる昔思ひ出でられて、世中になほあらましかば、今は高き位にもなりなまし、など思ふ。(三)されど又、こゝらの年頃、露、霜、草、かづらの根を供養(四)にしつゝ、或時には蛇、とかげに呑まれむとす、佛のおほん事ならぬ事をば、口にまねばで、勤め行ひつる佛のおほさむこと恐ろしく、など思ひかへせども、せむかた知らず覺ゆれば、散り落つる花びらに、爪もとより血をさしあやして、斯く書きつく、

思こそ憂き世とて入りぬる山はありながらいかにせよとか今も佗しき

と書きつけて、君だちの御前の御後方(五)のかたに押しつけて立ちぬ。熊野へと思ひし心もなくて、いかでこの我が見し人見む、(六)と思ふ心ふかくて、暗部山にかへりて、思ひなげくこと限なし。

かくて大將殿、(七)おなじ月の廿三日の未の時ばかりになむ、春日よりかへり(八)給ひけ

（語釋）
（一）忠こその行方を
（三）櫻色の細長を眞の櫻をとぢ留めたるに譬へ、三四の句は琴の音にひかれて暫時人間に歸りし忠こそを譬へたる也
（五）忠こそが

（考異）
（二）ことには—ことは—ことに
（四）幕—幄

む」と聞ゆれば、おとゞ、正頼「年頃をばさるものにて、今日の對面の飽かず心細きこと。嵯峨の院にも、折あらば、いま斯くなんと奏せん。常に、「昔深き契ある中なりき。正頼（一）ばかりぞ聞き出でむ」と、かしこく悲しび給ふを、斯くなむと聞し召さば、如何に悲しび宣はむ」行ひ人、忠こそ「あなかしこ。院には、世の中にまだ侍りと聞えさせじ。許されざりし暇を、強ひてまかでて、やがてまゐらず侍りしかば、重き罪侍りなむ。それなむ今におそろしく悲しきことには（二）侍る」と言ふ。おとゞ、櫻色の綾の細長一かさねを持て出で給ひて、かく宣ひて賜ふ。

正頼（三）ちる花をかくとぢつれど琴の音を調べてかへる風ぞとまらぬ

と宣へば忠君、

いにしへに今日をくらぶの山風は花の衣を吹きかへすかな

と言ふ。夕暮に花をさそふ風はげしくて、おほん幕（四）ふき揚げたるより見入（五）るれば、君だち九所、めでたく清らにておはします中に、あて宮こよなく勝りて見え給ふ。

〔語釋〕
(一)誤脫あるべし、「なほこりずまにさる交らひせさせて侍り」などあるべし
(二)害歟「かひ」歟
(五)御案内申して
(七)參上すべし

〔考異〕
(三)たてまつる—たてまつりし
(四)引き奉らせんとてなん侍りつる—引き奉らんとてなん侍る
(六)まかり入るなる時は暑氣になりぬれば—まかりいきぬれど暑氣になりて

許さぬ心など思ひたる。なんこりずま(一)にしかる交らひすへて侍るめる。これなむ思ひ苦しき。女はおしなべては延命息災を旨として　ことに別きては心の中に呪詛のがいなき(二)ことを祈願せさせ給へ」おこなひ人、忠こそ「命のさかりは、人の呪詛などもいで侍らぬものなり。業の盡きぬる時なむ、物の祟などはあるものなる。然はありとも、つゝしみ給ふなむよき事なれば、いとよく祈願し申し侍らむ。唯今も熊野にまかりまうづるなり。去歳の八月より所々に讀經(三)たてまつるなり。この御社にも、さて詣でつるを、怪しく昔うけたまはりし物の音のし侍れば、身をかへても魂や殘りて侍りつらむ、承りつけてなむ、神の御德に、吾が君に對面賜はりぬる」大將、正頼「正頼も、今日この御社に神馬(四)引き奉らせむ、とてなむ侍りつる。かの方に御さい(五)賜はりて、年頃の物語も聞えさせてしがな」おこなひ人、忠こそ「熊野へ急ぎ(六)まかり入るなる。時は、暑氣になりぬれば、路もはけしきに四五月ばかりになむまかり出づべき。平かにまかり歸るものならば必ず(七)さふらは

（語釋）
（三）不肖なるわが子どもの
（五）忠こその父千蔭
（六）擯つて居られぬ
（九）修行久しき故所願の効驗などは嘸あるべし
（一二）長女仁壽殿

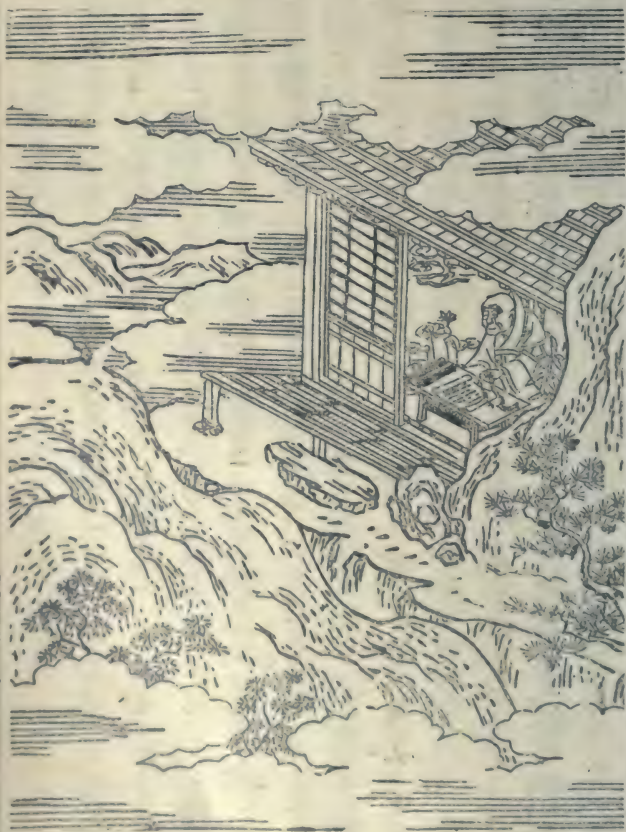
（考異）
（一）人なし—人はなし
（二）はかなければこそ—はかなげなれば
（四）やられて—「て」ナシ
（七）親の—「の」ナシ
（八）大將君—大將殿
（一〇）など加はり—など　はやものし
（一一）なりて—なりにて
（一三）一人に—一に

とて、全く穀を絶ちて行ひまかり歩く」と聞え給へば、大將の君よりはじめ奉りて、在りとある人、涙おとさぬ人なし。（一）大將の君、正頼「天の下は逆樣になるとも、斯くなり給ふ世を見むずらむとなむ思はざりし。世の中の斯く（二）はかなければこそ、けしからぬわらはべ（三）の行くさき思ひやられて、（四）うしろめたうおぼえ侍れ。お（五）とゞは、そこに物せずなり給ひにける翌日より、思し惑ひて、それをおほん病とし給ひて、はやく空しくなり給ひにき。親に知られ奉り給ひてこそ、斯かる道には思し立たましかど、親すでに思ひに堪へ給はずなりにしかば、不孝の罪とやなるらむとなむ」行ひ人、忠こそ「世中のせめて心憂きときは、親の御上も知ら（六）れぬものになむありける。親の（七）知ろし召しなば、許さるまじく侍りしかば、山林に心急ぎてまかり出でにしなり」（八）大將君、正頼（九）「おほん驗（一〇）など加はりものし給ふらむかし。正頼は、けしからぬ子どもの親になむ（一一）なりて侍る。一人に（一二）（一三）あたる女子なむ、内裏にさふらふ。君だちあまた生れなどしたるを、爭ひきしろふ人々なむ、

原の君と(一)名づけて侍りしなり。斯くものし給ふは、故右の大殿の忠君となむ(二)見奉りたる。あないみじや。など斯かるおほん身とはなり給ひつる」と宣ふ。忠こそ、今はかく、鳥獣にまじりて、年久くなりぬれば、御覧じ忘れにたらむ、となむ思ひ給へる。年頃、かゝる山伏になりてなむ。吾が君は何の御位にかおはしますらむ」おとゞ、正頼「たゞ今は納言になむ侍るめる。あやし。年頃、「如何になり給ひにけむ」と申し侍りつるに、斯く悲しげにこそはものし給ひけれ。そも〳〵、如何なる御心にてかは、かく思し立ちつらむ」おこなひ人、忠こそ「年五つにて、女親の手まかり離れて、世の中に侍りしに、心憂くおもえ侍りしかど、「まいて一人侍る子なり。(三)親の(四)御身の上を知らで侍らむやは」とて、なほ交らひ侍りしに、心憂く侍りしかば、念じあまりてなむ、十四歳にてなむ罷り籠りし。ことし二十年になむ侍りぬる。年わかくて(五)忍辱の(六)袂にまかり後るゝ事、一生のかなしびに覺え侍りしかば、前生の罪業をも滅ぼさむ、(七)かの母とじをも佛の御國にさふらはせむ

〔語釋〕
(三)父をかまはぬ譯にはゆかぬとて
(五)母をいふ

〔考異〕
(一)名づけて—「て」ナシ
(二)見奉りたり—見給へりたる
(四)御身の上を—御上を
(六)袂—おもと
(七)母とじをも—おもとをしも

仲忠「みな人も衣ぬぎかけ(一)(二)松風のひゞき知りたる人やあるとて」うちかづけて、御前より、かのかたち風(三)を賜はりて、同じきごかの聲を、手つくして彈く。更に手惜まず。御前にて、興ある節會などに、(四)おほん手づからしらべて賜ふをだに辭し申して、仕うまつらぬを、斯くすれば、きこしめす人の限、いと珍らしう興ありと思す。兵部卿の親王、「侍從の朝臣は、仰せごと(五)を賜はりてだに手觸れ給はぬを、行ひ人の爲には御手惜しまれざめり」いらへ、仲忠「かたへは打忘れて(六)侍るになむ」など言ひて、ごかの手ども彈きはつる。(七)左大將の君、綾掻練の袿一かさね、萌黄色の小袿一かさね、あはせの(八)袴一くだり、おほん前より持て出でて、仲忠に賜ふ(九)。おとゞ(一〇)、行ひ人を召し出て見給ふに、御覽ぜし人に覺えたり。怪しみて、昔見給ひつる人をおぼし出るに、忠こそに思しなして、正頼「あやしく見奉りし心地するかな。正頼をば知ろし召したりや」と宣ふ。行ひ人、忠こそ「更に知り奉らず。誰にかおはしますらむ」おとゞ、正頼「むかし、上に藤

（語釈）
（一）ぬぎかけ上の意
（四）帝の
（七）正頼
（一〇）正頼

（考異）
（二）ぬぎかけ—ぬぎかせ
（三）かたち風—みやこ風
（五）ごとを…給はぬを—ごとをだにうけたまはり給はぬを
（六）忘れて—忘れにて
（八）あはせの—あか色の
（九）賜ふ—賜はりて

言にも口あそびにもしつゝ行ふ。かの就きし人(一)は、かしこき智者にて、大法など盡して受けたりければ、それらを皆受けて、暗部(二)をば、さる修行したる所にて六十餘國をめぐりて(三)佛神(四)に讀經奉りて、近き所にまうづるに、この春日にも詣でて、夜一夜、大般若をおほぞうに(五)讀みつゝ奉りて、今は熊野にと思ひて出づるに、このおほん前にあそばすおほん琴の音する方に向きて、疾き脚を出だしてはしる。遠くて見れば、色々のあげばりを、鱗の如(六)うち渡して、立ち騷ぐ人、うちまぜたる花のごと見ゆ。風にきほひて、千々のものの音まじりて(七)聞ゆ。近く立寄りて聽くに、御隨身、舍人ども、「これは何ぞの(八)行ひ人ぞ。神事の所には出で來べきものか」など咎めのゝしれば、忠こそ(九)、かく言ひて立てり。

忠こそ　めづらしく風のしらぶる琴の音をきく山人は神もとがめじ

といふを仲忠きゝて、仲忠「いと興あるものかな」とて袙をぬぎて、斯く言ひて(一〇)かづく。

（語釋）
（一）忠こそが師と頼みし人
（一〇）忠こそに與ふ

（考異）
（二）暗部—鞍馬
（三）めぐりて—「て」ナシ
（四）佛神—かみ
（五）おほぞうに—おほぞちに
（六）如—如く
（七）まじりて—しきりて
（八）何ぞの—なぞの
（九）忠こそ—ナシ

右兵衛尉在原時蔭、「冬をいなぶる鳥」

冬山に巣くひし鳥も肌さむみ春の里にややどりとるらむ

右兵衛尉元輔、「まとゐにたらぬ月」(一)

わが伴の野邊のまとひに後るゝはすぎにけらしな春の望月

同じき尉平維助、「おくれたる月」

朝かげにはるかに見れば山のはに殘れる月も嬉しかりけり

などこれかれ宣ひて興ある夕暮に、女方の御前に、君だち物の音かきあはせて、遊ばす中に、あて宮、かの一條殿より(二)買はれたるかたち風(三)といふ琴をごかの聲に(四)しらべて、曲のめでたき手ををりかへし(五)遊ばす。仲忠(六)、こともなきおほん琴かな、少しまだ若くぞあんなる、如何ならむ世に、我が手習はし奉らむ」など、心地は空にて思ひたる程に、かの忠こその行ひ人、かの暗部山(七)に、大なる寺をつくりて、父母(八)の御爲に、いかめしき經佛供養じ、人に物も言はで、たゞ佛の御事をのみ寐

〔語釋〕

(四)ごかの聲、俊蔭卷に註せり

(六)以下仲忠の心

〔考異〕

(一)たらぬ―たえぬ

(二)殿より―殿のを

(三)かたち風―みやこ風

(五)手を―「を」ナシ

(七)暗部山―鞍馬山

(八)父母の―父母が

（語釋）
（一）正頼の九男
（三）正頼の十男

（考異）
（二）ふむらし―ふむらむ
（四）ねぐら―とぐら
（五）ふる岡のべ―ふるせる野べの

(一)式部丞清澄、「山にさわぐ鹿」

萌えわたる草木もあらぬ春べには山邊にいそぐ鹿ぞふむらし(二)

(三)右兵衛尉頼澄、「風になびける枝」

鶯の冬のねぐら(四)や春たてば風のなびかす柳なるらむ

藏人藤原仲遠、「雨にしたがふ草」

春雨のふる岡のべ(五)の草木をや秋のやどりと蟲はたのまむ

木工助維元、「春ををしむ花」

佐保姫はいくらの春を惜めばかそめ出だす花の八重に咲くらむ

右近尉清原松方、「夏をもよほす蟲」

春山の木の根の蟬は巣をせばみ夏のこのはや戀しかるらむ

兵衛尉藤原親正、「秋をまつ木の葉」

春若みほのかに見ゆる木の葉には秋こそいとゞ遠く見えけれ

侍従　源　忠匡、「紅の梅」(一)

春雨の花にふりおく紅にそめて染むらし春の佐保姫

侍従藤原仲忠、「蕨にきゆる雪」

雪とづる春のわらびの萌ゆればや野邊の草木のけぶり出づらむ

侍従兼時、「石の火にとくる氷」

春わかずさゆる河邊の葦の芽は石よりいづる火にやもゆらむ

侍従維風、「時をさとらぬ松」

見る人のよはひは千世のあたりかや(二)みどりの松は春を待つらむ

侍従元松、「春をかさぬる花」

ふたゝびやこゝの櫻は匂ふらむ同じ花にも春なそふれば

大夫親澄、「野邊にしづかなる人」(三)

春深みみぎはの芹も老いぬらし今はものうし若菜つむ人(四)

〔考異〕

(一)侍従―同じき侍従

(二)あたりかや―あたりをや

(四)みぎはの芹も―川の小芹も

〔語釋〕

(三)正頼の十一男

おなじき少将元方、「雲の錦」

おほぞらに風の織り布く錦をば谷より雲ぞたち渡るらし(一)(二)

おなじき少将和政、「冬わかく春老ゆ」

見わたせば雪ふる山もあるものを野邊の若菜の老いにけるかな

左兵衞佐顯澄(三)、「雪をうつす山」

富士のねは春日の春を餘所にみてかのこの雪も今やきゆらむ

おなじき行政、「雪のした草」

雪のうへにしひて草木の萌ゆればや春日に飛ぶ火ありといふらむ(四)

兵部大輔兼澄(五)、「霜のうへの菜」

春日野の雪間におひし若菜をば野守は見ゆや今日摘まむとは

侍從仲澄、「わづかなる木の芽」

春(六)を淺み野邊の木の芽もまだしきをいづこよりつむ若菜なるらむ(七)

（語釋）
（三）正頼の五男
（五）正頼の六男
（六）正頼の七男

（考異）
（一）雲ぞ―雲の
（二）らし―らむ
（四）春日に―春日の
（七）なるらむ―なりけむ

松よりもはひこぼるゝぞ藤の花今ひとしほのあかず見ゆるは

おなじき中將在原の元行、「むすべる柳」

花さかぬ枝にも蝶はむつれけり柳のいとも結ぼほるらし

宰相實忠、「春の雨色に見え(一)」

花をのみむら濃にそむる春雨はときはの松(二)やつらく見ゆらむ

宰相直正、「花の風おそし(三)」

佐保姫やもの憂かるらむ春の野に花のかさぬふ枝の見えねば

とて、對ひたる人の四位よりはじめの人(四)に賜ふ。賜はりて左中將實賴、「おとろふ梅」

白妙のころもに似たる(五)梅の花目に見すゝも衰ふるかな

右近(六)少將源仲賴、「晨の霞綠なり」

鶯の羽風をさむみ春日山かすみの衣今朝はたつかも

(考異)
(一)見え―見えて
(二)松や―松は
(三)花の風おそし―風おそく
(四)はじめの人―はじめ人との人
(五)ころもに似たる―ころもとたどる
(六)右近―左近

兼雅　松の根にふす山人は野べを見る今日ぞ柳の葉にも知るらむ

民部卿源實正、「春日の宮」

うぢ人のまとゐる今日は春日野の松にも藤の花ぞさくらし

左衛門督(一)藤原清正、「花の鶯」

枝ごとに妹背つらぬる鶯の鳥座をせばみ花ぞ散りける

中納言平正明、「松の蟬」

松風の聲にくらぶる琴のねをしぐるゝ(二)蟬にしらべざらめや

左大辨(三)源忠澄、「春をさとる草」

琴のねに春の草木の驚くはおのれを人やひく(四)となるべし

右兵衛佐おなじき師澄(五)、「時にのぞめる櫻」

佐保姫のほのかにそむる櫻には灰さし添ふる(六)藤ぞうれしき

右近中將おなじき祐澄(七)、「わづかなる藤」

〔語釋〕
(一)左衛門督—右衛門督なるべし。藤原の君の巻に見えたり
(三)正頼の長子
(四)ひく—引く、彈く
(五)正頼の次男
(七)正頼の三男

〔考異〕
(二)しぐるゝ—すなるゝ
(六)添ふる—そむる

〔語釋〕
(二)忠雅なるべし

〔考異〕
(一)式部卿―民部卿

(三)友も―友し

(四)うつる―たつる。按ずるに「うかぶ」なるべし

たる月をめづる。

と書き出だして、兵部卿の親王に奉る。御覧じて、「ねまちの月」を、

兵部　昨日こそねまちもせしが春の夜の今宵の月をいかゞ見るらむ

と書きて中務の親王にたてまつり給ふ。中務の親王、「花の匂をさそふ」

中務　我宿に移してしがな野邊にいでて見れどもあかぬ花の匂を

式部卿(一)の親王、「鶯をむかふ」

式部　里に咲く花にうつらで奥山の松におくるなうぐひすの聲

(二)左の大殿、「雁のつら」

故里に友(三)ものこさず來し雁はこゝにてはるをすぐさゞらめや

左大將、「川邊の鴨」

正賴　水鳥のつらねてうつる(四)春日河おるなる綾はけふや著るらむ

右大將、「このめの春」

「仕うまつりにくき事かな」など言ひてかき出す。

あはれ今日は春の(一)なかばの月、(二)ねまちを昨日といひて、花の匂をさそふ鶯の聲をむかへ、(三)旅には春の(四)雁の行をなして、川邊の鴨の侶を(五)つらねて、木の芽の春春日の宮に(六)わたり給へり。かゝれば、花の鶯枝にさぶらひ、松の蟬庵にしぐれ、春をさとる草人におどろき、(七)山の櫻時にのぞめり。春の藤色はつかにて、柳の絲をむすべり。春の雨色に(八)見え、花の風おそし。(九)かき、晨の霞みどりの衣なり、夕べの雲黄なる錦なり。山邊に冬若く、(一〇)野邊に春老いたり。舞を見る近き(一一)野邊は花を羨み、(一二)琴を聽く遠き(一三)山は雪の峯をうつす。雪の下草(一四)老、霜の(一五)上の菜さかりなり。(一六)梢の綠(一七)ほのかに、紅の梅(一八)さくめり。春の蕨に雪きえ、石の火に氷解く。(一九)時をさとらぬ松、春をかさぬる花、野邊にしづかなる人、山にさわぐ鹿、風になびける枝、雨にしたがふ草、春ををしむ花、夏をもよほす蟲、秋をまつ木の葉、冬をいなぶる鳥、まとゐに足らぬ月を思ひ、おくれ

〔語釋〕
(二)十九夜の月
(九)下の歌によれば、「かきはの梅おとろへ」などとあるべし

〔考異〕
(一)なかばの月ねまちを―なかばねまちの月を
(三)旅には―「は」ナシ
(四)雁の―かりがねの
(五)つらねて―「て」ナシ
(六)わたり―わたらせ
(七)山の―「の」ナシ
(八)見え―いでて
(一〇)野邊に―野邊の
(一一)野邊は花を―野邊若菜を
(一二)琴―曲
(一三)山は―山べには
(一四)老い―生ひ
(一五)上の菜―上の花―上花
(一六)梢―木のめ
(一七)ほのかに―はつかに
(一八)さくめり―すゝめり
(一九)時をさとらぬ―かきはさらぬ

〔語釋〕
(一)「花も」の「も」衍字歟
(五)沈香木にてつくりたる人形
(七)あて宮幼少の中よりの心かけしをいふ
(九)左近少將仲頼、左大臣祐仲の二男
(一〇)面白く思はるゝ

〔考異〕
(二)さへ—ナシ
(三)木草—草木—木山
(四)花—枝
(六)にはゝにも—にはふ野も
(八)著たる子ども—著たるものども—著せたるものども

(一)花も、もえ出づる木の芽などさへ、心ことなる年になん」など宣ふ。あるじの大殿うち笑ひて、正頼「正頼、(二)この宮にまうで侍る年なれば、まさに木草(三)も心づくろひせざらむやは」など宣ふ。かゝる程に兵部卿の親王、おもしろき梅の花(四)を折らせ給ひて、沈(五)の男つくらせ給ひて、花のしづくに濡れたるに、かく書きつけて、あて宮の御許に奉れ給ふ、

兵部　立寄れば梅の花笠(六)にほふにも猶わび人はこゝら濡れけり

さるは、ふた葉にもと思ひ給へつるものを。

とて、奉れ給ふ。(七)あて宮見給ひて、蓑蟲つける花折らせ給ひて、それが下に笠著(八)たる子ども立てて、かく書きつけ給ふ、

あて宮　隠れたるみかさの山の蓑蟲は花のふるをや濡るといふらむ

かくて、御つかさの少将(九)仲頼に宣ふ、正頼「よろづの事、心に(一〇)つく日になむある。たゞにやはあらむ。和歌の題にすべき事、すこし擇り出で給へ」と宣ふ。仲頼、

ちよりはじめ奉りて、山がつ民(一)まで、今日の御供に仕うまつらぬなし。大宮の大路よりくだり給ふ。

かくて御社にまうでつき給ひて、色々のあげばり(二)(三)打ちわたして、御車よりおり給ふ。男君だち著き並み給ひぬ。辰の時ばかりより、神樂(四)はじまりて、巳の時ばかりに果てぬ。舞人に女の裝束一領(五)づつ賜ひ、陪從には、櫻色の綾の細長一かさね、あはせの袴一くだり(六)づつ賜ふ。垣下(七)におはしたる人々に、綾襲の女の裝束一くだりづつ、五位より下は、白きうちはかまをなむ賜ひける。殘る數なくかづきわたるを見れば、花をふき散らしたる樣になむ見えける。

かゝる程に、おとゞ人々に、正頼「あやしく所々見給ふるに、おもしろく興ある所は、この御社になむある。同じき木草(八)のすがた(九)も、此處のは情ありて面白くなむ見ゆる」と宣ふ。兵部卿の宮、「げに然おはします宮なり。この宮に詣で給ふこと、許多なり。そが中にも、今年は歳いそぎて、おそき花疾く咲き、同じく開けたる

〔語釋〕
(二)幄
(七)相伴役

〔考異〕
(一)山がつ民—山がつら
(三)あげばり—あくども
(四)神樂—樂
(五)一領—一よそひ
(六)一くだり—一ぐ
(八)木草の—草木の
(九)すがたも—すがたを

かき君だちよりはじめて、世の中に名高き逸物(一)の者どもをなむ(二)、童陪從にも、殿上童をなむし給ひける(三)。かくて女は、おとな四十人、うなゐ二十人、下づかへ二十人。裝束は、おとな青色の唐衣、童は赤色に綟のうへの(四)袴、下づかへは青丹に柳(五)襲著たり。おとな下づかへ、二十歲のうち、わらは十五歲のうち、童下づかへ、たけ等しくすがた等しく擇びたり。

かくて、二月二十日になむ詣で給ひける。おほん車、絲毛十、檳榔毛十なり。絲毛十には、宮(六)よりはじめ奉りて、女御子たち數多、北の方あなたこなた合せて九所。女御(七)の君は孕み(八)給へれば止り給ふ。おほん裝束(九)、赤色の唐の御衣に羅の摺裳、萌黃色の織物の御小袿奉らせたり。檳榔毛十には、一つに四人づつ乘りて、うなゐはびづら(一〇)結ひて、馬に乘れり。下づかへは、徒步よりあゆむ(一一)。ひすまし(一二)六人、青丹のうへの衣著てあゆみぬ(一三)。おほん車の御前、四位十八人、五位卅人、六位五十人。馬の毛下襲の色とゝのへたり。世の中にありとある上達部、御子た

〔語釋〕
(一)優れたる人物
(六)大宮、正頼の妻
(七)仁壽殿女御、正頼の長女
(九)此裝束誰のか不明也
(一〇)びんづら
(一二)廁の掃除を司る下女

〔考異〕
(二)をなむ―をんな
(三)し給ひける―したりける
(四)うへの―ナシ
(五)青丹に柳―あをにしやなぎ―あをにやなぎ
(八)君は孕み―君子孕み
(一一)あゆむ―あよむ
(一三)あゆみぬ―「ぬ」ナシ

梅の花笠　一名春日詣

梗概

一 朱雀院の御世。正頼一家を擧りて春日の社に詣づ。あて宮社頭にて琴を彈く。忠こそ法師來合せて正頼と往事を語る。忠こそ法師、あて宮に懸想す。二 東宮以下の懸想人たち、歌をあて宮に贈る。三 兼雅、俊蔭女を携へて桂の別邸に蟄居す。仲頼勅書を奉じて、行政、祐澄仲澄を伴ひて桂に赴く。

一 朱雀院の御世。正頼一家を擧りて春日の社に詣づ。あて宮社頭にて琴を彈く。忠こそ法師來合せて正頼と往事を語る。忠こそあて宮に懸想す。

〔語釋〕

(一)嵯峨院
(二)朱雀院
(三)源正頼
(四)「内に」は、内々歟
(五)陪從
(七)大臣上の腹に生れたる正頼の子ども

〔考異〕

(六)かたち―ナシ

かゝる程に年月過ぎて、その時の帝(一)もおり居給ひ、東宮(二)國知り給ひて、年ごろ世中たひらかに、國榮えてあり。かゝる程に左大將(三)の男子女子、源氏におはしませど、母方藤氏におはします、內(四)に御願ありて、春日に神樂奉り給はむとて、いそがせ給ふ。おほん供に仕うまつるべきうなる、下づかへの裝束調ぜさせ、乘尻(五)の雜色よりはじめ、陪從舞人等のさうぞく、臨時の祭のさまなり。萬の事をとゝのへ、人のかたちなどを擇らせ給ふこと限なし。童陪從四十人、かたち(六)を整へ、大人陪從四十人、舞人八十人、はしり馬十疋。舞人は、殿腹(七)の君だち、殿上人、わ

供になむ仕り給へりける(一)。かくて二十七日つとめて、御車寄せて、宮たち、君たちも奉らむ(二)とて並びおはします所に、大宮の御乳母備後守(三)、おとゞの御をば宮の御おとゞ入道殿、例は上に參らぬ人々、かゝる御中に交り居て、「我も昔は男やま(四)。御供に仕まつらむ」と言ひけれど聞き入るゝ人なし(五)。猶物見んと思ふ(六)。かくて御車に皆奉りて引き續きて御座します。御前は、四位、五位、六位、合せて二百人ばかり有りけり(七)。

（語釈）
（二）車に乗らんとて
（三）正頼の祖母なる宮の弟にあたる入道殿か
（四）古今集「今こそあれ我も昔は男山さかゆる時もあり來しものを」
（七）此次に「藤の宴」の巻の第九段の初より第十一段の末まで入るべし

（考異）
（一）給へりける―給はむとしける
（五）なし―なく
（六）思ふ―思へり

正頼 嵯峨の院に、いさゝか若菜參ることあるを、おはせでいと惡しくなむあるべき。勞はらるゝこと物し給ふなるをなむ、いとほしがしがり申し侍るを、（一）けしう物し給はずば、如何に嬉しからむ。正頼が大事と思ふことなり。必ず必ず物し給べくば、いかに嬉しからむ。

少將、御文を見て、驚きながら、苦しき心地を思ひ起して參りたり。明日の御供の事など宣ふ、仲頼「東宮よりも、明日彼の院へ參り給ふべき由、帶刀長正につけて仰せ給へりしかども、日頃惱むこと侍りてえ候ふまじきよし申し侍りにしを、仰せごと畏ければさふらひつる（二）」おとゞ、正頼「然、東宮も參り給ふべきよし仰せられき。（三）御供の人定められなどせしに、長正の朝臣それに加はるべきにと（四）取り申しよかば、（五）知ろしめしたらむ（六）」仲頼、「然らばさふらはむ」おとゞ正頼「さらばいと嬉しき事」と宣ふ。

斯くて、いとになく、遊び人など具して出で給ふ。親王たち、上達部、東宮の御

（語釋）
（一）此句誤りあるべし
（四）仲頼が御供に加はるべき害に申上げたれば
（六）仲頼の參る事は東宮御承知ならん
（考異）
（二）さふらひつる―さふらひつ
（三）東宮―宮
（五）「べきにと」の「と」衍文なるべし

むらずり、檜皮色、櫻がさね、おしなべて賜ふ。斯くしなぐ〳〵に裝束す。舞の師ども容を整へたり(一)。若き人こそあめれ、老いたる(二)人などは、かゝる御いそぎを先とし給ひて、未だ衣(三)も賜はざりければ、世の中にゆゝしく(四)さがなき言をしつゝ、己が樣の怪しきをば知らで、泣き怨み奉れども、今靜にも思して聞き入れ給はで調へ給ふ。御臺ども、折敷などのことすべて何も〳〵、己があたり〳〵(五)、我も我もとし給へば、いみじくめでたし。

遊び人どもなど調へ見させ給ふに、少將仲頼召しに遣はす(六)。宮内卿の殿に、賭弓の饗より歸り給ひて、萬のものの興も覺えで臥せる所に、「大將殿より召あり」といふ時に、仲頼「何事宣はむずるぞ」と問はすれば、使「明日の子の日に、嵯峨の院に參り給ふべき事によりて」と言ふ。少將、仲頼「日頃勞はる所侍りてなむ」とて參らぬ時におとゞ、正頼「口惜しきこと(七)。仲頼、仲忠なき饗は、物にもあらぬものを」とて手づから御文書き給ふ。日頃久しく參り給はぬ由など書きて、

（語釋）
（三）自分等には下されざりしかば
（四）不平を鳴す也
（五）役々

（考異）
（一）を整へたり―よく
（二）老いたる―老いにたる
（六）遣はす―遣はすに
（七）こと―ことかな

かくて、后の宮の賀、(一)正月二十七日に出で來る乙子(二)になむ仕うまつり給ひける。有(三)る限の君だち、男も女も集ひて、仕うまつり給ふ。すべて萬のもの、かねてより設けて、いといみじくになくして參り給ふ。いと珍らしく淸らなる樣にし調へ給ひて、子孫引きつゞきて、絲毛六つ、檳榔毛十四、うなゐ車五つ、下仕車五つしてなむ參り給ひける。御前四位二十人、五位四十人、六位は數知らず。御供、舁の君たち皆おはします。例の遊人たち數をつくして、舞の子ども君たちいとになく裝束きて、いとをかしげなり。御供人あまたなり。絲毛のには、宮、若御子たち六所、二のには女御の君、又次々の君たち、皆組みませて、あまねく奉る。人給には、御方々の御たち四人づゝ乘るべし。大人四十人、童二十人、しもづかへ十人、いとになく裝束してぞありける。大人二十人は、あを色(四)に蘇枋がさね、今二十人はあか色(五)に葡萄染がさね、あやの摺裳(六)。うなゐは、おしなべてあか色(七)に蘇枋がさねの、ろうの上の袴、あや搔練、色は更にも言はず。しもづかへは、例の

㊀ 大宮六十の賀の爲に嵯峨院に參る。仲頼病を押して參列す

〔語釋〕

(二)次の子の日

〔考異〕

(一)后の…給ひける—大將殿には正月廿七日に出て來る乙子になむ嵯峨の院の大后に御賀まゐらせむとし給ひける。

(三)有る限—ありの限

(四)あを色—あか色

(五)あか色—あを色

(六)摺裳—「摺」ナシ

(七)あか色—あを色

〔語釋〕
(一)仲頼の
(二)まろめて
(三)以下仲頼の心
(四)「言はず」なるべし
(五)つまらぬものを見ての義歟
〔考異〕
(六)參らせむ—參らむ

する業なりけり」と言ふ。父主内に入りて、忠保「君は此の頃悩み給ふ事ありけり。何事をか仕らむ。いとほしく」など言ふを、此の女、(一)例ならぬ氣色を見て、いと心憂しと思ひて、前なる硯に手習をして斯く書き付く、

仲頼妻 此世にはつらき心も知りはてぬ契りし後の世をも見てしが

と書きて押しわごみて(二)置いたるを見て哀と思ふ。(三)我が心とも言はじ、(四)あぢきなき(五)を見て、えあるまじきことを思ひて、人にもつらしと思はるゝ事、如何ばかり思ひし人にもあらなくに、と思ふにも哀なりければ、

仲頼 昔より契りしふかき中なれば生も死をもともにこそせめ

猶心地の例ならず悩ましければぞや。御爲に疎なるにはなどてかあらむ」など言ひて諸共に臥しぬ。

【畫詞】此處は母君雉子調じて物參らせむ(六)とて、調じ急ぐ。父主手づから雉子つくる。此處は少將に物參る。女、雉子などあり。

はするに、何業を仕らむ」と言ふ。少將臥し居たり(一)。女來たれば、仲頼「などか(二)今までおはせざりつる」と言へば女、「いさや(三)、思ひしづまり給ふやとて」少將、仲頼「ましておはせぬぞ苦しき。早うおはせよ」と言ひ臥せり。

【畫詞】此處は女もの言ひたり。

つとめて、父主、少將の方にまうで給ひて、忠保「如何にかく籠りおはします。つきなくも思ほさるらむ。忠保志深けれど、いと怪しくのみ侍りて、しるしなき(四)ことを、畏り申し侍り」少將、仲頼「あなかしこ。何か、つきなきことも侍らず。日頃みだり心地の例にも似ず侍れば、内裏にも參らで籠り侍るなり」忠保「などか然はおはしますらむ」少將、仲頼「知らず。此の左大將殿の饗に參りて侍りしに、宮の土器取り給ひて、いみじく強ひ給ひしかば、こよなく(五)食べ醉ひにける名殘にや侍らむ」忠保「いと不便なる事かな。すべて、此の御酒聞召し過ぐる事こそいと惡しきことなれ」少將、仲頼「いかで此の官(六)まかり離れなむ。すゞろなる酒飲は衞府官の

【語釋】
(三)自分が側に居ざりしならば
(四)志の深き驗を見する事叶はざるを
(六)衞府の役人をやめたし

【考異】
(一)臥し居たり—臥いたり
(二)などか—などかは
(五)こよなく—上もなく

〔語釋〕
（一）「天下にいまし」歟
（二）浮氣者の仲賴故見棄つるも當り前とても
（三）祖先より傳はれる寶
（八）仲賴に逢はじと思ひて行かぬ也

〔考異〕
（四）少しき―惜しき
（五）御爲―御時
（六）何事をか―「か」ナシ
（七）歸り來―「來」ナシ

又天下（一）いまし通はず、見倦んじ給ふとも、例のあだ人（二）なればとだに思はせむ、とてこそは此の君を、幾多おやが時の寶（三）、櫛匣の何々も、少しき（四）物なく失ひ、こゝらの年頃地子を待ち使ひつる近江の荘も、此の君の御爲（五）にこそ賣りつれ。斯う惑ひ仕うまつる効ありて、今日今までめぐらひ給ふは、如何に嬉しき事なり。何れの宮、殿ばらにかは、此の君の聟にとられ給はぬ。されど、夜を重ね日を積みて、此の年頃此處に通ひ給ふは、如何に面たゞしき事なり。などかこれを疎にはし給ふ。吾が佛、疎に此の君に思され給ふな」と泣く〳〵宣へば、仲賴妻「いでや、見苦しきものを見給ふれば、生ける効なき心地すれば、見じとてなむ」母、「何事か有る」と言へば、仲賴妻「いさや、何事をか（六）人の言ひけむ。此の賭弓の饗より歸り來（七）にしまゝに、起き臥ししづ心なく思ひ入らるゝ事のあめれば、己が見ま憂く見苦しきを思ふにやあらむと思へば、見えじ（八）とてなむ」母、「知らぬ樣にてまうで給へ」と泣く〳〵言へば、女、母に言はれて、立ちて往く。父主、忠保「君の籠りお

（語釋）
（四）「聞けば」は「聞きて」歟
（五）自分に迷惑がかゝるかも知れぬと
（六）なぜあの女をよしたと人がきけば

（考異）
（一）洗はひ—洗ひ
（二）供人—供の人
（三）さて—ナシ

は、「ともかくも父母は有りや。家所は有りや。洗はひ（一）ほころびはしつべしや。供（二）人に物はくれむや。馬、牛は飼ひてむや」と問ひ聞き、さて、（三）「顏容淸らなりや」など問ひ聞けば、（四）あてにらう〳〵じき人といへど、荒れたる所に幽かなるすまひなどしてさう〴〵しげなるを見ては、あなむくつけ。（五）我がいたづき煩ひとやならん、と思ひ惑ひて、あたりの土をだに踏まず、（六）「などか其の人には棲まぬ」と言へば、「法師籠り居りき。人籠り居りき」など言ひて、あたりにも寄らず。怪しきものの子、孫、顏容鬼の如くして、頭はひた白に、腰は二重なる女なれど、勢有りしものの子どもなりと言ひ、德有りしものの妻ぞなどいふものをば、天下の人もえ聞き過さで、言ひ觸れ惑ふ今の人なれば、かゝる所に、一日片時立ち止る人も有らじと思ひて、多く德有る善き人をも聞き過し、我が子をや、人笑はれに、あはあはしく思はせむ、「其の人棲みしかども、今は來訪らはず」と言はせ奉らじ、とて、幾多聞き過しつれど、然のみ言ひてやあらむ、宿世に任せてこそはあらめ、

〔語釋〕
(二)妻が
(三)妻が父母の方に
(四)仲頼が氣まづく思はぬ筈なし
(六)我等ほどの貧乏人はあるまじきに
(七)仲頼が見なれたれば
(一〇)其方が美しければこそ
(一三)父忠保の
(一四)妻を娶るに方りては

〔考異〕
(一)藻をふきかくる―とをふきかへる―ことをふきかへる
(五)ながらも―「も」ナシ
(八)あさましき―あやしき
(九)一日片時立ち―ナシ
(一一)給へれば―給ひつれば
(一二)給ひなば―給ふなと

といふ時に少將、思ひ亂るゝ心にも、なほ哀に覺えければ、

仲頼　浦風の藻(一)をふきかくる松山もあだし波こそ名をば立つらし

吾が佛」と言ひて泣くをも、我によりて泣くにはあらず、と(二)思ひて、親の方へ去ぬ。

居暮らして、夜も此方(三)に寢なむとすれば母、「などか彼方にはまうで給はで、此處には殿籠る。あなさがな。人は(四)心置きて思さじや。かく、言ひ知らず侘びしと言ひながらも、(五)我等(六)が樣なる人はあらじを、さばかりかしこき(七)宮殿ばらを習ひ給へれば、如何にあさましき所と思ほすらむ。されど、我が子の見る効なくいますがらましかば、かく(八)あさましき所に(九)一日片時立ち止り給ひなましや。(一〇)人と等しく生ひ出で給へればこそ、世の中に名だたり給ひつるあだ人の、此の年頃立ち止り給へれば(一一)、此の君におろかに思はれ給ひ(一二)なば(一三)、主のさばかり思ひいられ仕う奉り給へば、効なくくち惜しとは思ひ給はじや。今の世の男は、先づ(一四)人を得むとて

（語釋）
（一）「いとなん聞えぬ」歟
（七）其方の爲には
（八）「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん」の歌の意

㊅ 仲頼の戀病。忠保の慰藉。妻の嫉妬。父の歎訓

（考異）
（二）今より—今から—今かく
（三）云ふに—「に」ナシ
（四）人々—ナシ
（五）歸りて—「て」ナシ
（六）むかひ居—「居」ナシ

む。となむ聞えぬ」（一）少將、仲頼「今（二）より知り給へかし。聞えさすべきことも有りや」など云（三）ふに、兵部卿の親王出で給ひければ、仲頼「よし。今後に」とて、ふと出でぬ。

【畫詞】此處は大將殿。親王たち、上達部、あるじのおとゞ、（四）人々皆立ち給ひぬ。これは御たち見に出で給へば、少將立ちぬ。

仲頼、歸る空もなくて家に歸りて（五）、五六日頭ももたげで思ひ臥せるに、いとせむ方なく侘しきこと限なし。になくめでたしと思ひし妻も、物とも覺えず、片時も見ねば戀しく悲しく思ひし子どもも、前にむかひ居たれども眼にも立たず、身のならむことも、すべて何事もく〵、萬（六）のこと更に思ほえである時に、仲頼妻「などか常に似ずまめだちたる御氣色なる」と言ふ。少將、仲頼「御爲（七）には、斯くまめにこそ。あだなれとや思す」などいふ氣色常に似ぬ時に、女、「いでや、

仲頼妻あだ（八）ごとは音にぞ聞きし松山や眼に見すく〵も越ゆる浪かな

〔訓釋〕
(一)少將—衍文なるべし
(三)仲賴の心
(四)「せむと」なるべし
(七)以下仲賴の心

〔考異〕
(二)なく—なし
(五)たち—たちも物かづき給ひて
(六)など賜ひて—なんどして
(八)盡してむ我が—盡してむずる
(九)それは—それも

に、今宮と諸共に、母宮の御方へおはする、御後手すがたつき、譬へむ方なし。火影にさへこれはかく見ゆると少將(一)思ふに、ねたきこと限なく(二)、われ(三)何せむに、此の御簾の内を見つらむ、かゝる人を見て、只にて止みなむや、如何樣に(四)せむ、生けるにも死ぬるにもあらぬ心地して、例の遊、將まして心に入れてし居たり。夜更けて上達部、御子たち(五)、物かづき給ひ、一の舍人まで物かづき、祿など(六)賜ひて皆立ち給ひぬ。曙に少將、(七)此の殿を出でむまゝに死ぬる身にてこそあらめ、我がする業とて今日し盡し(八)てむ、我が思ふ人も聞召せと思ひて、無き手を出だし遊びせめて出づ。他人々も出でぬ。仲賴出で果てで立てるを知らで、出づる人を見るとて、御方々の御たち四十人ばかり出でたり。曙にいとをかし。これを見て仲賴、歩み返りて、仲賴「餘所にて見給ふよりは、近くてやは御覽ぜぬ」と言へば、御たち「それ(九)は眼馴れ給ひにたれば」と言ふ。木工の君と云ふが近く立てるを引留めて、仲賴「嬉しき序にも聞ゆるかな。仲賴と知ろし召したりや」木工の君、「誰をか然は聞ゆら

（考異）

（一）少將—中將

（二）二つが間より—二つがひのさまより

著き給ふ。御机参り、土器はじまり、御箸下りぬ。仲頼の主、なき手出だして遊ぶ。垣下には行政、樂所は仲頼、そこらの遊び人どもにます人なく遊ぶ。内裏の御息所よりはじめ奉りて、數多の君だち宮々、數を盡して竝みおはしまして御覽ずるに、こともなき人どもなり。寢殿の南の廂に、四尺の御屛風北に立てて、それに添ひて少將（一）著く。柱に竝びて上達部御子たち著き給ふ。

かくていと面白く遊びのゝしる。仲頼、屛風二つが間（二）より、御簾の内を見入るれば、母屋の東面に、此方彼方の君たち、數をつくして御座しまさふ。何れとなくあたりさへ耀く樣に見ゆるに、魂も消え惑ひて物覺えず。怪しく清らなる顏容かな、と心地そらなり。なほ見れば、有りしよりもいみじくめでたく、あたり光りかがやく樣なる中に、天女降りたる樣なる人あり。仲頼、これは此の世の中に名だたる九の君なるべし、と思ひ寄りて見るに、せむ方なし。限なくめでたく見えし君たち、此の今見ゆるにあはすれば、こよなく見ゆ。仲頼、如何にせむと思ひ惑ふ

あらば棲みなむ。男は、勞はるにもつかぬものぞ」など言ひて、此の女に聟取りつるに、思ふと言へばおろかなり。婚はせし夜よりかい付きて、哀にいみじき契をす。(一)片時外にとまる事なく、稀に内裏に參りては、すなはち急ぎまかでつゝ、例ありしやうに宮仕もせず、限りなく思ふ。(二)他人の、めでたき裝束し、沈、麝香にしめてしつらひ、めでたくてあるをば、鬼、獸の住まふ山にまじりたる心地して、只此の女世になきものと思ふ。げにめでたきこと限なし。仲頼「此の世に經む限は、さらにも言はず、後の世にも、(三)かゝる中に生まれかへらむ」などさへ言ひ契りて五六年あり經。

畫詞　此處は宮内卿殿。女、少將の君だち三人。(四)父主母君、(五)かたち人と物語してあり。

かゝる程に、正月十八日の賭弓の節に、(六)左方勝ちにければ、左大將殿に、つかさの佐たち、上達部、親王たち、左右とおはしたり。設になくせられたれば、座に

(語釋)
(一)仲頼の此娘を愛すること言語道斷なり
(二)忠保の女以外の女の
(三)再び夫婦と生れかはらん

(考異)
(四)の君だち三人—の子二人—御たち二人
(五)母君—母この
(六)左方勝ちにければ—左かちければ

● 正月十八日の賭弓の節。仲頼あて宮を見て心を惑はす

しき戯れ人にてありける中に、仲頼は、院(一)の帝の三(二)の宮聟取り給へど取られず。銀、黄金、綾錦をも、物とも思へらず、怪しく類なきすきものにて、天女(三)降り給ふらむ世にや、我が妻子の出で來む、天の下には、我が妻子にすべき人無し、となむ思へりける。さて、浮きてのみありけるに、宮内卿在原忠保の女を、世の中に名高く聞ゆる有りけり。其の父主(四)、もとより勢なくわろき人の、無徳なる官にて、年頃經ければ、宮内卿いとわろきに、此の女斯くめでたう、東宮にも「參らせよ」など宣はすれど、え宮仕などにも出ださずなどしてありけるに、此の仲頼の少將、切によばふ。そのかみ父主、忠保「かゝる戯れ人と名はふるとも、我が女(五)につきて世を盡(六)さむとも知らず。宿世をも見む。たとへ棲まず(七)と云ふとも、我のみかゝる恥を見ばこそあらめ。(八)院の帝の三の宮、大臣、公卿の御女も、さこそ捨てられため(九)るを見つゝ、こゝらの人の聟にとり給ふも、樣あらん。天下(一〇)綾錦を敷きて飾るとも棲まずば棲まじ。我が此の蓬の下、藜芥の中(一一)に住むとも、宿世の

〔語釈〕
(一)(二)今兼雅の持物たる嵯峨の院の女三宮、こゝは前の事をいへる也
(三)仲頼の心
(五)我が女を妻にして一生を終るやも知れず
(七)通はぬ棲になりたればとて
(一〇)「天下に綾錦」歟

〔考異〕
(一)院の帝の―帝の―天下―の
(四)父主―「父」ナシ
(六)盡さむ―すぐさむ
(八)院―一の院
(九)ためるを―ためれさるを
(一一)中に―下に

畫詞　宮かづけもの裁ちて配らせ給ふ。人々縫ふ。饗のまうけ政所にす。おとゞ、宮、物語し給ふ。

かくて右近少將源(一)仲頼は、左大臣祐仲の大殿の二郎なり。此の少將、此の世の中に、めでたき物に言はれけり。穴あるものは吹き、緒あるものは彈き、萬の舞數を盡して、すべて(二)千種の業、世のつねにすぐれ(三)、容貌もいとこともなく(四)、世の中の色好になむありける。萬のこと(五)、この人の手かけぬはいと惡し。帝と東宮にもいとになく思す。御笛の師なれば、常にさふらふ。いとかしこく時めきて、只今の殿上人の中に、仲頼、行政、仲忠、仲澄に優る人は無し。此の四人が願ひ申さむ官は、年に五度六度も賜ひなむ、となむ思しける。(六)左大將殿の君だちも、御(七)息所只今の時のさかりにておはしませば、其の御ゆかりよするを(八)ば、我が御位をも讓りてむ、と思せど、なほ其の中に、(九)藤侍從仲忠、いみじき時の人なりければ、萬の人、樓まずとは知りながら(一〇)、聟取り給へど、夜を重ね給ひてとぶらふなし。怪

(語釋)
(六)正頼の娘たち
● 源仲頼の素性、宮内卿在原忠保の聟になる
(七)仁壽殿女御
(八)「よする」は「よすが」なるべし
(九)「藤侍從仲忠」は「源少將仲頼」なるべし
(一〇)聟にならぬは合點で居ながら

(考異)
(一)源—ナシ
(二)すべて—ナシ
(三)すぐれ—す
(四)なく—なし
(五)こと—ことふえ

〔語釈〕
(一)歳暮の魂祭りの用意
(二)正頼
(四)此處誤脱あるべし
(五)「ひだりは」歟
(六)俊蔭女

(二十) 新年。正頼邸の賭弓の饗の準備

〔考異〕
(三)おとゞを―「を」ナシ
(七)など―ナシ

ろを御覧じて居給へり。御たちいと多くさふらふ。此處は政所。料くばり、御(一)魂のいそぎす。松木、炭、餅など有り。宮、朔日のいそぎし給ふ。

かくて年越えて朔日に、君だち御装束いとめでたくして、おとゞを(二)(三)拜み奉りに參り給へり。いと嚴めし。東のおとゞに、君だちも參り給へり。

畫詞 君だちに(四)參りたり。中のおとゞより東のおとゞに移り給ふ。うなる二人、御几帳さしたり。御たち二十人ばかり。これはおとゞの御聟の君だちなどに、節供參り、おほ御酒參り、いみじくす。

かくて賭弓にみぎりは(五)饗すべし、とて心まうけすべき聞え宣ふを、正頼「いかで心ことにせむ。去年の還饗を右大將のいと淸げにし給へりしかな。三條こそ、怪しう心有るべき人なれ。此の侍從の母よりめでたきなども(六)なしや」宮、大宮「然らむかし。まさに仲忠が母にて右大將の持たまへらむ人、(七)おほろけならむやは」と宣ひて、かづけ物の急ぎし給ふ。

〔新釋〕
（一）誤脱あるべし

何ならむ御心の付きまさる思さるゝこと、誰も誰も劣らず。霜のいと白き朝に、

平中納言殿より、

正明　思う給へ懲りぬべき御氣色は、（一）いと能く見給へ知りながらなむ。

ひとりのみ夜な〱霜の寒きにはしのぶの草も生ひずやあるらむ

かく聞えさするこそいとおふけなけれ。此度も覺束なく。

と聞え給へど御返りなし。

源宰相殿より、

實忠　朝な〱袖の氷のとけぬかな夜な〱結ぶ人はなけれど

いとこそ怪しけれ。

と聞え給へれど、御返りなし。

かくて晦日に、國々より節料いと多く奉りたり。

〔書詞〕これは中のおとゞに、君だちおはしまして、雪の梅の木に降り懸りた

〔語釋〕
（一）未詳
（二）食事
〔考異〕
（三）此處は一ナシ

㊀ 正明、實忠、歌をあて宮に贈る

かくて三日と云ふ午の時に、結願して、大徳たち御布施に、白絹十疋ともに行ふ。夜さりは御佛名せらるれば未だ歸らず。

畫詞 これは東の中あけて、君だち物見給ふ。夜さりの料に、花造らる。いと多かり。方々君たちは、（一）おひものし給ふとて、急ぎ給ふ。殿も、になく急ぎ給ふ。此處は中のおとゞ。宮導師のかづけ物かづけ給ふ。御たちいと多かり。導師の前の物、政所急ぐ。人々多かり。大徳たちの（二）非時、近江守、いと嚴めしうしたり。皆配る。導師の前の物ども、いと多かり。（三）此處は佛名の所。大徳たち次第してひき率て、七八人參る。導師請じて事はじむ。次第司ども、例の仲忠、行政、仲頼。おとゞの御子の君だち、御子ども、いと多くおはします。さふらひ人いと多かり。

御佛名はてて、晦日になりぬれば、正月の御裝束いそぎ給ふ。

かゝる程に此の九の君聞え給ふ人々は、おぢきなく年の還るをも苦しと思ひ、如

（語釋）
（一）誤脱あるべし、或は「さうふ三ともをくる」に作る
（四）「ふとめ」歟

（校異）
（二）まんぞく―まんまく
（三）居立ち―居たり
（五）此處は―此處には
（六）所には―所は
（七）仲忠―ナシ
（八）夜は近江守―夜の非時は守

限り、さうふみども（一）おくる。

かくて、陸奥守種實がもとより、錢まんぞく（二）奉れり。米は西の御倉に三百石積まれたり。おろして使はる。倉は四つを、三つには米ども、一つには金など積まれたり。君たちなんども、互になししつらひ給ふ。中のおとゞ、東の方をなむ御堂にしたりける。僧綱の方は、君だちしつらひ給ふ。然らぬは、さふらひの男ども仕るものの中に、便ある所をなむ、僧坊にしける。十二日より御讀經始む。

［畫詞］此處には政所。中務丞良則居て、御讀經の僧具のこと行ふ。家司ども居立ち（三）、納殿より、細布、さとめ（四）、紫、海苔など出だす。僧坊ども、弟子、童子などいと多かり。此處は（五）臺盤立てて据ゑたり。中のおとゞ、御讀經の所には（六）、花机に經ども積みたり。大德たちに經配る。經讀む禪師たち有り。此處に人々、仲頼、行政、仲忠（七）、右近少將二人、受領どもなど、數知らず多かり。堂童子は、初めの夜は近江守（八）、次の夜のものは攝津守。

〔語釋〕
(一)實正
(二)「いへあこ君」なるべし。正頼の末子
(三)誤あるべし
(四)未詳
(五)此處誤脫あるべし

(大) 歳末の御讀經

かくて十一月より、民部卿殿の御方(一)に、舞の師すゑて、君だちに舞習はせ給ふ。宮あこ君落蹲、(二)いちあこ君陵王、若御子採桑老、大殿の小君萬歳樂、辨の君の御子扶桑樂など舞ひ給ふ。舞の師秀遠、兵衛日遠忠など言ふ逸物の限、いと多かり。

畫詞　此處は民部卿の殿の御きたの方。御たち騷ぐ。君だち物參る。舞の師ども物食ふ。君だちの御裝束せさせ給ふ。此處は右のおとゞの御方。御折敷のこと、銀の折敷二十、(三)中のたいすゑ竝むべき事、などかねてより設けられたる物なれば、いと嚴めしく淸らなり。右のおとゞ、人々多くさふらふ。此處にて御臺調ずる事定め給ふ。銀の鍛冶召して、御抔ども、(四)かうともの仰せ給ふ。折敷どもの事など。

かゝる程に月立ちて、中の十日ばかりに、年の終の御讀經せさせたまふ。大般若經三日、禪師たち二十人ばかりして結願の夜御佛名、今日は比叡の座主只今の逸物をなむ、(五)讀經の禪師たちも、僧綱たちも、比叡の、奈良の東大寺、やむごとなき

〔語釋〕
(一)忠澄なるべし
(二)言ひ付けたり
(三)君は
(五)正賴の末子
(六)威儀納めの饗應歟
(七)正賴七女の夫藤原忠俊
(八)大宮
(九)「西のおとゞにも」歟、東の大殿は仁壽殿の皇子たちの御殿也
(一一)「大殿の」の「の」衍文なるべし
(一二)未詳

〔考異〕
(四)給へば—「ば」ナシ
(一〇)縫ふ—縫ひ

七人は、殿の君だち、二所はおはしましなむ。實正が童、大臣殿の小君、又辨の(一)君など、此の御中より舞ひ給ひなむ。他事どもも、有べからむことは仕うまつらむかし」など申し給ふ。おとゞ、正賴「みな人々に事一つづつをなむ聞えたる。(二)御方(三)には、此の舞の童べとゝのへ給へば、(四)此の宮あこまろに舞習はすべき事などをせさせ給へ」民部卿、實正「宮あこ君は落蹲(五)を舞ひ給はむなむよかんめる。今、舞の師召して仰せ宣はむ」と聞え給ふ。右のおとゞには(六)いきをさめのおものの事聞え給ふ。(七)左衛門尉の君には、御箱どもなどの事一つづつ聞えつけ給へり。

かくて宮には、(八)御衣ども、かづけ物裁ち縫はせ給ひ、いと畏くいそぎ給ふ。君だちの御衣ども、人々の裝束どもなど、中のおとゞ、(九)東のおとゞにも物配り給ふ。

畫詞　御たちいと多く居て縫ふ。(一〇)染物す。大貳のもとより、綾三十疋持て来たり。(一一)大殿の御子どもの君だちに物聞え給ふ。美濃より絹六十疋、丹後よりこ(一二)うちきぬ百疋。

〔頭注〕
(一)先の長き事はまづ後廻しにせんと思ふといふ事歟
(三)長子忠澄
(四)此處誤脱あるべし
(五)大宮をいふ
(六)六十賀の事
(八)六十に滿つる
(九)大宮に此位の事に心配させぬをせめての罪ほろぼしにせんと思ふ
(一〇)さだまさ—實正なるべし

〔考異〕
(二)思ふぞ—「ぞ」ナシ
(七)まだ—ナシ
(一一)仕りぬべきに持て—仕るべきに

と共にせさせ奉りて、此の事の心もとなきこと」などいとよく畏まり申し給ふ。宮、大宮「何か、具せぬ事も多くもなしや。いかゞ、多く急ぎをのみせらるれば、(一)長閑きことはと思ふぞ(二)かし」など聞え給ふ。かくておとゞ、例の(三)左大辨の君、御子の君たち御座します。正頼「(四)此處に此の早うよりと申す事の、此の物し給ふ人(五)の、年頃歎き申し給ふ事(六)を、正頼世とともに怪しからぬ饗などし給へる内に、え(七)まだ物せで、今に不用なること多くなどして、來年足り(八)給ふ年なるを、若菜など調じて、御子日に參らせむと物せらるゝを、其の事もいかゞ物すべき。又舞の童べのこと、如何に定められけむや。正頼が數にも侍らぬ身にて、かゝる御中らひにまじり侍る罪代には、(九)かくばかりの事を思はせ奉らぬをだにとぞ思ひ給ふる。いとほしくなむ」と宣ふ。民部卿、實正「げに然思さるべき事なり。舞の童のことは、(一〇)さだまさが承りにし事なれば、(一一)仕りぬべきに、持て侍るもの十四人ばかりは、樣々に從ひて仕らせよと、皆仰せ侍りぬ。今六

ば、「常に參る。怪しく己が參らぬ事。世の中の常ならぬうちに、かく行く(二)先も少なくなりぬる心地(一)するに、若き人々も見まほしきこと」など宣ふなるを、げにいとあさましう參らねば、然も思すらむ。いかで此の、己が思ふ(三)事して、此の子ども率て參らむ」おとゞ、正頼「いと(四)易き事にこそあれ。來年こそは仕り給ふべき年なれば、御子日(五)がてら(六)參り給へかし」宮、大宮「いとよき事なり。事どもは皆具しにたんめるを、只かづけ物、法服(七)どもの事なむ未しき」正頼「かづけ物は何かは。俄にもせられなむ。先づ御精進(八)のことをせさせ給ひて、其の法服などの事は夏秋(九)がたもし給へ」宮、大宮「さらば、何かは、御前の折敷の事、さては餌の童べなど調へさせ給へ」おとゞ、正頼「御前の事は、大殿(一〇)にこそは聞えつけたれ。又餌の童べの事は民部卿(一一)に申しつけたる、自から事はじむと見給はど、急き(一二)給ひてむ。正頼が侍る効なく、いかで(一三)、と思さるゝ事の、いと怪しき。かねてより一つの事も缺かずして、只年のかへらば候はせ奉らむ、とこそ思ひしか。己が(一四)急ぎをのみ世

(語釋)

(一)以下兵部卿の宮の語りたる大后の詞也。上よりのつゞきわるし

(三)賀の祝の事

(五)子日の祝をかねて

(七)賀の祝には法會を行ふ故法師に布施すべき法服を要する也

(八)當日の馳走の事

(九)巨勢氏曰、此御賀は翌年の春なれば「夏秋方もし給へ」の詞は衍文なるべし

(一〇)正頼の妻大臣上

(一一)正頼の三女の夫源實正

(一三)なぜ斯く行居かぬならんと

(一四)我が勝手なる事にのみ其方を使ひて

(考異)

(二)かく―ナシ

(四)いと…あれ―何かは事どもは皆具しにためるを

(六)がてら―がてらも―がてらにも

(一二)給ひてむ―給はむ

誰と聞ゆるぞ。仲忠こそ只今死ぬ(一)べけれ」仲澄「などか命短くは。琴彈きつるは、仲澄が妹の九に當り給ふなり」仲忠、「いと有り難き御琴の聲をも仄かに承りぬるかな。あな侘し。如何樣にせむ」など言ふ。侍從、仲澄「いでや、君の耳とゞめ給ふばかりはえしもやは」など言ふ。仲忠、「辛うなむ、只今一二(二)のひき給ふと思ひさふらひつる。されど、いと哀に今めける御ことありけるものを」など言ひて思ふこといと限なくなりぬ。

〔畫詞〕此處は中の大殿に、君だち、東(三)のおとゞのきみ、御たち。侍從の曹司に侍從物語す。

かくて此の君たちの母宮(四)は、年頃母后(五)の御六十(六)賀(七)仕り給はむと思して、かねてより御設けせさせ給ふ。御厨子(八)、御屏風(九)よりはじめて、うるはしき御調度どもを、綾錦にしかへして、大殿に聞え給ふ、大宮「明けむ年六十になり給ふ年なるを、仕う奉らむと思す。兵部卿の宮に對面して、「嵯峨の院へやまゐり給ふ」と聞えしか

〔語釋〕
(一)かの琴の音に見ぬ戀にあこがれて
(二)一二なし。此處誤脫あるべし
(三)誤脫あるべし
(四)正賴の妻大宮
(五)嵯峨院の大后

〔字異〕
(六)六十―ナシ
(七)仕り給はむ―仕らむ

〔意〕大宮、母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備
(八)御厨子―ナシ
(九)より…大殿に聞え給ふ―の事などし給ひて御年の足り給ふに

〔語釋〕
（五）仲忠
（六）仲澄、「侍從の君の御曹司に」なるべし

〔考異〕
（一）わたりがたきものは—わたりがたくかきがたきものは—わたりがたきかきものは
（二）唯冬毛なりや—たゞ毛ゆふことなり—毛ゆふことなり

（評）仲忠の純情切なり

（三）難波…ぞや—ひとりあらすのみや
（四）の夜や—ナシ

なむ侍る」正頼「いで仕うまつれ」行政「わたりがたきものは、（一）唯冬毛なりや」（二）正頼「仲忠の朝臣何の才か侍る」仲忠「和歌のさえなむ侍る。（三）難波津にやある。冬籠りのころぞや」正頼「仲澄何のさえか侍る」仲澄「渡守のさえなむ侍る。あな風早の夜や」（四）とてかづきわたり皆入りぬ。

[畫詞] 寢殿に君だちおはしまして、物見給ふ。親王たち、上達部、御酒いみじう進みて、人々いと多かり。才の男に、君たち、御衣ぬぎて皆々かづけ給ふ。遊び女ども二十人ばかり、いとになく裝束きて琴彈き遊ぶ。

かくて皆こと果てて、召人どもまかで、上達部まかで給ひて、（五）藤侍從、殿の侍從の君、御曹司に籠り臥し給ひて、仲忠「御前にて、兵部卿の親王の強ひ給へるに、（六）更にすべて物も覺えず、食べ醉ひにけりや」など言ひて仲忠、「いと物覺えずなりにけり、聞えむこと咎め給ふな」源侍從、仲澄「今宵の事、誰もえ咎め給はじ。神も咎め給はずや醉の言をば」など言へば仲忠、「此の曉に、内に琴遊ばしつるは、

きこと限なし。かゝる程に侍從仲忠、いとになく裝束きて、夜打ち更けて出で來たり。あるじのおとゞ、正頼「なほ此處に」とて御前に呼びすゑて、正頼「今宵、(一)彼の御德の嬉しさは、主のおはしたるなり。彼のごて物は、今宵神業にもあるを、今一度彼の物の聲聞かせ給へらば、只今も奉りてむかし」(二)など歎き給ひて、御琴取う出て、切に彈かせ給へども、更に手も觸れず。内に見給ふ君だちなども、多くの人の中に心憎くふかき勞なりと見給ふ。

斯うて、御神子など舞ひ果てて、才どもに、心々にほそなが一襲、はかま一具づつかづけ、物のふしどもに皆物かづけなどして、唯の遊びの人々いと二なく遊ぶ。仲忠簫の笛、行政たゞの笛、仲頼箏、あるじのおとゞ倭琴、右大將琵琶、兵部卿の親王箏の琴、同じ聲に調べていと二なく遊び給ふ。かくて皆才名のりなどす。(三)あるじのおとゞ、正頼「仲頼朝臣何の才か侍る」仲頼「山伏の才なむ侍る」正頼「いで仕うまつれ」「いまつらさのかや又」(四)正頼「行政朝臣何の才か侍る」行政「筆結の才

〔語釋〕
(一)あて宮のおかげ
(二)「ごて」は襲のかけ物なりあて宮を我ひきたる代りに與へんといひしをかく言へる也
(三)各自に藝能を言ひ立てて其の儀をして遊ぶ當時の戲れなるべし

〔分段〕
(四)いまつらさのかや又—いまつらさのかやみ—まつらさのかや又—まつくさのかや又

て参らむ。御子たちは、常に参らむと聞え給ふめり」など聞え給ふ。親王、兵部「人人、(一)宮の雪の(二)賀し給ひしに参りて侍りしかば、御物語の序に、こゝにある(三)人どもの事宜ひて(四)、「如何にぞや。殿には参るや。怪しく、大將に申す事の有るを、能く聞(五)き忍び給ふかな。其の由は、御方には(六)聞えさせ給ひてむや」と宣はせしかば、「何かは。承りて」など聞えさせしを、「かく事の由は委しくはあらで、只彼處に聞ゆる事有るを、さは知り給へりや。御心留め給へ」となむ有りし。聞えさせずも有りけるを、何事ならむ」と聞え給へば宮知らず顔に、大宮「知らず。何事にかあらむ。承りけむ人は、忘れやしにけむ」と聞え給へば、兵部「言(八)はで思すにやあらむ。御心にこそは定(七)め給はめ」など聞え給ふ。序にや思ふ事をほのめかし聞えましと思ほしけれど、有るまじきことを思しかへして、兵部「さるは、聞えさせむと思ひつ(一〇)る事有りつれど、只今忘れぬ(九)。よし、殊更に(一一)を」と聞え給ひて立ち給ひぬ。

かくて夜更けもて行くまゝに、歌唄ひ物の音聲どもいと豐かに出で來て高く面白

〔語釋〕
(一)正賴の子どもは嵯峨院へ行きたがり居る由也
(二)宮は東宮をいふなるべし。下の趣すべて東宮の事と聞えたり。
(三)「こゝに」は「こゝろ」の誤なるべし
(五)正賴方で握りつぶして居る事歟
(七)正賴
(八)正賴が考へ中なのかも知れぬ
(一一)又わざ〳〵申上ぐべし

〔考異〕
(四)事宜ひて—事など宣ひ出でて
(六)には—「は」ナシ
(九)ことを—こととを
(一〇)思ひつる—思へる

〔語釋〕
(二)大宮
(四)民部卿宮の御方なるべし。正賴の五女
(六)嵯峨院の大后宮
(九)大宮等の噂を
(一〇)「宮にも」なるべし、宮は大宮

〔考異〕
(一)あこ宮—中將君
(三)東の…よそひて—中のおとゞにて
(五)なくて—なくてぞ
(七)一日も—「も」ナシ
(八)御事もおはしまさゞりき—御事にもあらざりけれ
(一一)御世も—わが
(一二)短き心地するを—短くなりたるを

など唄ふ程に、兵部卿の宮、あこ宮(一)して、宮(二)に御消息聞え奉れ給ふれば、東(三)の寶子に御座よそひて對面し給へり。兵部卿の親王、「月頃、時々式部卿の宮の御方(四)に參れど、折なくて(五)、御消息も聞えさせぬを、今宵松方、時蔭が聲は、必ず聞召すらむを、此處にも近くさふらふを、かゝる序にとてなむ」宮、大宮「此處にもおはします時も有りと承れど、心あわたゞしくなんど侍りて、え聞えで、月頃にもなりにけり。如何にぞ、嵯峨の院へは參り給ふや。上(六)惱み給ふと承りしを、如何におはしますらむ。えこそ參らね。そこはかとなくあわたゞしくて、萬の事怠りぬれば」など聞え給へば親王、兵部「一日も(七)參りたりき。異なる御事(八)もおはしまさゞりき。例の御熱のおこり給へるなるけり。さて御上(九)どもをなむ宣はせし。「東宮(一〇)にも大將殿にも久しく對面せぬ事。彼の御子たち、若き人たちも見てしがな。御世(一一)も行く先短き心地するを(一二)」などなむいと心すごげに宣ふめりし」宮、大宮「いと醜き人どもなれば、御覽ぜむから御心劣りやせむと、恥かしくてなむ。今さりとも率

歸り給ふ。御神子(一)四人下りたり。池山もいと面白し。上達部御子(二)たち、右のおとど、左大將(三)、式部卿(四)、左衞門督、平中納言、源宰相、御子たちは例の兵部卿、中務の親王など多く御座します。例の仲賴、行政、仲忠、例よりもいとめでたく裝束きて、心遣ひして出で來たり。かくて皆こと始まりぬ。四五人(五)女君だち、女宮(六)よりはじめ奉りて、方々の君だち五人集ひおはします。方々の御子達八十人ばかり童(七)二十人ばかり、下仕さばかり、南の庇に客人、御たち、簀子に仲賴、行政、仲忠、殿のしようたち(八)、さながら此處に火焚きをり。さへのあく(九)、つくゐなどして、物のふけしどもあなたの事(一〇)言ふ。召人二十人ながら歌唄ふ。(一一)

(一二)榊葉の香をかぐはしみとめ來れば八十氏人ぞまとゐせりける

優婆塞が行ふ山の椎がもとあなそば〳〵しとこにしあらねば

やひらでを手に取りもちてさよ深く我がをりて來る榊葉の枝

やまふかく我がをりて來る榊葉は神の御前にかれせざらなむ

㊀ 神樂の當日。兵部卿親王、東宮のあて宮に懸心なる趣を傳ふ。宴會

〔語釋〕

（一）此の處文つゞかず。誤脫あるべし

（二）「御子たち」衍文なるべし

（三）左大將は右大將なるべし　右大將は兼雅

（四）式部卿は民部卿なるべし　民部卿は實正

（五）「四五人」衍文なるべし

（六）大宮

（八）未詳

（九）誤脫あるべし

（一〇）誤あるべし

（一二）神樂歌なり

〔校異〕

（七）童―どう女

（一一）二十人―三十人歟

〔語釈〕
（一）正頼
（二）「ほう」は報にて回答なるべし
（三）正頼の妻
（四）右兵衛佐師澄。正頼の二男
（七）巫

〔考異〕
（五）三十人—二十人
（六）御くろ—御かつら—御かぐら—御かつ
（八）四人—二人

少将良則才のめぐらし文あるかせて奉る。左大辨の君に奉り、おとゞの君（一）に奉る。正頼「これは、やむごとなき人々（二）ほうし給ふめり。祿など清らかにせさせ給へ」と申し給ふに宮（三）、大宮「いさや、常にせらるゝ事なれば、眼馴れて何事の清らをかせむ」など聞え給ひて、すけ（四）の君して、伊勢守に絹召しに遣はす。白絹三十匹奉れり。召人（五）三十人がほそなが一襲、はかま一具づつなむ設けられける。

〔畫詞〕辨の君、御たち物裁ち、染物せらるゝ。おとゞ、宮おはします。伊勢より絹持て參れり。政所に薬盤などさす。山より榊持て參れり。御神樂の日騒がしかるべしとて、十一日良き日なれば、御くう（六）參るとて政所のよしる。

御神樂の日になりて、多くの幄ども打ちて、寢殿の御前にになく設けたり。日暮れて、才ども數をつくして參り、御神子（七）四人（八）さふらふ。おとゞ宮河原へ出で給ふ。御供に男君たち四位、五位、六位、合せて八十人ばかり仕うまつる。黄金造りの御車二つ、人給の御車五つして出で給ふ。御車皆寄せ騒ぐ。河原より暗く

〔語釋〕
(一)近衛の舍人の東遊に達したるものをいふ
(五)「神祭らせなど」歟
(八)「かくれず」は「かかれず」歟

〔考異〕
(二)相撲人などの―相撲人の
(三)事は―事はた
(四)こそは―「は」ナシ
(六)その―所の
(七)ひるの―ナシ

に皆廻文を作りて遣はさむ」とて、良則此の御神樂の事、才どもの饗の事、又祿ども、物のふし(一)、舍人ども、此の祿賜ふべき布の事など定め給ふ。忠遠「布は、甲斐、武藏より持てまうで來たりしを、還饗の祿、相撲人など(二)の祿にみな給びてき。只、信濃の御牧より持て來ためる二百反、上野の布三百反なむ、政所にさふらふ。それをこそはせしめ給はめ。御饗の事は(三)、美作より米二百石奉りためり。伊豫の御封の物御莊のものも、持てまうで來ためれば、それ等してこそは(四)仕うまつらすべかめれ。さて殿のうちのかみまいらせ(五)などし給ふ事、此の御神樂の時こそはせしめ給はめ。その(六)事ども、いと畏くせらるゝ業に侍るめり。それも、此の御神樂のひるの(七)事にせよとなむ仰せられつる。ことごとには、此の事、朝臣と少將と諸心に、ことかくれず(八)扱ひものせられよ」と言ひ置きて立ち給ひぬ。

【畫詞】此處は政所。辨の君、めぐらし文作りて才ども召し集む。米いと多く持ちて集れり。

〔語釈〕
(一)「これら」は「こゝら」歟
(四)少將の下「良則」を落せるか

〔考異〕
(二)にしあひて—いかにしあひて
(三)才…撰びて—召人なども撰びてその行事は心とめて
(五)近治—はるちか

度の神樂は極月すべき度なるを、少しよろしくせむとなむ思ふ」辨の君、忠遠「かゝる事は始むる時はいと厳めしくはせで、後々優るなどなむ申すこと侍る」おとゞ、正頼「なほこれら(一)上達部にしあひ(二)て見給ふに、いと物はかなくて物しからむ。才ど(三)も聲よろしからむなど撰びて物せられよ」と宣ふ。辨の君、政所に就きて、家司どもに、此の事仰せ給ふ。忠遠「御神樂十三日せらるべき事仰せらるゝを、「人々の見る所も有るを、同じくば少しよろしくせむ」となむ仰せらるゝ事あめる。左近の頭の少將(四)、又此の少將滋野和政、政所の別當に定め申す。只今内裏の御神樂の召人は、左近尉松方、左兵衛尉時蔭、右近尉平維則、左衛門尉藤原師直、平維輔、宮内少輔源直松、右衛門輔藤原遠正、内藏允平忠遠、内舍人行忠、通忠、雅樂の允楠武、むらきん、小松俊康、近治(五)、大和介直明、信濃介兼幹など、すべて三十人の者どもこそは、只今の進物には侍るなれ。これ等は、内裏の召ならでは、たはやすくまかり歩かず。さりとも、殿の召には參りなむ。それ

へ。されど一日も、いかで人參らせむとなむ宣ふなりし」仁壽「かく思すにこそ有りけれ、「我がもとに若き人のなき事。(一)いかでよき人もがな」と宣ひしは。早う參らせ給へ。人は數多有れど、かゝる交らひはあぢきなきものなり。只今は、内裏にも如何多くさふらひ給ふ。されどまうのほり給ふは、一人二人こそあれ。なほこそ物せらるめれ。それにはな思し障りそ(二)」など宣ふに、(三)宮は此の宮の御弟なり。宮、大宮「いさや。らうたしと思ふものを、若し如何ならむ、(四)と思ふぞ恐ろしきや。御許にもあえものには怪しうはあらじかし」仁壽「あなゆゝしや」など笑ひ給ふ。宮、東(五)のおとゞに渡り給ふとて、大宮「此方に、人々いさとく(六)さふらへ」と宣ひ置きて渡り給ひぬ。

［畫詞］此處は君だち物きこし召す。宮東のおとゞに渡り給ふ。御たちいと多かり。うなゐ四人、御几帳さしたり。方々より皆物參りたり。

かくて十一月になりて、御神樂し給ふべき設し給ふ。おとゞ(七)右大辨の君に、(八)正頼「此

(語釈)
(一)新に御妾を納れたしと東宮が
(二)帝の寢御に侍するは
(三)「宮は此の宮の御弟なり」は傍註の攙入せなるべし
(四)東宮に差上げての結果如何と
(五)仁壽殿腹の皇子等の殿
(六)目さとく
(七)正頼
(八)「左大辨」なるべし　長子忠澄
● 正頼邸の神樂の準備

たり。おとゞにも參る。臺いと多かり。

御物語の序に御息所、仁壽(二)「宮いと良き程になり給ひぬめるを、などか心もとなげにては」宮(一)、「それをなむ思ひ侍りつる(三)。如何はすべき。宣へかし(四)」御息所、仁壽「げに斯樣の生女(五)こそは、物たばかりはすめれ。たばかり聞えてむや(六)」などて笑ひ給ふ。

女御、仁壽「まめやかには、早うともかくも宜しき樣に物し給へ」宮、大宮「いさや、所狹きまで多かれば(七)、あわてぬや。一日(八)おとゞの宣ひしは、「東宮なむ、いとまめやかに、これをだに忘るなと宣ふを、如何にせまし」と宣ふを、何かはと思へど、やんごとなき人(九)多くさふらひ給ふなる宮なれば、此の人たちの果敢なくて交らひ給はむに、如何ならむと思へば、未だともかくも思ひ(一〇)定め(一一)でなむ」御息所、仁壽「いと良き事なり。さ思したれば、只今は此の宮にこそは、(一二)良き人と有る限は參り給はむ。只今は(一三)宮のみこそは時(一四)ことにおはしませ、それを離ちてはけしうはなかるべし」大宮「あぢきなし。數多有れど大殿(一五)などこそは少しやんごとなくては物し給

〔語釈〕
(一)あて宮をいふ
(五)女御自らをいふ
(六)「などとて」なるべし
(七)申込が餘り多き故
(一〇)あて宮をいふ
(一三)嵯峨院の第四の皇女を云ふなるべし。承香殿といふ
(一四)羽振よく
(一五)左大臣季明をいふ歟

〔考異〕
(二)の序に—し給ふついでに
(三)侍りつる—侍る
(四)御息所…てむや—女御の君生をうなこそさやうのことはすれたばかり聞えむかし
(八)おとゞ—君
(九)人多く—人いと多く
(一一)思ひ—ナシ
(一二)良き—ナシ

〔語釋〕
(一)女御の御殿
(四)今度は內裏に大分長く居られし事を
(七)懷胎か
(八)「御息所」は—「女御」のあやまりか
(一三)仁壽殿女御

〔考異〕
(二)其方…給へつれ—そこにまうでむとこそしつれ
(三)來むと—さふらはむと
(五)覺束なき事がち—そが覺束なさ
(六)辛う—辛く
(九)いさや—しらず
(一〇)などかは…つるに—何かは久しかりつかし
(一一)ばかり—ナシ
(一二)そは—ナシ

の君して、西のおとゞ(一)に、大宮「其方にや參り候ふべき。此方にや侍る」と聞え給へれば女御、仁壽「みだり心地のいと惱ましくて侍れば、打ち休みてなむ。今只今其方に參りて」と聞え給ひて、すなはち渡り給へり。宮、大宮(二)「其方にこそ參り來む(三)と思ひ給へつれ。(四)いと久しく長居し給ひつる度にこそありつれ。覺束(五)なき事がちになむ」女御、仁壽「暇聞ゆれども、をさ〳〵許し給はずなど有れば、えぞまかでぬや。此の度は辛(六)うじて」など聞え給ふ。宮、大宮「惱ましげに聞くは例(七)の事か」御息所(八)、仁壽「いさ(九)や、そが見苦しき事」宮、大宮「など(一〇)かは。さう〴〵しかりつるに。何時(一一)ばかりよりぞは」「此の二月ばかりなむ、例に似ず惱ましく侍れば、それにかこちてなむ、「今暫(一二)し一度にまかでよ」と仰せ宣へれど」と申し給ふ。おとども此方におはしぬ。方々の君だち皆渡り給へり。斯くまかで給へるもさう〳〵し、とて君だちの御方より、物いと淸らにして奉り給へり。

〔畫詞〕中のおとゞに、君だち、宮渡り給へり。內裏の御方(一三)の御前に、物參り

〔語釋〕
(一)時めける妃妾等
(四)寵を受くると否とは
(五)東宮は近々天皇になるゝ方なり
(六)東宮へ上げる事に定めん
(九)帝の御出ある筈なればとて歟

〔考異〕
(二)宣へらむ—宣ひつらむ
(三)千人—十人
(七)の君—ナシ
(八)聞え給へれば—あれば
(一〇)内裏の—内裏へ

いと時なる(一)人々多くさふらふなれば物しけれど、如何は、御口づから宣へらむ(二)をば、畏く否び聞え給はむ」おとゞ、正頼「何かは。かやうの宮仕は、千人(三)仕うまつれども、人の(四)宿世にこそあらめ。數多の中に、一人こそは、天子の親ともなるめれ。あまた度宣ふを、只今の天子(五)にこそはおはすめれ。承り忍ぶればいと不便なり。思ほす事もこそあれ。此處(六)にも然思ふ給へたらむ」宮、「何かは。宿世は知らねども、さる交らひせむにも、けしうは人に劣らじ」など宣ふ。

【畫詞】此處は、おとゞの宮と御物語。中のおとゞに、君だち御座します。御たち物など參る。

かくて内裏より女御の君(七)まかで給はむと聞え給へれば(八)、御迎へに參り給ふ。御車御前などいと多かり。曉にまかで給ひて、打ち休み給へれば、未だ對面し給はず。宮内裏(九)(一〇)のわたり給ふべかなりとて、御裳どもひき懸けなどしておはし給ふ。大宮明くるつとめて中のおとゞにわたり、君だち裳引き懸けつゝおはします。宮、兵衞

〔語釋〕
(一)「もはゝ」は「もはら」なるべし
(三)父母が
(四)女一宮、あて宮の母
(五)東宮には既に多くの御妃妾たちあれば其處が考へものなり
[illegible] あて宮の所置につきての正頼夫婦の相談。仁壽殿の女御あて宮を東宮に奉らん事を勸む
(六)多くの人々が懸想し來るをいふ
(八)正頼の長女
(九)其上にあて宮を奉るべきにあらず
(一一)「なにかは」なるべし、一本「かくは」

〔考異〕
(二)ごと—ナシ
(七)それも—それは—それ
(一〇)又は—「は」ナシ

思ふを、騷がしなど物し給はむ、すゞろなる事なれば、うたて思さむやなどとてなむ。時々は聞ゆれど、もはゝ(一)聞き入れ給はぬ樣になむ」と聞え給へば大將いといたく畏まりて、正頼「さらば仰せごとに從はむ(二)」とてまかで給ひぬ。

【畫詞】こゝは東宮、左大將のおとゞ御物語し給ふ。

かゝる程に、此の九の君、未だともかくも思し定めず(三)。如何にせまし、と思しわづらふ程に、東宮斯う切に宣ふこと度々になりぬれば、大將のおとゞ(四)、宮に聞え給ふ、正頼「あてこそを如何にせましと思ふに、東宮なむ、「殘りあるをだに忘るな」と宣ふを如何にせまし」宮、大宮「何かは。參らせむと思ふを(五)、人々の仕うまつり給ふ宮なれば、如何にせまし。げにかく良き程なりとていますめるを(六)」正頼「此處にもそれをなむ思ふ。兵部卿の宮、右大將などは、凡人にても、事もなき人にこそあめれ」大宮「それ(七)もいと切に宣ふなれど、なほ此の九の君をば、少し心殊に思へども、內裏には仁壽殿(八)さふらひ給ふ(九)。いかゞは又は(一〇)。東宮にはなかくは(一一)と思ふを、

〔語釋〕

(一)闇の夜の錦と言ふをわざと覺束なくいひたる也

(七)「などとて」なるべし

(八)娘どもに其れ〴〵聟を取れるをいふ

(九)東宮に奉る程のよき娘もなし

(一三)我によこすことを忘るゝな

(一五)よもやくれぬ事はあるまじと思ふ

(一六)あて宮にも

〔考異〕

(二)年頃—月頃

(三)しめやかなる折—しづけきこと—しづけき事え

(四)いかで—ナシ

(五)いさや—ナシ

(六)憎しや—憎ければ

(一〇)いと怪しき樣にのみ—口惜しう拙きのみ

(一一)うちすさめてのみ—ナシ

(一二)これかれに—人々に

(一四)だにな忘れ給ひそかし—さへ忘れ給ふな

じ給はずなりにしかば、闇(一)の夜のなにがしの心地なんせし」など宣ひて其の文どもも見せ奉り給ふ。おとゞいとかしこく見はやし給ふ。さておほん物語のついでに宮、東宮「年頃(二)聞えむと思ふ事の有るを、しめやかなる折なくて、え物せぬかな」大將、正賴「何事にかは侍らむ。今日よりしめやかなる折侍らじを(三)、いかで(四)承りてしがな」東宮、「いさや(五)、流石に聞え憎しや(六)」などて(七)、東宮「其處に人々集へらるな(八)めり。己をば其の中に入れられぬ、つらしと聞えむとぞや」大將、正賴「あなかしこ。さる仰せごとなき中に、然(九)さふらふべきも侍らず。(一〇)いと怪しき樣にのみ侍るめれど、然言ひて(一一)うちすさめてのみ侍らむやはとて、心に隨ひて、(一二)これかれに配り給ふことなん侍りし」東宮、「さても殘り有る樣に聞えしは、(一三)それをだに(一四)な忘れ給ひそかし。人知れず聞え置きたる心地すれば、(一五)さりともとなむ思ふ」と宣へば大將、正賴「甚だ尊き仰なり。いと小さくなむ侍るめる。少し人とならばさふらはせむ」と申し給ふ。宮、東宮「いと嬉しき事なり。(一六)彼の御方にも、常に聞えさせむと

こそ奉り給はめ。畏まりてこそ參らせ侍らめ」東宮(一)、「さしも向ひては言ひにくゝ思ほえつゝ、事のついで有らばと思ふを、未だ彼の大將(二)にも物せず、彼の人には時々消息などものすれど、をさ〳〵答も物せられずや」と宣ふを聞きて、源宰相、兵部卿の宮、平中納言など、いと侘しと思ふこと限なし。宮召さば必らず參りなむを、如何にせむ」と思ほす。心魂(三)惑ひ(四)騒ぎて何物のけさ(五)も覺え給はずなりぬ。

【畫詞】此處は東宮、左のおとゞ、平中納言、源宰相。宮つかさのかみ、殿上人、童など(六)多かり。

かゝる程に左大將東宮に參り給へりければ宮、「などか久しく參り給はざりつらむ。神無月の衣更(七)にも、勞らるゝ所有りとありしかば、いとほしがり申しつるを」大將、正頼「あなかしこ。例煩ひ侍る脚病、すべてえ踏み立てで、更にまかり步きといふものもしはべらで、からく勞りやめ侍りてなむ、斯くだに參り侍りつる」東宮、「いと不便なる事。此處にかく人々召して、聯句一句二句作らせしに、もの(八)

〔語釋〕

(二)又正頼にも申込まず

(五)「けさ」は「けう」歟

(七)正頼

(八)其方不參なりし故

〔考異〕

(一)東宮—「東」ナシ

(三)惑ひ—ナシ

(四)騒ぎて—「て」ナシ

(六)など多かり—などいと多かり、

㊈ 東宮殘菊の宴、東宮あて宮を正賴に求む

〔語釋〕
(六)誤あるべし
(七)正賴
(八)「の」衍文なるべし

〔考異〕
(一)九月二十日—霜月の朔日頃
(二)數多參り給へり…ここに物し給ふ人々—參り給ふ博士文人等召して文作らせ御遊びなどし給ふ。大將のおとゞのみ參り給はず。かくて夜ふかくなりて東宮御遊びなどし給ふついでに、ここに物し給ふ人々
(三)のおとゞ—ナシ
(四)文人—ナシ
(五)作らせ—作らせ給ふ
(九)をば—「ば」ナシ
(一〇)入れざなる—「ざ」ナシ

いと多かり。

かくて東宮九月二十日(一)、殘れる菊の宴きこし召しけるに、御子たち上達部、數多(二)參り給へり。左大將の(三)おとゞは參り給はず。博士文人(四)どもなど數多召して、いとかしこく文作らせ(五)、御遊などし給ふ。事しづまりてこれかれ御物語のついでに東宮、「今日此處に物し給ふ人々の中に、こともなき女、誰持たまひたらむ」左のおとど、季明「此の中には聞えずなむ。平中納言ばかりや持給ひたらむ。それも未だ小さくなむ聞え侍る」源中納言(六)、「左大將(七)の朝臣こそ、女子あまた持給ひて侍るなれ。天の下の人これかれ集へられ果てぬと見給ふれど、猶今一人二人は侍らむ」平中納言、正明「一人のみにはあらじ。又も聞く樣あり」兵部卿の宮、「さがなの物言や」とてうち笑ひ給ひて、源宰相打ち見合せ給へば、いとかたはらいたしと思ひて、物も宣はず。東宮の(八)、「此の上野の宮物咎めし給ひしこそこともなく聞ゆるや。我等を(九)ば懸想人の數にも入れざなる(一〇)こそ辛けれ」左のおとゞ、季明「仰せごとあらば、早う

（語釋）
（一）露程も左樣の事はなし
（二）あて宮を仲忠が
（三）仲忠を
（四）あて宮が
（五）仲忠が
（六）あて宮が
（參照）
（七）わびしさ—わびしき

御世の中を」仲忠、「あなむくつけ。露だにぞなき」（一）と言ふ。かくてなほ此の君を、（二）人知れず限なく思ふ。殿の中には、宮もおとゞも、いと恥かしく心憎きものに思（三）したり。おぼろけの折に物の音出ださず。されど、たまさかに琴つかまつり、遊びなどす。九の君と聞ゆれど、仲忠には御眼留め給ふ。いかではつかにも見む、と思へ（四）ど、さるべき折もなし。馴れ（五）〴〵しき氣色もなくうち見えて、更に馴れず。されば、いと心にくゝてをかしきものになむ思（六）しける。

かゝる程に、九月二十日ばかりの夜、風いと遙かに聞えて、しぐれなんとす。源侍從の君、夜一夜物語りなどし明して、曉に仲忠、

　色染むる木葉はよぎて捨人の袖にしぐれの降るがわびしさ（七）

と打ち歌ふ聲いとめでたし。九の君、いとをかしと聞き給ふ。いと人げなきものには思さすなむありける。

【書詞】此處は左大將の曹司にて、源侍從物語し給ふ。物など參れり。男ども

あて宮「年ふれば松はかれつゝ住吉はわすれ草こそ生ふといふなれ

とのみ聞え奉り給ふ。

かゝる程に、仲忠の侍従は、常に此の殿に來つゝ、或る時は此の御前にて、琴弾き遊びなどし、琴をば更にひかで、他遊をしつゝ、源侍従(一)の君を兄弟と契りて語らふ。仲忠「などか參り給はざりつる。内裏にさふらひたりつれど、君の見え給はざりつれば、さふらふかひも無かりつれば罷出つるぞや」源侍従、仲澄「參らむと(二)思ひ給ひつれども、怪しく惱ましく侍りつればなむ」仲忠、「などか斯くのみは。人(三)思ひ給ふか」仲澄「仲澄は、人數にし侍らねば、さ思ふべき人もなし。(四)君だちはしも」仲忠「(五)よき身だにも然思さむに、まして仲忠等は、(六)何處なりしを」など言ひて、仲忠「世の中に住みにくきものは、一人ずみに優るものなかりける。まかる所し侍らねば、里とては、只此處になむ。立ち交りくるしうし給ふ(七)所は、いとつきなき心地し侍ればなむ」と言ふ。源侍従、仲澄「そも、あなかま、御心に任せたんめる。

〔語釈〕
(一)仲澄
●仲忠、あて宮に重んぜらる
(二)「思ひ給へつれども」なるべし
(四)君等こそ思ふ人多かるべし
(五)仲澄の如き身分よき人さへ
(六)どこの女をか思ふべき
(七)「し給ふる所は」なるべし

〔考異〕
(三)思ひ給ふか—思ふとか

かくて此の源宰相、(一)此の殿(二)にのみおはすれば人々、(三)「此の君は、ある樣ありてやかく籠り居給ふ(四)らむ。おとゞ、宮知り給はで(五)や。九の君に馴れ〳〵しき事あらむ」など内の心をば知らで、此の聞え給ふ人々疑ひ聞え給ふ。右(六)大將殿よりも、さる氣色をなむ聞え給ひける。

兼雅　聞えさすれども効なくなん承はる樣もあるものを、此處にこそいとかしこく(七)思しおとさるべけれ。

　　旅人(八)もこえなれぬとか渡守おのが舟路の近き(九)まに〳〵

と聞え給へれども、御返りなし。兵部卿の宮よりも、

兵部　度々聞えさすれど、覺束なくのみあるを、自ら參りてや聞えさすべき。

とて、

兵部　住吉に見ゆるや何ぞおぼつかなまつ(一〇)と答ふる人もあらなむ

と聞え給へれば九の君の御返り、

（語釋）
（一）實忠
（二）正賴邸
（三）他のあて宮に懸想する男どもの推測する也
（六）兼雅
（七）實忠既にあて宮を手に入れたる噂もあれば
（八）旅人は實忠
（一〇）まつ—松、待つ

（考異）
（四）給ふ—給へ
（五）給はでや—給ひてや
（九）近き—とはき

〔考異〕
(一)移りて―「て」ナシ
(二)傍―かたはし
(三)奉り―ナシ

めおはするに、萬哀に悲しく覺えて泣き居給へれば、白き御衣の袖に涙かゝりて、搔練なんど移り(一)て濡れたるを、取り離ちてそれに書き付け給ふ。

行政　ときてやる衣の袖の色を見よたゞの涙はかゝるものかは

いと珍らかになむ。さるは月頃經にけりや。

と書きて奉り給ふれば、九の君、辛うじて哀れとや見給ひけむ、傍(二)に書き付け給ふ。

あて宮　袖たちて見せぬ限りはいかでかは涙のかゝる色も知るべき

かへす〴〵物うげなる御袖かな。

とて返し奉り(三)給ふ。又平中納言殿より御文には、

正明　秋の夜の寒きまに〳〵きり〳〵す露をうらみぬ曉ぞなき

知る人のなきなむ侘しき。

とて奉り給へれど、御返りなし。

〔語釋〕
（一）行政に斷るべき口實を教ふる也

〔考異〕
（二）給ひそよ―給うそ
（三）なかめれば―なかんめれば
（四）思ほさむ―おぼさむ
（五）苦しさは―「は」ナシ
（六）夕暮に―「に」ナシ

と書きて奉り給へり。宮あこ君見給ひて、九の君に見せ奉り給ふに、走り書き給ふ樣などこともなし。宮あこ君、「遠き志も有るものを、猶聊か書きて給べ」と聞え給へば、あて「あなさがな。何でふかゝる文見せ給ふ。（一）「かゝる文見すれば、おとゞ、はゝ宮さいなむ」とて、な取り入れ給ひそよ（二）」と宣ひて、聞え給はず。さて行政の使に、宮あこ君文書きて遣り給ふ。

宮あこ此の文は、宣ひつる人に見せ奉れど、御返りもなかめれば（三）、まろを如何に憎しと思ほさむ（四）。物の苦しさは（五）、君のおはせぬ頃なむ思ひ知りぬる。疾くのぼり給へ。

あひも見ぬ日のながらふる袖よりは人の涙のおちぬべきかな

いと久しや。はや〳〵。

と書きて遣りつ。行政これを見て、袖を絞るばかり泣き濡らして、急ぎ歸りぬ。いとゞしく魂しづまる時なく思ひ歎く秋の夕暮に（六）涼しく月面白きに、只一人眺

仲澄 思ふこといかで知れとか花すゝき秋さへ穂にも出でゝすぐらむ

あな侘し。何時もかく。

など書きて見せ奉り給へば九の君、

あて宮 諸共に生ふる薄のいかなれば穂にいでて物を思ふてふらむ

かゝる中。

とて尾花を添へて奉り給ふ。侍從、仲澄「さればこそ(一)侘しけれ」と聞え給ふ。

畫詞 此所は中のおとゞ。九の君おはします。御たちいと多くさふらふ。

かくて行政、攝津國(二)の有馬の湯に行きて、面白き所々(三)ありきてをかしき所々見るにも、物思ひ出でられつゝ、哀と覺ゆる時に、(四)童べを都に上せて(五)大將殿に、

行政 しほたるゝ事こそまされ世中を思ひながす(六)の濱はかひなく

と書きて、宮あこ君に

行政 これ中のおとゞに奉り給へあこ君や。いかで物の苦しさ知らせ奉らん。

（語釋）

（五）正頼

（六）長洲の濱は攝津の名所。思ひ流すを長洲にかけたり

（考異）

（一）こそ—こそは

（二）國の—ナシ

（三）ありきてをかしき所—ナシ

（四）童べを都に上せて大將殿に—ナシ。又「大將殿に」ノ四字ダケナシ

まして上にも聞召し過さじかし、猶いとをかし、など思して宣ふ(二)なりと申給ふ。(一)皆人怪しがり侍りき。民部卿などは語り聞え給はぬか。すべてたゞ(三)十が一を取り申すなり。いとをこなることども多く侍りき」と申し給へば(四)彼のおとゞ、(五)ありし事はかけても宣はで、正頼「いとをかしく怪しかりける事どもかな。此の侍るものは、彼の君ならぬ人(六)に、只今は未だいと幼く侍れば、奉らむとも思う給へぬものを、眞實にある樣にも宣(七)ひけるかな。怪しき事」とて笑ひ給ふ。さて中納言まかで給ひぬ。

畫詞 此處はおとゞ中納言に對面し給へり。さぶらひにて中將の君對面し給へり。侍所に男どもいと多くさふらふ。

かくてある程に、(八)源侍從の君、出で入り起き臥し歎き給ふ。いと侘しく覺えければ、御前の花薄の中に、いま本より生ひ出づるは、秋も穗にいでぬを、引き拔きて其の葉に書く。

(語釋)
(二)此處誤あるべし
(五)上野宮を歎きし事
(六)「人にも」なるべし
(七)上野宮が
(八)仲澄

(考異)
(一)まして―まいて
(三)たゞ―ナシ

七 懸想人等歌をあて宮に贈る

(四)彼の―衍文なるべし

怪しと思(一)したるに、此の宮、「いとたいぐ〳〵しき事は、際し申さるべき。やむごと(二)なき家の男が前にてだに、かく申し侍り給(三)べば、まして他の所にて(四)は如何に呪詛、悪念深く侍り給ぶらむ。彼の左大將(五)を朝臣の飽くまで呪詛し奉るなり。天下に、其の大將を呪詛し殺し奉りても、中納言の上(六)おほかり。さても人呪ふ人は、三年に死ぬるなり。大將聊かの足手の恙も有らば、朝臣のすると思はむ」といと切に怨じ給へば、東宮もいと怪しと思して、東宮「そも〳〵此の大將には何の雨(七)かおはしますらむ」上野「彼の朝臣には、頼明(八)は事の(九)寄せいとやんごとなく侍り。彼の大將の九つに當る女は、頼明が童にてなむ侍る」と申し給ふ。皆怪しがりて、東宮も「彼の大將の九つに當る女は、何處よりぞ」(一〇)と問ひ給へば、上野「此の王の(一一)(一二)御腹なり。いとかしこく名だたりて、苦しう得ず侍りしを、さこそあれ、頼明、構へてなむ奪ひ取りて侍る」と申し給へば東宮は、如何なる事にかあらむとは思しながら、然(一三)なりはてば(一四)、民部卿(一五)、右衛門督(一六)なども、皆とがめつべきにこそあなれ、

（語釋）
（二）正頼の娘の夫たる我が前にてさへ斯く呪詛がましき言をいふ位なれば
（六）上臈者はなほ多ければ正明が左大將になる譯にはゆかず
（七）「雨」一本「雲」とあり何れにても解し難し誤あるべし
（八）上野宮の名
（一二）女王即ちあて宮の母女一宮
（一三）以下東宮の心
（一五）正頼の五女の聟
（一六）同七女の聟

（考異）
（一）思し—おもはし
（三）給べば—たうぶ
（四）にては—「は」ナシ
（五）を朝臣の飽くまで—の朝臣をあてにて
（九）事の—ナシ
（一〇）何處よりぞ—いづこよりぞ—いづくぞ—いくつぞ
（一一）王の—わらはの
（一四）はてば—とては

られたりし」正明「右のおとゞ、右大將、民部卿、御子たちなどなむ。博士ら召したりき。學士正光、式部大輔忠實朝臣、右中辨維房朝臣、秀才、進士などなむ召し(一)たり。詩歌二つのものなど設けられたりき」など申し給ふ。大將のぬし、正頼「いと有識のものの限なんなりかし。(二)さて御歌は如何有りけむ」いらへ、正明「四韻の(三)歌なめりき。おほたいなりき(四)」と申し給ふ。正頼「其の文どもこそ興(五)多かるべき」と申し給ふ。正明「さて其の日、不意(六)に人に騒がれ奉りき」大將、正頼「誰にかありけむ。正頼が族かや」と宣ふ。中納言、正明「何れも離れじかし(七)」正頼「さて如何なる事にか有りけむ」中納言、正明「一日の序(八)など有りしかば、「これかれ斯く參り給へるに、殿(九)の參らせ給はぬがさうぐしさ(一〇)」なんどこれかれ申し給ふ序に、正明何心なく、「げに怪しく參り給はぬは、なやみ給ふ事やあらむ」と申しゝかば、上(一一)野の宮大きに驚き給ひて、「此の正明朝臣(一二)のなど申し給ふ事ぞ」と聲を放ちて宣ふ時に、右大將、兵部卿の宮、數多これかれ、いと怪しと驚き給ふ時に、東宮もいと

〔語釋〕
(一)「召したゞ一」なるべし
(七)いづれ御家に關係のなき與にはあらず
(八)「一日」は「事」の誤か、一本「一日の」の「の」なし
(九)正頼
(一一)藤原君の卷にて似せのあて宮を奪ひて妻となし居る人

〔考異〕
(二)かしーナシ
(三)四韻ーし院
(四)おほたいなりきとーおほたいせきとーおほないきと
(五)こそーいと
(六)不意にーゆくりなき
(一〇)さうぐしさなんどーさうぐしきとなん
(一二)朝臣のー朝臣は

㊅ 正明、正頼を訪ひて東宮の花の宴の事を語る。贋あて宮を眞のあて宮と信ぜる上野の宮の噂

（語釋）
（二）祐澄
（三）正頼
（四）御參内がなき故
（五）脚氣
（六）暇暇煩
（七）殘念がりて御話しありき

（考異）
（一）かくて…別れ給ふ―ナシ

あなわびしなど聞え給ふ。かくて君だちも内裏に參り給ひ、人々も別れ給ふ。

【畫詞】此處は君だち集りて（一）遊び給ふ。御子菊を押し折りておはす。此處は御たち四十人ばかり、君だちの御前に物參る。東の御方より君だち起きおはしますなり、とて御果物奉り給ふ。

かゝる程に、平中納言、大將殿にまうで給ひて、侍におはす中將（二）の君に對面し給へり。中納言、正明「久しくさふらはぬ畏まり聞えむ、とてなむさふらひつる」と宣へば、祐澄「御消息聞えむ」とて入りぬ。おとゞに（三）、祐澄「平中納言參り給へり」と聞え給ふ。正頼「彼方にこれかれあなり。此方にて對面せむ」とて、寢殿の簀子に御座よそひて、對面して、御物語きこえ給ふ。中納言、正明「日頃久しく參り給（四）はねば、覺束なき事多くなむ」大將の主、正頼「はなはだ畏し。例わづらひ侍る脚（五）病煩ひてなん、日頃いとまぶみ（六）奉りて參らず侍る」中納言、正明「一日、東宮に花の宴聞召しゝにも參り給はぬことをなむ宣ふめりし（七）」おとゞ、正頼「誰々か參

（語釋）
（一）こうらん「勾欄」なるべし
（三）燐火
（四）多く居る女君たちの中にて
（考異）
（二）おしかゝりて—「て」ナシ

給ふこと限なし。見給ひて、物も宣はで、打ちなげきて立ち給ひぬ。こうらん(一)におしかゝり(二)て眺めおはしまして、思すこと更にも言はず、おき(三)の上に居る心地して、彌益々に思さるゝに、御前の一本菊、いと高くいかめしくうつろひて、朝ぼらけにめでたく嚴めしう見ゆるに、露に濡れたるを押し折りてかく書きつけ給ふ、

忠康 にほひます露しおかずば菊の花見る人深く物思はましや

あなわびし。

と書きて、そこら(四)の御中に、九の君に、忠康「此の花は散りまさりぬべく」とて奉れ給ふ。九の君、暗き程なれば、書きつけ給へることは見で、只かく書きつけ給ふ。

あて 露ならぬ人さへおきて菊の花うつろふ色をまづも見る哉

と聞え給ふ。八の君、少しあかくなる程に、此の君の書きつけ給へる事を見て、

八君 露かゝる籬の菊を見る人は物や思ふと誰か言ふらむ

〔語釋〕
(二)正頼の第十女
(三)あて宮
(五)兼雅
(九)仁壽殿女御、正頼の長女
(一〇)彈正宮忠康

〔考異〕
(一)月面白き夕暮に―此一句衍文歟
(四)出で―ナシ
(六)おはしまして―おはして
(七)音に―音どもに
(八)合せ―合せて
(一一)おはします―まします

の葉は色づき、草叢の花咲き、五葉の松は長閑けき色を増し、色々の紅葉、薄き濃きむらごに交り、(一)月面白き夕暮に、御前の池に月影映りて、萬面白き夕暮に、八君、(二)いま宮、(三)姫宮御簾巻き揚げて(四)出で御座しまして、例の御琴ども弾き合せて遊び給ふを聞きて、男君たち、え籠りおはせで、式部卿の宮も、(五)右のおとども出で(六)おはしまして、「今宵の御琴どもの(七)音に驚きにけり」とておはしまして、式部卿の宮箏の御笛、右のおとどたどの御笛、篳篥吹き(八)合せ、聲々數多の物吹き合せて、いとになく遊ばせ給ふを聞かせ給ひて、何れの人か御心長閑にて籠りおはせむ、夜一夜、女君だち、いと清げにて、なほおはします端に出で居給へり。(九)此の女御の御腹の(一〇)三の宮、世の中のかしこき君にておはします、それなむ、此のあて宮を思ひ聞え給へど、すぎ〳〵しくもや、とて色にも出で給はねど、なほ思しわたるに、此の君だちの並びおはする所に御座して、曙に御簾を巻き揚げて見給ふに、いと清げに(一一)おはします中にも、此の九の君は優れて見え給へば、三の宮はしづ心なく覺え

の御心つらき事なむ」とて宣ひしかば、「何事ぞ」など申しゝかば、「日頃(一)聞ゆる事有るを、それ(二)さなおはせそ、と聞えよや」と、似げ無きことをし給へば、憎しとは思へど、いとほしく、身も徒らになりぬべき事を宣ひしを、猶(三)聞え給ふ事あらば、心やりに、聊かばかりはいらへ給へかし。疎き人にもこそ、なげの言の葉は言ふなれ。かゝる(四)御中には、何事を宣ふとも、誰かは知らむ。いとほしくも思ひ入られたんめる(五)を、人に然な(六)思はれ給ひそ」九の君、面さと紅みて(七)、打ちほゝ笑み給ひて、「宣ふこともなきを、何事かは聞えむ」八の君、「聲せぬ(八)に答ふるものは山彦の、と宣へかし。誠に、見苦しき事思ひ初めぬる君にこそあめれば、えあるまじくわりなき事、深く思ひ入れて(九)、心いられありき給へば、かく容貌も損はれ、ほれたる様にていとほしくぞ有るや、と思ふにも、怪しくなほ思ひ焦るゝもうたてあるものを」など宣へば、九の君聞かぬ様にておはします。

かくて日頃經て、長月になりぬ。風涼しくなり、蟲の聲、御前の草木(一〇)も調ひて、木

〔語釋〕
(二)今迄の様につれなくし給ふなと申上げてくれよと
(三)此後仲澄が言ひ寄る事あらば
(四)元より睦ましかるべき同胞の中には
(六)仲澄の懸想せる様子を悟らるゝな
(八)未詳

〔考異〕
(一)日頃—月頃
(五)たんめる—ためる
(七)紅みて—「て」ナシ
(九)思ひ入れて—思はれて
(一〇)草木も—「も」ナシ

㊄ 正頼邸の月夜の管絃。彈正の宮菊の花に歌をかきてあて宮に贈る

（語釋）
（一）「とて」衍文歟
（四）八の君が
（五）あて宮の

（考異）
（二）なめるを―なるを
―なゝるを
（三）何かは―「は」ナシ

止まるや、とてなむ、いみじく淺ましき心地しつゝなむとて（一）物に狂ひたる事を、思ひ給へ餘りて聞えさする。吾が君、猶かゝる氣色語らひ聞え給へ。おほろけに思ふ給へむには、かゝる事を聞えさせてむや」などいと哀に語らひ聞え給へば、八の君、怪しきこととは思すものから、いみじげに宣へば、流石にいとほしく思して、八君「げにさも思しぬべき事なれども、己が心ながら、心に任せぬ事なれば。然はた、わりなく思す事なめる（二）を、何かは（三）、かゝる中に、何事も宣ひ語らはむに、知る人有らむやは。今事のついで有らば、斯くなむと語らひ聞えむ」侍從、仲澄「いと嬉しき事なり。吾が君なむ良き樣にを」と宣ふ。

かくて中の大殿に（四）わたり給ひて、例の御遊びし給ふ。倭琴、箏の琴、琵琶など調べあはせて彈き給ふ。さて御物語などし給ふついでに、八君「一夜、侍從の哀なる物語をし給ひしかな」と宣ふ。九の君何事も知り給はで、あて宮「あはれ羨ましの事や。我にこそ聞かせ給はましか」八の君「己まさに聞えんに」など宣ひて、八君「誠は、君（五）

〔語釈〕
(三)遁世せんかと
(四)後撰集、貫之「哀てふことにしるしはなけれども言はではえこそあらぬものなれ」これを書き違へたる歟
(五)其方とあて宮とは
(六)仲澄の懸をあて宮に取次ぎたりとも
(七)不當なる事故言すぎしと思ふには非ず
(九)父母
(一〇)言出しても思ひとまりても

〔考異〕
(一)思ほさむ—おぼさむ
(二)侍りける—侍る
(八)事聞えじ—事も聞えじ
(一一)なかるべけれども—なかるべかめれども

頃になるまで宣はざりけるこそ怪しけれ。何事も思ほさむ(一)事はなほ宣へ」侍従、仲澄「え聞えぬにて、わりなさは御覧ぜよかし」など言ひて、仲澄「いと怪しき心侍(二)りける身なれば、世(三)の中に侍らずやなりなまし、と思ひ給へながら(四)、言はではただにとか言ふなれば。かく同じ心に御座します内にも(五)、いとよき御仲に御座しますなれば、斯く(六)なむなど物せさせ給はむにも、誰かは知らむ。此の中の大殿の御方になむ、年頃思ひ給ふる事侍るを、心にも、これは物にくるひたるにや有らむ、いと怪しき事なりと思ひ返して、今までになり侍りぬるに、世の中に立ちまふべき心地もせず。御覧ずるには、例の仲澄にては侍りや。かく侘しき心地して、死ぬべき心地し侍るを、何(七)かは良からぬ事聞えじ(八)、と思ひ給へる。只上(九)おとどの思さむ事の、限なく畏く、身の徒らにならむ事をば思されじと、思う給ふるこそ侍れ。聞えても(一〇)、思ひ給へかへすにも、同じごと徒らになりぬべければ、聞えても効(一一)なかるべけれども、斯くとだにも聞えさせでは、身は徒らになるとも、命だに暫し

あらむ、とつれなきをなど(一)思ひわづらひて、此の左衛門督(三)(四)の君の棲み給ふ八の君は、未だ若ければ、こと君たちの住み給ふ樣(二)にて、かたがた異にても棲ませ奉り給はで、宮、(五)おとゞの住み給ふ北の大殿に住ませ奉り給ひける、されば、中の大殿に晝は(六)おはしましつゝ、夜なむ我が御方にはおはしましける、晝は碁打ち、琴彈きなど此方にてし給ひつゝ遊び給ひ、こと御同胞(七)よりもよき御中なり、其の君に、此の仲澄の侍從、物語りなどし給ふ次に、仲澄「月頃聞えむと思ひ、給ふる事のみ侍るかな」八の君、「何事ならむ。君だちの、己らが中に宣はぬ事の有りけるこそはつらけれ」侍從の君、仲澄「聞えさせむにつけて、いとかたはらいたき心地して、え(八)こそ聞えね。されど思ふに、逆樣の事を聞えたりとも、人に聞かせ給はむやは、と思ひ給ふれども、いとこそかたはなれ。月頃侘しく思ひ給ふる事の有るを、他人には、夢に聞ゆべき人もなし。心一つになむ思ひ給ふる。思ひ給へ餘りて、如何はせむ、御方に(九)こそは聞えめとてなむ」八の君、「何事にか有らむ。月

【語釋】
(一)「など」衍文歟
(二)此句遙かに句を隔てて下の「その君にこの仲澄の侍從」云々へつゞく
(三)「右衛門督」なるべし八の君の夫は右衛門督藤原忠正
(五)正頼夫婦の
(六)八の君が
(七)八の君とあて宮と

【考異】
(四)左衛門督の—右大臣殿の
(八)えこそ聞えね—こそえ侍られ
(九)こそは—「は」ナシ

〔語釋〕
(一)(二)伊勢に下る齋宮をおくりて行く也
(三)ながめ—詠め、長雨
(四)文を
(七)仲澄はあて宮の同胞也

四 仲澄情を妹のちご宮に訴ふ。ちご宮、之をあて宮に取次ぐ。

(八)以下仲澄の心
(九)あて宮

〔考異〕
(二)くだり給ふ御おくり—のぼり給ふ御むかへ
(五)給はぬは—給はねば
(六)思さむ—おもはさむ

行政齋宮のくだり(一)(二)給ふ御おくりに往きて、攝津國の田蓑の島より、かく聞えたり。

行政 津のくにの田蓑の島はわたれどもわがながめ(三)には濡れぬ日ぞなき

畫詞 此處はあて宮の御前に人いと多かり。此處彼處より取り(四)次ぎつゝ參らす。

斯くのみ此の九の君を、萬の人聞え給ふとは知りながら、御消息聞え給ふとき、人々の御心少しゆくを、聞え給はぬ時は、あつき火の中にすまふ心地して、聞え給へば、あるは御返り聞え給ふ折も有り、遂に聞え給はぬ(五)は、聞えわづらひて止み給ひぬるも有り、などいと數知らず有るを、餘所の人の然思(六)さむをば如何はせむ、此の源侍從(七)の君さへ、かゝる心のつきたるを、年頃思ひ忍び、思ひ返せど、え堪へかねてなむ、猶やなど思ひてなほ(八)かく思ふ事なむ有るとばかりだに、いかで(九)此の君に知らせ奉らむ、時々氣色ばめる事は有れど、知りて知らず顏なるにや

兼雅　君が訪ふことのは見れば(一)朝露のきゆる中にも魂や殘らむ

訪はせ給はましかば頼もしからまし。

と聞え給へれど御返りなし。

平中納言殿よりも、

正明　湧きいづる涙の川はたぎりつゝ戀ひ死ぬべくも思ほゆる(二)哉

源宰相、(三)志賀に(四)行しにまうで給へりけり。それより、面白き紅葉の露にぬれたるを折りて、斯くなむ、

實忠　我が戀は秋の山邊にみちぬらむ袖より外にぬるゝ紅葉ば

とあれど御返りなし。

源侍従(五)人間に參り給ひて(六)、

仲澄　あさましき(七)心とかつは思へどもいとかくつらき君もあやなし

など(八)宣へど、例の御いらへもし給はず。

(語釋)
(一)「見れば」は「見なば」歟
(三)實忠
(四)近江の志賀山寺
(五)仲澄

(考異)
(二)思はゆる—おぼえぬる
(六)人間に參り給ひて—ナシ
(七)あさましき…あやなし—あさましき心とかつは思へどいとかくつらき君もあやしな(頭トシテカケリ)
(八)など—と

嵯峨院

（語釋）
（二）優雅
（四）やがて其儘死にそうなりし

（字異）
（一）御返し—御返り
（三）思され—おもはされ
（五）侍りつる—侍る

あて宮の御返し、(一)

吹くごとに草木うつろふ秋風につけてたのむといふぞ苦しき

兵部卿の宮より

たましひや草叢ごとに通ふらむ野邊のまに〱鳴く聲ぞする

御返し、

あて宮　色かはる野邊にかよふと聞くからに鳴くなる蟲のこゝろをぞ知る

まして思ひなむやらるゝ。

と聞え給ふ。

右大將殿、(二)日頃なやみ給ひければ、覺束なく思され(三)ければ、

日頃淺ましく、斯くとだに聞えで(四)やみぬべき心地し侍りつる(五)になむ、いと哀なりける。

とて、

もてなして在らせよや。琴(一)をこそ教へざらめ、他事も、彼の侍從のする事はえならぬをや。聊かなを(二)物の音なども、聞きならひあられよ」など宣ふ。

仲忠、あて宮にいかで聞えつかむと思ふ心有りて、かく來歩くになむありける。さて、自から殿人(三)になりて、御たちなどに物言ひかけなどする中に、孫王の君とて、よき若人、あて宮の御方にさふらふにつきて、此の思ふ事をほのめかし言へど、つれなくのみいらへ(四)つゝあるに、然てのみはえあるまじ(五)ければ、面白き萩を折りて、葉に斯く(六)書きつく、

仲忠　秋萩のしたばにやどる白露も色にはいづる物に(七)ぞありける

とて孫王の君に、仲忠「これ折あらば」とて取(八)らす。やがて持て參りたれば、あて宮見給ふ。

又東宮(九)よりかく聞え給へり。

いつとてもたのむものから秋風の吹く夕暮はいふ方ぞなき

〔語釋〕

(一)琴は仲忠の祕して容易にひかぬ故それを習ふ事は出來ぬ事なれども

㊁ 仲忠、孫王の君を介してあて宮を挑む。

(二)「なを」は「なる」なるべし

(三)正頼方の内の人になりて

(九)後に今上

〔考異〕

(四)いらへつゝあるに―いらへけるに

(五)まじければ―まじげなれば

(六)斯く―ナシ

(七)にぞありける―にざりける

㊂ 東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る

(八)取らす―やるに

（語釋）

（一）正賴の七男仲澄

（七）村田春海義曰、牛毛麟角は多きと少きとの譬也。抱朴子云、萬夫之中有一人爲多矣、故爲者如牛毛、獲者如麟角也。

（考異）

（二）樣に—「に」ナシ

（三）有りもや—「も」ナシ

（四）徒然に—徒然と

（五）などか—などかは

（六）なけれ—なければ

殿の侍の別當、藤原貝親逢ひたれば、仲忠「仲忠がさふらふ由、侍從(一)の君に聞え給へ」と宣へば入りて聞ゆれば、仲澄「なほ此方に」とて御曹司に呼び入れ奉り給ひて、對面し給へり。仲忠、「一日あさましく給べ醉ひて、對面賜はりけるを、如何になめげなる樣に侍りけむ。其の畏まりも聞えさせむとてなむ參り來つる」源侍從、仲澄「甚だ畏し(二)。一夜の無禮は有りもやし(三)けむ。更に覺え侍らぬは、仲澄が醉こそすゝみて侍りけめ」など宣ひて、美しく物語などし給ふ。仲澄「かく一人のみなむ侍る。時々は立ち寄らせ給へ。まかり通ふ所などもなければ、徒然(四)になむ侍る」と宣へば、仲忠「などか(五)然はおはする。仲忠こそ、内裏に參るより外に、まかる所な(六)けれ。君だちのおはする所は(七)牛の毛ぞや」あるじの侍從、仲澄「仲澄がまかる所は麟の角にだにぞあらぬや」など宣ふ。物語などいと細やかにして、なほ互に後見どもなど言ひかはして歸り給ひぬ。侍從の此處に時々かく物し給ひければ、おとゞ聞き給ひて、正賴「仲忠の侍從の、時々いますなるを、若き男子ども、つきぐしく

嵯峨院

梗概

(一)兼雅の家の相撲の還饗。仲忠、仲澄を訪ふ。(二)仲忠、孫王の君を介してあて宮を挑む。(三)東宮以下の懸想人等歌をあて宮に贈る。(四)仲澄情を妹のちご宮に訴ふ。ちご宮之をあて宮に取次ぐ。(五)正頼邸の月夜の管絃。彈正の宮菊の花に歌をかきてあて宮に贈る。(六)正頼正明正頼を訪ひて東宮の花の宴の事を語る。實あて宮を眞のあて宮と信ぜる上野の宮の噂。(七)懸想人等歌をあて宮に贈る。(八)仲忠、あて宮に重んぜらる。(九)東宮の殘菊の宴。東宮あて宮を正頼に求む。(十)あて宮の處置につきての正頼夫婦の相談。仁壽殿の女御、あて宮を東宮に奉らんことを勸む。(十一)正頼邸の神樂の準備。(十二)神樂の當日。兵部卿親王、大宮に東宮のあて宮に熱心なる趣を傳ふ。宴會。(十三)仲忠の戀情切なり。(十四)大宮、母嵯峨院の大后の六十の賀を行はんとす。其の準備。(十五)歳末の御讀經。(十六)正明、實忠、歌をあて宮に贈る。(十七)新年。正頼邸の賭弓の饗の準備。(十八)源仲頼の素性。宮内卿在原忠保の聟になる。(十九)正頼邸の賭弓の饗。仲頼、あて宮を見て心を惑はす。(二十)仲頼の懸想病。忠保の慰籍。妻の嫉妬。父の教訓。(二十一)大宮大后の六十の賀の爲に嵯峨院に參る。仲頼病を押して參列す。

(一)兼正の家の相撲の還饗、仲忠仲澄を訪ふ

〔語釋〕
(一)兼雅
(二)正頼

かくて右大將殿に(一)還饗じ給ひければ、例のごとなむ、左大將殿も(二)おはしける。さて後に、仲忠の侍從、内裏より罷出るまゝに、左大將殿の御門に來て叩くに、彼の

え在るまじきを、せまほしきわざ、我が世にしてむ、と思して、まづ故君(一)の御爲に、一切經(二)多寶の塔つくらせ給ひて、供養し給ひけり。我が後(三)のわざし給ひ、忠こその爲にし給ふ。千蔭(四)「この世にあらば息災となれ。亡きものならば、彼の世の途ともなれ」とて、(五)ありし時つかひし物、皆誦經(六)にし給ふとて見給ふに、かの山へ入るとて物書きつけし琴とり出でて見給ふに、書きつけたるものを見つけて、おとゞ驚きもだえ給ひて、思ほすこと限なし。さて日々に誦經にして、千蔭「かい具(七)(八)して、もてならしゝ物を、我が目には見じ」と宣ひて、佛造らせ給はむとて、萬の兵士して、力人集まりて割るに、いさゝかなる瑕つかず。(九)かねの上に露のかゝらむばかりなり。もて煩らひ給ふ程に、大空かきくらして、雨降り、雷鳴りて、この琴をまき揚げつ。かく大いなるわざをして、待ちわたり給ふ程に、忠こそを戀ひ死にかくれ(一〇)給ひ(一一)ぬ。

〔語釋〕
(一)亡妻
(二)圓柱形の塔
(三)自分の後世の功德
(四)忠こそ存命ならば當人の息災延命の爲祈禱になれ
(五)忠こその
(六)布施
(七)忠こそが取扱へて持ちなれたりし琴を
(九)刃物
(一〇)千蔭が

〔考異〕
(八)かい具して—かひかくして—かひかいして
(一一)給ひぬ—給ふ

とて居給へり。年頃おとゞの通ひ給ふこと七年ばかりありしに、一日につかひ給ふもの數知らずありし程に、こゝらの年頃を盡しはてて、限なく貧しくなるまゝに、(一)あるは男につきて去り、宮仕しに出でて去ぬ。御德のさかりに、なめて(二)使ひにくしとて、人より(三)ことに憎み給ひし下仕なむ(四)、よもぎと言ひて、とゞまりて、よもぎ「然言ひてあらむやは。我だに仕うまつらで(五)誰かはあらむ」とて仕うまつりける。殿に殘りたる物なし。かの俊蔭のぬしの奉り給へりける、(六)琴のみなん殘りたりける。それをぞ、この時の大將(七)に萬石に賣りて遣ひける。

【畫詞】これは一條殿のほろび給へるところ。

斯くてこの(八)大殿いもひ精進をして經給ふ程に、山里の心ぼそげなる殿まうけ給ひてぞ住み給ひける。そのわたりは比叡、阪本、小野のわたり、音羽河近くて、瀧の音、水の聲、あはれに聞ゆる所なり。物思はぬ人だにも(九)心細げなるわたりなり。ましていみじき心地(一〇)してなむ經給ひける。おとゞ思す樣、我世の中に久しく

〔語釋〕
(一)侍女どもが
(二)「なめく」なるべし、無禮にての意
(三)北方が
(四)下仕の名
(六)俊蔭が忠經に奉りしかたら風
(七)正頼なるべし。此時は千蔭致仕して正頼代りて左大將になりし也
(八)千蔭

〔考異〕
(五)仕うまつらでは—つかうまつらては
(畫)千蔭の閑居。法會の奇蹟。千蔭の薨去
(九)だにも心—だにも物心
(一〇)心地…經給ひける—心地して經給ひけるに

一條　待つ人の袖かと見れば花すゝき身の秋風に靡くなりけり

など宣ひわたるに、風すゞしく覺ゆれば、大殿(一)にかく聞え給へり。

一條　いでや聞えじと思へど、訪はで憂き人(二)は、といふめれば、聞えではえあらぬものなれば、唯今の風のあやしく心細ければとてなむ、

我が宿に時々ふきし秋風のいとゞあらし(三)になるが侘しさ(四)

物もおぼえぬ(五)心地に、

千蔭　秋來とも木草の色しかはらずば風にとゞまる花もありなん

なほ長閑に思したれ。

と聞え奉り給ふ。北の方、なほざりなる御心かな、なほいみじきものは女の身なり。斯う(六)思ひ果てられぬるにこそはあめれ、かく思ほさむ人は、萬のこと思ふとも効もあらじとて、

一條　白露(七)に色かはりゆく秋萩は玉まく葛もかひなかりけり

〔語釋〕

(一)大殿―おほとの

(二)未詳

(五)千蔭の

(七)心かはれる千蔭なれば葛の如く此方より纏はりゆきても効なし

〔考異〕

(三)あらしに―あらしと

(四)侘しさ―あやしさ―あやしき

(六)斯う―ナシ

とて、銀の透箱二つに、この北の方の御文ども、淺茅に付けたりしよりはじめて、返し奉れ給ふ。北の方心ほそきこと限なし。

おとゞ、月日の經るまゝに、おほし歎くこと慰む世もなく、おほし歎きて、山に籠りて行はむ、世の中は心憂きものと、思しあまりて、斯く宣ふ、(一)

千蔭　白浪の眞砂をすゝぐ(二)たご(三)の浦におくれてなぞも歎く舟人

左近中將、

隙もなく浪かゝるてふたごの浦に(四)うちよる波やかたみにはせむ

左衞門佐、

駿河なる浦ならねども白波はたごといふ名にもたち歸りけり

かく思ほし歎きつゝ經給ふほどに、かの一條の北の方、思ほし歎くこと劣らず、今(五)や今やと待ちわたり給ふに、大殿おはしまさねば、御座をうち拂ひて臥し給ふに、御前の花薄の折れかへりて招くを見給ひて、北の方、

(評釋)
(一)千蔭
(三)田子を子によせてよめり

(考異)
(二)すゝぐ—そゝぐ
(四)うちよる波や—よするなるなや
(五)今や今やと—今々と

る。

とて、

一條　思ひ出でてふみ見る毎にみなせ川つらき瀬のみぞ數多見えける

聞ゆべきことこそ思ほえね。

とて奉れ給へれば、このおとゞ見給ひて、千蔭「あな心憂や。よしとも思はぬに、氣色もなく、かく恨みつるかな(一)。こゝにこそ(二)、忠が(三)上に、萬に(四)いみじき事をものし給ひける恨(五)申さまほしく」と宣ひけれど、情付い(六)給へる人にて、

千蔭日頃は、怪しきことのあるに、思ひ給へさわぎて、内裏にも參らでなむ籠り侍るに、其處にも參り來ずや。此處にも(七)明日までえ在るまじく思ひ(八)給へられて、今は後見すべき人もなければなむ、此處にも取りあつめて(九)奉る。水無瀬川は、

淺瀬(一〇)こそふみも見るらめみなせ川ふかき淵にぞ我は沈める

〔語釋〕

（一）我は彼女を恨み居るに恨まるべき覺えもなき樣に却つて恨みかけて來し事哉

（二）我こそ

（七）我も

（九）其方の文を

〔考異〕

（三）忠が—忠こそが

（四）萬に—「に」ナシ

（五）給ひける恨—給ひけるに恨

（六）付い—付き

（八）思ひ—思う

（一〇）淺瀬—淺み

〔語釈〕
(一)亡妻
(二)物忌
(三)千蔭が
(四)千蔭の來ぬを
㈥千蔭一條北方に疎し。北方の憂慮。千蔭の悲嘆。北方の悲嘆。交情絶ゆ。一條北方の零落。
(七)千蔭が
(八)一條北方が
(九)千蔭
(一〇)存生中に返し奉らんとて

〔考異〕
(五)集めて—「て」ナシ
(六)せぬわざなくし給へ—せぬわざ〳〵をし給へども

り、故君(一)の今々となり給ふまでに宣ひ置きしことに隨はましかば、わが子を失はましや、けしからぬ所に通ひ行きて、悲しきことをみる事、腹ぎたなき事も、かへすがへす宣ひけり、とおぼし歎きつゝ、公事も知り給はず、たゞいもひ(二)精進をし給ひて、忠こそにあひ見むとのみ行ひ給ふ。

かゝる儘に、一條といふものを世にも聞かじ、と(三)思ほすに、かの北の方、(四)ものし給はぬことを思ひ入られて、大願を立て、陰陽師、巫を召し集めて(五)せぬわざなく(六)し給へど、驗なし。忠こそを失ひて思ほし歎くことに劣り給はず歎き給ふに、(七)おはしまし通ひける時に交し給ひける御文どもを取り出でて見(八)給ふに、まして悲しくおぼえ給ひければ、その御文どもを沈の箱一よろひに、取りあつめて入れて、(九)大殿に奉れ給ふとて、萬の悲しげなることをかき集め、

一條この御文どもは、これをだに形見とおもへど、世中に經むことも今日明日にと思ほゆれば、(一〇)侍る時に、とて奉る。あはれなるものは、世の中になむ侍りけ

〔語釋〕
(二)委しき事は言はずして只
(三)從來少しも不機嫌の樣子を父が忠こそに見せず
(五)忠こそは他人の噂さへせぬ人なり
(六)言ひにくき事なれど
(七)忠臣
(八)以下千蔭の心

〔考異〕
(一)告げ給ひしかば—告げたまひしかば—告げたうべりしかば
(四)たりつるに—たうべるに

も、宣ふことも侍らず。深きことにも侍らざりしを、如何なる事にか侍らむ、人の(一)告げ給ひしかば、いとあやしく覺え侍りしかど、(二)とかくも宣はで、「たいぐしきこと侍るなり。今は得かへり見るまじくなむ」とばかり宣ふことありし」[illegible]「それに倦んじたるなり。(三)聊なる氣色も見せ給はず、かたじけなく恐ろしき物に習は(四)したりつるに、許されぬ氣色のありけむに、思ひ倦んじにけるならむ。如何樣なることをか聞き給ひし」千蔭「千蔭が上に禍なることを奏し侍りける、となむ承りし」帝、「更に言ふことなし。(五)人の上にだに言ふことなかりし人なり。況や、更に親の上には言ひてむや。心を知れらむ人は、さる逆樣のことを言ふとも、眞と思しなむや。この事は、定めて知りぬ、人にはかられ給へるなゝり。(六)不便なることなれど、(七)左大臣の家、昔よりよろしからず心聞ゆる人なり。其のわたりより言ひ出したる事なゝり」大殿、ともかくも聞え給はで、泣く〳〵まかで給ひぬ。かくて思ほすに、(八)帶よりはじめて、樣々あやしき事どもをするは、一條のするなりけ

畏まりて參り給ふ。上、久しく參り給はぬことなど仰せ給ひて、嵯峨「忠は、などか(一)無かなるぞ。其處には何時ばかりか見えし」と宣ふ。千蔭「見え侍らで、この廿日ばかりになり侍りぬ」上、嵯峨「此處にも見えでさばかりになりぬ。切に暇を乞ひしかば、「童べも無き折なるを、暫はなものせそ」(二)と言ひしかば、「そこに惱み給ふことあり。訪らひにものせむ」(三)と言ひしかば、やむごとなき事にこそあなれとて、「あからさまにまかでて(四)唯今物せよ」と言ひしまゝになむ見えぬ。所々に求むれど無かんなるは、如何なるぞ」と宣へば、千蔭「千蔭もこゝばく求めさせ侍るに侍らぬは、世の中に亡くなりにたるにこそ侍るめれ。侍らましかばまさに見出で(五)侍らましやは」とて泣き給ふこと限なし。上、嵯峨「心憂し(六)とおもふべき事や物せられし。此處には、然思ひぬべきことも物せぬを、如何に思ひてにかあらむ。交らひのついでにも、こともなき人なれば、思ひ倦ず(七)べき事もあらじ。たゞにては世に隱れじ。親ばかりの責め宜はむにこそ、亡する事もあらめ」おとゞ、千蔭「此處に(八)

(語釋)
(二)當分里へ下るな
(三)父の病氣故見舞にゆきたし
(六)若し忠こそのつらく思ふべき事をせし覺えはなきか
(七)公の事につきて世を厭ふ樣な事はあるまじ
(八)私も

(考異)
(一)忠はなどか無かなる—忠こそは何とかあなるぞ—忠こそはなどかあなるぞ
(四)まかでて—まかで
(五)見出で—見て

とかしこき人にて(一)、皆うつし取りて行ふをも、知ろしめさで、帝は、里にあらむと思し(二)、父大殿は内裏にさふらふらむと思して、二十日ばかりになりぬる時に、内裏より忠君召しに、藏人所の小舍人來たり(三)。大殿おどろき給ひて、千蔭「内裏にはさふらはずや(四)。先つ頃、あからさまに罷出たりしかど、此處には侍らず、久しくなり侍り」と驚きさわぎ給ふ。御使、「忠君は、さふらひ給はで久しくなりぬ。一日許され給はざりける御暇を、せめて申して(五)まかで給ひにし後、更に參り給はずとなむ、頭(六)の君などいそぎ(七)奉り給へる(八)」おとゞ、千蔭「此處には、あからさまに罷出たりしかど、「許されざれしを強ひてまかでつるなり」と申ししかば、歸り參りたるとなむ、日頃思ひつる。内裏にもさふらはざなれば、唯今あやしがり求めさせ侍り」と奏せさせ給ひて、手を分ちて、大願たててもとめさせ給へど無し。内裏よりも御使を分ちて求めさせ給へど、聞えず。内裏より大殿召す。大殿、千蔭「畏(九)きこと聞召したなり。あらぬまでも恐ろし」とて參り給はず。立ちかへり(一〇)召すに、

（語釋）
（六）在原忠家をいふ歟
（七）急ぎて我を使によこしたる也
（九）祐宗が告げし忠こその讒言

（考異）
（一）いとかしこき人にて―ナシ
（二）思し―思して
（三）來たり―きたれり
（四）や―やは
（五）申して―奏て
（八）給へる―給ひつる
（一〇）立ちかへり―立ちかはり

〔語釋〕
(一)梅壺
(二)贈られたる歌につきては其の言ひ樣の變なるを疑ひ思ふ
(四)行方の分らぬ涙川ならばこそ相見る事の淀む事もあるべけれ
(五)受戒して
(六)師の僧が
(七)忠こそが

〔考異〕
(二)宣へる―宣ひつる

❼ 嗜部川の新入道。忠こその剃髮、帝千蔭を召す。讒計の露顯。千蔭の痛恨。

忠こそ　泣きたむる涙の河の水ふかみあひ見む程の淀むべきかな
我が君や、思さむことの畏きをなむ、畏まり思ひ給ふる。

とて、近くつかひ給ひける童して、御息所の御許へ奉れ給ふ。御息所、「如何におぼして宣へる(二)(三)ならむ」とて御返事、(一)

梅壺　ひさしく参り給はぬは、悩ましくしたまへばにこそありけれ。心細げに宣へるは、何事ぞや。はや参り給へ。まことや、淀みは、そが怪しきをなむ。(四)行方知らずば。

とて、

梅壺　なみだ河底なる水の早ければ瀧つ瀬見むと思はざりしを

忠こそ、日暮れぬれば、行ひ人諸共に出でぬ。

かくて山に入りてすなはち、頭おろし、忌むこと受けて、(五)いとかなしげなる行ひ人にて、この就きて去にし師に法など受けつくして、(六)かしこき智者なりければ、い(七)

〔語釈〕
(一)梅壺女御、祐宗の寵せし人
(二)俊蔭の巻にをりめ風を時の右大臣に奉りし事見えたり
(三)父千蔭
(五)臨岳、琴の首の絃を受くる所、絃眼といふ穴ありて絃を引きとほす
(七)病が直らずば

〔考異〕
(四)一聲—ナシ
(六)ける事—ける事を

ぞ見る、とて入り給ひぬ。

忠こそ、世の中思ひ離るゝにも離れ難きこと二つなむありける。一つには　かの(一)梅壺の君に物をだに聞えずなりなむことと思ひ、今一つには、年頃弾きあそびつる(二)をりめ風を、また弾かずなりなむことと思ひ、また親の御上をば更にも言はず。(三)おとゞ物に出で給ひ、人どもも無き折なりければ、この琴を(四)一聲かきならし給ひて、(五)りうかくのもとに斯く書きつけ給ふ、

忠こそひく人も空しくならば琴の音もうつせみのみや今は調べむ

と泣く／＼書きつく。梅壺に御文書く。

あやしく悩ましき事の侍れば、えまゐり侍らぬ程の、久しくなり侍りに(六)ける事。なほおこたらず侍らば、得しも參らずやなり侍らむ、と思ひ給ふるになむ心細く侍(七)る。

とて、

【語釋】
(一)人の願を叶へてこそよけれ
(三)「ゆく先の安からん事を思ふなり」などあるべし
(四)待ちて居よ
【考異】
(二)べきにも―べき事にも

たらひ給ふ、忠こそ「幼くより、行の道に心進みてなむ侍る。宮仕せじと、親の許にかくて侍れど、心もとゞまらず、身を砕きて山林にまじり給ふ人なむ、羨ましく覺ゆる。斯くなむと公にも申さまほしけれども、許さるまじければ、あらはれたる師には、えなむ就くまじく侍るを、御弟子にやはなし給はぬ」といふ。行ひ人、「など宣ふことぞ。山林にまじる者は、世の中をおぼろけに思ひ離れて、身を無きものに思ひなして、するものなり。そもそも堪へおはしましぬべしやは」忠君、「など斯くは宣ふ。行する人は、(一)人の思をなし給ふこそよけれ。行すゝめる人を、否び給ふは、ひがみたる心地なむする」行ひ人、「やすらかに住み給へる御身の、草木かづらの根を供養にして、木の皮、苔を敷物にし給ひなどせむには、えしも堪へ給ふまじく思ほゆればなり」忠こそ「安らかなる事に久しかるべきにも(二)あらねば、今苦くてゆく先の事を思ふなり(三)」と宣ふ。行ひ人、「さらば御心にこそあらめ。いと尊き事なり」と聞ゆ。忠こそ「さらば、このわたり近き所にものし給へ(四)」とて、人氣色も

〔語釈〕
(一)千蔭邸の
(二)千手觀音の呪言
(三)侍所に詰め居たる家來ども
(七)食はする事叶はずして
(九)御願ひ申すなり
(一〇)私自身は
(一一)「出て給ひ」歟
(一二)家人などに言ひつけて布施する事はせじ

〔考異〕
(四)年—ナシ
(五)今年—今年は
(六)絶えて—たらで
(八)えたば…侍れば—えたまはで労れぶしせむとてとゞまり侍れば

けたるが、弟子三人、童子五人連れてありけるが、糧絶えて、大殿(一)の御門に來て、千(二)手陀羅尼を尊く讀む。いと尊くきこゆれば、忠こそ、起き走り出でて見るに、いとになき行ひ人なりと見て、忠君をがみ給ふ。(三)さぶらひの主たち、「何でふ行ひ人を、斯う伏しをがみ給ふ」とて、殿の中ゆすりて、忠君の下り給ふ所に、五位六位、ひざまづき畏まる。山伏見て、これはいとかしこき人かな、家の子なるべしと思ふに、忠こそ山伏に問ふ、忠こそ「いづくに住み給ふ行ひ人ぞ」山伏、「年(四)若かりしより、鞍馬の山にこもりて、今年(五)三十年になり侍りぬる山伏なり。去ぬる七月より、修行にまかり歩くに、供養絶えて(六)、今日三日、童べに物もえたばで(七)(八)、つかれ臥し侍れば、とり申すなり(九)。山伏は穀斷ちて久しくなり侍りぬ」忠こそ、「しばし此處に立ち給へ」と言ひて、(一〇)内に這入りて、冬の裝束一くだりを、いと小く疊みて、みづから持て出でて給ひ(一一)、忠こそ「人などにも更に物せじ。(一二)これを御童子の中に物せむ」とて取らせ給ふ。弟子一人市へ持て出でぬる間に、忠こそ山伏にか

（語釋）
（一二）何時迄も其方を寵愛する事は出來さうもなし
（三）以下忠こその心
（六）父が
（一一）以下忠こその心

（考異）
（一）え思ひ—「え」ナシ
（四）百の—ともの
（五）咎には—咎とは
（七）給へる—給ひつる
（八）給はぬは—給はねば
（九）思す—思はす
（一〇）思す—思はす
（一二）給はねば—給はぬは
（一三）見つゝは—見れば

の遺言なれば、忠世に出で來て後、いさゝかなる事を知らずなむあるを、されど、我を相思はぬやうに聞ゆれば、（一）（二）え思ひ果つまじくなむある」と宣へば、忠こそ、「怪しうも宣ふかな。何事か侍るらむ」と聞えて、涙をほろ〳〵とこぼして立ちぬ。曹司にこもり臥して思ふ、（三）こゝらの年頃、天を逆様になすとも、（四）百の兵士して親を射るとも、汝が（五）咎にはとがめじ、と（六）言ひわたり給へる（七）を、御爲にいさゝかなる過も仕らず、塵ばかりの氣色も見ぬを、如何におもき罪ありと聞召してかく宣ふらむと、恐ろしく恥かしく、思ひ焦れ臥せり。されど、大殿は、忠こその見え給はぬは（八）、内裏へこそ參りつらめと思す（九）、内裏には里にこそ在らめと思す（一〇）。忠こそ、（一一）更におとゞに見え奉らじ、山林に入りなむ、親の片時見え給はねば（一二）、心細くかなしくこそ覺ゆるに、許されぬ御氣色を見つゝは（一三）、何を頼みてか宮仕もせむ、と思ひつゝ、入り籠りておはす。

五日といふ日のつとめて、鞍馬より、若くより籠れる行ひ人の、髮ところ〴〵白

㊂忠こその歸省。父の不興。托鉢の僧。忠こそ托鉢の僧に隨ひて遁世す

〔語釋〕
(二)千蔭が
(三)一條北方が
(四)千蔭
(七)父上はなぜ久しく參内せられぬぞ
(八)父が
(九)亡妻

〔考異〕
(一)いとよくーかく
(五)さふらふにーさふらへど
(六)給はねばー給はぬは

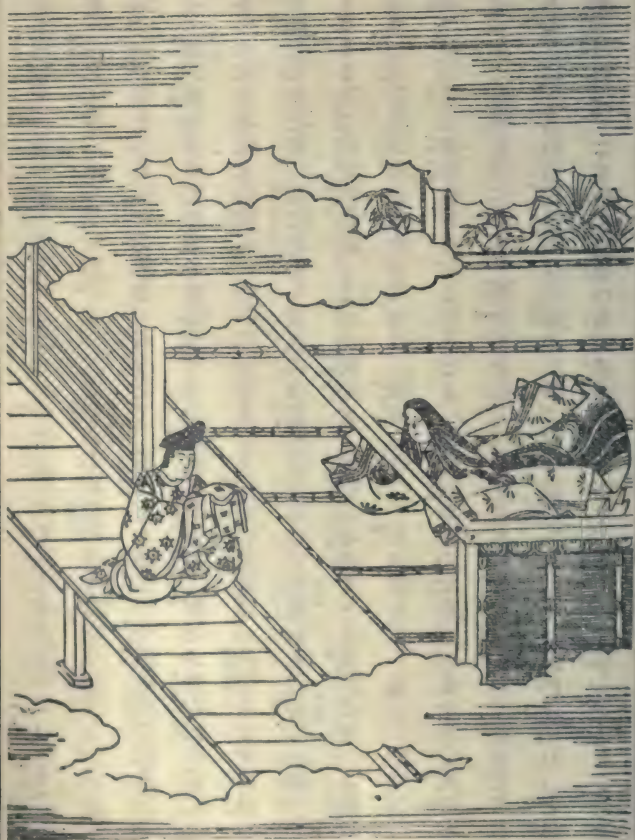
る、告げ給ふなむ嬉しき」と宣ふ。祐宗何の榮もなくて歸りぬ。

畫詞　これは千蔭の大い殿。

斯くてかの北の方に祐宗まうでて、祐宗「いとよく(一)聞えつれば、「今殺しにやらむ。いま上にも申して殺さむ」と宣ひつる(二)」と聞えつれば、いと嬉しと思す。(三)父おとど、(四)いと怪しき事をも聞くかな、と思ほし煩らふに、忠こそ、「内裏に久しくさふらふに、(五)大殿の久しく參り給はねば(六)戀しう侍るにまかでむ」と奏すれど暇ゆるさせ給はぬを、強ひて申して、あからさまにまかでぬ。おとゞ、千蔭「物食はせよ。などか久しくまかでざりつる」と宣へば、忠こそ「暇も賜はせざりつれば。などか久しく參り給はざりつらむ。(七)内裏にも、おはしまさばこそ、(八)賴もしくて、宮仕もつかまつりよけれ。參りたまはねば、知らぬ心地して、心細う侍れば、暇も許されざりつるを、強ひてまかでたりつる」と聞ゆれば、おとゞ涙をほろほろとおとし給ひて、千蔭「あはれ。然ば、然や思ひつる、我も、片時見ぬをば然なん思ふ。故君(九)

物も宣はで、怪しき(一)事なり、忠こそ、我が上に然ることを言はむやは、又(二)むげに斯く恐ろしきことを告げむやは、など(三)恐ろしく思召すものから、斯くいらへ給ふ、千蔭「如何なることにかあらむ、只今とて、兵士ども來て、千蔭を殺さむといふとも、(四)彼が咎をばえなむ宣ふまじき。その由は、忠が母、何でふ契か侍りけむ、(五)いとらうたくおぼえし程に、いみじくてまかり隱れにしかば、片時もまかり後れじと思ひしかども、心にもあらでまかり留りて侍るに、夜晝(六)おもひ侍る(七)人の、今々(八)となるまで、「わが代には、(九)これを顧みよ。逆樣の事ありとも見知るな」と言ひしかば、忠こそ二人となき子なれば、如何らうたく思はざらむ、ましてかの遺言を思へば、世を逆樣になさむといふとも、心に叶ふものならば、まかせて見むと思ふ。かゝる事をいたして千蔭が身を徒らになすとも、忠が(一〇)母に(一一)おくれて死なむとせしかば、其れに代るとなむ思ふべき。かの世にても、(一二)今一度あひ見む、と思ふ本意侍れば、とくまかり隱れ(一三)なむは嬉しかるべき。さてく怪しきことの侍りけ(一四)

(語釋)
(一)以下千蔭の心
(二)祐宗も一向途方なきにかく恐ろしき告口をすべきに非ず
(四)忠こその咎になる事は
(五)非常に彼女を愛せし故に
(六)我が晝夜戀ひ慕ふ亡妻が今はの際まで
(九)忠こそを
(一一)妻におくれし時已に死ぬ積なりし故
(一二)妻に

(考異)
(三)恐ろしく—ナシ
(七)侍る—まふちふ
(八)今々となるまで—はかなく見給ふる時
(一〇)忠が—忠こそが
(一三)隱れなむ—「な」ナシ
(一四)ける—けり

〔語釈〕
(一)千蔭の罪あらはれん時忠こそに罪を及ぼし給ふな
(二)以下帝の詞を作りて言ふ也
(三)朝服なるべし
(四)前日一條北方に含められし計
〔考異〕
(五)傍なる—傍の

るめる、然あらむ時、忠こそを尋ねらるまじきものなり、大臣も心はつかふもの
なりけり、(一)忠こそまろが制に従ふべくもあらねばなむ、忍びて奏する、と申しし
かばなむ、上、(二)そは怪しきことにもあるかな、定かなる事にあなり、何を飽かず
とてか、公にも、悪き心を思ふべき、おほくの序を越してこそ、大臣の位にはな
しつれ、然思ふものならば、伊豆の島にこそつかはすべかなれ、とこそ仰せられ
しか。人聞かず、祐宗一人なむ承りし」とを告げ給へ」祐宗、「承りぬ。いと
も易き事なり。いとよくとり申さむ」と言ふ。北の方、(三)てうふくなどいと清らに
調じて、妻の料などもいと清らにて取らせつ。
これを祐宗得て、後に身のならむ様も知らで、千蔭の大殿にまゐり、祐宗「切なる
こと申さむ」と言ふ。おとゞ逢ひ給へり。(四)一日のたばかりごと、祐「斯う〳〵の事
ありとは知ろしめしたるや。愛子の御上を、かくとり申すはたい〴〵しけれど、
承るに、傍(五)なる物かけ落つる心地すれば、斯くとり申すなり」おとゞとばかり

〔語釋〕
(一)言ひ出し得ぬ
(二)千蔭に
(三)非難すべき所なき
(四)「見給へれ」歟
(五)帝が
(六)帝の御寵愛あるが當然の樣に出來て居る
(七)玄性知れず。後に衆雅の姿となる。此處の意は忠こそは御局にも召使はれ梅壺も忠こそをよく知り居らるゝ故梅壺が一切の事を帝に告ぐるならんとなるべし
(八)讒言の樣子を梅壺が知りて
(九)忠こそが
(一〇)千蔭に
(一一)以下忠こそが帝に奏したる詞としていふ
(一二)涵と

言へば、おぢきなくてなむ、えものせぬ。君やは、忠こそが帝に斯く奏したるやうに告げ給はぬ」祐宗、「いと易き事なり。かく怪しき人の、いかで時めき給ふらむ。なほ見給ふには、こともなき人とこそ見給つれ。萬の事、忠こその奏するまになむ。忠こそならぬ人、上になきものになむ思したる。げに、思ほす事いと理なりや。宮仕をし給ふこと、御前片時去らず。思されぬべくこそはものし給ふめれ。内裏の御局に、忠こそ召使ひ給はぬやうなし。梅壺の御息所、えかくし給はざめり。これを見給ふればこそ、いと恐ろしけれ。この御息所は、たゞ今の時の人なり。氣色を御覽じてなほ候はせ給ふになむ恐ろしき」北の方これを聞き給ふに、人にもかく思されけりと思ふに、ねたき事限なし。かくて祐宗に宣ふ、一條「親に宣はむ樣は、「おのが親の上を、かく申すまじけれど、罪ある時は、命をも取らるゝものなればなむ、かゝる事の由を奏するなる、父の大臣なむ、忍びて后宮にさふらひ給ひけるを、斯うて心よからず、帝かたぶけ奉らむ、と騷ぎ侍

き事かな。古の御勢のやうにもおはしまさゞなるをなむ。今も同じごと御徳は(二)おとり給はざなるを、などかは然はものし給はざらむ」(一)北の方、「思ふ様にもあらず(三)や」など言ひて、一條「いさゝかなる事、謀り聞えんとてぞや。人には宣はじとてな(四)む」祐宗、「仰せごとは、何かは否び聞えん」北の方、「嬉しきこと。(五)聞えむ事は、このものし給ふ人は、(六)われ歳も老いぬ、今更に人に見え奉らじ、と思ひしを、(七)一人あるを、(八)徒然と、物心細げに思ひたりしかばなむ、(九)とかくものするを、(一〇)(一一)あさま(一二)しきこと、忠こその、如何なる事かありけむ、あさましき心つきて、(一三)夜晝言へど、見知らぬやうにて侍れば、思ひ狂ひて、「大方は父大殿のいますかればぞ、斯くあなづり給ふ。いますからずば、(一四)何かつゝまむ。この道には(一五)親子なきものなゝり。この大殿帝かたぶけ奉らむ、と奏して、流させ奉りて、つゝむことなくて責め言(一六)はん」となん言ひたばかるなる。これなむ己が身に苦しき事なる。「かゝる事なむある」と、彼處に語らむと思へど、(一七)かゝる習を、(一八)昔より、腹きたなきものに人の

(語釋)
(一)此下に「憚りさふらふ」などの詞を省きたり
(二)經濟は不相變豐なるを
(三)此頃は不如意なり
(四)他言はせらるまじと思ひて
(六)千蔭。以下千蔭との關係を自分の都合よき樣に言ひなす也
(七)自分が
(九)千蔭が
(一〇)自分は據所なく千蔭の戀に應じたりしを
(一三)我に懸想する心
(一五)戀路にかけては
(一六)誰憚らず一條北方に戀を迫らん
(一七)千蔭に
(一八)睦しき母子の中を

(考異)
(五)嬉しきこと聞えむことは—嬉しき事に思ひ聞けん
(八)あるを—あるものどもの
(一一)とかく—ときく
(一二)するをあさましきこと忠こそ—するに忠こそ
(一四)いますからずば—ナシ

なく籠り居たるを、この北の方呼び取りて、物語などし給ひて、一條「昔は、睦まじき者には君をこそ賴み聞えしか。されども(一)君隱れ給ひにしかば、つれなきをしもなにかは、とてなむ。おのが身は(二)女なり、睦まじき人しなければ、君一人をこそとざまかうざまに賴み聞ゆれ」祐宗、「甚だかしこし。年頃も、宮仕なども忙しく侍るうちに、仰もなければ、畏まりてなむ、昔の如も候はぬ」北の方、「さりとも、此處には、昔忘れがたさに、年頃のつらさをも忘れて聞ゆる。如何に、此の頃は(三)内裏へは參り給ふや」祐宗、「さいつ頃、侍り所に、衞府づかさ(四)どもや知らず侍りけむ、心にくゝ思ひて、盜人入りまうで來て、一つ二つ侍ひし(五)裝束なども皆さがし取りて、彼處に侍る、物のいさゝかなる調度など、皆あさり取り(六)てまかりにしかば、俄に裝束えし侍らず。この頃、内裏に召し侍れど、え參らでなむ」北の方、「いとほしき事かな。などかは(七)然も物し給はざりむ。いさゝかなる事は仕うまつりてまし物を。今、よからずとも御裝束は調じて奉り侍らん」祐宗、「いと嬉し

〔語釋〕
(一)忠經逝去後は一向御出もなかりし故此方から殊更に親しみ寄るでもなしと思ひて過ぎたり
(四)衞府の役人の油斷にや
(六)博打に打ち入れて失ひたるを斯くいふ也
(七)なぜ斯く〳〵と知らせては下されぬ

〔考異〕
(二)身は女なり—身には女でも
(三)内裏へは—「は」ナシ
(五)侍ちひし—侍りし

（語釋）
（二）內裏の東門の衛士の詰所
（三）一條北方に欺へられし通り白狀す
（四）忠こそ以外に此帶に近づく人もなかりしといふ事歟
（五）博打をつれて
（六）此事を考へる丈にても
（七）千蔭
（八）「ざれども」歟
評　千蔭の款止。一條の北方祐宗を語らふ。祐宗忠こそを千蔭に讒す。
（九）悪匠
（一〇）博奕に打込みて
（考異）
（一）取りて—「て」ナシ

取りて（一）、博打を左衛門（二）の陣に召して問はせ給へば、博打責められ困じて（三）、かのたばかりごとを申す。おとゞ聞き給ひて、心たましひ惑ひて、萬の事おぼえ給はず。返すぐ\あらじと思せど（四）、寄る人もなかりしを思すに、いふかひもなくて、千蔭よし、言はぬものを強ひても問はじ」と宣ひて、ゆるさせ給ひて、率て（五）まかづ。さて博打召し寄せて、絹三十疋賜ひ、千蔭「天の下さかさまになるとも斯かる事あらじと思へども（六）、かけても心たましひ騒ぎて、いといみじければなむ、え確に問ひ定めぬ。このこと人に漏らすな」と宣ひて、ゆるさせ給ひつ。

おとゞ返すぐ\思ほすに、怪しく、あらじと思ほせど、失せ樣の怪しかりしを、（七）何でふ事なり、とおぼすこと限なし。さりとも、忠こそに、「かゝることなむ人言ふ」とも宣はず、北の方にも、「この帶出で（八）來たり」とも申し給はず、事無ければ、北の方し煩らひて、又たばかる樣（九）、故大殿の御甥、祐宗といひて少將にて有りける、心よろしからず、博打不孝の者にて、身の裝束などは皆（一〇）うち入れて、せむ方

人在原滋家心つきたる人にて、かしこく驚きて、滋家「これは、世の中にあり難き物持ちたる人かな。許多見つる中に、これに似たる帶なし。內宴に右の大臣殿のさし給へるにいとおほえたり。さりとも其れならむやは」左衞門尉なる人のいらへ、「その帶は、上の御覽じて、奉れとおほせ給ひしを、「累代に傳はれる帶なり。千蔭が後出でまうで來ずば奉らむ」と奏し給ふを、忠こその帶にこそなしつらめ」など言ひて、「さばれ、上に御覽せさせむ」と言ひて、持てまゐりて、奏ると奏す。上御覽じて、いとかしこく驚き給ふ。嵯峨「これは、千蔭のおとゞの帶にこそあめれ。うれたき人かな。わが乞ひしには、「子出で來なば取らせむ」と言ひしを、さにこそありけれ。不思議なることかな」とて右大臣を召して、嵯峨「いとかしこく惜まれし帶は、出だし立てられにけりや」とて笑ひ給ふ。おとゞ驚きかしこまり給ひて、千蔭「この帶は、去ぬる二月十二日に、忠經の朝臣の家にて盗まれ侍りし帶なり。これによりて、萬の神佛になな願し申しつる」と申して、すなはち帶を

（語釋）
（一）纖細なる
（二）よく似たり
（四）「給ふを」は「給ひしを」なるべし

（考異）
（三）いと—ナシ
（五）なしつらめ—ならめ

と有る財、皆わたさむ。願はむことは、難かるべき事なりとも、さながら成さむ」と宣へば、博打、「おほせ給はむ事は、難かるべき事なりとも、承らむ」と申す。北の方、この帯と絹十四あまりとを取り出でて、一條「この帯、(一)右のおとゞの内裏へ參り給へらむ時、藏人所に持てゆきて「賣る物なり」とて出だせ。價問はれば、千五百貫といらへよ。切めて問はるゝ物ならば、人に聞かせずして、大殿に、「忠君のせさせ給ふなり。おのれがする事にあらず」と言ひて、「持てありけど、買ふ人もなければ、持てまゐりたり」と言へ」と宣へば、博打うち傾きて、とみに取らず。北の方手を摺りて、(二)いつゝぎぬ五十匹とらせて宣ふ、一條「いと少けれども志なり。(三)いま又もありなむ」とてとらせ給ふ時に、博打「いと易きことに侍り」とて去ぬ。

博打、内裏へ大殿もまゐり給ひ、上達部、御子たち多くまゐり集まり給ひ、忠こそもさぶらひ給ふ時、藏人所に帯を持て來て、博打「賣るなり」とて(四)いでたる時、藏

〔語釋〕

（一）千蔭

（二）「いつゝぎぬ」とかける本もあり。「いつぎぬ」にて伊豆國のきぬならん歟

（三）又與ふる事もあるべし

（四）「いでたる」は「いだしたる」歟

（語釋）
（一）歌の意を誤解して
（二）難くせをつけん
（三）千蔭
（四）正月廿一日仁壽殿に行はるゝ宴會
（五）用ひし儘に
（七）五代六代
（八）窮迫し切りたる

（考異）
（六）給へりける—給へる
（九）まことや—まことに—まことは

心あやまり（一）給ひて、我に恥見すること、いかでかこれが報せむ、と思ひなりて、何事を言ひつけむ（二）と、目をつけて見給へど、言ひつくべき事もなし。強ひて思ひたばかる。父大殿（三）の御許に、親の御時よりつき〴〵傳はれる名だかき帶、內宴（四）にさ（五）し給へり（六）ける儘に、一條殿におき給へりけるを、この北の方とり隱し給ひて、失せぬとのゝしり給ひけり。大殿おどろき騷ぎ給ふこと限なし。さま〴〵に、これが出で來べき法を行ひて、千蔭「こゝら五つぎ六つぎ（七）と傳はれる帶を、かく我が代にしも失ひつる事」とて、心をまどはして歎き給ふ。千蔭この帶をさすこと、大嘗會、今年の內宴になむさしつる。大嘗會の年さしたりしを、上御覽じて、「この帶奉らば、位をも讓らむかし」と仰せられしを、しばし思ふ心ありて奉らざりし。いとほしく失ひつる事」といみじく思しなげく。北の方、いかで、この帶を忠こその取りたる、と父大殿にきかせ奉らむ、と思して、世の中にかしこき博打の、せまり（八）惑ひたるを召して、一條（九）「まことや、わが言はむこと聽きてむや。あり

㈣ 五月の節。一條の北方と忠こそと歌を贈答す。誤解。一條北方忠こそを陷れんとす。帶の紛失。博徒帶を藏人所に齎る。

〔語釋〕
(一)懸想の意をほのめかしたる
(二)忠こそは知らぬ顏して居たるに
(三)一條北方が
(四)御馳走をならべて
(五)菖の臺歟
(七)君を思うて我が流す涙の川は菖蒲の生ふる程に深きをせめて今日でも察してくれよかし
(八)忠こその心
(一〇)北方に他の男も通ふ故相手になりにくしと父に代りてよめる歟

〔考異〕
(六)はしのだいに置きたり―置きたりはしのだいに
(九)いとほしければ―いとほしかりければ

畫詞 こゝは千蔭の大殿。

かくて久しく、大殿一條殿へまうで給はず。忠こそ、あこ君の許へ時々かよふを、繼母の北の方、羨ましと思しけれど、いと片思なり。(一)氣色ある消息きこえ給へど、(二)心得たるいらへなどもし給はぬ程に、五月五日になりて、(三)節供などいと淸らに調じて、大殿やものし給ふとて、例の人にも食はせで待ち居給へるに、忠こそひとり來ぬれば、一條「よし、彼の御代に」とて、忠君の御前にまゐり給ひて、(四)小さき菖蒲に斯く書きて(五)(六)はしのだいに置きたり。

一條(七)今日だにも生ふと知らなむ菖蒲草なみだの河の深きみぎはに

とあり。忠君見て、(八)いとあやしく、斯く宣ふは、大殿にあしと思はせ奉らむとにやあらむ、と思ふに、まして(九)いとほしければ、たゞ斯くなむ、

忠こそ(一〇)「よる浪のすゞぎわたれば菖蒲草なほ思ふこそ苦しかりけれ

かしこき事ならましかば嬉しからまし」と聞え給へり。北の方これを見給ひて御

出だしやらじとて、萬に言ひ留め、御前なる人も、夢語(一)などして、聞え留むるけしきの著く見えければ、大殿をかしと思しながら、二三日ものし給ふ。さて、四日といふに、出で給はむとするに、一條「物忌し給ふべき夢を見つ」と聞え給へど、千蔭「内裏より召あり」とて急ぎ出で給ひぬ。かくて我が御殿におはして、やすらかに物などまゐりて大殿、千蔭「あやしく物こそ食はるれ。かの一條は、口こそ悪くなれ」忠こそ、「さるは、彼處にこそよき物は侍らめ」と申し給へばおとゞ、千蔭「玉の臺(二)もといふは、それぞかし」と宣ひて、北の方の御帳のうちに、御座所して、御殿籠りなどするに、忠こそ、「今宵は一條(三)殿にはわたらせ給ふまじきにや」ときこえ給へば大殿、

千蔭　年ふれど忘れぬ人の寐し床ぞひとり臥すにも嬉しかりける

とて臥し給へば、忠こそ、

(四)(五)見し人もなみだの上に臥すものを床(六)の下には数もかくらむ

（語釋）
（一）夢見あしければ今日は出で給ふな抔といふ也
（二）六帖「何せむに玉の臺も八重葎生へらむ宿に君とこそ寝め」
（四）比歌誤りあるべし意味通じがたし

（考異）
（三）一條殿―「殿」ナシ
（五）見し人―ねし人
（六）床の…かくらむ―やどの下にはかずもかへなむ

處にもまゐり來ぬ。今ためらひて(一)。まことや菅原は、

荒れまくは君をぞをしむ菅原や伏見の里のあまた無ければ

身こそ餘所なれとかいふ。思ほし屈せざらめ。

と聞え給へり。大殿、いとほしがりて、かく宣ふを今宵ばかりはまうでむかしと思して、その夜さり(二)、一條にものし給ひて、下りて入り給ふまでは、なほ絶え給はじと思す。内に入り給ふすなはち、ありし樣に、何しに來つらむと思ほして(三)、立ちかへ(四)り去なまほしく思せど、人目を思してしばしものし給ふに、心地も空にて、物もいはで居給へるに、この北の方は、心もとなく珍らしく物し給へれば、喜びながら出であひて物まゐりなどし給ひて、月頃のつらさを恨みなどし給ひてよしばみ(五)給へれど、をさをさ答もし給はず。この北の方を(六)見奉り給ふに、病の重る心地し給へど、氣色にも出ださじと思して、心にもあらぬいらへなどし給ひて、しばし物し給ふほどに、いと苦しう覺え給へば、何事にかことつけて去なましと思すに、北の方、

〔語釋〕
(一)暫時休息してやがて參るべし
(三)こゝへ無沙汰はせじと
(五)あぢをやり

〔考異〕
(二)夜さり—夜さりは
(四)立ち…人目を思して—ナシ
(六)北の方を—「を」ナシ

こそ故大殿(一)の御姪に、あこ君とてかしづき給ひしに、忍びて通ふ。この北の方、いとかしこく心づけて、一條「おとゞの見えがたくし給ふに、(三)いと嬉しく見え給へば、御代になむ頼みきこゆる。御後見(二)は、いとよく仕らむ。あだにな思しそ」など宣へど、知らず顔にてあり經る程に、千蔭のおとゞ内裏に參り給ひて定め給ふ事あるにつけて(四)、いと久しく此處に見え給はず。この北の方、思ひ入られて、湯水もまゐらず、侘しげに待ちわたり給へど、御文をだに聞えで、月頃になりぬ。北の方、待ちわづらひ、術ながりて斯く聞え給ふ。

一條　菅原(五)や伏見の里をわするゝはわが荒れまくや惜まざるらむ

と聞ゆれば更なりや。いみじき恥をも見せ給へるかな。

と恨み聞え給へれば、大殿見給ふに、いとゞ志劣るこゝちし給へど、さて(六)あらむやはとて、返事(七)かき給ふ。

千蔭　なやましく侍りて内裏へも參らず、まかりありきもし侍らねばなむ、其

（語釋）
（一）忠經
（二）千蔭は無沙汰勝ちなるに
（三）君こそはよく來て下さる故
（四）かこつけて
（五）古今集「こゝにのみわが世は經なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し」
（六）打捨て置く譯にも行かぬとて
（考異）
（七）返事—かへし

て惑ふ人に、露塵、物取らせむの心なく、年月になりぬれど、さるいみじき御徳に、紙一枚をだに(一)奉り給はず。この北(二)の方は、出で來添ふ物はなくて、御櫛匣の物、さては田畑、賣りつくして、數知らずつかひ給へば、限なき財といへど、貧しくなりぬ。

【書詞】こゝは千蔭の大い殿。

かくてこの(三)大殿、なほ絶えはて給はで時々き通ひ(四)給ふに、年月過ぎて、忠こそ十三四になりぬ。かたち淸らに、心のなまめきたること限なし。よき程なる童にて、遊いとかしこく、こともなき色好(五)にぞ生ひ出でける。女御たちをも見馴らして、帝、限なく時めかし給ふ。たゞ今の世には、忠こそにまさる容貌なく、才なべてならで、限なき人にて、「忠こそが世なりや(六)」と言はるゝまで、いとめでたし。かかる程に忠こそ、(七)大殿のものし給へば、時々、內裏より一條殿へまかでなどすれば、この北の方、(八)いとめでたしと思(九)ほして、見知らぬいらへなどし給ふ程に、忠

〔語釋〕
(一)一條北方
(三)千蔭
(四)一條北方へ
(七)父の行く處故
(八)忠こそに惚れて懸想だちたる挨拶をする
㊂ 忠こそ帝の寵遇を受く。一條の北方の義姪あこ君の許に通ふ

〔考異〕
(二)なく—なし
(五)にぞ生ひ出でける—にて生ひ出でて
(六)世なりや—世や—世なり
(九)思ほして—おぼして

（語釋）
（一）北方が我身のどの樣になるも構けず
（三）珍らしき食物を並べ
（四）千蔭の樣子
（七）あのざまで琴を彈いたりとて何になる
（九）「くち」は「うち」の誤にて眉をひそむる事なるべし
（一〇）北方一人だけ得意になりて
（一三）亡妻に仕へ居し侍女はすべて思こそに仕へしめんの意歟
（一六）比邊誤脫あるべし
（一七）亡妻
（一八）法華八講、僧を招じて法華經の講釋をせしむる法會
（一九）「せむ」は衍文歟

（考異）
（二）立てて—立て
（五）思はせば—思はす
（六）人も—「も」ナシ
（八）樣—まね
（一一）給ふをば苦しがれど—給ふ事は苦しけれど
（一二）給ひつ—給ふ
（一四）やらじ—やらじと
（一五）「まなごぞと」歟

て我が身のならむをも知らず、まして仕うまつらむ人のならむ、はた知らず。大殿稀（一）にものし給へば、箸觸れもし給はぬ御臺を七つ八つと立てて（二）、有り難き物を（三）しするに、身にも觸れ給はぬ御衣を、綾かさねを、御衣掛にいろ／＼に縫ひかけ、興ありと思されむとて、箏の琴、琵琶など取り出でて、萬の聲にしらべて彈き給ふ。（四）聞きめで給はで、逃げなまほしく、かしかましく思ほせば（五）、御前なる人も（六）、「た（七）いだいしき樣（八）しつゝ何にするもの」（九）とくちひそむも知らず、上中下すげなき遊を、心一つ（一〇）やりて他心なし。この大殿、こゝにものし給ふをば苦しがれど（一一）、山々に修法行ふ力になむ、年月の經るまゝに志は劣れど、なほ絶え給はざりける。

忠こそ十歳になる年、殿上せさせ給ひつ（一二）。帝思すこと限なし。父おとゞも、女子ものし給はねば、忠こその母君に仕うまつりし（一三）限は外にやらじ（一四）、我世の限はまなご（一五）とぞ宣ひし所にさふらはせむ、月に（一六）一度故君の（一七）御爲に八講（一八）し給ふ、非の内に出で來む物をばせむ（一九）、忠こそ一人に、萬のものを取らせむとこそ思へ、斯う財をつくし

今卅餘、女は五十餘ばかりなり。よき程なる親子と見るばかりなる中にも、千蔭のおとゞは、忠こその母君より外に、女二人と見給はず、かたち清らに、らうら(一)うじく、年若きを見給ひて、難かるべき契をして經給ひし程に、別れ給ひしかば、(二)(三)如何ならむ世に、おぼえ給へらむ人をだに見むと、吹く風ふる雨の脚にだにつけ(四)て、歎きわたり給ふほどに、心にあらぬ人の、年老い容貌見にくきを見給へば、いとゞ昔のみ思ひ出でられて、(五)稀々にものし給ひつゝ、(六)(七)心解けたることも無くてあれども、北の方は、財をつくして勞り給ふこと限なし。わが殿人の食ひ著し物を(八)(九)も知り給はねば、昔の世の君の御時には、豐に食ひ著し者は「身滅ぼす」と、(一〇)集まりて、この殿人は泣き侘ぶることも知り給はず。(一一)ことなる思なき人の、ようせず(一二)ば絶えもしぬべければ、山々に修法を行はせ、夏冬の御裝束、朝夕さりの御物に、(一三)多く物をつくして、頭より脚末まで綾錦を裁ち切りて、見給はむ草木まで著せ飾(一四)らむ、この大殿に仕うまつらむ上下の草刈牛飼まで、飽き滿たせてあらせむ、と(一五)

〔語譯〕
(一)千蔭の亡き妻をいふ
(三)珍らしき睦ましさにて
(四)亡妻に似たる
(六)一條へはたまさかにのみ行きて
(八)千蔭のもてなしに妻中になりてわが家人の衣食の世話もせぬ故
(一〇)是ではたまらぬと
(一一)格別北方を愛しても居ぬ千蔭が動もすれば來なくなりそう故
(一三)食物
(一四)千蔭の見るべき
(一五)千蔭に

〔考異〕
(一)なる—なりける
(五)のみ—「み」ナシ
(七)稀々に—夜がれに—まれに
(九)わが—ナシ
(一二)よう—よく

北方こゝのみや淺茅しげしと思へどもまた葎(一)おふる宿も有りとか

同じくばおなじ野にや思召し(二)給はぬ。

とて、をかしき淺茅に御文さしたり。さて奉(三)り給ふ。あやき、千蔭の御殿(四)に參りて門に立てり。殿の人見つけて、あやしく淸らなる童かなと見て、「何處よりぞ」といふ。あやき、「左大臣殿より」(五)と答ふ。驚きて御文(六)を取り入れて見給ふ。(七)あやしく、如何に思ほして宣ふならむ、(八)世の人と思して、獨りあれば宣ふにやあらむ、と思ほして、長き葎を折(九)らせて御返し、

千蔭人はいさか(一〇)れじとぞ思ふ賴めおきて(一一)露のきえにし宿の葎は

とて奉り給ふ。これよりうちはじめて、女は、をかしき事も、哀なる事も、聞え給ひつゝ、「恥見せ給ふな」と聞え給へば、(一二)やんごとなき人の切に宣ふを、聞き過して止み(一三)なば、情なき樣にもあり、(一四)人の御恥にもあり、さりとて、(一五)昔を忘ればこそあらめ、時々は通ひてまうでむかし、と思して、まうで通ひ給ふに、男はたゞ

（語釋）
（一）葎生ふる宿は妻を失ひたる千蔭の家をいふ、「しげし」は「しげき」とあるべき也
（七）以下千蔭の心
（八）我を世間並の男と思ひて
（一〇）深く契りて死せし妻に對して我は仇心を持たじ
（一二）以下千蔭の分別
（一四）一條北方の
（一五）亡き妻の事を忘れたらば惡からんが忘れさへせれば一條へ通ひてもよからん

（考異）
（二）思召し—思し
（三）奉り—奉れ
（四）御殿—おとゞ
（五）左大臣殿—「臣」ナシ
（六）御文を—「を」ナシ
（九）折らせて—はらせて
（一一）露の—露と
（一三）止みなば—やみなむ

とて、降る雨の如に言ひ來れど、女君の宣ひしことを思して、聞き過し給ふに、その時の(一)大臣かくれたまひぬ。その(二)北の方、ならびなき世の財の(三)王なり。はじめより後まで、いさゝか立ち竝ぶ人なくて、(四)一つ子にいますかりけり。よき人の女などあまた集めて、豊に著せ食はせ、(五)大殿の御時より、今に仕うまつる御たち多かり。殿の中いきほひて經給ふに、斯く(六)大殿の妻失なひてものし給ふと聞きて、北の方、この大殿に御心つきて思せど、(七)よきをだに聞過し給へば、まして思しもかけず。女君、(八)とかく思ひて、山々寺々に修法おこなひ、佛神に大願をたて給へど、しるしなし。北の方(九)おほかたは神佛にも申さじ、(一〇)この人に、我かく思ふと言はむ、我、人のかしづく(一一)女にもあらず、(一二)然らばこそまばゆくもあらめ、(一三)これを(一四)否にて、妻なき人のよろしきは、何處にかあらむ、恥を捨てて言ひ出でむ、と思して、かの(一五)大殿の(一六)御乳主の女、あやきとて、めでたくかたちある童をつかひ給ふ、それに有難き(一七)裝束せさせて、かく(一八)聞えて、奉り給ふ、

(語釋)

(一)源忠經
(二)一條の北方といふ
(五)夫大臣在世中より引續きて
(六)千蔭
(七)此北方より勝れたる女よりの申込をさへ受付けぬ千蔭故
(九)以下北方の心
(一〇)千蔭に直接に
(一二)娘の身ならば直接に言寄るが恥かしくもあれど我は恥かしくもなし
(一三)千蔭を外にしては
(一五)に夫
(一六)乳母の生みたる子

(考異)

(三)王—主
(四)一つ子—ひとり子
(八)とかく—はかく
(一一)女にもあらず然らば—女にもあらず妻にもあらずさあらば—女にもあらずかの妻のあらば
(一四)否にて—はなちて
(一七)裝束—裝束を
(一八)聞えて—「て」ナシ

〈語釈〉
(三)我と異なりて腹黒き繼母を娶りて忠こそれに憂き目を見するな
(四)迹なき事をいふ此頃のたとへなるべし
(五)かたへは片方の義にて半分は妻と見半分は子と思ふといふ事歟

〈考異〉
(一)うしろめたく憂き事ーうしろめたき事
(二)女君ー母君ー姫君

㊀ 千蔭の續ぐらし。一條の北方の懸想。千蔭心ならず一條に通ふ

れが亡き世にも心安くならむを見、つかさかうぶり得るまで見生さんとこそ思ひしか。悪し善しもまだ知らぬ嬰兒を見捨てむ事の、(一)うしろめたく憂き事」と宣ふ。大殿萬に聞えなぐさめ給ひつゝ、泣き惑ひ給ふこと限なし。女君(二)きこえ給ふ、母「誰も誰も親にはものし給へど、少き時は、女親に如くことはあらぬものなり。よし、如何はせむ。(三)おのれにかはりて、腹きたなき人につきて、悪き目見せ給ふな。腹きたなき人ありて、悪きこと聞ゆる人ありとも、言はむ人の罪になし給へ。凡てわが子の爲あしからむ事をば、(四)水の上にふる雪、砂の上におく露となし給へ」と聞えおきて隱れ給ひぬ。大殿、もろ共に死なむとまどひ給へど効なくて、後々の御わざどもし給ふ。

かくて經給ふ程に、年頃、女といふもの、目に近く見給はず、忠こそを、妻(五)にもかたへ子にもかたへ、と頼み思して、撫で養ひ給ふ程に、世の中にありとある上達部、御子たち、女子もち給へるは、女方より、名だかき大殿にものし給へば

（語釋）
（二）他に寵愛の女なく
（四）子を寵愛することを形容していふ此時代の諺なるべし
（五）病の直るべき
（六）「なし」は「なく」歟

（考異）
（一）え給ひて―ば給て
（三）母君―母宮

左大將かけたる右大臣になり給へり。御妻には、一世の源氏、かたち清らなる名取り給へるが、十四歳なるをえ給ひて（一）捿み給ふ程に、十六歳といふ年の五月五日に、玉ひかり輝きたる男の、いとをかしげなるを產み給へり。名をば忠こそといふ。その御妻を、またおもふ人なく（二）、比なく限なき御中にて、これも彼も、互に御志ふかく、宣ひちぎりて經給ふほどに、忠こそおひ出で來るまゝに、かたち清らなること限なし。三つになるに、心のさとくらう〳〵しきこと限なし。父母、撫で養ひ給ふこと限なし。母君（三）は、（四）いたゞきの上を蓬萊の山になさむとも、掌の內に黄金の大殿を造らむといふとも、忠こそが言はむことは違へじ、と養ひ給ふほどに、忠こそ五つになる年の三月に、母君俄にかくれ給ひぬべし。殿の內ゆすり滿ちて、山々寺々に、おこたり給ふべき（五）事を祈らせ給ふに、驗なし。母君思す事また二つなし（六）、忠こその上を思す。父大殿に聞え給ふ、母「おのれ世に思ふ事なし。忠こそが事を思ふなむ、此の世は離れがたく思ふ。これが人となりて、おの

忠こそ

梗概

㊀ 橘千蔭の素性。忠こその誕生。父母の鍾愛。母の逝去。㊁ 千蔭の鰥ぐらし。一條の北方の懸想。千蔭心ならず一條に通ふ。㊂ 忠こそ帝の寵遇を受く。一條北方の義姪あこ君の許に通ふ。㊃ 五月の節。一條の北方と忠こそと歌を贈答す。誤解。一條の北方、忠こそを陷れんとす。帶の紛失。博徒帶を藏人所に賣る。㊄ 千蔭の默止。一條の北方祐宗を語らふ。祐宗、忠こそを千蔭に讒す。㊅ 忠こその歸省。父の不興。托鉢の僧。忠こそ托鉢の僧に隨ひて遁世す。㊆ 暗部山の新入道。忠こその搜索。帝千蔭を召す。詭計の露顯。千蔭の痛恨。㊇ 千蔭、一條の北方に疎し。北方の憂慮。千蔭の悲嘆。北方の悲嘆。交情絶ゆ。一條北方の零落。㊈ 千蔭の閑居。法會の奇蹟。千蔭の薨去。

かくて又嵯峨の御時に、源の忠經と聞ゆる左大臣おはしけり。又右大臣橘の千蔭と申すおはしける(一)、世の中に、かたち淸げに、心かしこき人の一に立てられ給ふ。公に仕うまつり給ふにも、身の才人に勝り給へり。帝時めかし給ふこと限なし。一年に二度三度つかさかうぶり賜はり、日ごとに位(二)まさりつゝ、年三十にて

㊀ 橘千蔭の素性。忠こその誕生。父母の鍾愛。母の逝去。

〔考異〕
(一)けるーけり
(二)位ー加階

蚊やり火のけぶりも雲となるものを下草をしも結ばざらめや

御返しなし。

平中納言殿より、(一)

正明　沈みなむ身をば思はず名取川ふみ見てしがな淵瀬知るべく

あて宮、

瀧つせに浮かべる泡のいかでかは淵瀬に沈む身とは知るべき

兵部卿の宮より、

(二)かくばかり憂きには戀の慰までつらきさま〴〵歎きますかな

三の親王、中の大殿にて、御琴遊ばし、物語し給ふ間に、御前なる燈籠に夏蟲の(三)(四)入るを見給ひて、

忠康「獨り寐る身も夏蟲を見ざりせばかくしも戀に燃えずぞあらまし

いとゞ身の(五)わびしく。如何ならむ」と聞え給へど、聞き入れ給はず。侍從の君、

仲澄　人をおもふわが身の玉はなからなむ空しき骸は歎きしもせじ

いらへ給はず。兵衛佐行政、

〔語釋〕

(二)前例によれば此歌に對するあて宮の返歌あるべき也、脫したるか

(三)彈正宮忠康

(四)以下卷末までの文、上よりの續き唐突なるのみならず季節も俄に變化せり或は他の處より攙入せるか

〔考異〕

(一)平―ナシ

(五)身のわびしく―見まほしう―みなこひしく

東宮（一）初秋の色をこそみめ女郎花露のやどりと聞くがくるしさ（二）

聞くことの様々なるこそ効なけれ。

と聞え給へり。あて宮、

秋の色も露をもいさや女郎花木隠れにのみおくとこそみれ

例の宰相、

實忠 旅寐する身には涙もなからなむ常に浮きたる心地のみする

あて宮、

（三）たびごとに空に立ちぬる塵なれや露ばかりにも浮ぶなる哉

右大將殿より、

兼雅（四）わび人の涙をひろふものならば袂や玉のはこにならまし

あて宮、

涙をも筥なる玉と見ましかば餘所なる人も拾ひ添へまし

〔語釋〕

（一）あて宮を我こそ手に入るべきに他人の物になりたる噂をきくがつらし

（三）君の身は塵の如く輕しと見ゆ露ばかりの涙に浮ぶとは

（四）他人は兼雅自身

〔考異〕

（二）くるしさ—くるしき

實忠 雨と降る涙はいつとわかねども今日は水泡となりくたす哉(一)(二)

三の宮、(三)
忠康 棚機のつま待つよひの露にだに濡れ見てしがな戀は醒むやと

行政、
我こそは棚機づめに劣らねど逢ふ夜をいつと知らずもある哉

など聞え給へり。御返りなし。

畫詞 此處は河原に御髪すましたり。あて宮、琴の御琴、いま宮箏の御琴、(四)御息所 琵琶、大宮倭琴、調べ給へり。東宮の御使に、物かづけたり。此處は人人、あて宮の御琴遊ばす聽くとて、(五)河のほとりに居給へり。君たちの御前に、浮れ女二十人ばかり、琴弾き歌唄ひて、御衣賜はれり。

かくて歸り給ひぬ。

晦ばかりになりぬ。東宮よりあて宮の御許にかく聞え給へり、

〔語釋〕
(三)彈正宮忠康
(四)仁壽殿女御をいふなるべし

〔考異〕
(一)いつと―いつも
(二)なりくたす哉―なりくらす哉―ありくらす哉
(五)河の―「の」ナシ

● 懸想人等あて宮と歌を贈答す

左衛門督の殿の御方、(一)

七君 明けぬとて待つ宵よりも棚機は歸る晨や侘しかるらむ

宰相殿の御方、(二)

四君 年毎に我がよる絲のたちかへり千歳の秋もくらむとぞ思ふ

中將殿の御方、(三)

八君 棚機の稀にあふ夜の東雲は見る人さへも惜くもあるかな

いま宮、

棚機の逢ふ夜ときくを天の川浮べる星の名にこそありけれ

あて宮、

棚機のあふ夜の露を秋ごとにわが貸す絲(四)の玉と見るかな

など、これかれ御琴遊ばしなどするを、宰相(五)川のほとりに眺め暮らして、あて宮にかく聞え給へり。

〔語釋〕

(一)七の君、藤原忠俊の妻

(二)四の君、源實頼の妻

(三)八の君ちご宮なるべし、未だ中將に嫁せし事見えず誤あるべし

(五)實忠

〔考異〕

(四)絲の―はたの

とて奉り給ふ。あて宮打笑ひて、女御に奉り給へり。仁壽殿「などかは聞え給はぬ」とて、

仁壽殿　珍らしくかへるすもりにいかでかは木綿つけそむる人もなからむ

と聞え給ふ程に、夜に入りぬ。君たち、御琴どもかき合せて遊ばす程に、彦星天の河渡るを見給ひて、式部卿(一)の宮の御方(二)、

五君　白露のおくと見し間に彦星の雲の舟にも乗りにけるかな

中務の宮の御方(三)、

中君　秋(四)をあさみ紅葉も知らぬ天の川何を橋にて逢ひ渡るらむ

右大臣殿の御方(五)、

六君　年ごとにあふと見ながら天の川幾世渡ると知る人のなき

民部卿の御方(六)、

三君　手(七)もすま(八)に我がくる絲を彦星の夜の衣にをるやたなばた

〔語釋〕
(二)五の君
(三)中の君
(五)六の君、右大臣藤原忠雅の妻
(六)三の君、源實正の妻
(七)手もやすまず

〔考異〕
(一)式部卿―民部卿
(四)秋を―「を」ナシ
(八)すまに―やすまず

七月七日正頼の家の女君等賀茂川に髪を洗ふ

〔語釋〕

(一)髪を洗ふ爲に

(二)正頼の妻大宮

(四)賀節の饗膳

(五)あて宮にはまだ逢ふ事を得ずして

(六)「大宮の」の「の」衍文なるべし

(七)織女は必今宵過さず夫に逢ふにいつも色づかぬ松の如きあて宮を如何せん

(九)今日の牽牛織女よりも

(一〇)あて宮を鳥に比してよめり、木綿つくるとは天下泰平の祈禱の爲に鷄に木綿をつけたるものを京の四境の關に放ちて祭をなす事ある也

〔考異〕

(三)賀茂河の邊に—賀茂の河邊に

(八)何なり—何なる

かくて七月七日になりぬ。賀茂河に御髪すましに、(一)大宮より始め奉りて、(二)小君たちまで出で給へり。賀茂河の邊に(三)棧敷うちて、男君たち御座しまさふす。其の日節供河原に參れり。君たち御髪すまし果てて、御琴調べて、棚機に奉り給ふ程に、(四)東宮より大宮の御許に、かく聞え給へり。

東宮　思ひきや我がまつ人は(五)餘所ながら棚機づめのあふを見んとは

今日さへ羨ましく嫉くこそ覺ゆれ。

と聞え給へり。(六)大宮の御返り聞え給ふ。

大宮　七夕はすぐさ(七)ぬものを姬松の色づく秋のなきや何なり(八)

今日よりも有り難き人々になむ。

とて(九)御使に女の裝束一くだり賜ふ。宮、大宮「あてこその上につけて、人の御文見るこそ哀なれ」とて、東宮の御文に斯く書きつけて、あて宮に奉り給ふ。

大宮　(一〇)すもりこと思ひしものを雛鳥の木綿つくるまでなりにける哉

らむ。大ぞうにて、皆夫(一)しましまさふ中に、やもめにて捨て置きたいまつるよりは、翁の片庵にゐてまして、食べむ物は、初穂ごとに取り、夜晝、魚を食はしめてこそは、かしづき置けらめ。(二)せうもちらは、(三)只身(四)一つに(五)奉り、(六)御衣、器物までも、乏しくてはあらじはや。おもて勵まして、人の見奉るべくあらば、國王の一の妻になり給べらむにも劣らじをや」など言ふ程に、宰相の君、實忠「兵衛の君は」など言ひてさし覗きたるを見て、帥(七)腹立ちて言ふ樣、眞菅「それは實忠の宰相にあらずや」いらへ、實忠「然なり。などか此處には接みますぞ。此の殿守のおとども今は御夫も無し。(八)かくてなむ物し給ふか」帥手かきをして(九)言ふ樣は、(一〇)眞菅「なぞの寡婦のましまず所にか、やもめ男はすましむる。心つけしめ給ふな。能く思ひ計(一一)りて然はせしめん」宰相(一二)をかしと聞き給ひて外に出で給へり。殿守、「將に然ありななむや。さる御心も見えず」眞菅「抑(一三)此の御正身は如何にぞ。御使だに給べらば、(一四)まうぼりものたてまたせむ」など言ひて去ぬ。

〔語釈〕
(一)あて宮の姉妹皆夫を持ち居る中に
(二)莊物歟
(四)あて宮一人に奉りの義歟
(八)殿守を妻にして通ひ給ふか
(九)手を打振りて
(一一)殿守に通ふ事はよく考へての後にせんといふ事歟
(一三)あて宮
(一四)食物を奉らん

〔考異〕
(三)せうもち—ざうもち
(五)只身一つに—たみゝひとつ
(六)御衣器物—御衣だつ物
(七)帥—うち
(一〇)樣は—程に
(一二)宰相…外に出で給へり—ナシ

かくて帥の主、九の君は宮仕(一)したまふべしと聞きて、腹立ちて、殿守の曹子に忍びて入りて、眞菅「人のいましむる五月(二)は去ぬ。今は彼の事成し給へ。物言ひきりになすそ(三)。事は中撓ましむるは悪しきわざなり」いらへ、殿守「そは思ひ給ふる(四)(五)方の有りと聞召して、煩らはしくぞ思ひ給ふる」帥腹立ちて、眞菅「持て(六)侍る女人の無禮あらしめば、ひこじらひやせんと思はしめし。何か煩はしからむ。筑紫より登りまうで來し(七)女人は、亡れましにき。豊後(八)の介の愛女、わうたう(九)(一〇)にとてくれたりしを、此の春子一人生して、亡れましにき。童べ(一一)をぞとりて侍る。さて國王(一二)に奉るべしと聞くは、何でふ(一三)事ぞ。何れの人の、聞え置ける女人をか然はせしむべき。能く思ひ計りて然はせしめむ」殿守、「よに(一四)、然あらじ。内裏には女御(一五)の君御座しませば、如何はまたは(一六)參り給はむ」帥のぬし、「女人の見たい(一七)まつるべくば、近く率て給べらむや」殿守、「うたても宣ふかな。所謂あて宮ぞかし。何時しか我がぬしにもてあはせ(一八)奉らむ」帥、「翁をし、彼の女人に合せ給べらば、何物かは乏しか

〔語釋〕
(一)入内あるべしと
(二)五月嫁娶を忌むは此頃の風俗也
(三)「なすそ」は「なせそ」歟
(四)眞菅が外に女を持てるをあて宮が聞召して
(六)我に前よりの妻妾ありて妨となる樣の事もあらばあて宮の方にて此縁談を避る樣の事もあらんかと思ひしが
(八)仁壽の素性をいふ
(九)我にとての意ならん
(一一)此句の上に脫文あるべし、貝勢氏曰、あて宮を求むる由の脫歟
(一二)あて宮を
(一三)人の申込み置きたる娘を宮仕へに出すとはけしからん
(一五)あて宮の姉仁壽殿
(一七)果してあて宮が手に入るものならば近々に連れて來て下されるか

〔考異〕
(五)思ひ給ふる…召して—そは思う給へるを
(七)來し—來しに
(一〇)わうたう—わうとう
(一四)よに—よも
(一六)または—、「は」ナシ
(一八)もてあはせ—もてあそばせ—もてあはさせ

仲澄 人を思ふ心いくらに碎くれば多くしのぶになほ言はるらむ

例の聞き入れ給はず。行政、あこ君して斯く聞えたり。

行政 山がつのあとなる水も淸ければ空行く月の影をまつかな(一)

畫詞 此處は大將殿。あて宮おはす。侍從の君と御琴遊ばす。三の宮、御琴遊ばす。御たちいと多く、うなゐなどさぶらふ。此處は北のおとゞ。(二)宮、御臺たてて物まゐる。人の奉れる物いと多かり。帥の奉れるとて、すきばこ、辛櫃に、絹、綾など入れて、陸奥守の奉れる、陸奥紙あり。宮、すき箱開けて、綾など見給ふ。おとゞ、内裏へ參り給ふとて急ぐ。御車に裝束して立てたり。御厩よりうつし馬(三)ども引きたり。御おくりに、公だち打連れて參り給へり。此處は政所(四)。四位、五位、七八人ばかり、おろし(五)を食ふ。此處はたてま所(六)。厨屋曹子、合せて五人ばかり。別當、預ども、着きたり。鷹飼、鷹すゑて、鵜飼どもあり。御鳥の惱む(七)とみすとこさいども多かり。俎ども立てて魚つくる。

〔語釋〕

(一)山がつのあとなる水は素性いやしき行政自身をいひ、月はあて宮を喩へたる也

(二)正賴の妻大宮

(三)正賴

(四)乘りがへの馬

(五)おさがりの勝部

(六)未詳

(七)此處誤脫あるべし

(八)眞宮殿守を訪ひてあて宮の事を謀る。實忠との邂逅

と聞え給へり。御返りなし。

平中納言殿より

正明　聞えそめては久しくなりぬれど、覺束なきは、如何なるにか。

とて、

幾度か（一）ふみまどふらむ三輪の山杉ある門は見ゆるものから

度々（二）のは如何なりけむ。

とあれど、御返りなし。

人々の御返り聞え給ふを、三の親王（三）、御前近き松の木に蟬の聲高く鳴く折に、かく聞え給ふ。

忠康　かしかまし草葉にかゝる蟲の音よ我だに物は言はでこそ思へ

すみ所（四）有る物だに斯くこそありけれ。

あて宮聞き入れ給はず。侍從（五）の君、御琴遊ばす序に、

〔語釋〕
（一）古今の「我が宿は三輪の山本戀しくばとぶらひ來ませ杉たてる門」を本歌にしてよめり
（二）今迄差上げし文は
（三）彈正宮忠康
（四）ましてすみ所なき我が思ひの如何に深きかを察し給へ
（五）仲澄

〔語釋〕
(一)寢所を得ずして泣く者は
(四)露をあて宮の返事に比す
(五)兼雅
(七)思ひ切れぬ

〔考異〕
(二)内に…べし—あて宮きこしめす
(三)わびつる—わびたる
(六)より—よりも

實忠「巣を出でて塒も知らぬ雛鳥のなぞや暮れ行くひよとなくらむ
(一)我一人にはあらざりけり」と宣ふを、(二)内にも聞召すなるべし。

兵部卿の宮より、

兵部 久しく思ひ給へわびつる(三)心地も、ほのかなりし御返りになむ、思う給へ慰めつる。

とて、

兵部 夏の野にあるかなきかにおく露(四)をわびたる蟲は頼みぬるかな

と聞え給へり。御返りなし。

(五)右大將殿より、(六)

兼雅 かひなければ、聞えにくけれど、え然も思ひ果てぬものになむありける。(七)

かくばかりふみ見まほしき山路にはゆるさぬ關もあらじとぞ思ふ

深き心は頼もしくなむ。

とこそ思したためれ」實忠「いで、まろぞ綻縫はむ人だにぞ持たらぬ。よし、見給へ」とて、綾掻練の袿、一襲、こうちぎ、袷のはかま賜ふとて、

實忠から衣解きぬふ人もなきものを涙のみこそすゝぎ著せけれ

とて取らせ給ふ。兵衛、「此の御綻こそ心憂けれ。

縫ひしをも綻ぶまでに忘るれば結ばむ事もいかゞとぞ思ふ

更に(一)見給へじ。(二)何にか參りつると(三)宣はむものを。(四)召ありとも今は參り來じ」いらへ、實忠「怪しくも宣ふかな。對面したりつるとな(五)聞え給ひそ」兵衛「餘も怖ぢ聞え給ふかな」(六)など物語多くし給ひて兵衛は(七)まうのぼりぬ。兵衛、此の文奉りて、宣ひしことども聞ゆ。いらへもし給はず。源宰相、中の大殿の簀子に立寄り給ひて、兵衛の君呼び出でて、實忠「如何にぞや」など宣ふ。いらへ、兵衛「いとよく聞えし(八)かど、(九)物も宣はず」(一〇)など聞ゆ。夕暮に、(一一)外より持て來たる鳥の子の塒も知らで鳴きありくを見給ひて、

〔語釋〕
(一)先帝を忘れ果て給ふ樣な薄情な君に新に契を結ぶ事は考へものなるべし
(二)なぜ實忠如き人の處へ行きしぞとあて宮に叱られるべければ
(四)實忠に呼ばれても
(五)あて宮に
(七)あて宮の御前へ

〔考異〕
(三)宣はむものを—宣はむも苦しきを
(六)など物語多くし給ひて—とてこと物語ども多くし給ふ
(八)かど—かども
(九)物も—もナシ
(一〇)など—ナシ
(一一)外より持て—外よりとり持て

註 懸想人等各〻あて宮に消息す

〔語釋〕

(一)實忠

(四)其時は恰もあて宮の戀しさを忘れさせ給へと祈り居りし時也

(五)御訪問がなかりし故

(七)父正頼

(一〇)我が比叡山に居る時に御返事を下されし故

(一一)御返事を

(一二)前のあて宮の歌

(一三)歎く人の數にも入らぬと自分を謙遜して塵に比したる也

(一五)氣をつけて取持ちて賜はれ

(一六)實忠には已に妻ありとあて宮が思ひ居られる、この妻を三條の上といふ、嵯峨院以下に見ゆ

〔考異〕

(二)し給ふ―し給へり

(三)聞え給へりしを―聞えてたまはりしを

(六)中の―ナシ

(八)おとゞ―大將

(九)さば―ナシ

(一四)類なく―たゞ限なく

斯くて例の宰相(一)、兵衛の君を呼びて、物語などし給ふ(二)、實忠「一日、いと嬉しく御返りを聞え給へりしを(三)、即ち贈り給へりし(四)。比叡の御堂に、物忘れせさせ給へ、と申しつる程になむ」兵衛、「久しく御座しまさゞりつれば(五)、何處にならむ、と中(六)の大殿の君も聞え給ひ(七)(八)、大殿よりも聞え給ひしは、さば(九)山籠りし給ひつるにこそありけれ」實忠「心靜かにてこそ、宮仕もすれ。世にあるべくもおぼえぬには、誰が爲かは交らひをもせむ」と宣ひて、御返かく聞え給ふ、

實忠 奥山に賜はせたりし(一〇)かば即ちこそ、聞えさせむ(一一)と思ひ給へりしか。塵の山は(一二)

さのみやは。

とて、

實忠 恨むれどなげく(一三)かずにもゐぬ塵やふかきあたごの峯と成るらむ

とて兵衛の君に、實忠「これ參らせ給ひて、御返賜はりて賜へ。類なく(一四)嬉しかりしを命となしてなむ。猶(一五)御心留めて思ほせ」兵衛、「さ思ひ給ふれど、故郷(一六)物し給ふ

〔語釋〕
（三）あて宮の手に非ざりし故
（五）とんでもなき只今の無禮は
（七）此奴
（九）眞菅があて宮の事を相談す

〔考異〕
（一）言ふ様—はに
（二）わ嫗翁—わが女どもや—わがおもとや
（四）とらす—とらせ
（六）賜ひつる—賜へる
（八）財し—「し」ナシ

て、下り走り、嫗の許に往きて言ふ様（一）、眞菅「わ嫗、翁（二）あやまち仕りてけり。彼の女人の文かとて見るに、手の（三）非ざりつれば、然申しつるなり。彼の仲媒の、由言ひ送れるなりけり」とて、手づから解き赦して、率ていまして、簀子に席敷きなどして、物食はせたり。米二石、布十匹とらす（四）。眞菅「事成りなむ時、千匹の綾錦も渡さむ。怪しからぬ（五）事は忘れてましね」嫗、「賜はることは貴けれど、御心も荒々しく、人縛らせ、賜ひつる（六）物をも召し返せば、行く先も、御覽じあやまちなば、斯くこそはあらめ。事成りなん時、綾錦も賜はらむ」と言へば、又うち腹立ちて、眞菅「大方は、嫗のなど斯くは申す。くやつ（七）、今又縛りかけよ。汝口入れずとも、我が財し（八）あらば成りなむ」と罵り給へば、逃げて去ぬ。

斯くてあて宮の御方に、殿守と云ふ老人ありけり。それを家に迎へて、此の事言（九）ふ。殿守、「いと良き事なり」といふ。眞菅「此の事成し給へらば、汝を白き頂の上にすゑ奉りて、頂きに頂き奉らむ」と言ひて、綾十匹、錢二十貫取らす。

〔語釋〕
(一)長門
(三)直に御返事のある筈はなし
(四)あて宮は我が手中の物と思ひて居給へ……
(七)まぎらかす
(八)與へし
(九)官に訴ふべし

〔考異〕
(二)御文を奉りて事の―御文に事の
(五)詞をばえ見で―詞をみとがめて
(六)様は―はに
(一〇)様は―はに

の御許に、(一)おとゞの御文を奉りて、(二)事の由聞え奉れ給へ」長門、「いとよき事なり」とて、

長門殊更におとゞの御方に、聞えになむ奉る。彼の仰せごとはいと好き折に聞えさせてき。如何は、(三)いつしかとは聞え給はむ。我がおとゞの君、物な思ほしそ。(四)あが物とを思したれ、嫗し侍らば。

と書きて取らす。嫗持てまうで奉る。帥の主、彼の御返と思ひて見るに、嫗の手なり。(五)詞をばえ見で投げやりて言ふ様は、(六)眞言「此の嫗好き盗人なり。いかでか、汝は、左大將ぬしの女の文とて、嫗の文をば持てまうで來る。我を謀らしめむとて、(七)もどろかしむるにはあらずや。事成せとておこなはしめし米(八)二石、只今奉らしめよ。事を僞りて物を盜めるなり。公(九)に只今奉らむ」とて、かみに繩をつけて、後手に縛り、大きなる木に縛りつけたり。嫗縛られ居りて言ふ様は、(一〇)「彼の文は、猶見そなはせ。彼のめのとの、事の由聞えつるなり」帥、投げやりつる文を取り

（一）かうの色紙に書きて、眞菅「これ必らずみかへりごと取らしめて」と宣ひて、長門に錢五貫（二）、嫗に米二石取らせ給ふ。長門喜びて參りぬ。孫のたてきといふを呼びて、長門「姫君は何處にかおはします」たてき、「侍從の君（三）と御琴遊ばす」長門「これ人間に奉れ。殿の大い君（四）の御文と言ひて奉り給へ」と言ふ。たてき、あて宮に奉れば、見給へば、鬼の眼を潰しかけたる樣なる手にて、詞書ければ、あて宮驚き給ひて、あて宮「これは、彼の君の御文にはあらず。長門が得たる（五）にこそあめれ」とて返し給ひつ。

かくて帥のぬし、嫗を召して、眞菅「彼の文は奉らしめてきや」嫗「めのとご（六）（七）、いと良く聞え申さむ、と宣ひき。御返はかならず有らむ。賜ばりてまうで來む」と申す。主、眞菅「早行きたれ」といふ。嫗（八）、長門がもとに往きて、「此の御返賜はりにぞまうで來つる」長門かへし給へりとは言はで、長門（九）「いづれのよばひ書の返をかは、一度には宣はむ。たびたびの中にこそ、一度もし給はめ」嫗「さらば、ぬしの君（一〇）

〔語釋〕
（一）香染即丁子染なるべし
（三）仲澄
（四）仁壽殿女御
（五）長門の處へ來たる文なるべしとて
（六）乳母御許、長門をいふ
（九）あて宮は誰の文に對しても一度位て返事はし給はず
（一〇）眞菅

〔考異〕
（二）五貫―五百貫
（七）めのとご―めのとに
（八）長門が―長門の

(語釋)
(一)名は「たてき」
(二)あて宮を娶りて後は常々色々御世話申上ぐべき此の第一番手の文なればは
(三)亡き妻をいふ
(六)我宿に来て霜の露にこの繁き浅茅を芟除きて下されぬか

(考異)
(四)女人の—女人は
(五)のみ—野に

がいらへ、「大殿には、聞え給ふとも、疾にも成らじ。御文を賜はりて、あて宮に参らむ。嫗は男君になむ仕う奉りて侍る。孫(一)なむ、此の御方に仕うまつり侍る」主眞菅、「よろしき事」とて、御文書かむとて帯刀に宣ふ、眞菅「我斯くやもめにてあれば、ほれぐしきを、女人求めしめむとするに、艶書の和歌なきは、人侮らしむるものなり。和歌一つつくりて」と宣ふ。帯刀をかしう思ひながら、(二)繁きおはさん宮仕のはじめに侍るに、名簿をも奉らしめむと思はしむるをや。不例重くすべかりし女人(三)(四)の、旅の空にかくれましにしかば、物語らひすべき人も無き所には、たゞ斯くなむおはしむる。

とて、

あさぢのみ(五)しげる宿には白露のいとゞ翁ぞすみうかりける

(六)刈りすて給はんや。

と書きて、帯刀「斯様にて如何あらむ」と聞ゆ。眞菅「宜しかめり」とて、清らなる

〔語釋〕
（一）青磁色
（四）すかしのある箱、纖物扇などを入るゝに用ふ
（五）正頼に贈らんとする也
（六）誤脫あるべし
（七）正頼の若き娘たち

〔考異〕
（二）まうぼる—まうのぼる
（三）食ふべしとす—くふ人ども—くふべしともす

はします君に仕うまつり給ひければこそ老い給ひにけれ」とて諸共に出でて往く。

畫詞 此處は帥殿。檜皮屋、御倉どもあり。主の御子ども、右近少將、木工助、藏人かけたる式部丞、坊の帶刀、竝び居たり。女三人、御たち二十人ばかりあり。主、物參る。臺二よろひ。祕色の坏ども。（一）女ども、朱の臺、かねの坏取りてまうぼる。（二）男ども、朱の臺、かなまりして物食ふべしとす。（三）すきばこ、（四）餌袋置きて、男ども居竝みたり。

此處は、女ども居竝みて、綾、うすもの、縑擇る。主、消息「大將殿物入りけなる殿なめり。白き米二百石が券（五）つくらせよ」と宣ふ。此處はぬしの御子ども、男女、集ひて物語す。筑紫船のつかへ人ども來たり。「三百石の船著きにたり。今かたへはこそ」（六）と云ふ。

斯くて、嫗、長門を帥殿へ率て行く。帥の主、消息「翁、やもめにて、つきなく覺ければ、殿の若き御たち（七）、父主に申さむ、となむ思ふ。申し次ぎ給ひてむや」長門

〔語釋〕
(三)何をして暮し居るぞの義なるべし
(五)誤あらんか
(六)みさいは御前にて御案内仕らんの意なるべし
(七)在來の畑の作物を取かたづけて麥をつくる樣に昨日手傳の人を賴み集めたりといふ事歟
(一〇)「聞えむかし」なるべし
(一一)應答の義なりといふ
(一二)何れも若き乳母のみ也
(一三)正賴の長子忠澄

〔考異〕
(一)樣―はに
(二)のいらへ―ナシ
(四)いらへ―いふ
(八)畑―はたえ―はたき
(九)はしり―をしく

乳母、長門のお許といふ、知り給へり。それに此の案内を語らひたいまつらむ」とて大將殿に嫗往きていふ樣、(一)嫗「此の頃まうでむとしつれど、雨のかく降れば、頭もさし出ででなむ侍りつる」(二)長門のいらへ、「長雨の降れば、ことたばかりも得せで、童べをぞもて煩らふ。女ども(三)御世の中は如何にぞ」嫗のいらへ、「怪しき樣にてぞ侍る」長門がいらへ(四)、「我も此の頃は騷がれて、(五)ひとよろこびもせでぞ籠り居る」嫗、「暇にましますなるを、嫗の宿にみさい(六)賜はらむ。此の今日ばかり、(七)ありし畑(八)うちはきて、麥さすばかり、昨日なん契りあつめて侍る。なにのこもつほし(九)りにいれてまうで來ぬ。甘からずとも一口參らむ。さて物語らひも打聞えむか。(一〇)知れるどちこそ、(一一)あとがたりもすなれ」長門「然や。よく宣へり。此の頃は、願はしきものなり。殿には人いと多かれども、我等が友達にすべき人もなし。乳母たちも若くとて、ある限ぞ(一二)ある。我のみ貧しく老い痴れにたるや」といふ。嫗、「何れの君にか仕うまつり給ひし」長門「太郎(一三)左大辨の君になむ仕うまつりし」嫗「兄にお

㊅ 滋野眞菅の素性。あて宮に懸想す。媒せんとする老婆。老婆忠澄の乳母長門を語らふ。失敗。眞菅更にあて宮の老女殿守を語らふ。

〔語釋〕
(一)彈正宮忠康
(五)春宮坊付の武官
(六)あて宮
(七)眞菅の長子左近衞少將和政
(八)巨勢氏曰、貯へはあらぬ主ぞといふ意なるべけれど聞え難し
(一〇)同人曰、人々言ひよるに物を贈らぬ樣に正頼のうけひかぬなり
(一二)腰插と同じ物なるべし。腰插は絹を筒形に卷きたる物給物用とす
(一四)誇なるべし

〔考異〕
(二)嫗—女
(三)樣は—はどに
(四)給へれど—給ひつれど
(九)ものはさふらふ—ものはいひさふらふ
(一一)せしめぬ—しをしめぬ
(一三)然なり—しかや
(一五)嫗—女
(一六)嫗—女、以下同じ

聞えたり。三のみこ、琵琶彈き給うて居給ひて、あて宮に物聞え給へり。又太宰の帥滋野眞菅(一)といふ宰相、年六十ばかりにて、子どもある妻、道にて失ひて、登り來たり。あて宮を聞き付けて、いかでと思ふ。序なくて得聞えぬを、其のわたりに住む嫗、(二)かゝる事を聞きて言ふ樣は、(三)嫗「大將殿にこそ、君だち許多おはすれ。皆御方に聟取りし給へれど、(四)今一柱はまします」帥、眞菅「宜しき事なり。父主に乞ひ奉らむと思ふ」(五)坊の帶刀なる御息子のいらへ、(六)「彼の君は、東宮よりもいと切に召す。上達部、御子たちも許多聞え給へど、只今は思ほしも定めざめり。自ら少將(七)委しき事は聞え給ひてむ」父主のいらへ、眞菅「彼の父主は物はさふらふ(八)(九)べきとせざりし主ぞ。さればせしめぬなり。(一〇)(一一)眞菅らが庄物贈らしめて、中媒にわ(一二)きざしらうちして乞はしめむ。多くの財は盡すとも、得かねてむやは」嫗のいらへ、「然なり。(一三)何かは聞召さゞらむ。(一四)世界は一に、とぞ。事は猶嫗たばかり聞えむ。(一五)父大殿にもな聞え給ひそ」主のいらへ、眞菅「然もせしめむかし」嫗(一六)「彼の殿の御

〔語釋〕

(一)今直に御返事をして下され

(二)返事を下さらねば行政が本を教へてくれぬ

(三)十の君、あて宮の妹

おふけなき心つきぬるものになむ。

と書きて、宮あこ君に、行政「これ中のおとゞの姫君に奉り給ひて、御返事取りて持ておはしませ。さらずば御文も習はし奉らじ」宮あこ君、あて宮に奉らせ給ふ。あて宮「誰がぞ」と宣ふ。宮あこ「まろに文習はし給ふ人のなり」と言ふ。あて宮「めざましの事や」とて見給はず。宮あこ「なほ見給ひて、御返り賜へ」と宣ひて、宮あこ「今言はむ(一)物ぞ」とて、泣きのゝしり給ふ。あて宮、「かゝる人の返事はせぬ物ぞ。唯「見せつれば目ざましとなむ言ふ」とを宣へ」あこ君、「さらば、(二)まろに文習はさじをや」など泣き給ふ。いま宮、「幼なき子に文を取らせて、淵瀬も知らせず責めさするは、かしこき業かな。(三)聞き憎しとて見よとすめりかし」と宣ふ。

【畫詞】此處は大將殿。あて宮、いま宮物まゐる。簀子に、侍從の君御殿籠れり。御たち簾のうちに居て物言ふ。侍從、松の枝折りて持ち給へり。宮あこ君あて宮に文奉りて、足摩をして泣く。君だち二所、兵衛の君など居て、人の御返

此のあて宮の名高くて聞え給ふを、いかでと思ひて、言ひ戯ぶるゝ人に物も言はず、良き人の女賜へど得で、大將殿の兵衛佐の君(一)、同じ官に物し給ふを、うるはしく語らひ聞えて有るを、おとゞ見給ひて、正頼「此處にかく若き男子ども許多侍る所なり。定めたる里なんども設け給はざなるを、顯澄が侍る所を、里と思ほせかし。宮あこまろ(二)を弟子にし給へ。いかでこれをだに、物聞き知りたる者(三)に思し立てむ」と宣ひければ、行政喜びて、兵衛佐の君の御方に曹司つくりて、たゞ其處にのみなむありける。

(四)年かはりて、三月ばかり、御前の花の盛に、花の宴し給ひけるに、行政歌作り遊びもしければ、君だちの御衣一襲賜ひけるにも、思ふ心ありけれども、其の日にはあらで、宮あこ君に言ふ樣(五)、行政「君に聊かなる事聞えむ。(六)人に宣ふな、行政を思ほさば」宮あこ君、「なほ宣へ。人にも言はじ」と宣ふ。

行政 (七)(八)四方の海に玉藻かづきし蜑しもぞ荒れたる波の中も分けける

〔語釋〕
(一)正頼の五男顯澄
(二)正頼の末子、女一宮腹
(三)音樂に通じたる
(七)巨勢氏曰、行政は渡海せし故斯くいふなるべし。今按に荒れたる波の中をわくるとは繁き人目を忍びて消息を通はすをいふか

〔考異〕
(四)年かはりて―ナシ
(五)言ふ樣―言ふはに
(六)人に…さば―行政を思はさば人に宣ふな
(八)四方の海に―よその海に

ばかりなる、容貌清らに、心かしこく(一)、帝生ひ(二)出でぬべき者と御覧ずるに、父が供に、筑紫に下りて、唐土船のかへりみ(三)に出で立つ。唐土人、「我が國におひ出る者にも劣らぬものかな」とて奪ひ(四)取りて率ていぬ。父母戀ひ悲しびて死ぬるも知らで、唐土に渡りて、文を一(五)にて讀む。それならぬ物も、かしこき人のする業、せぬなし。琴よりはじめて、萬の物の音知らぬなく、上手なり。十にて渡りて八年と云ふに、交易の船につきて、此の國に歸りぬ。帝聞召して、(嵯峨)「怪しくて(六)隱れにし童、まうで來たなり」と宣ひて、召して御覧ずるに、童にていにし時よりも、容貌も清らに見給ふ。更にかしこうせぬ業なし。帝、(嵯峨)「上にさぶらひし者なり。物の師仕うまつらせて聞かむ」と宣ひて、式部丞かけたる藏人になされぬ。暫し有りてかうぶりえて、兵衛佐になりぬ。東宮(七)にも、上許されて、琵琶仕うまつる。若宮(八)(九)にも箏の御琴仕うまつる。斯くていとかしこき時の人にて、夜晝內裏東宮にさぶらひて、定めたる妻(一〇)もなし。思ひかくまじき人に物聞えなどして、

[語釋]
(一)將來有望の者と
(三)貿易の唐船の檢査
(四)花園を
(五)習ひものの第一として
(七)朱雀
(八)今上

[考異]
(一)かしこく—かしこし
(六)怪しくて—「て」ナシ
(九)若宮—后宮
(一〇)妻も—女

とあり。御返しなし。

平中納言殿より、(一)

正明 夏衣うすくはいつも見ゆれども涙もり添ふ頃にもあるかな

珍らしげなき御心を、怪しく。

など聞え給へり。御返りなし。

女御の君の御腹の御子も、(二)(三)未だ御妻もなくて、あて宮をと思せど、序なくて、え聞え給はぬを、外より聞え給ひ、御返りなど聞え給ふもあるを見給ひて、

忠康 かく餘所なる人だに聞え給ふ物を、此處にこそ怪しうつゝましけれ。(四)

音にのみ聞ゆる風も吹き立つる雲のあたりに何かすみけむ(五)(六)

ねたくも。

など聞え給へ(七)ど、御いらへなし。

又死にける良岑の四位の一人子に、花園(八)と云ふ殿上童に使ひ給ひける、年十歳

〔語釈〕
(一)正明
(二)仁壽殿、正 長女
(三)朱雀第三子彈正宮忠康
(四)我は却つて遠慮がち也
(五)他人の文にさへ返事するあて宮の近處になぜ我は今迄傍觀して居たるならん
(八)行政

〔考異〕
(六)風も―風に
(七)給へど―給へり

◉ 良岑行政の素性。あて宮に懸想して宮あこ君を語らふ

〔語釋〕
(一)山は塵の積りてなる物と聞く君が山べを幾返りし給ふ其の塵の時の間に山と積りたらば其時こそ君の御心に從ふべし
(三)源顧朝「思へども心にこめて忍ぶれば袖だに知らぬ涙なりけり」これ歟
(四)斯迄に君がつれなき譯を知りたまに又々文を奉る
(五)瀧つ瀬程の我が思も水の泡ときえたるは畢竟現に君に契を結べる人のあればならん
(六)我は人に契を結ぶといふ事を知らねばたとへ君が思ひは泡に非ずとも甲斐はあるまじ
(七)實忠
(八)いひて—言ひ樋、樋は水を通ずるとひ
〔考異〕
(二)塵—[illegible]

と聞え給へり。あて宮、

いくかへり(一)數置く塵の時の間につもれる山と見えばたのまむ

又兵部卿宮より斯く聞え給へり、

兵部　度々(二)覺束なながら、(三)心に籠めてとかいふなる。さても(四)斯うおはしますをば、承る樣もや有るとて、

(五)瀧つ瀬もあわになりぬるいとひがはむすべる人のあればなりけり

あて宮、

(六)いとひがは結びも知らぬ心にはあわならずともあらじとぞ思ふ

かくて聞ゆるをも見給へかし。

と聞え給ふ。(七)宰相殿より、

實忠　水籠りて思ひしよりも池水の(八)いひての後ぞ苦しかりける

思ふ事聞えし人は聞えけるものを。

ど宣(一)ふに、郭公あまた度鳴く。少納言(二)の君、「鳴く一聲(三)、とこそ云ふなれ。怪しう
も宣ふかな」侍從の君、

仲澄　一聲にあくなるものを時鳥こゝらなく(四)音にくらきしのゝめ

少納言の君、「みな人今宵は」など言ひて、

少納言　郭公旅寢する夜のしのゝめはあけまく惜きものにぞありける

又つとめて、蜘蛛の巣かきたる松の露に濡れたるを取りて、あて宮の御殿籠りた
るを見て、聞え給ふ、

仲澄「さゝがにのいかで(五)根松に白露のおき居ながらも明かしつる哉
羨ましくも御殿籠りたるかな」と聞ゆ。聞かぬ樣にて物も宣はず。
例の宰相(六)、志賀に詣で給ひて、それより斯くなん、

實忠　日頃は山籠してなむ。

憂き事を思ひ入るとはなけれども深き山邊をいくら見つらむ

〔語釈〕
(二)あて宮の侍女
(三)古今集「夏の夜のふすかとすれば郭公なく一聲にあくるしのゝめ」
(五)いかでのいに蜘蛛のい(巣)、根に寢をかけたり

〔考異〕
(一)宣ふ—聞え給ふ
(四)なく音にくらき—なけどもあけぬ—旅寢のをしき
(六)實忠

なる衣箱二つに、麗しききぬ、たゝみ綿など入れて、高基「これは賜はれる國の物なり。前々の國の物も、いと多くさふらふ」と言ひてかへしつ。

【畫詞】此處は致仕の大臣殿。四條の寢殿。對四つ、渡殿有り。寢殿に帳たて(一)たり。蒔繪の厨子、被して立てたり。綾の屛風、褥、上席敷きたり。新らしく、大人、童さうぞくしたり。物參る。臺四つして、裳唐衣著たる人、賄す。上の袴あこめ(二)著たる童參れり。宮内の君に、折敷して物參れり。箱に物入れてするたり。

かくて四月ばかりになりぬ。(四)侍從の君猶此の御心有りて、いかでと思せど、此の(三)二所をば、有るが中に畏まり聞え給へど、え思し(五)忘れず、かく聞え給ふ。

(六)仲澄「汐の海も身に包まるゝ物ならばかひなきまでも知らせざらまし

思ひ止むべかりせば、まさに斯くも(七)」と聞え給ふ。いらへも聞え給はず。其の夜、(八)簀子に御殿籠りて、御たちに物宣ひなどしつゝ、仲澄「怪しく明け難き夜かな」な

〔語釋〕
(一)「たてたり」は「たれたり」の誤なるべし
(三)巨勢利和曰、此一項「あて宮聞かぬ樣にて物も宣はず」まではこれより四頁先の「又死にける良岑の…見よとすめりかしと宣ふ」の次に入るべし
(四)仲澄
(五)あて宮を思ふ心
(六)「二所」は「一所」の誤にてあて宮をいふなるべし
㊤ 仲澄、實忠、兵部卿の宮、正明、彈正の宮各あて宮を挑む。
(七)斯く口には出さんや
(八)仲澄があて宮方の簀子に

〔考異〕
(二)あこめ―あそし

折、彼の殿の聞き給ふに、かゝる住ひせじと思して、四條わたりに大きなる殿買はれて、寶を盡してつくる。家のうちの調度、有るべき限調じ、よき人の娘、しなじな數多使ひ、綾かさね著せて、自らも綾、手織ならぬ物著、朱の臺（一）、かねの坏ならぬ物食はず。かくいかでと思ほすに、あて宮の御方の宮内の君といふを、殿に召して宣ふ、高基「畏きことなれど、中のおとゞの姫君に、年月聞えさせむと思ふを、畏まりてなむ、え斯く（二）とも聞えぬ。かく一人ずみし侍るを、忝けなくとも渡（三）りおはしましなむや。御身一つさふらひ給はゞ、上下の人は、心もとなき事あらせじ。官返し奉りて籠り侍れども、家の内になき物はなし。（四）時の上達部も貧しきものなり」宮内の君、「げに一所（五）物し給ふを、（六）殿の公達の數多おはしますを、さてものし給はゞ良からめど、さやうに大人しき住居し給ふべきなむおはしまさぬ。九（七）所に當り給ふは、誰も〳〵聞え給へど、思召し定めずなむ。さは有りとも、斯くなむと聞えて、御返りは聞えむ（八）」おとゞ、高基「畏まり（九）も喜びも一度に聞えむ」とて大

〔語釋〕
（三）あて宮が嫁に來てくれぬか
（四）羽振よき公卿
（五）高基の獨身なるをいふ
（六）正頼の娘たち
（七）娶りなされたらば
（九）禮も祝儀も

〔考異〕
（一）朱の―すゞの
（二）斯く―かう
（八）御返りは聞えむ―御返事は聞えさせむ―御返事はといふ

美濃の國を賜ひつ。

畫詞　此處は七條殿。四面に倉建てたり。寢殿は、端はつれたる小き萱屋。編垂れ蔀一間あげて、葦簾かけたり。御座所九（一）のなる蓆敷きたり。衝立、障子立て、太き繩引きて、布の御衣かけたり。御枕、榑（二）の頭。おとゞ、物まうほれり。三脚の臺、裏黒の坏、しらげ（三）に麥のおもの混ぜたり。（四）（五）めぐりの物なし。此處はみづし所。寢殿の北の方。かしら白き女一人水汲む。女童一人、おもの盛り仕うまつる。これ（六）は店に女（七）居りて物賣る。此處は出居。女ども布おる。これは、侍所。人ども畑作る。おとゞ、括り揚げて（八）、榑の足駄を穿きてさび杖（九）つきて、布の直垂著て、立ち給へり。馬車に魚鹽積みて持て來たり。預どもよみ取（一〇）りて、棚にすゑて賣る。

かくて有り經給ふに、このあて宮の御容貌、萬の人聞き過ぐし給はぬを、此のおとゞ、かゝる御心に、いかでと思しけれども、聞え給ふ便もなし（一一）。思ほしける（一二）

〔語釋〕
（一）九ふなるべし狹き席
（二）木のきれはし
（三）精米
（四）菜
（八）袴のすそを
（九）草を盛る器
（一〇）數へ取りて
（一二）「思はしけるやう」などありしが誤れるか

〔考異〕
（五）めぐりのものなし此處は―みちものなきいはし
（六）これは店に―これはてうたなに
（七）女―嫗
（一一）なし―なく

し。此の殿の御園にあり。密に市女(一)取りてまゐる。大殿の子、市女の腹に五つばかりにてある、母を怨じておとゞに申す、子「まゝ(二)、こゝの橘を取りてなむ參りつる、と申さむ(三)といひつれば、粟、米を包みてなむくれたる」といふ。弱き御心地に、胸潰らはしき事を聞き給ひて、物も覺え給はず。市女、徳町「いと人聞き悲し。此の(四)吾兒をのれば、腹立ちて、制し給ふこととて申し給ふになむ」と云ふ。業にやあらざりけむ、御病おこたりぬ。斯くて市女の思ふ程(五)に、高き人につき(六)たれど、我が賣り商ふ物をこそ、我が身より始めては著れ。我がほど(七)に當らむ(八)夫をこそせめと思ひて逃げ隱れぬ。市女のありて、知らせてとかくせしにならひて、侍の人々、時々物(九)申しければ、おとゞ、高基「公に仕うまつればこそ人の無きも苦しけれ。畑を作りて、一人二人下衆を使ひてあらむ」とて位を返し奉り給ふ(一〇)。高基「拙き身にて高き位を持ち居るべからず。山がつらをしたがへて田畑を作らむ。此の位を返し奉りて、國一つを賜はらむ」と申す。さも言はれたりとて、大臣の位を止められて、

【語釋】
(一)徳町自ら買ひたる也
(二)母
(三)斯くと父に告げんと
(四)此兒を吾が叱る故兒が腹立ちて我が父の禁ずる事をしたりと告口したる也
(五)諸本「やう」を「程に」と誤れる處多し こゝも「やう」なるべし
(六)嫁したれど
(七)身分相當の
(九)色々請求せしかば

【考異】
(八)當らん―ならん
(一〇)返し奉り給ふ拙き―返し奉り給ふ例なきこと申し給ふ拙き

〔語釋〕
(一)高基が幼少の時、これより高基の病の源因をいふ也
(二)高基の母親
(三)母が
(四)願を果す樣に高基に遺言しおきたれど高基巨富を擁しながら果さず
(五)高基が
(六)修法に護摩をたくに棟の木を用ふる也
(七)これも修法用
(八)味噌の代りにの意歟
(九)高基の食する物
(一三)我邸內に出來たるのではなく

〔考異〕
(一〇)なり―ナシ
(一一)宣ひて―宣ふ
(一二)聊か―聊かなる
(一四)頃なれば―頃橘これは

人の爲に苦しみを致せ」など宣ふほどに、(一)小くて病して、ほと／＼しかりけるに、親(二)大なる願どもを立てたりける、(三)亡くなりにけるときに言ひ置きけれど、(四)斯かる寶の王にて果たさず、其の罪に、恐ろしき(五)病付きて、ほと／＼しくいますかり。市女、祭祓せさせむとする時に宣ふ、高基「あたら物を、我が爲に塵ばかりの業すな。祓すとも、打撒に米いるべし。籾にて種なさば、多くなるべし。修法せんに、五石入るべし。壇ぬるに土入るべし。土三寸の所より、多くの物出で來。棟(六)の枝一つに、實のなる數あり。菓物に食ふに良き物なり。(七)胡麻は、油に絞りて賣るに多くの錢出で來。其の糟味噌代(八)へつかふに良し。粟、麥、豆、大角豆、斯くの如く雜役の物あり」とてせさせ給はず。斯くて臥し給へる程に、(九)まうぼろ物、日に橘一つ、湯水まうぼらず。高基「徒に多くの橘食ひつ。核一つに木一木なり。(一〇)生ひ出でて多くの實生るべし。今は食はじ」(一一)と宣ひて、(一二)聊か物まうぼらで、日頃經ぬ。高基「此處(一三)にはあらで、橘一つ食はむ」と宣ふ。五月中の十日頃(一四)なれば、なべて無

〔語釋〕
(二)小板などを編みて蔀の代りにしたるなるべし
(三)財寶の威光には主人たるものも畏れ避くと云ふ意歟、當時の諺なるべし
(四)正賴

〔考異〕
(一)思ひ―思ろ

心地惑はしては思しつる。賤しき身にだに、然ばかりの事は思ひ給へ(一)ぬものを」とて納殿あけて、良き果物、干物出だす。おとゞ物も覺え給はず。

住み給ふ所は、七條の大路のほどに、二町の所、四面に倉立てならべたり。住み給ふ屋は、三間の萱館、柴土、編み垂れ蔀、めぐりは檜垣、長屋一つ、さぶらひ、舍人所、帳垂れ、酒殿の方は、蔀(二)のもとまで畑作れり。殿の人、上下鋤鍬を取りて畑を作る。おとゞ自ら作らぬばかりをり。斯かるを或る人、「御蔀のもとまで畑作られ、御前近き對にて斯くせしめられたること、有るまじき事なり。此の御倉一つ開きて、淸らなる殿かい造らせ給へ。財(三)には主避ぐとなむ申すなる。天の下誹り申すこと侍るなり」と申す。高基「あぢきなき事は、此の大將主(四)の、大なる所によき屋を造り建てて、天の下の好色者どもを集めて、物をのみ盡すは、何の淸らなることとか見ゆる。其の物を貯へて、市し商はどこそかしこからめ。われ斯かる住居すれども、民の爲に苦しみあらじ。淸らする人こそ、公の御爲に妨を致し、

〔語釋〕
(二)侍所、出勤者の詰所
(三)亘勢氏曰、ひるまし侍るに歟、晝食する事なるべし
(四)高基
(五)惜しくとも
(六)蒔きて實をならして

〔考異〕
(一)然るべき—然るべき者を
(七)いらへ—ナシ
(八)かけて—かげにて

せ給ふ事、見苦しきことなり」と聞ゆれば、高基「さも言はれたる事なり」とて、人の然る(一)べき遣はせ給ふ。斯くて人參りなどするを、徳町市へ出でたる間に、侍(二)に人參りて、(三)ひるましり侍るに肴無しとて、上に申しければ、大殿心惑ひて、我か人かにもあらで宣ふ、高基「斯かればこそは、人無くて年頃經つれ(四)。如何なる費ある事を知りてあたらしく(五)とも、人は十五人、漬豆を一莢宛に出だすとも、十まり五つなり。種ならして(六)幾許なり。零餘子を一つあてに出だすとも、十まり五つなり。ならして取らば、多くの零餘子いも出で來ぬべし。雲雀の乾鳥、これ等を生けて、媒鳥にて捕らば、多くの鳥出で來ぬべし」と思ひほれて居給へり。徳町歸り來て、徳町「など物思したる樣なる」いらへ(七)、高基「口惜しう物の費ある事を數ふれば、多くの損なり。悔しく、人の言を聽きて、我が世に知らぬ事を聞く事」と宣ふ。徳町いとほしきこと限なし。おとゞ、高基「男ども酒買ひて肴乞ふぞや。かけて(八)聞けば、心地こそ惑へ」市女打笑ひて、爪彈をして聞ゆ、徳町「斯くばかりの事をやは、

〔語釋〕
(二)乘人の居る處の屋根を板にて葺きたる車
(三)老いたる
(四)蘆の葉をさしたるは矢の代にしたる也
(六)上手にして
(八)衣倉歟
(九)名簿は今の履歴書の如きもの、其をかへさずにおくは周旋して仕官させんの意味也
(一一)衣食

〔考異〕
(一)物食はず衣著て—物くはせ衣きせても
(五)著けて—すげて
(七)をさしく—よくして
(一〇)給へば—給て。按に「給はゞ」なるべし

言になりぬ。斯くて京に住むにも、(一)物食はず衣著で使はるゝ人なし。內裏に參らむとては、板屋形(二)の車の、輪缺けたるに、(三)せまりたる牝牛をかけて、ちひさき女の童をつけて、繩しりがい、はつれたる伊豫簾を懸けて、布の太きを上御衣に染めて、太き調布を下襲、上の袴にはきて、衞府兼けたれば、隨身舍人には小さき童に、木太刀を佩かせて、古藁靫に、(四)蘆の葉插し集めて、木の枝に細繩を著け(五)て、弓とては持たせて、參り罷出すれは、京の內に誹り笑ふこと限なし。それを知らず顏にて交らひ給ふ。御心の賢こく、(六)(七)政をさしく、暴るゝ軍士獸も此の主には鎭まりぬ。然るによりなん、公も棄て給はざりける。斯かる程に、大臣までになりぬ。鰥夫にて得あるまじ、我物食はざらん女得ん、と思して、(八)きぬくらにある德町と云ふ市女の富めるあなり、それを召し取りて、北の方にし給ふ。德町「なほ斯かる車、裝束にてありき給ふ事、人誹り聞ゆなり。人のそこら奉る名簿を(九)留めさせ給へば、(一〇)(一一)そじき賜はずとも仕うまつりなん。斯く小さき女の童をのみ遣は

〔語釋〕
(一)帳臺
(二)「すぐろく」の誤なるべし
(三)例の誤なるべし
(四)先驅
(六)名は高基と下に見えたり
(主) 致任の大臣、三春高基の素性。其の吝嗇。あて宮に懸想して宮内の君を語らふ。
(七)未詳、すり碎きて粉にする事歟
(八)租税などの未納なくして
〔考異〕
(五)此處は祓のところ—一をきてのと申

畫詞 此處は上野の宮、女率て歸り給へり。御濱床(一)立てて、北の方するゑ奉り、又供の大人二人。朱の臺立てて、かねの坏して物まゐれり。御たち仕うまつりまかなひし給ふ。博打、童(二)、らうそく、集りて、机立てて物食ふ。京童に物かづけたり。(三)らうそくに物かづけたり。此處は佛造る。此處は河原。宮、一つ車にて出で給へり。空車に齋串を積みて陰陽師、(四)先き馬にて出でたり。(五)此處は祓のところ。

斯くて、賤しき人の腹に生れ給へる帝の(六)御子、三春と云ふ姓を賜はりて、若き時より國を治め、位まさり、年の高くなるまで、妻もまうけず、使ひ人も使はぬ人あり。他の國にありし時は、物も食はせず、衣も著ぬ人を使ひて、自らの料には、三合の米おろして(七)食ひつゝ、一國を治むるに、公事(八)またくなして、私の財、數多く貯へ、大なる倉一つに納むるほどに、財を積みて、六國治むるに、多くの倉どもを建てて納めつれば、宰相にて左大辨兼けつ。暫しあれば、衛府兼けたる中納

〔語釋〕
(一)片々の尻切をはきて、尻切は草履の一種
(二)宴會
(三)報賽
(四)賀茂川原
(六)此處誤脱あるべし、諸共には北方と諸共に也
(八)御物らしき様子もなく

〔考異〕
(五)出て給ふとて—出で給ひて
(七)奉ること—奉ることかな

ひたり。親王の君片尻切(一)して車に走り乗り給へり。

斯くて、宮におはしまし著きて、年頃思し設けたりし所にするゑて、七日七夜、(二)とよのあかりして、打ちあけ遊ぶ。博打、又祈りせし大徳宗慶召して、上野「あが佛たちの御徳に、年頃なめき目見侍りつる心地しづめて、喜び申し侍り。今は彼の佛の御徳現はし奉り、萬の神達にかへり申し(三)の幣帛奉らむ」とて河原(四)に出(五)で給ふとて、祈の事ども、諸共(六)に、此のかへり申しはたすこと、神佛世も中に在すからぬものにやは有りける、とて北の方に、上野「あが君の御爲に、斯く萬の神佛になむ祈り申しゝ思もしろく、諸共に果し奉(七)ること」とて、

上野 千早振る神も祈はきくものをつらくも見えし君が心か

北の方、

すみなれぬ宿をば見じと祈りしを我れには神も効なかりけり

など氣色(八)も無く云ふ。

〔語釋〕
(三)晴れ業
(四)音樂師
(五)眞のあて宮の一行ぞと思ひて
(七)未詳。「つし」を「つゝ」とかける本もあり
(八)博打
(九)第一の車
(一〇)無禮なる所業ぞと態と京童等を叱る也
(一二)量などの字を充つべきか
(一四)「らうそく」を「そうしく」と書きたる本もあれども、上にも諸本「すぐろく」を「らうそく」と書誤りたる處多ければこゝも「すぐろく」なるべし

〔考異〕
(一)容貌いと―容貌はいと
(二)なんど―なれど
(六)眞實に思ほして―しそじつと思すやう
(一二)手鼓―手鼓ども
(一三)此處はだうりう寺―こゝは寺

畫詞 此處は大將殿。物見に人出し立て給ふ。下﨟の女は年十四、容貌いと(一)淸げなり。大人、童、下衆なんど(二)容貌良し。

斯くて此の寺には、今日のいろふし(三)にて、怪しからぬこといと多かり。遊の師(四)には、嵯峨の院の牛飼、講說の所には、講說の長。樂とては、鼓打ちて遊す。講說とては乞食する眞似をする。斯かる程に、大將殿の御車、御前三十人ばかりして立ちぬ。御子の君、眞實に思ほして(五)(六)、「上野御講始めよ」と宣へば、牛飼つし(七)遊びす。雙六(八)ども集まりて、聲を合せてのゝしれば、物見に來たる人々、いとほしくも有り、可笑しくもあり。博打、京童、數知らず集まりて、一の車(九)を奪ひ取る。殿の人々そら騷ぎすれば、車の簾を掲げて宣ふ、「上野奪ひ得つ。これや此のをしみ給ふ御女。なめき罪ぞはからるゝ(一〇)。疎かなる罪ぞれうぜらるゝ(一一)。雙六の主たち」と言ひて、牛飼ども手鼓(一二)打ちて、草刈笛吹く。

畫詞 此處はだうりう寺(一三)。らうそく(一四)牛飼集まりて居り。博打、京童、車奪

〔語釋〕
(一)見物の爲の車を置くべき場所
(三)上野宮方の
(四)あて宮
(五)論語に「報怨以德」
(六)正頼
(九)下﨟の女があて宮の身代りになりて奪はれ行きて上野宮の北方になるは幸ならんと也
(一〇)やせても枯れても相手は宮樣なれば
(一一)かへ玉なる事を氣付かるゝな

〔考異〕
(二)打ち—ナシ
(七)一人は—「は」ナシ
(八)なりけり—、「けり」ナシ

正頼「とうりう寺に、上野の御子の、大いなるわざし給ふなるを、政所の男ども遣りて、所(一)取らせよ。若き子ども遣りて物見せむ」と宣ふ。少將御寺にいきて、大幕打ち(二)、所取らす。宮の男(三)ども、「我が宮の御爲に、疎かにいますがる殿には、なでふ所か取らすべき」といへば、少將、和政「唯御車一つばかりなり。中のおとどの姫君(四)の、「面白かるべき事なり。見給はむ」と聞え給へばぞ」と言へば、男宮「よし。仇(五)は德を以てとぞ言ふなる」とて取らせつ。

其の日になりて、おとど(六)、下﨟仕うまつる人の女、年若く容貌好げなるを召して、裝束いと能くせさせ給ひて、舍人の女、大人二人、わらは一人(七)は、樵夫の女なり(八)けり。黄金造りの車一つ、檳榔毛の車二つ、黄金造りには、下﨟の女、大人わらはを乘せ、檳榔毛には、殿の御たち乘せて出立つ。正頼「あてこその御德(九)に、此の人の、彼の君の御妻にてあらん事よ。凡人の良きには優りなむかし(一〇)。ゆめ氣色見(一一)すな。あてこその御正身と思ひなしてあれ」と宣ふ。

といふ聞えをなして、堂毎に(一)政所をしつゝ(二)、集まりて、内ならしをしのゝしり(三)、又斯くばかりの見物は難かるべしと云ひなさむ。(四)彼の殿は物見好みし給ふ所なり。出給へらむを、集まりて奪ひ取るばかりぞ」御子の君、上野「面白き事宣ふくそたちかな。たゞ斯うなり、この事は。(五)京くそたちのし給はんことは、此のとうりう寺(六)の塔の會に優るものは(七)なかるべし、と宣びひろげよ(八)」内ならしの人の料にとて、錢、米、車に積みて出し立つ。

畫詞 此處は上野の宮。大殿四つ。板屋十。倉あり。池廣く(九)、山高し。これは、寢殿(一〇)、宮おはします。男ども十人ばかり。松原、植木、前栽あり。こゝは京童、博打集まり居りて物食ふ(一一)。御倉あけて、家司ども、有る限の物どもをはこび出して、此の人どもにくる。

斯かる事を、大將のおとゞ聞きて、笑ひ給ふこと限なし。正賴「我をはかなしと思して、はかり給はんと思すなり、何かははかられ奉らん」とて和政(一二)の少將に、

〔語釋〕
(二)事務所を設け
(三)下稽古
(四)正賴邸
(五)京童等の
(一二)太宰權帥滋野眞菅の長子

〔考異〕
(一)堂―餘
(六)とうりう寺―たうりう寺
(七)ものは―「は」ナシ
(八)宣びひろげよ―宣ひしらせよ
(九)廣く―廣し
(一〇)寢殿―寢殿に
(一一)物食ふ―物食へば

㊆ 正賴敵の計につきて計を設く。奇怪なる法會。上野の宮贋あて宮を奪ひて妻とす。神佛に奉賽す

は先に立つ。斯くの如くの(一)人の歎を(二)除き給はゞ、人の歎き(三)願ひ滿つべし、となむ文書に言へる。誠に然あるものなり」御子の君、上野「誠に然有るべきものなり。數多の人の(四)喜をなさむに、我が一つの願ひ滿たじやは」と宣ひて、道の人の沈める才をば、公にも申し、博士どもにおほせ、居所なく、食物無き人の爲にとて、錢、衣金、車に積みて出し立て給ひ、官得べき人の沈みたるを求めさせ給ひて、我が御莊は皆賜ふ。

京童の聞ゆることは(五)、「これは、易く爲つべき事なり。己がゆかり、西東(六)の合せて六百人ばかり、又此の雙六(七)の主たち、さばかりいますらむ。それ等走り集まりて戰はゞ、危ふからじ」博打どものいらへ、「有るまじきこと言ふ(八)くそたちかな。四面四町の殿に、面ごとに御門を立てて、鱗の如くに造り重ねたる大殿(九)に、庭(一〇)の木のごと、上達部、御子たち住み給ふ所には、天下のいらなき(一一)いくさなりとも、打勝ちなむや。さて、斯くはしてむかし。此の東山なる寺の塔の會(一二)し給ふべし

〔語釋〕
(六)東西兩京の
(七)ばくち打等
(八)君等
(一一)荒々しき軍士なりとも
(一二)法會

〔考異〕
(一)如くの—「の」ナシ
(二)歎を—「を」ナシ
(三)歎き—ナシ
(四)人の—「の」ナシ
(五)ことは—はに—はどに
(九)大殿に—「に」ナシ
(一〇)庭の—「の」ナシ

ふまとも、比叡の四十九院に一月に一石四斗七升なり。大小も同じごと、各たて(一)まつり(二)給はりなむ。(三)ひざうとこそ思ひ給ふらめど、佛に奉る物は徒らにならず。來世、未來の功德なり」と聞ゆれば、(四)いといたう喜び、立ち居七度拜みたまふ。上野「我が聖の(五)德に(六)なし給へらば」大德宗慶、「何か思す。此のこと御心にしみためり。いと能く叶へ奉りなむ。若しさ有らむ宿世なくば、少し心もとなくなむあらむ。男女の中は(七)むかし緣の儘なり」と聞ゆ。此の君、上野「然有りとも、我が大事の聖の君。此のこと赴けしめ給へ」とて、此の御燈の料、みてぐらの料、皆取らせ(八)給ひつ。

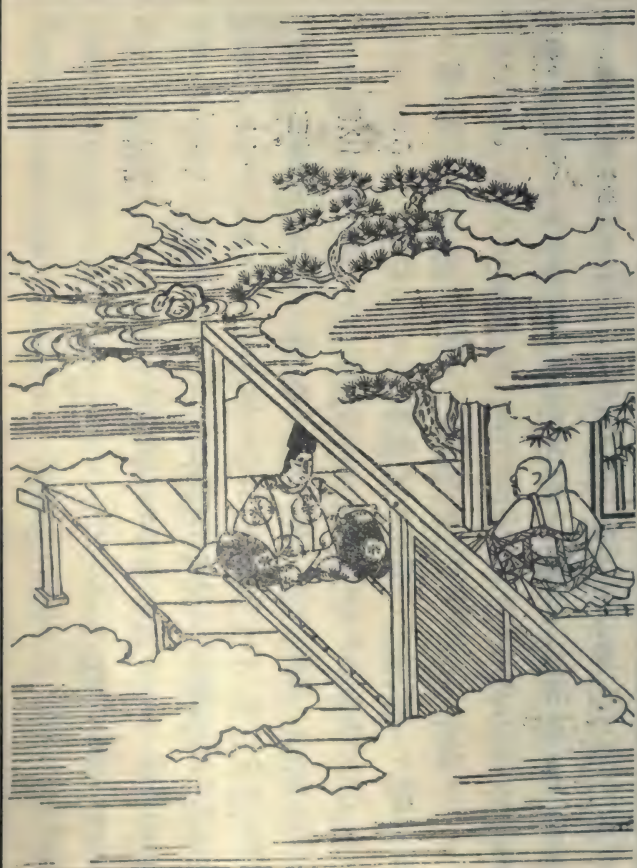
又(九)迫り癡れたる大學の衆の言ふ樣、「哀れ書に言へる樣は、得難き女を得むとせむ樣は、世界に(一〇)ふせう(一一)とものはず、家竈無くして、便りなからむ人、道のことに於きては、(一二)しきしにも入り、(一三)(一四)たうさくしきふだいし、學問料賜はり、斯く返す〴〵物は序を越さず出立ちつべきものなり。然あるを、才あるものは沈め、無才の男

〔語釋〕
(一)「奉り給はなん」なるべし
(三)非常の字音歟
(六)「なし給へらば」は「なし給はらば」歟此下に語を省きたる歟又は脫文歟
(七)「昔の緣の」なるべし又すく(宿)緣の誤寫歟
(九)窮迫せる
(一〇)夫妻伴はずにて夫婦離散しの意なるべし
(一二)未詳
(一三)對策し及第しなるべし

〔考異〕
(二)給はりなん—給ふばかりなど
(四)いと—ナシ
(五)德に—こと
(八)給ひつ—給へば
(一一)とものはず—とろのはず—とのはず
(一四)たうさく—とうさく—とうさろ

〔語釋〕
（一）趣く
（二）相手、めざす女
（三）觀音

〔考異〕
（四）食なく—あじきなく

とゝのへたなり。殘れる九に當るなむ、四方の國に聞きしに、斯くばかりの人きこえず。此の女なむ、耳につき、心につく。然あるに、父大將に請ひ、正身に請ふに、女も大將も、今に承け引かず。如何なる佛神に大願を立て、なでふ事のたばかりをしてか、女のおもむく（一）べき」と宣ふ時に、比叡の山に惣持院の十禪師なる大德の言ふやう、宗慶「かたき（二）を得むずる樣は、比叡の中堂に、常燈を奉り給ひ、又奈良、泊瀨の大悲者（三）、人の願ひ滿て給ふ、龍門、坂本、壺坂、東大寺、斯くのごとく、總べて佛と申すもの、土を圓かしてこれを佛と言はど、御みあかし奉り、神と言はむには、天竺なりとも、御幣帛奉らせ給へ。百萬の神、七萬三千の佛に、御みあかし幣帛奉り給はど、佛神各與力し給はむ。天女と申すとも、降りましなむ。いはんや娑婆の人は、國王と聞ゆとも、赴きたまひなむをや。又山山寺々に食無く（四）、物無き行ひ人を、供養じ給へ」と聞ゆ。親王の君、上野「いと尊きことなり。御みあかしは、いくらばかり奉らむ」大德、宗慶「一寺に一合奉りた

〔語釋〕
(一)正賴
(二)我正賴の聟となる場合に本宅に妻妾が居ては
(三)巨勢氏曰、左衞門督は藤原忠正の長子忠俊なりこれは次男清正をいふなれば右衞門督なるべし
(五)正賴
(七)あて宮
(九)前以て
(一〇)あて宮が返事せず

〔考異〕
(四)左衞門督—右大臣殿
(六)殿うち—おとゞうち
(八)あんなり—あなり
(一一)思ほし—おぼし
(一二)かんなぎ—かうなぎ
(一三)宣ふ樣—宣ふはに

るを、今然ぞ我をもせむ、とて妻をも追ひはらひて、上野「今左(一)大將の家に往きて我棲めらむ(二)に、妻すゑたらば、おもひ疎みなむ」と宣ひて、待ちおはしますに、生ひ出で給ふまゝに、皆他人々に奉りたまひつ。此の御子さりとも、我を聟數に入れ給はざらむやは、と思ほすに、八の君今おひ出で給ふと聞きて、これならむと待ち給へば、左衞門督(三)(四)にたてまつり給ふと聞召し、驚きて宣ふやう、上野「あやしく、此の大將の、我が思ふことを未だ成さぬかな」と宣ひて、數多度御消息あれど、殿(六)うち見笑ひ(五)罵りて、御返なし。上野「大方は、九(七)に當るあんなり(八)。それを、さしは(九)へて言はむ」とてあて宮に御文あり。されど怪しきものに思ほして、聞えたまは(一〇)ず。此の御子、萬に思ほし(一一)さわぎて、陰陽師、かんなぎ(一二)、博打、京童、嫗、翁召し集めて宣ふやう(一三)、上野「我この世に生まれて後、妻とすべき人を、六十餘國唐土、新羅、高麗、天竺まで尋ね求むれど、更に無し。此の左大將源正頼の主の女どもも十餘人にかゝりてあなり。一人に當るをば、帝に奉りつ。その次々、悉くに

に、民部卿殿(一)の、宮(二)の同じ腹の五の君、年十八、子二人。又生み給(三)はむとすると、いと多く勢ひたり。(四)西のおとゞに、同じ御腹の六の君、年十六、子生み給はんとす。御夫右の大臣殿の太郎君、(五)東(六)のおとゞに同じ腹の七の君、年十五。御夫右衛門(七)督の殿。北の對徒らなり。今おひ出で給ふが料なり。池廣し。植木あり。反橋、釣殿あり。

これは大い殿の君すみ給ふ大殿町。屋ども同じ數なり。(八)寢殿に北の方すみ給ふ。御たちいと多かり。西の對は、中務の宮の北の方、此方の御腹の中の君なり。年二十三。男君だちは、宮の御腹の四人は廊を御曹司にておはす。東のおとゞ、頭宰相(九)殿の御方、三の君、年二十二。(一〇)御夫左大臣殿の太郎君。子一人。南のおとゞ同じ御腹の四の君。子無し。年二十。(一一)源宰相の北の方。

かくて又、上野の宮とて、(一二)古御子おはしましけり。その御子は、物ひがみし給へる御子にておはしける(一三)程に、たゞ今世にある上達部、御子だち、(一四)此の殿の聟にな

〔語釋〕
(一)前に民部卿宮とあり殿は誤なるべし
(二)あて宮の
(五)「の太郎君」衍歟
(七)清正の弟忠俊
(九)藤原實正
(一一)藤宰相の誤なるべし、藤宰相は實正の弟實賴
(一四)正賴の

〔考異〕
(三)給はむと—「と」ナシ
(四)西の…東の—右のおとゞ民部卿の殿の御方同じ御腹の七君御夫右の大い殿の太郎君年十六子うみ給はむとす東の
(六)おとゞに…督の殿—おとゞ左衛門の督の殿の御方年十五
(八)寢殿に—「に」ナシ
(一〇)二十二—二十一
(一二)古御子—古き御子
(一三)おはしける—おはしましける

㊈ 上野の宮あて宮を娶らんとして僧巫博徒等を集めて會議す。樣々の獻策。東山の法會の詭計

〔語釋〕
(一)言ひよらんと
(三)女御が
(四)あて宮
〔考異〕
(二)おとゞに―「に」ナシ

給はず、此の同じ腹に物し給ふあて宮に聞えつかむ、と思せど、あるまじき事なれば、唯御琴を習はし奉り給ふ序に、遊(一)などしたまひて、此方にのみなむ、常に物し給ひける。

畫・詞　此處は、大將殿、宮すみ給ふ大殿町。池廣く、前栽植木面白く、おとど、廊ども多かり。曹司町、下屋ども、みな檜皮なり。寢殿には、あて宮、小宮たち、女御の君腹の御子達、合せて七所。年十三歳より下なり。御たち、大人卅人ばかり、童六人、下づかへ六人、乳母どもなんどあり。皆童はあて宮の御人なり。西のおとゞ(二)に女御すみ給ふ。下づかへ、童、大人、同じ數なり。内裏より御文あり。見(三)給ふ。東の對には、女御の御腹の男御子たちいと數多おはすなり。皆碁打ちなどす。北の大殿は、宮(四)、父おとゞすみ給ふ。おとゞ、内裏へ參り給ふとて急ぐ。

これは御子どもの住み給ふ町。大殿六つ、板屋、廊、曹司、藏ども有り。寢殿

實正「岩(一)の上にしひて生ひ添ふ松の根の誰聞けとてか響きますらむ

と宣ふ時に、皆人哀がる。木工の君といふ人、勞あるものにて、木工「これを聞き知らぬ樣なるは、いと情なし」とて、君たち(二)にも(三)、木工「猶(四)これはかりをば聞えへ」と聞ゆれば、ちご君なむ(五)(六)、御前なる箏の琴に彈きならし給ひける。

ちご君「響く(七)とも音には聞えで末の松今宵も越ゆる波ぞ知らるゝ

又宰相の君、

實忠「涙川みぎはや水のまさるらむするゑ(八)より瀧の聲もよどまぬ

又かくて夕暮に、雨うち降りたる頃、中島に水の溜まれるに、鳰と言ふ鳥の、心すごく鳴きたるを聞き給ひて、侍從(九)、あて宮の御方におはして、かく聞え給ふ。

仲澄「池水に玉藻しづむは鳰鳥(一〇)の思ひあまれる涙なりけり

とは御覽ずるや」と聞え給へ(一一)ば、怪しう思して、いらへ聞え給はず。此の侍從も、怪しき戯人にて、萬の人の、聟になり給へとをさ〳〵聞え給へども、さも物し

〔語釋〕

(一)岩は あて宮 松は 自身、嫌ふ松の上に強ひて生ひ添ひて尙樣々のくり言を言ふは誰に聞いて貰ふつもりか我ながら分らぬ

(二)姫君たち

(四)此歌の返事だけは

(五)八の君、あて宮の姉

(七)響き增すと言はるゝ其響は我方には聞えず却りて君が仇し心を持ち居らるゝ事が知らる「君をおきて仇し心をわが持たば末の松山波も越えなむ」

(八)「するゑより」は「するゑなる」歟

(九)あて宮の兄仲澄

(一〇)仲澄自らを比していへり

(一一)あて宮に

㈧ 仲澄あて宮に懸想す

〔考異〕

(三)にも—をも

(六)ちご君—ちご宮

〔語釈〕
(一)君は死ねとならば直にも死なんと宣へど君の命は岩の如く千歳をも經べしそれは死後人の赴くといふ黄泉がよく承知して居るならん
(二)我をば
(三)あて宮は兵部卿宮の姪なれば也
(四)朱雀
(五)我は外に女も持たぬに何とてあて宮の肯かぬならん
(七)實忠自身を鶯にたとへたり
〔考異〕
(六)給へれど—給ひつれど

あて宮 苔(一)おふる岩に千代ふる命をば黄なる泉の水ぞ知るらむ

とて賜ふ。宰相見給ひて、限なく嬉しと思す。

又兵部卿の宮より、

兵部 いと心強くも物し給ひけるかな。此(二)のわたりには、斯(三)うしも思し疎まざらなむ。上(四)にもうらみ聞えてしがな。

我(五)が袖は宿かる蟲もなかりしを怪しく蝶の通はざるらむ

と聞え給へ(六)れど御返もなし。

月の面白き夜、源宰相、中のおとゞに立寄り給ひて、實忠「兵衛の君立出で給へ。月いと面白し」など聞え給ひて、御前の花盛、色々の花の影にたち寄り給ひて、かく宣ふ、

實正 花ざかりにほひこぼるゝ木隱れもなほ鶯(七)はなくなくぞ見る

など宣ひて、松の木の下に立寄りて、斯くなむ、

〔語釈〕
(二)朱雀院の弟
(三)だめとは分つて居れども
(四)女が男に言ひかけられて左程つれなかるべきものとは聞いた事がないに
(五)餘り強ひて言ふも無禮故
(六)今後は返事を下されずして我を試み給ふとも
(七)聞くとて

〔考異〕
(一)給へど—給ひつれど

など聞え給へ(一)ど御返なし。

又兵部卿(二)の宮より、

（兵部）思ふ(三)もしるき御様なめれど、さても止むまじければなん。(四)斯くは承らぬものを、あいなう物言はせ給はぬ。

など聞え給へり。あて宮、可笑しくもおどし給へるかなとて御返なし。

宰相、

（實忠）せめて(五)聞えさすればかしこさに、今は思ひ給へ歇みなむ。

死ねと言はゞためしにもせむ物をのみ思ふ命は君がまに〳〵

あが君や、後の(六)試はありといふとも、今日の御返事は露をも見せ給へ。

と有れば兵衛、「なほ此度ばかりは御返賜へ。物の哀知らぬやうなり。兵衛が言君に聞召すと思せ」あて宮、「さらば、君の言聞くと、(七)怪しからぬ人にやならむ」

と宣へど書きつけ給ふ。

とて奉れ給ふ。あて宮見給ひて、「怪しく例のむづかしきもの常に見せ給ふ」(一)と宣へば、兵衛、「常(二)に見知らぬ樣なり」(三)と聞ゆれば、あて宮「例のごと宣へかし」など宣ひて、書きつけ給ふ。

あて宮 はま千鳥(四)ふみ來し浦にすもりこのかへらぬ跡は尋ねざらなむ(五)

あて宮「とこそは(六)君の御言にては宣ふべかなれ」と宣ふ。兵衛「兵衛が名は、今なむいと淸らになりぬる」と聞えて、兵衛「兵衛に賜へりと聞えつれば、書きつけ給へる」と聞(七)ゆれば、實忠「いと嬉しく、宣ひけると承れば、志の驗も見給へけると、いと嬉しくなむ覺ゆる」と宣へり。

又平中納言殿より、

正明 辛うじて聞えさせ(八)たりしかば、覺束なけれど、猶懲りずまになん。

山ふかみ物思ふ沼の水おほみ八重のいはがき越ゆるころかな

おぼろげにや思す。

【語釋】

(三)いつも返事せずしては情知らずの樣也

(四)ふみ—文、踏み

(五)前の實忠の雁の子の歌に據りてよめり

(六)兵衛の返事として言遣はせ

(七)實忠に

〔考異〕

(一)と宣へば—ナシ

(二)常に—「に」ナシ

(八)たりしかば—たりしは

と書きて奉らせ給へり。中将あて宮に聞え給ふ、祐澄「大将殿より、斯くなむ宣はせたる。見給へ」あて宮(一)「いかでか御許にとあんなるをば見給へむ」(二)とて聞きも入れ給はねば、中将、

祐澄(三)久しく候はで、畏まり聞ゆるに、賜はせたるをなむ(四)。彼の承りしことは斯くなんとものすべき人(五)、見聞かぬ心になん。春日は、

目に近くをりていのれど春日野の森のさか木は色もかはらず(六)

かひなき音にこそ。

とて奉り給へり。

かくて例の宰相(七)は、島のいとをかしき洲濱(八)に、千鳥の往き違ひたるなどして、それに斯く書きつく、

實忠　浦せばみ跡かはしまのはま千鳥(九)ふみやかへすとたづねてぞ鳴く

苦しくもたどらるゝかな。

〔語釋〕
(一)君の名宛で来し手紙を我が見るべきに非ず
(三)御無沙汰して
(四)御手紙を頂きて恐縮也
(五)本人が受付けぬ故はかどらず
(六)あて宮を榊にたとへたり
(七)實忠
(八)島臺
(九)文、踏み
〔考異〕
(一)いかでか御許にと―いかで御許に

く宣はすれば、試みに斯くなむと聞えんとて、氣色ばめど、萬に宣ひ紛らはして、座なるべければ、聞え紛(一)らはしつゝなむ」宰相、實忠「などか然しも有らむ。同じ同(二)胞を、民部卿、(三)中將(四)なんどをば棲ませ給はずや。などか實忠をしも覺しおとすべき。後(五)おひともいふものなり、命(六)をこそ知らね」兵衞、「あ(七)しくおはしますとにはあらで、彼(八)の御方は、如何に思すにかあらむ、猶かくておはします可きにこそあんめれ。其(九)の御次々におひ出で給ふを念じ給へかし」など聞ゆ。

かくて彼の右大將殿より中將の君の御許に、

兼雅此の頃(一〇)、殿にまゐり來(一一)むとするを(一二)、うちはへ物忌にてなん。今日は、春日へなむ詣うで侍る。彼(一三)の聞えしことは、未だ物し給はぬにや侍らむ。此の頃はいと怪しき心地になむ、

怪しくもぬれまさる哉春日野の三笠の山はさしてゆけども

往けど往かれず。

〔語釋〕
(一)正明の戀を申上ぐる積りで其樣子を示すこと
(二)ばつが惡さう故
(三)實忠の兄實正、正頼の三君の夫
(四)實忠の兄實頼、正頼の四君の夫
(五)後進は行末却て有望なりとの義歟
(六)命の長短は分らぬけれども
㈦兼正、實忠、正明、兵部卿宮各あて宮を挑む
(七)何も實忠が惡いといふ譯ではなく
(八)あて宮
(九)あて宮の妹たちの生長を待ち給へ
(一〇)兼雅
(一一)詣澄
(一三)あて宮へ取持ちのこと

〔考異〕
(一二)するを—すめるを

かなりとも、聞えて(一)見せ給へ。さて後は、又も聞えじ。人の身に我が魂通はなむとは、思ふことを人の知り給はぬ時になむ思ほえける」など宣ふ。

かくて、銀の火取(二)に、銀の籠造り被ひて、沈を擣きふるひて、灰(三)に入れて、下の思ひにすゑて(四)、黒方(五)をまろかして、それに、

實忠　ひとり(六)のみ思ふ心の苦しさに煙もしるく見えずやあるらん
雲(七)となる物ぞかし。

と書きて、「兵衛の君の御許に」とて有れば、例のあて宮に御覧(八)ぜさすれば、あて宮「をかしげなる物にこそあめれ」と宣へば、兵衛、「如何これをば宣はん(九)。時々は宣はせよかし」あて宮、「いでや、物言ふらんわざも知らず。今習ひて」と宣ふ(一〇)。宰相の君、實忠「例の覚束なさ(一一)の癖(一二)、未だ止め給はざりけりな」と言へば、兵衛「御覧ぜよと(一三)、戯れに言ひなして、笑ひ給ひにしかば、又も聞えず」と聞ゆれば、宰相、をかしげなる蒔絵の箱に、絹、綾など(一四)入れて取らせ給ひて、斯(一五)かる事を宣ふ。兵衛、「斯

〔語釋〕
(一)あて宮に申上げて
(二)火入
(三)灰として入れて
(五)合せ薫物の名
(六)ひとり—獨、火取
(七)思ひの烟は凝りて雲となるものなれば見ゆべきものをの意
(八)兵衛が
(九)返事し給へ
(一〇)此歌の文のつゞき悪し。脱文あるべし
(一一)返事のなきを責むる也
(一三)「御覧ぜよと」は「御覧ぜさせつれど」歟
(一五)我戀の切なる由を告ぐる意か

〔考異〕
(四)すゑて—そへて—くすべて
(一二)癖未だ—癖はまだ
(一四)など入れて—などし入れて

〔語釋〕

(二)あて宮へ文を取次ぐ事が知れたらば

(三)もとなしく

(四)差上げた處が御返事はむづかしい

(五)兵衛があて宮の返歌の案をつくる也

(六)正明の歌を兵衛が貰ひたるものの如くに言ひなす也

(七)正明にいふ也

(八)此處誤脫あるべし

(九)仄かにはの歌はあて宮の御前に居合せし人々の作れる也と作り言をいふ也

(一〇)六帖「かきたれてある白雪の君ならばあな珍らしと言はましものを」

〔考異〕

(一)これ―ナレ

實忠「これをだに」とて書いて、兵衛に、實忠(二)「これ御覽ぜさせ給へ」とて取らすれば、兵衛「いと恐ろしき事。(三)かゝる聞えあらば、兵衛が身は何の塵泥にかならむ」と聞ゆれば、實忠「何の異なること聞えさせたらばこそあらめ。花御覽ぜさすばかりにこそ。何心有りてとかは見ゆる。(三)猶おいらかに參り給へ」兵衛、「さらば賜はらむかし。(四)例の覺束なうこそあらめ」とて、取りて、御前にて(五)書きつく。

兵衛 仄かには風のたよりに見しかども何れの枝と知らずぞ有りける

と書きて 兵衛「斯く言ひたらば」など聞ゆれば、あて宮「誰ぞ、(六)君を斯く言ふらむは」など宣ふ。兵衛持て出でて、兵衛(七)「御覽ぜさせつれば、兵衛が許に賜へるなり(八)と聞えつれば、宣ひ紛らはして笑ひ給へれば、(九)御前にてこれかれが聞えつるなり」と聞ゆれば、正明「さればよ。君の御手にこそあめれ。珍らしからぬも、(一〇)降る雪とも聞えつべしや」と聞ゆ。兵衛、「まめやかには、斯く怪しからぬこと承らじ。戯にても、人の御仇言など聞え給ふべくなむあらぬ」など聞ゆ。宰相、實忠「猶此の返、聊

やと、言多く聞え給ひつゝ、それにつけてなむ御消息通はし給ひける。それに斯くなむ、

正明 さゞら波(一)立つをば知らで川千鳥はね如何なりと人に告ぐらむ

と思ふなむ妬かりける。

とて奉り給へば、兵衛尉賜はり給ひて、あて宮を呼び離ち奉り給ひて、見せ奉り給へば、何心なく見給ひて、あて宮「うたてある文を見せ給ひけるかな」兵衛尉、祐澄「まさなからむ(二)をば見せ奉りてんや。平中納言のなり」と聞え給へば、あて宮「うたておはする君かな(三)」とて立ち走り給へば、強ひて御懐に押し入れておはしぬ。

かくて、源宰相(四)は、猶彼の兵衛の君に思ふ事を語らひつゝ、實忠「夢ばかりの返をだに見せ給へ」となむ宣ひける。花櫻のいと面白き花びらに、

實忠 思ふ事知らせてしがな花櫻風だに君に見せずやあるらむ

〔語釈〕
(一)さゞら波は正明の心にたとへ川千鳥はあて宮にたとへたり
(二)飛でもない文をば
(四)實忠
〔考異〕
(三)をば—「ば」ナシ

實忠、兵衛の君を介してあて宮を挑む

る名立ちて見え騒がれ侍りしかば、人の上にても、今は(一)忘れてもなむ。(二)彼の人は、如何なればにかあらむ、女子は置かれたらぬ所なれど、「(三)一人ばかりは懐任せさせて有らむ」とて東宮よりも宣はすれど、未ださも定められざめり。さは有りとも今斯くなむと、(四)物して聞えむかし」主のおとゞ、兼雅「我が君、聞えつくすべくもあらず」とて、

兼雅 我一人いふにあかねばくれなゐの袖も告げなむ思ふ心を

と宣ふ。中將、

祐澄 (五)思ふ人(六)おほかる袖の色を見て一人たのまむ(七)ことの苦しさ

かくて、東宮の御従弟の(八)平中納言ときこえて、いとかしこき(九)遊び人、色好みにて、有りと有る女をば、御子等をも、御息所をも、宣ひ觸れぬなく、名高き色好みに物し給ひけり。それも、此のあて宮に聞え給ふべき便を思すに、(一〇)兵衛尉の君なむ(一二)彼の殿に通ひ給ひける。正明「かう思ふ事なん有る。御文持て(一一)參り給へ」(一三)と何や彼

〔語釈〕
(一)忘れても左様の事には手を出さじと思ふ
(二)あて宮
(三)父母が
(四)あて宮方へ行きて申次ぐべし
(六)君の思ひ人は数多き事故君の血涙をあて宮が我一人の爲と思はゞ當が違ふべし
(八)名は正明
(九)音樂の上手
(一〇)正頼の十男頼澄
(一二)平中納言方へ出入したり

五 平正明あて宮に懸想す。

〔考異〕
(五)思ふ人—思ふことと
(七)ことの—ほどの
(一一)參り給へ—參らせ給へ
(一三)と何や…聞え給ひつゝ—と聞え給へば何かは早聞き給ひけん

〔語釋〕
(一)正頼兼雅と睦し
(二)正頼には申込まず
(三)右近衞中將祐澄、正頼の三男
(四)右近衞府
(五)恥かしければ
(六)其れ〴〵聟を取り給ふに
(七)自分も聟になる譯にはゆかぬかと
(八)獨身者
(一〇)「なにせんに玉の臺も八重葎生へらん宿に君とこそねめ」
(一一)あて宮
(一二)祐澄の戀人なるべし
〔校異〕
(九)人をこそ—人こそ

せて捿み給ふありけり。此の主、あて宮をいかでと思す。父大殿、よき御仲なり。(一)されど、親には(二)聞え給はであて宮に聞え給ふべき事を思すに、左大將殿の中將、(三)此のおほんづかさ(四)の中將なりけり。御中いとよく語らひ給ひて、殿にもろ共に物し給ひて、遊などし給ふ序に、兼雅「君に聞えまほしきこと有れど、得聞えぬかな」、中將、祐澄「怪しくも宣はするかな。疎き人にこそ、つゝむ事も有れ」主の大將、兼雅「今更かゝる心のまばゆさ(五)に、聞えでも歇みなむと思へど、然てのみは得あるまじく思ほゆれば、先づ君に聞えむ、と思ひてなむ。殿に皆人(六)捿ませ奉り給ふなるを、などか此處(七)にしもえ候はざらむ、となむ聞えまほしき」中將、祐澄「捿み所(八)なき人(九)をこそ、さもし給ふめれ。怪しくも宣はするかな」主の大殿、兼雅「玉の臺(一〇)もとこそ言ふなれ。まめやかには、中のおとゞの姫君(一一)をなむ、小く聞えたまひし時より承り置きたるを、斯くなむとだに聞えでは歇みなむや。彼の若宮わたり思し出でて、兼雅が思も思し知れかし」中將打笑ひて、祐澄「さる思ひ(一二)侍りて、好いた

初言は答めぬ物ぞ」なとて、實忠「思ひ餘りてこそ、幾多の人の御中に、君にしも聞ゆれ」と宣へば、兵衛、「さらば、まめやかなる御志にて宣はするか。然らでは、かゝることは宣ふまじとこそ覺ゆれ」など聞えつゝ有るに、宰相、珍らしく出で來たる雁の子に書きつく。

實忠「かひのうちに命こめたる雁の子は君がやどにてかへらざらなむ

とて日頃は」とて、實忠「これ中の大殿にて、君一人見給へ。人に見せ給ふな」とて取らせ給へば、兵衛打笑ひて、兵衛「かばかりに親生み付くらむ人の樣にもこそ仕うまつれ」實忠「いで斯ばかりぞかし、御心は」と宣ふ。兵衛賜はりて、あて宮に、「すもりになりはじむる雁の子、御覽ぜよ」とて奉れば、あて宮、「苦しげなる御物願かな」と宣ふ。

かくて又、右大將藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世中に心憎く覺え給へる、限なき色好にて、ひろき家に、おほく屋ども建てて、良き人々の女、方々に住ま

〔語釋〕
（一）なとての「な」は衍文歟
（三）本氣で
（四）古は雁を飼養せし也その卵は孵りにくきものの故偶生るれば珍重せしものとぞ
（五）あて宮の幼少の頃より我が心かけたるを隱していへり
（七）日頃は思ひに沈み居れり抔の意なるべし
（八）此詞の意解し難し
（一〇）かへらぬ卵

〔考異〕
（二）御中―「御」ナシ
（六）かへらざらなむ―かへさぶるらむ
（九）いで―いらへ
（一一）三十―四十

㊃ 藤原兼雅あて宮に懸想す。祐澄を語らふ

㈢ 絶世の美人第九女あて宮。源實忠の懸想。侍女兵衛の君を語らふ。

〔語釋〕

(二)民部卿は左大臣季明の長子實正、中將は二男實賴

(五)實正の妻、三の君、あて宮の異母姉

(七)正賴の邸に

(八)あて宮の住める殿

(九)口すさび、あて宮に關する言ひ草

〔考異〕

(一)御心にも—「も」ナシ

(三)宰相にて—「にて」ナシ

(四)唯—ナシ

(六)心ばへある人—心ばせある人—心こ となる人

(一〇)聞ゆれば—「れば」ナシ

つゝ、御厩にし、御倉町政所にし、所々さし離ちつゝなむしたりける。

かくて何れともなく清らにおはしましける中に、あて宮は、御年十二と申しける二月に、御裳奉る程もなくおとなになり出で給ふ。あるが中に容貌清らに、御心らう〳〵じく、今めきたる御心(一)にもあり、物の心も思し知りたれば、父大殿母宮、限なくかしづき奉り給ひて、此の君を如何にせまし、と思してあり經給ふ程に、民部卿(二)、中將の御弟、左大臣殿の三郎に當り給ふ、實忠といふ、宰相(三)にて、此のあて宮に御心付き給ひて、いかで聞えむ、と思せど、父大殿に聞え給ふとも許され給ふまじく、忍びてあて宮に聞えたまはんも漫なるべければ、思ほし煩らひて、唯(四)民部卿の殿の御方(五)に聞えむと思しわたるに、あて宮の御乳母子、容貌も清げに心ばへ(六)ある人、兵衛の君とて(七)さふらふに語らひつき給ひて、實忠「實忠殿にさふらふとは、中(八)の大殿に知らせ給へりや」など思すことを宣へば、兵衛「他戯ごとは宣ふとも、此の斯る口遊び(九)は、更に承らじ」(一〇)と聞ゆれば、實忠「人の

七つ、其の御弟の男宮六つになむおはしましける。かくて、こゝばくの男女、男も妻具し給へるも、更に外住せさせ奉り給はず、正頼「大きなる家(一)なれば、わが世の限は、かくて住み給へ。外へおはせむは我が子にあらず」と聞え給ひて、四町の殿を、腹一つをば、町一つにすませ奉り給ふ。五間の大殿一つ、十一間の長屋一つづつ奉り給ひて、(二)彼方の御腹の三所、宮の御腹の四所、(三)町々にすませ奉り給ふ。御夫なき御方も皆まうけ給へり。かくて父母のすみ給ふ町には、寝殿にはあて宮より始め奉りて、(四)此方の御腹の若君等、内裏の女御(五)の御腹の女宮たちなど、皆おもと人、乳母、うなゐ、(六)下仕なんど、容貌心、有る中に優りたるを擇りさふらはせ給ふ。西の大殿は、女御の君の御方、東(七)の大殿は宮たちすみ給ふ。父母は北の御方になん住み給ひける。男君たちは、ある限り、廊を御曹司にし給ひて、板屋を(八)さぶらひにしてなんありける。女房の曹司には、廊の廻りにしたるをなん割りつゝ賜へりける。(九)太郎宰相の御方には、殿のあたりなりける所々を賜び

〔語釈〕
(二)大い殿の上腹の中の君三の君四の君
(三)五の君六の君七の君八の君
(四)女一腹の
(五)仁壽殿女御
(八)家禮の詰所
(九)正頼の長子左大辨兼参議忠澄

〔考異〕
(一)家なれば—家なり
(六)なんど—など
(七)大殿は—大殿に

宮の御腹。大い殿の御腹は、五郎兵衛佐顯澄年二十六、六郎兵衛太夫兼澄年二十五。宮の御腹、七郎侍從仲澄も同じ年、八郎皇太后宮の大夫基澄年二十三。大い殿の九郎式部丞殿上人淸澄年二十二。宮の御腹の十郎兵衛尉藏人賴澄二十。大い殿の御腹、十一郎親澄年六。宮の十二郎行澄同じ年。御女、宮の御腹の大い君(一)は、(二)御せうとの今の帝につかうまつらせ給ひけり。男四人、女三人、七人の宮等の御母にて、一の女御年三十一。大い殿の御腹の、(三)先帝(四)の御兄弟の中務の宮の北の方年二十一。同じ腹の三の君、(五)左の大い殿の頭宰相の北の方、年十九。四の君、左大臣殿の次郎左近の中將源實賴の北の方、年十八。宮の御腹の五の君、(六)民部卿の宮の北の方、年十七。六の君、右大臣藤原忠雅(七)の北の方。七の君、右大臣殿の太郎(八)衛門督藤原忠俊の北の方、十四。未だ御夫なきは、八の君、ちご宮、年十三、九の君あて宮と聞ゆる十二、十の君、今宮、十一。大い殿の御腹、十一は十、十二(九)は九つ。此方の御腹(一〇)の十三の君袖宮八つ、十四の君けす宮

〔語釈〕
(一)仁壽殿女御を云ふ
(二)母女一宮の兄朱雀院
(四)嵯峨院
(五)左大臣源季明の長子頭宰相實正
(六)朱雀院の弟
(八)「太郎」は次郎の誤なるべし
(一〇)女一宮腹の

〔考異〕
(三)御腹の—御腹に、「御腹の中には」とあるべき也
(七)忠雅の北の方—忠雅の太郎北の方
(九)十二は九つ—十二の君は年九つ

〔考異〕
(一)九郎…十一郎―ナシ
(二)男君―男君を

十五歳より生み給ふ。男八所、女九所。先づ宮、大君、太郎、次郎、三郎、四郎、とりつゞき生み給ふ。大殿の御方、五郎、六郎と生み給ふ。宮、七郎、八郎と生み給ふ。大い殿に九郎、宮に十郎、大い殿に十一郎、中の君、三の君、四の君、宮、五、六、七、八、九、十、さし竝びに生み給へり。又大い殿に十一、十二の君、宮、十三、十四の君、又さし續き、同じ年の男君、二所ながら生み給ふ。互に斯う生みおはしましなどすれど、御中麗はしく、淸らなること限なし。かくて此の君たち、男はつかさかうぶり賜はり、女は裳著、髮あげ、男に就き、宮仕し、調ひ給ふ程に、父君、大將かけたる正三位の大納言になんおはしましける。何れもく、形淸らに、心良く、おしなべて生ひ出で給へるを、世界の人、「猶此の御族は凡人におはしまさず、變化のものなり。天女の下りて生み給へるなり」と聞え給ふ。かくて太郎君左大辨忠澄年三十、次郎兵衞佐師澄年二十九、これ二人ながら宰相なり。三郎右近中將藏人頭祐澄、年二十八、四郎右衞門佐連澄年二十七、是は

岩の上の苔の席にすむ鶴(一)は世をさへ長く思ふべきかな

左大臣源忠經、

卵のうちに昨日は見えし鶴(二)の子の今日は上にも竝びぬる(三)かな

中納言行忠、

あしたづのうつる千年の宿りには今やいさご(四)の岩となるらん

などこれかれ(五)宣ふ。

(六)御母后の宮、三條大宮の程に、四町にて嚴めしき宮あり。おほやけ修理職に仰せ給ひて、左大辨おとゞして、四町の所を四つに分ちて、町一つに、檜皮の大殿、廊・渡殿、藏、板家など、(七)いと多く建てたる四つが中に當りて(八)、面白きを、此の(九)御料に造らせ給ふ。それは大殿町なれば、板家なく、有るかぎり檜皮なり。此處に移り(一〇)給ひて、一方には大い殿の御女、大殿町には、宮(一一)すみ給ふ程に、おほん子ども生み給ふこと、數あまたになりぬ。大い殿の御方に(一二)男四所、女五所、宮の御方は(一三)

【語釋】
(一)鶴は女一を譬へたるなるべし
(二)これも次の歌も女一を鶴にたとへたり
(四)沙長じて巖となるは祝言也
(六)誤脱あるか、母后の所有なる嚴めしき宮ありの意か
(九)正頼の住居として
(一〇)正頼が
(一一)女一宮
㊂正頼の三條大宮の邸、子ども及び聟君たち

〔考異〕
(三)竝びぬる—竝び居る
(五)宣ふ—宣ひて。又宣ひても
(七)いと—ナシ
(八)當りて—「て」ナシ
(一二)御方に—ナシ
(一三)御方は—御腹に

なる人、「なほ賢き君なり。帝となり給ひ、國知り給はましかば、天の下豊かなりぬべき君なり」と世界擧りて申す時に、萬の上達部、みこ等、婿に取らむと思ほす中に、時(一)の大政大臣の一人女(二)に、御かうぶりし給ふ夜、婿取りて、限なく勞はりて、すませ奉り給ふ程に、時の帝(三)の御妹、女一の御子と聞ゆる、后腹におはします、父帝、母后に宣ふ、嵯峨「此の源氏、唯今の見る目よりも、行く先なり出で(四)ぬべき人なり。我が女 此の人に取らせむ(五)」と宣ひて、婿取り給ふ。(六)三日の夜、御土器取りて、嵯峨「此處に斯く物する(七)とて、彼の大政大臣の女を忘れず、ひとしく通ひ給はん良かるべき」(八)など宣ひて、

嵯峨　岩の上に竝びて(九)おふる松よりも雲井におよぶ枝も有りなん

源氏正頼、御土器賜はるとて、

正頼　松の根を植うる今日より岩の上を(一〇)廣き林と人に知らせむ

右大臣(一一)　橘千蔭(一二)

〔語釋〕
(一)橘某、千蔭の同胞
(二)大殿の上といふ
(三)嵯峨
(四)出世すべき
(六)三つ目の祝の夜
(七)女一の聟になりたりとて
(九)竝びて生ふる松は女一と大殿の上とを例へたるなるべし
(一〇)家門の興隆を圖るべしと也
(一二)大殿の上の同胞

〔考異〕
(五)取らせむ―取らせてん
(八)など―なんど
(一一)右大臣―前右大臣

藤原の君

梗概

㊀ 源正頼の素性。二人の妻、大臣上及大宮。㊁ 正頼の三條大宮の邸。子ども及び聟君等。㊂ 絶世の美人第九女あて宮。源實忠の懸想。侍女兵衛の君を語らふ。㊃ 藤原兼雅あて宮に懸想す。祐澄を語らふ。㊄ 平正明あて宮に懸想す。賴澄を語らふ。㊅ 實忠、兵衛の君を介してあて宮を挑む。㊆ 兼雅、實忠、正明、兵部卿の宮各〻あて宮を挑む。㊇ 仲澄あて宮に懸想す。㊈ 上野の宮、あて宮を娶らんとして僧、巫、博徒等を集めて會議す。樣々の獻策。東山の法會の詭計。㊉ 正頼、敵の計につきて計を設く。奇怪なる法會。上野の宮賀あて宮を奪ひて妻とす。神佛に奉賽す。⑪ 致仕の大臣三春高基の素性。其の吝嗇。あて宮に懸想して宮内の君を語らふ。⑫ 仲澄、實忠、兵部卿の宮、正明、彈正の宮各〻あて宮を挑む。⑬ 良岑行政の素性。あて宮に懸想して宮あこ君を語らふ。⑭ 滋野眞菅の素性。あて宮に懸想す。媒せんとする老　。老婆、忠澄の乳母長門を語らふ。失敗。眞菅更にあて宮の老女殿守を語らふ。⑮ 懸想人等各〻あて宮に文を贈る。⑯ 眞菅、殿守を訪ひてあて宮の事を謀る。實忠との邂逅。⑰ 七月七日、正賴の家の女君たち賀茂川に髪を洗ふ。⑱ 懸想人等あて宮と歌を贈答す。

昔、藤原(一)の君と聞ゆる、一世(二)の源氏おはしましけり。童より名高くて、容貌、心魂、身の才人にすぐれ、學問に心入れて、遊の道にも入り立ち給へり。(三)時に、み

㊀ 源正頼の素性。二人の妻、大臣上及大宮

〔語釋〕

(一)是源正頼也

(二)皇子にて源姓を賜はれる人

〔考異〕

(三)給へり時にみな人―給へ㐂　に見る人

〔語釋〕
（三）帝
（四）此餘の事次の卷々に記すべしの意
〔考異〕
（一）になく―になき
（二）前に―ナシ

しづ心なくて、「猶遊ばせ。祿にらうたしと思ふ女奉らむ」と言ひたれば、下りはしり、舞踏して、になく（一）聲調べて、いと數多の手彈きつる。すべて言ふよしなく、父大殿涙落し給ひつ。げにはたいとめでたき人にこそあれ。遊びたる樣も更に他人に似るべうも非ず。いかで聞召させむ」と宣へば、宮、大宮「いかで彼聽かむ」大殿、正頼「更におぼろげにてすべきに非ず。琴を前に（二）置かせ給ひて、上（三）の責めさせ給ふにだに、手も觸れぬ人なり。今宵も、疎に言はましかば、逃げなましを、猶己こそ年經にたる翁にて、許さず責めたりつればこそ、むつかりながら彈きつれ」宮、大宮「あてこそして、「猶彈き給へ。物聞えむ」など言はゞ彈きてむや」正頼「そは彈きもしてむ。今折あらむ時」と宣ふ。かづけものどもを、あな淸らと見給ふ。次々にぞ。（四）

大殿、兼雅「いといみじき(一)ものぞや。さばかり亂れてはしたなかりつるに、他人の醉様には似ずかし」など宣ひて、二所打臥し給ふ。侍從(二)曹司へも入らで(三)御前に伏しぬ。

左大將殿も歸り給ひぬ(四)。仲頼(五)、行正御送しけり。やがて宿直せむと言ふ。大殿入り給へば宮(六)大宮「など斯く遲くはおはしつる」大殿、正頼「彼の御饗のいと(七)になく警策(八)なりつれば、皆人唯今までなむ有りつる。あてこその御徳に、面白うめでたきものをも聞きつるかな」宮、大宮「何事ぞ。あな羨(九)まし」と宣ふ。大殿、正頼「例の物の上手どもいと面白う遊ぶに、侍從出で來なむと思ふに、更に出で來で、日の暮れつれば、いと口惜しかりつるに、夕つけて、かづけもの取りて出で來るものか。そのかみ、捕へて醉はして、「例の琴彈き給へ」と言ふに、更に聽かず。父大殿内に入りて、いとめでたき琴を、御手(一〇)づから持て出で給ひて、「猶つかうまつれ」と宣へど、更に聽かず。唯樂(一一)の聲を、心やましう物にかき合はせては彈くものか。いと

〔語釋〕
(一)正頼をほむる也
(二)仲忠
⑳正頼其妻大宮に還饗の有樣を語る。
(六)正頼の妻嵯峨院女一宮、大宮といふ
(八)拔群
(九)あて宮のお陰で

〔考異〕
(三)入らで—いかで
(四)歸り給ひぬ仲頼—歸り給ひぬ御時よく遊びて入り給ふ仲頼
(五)行正—行正も
(七)いと—ナシ
(一〇)御手づから—みづから
(一一)樂の—ことの

むちも、さる契なせ」となむ仰せられし」仲忠、「いと嬉しき事」など互に宣ひて仲澄、「いと(一)痛う醉ひて、え具に聞えず」と言へば仲忠、「日頃思ひ給へつることを取り申しつるなむ、今宵の喜びに侍る」といふ。仲澄「今彼の殿に候はむ」とて仲澄まかでぬ。

かくてこれかれ遊び罵りて、夜いたう更けて、皆歸り給ひぬ。主の大殿、北方に聞え給ふ、兼雅「物は能く見給ひつや。(二)御子こそ猶いと人に優りためれ」と宣へば北方、俊蔭女「いでや、己は見知るべき人かは」兼雅「されど、御眼ぞ恐ろしきや。(三)故君には、天人もえ勝らざりけるを、皆習ひ取り給へりける(四)ことこそは畏けれ。それに侍從おとらずこそ、人々思ひためれ。才の徳に、戯にても大將の君の、宣はぬことなり、東宮の宣はするにも、出だしたてられぬ(五)女取らせんと宣ふぞ有難き。さばかり、天の下の人の聞き(六)傳へて惑ふ君を、眞實にはあらねど、嬉しくこそあれ」北方、俊蔭女「さもめでたき君かな。(七)御子どもはた、世の常にもあらず物し給ふらむ」

〔語釋〕
(二)仲忠
(三)俊蔭
(五)あて宮をいふ
(七)正頼をはめていふ也

〔考異〕
(一)いと―ナシ
(四)給へりける―給へる
(六)聞き傳へて―きもたえて

して、仲忠「あさましく、大將殿の强ひ給ひて、琴つかふまつらせ給へるに、困じにたり」とて御ひめしてまゐる。其處に仲澄の侍從(一)おはしければ、對面して物語し給ふ。仲忠、「内裏にては、時々對面賜はする時侍れど、細かなることは聞えさせず侍りつるを、いと嬉しくもおはしましけるかな」仲澄、「甚だ畏し。仲澄も、聞えさせむと思ひ給へながら、御暇も無かめれば(二)、得聞えさせずなむ」仲忠、「上にさ(三)ふらひなどする折も、大殿一所(四)離ち奉りて、聊かあひ後見給ふべき人もなければ、心細くなむ覺え侍るを、いかで互に近う(五)語らひ聞え侍らむ。内裏にも、此の頃は、をさ〳〵參り給はぬは、如何なる事にか」と言ふ。仲澄、「如何なるにか侍らむ。濫り心地惡しう侍れば、宮仕もし侍らずなむ」仲忠、「などさ物せさせ給ふらむ。若し見ぬ人戀ふる御病か(六)」仲澄打笑ひて、「今はあふひも益なきものを(七)」と言ふ。仲忠、「誠、宮にも(八)、異なる親族もなかめり。君を深き契なして語らひ聞えよ」となむ宣はせし」仲澄「仲澄にも然仰せられて、「少將、兵衛佐、(九)兄弟の契なしたり。き

〔語釋〕
(四)父一人を除きては
(六)「我こそや見ぬ人戀ふる病すれあふひならでは生く藥なし」葵—逢ふ日
(七)上の歌によりていへり
(八)兼雅の妻女三宮か、仲澄は女三の甥也
(九)巨勢利和曰、少將は仲賴、兵衛佐は行正なるべし

〔考異〕
(一)侍從—君
(二)も無かめれば—無ければ
(三)さふらひ—仕へ
(五)近う—ナシ

みな人をうづむ紅葉のかゝらぬも風吹く松と思ふなるべし

仲忠、(一)

宮人にかきほの紅葉かゝれども散りける枝はねたしとも見ず(二)

仲頼感に堪へず、下りはしり、萬歳樂ををれかへり舞ふに、主の大殿袙ぬぎ給ふ。(三)左右の大將御琴ども合はせて、仲頼、行正笛吹き、ある限の人拍子合せて遊び給ふ。面白きこと限なし。(四)大將殿童におはしける時、嵯峨の院の御賀に落蹲になく舞ひ給ふ名取り給ひけるを、今宵かく遊び人手を盡して、珍らしき物の音備はりてめでたきに、(五)仲澄の侍從、落蹲舞ひて、御階の下に舞ひ出でて、をれかへり舞ふ。仲忠めで癡れて、大將のかづけ給へる袙を打ちかづけて、諸共に舞ひ遊ぶ。仲澄舞ひて出づとて、(六)御松明燈してさふらふ左近尉近正に打ちかづけて入りぬ。

斯くいとになく遊びて、夜更けぬれば、辛うじて(七)ぬすまはれて、衞府の所におは

〔語釋〕
(一)これも仲忠にのみかづけ物のあたらぬを言ふ、琴の音を松風に譬ふる故風吹く松といへり
(二)散りける枝とは仲忠自身をいふ
(三)仲頼に與へたる也
(四)正賴
(五)正頼の七男
〔考異〕
(六)御松明―御さいまつ
(七)盗まれて、ぬけ出でて

がらうたしと思ふ女の童侍り。今宵の御祿には、それを奉らむ」と宣へば、辛うじて萬歳樂聲仄(一)にかき鳴らして彈く時に、仲頼、行正今日(二)を心しける琴を調べ合はせて、になく遊ぶ時に、なほ仲頼感に堪へで、下りはしり、萬歳樂を舞ひて、御前に出で來たり。行正、琵琶(三)、大將、倭琴、皆調べ合せて、有る限りの上達部聲を出だして、遊び興じ給ふ。仲忠例の曲の手をば彈かで、思ひの外の物を彈く時に、正頼「かくては御祿も如何はせむ。猶少し細かに遊ばせ」と切に宣へば、調べ換へて彈く。面白きこと限なし。未だ仲忠斯樣に彈く時なし。御前にて彈きしよりもいみじう、琴の聲もくうつき(四)てなど彈きたれば、なつかしう和らかなるものの、いと珍らかに面白し。萬の人興じ(五)めで給ふ。唯少しかき出でたる(六)に、大殿の内響き滿ちていみじきを、(七)ゆいこくの手を聲の限りかき立てて彈き給ふに、いとどありとある人めで惑ひて、左大將の大殿、まして哀がりめで給ひて、御衵一襲を脫ぎ給ひて、正頼「御頸(八)の寒げなるも斯かればぞかし。」

〔語釋〕
(一)第九女あて宮をいふなるべし、藤原君卷以下に見ゆ
(二)今日を晴と用意したる
(三)客人の左大將正頼なるべし
(四)功つきて即功者づきてなるべし
(六)たるに—たるだに歟
(八)かづけ物を仲忠がもらはぬをいふ

〔考異〕
(五)興じめで—めで興じ
(七)ゆいこくの手を—ゆいこくの手こゝろのみつを—ゆいとくのこゝろのみつを—ゆいとくのをこんこくのみつを—ゆいこんこゝろのみつを

〔語釋〕
（一）酒を

〔考異〕
（二）目をも—「も」ナシ
（三）醉ひて本性—醉ひてもはらし給はねば本性
（四）誠—誠は
（五）りうかく風取りて出で—りうかく風取り出でて—りうかくを取りて出で
（六）宣へば—宣へれば
（七）忘れ果て侍りしに—忘れ侍りしに
（八）恐ろしさに—恐ろしきに

給ひて、度々強ひ（一）給ふ。侍從、仲忠「かしこければ」とて飲み煩らひて、仲忠「いと恐ろしき目（二）をも見侍るかな」と言へば、左大將、正賴「我が主を醉はし奉るも心有りや。醉ひて（三）本性現はし給へとぞや」と戲れ給ひて、正賴「誠（四）、彼の物の音、聊か聞かせ給へ。今日の御饗に、此の御琴の音せねば、春の山に鶯の鳴かぬ朝、秋の池に月の浮ばぬ夕になむあるべき」と切に責め給へば、父大殿內に入り給ひて、りう（五）かく風取りて出で給へれば左大將取り給ひて、正賴「これに唯御手一つ遊ばせ。今年の五節の夜ほのかに承りて、いよいよ中々なる心地なむする」と宣へば（六）侍從、仲忠「年頃むげに忘れ（七）果て侍りしに、切なりし宣旨の恐ろし（八）さに、辛うじて思ひ給へ出でて、一手つかうまつりしを、抑はかばかしうや侍りけむとだに覺え侍らず。今はまして、かけても覺え侍らず。其の上に、今日の御饗に、仲忠が手仕うまつらむは、蓬の野邊に蛙の聲する心地なむつかうまつるべき」と聞ゆるに、主の大殿、兼雅「すきものや。なほ仕うまつりて重き祿やは賜はらぬ」左大將、正賴「正賴

人のえ爲ぬはや」と宣ひて、遊ばしぬ。(一)笛ども吹き合はせて遊ばす、いとになく面白し。例は、舍人、相撲人などには、信濃の布を賜ひけれど、今年は心ことに、陸奥の絹を賜はす。蘇枋の脚つけたるなかとり(二)五つ(三)に東絹積みて、御前に舁き出でて、(四)政所の人裝束して出で來て、召し立て(五)つゝ賜ふ。(六)御使の長相撲の最手には四疋、唯の舍人(七)相撲には二疋賜はす。又この中將少將の御隨身には、一疋づつ賜はす。かづけもの、垣下の御子等に、赤朽葉の花文綾の小袿、菊の摺裳、綾、搔練一かさねあはせのはかま、宰相よりはじめて中將までは、綾の摺裳、黃朽葉の唐衣一かさね、袷のはかま、少將より始め衞府の佐等には薄色の裳、黃朽葉の唐衣一かさね、はかまの色劣れり。まうちぎみたち、つかさの尉(八)までは、白き綾の單衣がさね、袷のはかま、人々の御供なる官有る人には、白張の袴、一くだり、府生には白きひとへがさね賜ふ。今日(九)參りたる人、祿賜はらぬ者かつなし。

かゝる程に、仲忠の侍從、かづけもの取りて、今ぞ出で來たる。左大將引き止め

〔語釋〕

(二)祿の物を盛る器也とぞ、半取と傍書せる本あり

(五)呼び出しては

(六)相撲の召集に諸國へ使はさるゝ使

(七)舍人中より撰ばれたる相撲

〔考異〕

(一)遊ばしぬ―遊ばせ

(三)五つ―三つ

(四)舁き出でて―舁き立てて

(八)尉までは―尉たちは

(九)今日―今日は

の佐も恥かしき人ぞや。左大將(一)の御子(二)、左のおとゞ(三)の御子(四)ぞかし。いと恥かしきあたりなり」と宣ふ。北の方は、琴どもの裝束しつくりて、琵琶、箏など同じ聲に調べ合せて置き給ふ。左大將(五)宣ふ樣、正賴「右大將の三條の家にて、相撲の還饗し給ふべかなるに、聊か(六)の業するにも必らずいますするを、彼處にし給はむ事も、必らず訪ふべし。さても心憎き人(七)の、珍らしくし給ふ所なるを、見習ひもせむ」など宣ひて、御供の君達引き續き出で給ふ。人(八)に許され氣高く物し給ふ君なれば、多く(九)の人垣下(一〇)におはす。右(一一)の大殿も渡り給へり。主の大殿喜び(一二)畏まり給ふ。かくて皆著き渡り給ひぬ。上達部、御子たちの御前には、紫檀の机に綾の表參れり。中少將(一三)には蘇枋の机、官人には皆程々(一四)につけてし給ふ。かくて御箸下し給ひ、御土器はじまり、相撲出でて、五手六手ばかり取りて、最手(一五)出で來て布引き(一六)などするに、主の大殿、裝束き置かれたる琴どもを取う出させて、あてに奉り給へれば、各取りて搔き鳴らし試み給ひて、「爪(一七)覺えて調べられたる御琴どもかな。

〔語釋〕
(一)正賴
(二)右近中將祐澄
(三)故左大臣祐仲
(四)右近少將仲賴
(五)正賴
(六)我家にて少しの催しある時にも兼雅は必出席せらるゝ故
(七)俊蔭女をいふ
(八)兼雅は
(九)攝待役をつとむ
(一一)兼雅の兄忠雅
(一五)大關
(一六)相撲どもに下されし布を分つなるべし
(一七)よく多くの琴の調子を調へ合せたるを褒めたる也

〔考異〕
(一〇)垣下に—しぞき
(一二)喜び—喜びて
(一三)中少將—中將少將
(一四)程々に—程に

〔語釋〕
(一)此の畫詞のきれめ明かならず、今姑く本文の如くにしたり
(三)兼雅役隣女
(四)食事
(五)仲忠
(六)諸本「こう」「こふ」等とありて、貢、國府等の字をあてたれども、「たふ」とあるに從へり、今は「たふ」は栲布なるべし
(七)衣服の事を司る女
(八)妻妾等
(九)兼雅に許信する
(一〇)役隣女以外の女に
(一一)幄
〔考異〕
(一)こゝは―ナシ
(一二)つかさ―下づかさ

らず、優れてめでたくし出で給へり。

畫詞(一)此處は(二)三條殿に、殿(三)、北方並びておはします。御臺(四)參れり。侍從(五)內裏よりまかで給へり。國々の御庄より、たふ(六)、絹布など持て參れり。御急ぎの料にとて、綾、羅、縑の、絹などおほく奉れたれば、御匣殿(七)する人、御前にて計らひ定む。染草、何くれの事定めあへり。庄々の物どもは、一條殿にも分ち奉り給ふ。おはすることは絶えてなければ、御方々(八)に思し嘆き、樣々に驚かし(九)給ふもあれど、すべて唯今は、他人(一〇)に物聞えむとも思したらず。饗應廿二日なれば、其の日になりて、いとになく設けさせ給ふ。御前に砂撒かせ、前栽植ゑさせ、あげばり(一一)新らしく打ちて、寢殿の南の廂に、御座裝はす。打敷、しとね、皆新らしくせられたり。めでたき四尺の屏風几帳ども、方々に立てられたり。內に御たち、うなゐども、襲の裳、唐衣、汗衫ども著て居並みたり。うなゐはあを色、二藍襲ねて著たり。おとゞ人々に、兼雅「內に心してあれ。我がつかさ(一二)

〔語釋〕
(一)仲忠に交渉し來れど
(二)父の家
(三)源正頼、此家の事、藤原の君の卷にあり
(四)此「ど」の字衍 文なるべし
(五)姫君等
(六)正頼の聟にてなければなりたくなし
(七)兼雅相撲の還饗を行ふ。正頼仲忠を強ひて琴を彈かしむ。仲忠仲澄と兄弟の約を結ぶ
(八)相撲の節會は近衞府の承はりてする公事なれば事畢りて長官が御苦勞振舞をする也
(九)俊蔭女
(一一)近衞府の人
(一二)其方が取計ひにてするといひて

〔考異〕
(一〇)物など—物なども
(一三)には—「は」ナシ
(一四)なべての物—なべての世の物

上達部、御子等も、聟にせむ〳〵と、思しあまるは、(一)御氣色とり給へど、更にうけひかず、殿(二)にのみあり。人知れず思ふ事は、(三)左大將殿にこそ、さるべき世の有識は籠りためれど、(四)又をかしき君だち(五)數多有りて、心もやらめ、(六)其處ならではあらじ、など思ひて他心なきなるべし。

年還りて八月に、(七)此の殿に(八)相撲の還饗有るべければ、おとゞ(九)北の方に聞え給ふ。兼雅「饗應の事すべきに、早かづけ物の事せさせ給へ。此の度の事、此處にて始めてすることとなるを、心殊にまうけの物など(一〇)勞りてし給へ。例は、中將より始めてつかさの人、(一一)皆祿は取らするを、今年は、(一二)そこに物し給ふと、聞く人も心憎く思はむものぞ。衞府の主等のも設け給へ。例は中將には女の裝束一くたりづつ、少將には白き袿一襲はかまをなむ物するを、此の度は中將には(一三)なほ細長を添へて、少將には綾の袿、三重がさねのはかまなどをまうけ給へ」と聞え給へば、俊蔭女「いさ、如何にする事にかあらむ」と宣へど、物の色しざまなど、なべての(一四)物の樣にもあ

と切にそゞのかし給へど、とかくやすらひて、御前より賜はせたるせた風の琴を、五箇(一)の聲に調べて彈くに、面白くめでたき事更に類なし。聞き給ふ人々、涙こぼれて、哀がりめで給ふ。上、朱雀「俊蔭の朝臣、唐土より歸りて、嵯峨の帝の御前にて仕うまつりしを、ほのかに聞きて、又かゝること世にはあらじとのみ思ひしを、これはこよなく優れり。いかで彼の(二)母の琴を聞かむ。嵯峨の院なむ、彼の俊蔭が琴は能く聞召し置きたらむ。仲忠率て參りて、聞召し比べ(三)させむかし。彼の父の朝臣の琴を、いとほのかに、二聲とも聞かずなりにしかば、いと覺束なくて過ぎにしも、かれが音に(四)若しも似たる事もや有る、と聞き渡れども、(五)夢ばかり覺えたるもなきを」などいと切に思したり。朱雀「彼の(六)里に隱れたらむ人、暫し參らせて、職(七)の曹司の方などにやは住ませ給はぬ。さらば渡り(八)て聞きてむかし」など宣はす。大將いたく畏まりて候ひ給ふ。

かくて仲忠の侍從、何事にも優れ、唯今世に類なく拔け出でたる人なれば、萬の

〔語釋〕

(一)河海抄琴五箇調、搔手、片垂、水字瓶、蒼海波、雁鳴調

(五)少しも似たるものが無かりしに

(六)俊蔭女

(七)皇后宮職

(八)予が皇后宮職へ行きて

〔考異〕

(二)彼の——ナシ

(三)比べさせむかし——比べさせむ昔

(四)若しも——「も」ナシ

時まかでさせず召し遣はせ給ふ。琴は、さる世の一なれば、たふ〳〵(一)にせねど、物より他遊びは、仲頼、行正が手を傳へし物の音なれど、此の師の手にも似ず、物より殊に抜け出でて、何處より誰が手を傳へけるぞとのみ聞えたり。容貌よりはじめ、交らひたる樣など、もどかしき所なく(二)、かど〳〵しく、目も及ばず、勝れたれば(三)上達部、御子等よりはじめ奉りて、褒めめで給ふ。(四)年十八にて侍從になりぬ。其の年の五節(五)の試の夜、后宮よりはじめ奉りて、多くの女御、更衣まうのぼり給へるにも、此の出し(六)の五節のかたち、用意、はかなくうち振舞へるも、人にはことにて、上御心留めて御覧ず、舞果てて、曉方に、松方、時蔭、仲頼、行正、斯樣の人々召し出でて、此の仲忠も召して、唱歌(七)する聲も、人には勝れて、殊に聞ゆれば、上聞召して、御前に召し出でて、朱雀「常よりも物の音優るべき曉になむ(八)ある。彼の三代の手、今宵つかうまつれ」と仰せられければ、畏まり(九)て仕うまつらねば、父おとど、兼雅「猶手の限仕うまつれ。度々仰せごと承はらぬ、いと畏う」

〔語釈〕
(四)仲忠が
(五)十一月の五節の女樂の下ならし、中の丑の日常寧殿にて行はる
(六)五節の舞姫五人、女御更衣攝關大臣等より奉るを例とす。これは兼雅が奉れる舞姫也
(九)仲忠が
五節の試樂に仲忠御前にて琴を彈く

〔考異〕
(一)たふ〳〵に―たうたうに
(二)所なく―所もなく
(三)勝れたれば―勝れ出でたれば
(七)唱歌する―そうする
(八)曉になむある―曉なめり

〔語釈〕
(二)此事前に見えたり
(三)俊蔭が
(六)三代目仲忠
(八)兼雅をいふ
(九)俊蔭女が寵を一身に集めて餘所見もさせぬ事よ
(一二)諺なるべし。餘りに擇り好みしてつまらぬ物に取り當ること

〔考異〕
(一)中納言に—「に」ナシ
(四)なりにたりしと—なりたりと
(五)彼の—この
(七)宣はすれば—宣へば
(一〇)あからめも—「も」ナシ
(一一)効なく—効もなく

出にしより、参らで、(一)中納言になるべかりし身を沈めてし人なり。さるはいみじき有識なり。唯女一人有りける、年七歳より習はしけるに、父の手にいと多く勝りて弾きければ父、「此の子は我が面起しつべき子なり。これが手より誰も〳〵習ひ取れ」となむ言ひける、と聞きしかば、俊蔭が在りし時に、(二)消息などして、(三)亡くなりて後尋ね訪ひしかど、亡くなりにたり(四)しと聞きしは、其許に隠されたるにこそありけれ。いと興有りや。(五)彼の手は、(六)三代はまして賢からむ」と宣はすれば、(七)大將、兼雅「然侍るべけれど、殊なることも侍らざるべし。代々のついでとして、一手二手などもや仕うまつらむ」と奏し給ふ。かくて後なむ、さば、此の三條の北方は俊蔭の女と人知りける。「年比は如何なりける人ならむ。いみじき色好(八)をみ、斯くあからめも(一〇)せさせ奉らぬこと」と怪しがり聞ゆるも有り。又「賤しき者を取(九)りすゑて、言ふ効(一一)なくまつはさせ給ふぞ。色好みの果ては斯くぞ有るや。(一二)怪しきものに止まるとは」などぞ目やすからず聞えける。此の仲忠、帝も、東宮も、片

て、世のものの上手生し立て給ふらむ」と言ひ罵り(一)、名高くなり給ひぬ。京に率(二)て出で給ひし三年が程に、すべて世に(三)せぬ事なくなりぬ。大將殿、唯これをかしづき思すより外のことなし。

十六と云ふ年、二月にかうぶり(四)せさせ給ひて、名をば仲忠といふ。上達部の御子なれば、やがてかうぶり賜ひて(五)(六)、殿上せさせ(七)、上も、東宮も、召しまつはし、うつくしみ給ふ。上、大將に、朱雀「何處なりし人を、斯う俄に、いと優にては取り出でられたるぞ」と問はせ給へば、兼雅「年頃は、侍り所も得知り(八)給へざりしを、一歳見出でて侍り。「物など少し心得て後、交らはせむ(九)」と申ししかば、「さも侍る事なり」とて籠め侍りつるなり」と奏し給ふ。朱雀「誰が腹ぞ」と問はせ給へば、兼雅「故治部卿俊蔭が女の腹に侍り」と申し給へば、上驚かせ給ひて、朱雀「如何にぞ(一〇)。二代の手は傳へたらむな。彼の朝臣、唐土より歸り渡りて、嵯峨の院の御時、「此の手少し傳へよ」と仰せられければ、「唯今大臣の位を賜ふとも、得傳へ奉らじ」と奏しきりて罷

〔語〕
(四)元服
(五)叙爵して五位を賜ふこと
(九)仲忠の母が

〔考異〕
(一)罵り—罵る
(二)率て—ナシ
(三)世に—ナシ
(六)かうぶり賜ひて—かうぶりせさせ給ひて
(七)せさせ—せさせ給
(八)得知り—「得」ナシ
(一〇)如何にぞ—「ぞ」ナシ

㊅仲忠諸藝を習ふ。侍從に任ぜらる

〔語釋〕
(一)兼雅が女三宮以下を置きてある本邸にゆかぬ也
(二)俊蔭女をのみ愛せり
(三)二十七歳歟
(六)山中にては種々の琴なかりし故箏和琴などは教へざりし也
(八)母が專主持ちになれる故
(一〇)兼雅

〔考異〕
(四)程なり—程なる
(五)おはすれど—おはすれども
(七)限り—ナシ
(九)おはせねば—おはせねど
(一一)いと—ナシ
(一二)笛—ふみ
(一三)二卷三卷—二三卷

さるべき宛々の板屋どもなど、有るべき限にて、倉町に御倉いと多かり。

かくて後、おとゞ、(一)一條殿にあからさまにもおはせず、(二)こと御心なし。大人二十人ばかり、うなゐ、下仕などいと多く召し集めて、遣はせ奉り給ふ。夜晝昔の事を悔い、行く先のことを契り、哀にあかず思さるゝまゝに、聞えつくし給ふ。北の方、御年、(三)三十に少し足らぬ(四)程なり。御容貌唯今盛にて、思ほす事なくておはする儘に、光を放つ樣に見え給ふ。子はた更にも言はず、此の世の人にも似ず、いと有難く類なし。琴をば更にも言はず、こと才も、さるべき師ども召して、笙、横笛も習はせ給ふ。彈物は、北の方さる上手に(五)おはすれど(六)琴の(七)限なかりしかばこそあれ、箏、和琴など習はし給ふ。(八)御暇、今は殊に(九)おはせねば、(一〇)殿の出で給へる暇などに、氣色ばかりの事の樣を聞え給へば、(一一)いと勝れて彈き取り給ふ。何事も、師に再び問ひ給はず。(一二)笛どもも、いと華やかに心有りて、晝は書を(一三)二卷三卷も讀み、琴笛を五六調も吹き引きとり給へば、「大將は、何處より斯かる子を尋ね出で

り給ひて侍二人をば母の馬につけて、秋の夜一夜出で給ひて、曉方になむ、三條の大路よりは(一)北、堀川よりは(二)西なる家におはしつきける。御馬添に口かため給ひて、兼雅「若しかゝる事世に聞えば、汝等をさへ罪にあてむ」と戒め給ひて、御手づから、しつらひ置き給ひし所に率て入り給ひて、人に知らせ給はねば、御殿油(三)も參らざりければ、暗うて見えねば、御手づから、御格子一間あげて見給ふに、秋の朝ぼらけに、玉と磨きしつらひたる所に、ことなる飾もなくやつれ、(四)なかなかなる樣なれど、言ふ由なくもてはやされて、淸げに類なく見ゆるを、天女を率ておろしたる(五)と驚かれ給ふ。子も果敢なき水干裝束なれど、かたち勝りて、いとめでたし。女は、年頃にいみじうやつれぬらむと思ふに、いとまばゆきまで恥かしきに、母をも子をも、(六)つく〴〵とまもり給へば、せめて暗き方に入り給へば、(七)(八)我も奧へ入り給ひぬ。兼雅「吾兒は其處に寢よ。眠たからむ」とて御几帳の下に臥せ給へど、端(九)の方に出でて御前の有樣を見る。(一〇)この殿は檜皮の大殿五つ、廊、渡殿、

〔語釈〕
(三)燈火
(六)兼雅が見つめ居る故
(八)兼雅も
(九)仲忠が
(一〇)「この殿は」――一本に「こゝは三條殿」とあるに從へば「多かり」迄を畫詞と見るべし

〔考異〕
(一)よりは―「は」ナシ
(二)よりは―「は」ナシ
(四)なか〳〵なる―ほのかなる
(五)おろしたる―おはしたる
(七)入り給へば―入り行けば

ひ入られつるを、はや聞え(一)唆せ。年頃知らで(二)惑(三)はしつるも、我が罪にあらず。そも親に従ひしなり。今は孝すると思ひて、出だし奉れ」と宣へば、子も斯く宣ふを忝なく、何れも同じ親なれば(四)、さる孝の心の子にて、母に、仲忠「かゝるあさましき所にだに、幼き身一つを頼みて入り給ふに(五)、今又出で給はむ事も、己が故と思せ」と切に言ひ、大殿も、兼雅「一つ所に在らじと思さば(六)、参り来でも有らむ。唯(七)これを思ほす所にて」と切に宣へば、此の御志も(八)、むげになさじと見てしかば、げに、此の子に就きてかゝる所にも来ずやは有りし、と思ひなして、ともかくも言はれず、弱りたる氣色を見給ひて(九)、兼雅「今は又、否と(一〇)宣ふとも、御心に任すべきにもあらず」とたゞ急がしに急がして、衣取り出でて著せて、唆し給へば、我にもあらずながら出立つ。此の遺言の琴どもは、空洞に隠し置きて出でて行く。母をば、乗り給へりつる馬に乗せて、我も子も、後前につきて押へなどして、人留め給ひし所までおはし著きて、其處にて、二人(一一)の乗りたる馬に、我と子とは乗

〔語釋〕
(一)仲忠に命ずる也
(二)仲忠母子を
(六)我と同棲するが否ならば
(七)仲忠を
(一一)二人の侍

〔考異〕
(三)惑はし—惑はかし
(四)親なれば—親の事なれば
(五)給ふに—「に」ナシ
(八)御志も—御志は
(九)見給ひて—ナシ
(一〇)否と—否み

俊蔭女「げにいと好き事に侍れど、今はと限りに思ひ入りにし山路を、今更に思ひ給へ歸らむ空も恥かしう侍るべき。唯彼(一)の人ばかりを、有りけりと思し置かれなむを、うしろやすく思ひ給へなりて(二)、ひたみちなる(三)行に思ひなりなむこそ嬉しからめ」と動きげもなければ、男君、兼雅「さも思さるべき事なれど、此の人も、年を數ふるに十二ばかりにこそなるらめ。大さおきて(四)こそ賢くとも、人の世に經る有樣限あるものなれば、率て出でて交らひなどをこそせさせめ。其の後見も誰かせむ。親なき人は、身も徒らになるものなり。昔千蔭のおとゞの、唯一(五)人子を、繼母に謀られて、今は音にも聞えずとなむ云ふなる。此の人に(六)就きてこそは、斯かる住居も思し立ちけるを、これを(八)徒らになさぬに思し取りて猶出で給へ(七)」と切に宣へど、女君猶有るまじき事に思ひ離れたれば、兼雅「吾兒(九)一人を率て出でても、此處に泊り給ひて、しづ心(一〇)なく通ひ(一一)ありかむに、知らぬ人なく皆知りなむ。又(一二)吾兒をかく見置きて、我も心のどかに得有るまじ。此の日頃の程だに、魂(一三)の鎭まる方なく、思

〔語釋〕
(一)子仲忠
(三)我は專ら佛の勤に打かゝりて居りたし
(四)心だて
(五)此事忠こその卷に見ゆ
(六)仲忠故にこそは
(八)仲忠の身の爲と覺悟して
(九)仲忠
(一〇)仲忠が

〔考異〕
(二)給へなりて—「なり」ナシ
(七)こそは—「は」ナシ
(一一)ありかむ—あるかむ
(一二)又—ナシ
(一三)魂の—「の」ナシ

給ひて後、(一)住み給ひし所を見しかど、いとゞ野の樣になりて、尋ね聞ゆべき方もなかりしかば、行方なく覺束なき(二)を、年頃思ひ嘆きつるは、然ば、斯うておはしけるなりけり」と泣く／＼宣へば、(三)恥かしさ言はむ方なけれど、むげに聞えざらむも若々しければ、此の苔の簾のもとに寄りて、俊蔭女(四)「こよなき程の事なれば、斯く宣はするも覺束なながら、夢の樣になむ、さもや有りけむとばかり覺え侍る。怪しかりし程に、斯かる人さへ出で來にしかば、いとゞ所狹く、之を人に見せざらむ住處もがな、と思ひ(五)給へし程に、かく世離れ果てて侍る。昔をだに、類なき身と思ひ給へしに、又斯かることも侍りけり」と泣く／＼言へば、俊雅「何かそは。世の常の樣にて、淸げなる住居し給はむを見ましかば、(六)昔の志は失はぬ(七)ものから、心憂からまし。世を思し離れにけりと、此の御住處になむ、いとゞ深くは思ひつる。とまれかうまれ、御迎へにとてなむ參り來つる。此處にも劣らず、人目稀なる所(八)し置きたり。其處にて、覺束(九)なからずを聞こえ晴るけむ」と宣へば女君、

〔語釋〕
(一)俊蔭女の
(三)俊蔭女の心
(四)非常に古き事
(六)其でも昔の愛情が無くなりはせぬもののつらく思ふべし

〔考異〕
(二)なき—なさ
(五)思ひ給へし—思う給へし
(七)失はぬ—失はれぬ
(八)所し置き—所をし置き
(九)なからずを—「を」ナシ

〔語釋〕
（三）わざ〳〵來られしに
（四）兼雅一人
（五）我は此世に亡き人の積で居たかりしに
（六）兼雅が空洞の中に
（八）とて前には何事も言はで歸りし也
（九）父母に
（一〇）父母存生中
（一一）父太政大臣

〔考異〕
（一）おはしましてーナシ
（二）言へばー言へど
（七）給ふとてー給はむとて

言ふよしなき山を越えておはしまして、彼の木の下におはし著きて、しはぶき給へば、子出で來て見て、仲忠「先に（一）おはしたりし人こそおはしたれ」と言へば、俊蔭女「いでや、あな恥かし。何人におはすらむ。怪しくて又さへ見え奉り給ふこそ」と言へば、（二）仲忠「斯くふりはへ給へるに、いかで隱れむ」とて出でたり。一所（四）入り給ひて、兼雅「汝はえ知らじ。（三）母君に對面せむ」と宣へば、仲忠「然なむ」と母に語れば、俊蔭女「やがて亡せぬる人にてこそ（五）あらましか。何しにか知らせ奉る」と言へど効なし。入りおはして、兼雅「先にも聞えむと思ひしかど、まだきに聞えたらば、斯うも（六）ぞあらがひ給ふ（七）とて（八）なむ。我ぞ加茂詣の御供にて見奉りし。其の時は、聞えし樣に、求め騷がれけるに、參りたりしかば、いみじうむつかり給ひて、おはしまし（一〇）よ（九）限、片時も御身離ち給はず。「隱れ心有る人なり。逃すな」とて聊か立ち退けば、人を付けて衞らせ給ひしかばなむ、如何ならむ世に參り來む、と思はぬ時なかりしかど、自らならでは、おはせし所見たる人もなくて、得聞えざりしに、殿（一一）かくれ

㊂兼雅再び北山に入る。俊蔭女を伴ひ歸り三條堀川の邸に置く。俊蔭女の榮華

〔語釋〕
(一)兼雅が
(二)兼雅が
(三)下に見えたる女三宮以下の妻妾等の處
(四)嵯峨院
(五)身分卑しき妾
(九)食物を入れて携ふるに用る袋

〔考異〕
(六)迎へは―「は」ナシ
(七)我も―我と
(八)宣はて―宣はせて

かくて路のまゝに哀にいみじう思ひおはす。各歸り給ひて、つくぐ\と思し續くるに、飽かず悲しう(一)、如何にして迎へ出でむ、とのみ思ひたばかりて(二)、御方々(三)へも渡り給はず、すべて他事覺え給はねば、心も浮き立ちて、まづ率て出でむ所を思し廻らすに、一條に、廣く大なる殿に、樣々なる大殿造り重ねて、院(四)の帝の女三の宮を始め奉りて、さるべき御子等、上達部の御女、多くの御召人(五)まで、集め候はせ給ひければ、此處には、騒がしき中に迎へ出でじ、と思して、三條堀川のわたりに、又大きなる殿、御女の東宮に參り給ふべき御料と思して、年頃つくり磨き、樣々の御調度ども整へ置き給へるに、其處に迎へ(六)は出でむ、と思して、しつらひ置きて、三日ばかり有りて、御供に、限なく睦ましき限の人二人、我も(七)御馬に乗りて、女の御料に、袿一襲、はかま、小袿、指貫、子の料にきぬの指貫、摺狩衣、袿、はかまなど袋に入れて持たせて、何處とも人には宣はで(八)、乾飯たゞ少し餌袋(九)に入れて、いと忍びておはします。

〔語釋〕

(一)兼雅

(五)尋ね〳〵て分け入らんかと思ひしかど

(六)帝の御供に來て居ながら勝手な振舞をするは曲事なればやめて來たり

〔考異〕

(二)猿ども—「ども」ナシ

(三)尾一つ—山の尾一つ

(四)烈しき—ナシ

(七)給ひぬ—給ふ

(八)有所—有所を

盤にさして、椎、栗、柿、梨、薯蕷、野老などを入れて持て來るを見給ふに、いと哀に、然ば、これに養はれて在るなりけりと、珍らかに思さる。例(一)ならぬ人のおはすれば、猿ども(二)驚きて、打ち置きて逃げぬ。

大將歸り出で給へば、尾一つ(三)越え給ふ程に、御馬添も、右のおとども、さる烈しき(四)獸の中に入り給ひぬる覺束なさに、尋ねおはするに、見付けて、忠雅「さて如何有りつる」と宣へば、兼雅「尋ね得べくもあらず。谷に聞え、峰に聞え、高う登れば地の底になり、谷に降れば雲の上に聞えて、獸は貝を伏せたる樣にて、路しなければ、わけ煩らひてなむまうで來ぬる。(五)猶たどる〳〵と思ひ給へつれど、(六)御供に侍りつるひが〳〵しさになむ」と聞え給へば、朱雀「さればこそ。天狗ななり」とて打續きて出で給ひぬ(七)。上は、朱雀「怪しくて失せぬる朝臣等かな。好き女の有所(八)聞きて、すきものともは往ぬるならむ」とて歸らせ給ひにけり。昔若小君と聞えしは大將、兵衞佐におはせしは右大臣になむおはする。

見入れぬ様は有りなむや(一)」と宣へば、仲忠「母に侍る人に語らひて聞えむ」とて奥へ入りて。仲忠「斯く宣はする人なむおはする。如何聞ゆべき」と言へば、俊蔭女「かく忌々しき様を見初め給へらむ(二)人の、何とか(三)思すべき。口惜しきしなに思ひくたし(四)給ふとも、理(五)免れ所なくこそあらめ。又御心ぞ(六)」と言へば、仲忠「まろが思ふ様は、此の山に住む事八年になりぬ。憂き事も悲しき事も、思ひ馴れにたり。何しにか出でむ、かくて過してむとなむ思ふ(七)」と言へば、俊蔭女「さればこそ然は聞ゆれ。かく憂き身なれば、今更によろしき事もあらじ。(八)かく珍らしき有様を打見給ふ程宣ふにこそあらめ。深うもあらじ(九)」と言へば、出でて聞ゆ。仲忠「此のもて煩ひ侍る人(一〇)「今更に、何でふ世づいたる(一一)目をか見む。山の見る目も恥かし」とて動きげも侍らねば、(一二)一人は又何のかひも侍らじ」と言ふ程に日も傾けば、兼雅「何か強ひても聞えむ。契深くば、又も参り來なむ。今日は御供に候ひつれば(一三)、ひたやごもりなりとて歸り給はむ。便なかるべし」とて立ち給ふ程に、此の猿六七匹連れて、様々の物の葉を葉(一四)

（語釈）
（一）我が世話せぬ筈はなし
（三）我等を愛してくれる筈はなし
（四）下賤の者として取扱はれても
（六）とはいふものの汝の了簡次第也
（八）兼雅の勸むるは
（九）深き趣意ありて言ふにはあるまじ
（一〇）母をいふ
（一一）人並の暮しはしたくなし
（一二）自分一人山を出るは
（一三）兼雅が一向出て來ぬとて帝が御歸りになつては不都合
（一四）木の葉を綴ひ合せて椀の樣にしたるもの

（考異）
（二）給へらむ―給ひつらむ
（五）理―もとより
（七）なん―ナシ

かく疎ましき獣の中に、それを友として、彼等に養はれて、今日や〳〵と、身を施しつべく、魂(一)の休まる時なくて、恐ろしく悲しき目を見侍るらむ。前の世の罪、思ひやられ侍れば、天地の許されなき身に侍るめり(二)。愈深く、むづかしき頭(三)下し捨てて、参り籠らむ。となむ思ひ(四)給ふる」と言ふ樣の、惜らしく淸らなり。(五)程は十六ばかりと見えて、いみじうめでたきを、餘所人に聞き見むだに有るに、(六)得せきあへ給はず。ためらひて、兼雅「げに然も言はれたる事なれど、何でふ人か、かゝる住居にて世には經む。頭を剃る人も、師に就きて僧となるこそ、尊き事なれ。さてこそ、又山籠りもすれ。今日の獣の樣は、堪ふべしとやは見えたる。(七)(八)かたへこそ、斯く見許す方もあらめ。なほ京へ出で給へ。(九)かゝる物に害せられぬ(一〇)る人は、菩提も得難きものなり(一一)」と宣へば(一二)、子のいらへ、仲忠「斯くて侍らむよりも、(一三)然てしもこそ、中々に見入るゝ人なくて侍らむは、益々堪へ難からめ、と思ひ給ふれば」と言ふ。兼雅「そは、斯くて籠りおはせむ人を、あながちに勸め出だして、

〔語釈〕

(三)髮を剃りて
(六)兼雅落涙とゞめ得ず
(七)未詳
(九)獣類
(一三)なまじひに京に出て

〔考異〕

(一)魂の—「の」ナシ
(二)侍るめり—侍り
(四)思ひ—思う
(五)程は—「は」ナシ
(八)かたへこそ—かたくこそ
(一〇)せられぬる—せらるゝ
(一一)得難き—とり難き
(一二)宣へば—宣ふ

〔語釋〕
(三)父親
(四)何の誰とは
(六)汝が
(八)懷胎を
(九)出産が
(一〇)婢をいふ
(一二)兼雅をいふ
(一四)兼雅の心
(一六)通常の人
(一九)何の因果で

〔考異〕
(一)母子の命養ひて—ナシ
(二)に似侍り—ナシ
(五)端に—走り
(七)きんちが出來べきにや物も—ナシ
(一一)あめり—あり
(一三)影にも—影も
(一五)事にも—事どもに
(一七)何か—何かは
(一八)侍りけれ—あなれ

まうで來て、母子の命養ひて、(一)げに此の願ひ滿ち侍りしに似侍り(二)」と言へば、兼雅「彼の御親、(三)未だ見奉り給はずや」子のいらへ、仲忠「すべて見侍らず。母も其の人と(四)は得知り聞えず。唯「父母に後れて心細き住居せし程に、其の時の大臣、家の前より賀茂に詣で給ひたりしかば、見むとて端に(五)出でたりしに、きんちが(六)出來べき(七)にや、物も覺えぬ人に見合せ聞えたりしかど、年かへるまで知らざりしに(八)、今思へば、今日明日になりにける(九)に、其所なりし人の(一〇)、さる事あめり(一一)、と教へしをなむ聞きし。其の後、其の人(一二)、影にも(一三)見え給はずなりにき。いと憂き事なれど、我亡くなりなば、聞き置けとてなむ」と申さるゝ。されば總べて得知り侍らず」と聞ゆるに、悲しう哀に覺さるれど、氣色にも出だし給はず。恥かしと思はど(一四)、これより深くもぞ入ると思せば、兼雅「いと哀に悲しき事(一五)にも有るかな。猶かくて籠り居たらむと思すか。又例の人(一六)の樣にて有らむとや思す」と宣へば、子のいらへ、仲忠「何か(一七)、世は憂きものにこそ侍りけれ(一八)。人の身を受けながら、如何に契り置きて(一九)

ぬか。怪しう、宣ふ樣にては、稚き程より、かゝる怪しき所におはすなれど(一)、更に此處におはすべき人になむ見えぬ。唯有らむ儘に宣へ」と宣へば、子のいらへ、

仲忠「此處に籠り侍りしことは、さて果敢なき樣にて、出でまうで來(二)(三)侍りにける身を、また知る人もなくて、年頃(四)もて煩らひて、三つばかりになり侍りける(五)程になむ、物覺え侍りける。いかでこれ(六)を養はむと思ひ侍りしかど、爲べき方なく(七)見給へしに、唯明け暮れ、(八)「いかで鳥の聲もせざらむ(九)山に籠りにしがな、今や恐ろしく疎ましき目を見むずらむ」と、さかしらに、人有りと見て、人の(一〇)伺ひなどするに、「尋(一一)ね出でられて、親の御面伏に(一二)、我が身もいとゞいみじくならむ事」と嘆き侍りしかば、年頃此處に籠り侍るなり。木の實、葛の根のあなるを、さても養はむと、願ふ所に思ひ給へて、山の見ゆる方を尋ねまうで來て、此の空洞を見出でて(一三)侍りしに、しか〳〵(一四)なむ侍りし。いかで(一五)か掃き淸めむと思ひ侍りしに、童出でまうで來て、掃ひあけて(一六)棲ませ侍らするに、又自ら獸など、木の實、葛の根など取り

〔語釋〕
（二）生れたる私を
（四）親が
（六）親を
（八）母の嘆きし詞をまねて語る也
（一〇）俊蔭女の邸内を
（一一）これも母の嘆きし詞
（一四）熊の事を語るなり

〔考異〕
（一）おはすなれど—おはしけれど
（三）出でまうで來—「來」ナシ
（五）侍りける—侍りにける
（七）なく—なくて
（九）せざらむ—聞えざらむ
（一二）御面伏に—「に」ナシ
（一三）見出でて—見出して
（一五）いかでか掃き淸めむ—いかでかは淸めむ
（一六）あけて—のけて

を解きて、苔の上に敷き、兼雅「此方(一)」とて据ゑ、我も居給ひて、事の由を問ひ給ふ。兼雅「抑〻獸(二)といへども、熊、狼ならぬは棲まざなり(三)、鳥といへども、鷲、山鳥ならぬは棲まぬ所に、何の御心にて、幼き程には宿り給ふぞ」子の答、仲忠「此の山に罷り籠りにし事(四)、五歲よりなり。其の後、跡絕えて罷り出づることなし。其の籠り侍りし(五)樣は、思ふ心有りてなり。たふ〳〵(六)(七)に聞ゆべきにも侍らず」と聞ゆ。客人、兼雅「許多はけしき道を(八)打越えて、深き山の奧(九)、疎ましき獸の滿ち〳〵たる中を、尋ねて來たる(一〇)心をば、え疎に思さじ。なほ宣へ」と責め問ひ(一一)給へば、仲忠「はか〴〵しくも身の上をえ知り侍らず。母に侍る人に、せめて問ひ侍りしかば、「父母に一度に後れ侍りしかば(一二)、相顧みる(一三)人なくて、心細きすまひをし侍りけるに、はかなき、人の、物の便に立寄り給へりしになむ(一四)、聊かいらへなど聞えしに、生れにし」とばかり語られ侍れども、其もはか〴〵しうも聞き侍らず」と聞ゆれば、ありし京極(一五)の事を、ふと思し出でて、兼雅「尙確に宣へ。さて其の御親はおはするか、おはせ

[語釋]
(一)仲忠を坐せしめ
(六)猥りになどの意歟
(一三)世話する人

[考異]
(二)いへども—「も」ナシ
(三)棲まざなり—棲まざるなり
(四)籠りにし事—籠れりし事
(五)侍りし—侍りにし
(七)たふ〳〵に—こまごまと
(八)道を—「を」ナシ
(九)奧—奧を
(一〇)尋ねて來たる—「て來」ナシ
(一一)問ひ—ナシ
(一二)侍りしかば—侍りにしかば
(一四)しになむ—しかばなむ
(一五)京極の—京極にての

〔語釋〕
(三)母の心
(八)仲忠が

〔考異〕
(一)前は—前には
(二)猶—名を
(四)おはしますにか—おはするにか
(五)見給へむとてまうで—見給へにまうで
(六)いらへ—いで
(七)何事—事ナシ
(九)唯—ナシ

に打寄りて、馬より下りて見廻り給ふ。此の木の前は、(一)萬の木なつかしう、苔を敷き沙を撒きて、淸げなる蔭に、立寄りて聲づくり給へば、此の空洞の人、琴を彈き止みて、怪しがりて見給へば、いと淸げなる人立てり。子の言ふ樣、仲忠「いと珍らしく怪しきわざかな。物の音を聞きて、天人の下り給へるにや有らむ」と言へば、猶(二)(三)問はまほしくて、苔の簾の內ながら、俊蔭女「かれは何の人のおはしますに(四)かあらむ。熊狼を友だちにて、世の中人もまうで來通はぬ山懷に、いかで入らせ給へるならむ」客人、さればこそ人有りけれと思して、衆雅「かくて人住み給ふと聞きて、誠そらごと見給へむ(五)とてまうで來つるなり」いらへ、(六)仲忠「此の年頃此の山に籠り侍れども、斯う尋ね訪はせ給ふ人もなきに、何事(七)によりてか、訪ねおはしましつらむ」と聞えて、苔の上に出でたり。(八)衣はた、はかなき單の萎えたるを著たるに、容貌は唯(九)光る樣に見ゆ。怪しみ驚きて客人、衆雅「今日は北野の行幸なり。御供に仕うまつれるに、面白き物の音の聞ゆれば、尋ね參りつ」とて行縢

〔語釋〕

(三)釋迦佛の修行せし山

(六)忠雅の心

(八)兼雅

(一〇)貝合せの貝

〔考異〕

(一)猶—たゞ

(二)何か—何をか

(四)給へむ—給へ

(五)元より—元よりも

(七)猶—ナシ

(九)山をば五つ—山尾など五つ

(一一)空洞なる—空洞のある—空洞ある

ればこそ聞えつれ。むくつけくもある哉。猶(一)歸りなむ。いざ給へ」と宣へば、兼雅「惡きことをも宣はするかな。これこそ面白けれ。深き山に獸住まずば、何か(二)山といはむ。檀特山(三)に入るとも、兼雅、獸に施すべき身かは。此の獸害の心なすや、と試み給へむ(四)」とて、御馬を走らせ打ちて入り給へば、跳びに跳ぶ御馬に元より(五)乘り給へれば、雲につきて翔る樣にて入り給ふに、御馬添も更に參らず、其の麓に止りぬ。兄のおとゞは、御馬も劣りて、え追ひ著き給はず、止り給ひぬべけれど、昔、父母の賀茂詣の時騷ぎ宣ひしを思し出でて(六)、なき御蔭にも、さる獸の中に一人入れて止りぬる、とは見え奉らじ、と勵み給へど、彼は大將におはすれば、胡籙負ひたれば、獸も避り聞ゆ、此のおとゞは、然もおはせねば、いと恐ろしうて、猶(七)え登り給はず。

(八)大將は、いみじき山をば(九)五つ越えておはするに、獸は猶貝(一〇)を伏せたらむ樣に、同じ上に立ち籠みたるに、分け入りて、此の琴の音を訪ねて、空洞なる(一一)杉の木の下

〔語釋〕
（一）右大臣藤原忠雅

〔考異〕
（二）様にて―聲にて
（三）するに―わざに
（四）武士の―「の」ナシ
（五）御使―「御」ナシ
（六）空に厳しう―空に聞ゆ厳しう
（七）森のごと見ゆる―森のごと茂りて見ゆる

兄の右のおとゞに聞え給ふ、兼雅「此の北山に、限なく響きのぼる物の音なむ聞ゆる。琴の聲と聞ゆれど、多くの物の音合せたる様にて、內裏にさふらふせた風の一つ族なるべし。いざ給へ。近くて聞かむ」と宣ふ。右のおとゞ、忠雅「かく遙なる山に、誰か物の音調べて遊び居たらむ。天狗のするにこそあらめ。な御座せそ」と聞え給へば大將、兼雅「仙人なども斯くこそすなれ。さらば兼雅一人まからむかし」と宣へば、忠雅「例のすさびありきなめりかし。さらば早う」とて、御馬添ばかりして入り給ふに、武士の殘れるは、公の御使の捕へに來ると思ひて、谷に落ち入り、他山に逃げ隱れて、一人も無くなりぬ。二所續きて入り給ふに、いみじき物の音響き勝りつゝ聞ゆ。空にもつかず、地にもつかず、聞ゆる時に、怪しく聞き煩らひて、尙山の末をさして入り給ふ。向ひたる峰勝れて高し。北の峰の空に、厳しう茂りて森のごと見ゆる中に、此の琴の聲聞ゆ。彼の峰をさして入り給ふに、空につける山に、獸は、衾を敷きたらむ様にある時に、兄のおとゞ聞え給ふ、忠雅「さ

［語釋］
(二)前々の不幸は何と言ひても斯程にてはあらざりき、詞少し足らず脫文あるべし
(四)七人の師歟
(七)朱雀院
(八)藤原兼雅、前の若小君

［考異］
(一)かきならせ―ひきならせ
(三)かきならす―ひきならす
(五)亡せぬれば―死ぬれば
(六)ゆいこん―ゆこん

㊟兼雅琴の聲を尋ねて北山に入る、兼雅仲忠父子の應答

椽を入れて、蓮の葉に冷なる水を包みて來るに、木の下ごとに臥せる武士ども、猿の渡るとも知らで、木の葉の戰ぐに驚きて、「こゝに山のものの音す」とて、幾多の人、火を燈して罵しるに、せむ方なし。母の思ふ樣、我が親は、此の二つの琴をば、幸にも、禍にも、極めていみじからむ時、(一)かき鳴らせ、とこそ宣ひしか、我今より勝りていみじき目を何時か見む、さは言へど、(二)斯くばかりにやは有りつる、是こそ限なめれ、と思ひて、此のなむ風の琴を取り出でて、一聲(三)かきならすに、父主の、(四)七人の人の調べてし聲に、聊かかはらず。一聲かき鳴らすに、大なる山の木擧りて倒れ山倒に崩る。立ち圍めりし武士、崩るゝ山に埋もれて、多くの人(五)亡せぬれば、山さながら靜まりぬ。猶翌る午の時ばかりまで、(六)ゆいこんの手ををりかへし彈く。

其の日、(七)帝北野の御幸し給ふ日にて、其の山のあたりなど御覽ずるに、其の日さふらひ給ふ右大將(八)のおとゞ、御馬を引き廻して、此の琴の調を聞き付け給ひて、御

〔語釋〕
（六）種類を論ぜず

〔考異〕
（一）にしーとし
（二）友にー友と
（三）たれどーたれども
（四）容貌はー「は」ナシ

註　奇譚。彼蔭女なん風の琴を彈く

（五）獸いろー獸のいろ
（七）殺しー殺して
（八）草木をー草木をも
（九）便もー「も」ナシ
（一〇）見るーやる
（一一）哀とー哀に

綾錦を著て、玉の臺にかしづかるゝ國王の女御、后、天人よりも、かゝる草木の根を食物にして、岩木の皮を著物にし、（一）獸（二）を友にして、木の空洞を住處として、生ひ出で（三）たれど、目もあやなる光添ひてなむありける。母も、父君添ひていつきかしづきし時よりも容貌（四）は勝りて、めでたきこと限なし。此の年頃、唯此の猿どもに養はれて、こよなく便を得たる心地するも哀なり。水は、蓮の葉の大きなるに包みて持て來、薯蕷、野老、果物は、樣々なる物の葉に包みて持て來集まる。かゝる程に、東國より、都に敵ある人、報せむと思ひて、四五百人の兵にて、人離れたる所を求むるに、此の山を見占めて、恐ろしげにいかき者ども、一山に滿ちて、眼に見ゆる鳥獸（五）（六）いろをも嫌はず殺し（七）食へば、鳥獸だに、山を離れて逃げ隱るゝに、隱れ所もなき木の空洞に、親子籠りて、草木を（八）食ふべき便も（九）なく、天地をも眺め見る（一〇）べくもあらず、いみじき時に、年頃養ひつる猿、猶この人を哀（一一）と思ひて、武士の寢しづまるを伺ひて、青葛を大なる籠に組みて、いかめしき栗、

［考異］
(一)めでて聞くこれは大なる—聞きめでて大きなる
(二)琴彈く—琴を彈く
(三)木草の—くさ〴〵の
(四)限は命の有らん—限命有らん
(五)手—音

斯うめでたき業をするに、たま〳〵聞きつくる獸、唯此のあたりに集まりて、憐の心をなして、草木も靡く中に、尾一つを越えて、巖めしき牝猿子ども多く引き連れて來て、此の物の音を(一)めでて聞く。これは、大なる空洞をまた領じて、年を經て、山に出で來る物取集めて棲みける猿なりけり。此の物の音にめでて、時々の木の實を、子どもも我も、引き連れて持て來。

斯くしつゝ、此の(二)琴彈くを聞く程に、此の子七つになりぬ。彼の祖父が彈きし七人の師の手、さながら彈き取り果てつれば、夜晝と彈き合せて、春は面白き(三)木草の花、夏は淸く涼しき陰に眺めて、花紅葉の下に心をすましつゝ、我が世の(四)限は命の有らむに隨はむと思ふ。琴は殘る手なく習ひ取りつ。此の子變化のものなれば、琴の(五)手母にも勝りて、母は父の手にも勝りて、物の次々は劣りこそすれ、此の族は、傳はるごとに勝ること限なし。

かくて此の子十二になりぬ。形の麗しく美しげなること、更に此の世の物に似ず。

〔語釋〕
（二）かの時々仲忠を助けし童をいふなるべし
（五）母の心

〔考異〕
（一）程は―「は」ナシ
（三）あるに―ナシ
（四）出で―ゆき
（六）にて―「て」ナシ
（七）ほそを風―「風」ナシ
（八）人音―人げ

覺えず、前一町ばかりの程は明かにはれて、同じ丘といへど、人の家の作れる山の樣にて、木立をかしう、所々に松、杉、花の木ども、果物の木、數を盡して無き物なく、(一)椎栗森をはやしたらむ如く、(二)廻りて生ひ連なれり。總べて佛の現じ給へる所なれば、斯からざらむ人も住まゝほしげに見えたり。空洞の前に、一間ばかり去りて、はらひ出でたる泉の面に、をかしき程の巖立てり。小松所々にある(三)に、椎、栗其の水に落ち入りて流れ來つゝ、思ひしよりも、使ひ人一人えたらむ樣に、便有りておぼゆ。(四)朝に出で夕に歸りし、暇のなさも休まりぬ。唯眼の前なれば、我も人も、箱の蓋なるものを引き寄する樣にて、煩なくて、唯打遊びて明し暮らせば、(五)此處にて(六)世を過ぐさせむと思ひて、子に言ふ、俊蔭女「今は暇あめるを、己が親の、かしこき事に思ひて敎へ給ひし琴、習はし聞えん。彈き見給へ」と言ひて、りうかく風をば、此の子の琴にし、ほそを風をば我彈きて、習はすに、敏くかしこく彈くこと限なし。(八)人音もせず、(七)獸、熊、狼ならぬは見え來ぬ山にて、

おはしますらむ。かくて悪しうも善うもまかり歩かむと思へど、人の馬、牛を飼はせても使(二)はゞ、(一)親の御爲に、さる下衆の母と言はれ給はむことと思ふ。然らで良きこと、將難かるべし。同じくば、人も見ぬ山に籠りて人に知られじとなむ思ふ。心には片時にも通はむ、飛ぶ鳥につけても奉(三)らむ、と思へど、(四)それも得然もあらず。いざ給へ、まろが罷る所へ。然(五)てものし給はゞ、木の實一つにても、易く參らせむ。罷り歩(六)くこともやすまむ」と言へば、俊蔭女「何かは、我子のいまさ(七)む方には、何方(八)もく往かざらむ。里に棲めども、吾兒より外に見え通ふ人のあらばこそ」とて出で立つ。此の家の内には物もなし。屋も皆毀れ果てにたり。彼の父の遺言し給ひし琴ども皆取う出て、又彈きし琴ども、此の子して運ばせて、今はともろ共に行くに、萬のこと悲しとは疎なり。

俊蔭女 涙川ふち瀬も知らぬみどり子をしるべと頼むわれや何(九)なり

など言ふ程に、空洞に到りぬ。いと深き山路の程堪へ難く聞きしかど、空洞とも

〔語釋〕

(一)よかれあしかれ此儘にて日を送らんと思へど

(二)我を

(三)獲たる食物を

(五)空洞に住居せば

〔考異〕

(四)それも―「も」ナシ

(六)歩く―歩かむ

(七)いまさむ―いませむ

(八)何方も―何方へも

(九)　なり―何なる

くと思ひ給へて見侍りつるなり。されど(一)、かく領じ(二)給ひける所なれば、罷り避り(三)ぬ。空しく(四)なりなば、親も徒らになり給ひなん。己が身の内に、親を養はむに益(五)なき所あらば、施し奉るべし。足無くば(六)、何處にてか歩かん。手無くば(七)、何にてか木の實かづらの根をも掘らむ。口無くば(八)、何處よりか魂通はむ。腹胸無く(九)ば何處にか心のあらむ。此の中に(一〇)徒なる所は、耳の端、鼻の峯なりけり。これを山の王に施し奉る」と涙を流して言ふ時に、牝熊牡熊荒き心を失ひて、涙を落して(一一)、親子の悲しさを知りて、二つの熊、子どもを引き連れて、此の木の空洞を此の子に讓りて、他嶺にうつりぬ。そのかみ、此の木(一二)の空洞を得て、木の皮を剝ぎ、廣き苔を敷きなどす。薯蕷掘り初めし童出で來て、空洞の廻り掃き清め(一三)歩けば、前より泉出で來る、掘り改めて、水の(一四)流れ面白く成りぬ。かへす〴〵喜びて母の御許に往きて言ふ樣、仲忠「外に(一五)いざ給へ、まろが罷る所へ。此處とても、まろならぬ人の見えばこそあらめ。斯く出でて罷り歩く程、徒然と待ち給ふ程苦しう

〔語釋〕
(三)退去す
(四)我死なば

〔考異〕
(一)されど—されども
(二)給ひける—給ひし
(五)益なき—用なき
(六)無くば—無くては
(七)無くば—無くては
(八)無くば—無くては
(九)無くば—無くては
(一〇)中に—「に」ナシ
(一一)落して—流して
(一二)木の—ナシ
(一三)清め—清めて
(一四)水の—「の」ナシ
(一五)外に—はに

近くて養はむ、と思ひて、山深く入りて見れば、いみじう嚴めしき杉の木の四つ、物を合せたる樣にて立てるが、大きなる屋の程にあき合ひて有るを見て、此の子(一)の思ふ樣、こゝに我が親を据ゑ奉りて、拾ひ出でむ木の實をも先づまゐらせば(二)や、と思ひて、寄りて(三)見るに、嚴しき牝熊牡熊、子(四)を產み連れて棲む空洞なりけり。出で走りて此の子を食まむとする時に、此の子の曰く、仲忠「暫し待ち給へ。まろが命絕ち給ふな。まろは孝の子なり。親兄弟も無く使ふ人も無くて、荒れたる家に唯一人棲みて、まろが參らする物にかゝり給へる母持ち(五)奉れり。里には、爲べき方もなければ、かゝる山の木の實、かづらの根を取りて、親に參らするなり。高き山、深き谷を、下り登り罷り歩きて、朝に罷り出でて暗う(六)罷り歸る程だに、うしろめたう悲しく侍れば、かゝる山の王住み給ふとも知らで、此の木の空洞に母を据ゑ奉りて、薯蕷一筋を掘り出でても、先づ參らせむ(七)、又、遠き道をも、親の(八)爲にと罷り歩けば、苦しうも覺えねど、徒然と待ち給ふらむと(九)悲しう侍れば、近

〔考異〕
(一)子の—「の」ナシ
(二)をも—「も」ナシ
(三)寄りて—「て」ナシ
(四)子を—「を」ナシ
(五)母持ち奉れり—母を持ち奉りたり
(六)暗う—暗きに
(七)參らせむ—奉らむ
(八)爲にと—「と」ナシ
(九)給ふらむと—給はむも

れじ、此の河(一)にのみやは魚は有る、と思ひて、下りて其の河より渡りて、北様にさして往きて、山に入りて見れば、大なる童土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて焼き集めて、又大なる木の下に往きて、椎、(二)櫟、栗などを取りて、此の子(三)を、童「何しに此の山にはあるぞ」と問へば、仲忠「魚釣りに来つるぞ、おもとに食はせ奉らんとて」と言へば、童「山には魚は無し。又生きたる物殺すは罪ぞ。これを拾ひて食へ」と教へて、此の掘り拾ひ集めたるものどもを取らせて、童は失せぬ。此の子嬉しと思ひて、持て往きて、母に食はす。此の後は、山に入りて、見(四)せ知らせし薯蕷野老を(五)掘り、木の實かづらの根を掘りて養ふ。雪高う降る日、薯蕷野老の有り所も木の實の有り所も見えぬ時に、此の子、仲忠「我が身不孝ならば、此の雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう(六)高く降る雪、忽ちに降り止みて、日いと麗かに照りて、ありし童出で来て、例の薯蕷野老焼き調じて取らせて失せぬ。

かく遙かなる程を、し歩くも苦しう覺えて、いかで此の山に、(七)然るべき所もがな、

〔語釋〕
(七)住むべき適當なる處
(四)かの童が仲忠に

〔考異〕
(一)河―河原
(二)椎櫟栗―櫟椎栗―椎栗
(三)此の子を―この子にいふ様―このをさなき者に
(五)掘り―掘りて
(六)高く―ナシ

かし。我物多く食ひつ」と言へど、猶明くれば河原に(一)往きて、人多く車などある時は其の程過して、出でて見るに、水鏡の如く(二)氷れり。(三)そのかみ、此の子言ふ(四)、仲忠「誠に我孝の子ならば、氷解けて魚出で來。孝の子ならずば、な出で來そ」と泣く。時に、氷解けて、大なる魚出で來たり(五)。取りて歸り往きて母に言ふ樣、仲忠「我は誠の孝の子なりけり」と語る。小さき子の、深き雪を分けて、足手は蝦の樣にて、走り來るを見るに、いと悲しくて涙を流して、俊蔭女「などかく寒きに出でては(六)歩くぞ。斯からざらん折、出でて歩け」と泣けば、仲忠「苦しうもあらず、御許を思へば」とて止まるべくもあらず。ありつる魚は魚と見つれど(七)、百味を供へたる飲食になりぬ。怪しう妙なる事多かり。

かゝる程に年還りぬ。此の子まして大に、敏く賢し。變化の(八)ものなれば、たゞ大人の樣になりて、人に見ゆれば、「誰が子ぞ。親は誰とかいふ。此のわたり(九)にある(一〇)べし」など言ひて求むれば(一一)、自ら尋ねも來ぬべし。かく歩きて人にも見え知ら

〔語釋〕

（八）仲忠は俊蔭が遇ひし第七の山の仙人の轉生なれば也

（一一）仲忠の心

〔考異〕

（一）猶…河原に―猶あられ烈しきに

（二）如く―如くに

（三）そのかみ―そのとき

（四）言ふ―言ふ樣

（五）魚出で來たり―魚なむ出で來たる

（六）出でては―「は」ナシ

（七）見つれど―見ゆれど

（九）わたり―あたり

（一〇）あるべし―あるなるべし

〔要〕仲忠母を導きて北山の空洞に移る。母に琴を習ふ。幼くして琴曲の妙を極む

ひて、物も食はねば、食ばむずるぞ」と言ふに、さば親にはこれを食はするぞと知りて、釣をかまへて釣るに、(一)いとほしげなる子の、大なる川面に出でて釣れば、(二)かくらうたげなる子を、かく出だし歩かする、誰ならむ、と思ひて、「何せむに(三)斯くはするぞ」と言へば、仲忠「遊びにせんずる(四)」と言ふ。らうたがりて、「我釣りて取らせむ」とて多く釣りて取らする人もあるを(五)、持て來て親に食はせなどし歩くを、俊蔭女「斯くなせそ。物食はぬも苦しうもあらず」と言へど聽かず。容貌は日々に光る様になり行く。見る人抱きうつくしみて、「親は有りや。いざわが兒に」と言へば、「否。御許おはす」と言ひて更に聽かず。空の暖なるほどは、斯くしありきて母に食はす。夢ばかりにても、唯此の食はする物にかゝりてあり。冬の寒くなる儘(六)に、さもえすまじければ、此の子、我が親に何を參らむ、如何にせむと思ひて母に言ふ様、仲忠「魚取りに(七)いきたれど(八)、氷いと固くて魚もなし。御許如何(九)し給はむずるぞ」と言ひて泣く時に親、俊蔭女「何か悲しき。な泣きそ。氷解けなん時に取れ

〔語釈〕

(三)之を見つけたる人の心

〔考異〕

(一)いとほし〻げ—いとをかしげ
(二)釣れば—すれば
(四)せんずる—「せん」ナシ
(五)あるを—ありけるを
(六)儘に—まゝには
(七)魚取りに—魚を取りに—今魚取りに
(八)いきたれど—いでたれど
(九)如何—いかに

かくて此の子三つになる年の夏頃より、親の乳呑まず。母怪しがりて、侍女「など、吾兒は此の頃乳は呑まぬぞ。猶呑め。苦しうもあらず。他物は食はず、乳をさへ呑まずば如何せん」と言へば、仲忠「否、今はな呑ませ給うそ」とて呑まずなりぬ。かゝる程に、此の子は、すく／＼と、(一)引き延ぶるものの樣に、大きになりぬ。生ひ出づるまゝに、いとになく美しげなり。聊か見聞きつること、更に忘れず、心の(二)敏く賢きこと限なし。かく稚き程に、親の苦しかるべき事はせず、親はかなしきものなりけり(三)と思知りたり。

かゝる程に、此の子五つになる年の秋つ方、嫗亡せぬ。此の親子、聊か物食ふこともなくなりぬ。日を經てつれ／＼とあり。此の子出で入り遊びありきて見るに、母の物も食はでであるを見て、いみじう悲しと見て(四)、いかでこれ養はんと思ふ心つきて思へど、さる幼き程なれば、何でふ業をもえ爲ず(五)。(六)つとめて、近き河原に出でて遊び歩けば、釣するもの、魚を釣る。仲忠「何にせんずるぞ(七)」と言ふに、「親の煩ら

〔語釋〕
(一)すらりと
(六)早朝

〔考異〕
(二)敏く―ナシ
(三)けり―ナシ
(四)いみじう悲しとみていかでこれ養はんと思ふ―いかでこれ養はんいみじうかなしと思ふ
(五)業をも―「を」ナシ
(七)せんずるぞ―せんとするぞ

〔要旨〕侍婢の死去。幼兒仲忠の孝養。天助

つりを、いとよき程にすげて、嫗の衣に縫ひ付く、と見給へし。其れだに如何侍る。唯其れにかゝりてこそは、生きめぐらひ侍れ。立ちぬる月にも(一)、御許の御こと宣へ語らはむとて、罷りたりしかば(二)、白き米三斗五升、搗稻(三)七斗くれて侍りしをこそは、とかくにし侍りしか。何にか思し入るゝ。あな幼。いそちかむそちか(四)(五)。凡そ、子生み給へりともなくて、とかくうちして世を經給はんに、などか有らむ。かく侘び給はんや。さのまひならぬ(六)(七)人もこそあれ。いで(八)あなあぢきな。あたら御容貌を」と言へばいらへ(九)、俊蔭女「いでや。などてか然はしも惑ふべき。あないみじや。然やは思ひし」嫗、「侘び給ふな。彼の孝養に(一〇)(一一)こそはおはすめれ(一二)。世の末、斜にはかなげにやはおはする。されば寶の王ぞ(一三)」とて此の子を捧げて養ふ。かくて泣き暮し嘆きあかす月日はかなく過ぎ行く。出來添ふ物はなくて、聊かなりし身の調度など有りしをば(一四)、嫗失ひ(一五)つかひつゝ(一六)、月日經るまゝに、唯涙の海をたゞへて(一七)居たり。

〔語釋〕
(一)先月
(三)籾米
(四)五十六十になる年寄の御身ではなし、などの意歟
(六)未詳、誤あるべし
(一〇)此幸ある子の孝養を受くべき御身ならずや
(一一)此子の容貌をいふ
(一五)賣却して

〔考異〕
(二)罷りたりしかば—罷りしかば
(五)いそちかむそちか—いちかむそちか—いちかむうちか—いちかんちか—はちかめちかうか
(七)さのまひならぬ—さそさまやならぬ—さのまひならはぬ—さひならはぬ—さるさまやならはぬ
(八)あな—ナシ
(九)いらへ—ナシ
(一二)かの孝養…おはすめれ—かのことさやうこそはすめれ
(一三)王ぞ—子ぞ
(一四)有りしをば—「を」ナシ
(一六)月日—月日を
(一七)たゝへて—「て」ナシ

（語釋）
（三）一尋半
（五）夢判斷する
（七）僞蔭女をいふ
（八）御蔭を蒙るべき
（九）夫の上達部との中
（一〇）僞蔭女をいふ
（一一）夢に見ゆる
（一四）未詳
（一五）物を縫ふ絲、蠟にて塗りたるもの

（考異）
（一）やーナシ
（二）丑三ーむしみつーくしみつ
（四）いとかしこくーナシ
（六）あはさせーあはせ
（一二）嫗のー「の」ナシ
（一三）丹波ー但馬

き焦るれば、婢「いで、あなさがなや。猶な思ほしそ。今は心地落ち居にたり。かゝる寶を持ちては、何事をか思すべき。（一）此丑三は、（二）嫗夢に見奉りたり。いと美しげに、つやゝかに、滑かなる絎針に、縹の絲を添へたり。絲右絲によりて、一（三）尋かたわき計すけたるを、鷂ぞ君のお前に落しつる。其の針を、いとかしこく（四）行ひさらぼへる行者ぞ、君の御下がひの衽に、つぶ〳〵と長く逢ひつけて立ちぬる。さて、とばかりあれば、其の針落しつる鷹は、此の針を求むる樣にて、其のわたりを翔りて見るに、君持給へりと見て、御袖の上に居て、更に立たず、とぞ見給へし。怪しさに、夢合する（五）人にあはさせ（六）侍りしかば、「いとかしこき夢なり。其の見（七）えけむ人は、上達部の御子生みて、遂に其の子の徳見むものぞ。（八）若し、自然に中（九）絶ゆる事やあらむ」となむ合せし。されば、（一〇）御許の御榮の初なり。多く見給ふるに、針にて見ゆる子は、（一一）いとかしこき孝の子なり。（一二）（一三）嫗の丹波に侍る女の童生まんとて見給へし樣は、いと使ひよきてつくりの針の耳いと明らかなるに、（一四）信濃のは（一五）

「平らかに(一)」と申し惑ふ程に、殊になやむ事もなくて、玉光り輝く男子を生みつ。(二)生れおつる即ち、嫗己が布の懐に抱きて、母には(三)をさ〳〵見せず、只乳呑まする折ばかり率て來て、負ひかづき養ふ。(四)君は殊になやむ事(五)なくて、起き居たり。あつき頃なれば、貧しき人の爲にはいとよし。(六)嫗「これは大福徳におはしましなむ。(七)(八)かく暖かげに(九)つきて、おはしますは(一〇)」と誇りありく。

かゝる程に、此の母君、侘しき事(一一)いやます〳〵に覺えて、子の親にさへなりて、思ひ焦るゝに、此の子養ひもてゆくまゝに、玉光り輝きて見ゆれば、あはれ祖父おはせましかば、如何にいつきかしづき(一三)養ひ給はましと思ふも悲し。嫗(一二)「故大殿おはしまさましかば、綾錦にまつはれて、おひ出で給はまし」と言へば、俊蔭女「いで更なりや。思ひ出づればいといみじ。親の撫で養ひ給ひし時は、我斯からむとや思ひし(一四)」とていみじう泣きて、俊蔭女「我が宿世、遁れざりける(一五)を、天翔りても如何に効なく見給ふらん。親のおはせし時、まづ死なましものを」と泣

〔語釋〕
(一)佛神に祈る也
(二)名は仲忠
(六)此子は
(九)福々しきなるべし
(一二)俊蔭
(一五)宿運免れずして斯く落魄したるを

〔考異〕
(三)母には—「は」ナシ
(四)君—女君
(五)なやむ事—なやむ所
(七)おはしましなむ—「まし」ナシ
(八)かく暖かげに—いと暖かげに
(一〇)は—ナシ
(一一)事—事は
(一三)かしづき—かなしび
(一四)とや思ひし—とやは思ひ給ひし

れが許にいきて、(一)君にはともかくも言はで、(二)彼の折(三)に使ふべき物ども求めて、さりげなくて、婢「(四)此の頃はいかでか御座しましつる。哀(五)如何にせむ。殿の内に、とかくうちして、使ふべき物(六)はありや」と言へば、俊蔭女「いさ、如何なる物をか然はする」婢「(七)何にまれ〳〵、あらん物を、如何にもち〳〵しなして、多くば、(八)此の御爲にものせむかし」と言へば、いと美しげに調じたる(九)唐鞍を取出だして、俊蔭女「これは何にすべき物ぞ」とて見すれば、婢「さは、是していとよう仕うまつるべかめり。又物はなしや」と問へば俊蔭女「見えざめり」と云ふ。嫗これを取り持ちて、要じ給ふべき所々に持ていきて、(一〇)多くになして、衣布など買ひて、その設す。物など食はするをも僅にして、此の事をのみ心に思ひ惑ひありく〳〵。女君は、草の生ひ凝り(一一)て、家の荒るゝまゝに、夜晝涙を流して、子生まんことも思はである程に、嫗萬にしありきて、その折の事のみなし出でつ。

かくて六月六日に、(一二)子生まるべくなりぬ。氣色ばみて惱めば、嫗肝心を惑はして

〔語釋〕
(一)俊蔭女
(二)産の時
(四)留守中の樣子を尋ぬる也
(五)何とかして金錢に換へて
(八)産の用意に
(一〇)多くの金錢に換へて

〔考異〕
(三)折に—「に」ナシ
(六)物は—「は」ナシ
(七)何にまれ〳〵—何にもあれ〳〵—何にてもあれ
(九)唐鞍—唐くし
(一一)生ひ凝りて—生ひ立ちて
(一二)子—この子

も言ふかな。我は如何はある。例(一)する事は、九月ばかりよりせぬ。されど、猶さ有るにこそあらめとて、ともかくも覺えず」と言へば嫗、「さらば、此(二)の月たゝむ(三)月にこそおはしますなれ。あないみじや。かゝる御身を持ち給ひて、今まで知り給はざりける(四)はかなさ。嫗亡くなり侍りなば、如何なり給はん。あが君の御爲にこそ、つたなき身の命も惜しけれ」と言ふにぞ、我が身はかゝる事有りけりと思ふにぞ、いとゞいみじき心地して、恥かしくさへなりて(五)泣くを見て、婢「よし、如何はせむ。嫗知り侍らば、物な思しそ。野山を分けても、嫗仕うまつらむ(六)。これ御たからとなり給はんも知らず(七)。御身々とだになり給ひなば、嫗負ひかづきても(八)仕うまつりなむ。吾が佛の御ゆかりには、骨(九)、舍利の中よりも、甘き乳房は出で來なむ、白き髪筋(一〇)も、銀黃金(一一)となりなん。あぢきなし、悲しともな思しそ。唯御手をかい(一二)すまして、神佛に、「平らかに御身々(一三)となし給へ」と申し給へ。又嫗の命を念じ給ひて」と泣く〳〵言ひて、嫗思ひ廻して、片田舍に、子(一四)ども有りければ、其

〔語釋〕
(一)月經
(二)來月が產み月と見える
(六)生るゝ子をいふ
(七)身二つにさへ
(九)佛神の加護あるべきをいふ
(一二)淸めて

〔考異〕
(三)たゝむ月—ナシ
(四)けるはかなさ—けるぞはかなき
(五)なりて—ありて
(八)仕うまつりなむ—仕うまつらむ—つかまつらむ
(一〇)髪筋も—髪の筋も
(一一)黃金—ナシ
(一三)御身々—「御」ナシ
(一四)子ども有りければ—子どもなどありければ

〔語釋〕
(三)俊蔭女自身が
(七)御相手の男を強ひて尋ぬる事はせじ
(八)月經
(九)御産が
(一〇)御産の用意
(一一)俊蔭女懷胎。忠實なる老婢。俊蔭女、仲忠を生む。貧居。

〔考異〕
(一)出で—ナシ
(二)程—月
(四)居たるに—居たり
(五)食はするとて—食はせなどに
(六)さもえ聞え—さも聞え

俊蔭女我が袖のとけぬ氷を見る時ぞむすびし人も有りと知らるゝ

など思ふ程に、年かへりて、春になりぬ。彼の若小君出で給ふとておし折り給ひし桂の木の萌え出で(一)たるを見て、

俊蔭女忘れじと契りし枝は萌えにけりたのめし人ぞ木の芽ならまし

と思ひ渡る。

月日經て、子生むべき程(二)になるまで、(三)見知らで居たる(四)に、九月といふに、此の使ふ嫗、物食はする(五)とて、前に出で來て、打傾きて見て言ふ樣、婢「怪しく、などか御樣の例ならずおはします。若し人も近く御物語やし給ひし」いらへ、「いさや、近きまゝに、蓬、葎とこそは語らへ」嫗、「あなさがな。戲にも宣ふべきことにあらず。嫗にはな隱し給ひそ。嫗は、早うより、然は見奉れど、さもえ聞えざりつ(六)るなり。よし御かたきをば(七)知り奉らじ。何時よりか、御けがれは(八)歇み給ひし。(九)いと近げになり給ふめるを。宣へ。いかでか御設せざらむ(一〇)」いらへ、俊蔭女「怪しく

など言へど、誰かは答へん。

若小君、かくて思ひ嘆く夕暮に、風烈しく、蟲の聲亂るゝを聞きて、あはれ我が見し所の河原風如何ならん、と思ひやりて、

兼雅　風吹けば聲ふりたつる蟲の音に我も荒れたる宿をこそ思へ

など眺め居たる(一)程に、十月ばかりになりぬ。しぐるゝ空にも、人知れぬ袖によそへられて、(二)眺むるをだに、と(三)空にのみ向へるに、鶴いと哀に打鳴きて渡る。此の君、これを聞きて、まして悲しさ勝りて、

兼雅　たづが音に(四)いとゞもおつる涙哉おなじ河邊の人を(五)見しより

あはれ」と獨言ちて、如何ならん世に、今一度見ん、と思へど、夢の(六)通ひ路だになし。月日の經るまゝに、逢ふ期なき音のみ泣かれ増りて。

彼の京極にも、風の荒く、霜雪の降り積むまゝに、長き(七)夜すがら萬の事を思ひ明かして、袖の氷れるを見て、

〔語釋〕

(二)空を眺むるをでもせめての心やりにせんとて

〔考異〕

(一)程に―「程」ナシ

(三)空にのみ向へるに―空をのみ見るに

(四)いとゞも―いとしも

(五)見しより―見しかば

(六)通ひ路―「路」ナシ

(七)夜すがら―夜に

參り給ひて、片時も御眼離ち給はず。若小君、心のうちに、哀なることを思ひて、聊かなる言傳もしてしがな、あからさまにも行くものにもがな、と思へど、斯くいと難ければ、夜晝歎かしく、彼處を我より外に見る人なし、教へ遣らむも、其處ぞとも覺えぬうちに、大殿佐の君も氣色とりて問ひ給ふ。されど、知らせ奉らじと思して、人をもえ遣り給はず。物の折節ごとに、契りし事を哀に、有樣のらうたげなりしを思ひ出でつゝ、萬の草木空を見るにも、唯此の人のみ覺え給へば、千々に思ひ碎くれど、宣ふべき人しなければ、心に籠めて有經給ふ。

かくて彼の女君、夢のごと有りしに、たゞならずなりにけり。それをも知らず、父母のみ戀しく、習はぬすまひのわびしく、覺束なきこと、語らひ置き給しことを、草木の色變り、木の葉の散り果つるまゝに、涙を落して眺めわたる。夕暮に、電光のするを見て、

俊蔭女いなづまの影も餘所には見るものを何にたとへんわがおもふ人

〔語釋〕
(一)俊蔭女の處へ
(三)兼雅の心
(四)使に言ひつけて遣るにしても
(五)樣子を悟りて
(七)女の
(一〇)俊蔭女
(一一)兼雅との會合
(一三)懷胎せし也
(一四)兼雅の約束せし事

〔考異〕
(二)歎かしく—歎く

㊀俊蔭女の幽愁。兼雅の悲嘆

(六)されど—さも
(八)出でつゝ—出でて
(九)人のみ覺え—人をのみおもほし
(一二)ごと—事
(一五)影も餘所には—かげをも餘所に

〔語釋〕
(一)過ちて列にはづれし雁。誤なるべし。
(二)手引きしたる者あるべし
(四)道祖神は路傍に立ち居るものなれば兼雅を其に比して嘲る也
(七)御譴責を受け、おはうはおほんの音便なるべし
(九)けしからん事
(一〇)兼雅の母
(一一)誤あるべし
(一二)兼雅をいふ
(一四)太政大臣が

〔考異〕
(三)雁こそ有りつらめ―雁ぞありつらむ
(五)如何に騒ぎ―如何に求め騒ぎ
(六)思はして―おぼして
(八)たり―ナシ
(一三)宣はせて―宣ひて

して思し遣れ。そもく\いかて止り給ひしぞ。何處よりおはするぞ」と宣へば、若小君、兼雅「皆人の捨てておはしにしかば、過(一)したる雁の心地してなむ」と宣へば、佐の君打笑ひ給ひて、「先に(二)立つ雁こそ(三)有りつらめ。さらば此處にや昨夜より立ち給へりつる。怪しの道祖神(四)や」と言ひて、忠雅「さばれ今の間も如何に騒ぎ給らむ(五)」とて諸共におはしぬ。若小君、哀なることを、道すがら心苦しう思ほ(六)して、殿までおはしぬ。佐の君、忠雅「若小君辛うじて覓め出で奉れり」と宣ふ。大殿喜び給ふ。殿の男ども、おほう(七)事にあたり、鼻つき放たれたりつる(八)人々、喜びあへり。大殿、太政「如何に、何事により止りにしぞ。何時かゝる歩きは習ひしぞ。いとたい(九)だいしきことなり。我が心惑はす」とて責め宣ふ。北の方(一〇)、「かばかり河原のわたりは、盗人多くて、人損ふなり。其れに、一人あらば、盗人打ち殺(一一)してば如何せまし。心(一二)定まらぬ人なりけり。更に宮仕もせさせじ。ありきならひて逃げ隱れんと思ふものなめり。我が前去るな」(一三)と宣はせて、内裏(一四)へ參り給ふ時は諸共に率て

ば、我が子にせじ。如何してし」と責め給ふ。御前御馬添の男どもは、太政「仕へ所に使はじ。獄所に候はせん」と勘當せられ(一)、舍人、雜色(二)をばうち(三)しはらせなどし給ふ。御心を惑はして求め騷がせ給ふ。男ども、「もとめ(四)出奉らんに、おはしまさずば、首をも奉らん」と申しければ、暇給びて、皆十人二十人と分れて、昨夜の道を求め奉る。兵衞佐御叔父の中將、又他人々も、すべて三十人ばかり連れて、先づおはしまいたる方を、賀茂の御社まで、願を立てて求め奉るに、三條京極の辻に立ち給へり。兵衞佐見付け聞え給ひて、忠雅「など斯くいみじき物(五)は思はせ給ふ。殿には、よべより、君おはせずとて、大臣(六)の君、上、ものも聞し食さず、御心惑ひして、御供に仕うまつりたりし人々は、皆(七)鼻つき放たれぬ。忠雅らもいた(八)づら人になりぬべくてなむ。見給ひし様に、皆人酒の氣ありて、さかし(九)き人も無かりしかば、君の止り給ひけんも知らず、殿まで物し給ひて、おはせざりしかば、今宵夜一夜(一〇)思しさわぐを見給へれば、しづ心もなし。殿の中(一一)にある時だにあり、ま

[語釋]
(三)打ちしをらせの意歟
(六)太政大臣夫婦
(七)鼻貫せられたるをいふ
(八)あるにかひなき身分
(九)心たしかなる人も
(一一)兼雅が殿内に居る時さへ父母は氣にかくるものを

[考異]
(一)せられ—せられぬ
(二)雜色をば—雜色は
(四)もとめ出—「出」ナシ
(五)物は—物をば
(一〇)夜一夜—一夜

〔語釋〕
(一)無沙汰するも人に氣兼せねばならぬ内だけの事
(二)見る人は兼雅
(五)茫然として
(六)忠雅
(七)父が譴責して

〔考異〕
(三)見る人の—見る人も—みや人の
(四)見捨てつるに我か—見捨てつるにあれば
(八)かうがへ宣ひて—かうじ宣ひて

⊕兼雅の行方不明。藤原一家の騷動。兼雅父母の監視に苦む

吾が佛、疎なりとな思しそ。さりとも、斯くてやむべきにもあらず。たゞつよましき程ばかりぞ」と宣ひて、おきて出で給ふに、猶いみじう悲しう思さるれば、(一)單衣の袖を顏に押し當てて、とばかり泣き入りて、斯く宣ふ。

兼雅 宿思ふ我が出づるだにあるものを涙さへなどとまらざるらん

と宣へば女打泣きて、

俊蔭女 見る人(二)(三)のなごり有りげも見えぬ世をいかに忍ぶる涙なるらん

といふ樣もいと心苦しけれど、殿の事もいとほしければ、返す〴〵契り置きて出で給ふ。殿の内をだに、人數多してこそ歩き給へ、唯一所歸り給ふに、何れの道とも知り給はぬうちに、哀なる人を見捨てつるに(四)、我か人にもあらぬ心地(五)して、見廻らして、辻に立ち給へり。

大殿には、昨夜かく若小君おはしまさずとて、御供に候ひける人々、兄の兵衛(六)佐の君を、いみじうかうがへ(七)(八)宣ひて、佐の君をば、太政「唯今此の子もとめ出でず

宣へば、俊蔭女「(一)誰とも知られざりし人なれば、聞ゆとも誰とは知り給はんや」とて、傍なる琴をかき鳴らして、打泣きたるけはひもいみじう哀なり。深き契を、夜一夜心のゆく限しあかし給ふも、逢ひ難からむことを、今よりいみじう悲しう思さるゝ程に、明くなれば、(二)さても有るまじう、殿にも思し騒ぐらんといみじければ、兼雅「尚如何すべき。今日ばかりは猶斯うてもと思へど、(三)同じ所にてだに、片時お前ならぬ所にはすゑ(四)給はず、あからさまの御供にもはづし給はず。昨日心地の悪しく覺えしかば、(五)參るまじかりしを、(六)切に宣ひしかば。其も、斯う此處に參り來(七)べかりけるにこそと、今なむ思ひ知らるゝ。更に心にては夢に(八)ても疎なるまじけれど、參り來む事のわりなかるべきこと」と宣へば女、

俊蔭女「秋風の吹くをも歎くあさぢふに今はとかれ(九)む折をこそ思へ

とほのかに言へば、ふたし(一〇)へに、いとほしく哀なる事を思ひ入り(一一)て、

兼雅「葉ずゑこそ秋をも知らめ(一二)根を深みその路芝はいつか忘れむ

〔語釋〕
(二)此儘でも居られず、兼雅の心
(三)同じ家の中でも
(四)親が我を
(五)賀茂へ
(六)親が強ひて勸めし故行きし也
(九)兼雅が來なくなる時
(一〇)二重に
(一二)我が戀の根は深ければ此處へ通ふ道も忘るゝ樣の事は決してあるまじ

〔考異〕
(一)誰とも知られ―誰とも人に知られ
(七)參り來べかりける―參るべかりける
(八)にても―ナシ
(一一)入り―ナシ

近く見馴るゝまゝに、片時立ち去るべくもあらず、見捨てて行かむも、哀にうしろめたく、覺ゆることの二つなれば(一)、女に、兼雅「今はな思し隔てそ。然るべきにてこそ、かく見奉り初めつらめ。見奉らではえあるまじう覺ゆれど、見給ひし樣に親なむおはする。片時御前も離ち給はず、內裏にまゐる程だに、うしろめたきものに思したれば、昨夜より斯くて侍るを、如何に覺し騷ぐらむ。又かゝる罷りありきなども(二)、わざとして人に(三)見えねば、えしも思ふ儘にはまうで來じを、然るべからむ折に、夜半(四)曉にも參り來んと思ふを、此處に誠に(五)やがておはする人か。親やおはする。又通ひ(六)給ふ所やある。あるらむ儘に宣へ」と宣へば女、いとゞいみじき物思ひさへまさる心地して、恥かしくいみじけれど、せめて(七)宣へば、俊蔭女「親もあり、知るべき人(八)もある身ならば、かゝる所に、假にても一人はありなむや。やがて此の棲處に朽ちぬべきより外の行方もなくなむ」といへば、兼雅「さはあれ(九)、誰と聞えし人の子ぞ。若し心ならで參り來ずとも、つと思ひとりて(一〇)なむあるべき」と

〔語釋〕
(三)人にして見せた例がなき故
(五)此儘引續いて
(六)他に家を持ち給へるか
(七)兼雅が強ひて
(八)世話してくれる人
(一〇)御身を何といふ人ぞと思ひ込んで

〔考異〕
(一)二つなれば—二つなければ
(二)なども—など
(四)夜半—よひ
(九)さはあれ—さばれ

哀なるすまひ、などてし給ふぞ。誰が御族にかものし給ふ」と宣へば、俊蔭女「いさや。何かは聞えさせむ。斯うあさましき住居し侍れば、立ち寄り訪ふべき人もなきに、怪しく覺えずなむ(一)」と聞ゆ。君、兼雅「疎きよりとしも言ふ(二)なれば、覺束なきこそ頼もしかなれ(三)。(四)いと哀に見え給ひつれば、えまかり過ぎざりつるを、思ふも著くなむ。親ものし給はざなれば、如何に心細く思さるらむ。誰とか聞えし(五)」など宣ふ。女(六)「いでや。誰と人に知られざりし人なれば、聞えさすともえ知り給はじ」とて前なる琴をいとほのかにかき鳴らして居たれば、此の君、いと怪しくめでたしと聞き居給へり。夜一夜物語し給ひて、如何ありけん、其處に止まり給ひぬ。

かくて、哀(七)にいみじく心細げ氣色を見給ひしより思ひつきにしを、まして近くて(八)は今千重(九)まさりて、哀に悲しく思ほえて、親の御許に歸らざらむも何とも覺え給はねど、父母の思ひ子にて、片時(一〇)も見え給はねば、思し騷ぎ給ふ子なり、かくて

〔語釋〕
(一)かく御哀れに預かるは案外なり
(二)引歌あるべし未詳
(四)甚間の事を語る也
(五)引歌あらんか未詳
(七)兼雅の心
(八)既に女に近づきて後は

〔考異〕
(三)頼もしかなれ—頼もしけれ
(六)いでや—いらへ
(九)千重—一重
(一〇)片時も—片時

けて、琴を密に彈く(一)人あり。立ち寄り給へば入りぬ。兼雅「(二)あかなくにまだきも月の」など宣ひて、兼雅「かゝるすまひし給ふは誰ぞ。名のりし給へ」など宣へど、いらへもせず立ちぬ。(三)内はいと暗ければ、入りにし方も見えず。月やうやう入りて、

兼雅(四) 立寄りて見る〳〵月の入りぬれば影をたのみし人ぞわびしき

又、

兼雅 入りぬればかげも殘らぬ山のはに宿まどはして歎く旅人

など宣ひて、彼の人の入りにし方に入れば、塗籠(五)あり。其處に居て物宣へど、をさをさ答もせず(六)(七)。若小君、兼雅「あな恐ろし。物宣へ(八)」と宣ふ。兼雅「おぼろけにては、かく參り來なむや」など宣ふ。けはひ(九)なつかしう、童にもあれば、少し侮らはしくや覺えけん、

俊蔭女 かげろふの有るかなきかに仄めきてあるは有るとも思はざらなむ

とほのかに言ふ聲、いみじうをかしう聞ゆ。いとゞ思ひ増りて、兼雅「誠にかゝる

〔語釋〕
(一)俊蔭女也
(二)伊勢物語の歌、此末は「隱るゝか山の端逃げて入れずもあらなん」
(五)めぐりを壁にしたる室
(六)俊蔭女が
(九)兼正の

〔考異〕
(三)内はいと暗ければ—暗くなれば
(四)立寄りて—立寄ると
(七)答もせず—いらへもせず
(八)物宣へと宣ふ—ともどし給ひて宣ふ

見給へど、一人行く路にしあらねば強ひて過ぎ給ひぬ。かくて御社に詣で(一)著き給ひて、神樂を奉り給ふ。若小君、晝見えつる人何ならむ、いかで見む、と思して、暗くて(二)歸り給ふに、一人(三)立ち後れて、皆人渡りはてぬるに、若小君、彼の(四)家の秋の空靜なるに、見廻りて見給へば、野ら(五)藪のごと恐ろしげなるものから、心有り(六)し人の、急ぐことなくて心に入れて造りし所なれば、木立よりはじめて、水の流れたる樣、草木の姿など、をかしく見所あり。蓬、葎の中より、秋の花はつかに咲き出でて、池の(七)廣きに月面白くうつれり。恐ろしきこと覺えず、面白き所を分け入りて見給ふ。秋風河原(八)風まじりて早く、草むらに蟲の聲亂れて聞え(九)、月隈なう哀なり。人の聲聞えず。かゝる所に(一〇)棲むらむ人を思ひやりて、獨言に、

兼雅　蟲だにもあまた聲せぬあさぢふに(一一)獨りすむらむ人をこそ思へ

とて深き草を分け入り給ひて、家のもとに立寄り給へれど、人も見えず。唯薄のみいと面白くて(一二)招く。隈なう見ゆれば、倚近く寄り給ふ。東面の格子、一間あ

〔語釋〕
(六)俊蔭をいふ
(八)三條京極なれば賀茂河原に近き也

〔考異〕
(一)詣で—まで
(二)暗くて—「て」ナシ
(三)一人—人に
(四)彼の—この
(五)野ら—「ら」ナシ
(七)池の—「の」ナシ
(九)聞え—聞ゆ
(一〇)所に—所にも
(一一)あさぢふに—くさむらに
(一二)面白くて—「て」ナシ

で給ふ。舞人陪從、いかめしう御前數知らず過ぎ給ふを見るとて、毀れたる蔀のもとに立ち寄りて見るに、(二)遊び人、(一)御車など過ぎて、立ち後れて、これも前追ひて、(三)年二十ばかりの男、又十五歳ばかりにて、玉光り輝く髫髪子(四)の御馬添多くて渡り給ふ。(五)髫髪子は、(六)この大臣殿の御四郎に當り給ふ。父おとゞ限なく悲しうし給ひて、(七)片時も御眼離ち給はぬ御子なりけり。若小君となむ聞えける。(八)此の家の垣ほより、いとめでたく色清らなる尾花をれかへり招く。先に立ち給へる人、忠雅「怪しく招くところかな」とて、

忠雅「吹く風のまねくなるべし花薄われよぶ人の袖と見ゆるは(九)

とて渡り給ふ。若小君、

兼雅「見る人のまねくなるらむ花薄我が袖ぞとはいはぬ物から(一〇)

とて立ち寄り給ひて折り給ふに、此の女の見ゆ。(一一)怪しくめでたき人かな、心細げなるすまひするかなと見給ふに、うち歩み入る後で、(一二)こともなし。若小君、哀と

〔語釈〕
(一)前駈の供人
(二)俊蔭の女が
(三)藤原忠雅
(四)まだ元服せぬ子
(五)藤原兼雅
(八)俊蔭の家
(一一)若小君の心
(一二)難ずべき處なし

〔考異〕
(六)この—ナシ
(七)片時も—「も」ナシ
(九)見ゆるは—見つるは
(一〇)袖ぞとは—袂とは

に悲しく、春は花を眺め、秋は紅葉を眺めて明かし暮らすに、たゞ此の嫗の食はすれば食ひ、食はせねば食はで有り。一人隠れ居るばかりの屏風、(一)几帳、著るものばかりは、然はいへども、(二)廣かりし所のなごりに、無くなりぬと見れど、猶しつらひて有り。父主、物のきよう(三)あり、心憎き所ありし人なれば、家の様をかしう、面白かりし所なれば、家廣く、植木面白く、草の様景色などなべてならずを(四)かしき所にて、夏になるまゝに、出で入りつくろふ人なき(五)所なれば、蓬、葎さへ生ひ凝り(六)て、人目稀にて、唯一人(七)明け暮れ眺むるに、秋にもなりぬれば、木草(八)の色異になりゆくを見るまゝに、言ふかたなく悲しくて、斯く言ふ、

俊蔭女　わび人は月日の數ぞ知られける明暮ひとり空をながめて

など獨言ちてなむ眺めける。

かくて、八月中の十日(九)ばかりに、時(一〇)の太政大臣、御願有りて賀茂に詣で給ひけるに、舞人陪從(一一)、例の作法なれば、いといかめしうて、此の俊蔭の家の前よりまう

〔語釋〕
(一)めのとの従者
(三)或本に器用の字を當てたり
(一〇)藤原某
(一一)身分卑き樂人

〔考異〕
(二)いへども—「も」ナシ
(四)をかしき—面白き
(五)なき所なれば—なければ
(六)凝りて—ひろごりて
(七)一人明け暮れ—明け暮れ一人
(八)木草—草木
(九)八月中の十日—八月十日—八月二十日

㊈藤原兼雅父に随ひて賀茂に詣づ。歸途密に俊蔭女の許に宿す

む時に、此の琴をばかき鳴らし給へ。若しは子有らば、其の子十歳のうちに見給はむに、敏く賢こく、魂とゝのほり、ようめい心人に勝れたらば、其れに預け給へ」と遺言し置きて絶え入り給ひぬ。又同じ頃ほひに、めのとも亡くなりぬ。心と身を沈めし程に、ことに身の得もなくて久しくなりにしかば、まして一人のつかひ人も残らず。日に従ひて失せ亡びて、物の心も知らぬ女一人残りて、物恐ろしくつゝましければ、有るやうにもあらず、隠れ忍びてあれば、人も無きなめりと思ひて、萬の往還の人は、家どもも毀ち取りつれば、寝殿一つのみ、簀子もなくて有り。程もなく、野の様になりぬれば、女は唯乳母の使ひける從者の下屋に曹司してありけるをぞ呼び使ひける。父主の言ひし如、所々の庄より持て來しも、使やりなどしてはたりし時こそありしか、斯くむげになりぬれば、唯預りのものの喜びにてやみぬ。はかなく打使ふ調度なども、親たちの亡くなりにける騒ぎに取り隠してしかば、皆失せ果てにけり。世の中も知らぬ若き心地に、いと哀

〔語釈〕
(三)容面の字音なるべし、容貌
(六)俊蔭が
(七)収入もなくて
(一〇)催促せし時こそ持つても來りしが
(一二)差配の者の得分になりて仕舞ひたり
(一四)家人どもが

〔考異〕
(一)琴をば—「ば」ナシ
(二)若しは—「は」ナシ
(四)ようめい—ようみやう
(五)遺言し—遺言をし
(八)ありけるをぞ呼びつかひける—ありけるをぞ呼び使ひけり—ありけるを呼びつゝ使ひけり
(九)言ひし如—言ひしが如
(一一)はたりし—はたりもて來し
(一三)騒ぎに—騒ぎに皆
(一五)皆—ナシ

〔語釋〕
（四）人に取られんとする時わが物なりと辯解する
（五）我が死後
（九）沈香
（一一）組をなせる兵士

〔考異〕
（一）經ければ―ふれば
（二）庄々―處々
（三）誰かは―誰か
（六）爲に―「に」ナシ
（七）一丈ばかり―「ばかり」ナシ
（八）其れが―その
（一〇）さら〳〵に―たゆたふに

高き交らひもせさせむと思ひつれども、若くては知らぬ國に渡り、此の國に歸り來ても、公にも叶ひつかうまつらで程經ければ、（一）貧しくて、我子の行先の掟せずなりぬ。天道に任せ奉る。我領ずる庄々（二）はた多かれど、誰かは（三）言ひわく人あらむ。ありとも誰か言ひ纒はし知らせむ。但し、命の後、（五）女子の爲に、（六）氣近き寶とならむものを奉らむ」と宣ひて、近く呼び寄せて、萬の事を言ひて、俊蔭「此の家の乾の隅の方に、深く一丈ばかり（七）掘れる穴あり。其れが（八）上下ほとりには、沈（九）を積みて、此の彈く琴の同じ樣なる琴、錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ。錦のはなむ風、褐のをばはし風と云ふ。其の琴、我が子と思さば。ゆめさらさらに、（一〇）人に見せ給ふな。唯其の琴をば、心にも無きものに思ひなして、永き世の寶となし、幸あらば其の幸極めん時、禍極まる身ならば、其の禍限になりて、命極まり、又虎狼熊獸に交りさすらへて、獸に身を施しつべく覺え、若しは伴の兵（一一）に身をあたりぬべく、若しは世の中にいみじき目見給ひぬべから

〔語釋〕
(七)夜があけさへすれば
(一一)巨勢利和云、「公に仕へて叶ふまじき」などあるべし。

〔考異〕
(一)貧しくて—貧しくして
(二)あたりも光り—あたり光り
(三)世に—世の
(四)我も御返事聞えず—忝くも御返り聞えず
(五)御返—御返も
(六)めぐり—めぐりて
(八)竝みたれど—竝み居たれど
(九)取り入れもせず—出で入りもせず
(一〇)經る—ける
(一二)十五歳に—「に」ナシ

㈧俊蔭夫婦の逝去。遺言。家道の零落。孤兒の寂しき生活。

習ひ取りつ。此の程家貧しくて(一)、思ふ程にしたてず。十二三になる年、容貌更に言ふ限なし。あたりも光り(二)輝きて、見る人眩ゆきまで見ゆ。心のらうらうじき事(三)世に聞え高くて、帝東宮、父に召し、女にも御文賜へど、我も御返事聞えず(四)、女にも御返(五)せさせず、さらぬ上達部、御子たちは、まして御文見入るべくもあらず。俊蔭「女は天道に任せ奉る。天の掟あらば、國母女御ともなれ。掟なくば、山がつ、民の妻ともなれ。我乏しく貧しき身なり。いかでか高き交らひはせさせむ」と言ひて、良き人の宣へど、耳にも聞入れず、家の門は、めぐり(六)さして、帝東宮の御文持たる御使、なべての人の使は、明けたてば(七)立ち竝みたれど(八)、取り入れも(九)せず、唯琴を習はしてあり經る(一〇)程に、公に(一一)叶ふまじきものなりとて、治部卿かけたる宰相になされぬ。

かゝる程に、女十五歳に(一二)なる年の二月に、俄に母かくれぬ。それを嘆く程に、父病づきぬ。父弱く覺ゆる時に、女を呼びて言ふ樣、俊蔭「我ありつる世には、我子に

蔭一人こそ有りけれ。學士をかへて、琴の師をつかうまつれ。東宮さとり有る御子なり。物の師せん人の難(一)いたすべき御子にあらず。心に入れて、殘す手なくつかうまつらせたらば(二)、納言の位(三)賜はせむ」と宣ふ時、俊蔭申す(四)、「いときなき程に、父母を(五)離れて唐土へ渡されぬ。あたの風、大なる波に漂はされて、知らぬ國に打ち寄せらる。深き悲しびこれに過ぎたる事なし。辛くして歸りまうで來たるに、父母亡びて、空しき宿をのみ見る。昔宣旨にかなひて、度々の試を賜はりて、唐土に渡されぬ、父母に逢ひ見ずして長く別れて悲しび(六)は餘りありと雖も、學びつかうまつる(七)勇はなし。無禮(八)の罪にはあたるとも、此の琴は學びつかうまつらじ」と申して、罷り出でぬ。

かくて、公にもかなはず、官位も辭して、三條のすゑ(九)京極の大路に、廣く面白き家をつくりて、女に琴を習はす。女一わたりに曲一つを習ひて、一日に大曲五つ六つを習ひとりつ。同じくかきならす聲父に勝りて(一〇)、父がひく手、一つ殘さず(一一)

〔語釋〕
(二)琴を東宮に教へたらば
(七)琴を東宮に教へ奉る勇氣はなしの義歟

〔考異〕
(一)難いたすべき—難ずべき
(三)納言の位—直衣の位
(四)申す—ナシ
(五)父母を—父母に
(六)悲しび—悲しみ
(八)無禮—みらい
(九)すゑ—すゑの
(一〇)勝りて—勝る
(一一)一つ殘さず—一つも殘さず

㊆俊蔭三條京極に隱居す。女に琴を習はす。治部卿兼琴議に任ぜらる

帝琴どもを試み給ふに、おどろ〳〵しき聲出で來。驚き給ひて宣はく、嵯峨「此の琴ども(一)はいかで作りしぞ。手觸れで久しくなりぬるに(二)、聲もしらまず、七つながら同じ聲にはいかで調ひたるぞ」と問ひ給ふ時に、有りし樣を悉く(三)奏す。帝大に驚かせ給ひて、感ぜしめ聞召す事限なし。嵯峨「これが聲(四)未だなれずなむある。調べて奉れ」と仰せらるゝ時に、俊蔭せた風を賜はりて、聊かかき鳴らして大曲一つを彈きつかうまつるに(五)、大殿の上の(六)瓦碎けて花の如く散る。今一つつかうまつるに、六月中の十日の程に、雪ふすまの如く凝りて降る。帝大に驚き給ひ(七)て宣ふ、嵯峨「げに此の調べは、珍らしき手なりけり。これはゆいこく(八)といふ手なり。くせこゆくはら(九)といふ曲なり。唐の帝のひき給ふに、瓦碎けて雪降る、となん言ひ傳へ(一〇)たる。此の國には未だ見ぬことを、怪しう珍らしき人の才かな。昔一度試せしにも、其の道(一一)の珍しうすぐれたりしかば、官をも其の道に賜ひ、學士をも仕うまつらするに、文の道は少したじろぐとも(一二)、其の筋は多かり。此の琴はこの國に俊

〔語釋〕
(一一)學問の道
(一二)俊蔭に劣るとも

〔考異〕
(一)どもは—どもをば
(二)なりぬるに—なりにけるに
(三)悉く—くはしく
(四)これが聲—この聲
(五)彈きつかうまつるに—ひく—つかうまつるに—ひくにひゞき高うて
(六)上の—ナシ
(七)給ひ—ナシ
(八)ゆいこく—ゆうこく—ゆくこく
(九)くせこゆくはら—くせとゆくはら
(一〇)傳へ—ナシ

〔語釋〕
(二)特に
(五)源姓を賜はりし人の子滋野王といふ人の娘なること末に見えたり
(七)なん風はし風

㊅俊蔭琴を所々に奉る。琴の師仕るべき勅を辭す

〔考異〕
(一)宣へど—よべど
(三)たてゝ—かたく
(四)つゝしみて—つゝみて
(六)思ふやう—思ふほどに
(八)千蔭—ちかかげ

立て、世に從ひ、人しづめ、憂あらすな」と宣はす。容貌有樣すべて人に勝れたれば、我も〳〵と娘妹持ちたる人は、婿にせむ〳〵と宣へど(一)、佛の淫欲の罪重きを、たてゝ(二)(三)宣ひしかば、つゝじみて(四)のみ過しけれど、一世の源氏(五)の心魂人に勝れ給へりけるを得て、其の腹に女子一人生ませつ。かなしうする事限なし。俊蔭位まさりて、式部大輔にて左大辨兼けつ。

女四になる年の夏より、大きに、心も敏く賢し。父が思ふやう(六)、今は我女物習ひつべき程になりにたり。我が身を捨てて習ひし琴、此の女に習はさむと思ひて、彼の波斯國より持て渡りし琴どもを取り出でて、二つの琴をば(七)、人にも知らせで、今十を、りうかく風をば、女のにす。ほそを風をば我がにて、やどもり風といひしを殘して、今七つを持たせて、内裏へ參る。せた風をば帝に奉る。山もり風をば后宮に奉る。花園風をば東宮に奉る。みやこ風をば東宮の女御に奉る。かたち風をば左大臣忠經に奉る。おりめ風をば右大臣千蔭(八)に奉る。

此の琴を一つづつ奉る。帝大きに驚き給ひて、俊蔭を召す。參れるに、事の由を委しく問ひ給ひて宣はく、「此の奉れる琴の聲、荒き所(一)あり。暫し彈き馴らして奉れ」と宣ふ。帝「他の國の人なれど(二)、渡りて久しくなりにけり、其の程は(三)勞りて候はせむ」と宣へば俊蔭申す、「日本に年八十歳(四)なる父母侍りしを、見捨てて罷り渡りにき。今は塵灰にもなり侍りにけむ。白き(五)屍をだに見給へむとてなむ急ぎ罷るべき」と申す。帝哀がり給ひて、暇を許し給ひつ。

交易の船につきて、二十三年と云ふ年、三十九にて日本へ歸り來れり。父かくれて三年、母かくれて五年になりぬといふ。俊蔭嘆き思へども(六)効なくて、三年の孝送る(七)。公に事の由を申さすれば(八)、帝、嵯峨「いとうるせかりし(九)ものの歸りまうで來れること」と喜び給ひて、召して事の有樣問はせ給ふ。俊蔭有りし事の限り奏すれば、帝哀がり興ぜさせ給ひて、式部少輔になされぬ。殿上聽されて東宮の學士仕るべき由仰せらるる程に、嵯峨「道の(一〇)(一一)事は俊蔭に預く。ついで殘さず、才に從ひて出し

〔語釋〕
(三)琴を調ふる間は
(五)白骨
(七)喪に服す
(九)立派なりし
(一〇)學問の道

㊄俊蔭歸朝。源氏の女を娶る。式部大輔兼左大辨に任ぜらる。一女を生む。

〔考異〕
(一)召す參れるに—召して
(二)なれど—なれば
(四)八十歳なる—八十歳になる
(六)思へども効なくて—思へども効もなくて
(八)申さすれば—申し奏さすれば
(一一)事は—事をば

〔語釋〕
(二)手くび
(五)村田春海曰、三十の琴の中佛に奉り仙人に贈りし殘りの中天女仙人の名づけしは十二也。尚名もなきが殘りたるを白木といふなるべし
(六)太子

〔考異〕
(一)けれど―けれども
(三)ほそを風―ほうを風
(四)やどもり風―やどり風

ほしけれど(一)、山口をだに出でやらぬ輩なれば、別の悲に、こゝまでだに參り來つるなり。こゝにて日本國まで送り奉るべき人をさふらはせむ」と宣ひて、聊かなる法を作りかけつ。彼の國まで持て歸るべき琴には、おのがたぶさ(二)の血をさしあやして、琴の名を書きつく。一つをばりうかく風、今一つをばほそを風(三)、今一つをばやどもり風(四)、四つをば山もり風、五つをばせた風、六つは花園風、七つをばかたち風、八つをばみやこ風、九つをばあはれ風、十をばおりめ風と書きつけて、七人の人歸りぬ。俊蔭歸れば例の旋風出來て、琴をば卷き取りつ。天女の名付け給ひし、とりあはせて十二、白木(五)のもとり加へて、卷き揚げつ。俊蔭三年棲みし山に至りて、事の樣を語りて、月日の樣など委しくいふ程に、旋風、此の卷き揚げし琴を此の三人のつい居たる前に卷きもて來て下し置きつ。そのかみ俊蔭、此の白木の琴を此の人々に一つづつ奉る。珍らしがり喜ぶこと限りなし。

かくて俊蔭、日本へ歸らんとて、波斯國へ渡りぬ。其の國の帝、后まうけの君(六)に、

水汲みせし功徳の故に、輪廻生死の罪を滅ぼして、人の身を得たるなり。(一)尊勝陀羅尼を念じ奉る人を供養したる故なり。(二)今も亦人の身を受けんことは難しと雖も、今此の山に至りて(三)佛菩薩を驚かし、懈怠邪見の輩に忍辱の心を起さしむる故に、此の山の七人(四)殘れる業を滅ぼして天上に歸るべし。日本の衆生、此の因縁に、生々世々に佛に逢ひ奉り、法を聞くべし。又此の山の族七人(五)に當る人を、三代の孫に得べし。其の孫、人の腹に宿るまじき者なれど、此の日本の國に契結べる因縁有るによりて、(六)其の果報豊なるべし」と宣ふ時に、遊び人等禮拜し奉る。俊蔭此の琴を佛より始め奉りて菩薩に一つづつ奉る。乃ち雲に乘り、風に靡きて歸り給ふに、天地震動す。

かくて俊蔭、今は日本へかへらむと思ふに、此の七人の人に、琴一つづつとらす。七人紅の涙を流して惜しむ。俊蔭往き難にして歸る。七人の人(七)音聲樂して、孔雀の渡しゝ川の邊まで送る。其れより歸るとて宣ふ(八)、「我等日本まで送り奉らま

〔語釋〕
(五)第七の山の仙人也

〔考異〕
(一)得たるなり—得たりしなり
(二)故なり—故に人になり
(三)至りて—入りて
(四)七人—七人の子
(六)其の果報—其の報
(七)の人—ナシ
(八)宣ふ—宣ふ樣

り大卒響きて、雲の色風の聲變り(一)て、春の花秋の紅葉、時分かず咲きまじる儘に、遊び人等(二)、いとゞ遊びまさる程に佛渡り給ひて、即ち孔雀に乗りて花の上に遊び給ふ時に、遊び人等、(三)阿彌陀三昧を琴に合せて七日七夜念じ奉る時に、佛現れて宣はく、「汝等は、昔勤(四)深く犯は淺かりしによりて、都卒天の人と生れにき。今あさましかりし瞋恚の報に、國土の衆生に生れたり(五)。其の業やうく盡きにたり。又此の日本の衆生は、生々世々に人の身(六)を受くべきものに非ず。其の故を(七)如何にといへば、前の世に、淫欲の罪はかりなし。然れば(八)輪廻して(九)、一人が腹に八生(一〇)宿り、(一一)千人が腹に各(一二)又八生宿るべし。其の宿るべき母一人(一三)、人の身を受くべき人なり(一四)。然あれど、昔大そんはむな(一五)といひし仙人ありき。其の仙人のせしことは、昔慳貪邪見なる國王ありて、國亡びて、諸の衆生國土の人、穀につかれし(一六)時ありき、其の時に此の仙人、萬恒河沙の衆生に穀を施して、尊勝陀羅尼(一七)を無等(一八)三昧に行ひ誦して(一九)七年ありき。其の時に日本の衆生、三年謹みて、彼の仙人に菜摘み

(三)阿彌陀の名號を一心不亂に唱へて感涌念佛を行ふをいふとぞ
(一五)不詳
(一六)穀物に餓ゑし
(一七)佛が帝釋に向つて說きし神呪、之を念ずれば一切の苦を除き福德を得るの効ありといふ
(一八)比類なく專らに

〔考異〕
(一)變りて—變り
(二)等—ナシ
(四)深く犯は—深くいたし犯は
(五)生れたり—生れにたり
(六)人の身—淨土の身
(七)故を—故は
(八)然れば—然あれば
(九)して—しつゝ
(一〇)八生—五百生
(一一)千人—二千人
(一二)又—ナシ
(一三)母一人—子一人
(一四)人なり—樣なし
(一九)誦して—勤めて

天上し給ひて後、天つ風につけても訪れ給はず、(一)知る人もなき天の下に止め給ひて、劫のかはるまで訪れ給はぬを、仄かに聞けば、是より東なる花園になむ、春と秋と下り給ふなるを、花園よりと承はれば、親の御あたりの戀しさに、娑婆世界の人の通はぬ所なれども、對面するぞ」とて、此の琴八つを一づつ調べて、七日七夜彈くに、(二)此の響佛の御國まで聞ゆる時に、佛文珠に宣はく、「是より東、娑婆世界より西に、天上の人の植ゑし木の聲すなり。(三)見にゆけ」と宣ふ時に、文珠獅子に乘りて、(四)刹那の間に至りて問ひ給はく、「汝は何ぞの人ぞ」と問ひ給ふ時に、七人の人皆禮拜して申さく、「我は昔(五)都卒天の内院の衆生なり。聊かなる犯ありて、忉利天の天女を母として、此の世界に生れて、七人の輩同じ所に棲まず、また相見る(六)事難し。然あるを、乳房の通ふ所よりとて渡れる人の悲しさに、七の輩集ひて承はるなり」と申すに、文珠歸りて佛に(七)かくと申し給ふ時に、佛文珠を引き連れて、雲の輿に乘りて渡り給ふ時に、此の山川常の心地せず、山ゆす

〔語釋〕
(一)世話する人もなき
(四)瞬間に
(五)三界二十八天の中の欲界の第四天

〔考異〕
(二)此の響—此の琴の響
(三)見にゆけ—とみに行け
(六)事難し—事なり難し
(七)かくと—ナシ

も同じごと宣ひて、四人つれて四つといふ山に入り給ふ。(一)其處にも同じごと宣ひて、五人つれておくへ入り給ふ。其處にも同じごと宣ひて、六人つれておくへ入り給ふ。其處にも同じごと宣ひて、七人つれて入り給ふ。其の山の樣は心殊なり。山の地は瑠璃なり。(二)花を見れば匂ことに、紅葉を見れば色ことにほこりかに、淨土の樂の聲、風にまじりて近く聞え、花の上には鳳凰(三)孔雀つれて遊ぶ所に、七人つれて入り給ひて、其の山の主を拜み給ふ。(四)山の主喜び畏まり給ふ時に、客人申し給はく、「日本の人、蓮花の花園よりとて來たれば、(五)其の乳房の戀しさになむ、花園をかけてもいふ人なれば、山の輩集りて、率てまうで來つる」と宣ふ時に、山の主俊蔭に宣ふ、「己は、天上より來り給ひし人の御子どもなり。此の山に下り給ひて、七年棲み給ひし程に、一年に一人を當てて、七人の輩となりにき。己等がいとけなきを見捨てて、天上へ歸り給ひにしかば、乳房のかよひ給はぬ所に、いときなき輩、花の露を供養(六)とうけ、紅葉の露を乳房(七)となめつゝあり經るに、(八)親

〔考異〕

(一)四つといふ山に—奥へ

(二)地は瑠璃なり—地は皆瑠璃なり

(三)鳳凰—ナシ

(四)山の主—その山の主

(五)其の乳房の戀しさ—母の乳房の戀しき

(六)供養と—供養に

(七)乳房と—ナシ

(八)親天上—親の天上

〔語釋〕
（一）滿山
（六）天人が仰せられしによりて也
（一二）打連れて

〔考異〕
（二）象いで來て―象犀出來て
（三）七人の人―七つの人
（四）宣ひしが如くに―いひしが如くに
（五）參り來つることは―參りつる事は
（七）其の時に―この時に
（八）日本の人なれど花園よりと―日本のみかど花園よりと
（九）同じ木―同じき木
（一〇）琴どもを皆同じ如く―琴ども皆同じごと
（一一）試みて―ナシ

ひと山（一）騷ぐ所有り。象いで來て（二）其の山を越しつ。其れより西へ行けば、七つの山に七人の人（三）有りて、宣ひしが如くに（四）棲む所に至りぬ。一つと云ふ山を見れば、栴檀の木の陰に、林に花を折り敷きて、琴彈く人、年三十ばかりにて有り。俊蔭立ち居拜む。山の主大に驚きて、「是は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「淸原俊蔭。參り來つ（五）ることは、しかぐ宣はせ（六）しかばなむ」（七）其の時に山の主、「あはれ蓮花の花園、己が親の通ひ給ふ所よりか。日本の人（八）なれど、花園よりと聞けば、佛の通ひ給はんよりも尊く」とて、同じ木（九）の陰にすゑて、事の山を委しく問ひ給ふ。俊蔭初よりの事を委しく申す時に、つじ風例の琴ども（一〇）を皆同じ如くおきつ。其の時に山の主、俊蔭が琴の音を試みて（一一）、悲しび給ひて、俊蔭とつらね（一二）給ひて、二つといふ山に入り給ふ時に、其の山の主珍しがり給ふ。まらうとの聞え給ふ、「あやしう、蓮花の花園よりといふ人の有りつれば、母の恩の悲しく、乳房の戀しさになむ、率て參りつる」と宣へば、主哀がりて、三人連れて、三つといふ山に入り給ふ。其處に

〔語釋〕
（二）家を興すべき人、俊蔭をいふ
（五）習ひ得て

〔考異〕
（一）なりけり—なめり
（三）我その昔—我は昔
（四）こゝよりは西—こゝより西
（六）西へ猶行けば—西に行けば

ふ所ある人なれば住み給ふなりけり。天の掟ありて、天の下に琴ひきて族立つべき人になむありける。我その昔、些なる犯ありて、こゝよりは西、佛の御國よりは東なる所に降りて、七年ありて、そこに我子七人とまりにき。其の人は、極樂淨土の樂に琴を彈き合せて遊ぶ人なり。そこに渡りて、其の人の手を彈き取りて、日本國へは歸り給へ。この三十の琴の中に、聲まさりたるをば我名づく。一つをばなん風とつく。一つをばはし風とつく。この二つの琴をば、かの山の人の前にてばかり調べて、また人に聞かすな」と宣ふ。天人「此の二つの琴の音せん所には、娑婆世界なりとも、必ず訪らはむ」と宣ふ。

俊蔭、天人の宣ふに從ひて、花園より西をさして行けば、大なる川有り。其の河より孔雀出來て、其の川を渡しつ。琴をば例の旋風おくる。其れより西へ行けば、谷有り。其の谷より龍出來て越しつ。琴は旋風おくりつ。其れより西へ猶行けば、嶮しき山七つあり。其の山より仙人出でて越しつ。其れより西へ行けば、虎狼

⦿俊蔭天女の敎に隨ひて高西に行く。仙人に琴を習ふ。佛俊蔭等に過去未來の因果を示す。俊蔭波斯國に還る

〔語釋〕
（七）此句句を隔てて「便なきすまひはする」へかかる。

〔考異〕
（一）音を―聲の
（二）當れる―當る
（三）試みる―試む
（四）春の日の長閑―春の日のいと長閑―春の日長閑
（五）霞緑に―霞みわたり
（六）面白く―面白し
（八）阿修羅の―阿修羅が
（九）木得たまひし―木を得たまへる
（一〇）賜はりし―賜はれる
（一一）天人―天女

七山一つにゆすりあふ。

俊蔭清く涼しき林に一人詠めて、琴の音を有るかぎりかき立てて遊ぶに、三年といふ年の春、此の山より西に當れる（二）花園（一）に移りて、琴ども並べ置きて、大なる花の木の陰に宿りて、我國のこと、父母のこと思ひやりつゝ、聲まさりたる二つの琴を試みる（三）。春の日の長閑なる（四）に、山を見れば霞緑（五）に、林を見れば木の芽けぶりて、花園の花さかりに面白く（六）、照る日の午の時ばかりに、琴の音をかきたて、聲ふりたてて遊ぶ時に、大空に音聲樂して、紫の雲に乘れる天人、七人連れて降り給ふ。俊蔭ふし拜みて猶遊ぶ。天人花の上に下り居て宣ふ、「哀（七）何ぞの人か、春は花を見、秋は紅葉を見るとて、我等が通ふ所なれば、蝶鳥だに通はぬに、便なきすまひはする。若し、これより東に阿修羅（八）の預りし木得たまひし人か（九）」と宣ふ。俊蔭、「其の木賜はりし（一〇）衆生なり。かく佛の通ひ給ふ所とも知らで、しめやかなる所となむ思ひて、年ごろ籠り侍る」と答ふ。天人（一一）の曰く、「さらば、我等が思

〔語釋〕
(六)前に述べたる天女の命令に思合せて悟りたる也
(九)恒河沙は極めて大なる數をあらはす詞
(一四)中央の處を二分して作れる琴をひく時は

〔考異〕
(一)食まむ—かまむ
(二)書けること—書ける詞に
(三)施せ—施す
(四)書けり—ありけり
(五)をがむ—をがみ。
(七)子にこそ—子にてこそ
(八)上中二つの段は—上中の段は
(一〇)降りまし〳〵て—降りまして
(一一)降りまし〳〵て—下りまして
(一二)織女に—ナシ
(一三)出來て—吹き出でて

と言ひて唯今食(一)まむとする時に、大空かい暗がりて、車の輪の如くなる雨ふり、雷鳴り閃きて、龍に乘れる童、黄金の札を阿修羅に取らせて昇りぬ。札を見れば書(二)けること、「三分の木の下の段は、日本の衆生俊蔭に施せ(三)」と書けり(四)。阿修羅大に驚きて、俊蔭を七度伏し拜む(五)。阿修羅「あな尊(六)。天女の行末の子にこそ(七)おはしけれ」と尊びて曰く、阿修羅「此の木の上中二つの段は(八)、大福德の木なり。一寸をもちて空しき土を叩くに、一萬恒河沙(九)の寶湧き出づべき木なり。下の段は、聲をもちてながき寶となるべき」といひて、阿修羅木を取り出でて割り木づくる響に、天稚御子降りましまして(一〇)、琴三十造りて昇り給ひぬ。かくて卽ち、音聲樂して、天女降りまし〳〵て(一一)、漆塗り、織女(一二)に緒捻りすげさせて登りぬ。

かくて三十の琴を造りて、俊蔭、此の林より西にあたれる栴檀の林にうつろひて、此の琴の音を試みむ、とて出で立つ程に、旋風出來て(一三)三十の琴を送る。其處にて音を試みるに、二十八は同じ聲なり。半を二に造れる(一四)は、山くづれ地割れ裂けて、

〔語釋〕
(三)勞せるの義なるべし
(七)欲界、色界、無色界の三界の中、欲界の第二天
(八)前世の父母
(一五)現在の阿修羅道の身を解脱してよき道に生れんと
(一六)我さへ此の木の一分を己の物とする事能はず

〔考異〕
(一)然あれば―然れば
(二)子―人
(四)此の木一寸を―此の木一寸をも
(五)下りまして―ナシ
(六)段は―段をば
(九)段は―段をば
(一〇)山守に―山守と
(一一)花の園―花園
(一二)まし〳〵て―まして
(一三)罪だにあり―罪だにもあり
(一四)惡しき樣―惡しき身
(一七)汝が一分あたらむ―汝に一分與へむ

界に漂ひて、年久しくなりぬ。(一)然あれば不孝の(二)子なり。此の罪を免れむ爲に、倒さるゝ木の片端を賜はりて、年頃(三)らうせる父母に、琴の聲を聞かせて、其の報となさむ」といふ時に、阿修羅いや益〳〵に怒りて曰く、阿修羅「汝が累代の命を止めんとても、(四)此の木一寸を得べからず。其の故は、世の父母、佛になり給ひし日、天稚御子(五)下りまして三年掘れる谷に、天女くだりまして、音聲樂をして植ゑし木なり。さてすなはち天女宣はく、此の木は、阿修羅の萬劫の罪半すぎむ世に、山より西にさしたる枝枯むものぞ、其の時に倒して、三分にわかちて、上の(六)段は三寶より始め奉りて、(七)忉利天までに及ぼさむ、中の段は(八)先の親に報い、下の(九)段は行末の子どもに報いむ、と宣ひし木なり。阿修羅を(一〇)山守になされて、春は(一一)花の園、秋は紅葉の林に、天女下り(一二)まし〳〵て、遊び給ふ所なり。たはやすく來れる(一三)罪だにあり。況んや許多の年月、撫でおほし立てて、萬劫の罪滅ぼさむ、(一四)惡しき樣(一五)免れむ、とてまもり木造れるを、(一六)己が一分の德なし。何によりてか、(一七)汝が一分あたらむ」―

き中を分け出づる時は、ほむら(一)は炎熱く、劍(二)脛を貫き、惡をふくめる毒蛇に向ひて、もとの國より此の國に至り(三)、棲みし林より此の山を尋ね(四)、父母が手を別れし(五)日より今日までのことを答ふ。阿修羅、「我等昔の犯(六)の深きによりて、惡しき身を受けたり。然あれば、忍辱の心を思ふ輩にあらず。然はあれど(七)、日本の國に忍辱の父母ありと(八)申すによりて(九)、四十人の子どもの悲しく、千人の眷屬の悲しきによりて、汝が命を(一〇)免しをはんぬ。汝速に罷り歸りて、阿修羅の爲に、大般若(一一)を書きて供養せよ。汝日本の父母に向ふべき便を與へむ」といふ時に、俊蔭伏し拜みて曰く、「日本より山を尋ぬる大なる(一二)心ばへは、父母が愛子として、一生に(一三)一人子なり。親のかへりみの厚く、慈悲の深かりしを捨てて、國王の仰の畏かりしによりて渡れり。其の父母紅の涙を流して宣はく、汝不孝の子ならば、親に長き嘆(一四)あらせよ、孝の子ならば、あさき(一五)思ひのあさきにあひ向へ(一六)、と宣ひき。さるを俊蔭、あたの風、大なる波に逢ひて、おほくの(一七)輩を滅ぼして、一人知らぬ世

〔語釋〕
(一)「ほむら」—ほこむら(脉)の誤歟
(一一)大般若波羅密多經
(一五)上の「あさき」は衍文にて、心配の深くならぬ前に顏を見せよの義なるべし

〔考異〕
(二)脛を—肌を
(三)至り—至りて
(四)尋ね—尋ねて
(五)別れし日より—別れしより
(六)昔の犯の深きによりて—昔犯しゝ罪により
(七)あれど—あれども
(八)父母ありと—父母のありと
(九)申すによりて—いへば
(一〇)命を—罪を
(一二)大なる—思ひの
(一三)一生に—一生
(一四)嘆—嘆を
(一六)あひ向へ—あひむかへ(む—むかへむ)
(一七)多くの—ナシ

木を、倒して割り木づくる者あり。頭の髪を見れば劍を立てたるが如し、面を見(一)ればほむら燃ゆるが如し、足手を見れば鋤鍬の如し、眼を見れば金椀の如くきらめきて、いみじき(二)嫗、翁、子ども、孫など率て、頭を集へて木を切りこなす。俊蔭さだめて知りつ、我身は此山に亡しつ、と思ふものから、いかしき(三)(四)心をなして、阿修羅(五)の中に交りぬ。阿修羅大きに驚きて曰く、「汝は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「日本國王の使、清原俊蔭。此(六)の木切る音を尋ぬること三年になりぬ。今日をもてなん此の山を尋ね得たる」といふ。阿修羅怒れる容貌をいたして、阿修羅「汝何によりてか、阿修羅の萬劫(七)の罪の半(八)過るまで、虎狼蟲けらと雖も、人のけぢかきをあたりに寄せず、山のほとりに翔り來る獸は、阿修羅の食とせよ(九)と宛てられたり。如(一〇)何に思ひてか、人の身を受けて、汝が此處に來れる。速かに其の山を申せ」と眼を車の輪の如く(一一)見くる(一二)べかして、牙を(一三)劍の如く喰ひ出して怒る。俊蔭涙を流して答ふ、あなかしこ、此の山を尋ぬること、烈しき巖碊出るまで、獸のはげし

〔語釋〕

(三)勇猛なる

(五)佛教の六道の中、三善道の最下級、猜忌の心深く鬪戰を好むといふ

(七)萬劫を經て始めて滅すべき罪。劫は非常に永き時間の稱

(一二)くる〳〵と動かして

〔考異〕

(一)面を見ればほむら燃ゆるが如し。ナシ。—面を見ればほむらたけるが如し

(二)いみじき嫗翁子ども—いみじき女翁をさなき子ども—いみじき女をさなき子ども

(四)いかしき—はしたなき

(六)此の木切る音を—此の音を

(八)罪の半—罪半

(九)食とせよ—食にせよ

(一〇)如何に思ひてか—いかでか

(一一)輪の如く—輪のごと

(一三)牙を—齒を

㊂俊蔭伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。栴檀林の中に琴を彈く

［語釋］
(五)琴一つ造る―だけの木を獲ん

［考異］
(一)俊蔭―その時俊蔭
(二)思ふ樣―思ふはに
(三)こゝら―そこら
(四)尋ねて―尋ねゆきて
(六)出し―出して
(七)年もくれぬ―年なはくれぬ
(八)いさをしき―いさましき
(九)空につき―雲につきて。又雲非につき

花の露、紅葉の雫をなめてあり經るに、翌る年の春より聞けば、此林より西に、木を倒す斧の聲、遙に聞ゆ。其の時に俊蔭思ふ、程は遙なるを、響は高し。音高かるべき木かなと思ひて、琴を彈き、文を誦してなほ聞くに、三年此の木の聲絶えず。年月の往くまゝに、己がひく琴の聲に響かよへり。俊蔭(一)思ふ樣(二)、こゝら(三)四つの隅、四つの面を見めぐらすに、此處より離れて山見えず、天地一に見ゆるまで、又世界なきに、琴の音にかよへる響のするは如何なるぞ、此の木のあらむ所尋ねて(四)、いかで(五)琴ひとつ造るばかり得むと思ひて、俊蔭三人の人に暇を乞ひて、斧の聲の聞ゆる方に、疾き足を出し(六)、こは力を勵みて、海河峯谷を越えて、其の年暮れぬ。又明くる年も暮れぬ(七)。

三年といふ年の春、大きなる峯に登りて、見めぐらせば、頂天に付きて嶮しき山、遙に見ゆ。俊蔭いさをしき(八)心、早き足を出して行くに、辛くして其の山に至りて見渡せば、千丈の谷の底に根をさして、末は空につき(九)、枝は隣の國にさせる桐の

くの人沈みぬる中に、俊蔭が船は、波斯國に放たれぬ。其の國の渚に打寄せられて、便なく悲しさに、涙を流して、俊蔭「七歳より俊蔭が仕うまつる本尊現れ給へ」と觀音の本誓を念じ奉るに、(一)鳥獸だに見えぬ(二)渚に、鞍置きたる白き馬出來て、躍り歩き斷く(三)。俊蔭七度ふし拜むに、馬走り寄ると思ふ程に、ふと頸に(四)乘せて跳びに跳びて、淸く涼しき林の(五)、栴檀の陰に、虎の皮を敷きて、三人の人並び居て琴を彈き遊ぶ所に下し置きて、馬は消え失せぬ。

〔畫詞〕こゝは、三人の人並び居て、琴ひき遊ぶ(六)。

俊蔭林の下に立てり。三人の人問ひて曰く、「彼は何ぞの人ぞ」俊蔭答ふ、「日本國王の(七)使 淸原俊蔭なり。有りしやうは斯う〳〵」といふ時に、三人の人、「哀旅人にこそあなれ。暫時宿さむかし」といひて、並べる木の陰に、同じき皮を(八)敷きてすゑつ。俊蔭もとの國なりし時も、心に入れし物は琴なりしを、この三人の人唯琴をのみ彈く、されば、添ひ居て習ふに、一つの手殘さず習ひとりつ。

〔語譯〕

(一)法華經普門品に「若有百千萬億衆生、爲求金銀瑠璃硨磲瑪瑙珊瑚琥珀眞珠等寶、入於大海、假使黑風吹其船舫、飄墮羅刹鬼國、其中若有乃至一人稱觀世音菩薩名者、是諸人等、皆得解脫羅刹之難」

〔考異〕

(二)だに見えぬ―だにも見えぬ

(三)歩き斷く―歩きて斷く

(四)ふと頸に―ふと鞍に

(五)林の―ナシ

(六)遊ぶ―遊び居る

(七)日本國王の―日本の王の

(八)同じき皮を―同じ皮を

とになく作り出して奉れる時に、一天下の人、皆言ひあざみて、其の度、俊蔭一人進士になりぬ。(一)又の年同じ博士を召して、(二)秀才の題を賜ふ。(三)校書殿にて日たかく(四)題を賜ひて、かたく問はる。俊蔭心に随ひて(五)答ふるに、えせぬ事なく、同じく作れる、對策(六)の思ふまゝに答へたる、對策の文ども、面白く興有り。帝驚かせ給ひて、即ち式部丞になされぬ、其の程俊蔭がかたちの清らに才の賢きこと、更に譬ふべき方なし。父母眼(七)だに二つ有りと思ふ程に、俊蔭十六歳になる年、唐土(八)船(九)いだし立てらる。此度は殊に才賢き人をえらびて、大使副使と召すに、俊蔭召されぬ。父母悲しむこと、更に譬ふべき方なし。一生に一人有る子なり、かたち身の才人に勝れたり、朝に見て夕(一〇)の遅なはる程だに、紅の涙をおとすに、遙かなる程に、相見んことの難きみちに出で立つ、(一一)父母俊蔭悲しび思ひやるべし。三人の人、額を集へて血の涙(一二)を落して、出立ちて、遂に船に乗りぬ。唐土にいたらむとする程に、(一三)あたの風吹きて、三つある船、二つは損はれぬ。多

〔語釋〕
(三)秀才は進士の下なり。誤あらん歟。
(六)答案
(七)一人子の大切さは眼にまさるをいふ
(八)遣唐使の船
(一三)逆風

〔考異〕
(一)なりぬ—なれり
(二)同じ博士—同じく博士
(四)日たかく—日たかき。「同かたき」カ
(五)心に随ひて—問ふに随ひて
(九)唐土船—唐土に船
(一〇)夕の—夕に
(一一)出で立つ—出で立つる
(一二)血の涙—「血の」ナシ

● 俊蔭遣唐使に立つ。波斯國に漂流す。琴を習ふ

蔭女の榮華。㊅仲忠諸藝を習ふ。侍從に任ぜらる。㊆五節の試樂に仲忠御前にて琴を彈く。㊇兼正相撲の還饗を行ふ。源正頼、仲忠を強ひて琴を彈かしむ。仲忠仲澄と兄弟の約を結ぶ。㊈正頼、其妻大宮に還饗の有樣を語る。

㊀清原俊蔭の生ひ立ち。其の頴悟

「語釋」
(二)母の皇女なるをいふ
(三)年不相應に
(四)來聘の高麗の使節に應接する
(六)かうぶり―元服
(八)試驗場に出でたる
(九)清原王の子の名
(一〇)りはう―吏部歟

「考異」
(一)清原の王―清原の大納言
(五)七歳なる子―七歳になる子
(七)中臣―なりとみ―みはら

むかし、式部大輔左大辨かけて、清原の王(一)ありけり、御子腹(二)に男子一人もたり。其の子、心の敏きこと限りなし。父母、「いと怪しき子なり。生ひ出でん樣を見む」とて、文も讀ませず、言ひ敎ふることもなくておほし立つるに、年にもあはず、(三)たけ高く心賢し。七歳になる年、父が高麗人(四)に逢ふに、此の七歳なる子、(五)父をもどきて、高麗人と文を作り交しければ、おほやけ聞召して、怪しう珍らしきことなり、いかで試む、と思す程に、十二歳にてかうぶり(六)しつ。帝、「有難き才なり。年の若き程に試む」と思して、唐土に三度渡れる博士、中臣(七)門人と云ふを召して、難き題を出させて、試させ給ふ。(八)度々登りたる學生の男ども、才有るをのことども、手まどひをして一行の文も奉らぬに、俊蔭(九)は、りほう(一〇)の文を、い

宇津保物語

俊蔭

梗概

(一)清原俊蔭の生ひ立ち。其の穎悟。(二)俊蔭遣唐使に立つ。彼斯國に漂流す。琴を習ふ。(三)俊蔭伐木の響を尋ねて西に行く。阿修羅に遇ひて琴を得。栴檀林の中に琴を彈く。(四)俊蔭天女の敎に隨ひて尙西に行く。仙人に琴を習ふ。佛、俊蔭等に過去未來の因果を示す。俊蔭彼斯國に還る。(五)俊蔭歸朝。源氏の女を娶る。式部大輔兼左大辨に任ぜらる。一女を生む。(六)俊蔭琴を所々に奉る。琴の師仕るべき勅を辭す。(七)俊蔭三條京極に隱居す。女に琴を習はす。治部卿兼參議に任ぜらる。(八)俊蔭夫婦逝去。遺言。家道の零落。孤兒の寂しき生活。(九)藤原兼正、父に隨ひて賀茂に詣づ。歸途密に俊蔭女の許に宿す。(十)兼正の行方不明。藤原一家の騷動。兼正父母の監視に苦む。(十一)俊蔭女の幽愁。兼正の悲嘆。(十二)俊蔭女懷胎。忠實なる老婢。俊蔭女、仲忠を生む。貧居、(十三)老婢の死去。幼兒仲忠の孝養。天助。(十四)仲忠、母を導きて北山の空洞に移り住む。母に琴を習ふ。幼くして琴の妙を極む。(十五)奇禍、俊蔭女なん風の琴を彈く。(十六)兼正、琴聲を尋ねて北山に入る。兼正仲忠父子の應答。(十七)俊兼正再び北山に入る。俊蔭女を伴ひ歸りて三條堀川の邸に置く。

宇津保物語上目錄

從する所を知らず。よりて飜つて本書に就きて之を考ふるの寧ろ捷徑なるを思ひ、本文を玩索して事實の前後敍述の筆癖等を精勘し、全く自家の見地によりて順序を一定し、又飜つて之を諸家の說に對照するに、細井貞雄氏の玉琴の順序最も予が順序に近く、其の相異なるは、唯彼は「吹上」の下卷を「祭の使」の前に置けるに、我は「祭の使」を「吹上上」と「吹上下」との間に置けるの一事のみなることを見出せり。

人名はもと殆どすべて假名がきなるを、今讀過の便をはかりて假に漢字を宛て、その文字は大概「宇津保物語新治」に用ひたるを其儘に襲用したり。

本書の校正につきては塚本哲三星野亮太郎二氏を煩はしたること多し。爰に記して謝意を表す

大正四年五月病中に記す　　　　校訂者　武　笠　三

宇津保物語玉琴（卷三以下）細井貞雄

契沖校正本、山岡俊明校正本、田中道麻呂校正本、菅原久樹校正本、苅谷望之校正本及び古寫本二本に據りて刊本を考へ、異同を抄出したるもの。

宇津保物語新治（卷五以下）巨勢利和

塙檢校本、久永氏本、『土佐家本及び一本に據りて刊本を考へ、異同を抄出したるもの。

久米幹文本

田中道麻呂本、羽倉在滿本、塙檢校本、馬陽本、古寫本及び他の二本に據りて刊本に異同を註したるもの。

東京帝國圖書館藏古寫本二本

之を數ふるに、若し一本又は古寫本などと記せるものにして相重複することなくば、本書の本文は二十一種の本を以て對校せるものと謂ふを得べし。

順序につきては、はじめ古來の諸家の說に求めて之を決せんとせしに、諸說紛然として適

緒言

宇津保物語上册の校訂成り、將に緒言を草せんとするに方り、校訂者會、病を獲て筆を援ること能はず、荏苒日を送りて發刊の期正に迫る。乃ち止むことを得ずして、單に校訂に關する用意の大要を記して讀者の參考に供し、其の他の言說は姑く之を他日に讓らんとす。

宇津保物語は古來難解の書として傳へられ、其の名徒らに高くして之を讀む者甚だ稀なり。これ其の文の錯簡と卷の順序の錯誤と共に甚だしきに因るものなり。本書は文化二年補刻の刊本を以て底本とし、左記の諸本を參照して、義の通じ易きもの、又は詞づかひの最も穩かなるものを採り、上欄に異同を註せり。但し上欄の甚だ窮屈なるを以て、一々には異同を註せず。これ一には重きを通俗に置く本文庫の主意に拘せられたる也。

本書の參照に用ひたる本左の如し。

村田春海校正本

山岡俊明校正本及び小山田與淸校正本に據りて刊本を正したるもの。

宇津保物語

上